
ほのぼの戦国絵巻

佐倉いろは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほのぼの戦国絵巻

【Nコード】

N5459M

【作者名】

佐倉いろは

【あらすじ】

戦国時代なんてお構いなし！

ほのぼのとした日常を描くハートフルストーリー。

1（前書き）

戦国時代はほとんど全く関係ありません
ご了承のほど、よろしくお願いいたします

ブログで公開しているものを、時間差をつけて投稿しているかと思えます

具体的には、一更新ごとにひとつずつ…になるかと
では、ごゆるりと…

「回れ！困むんだ！」

もう逃げ場はないぞ…。

「くっ」

「さあ、観念しろ」

「はあ…仕方ない…か」

こそ泥は、参ったというかんじで座り込む。

「捕らえて牢に入れておけ。盗品は元あった場所に直しとくんだ」
「はっ！」

まあ、盗品も戻ったし、すぐに開放されるだろう。
…普通ならな。

ドシンドシんと、本当に地震が起こるかと思うくらい、足を鳴らして歩き回る陛下。

「いえ、しかし、盗品も元に戻ったのですから…」
「ふん。こそ泥なんぞが入ったとなれば、朕の名に傷が付くわ！噂が広まる前に処分しておけ！」

こそ泥程度なら、嚴重注意の後、釈放される…というのが普通。
だが、残念なことに、こんなのがこの国の王だ。
だから、事前にこういったことを防ぐために、私たちは気を張って

警備に当たっている。

…しかし、昨日は新米が当直をサボったらしい。
さらに不幸なことに、その隙を突いて、あいつが侵入してしまった。
サボったことでどうなったのか、その新米に話した後、そいつは警備担当から外した。

その新米だけの責任ではないが、いたしかたあるまい。
青ざめた顔してたけど、大丈夫かな…。

「あ！紅葉隊長！お疲れ様です！」

「ああ。ご苦労」

「…で、やっぱり…これ、ですか？」

親指を立てて、首をかき斬る仕草をする。

「ああ。陛下はそれをお望みだ」

「…なんであんなやつの下で、せつせと働かなければならないんですか？」

「今後こういうことが起こらないようにだ。それと…今聞いたことは不問にする」

「はっ、すみません…」

「ふふ、だが、それがみんなの本音だろう」

衛士の肩を軽く叩いて、その場を後にする。

…みんなの本音。

それが真実なんだろう。

なぜ、あんな王の下で働かなければならないのか。
なぜ、あんなのが王なのだろうか。

「捕らえたものはどうしてる？」

「はっ！ぐっすり眠っております！」

「そうか…」

地下牢の前まで来た。

何年も何年も、使われない地下牢の掃除だけが仕事だった牢番だが、今日はえらく気を張っているようだ。

着任してから初めての囚人だからな…。

「ちょっと様子が見たい。中に入れてくれないか？」

「はっ、いえ、しかし…」

「ちょっとだけだ。な、頼むよ」

「はっ！では、少しだけ…」

慣れていない鍵束をガチャガチャいわせて、牢の鍵を探す。

「えっと…あ、これです！どうぞ」

「ああ、ありがとう」

「いえっ！」

貰った鍵を持って、地下牢の中へと進む。

狭い石の部屋に、食べ物差し入れたり様子を見たりするための窓と、頑丈そうな、ピカピカに磨かれた金属製の扉がひとつだけあるという、なんとも簡素で堅固な牢が、両脇にふたつ、計よつつ並んでいる。

その右側奥に、例のこそ泥が入ってる。

窓から覗いてみると、ホントにくっすりと眠ってやがる。

鍵を開けて中に入り、ちょっと小突いてみる。

「おい、起きろ」

「……？」

目を擦り、大きく伸びをして、焦点のあつてない目でこちらを見つめる。

「あ、分かった。あなたも捕まっただんしょ」

「違う。オレは、ここの衛士長、紅葉だ」

「ふうん…」

「お前の名前を聞いてなかったな」

「ボク？ボクは桜」

「桜。今日、お前の死刑執行が決まった」

「…そっか。ボク、殺されちゃうんだね」

「ああ。残念ながらも。これは独り言なんだが…オレは今から、鍵を掛け忘れるだろう。そして、牢番を買って出て、居眠りをしてしまっ」

「…それは、ボクに逃げろって言ってるの？」

「そんなことは一言も言っていない。」

「これからのオレの行動をただツラツラと述べただけだ」

「……………」

「じゃあな。オレはもう行く」

扉を閉めるとき、何か聞こえたような気がしたが、気のせいだろう。囚人に礼を言われるようなことをした覚えはないしな。

「そういうことだ。牢番」

「はっ、しかし…」

「今からオレはここで牢番をする。…お前は今日は非番だ。家族に会いに行つてやれ」

「あ、ありがとうございます！」

「いや、いいんだ…」

牢番は、いそいそと支度をして、帰っていった。

仕事もないのに、ここ何週間も詰め続けだったからな…。
幸せそうな笑顔を見ると、こちらも救われた気分になれた。

「ああ…眠い…ちょっと居眠りでもするかな…」

牢に向けて、さりげなく呟く。

…そういえば、私もここしばらく寝てなかったな。
最期くらい、ゆっくり眠ってもいいだろ…。
おやすみ…。

ドシンドシんと、歩くたびに地割れが起きそうなくらい、大きな足音を立てる陛下。

「今、なんと申した！」

「私めの不手際により、例のこそ泥を取り逃がしてしまいました」

「ち、朕の名に傷を付けおって！お、お前なぞ死刑だ！即刻、死刑だ！」

目が覚めたとき、桜はいなかった。

上手く逃げおおせたらしい。

次の日の謁見のときには、すでに陛下の耳にその噂は届いていた。
そして、死刑死刑と、狂ったように叫び続けている。

「ふふふ…そうだ…お前は火炙りだ…。ふふふふ…じっくり、その罪を後悔して死んでいくがいい…」

かくして、オレの死刑執行が決定された。

晴天の中、礫にされた私は、逆に清々しい気分だった。
これで、終わる。
辛い日々が。

「お前らが泣いてどうするんだ」

「でも…紅葉隊長…！」

「大丈夫だ。お前らだけでもやっていける」

「嫌です…紅葉隊長がいないと…！」

「あいつに聞かれたら、お前らも死刑になるぞ」

「それでも…それでも…！」

ふふ、バカなやつらだな…。

もう私が面倒を見てやれることはないほど、立派に成長して…。
桜、今何してるんだろうな…。

こそ泥なんてバカな真似、やめてくれるだろうか…。

新米の衛士たち…。

あいつらの面倒、最後まで見たかったな…。

…やっと終わるのに。

…辛い日々ばかりだったのに。

なんで…今になって…死ぬのが惜しいんだろう…。

もっと…生きたかった…。

もっと…先まで見たかった…！

「やれ」

あいつの、嘲笑うかのような声が響いた。
そして、放たれる火。

「うつ…うつ…すみません…すみません…」

謝り続ける執行人。

もういいんだ。

私まで…哀しくなるだろ…。

「五元素がひとつ、水よ！人々の哀しみを汲み、その涙を以て火を剋せ！」

掛け声とともに、どこからともなく水が流れてきて、火を消してしまつ。

「ふふ、いろはねえ。助けに来たよ」

「桜！？」

はやて

「隼！」

「おうよ」

隼と呼ばれた少年が、次々と縄を切つてゆく。

「風華に続けー！」

「な、なにごとだ！衛士！出会え出会え！」

また別の掛け声。

そして、それに答えるように、あらゆる方向から、広場へと人々がなだれ込む。

…農民の蜂起だった。

「お前が紅葉か？」

「ああ」

さっきの掛け声の主が、近付いてきた。

「桜が世話になった。ありがとう」

「いや…。でも、これは…」

「ああ、蜂起だな。悪政に対しての。紅葉は運がよかった。蜂起の”ついで”に、死刑を逃れることが出来た」

「ふふ、そうか。…ありがとう」

「”ついで”に礼を言われる筋合いはないな」

「そうか。…衛士たちは、オレの大切な家族だ。あまり傷つけないでやってくれよ」

「その心配は無用だ。見てみる。誰も、王の命に従うものはない」

武器を捨て、無抵抗となった衛士たちは、ことの成り行きを見守っていた。

…たしかに、王の命に従うものはいなかったみたいだ。

「こ、こらっ！貴様ら！ち、朕を誰と心得るか！貴様ら、ぜ、全員死刑だ！」

王の言葉は、空しく晴天に吸い込まれていく。

「た、助けて…！ち、朕はまだ死にたくない！」

命からがらといったかんじで、こちらまで走ってくる。

「え、衛士長！このゴミどもを処分するのだ！は、早く！」

「え？オレに言ってるのか？オレは衛士長じゃないし、それに、あいつはもう死んだ」

「た、頼む！助けてくれ！」

「彼女が、助けてやってくれと頼んだとき、お前は聞く耳すら持たなかった。何かにつけては、死刑死刑と、狂ったように叫んでいた。そんなやつを、助けるような人間がいると思うか？」

「頼む…！助けて…！」

私は、手近にあった刀を取り、大きく振りかぶり、一気に振り下ろした。

「…いいのか？これで」

「ああ。もういい」

すんでのところで止められた刃だったが、王…だったものは泡を吹いて気絶していた。

「国境より向こうに捨てて来い！」

「え…いや、しかし…」

「こいつは殺された。この、紅葉の手によって」

「はあ…分かりました…」

渋々といったかんじで、丸々と太った巨体を運んでいく農民たち。
…目が覚めたとしても、こいつには何をやる力も残ってないだろう。
権力を振りかざして生きてきたこいつには何も…。

「さて…。蜂起は無事成功した！悪政の世は終わる！」

「…おおー…！…！…！」

「明日からまた大変になる！今日はゆっくり…宴を開こうじゃないか！」

「…おおー…！…！…！」

でも、宴はすでに始まっていた。

城の貯蔵庫から、酒を出してきて、呑んでいるものもある。

「じゃあな。また明日、会おう」

「ああ。…あ、お前、名前は？」

「利家だ。…犬千代とでも呼んでくれ」

そして、あいつは去っていった。

犬千代か…。

ふふ、楽しくなってきたようだ！

1（後書き）

導入の部分です。

お楽しみいただけたなら、幸いです。

あと…自分こと、佐倉いろはと、作中の紅葉^{いろは}は別人ですよ。

「隊長！ここに来ませんか？」

「いや、遠慮しとくよ」

「そうですか」

宴が始まって数分もしないうちに、農民だとか衛士だとかの境界はなくなったようだ。

でも私は、農村秘伝の酒を少々貰ってきて木陰に座っていただけだった。

何か、実感が湧かなかったから。

これが夢なんじゃないかって、まだ考えていた。

「お嬢さん。お一人ですか？」

「ああ。今のところはな」

さつき聞いた声。

蜂起の首謀者、利家の。

「宴に行つて来いよ。今日はもうずっと宴だろうし、参加しとかないと損だろ？」

「そういう犬千代こそ、なんだってこんなところにいるんだ。また明日…じゃなかったのか？」

また明日…のところは、利家に似せてみた。
すると、利家はクスリと笑って。

…その笑顔に、少しドキリとしてしまった。

「そのつもりだったんだけど、宴が楽しそうだったからな。ちょっ

と出てきたんだ」

「出、て、き、た？」

「あ……」

声からすると、さつき水を操って火を消した”風華”らしい。
相当怒ってるみたいだけど……。

「兄ちゃん？後始末、まだ残ってるよね？なんで逃げたの？」

「あ……いや……宴に参加しようと思ってだな……」

「もう！そうならそうって言えばいいのに！」

「え……？」

「何してるの？二人とも！早く行こ！」

「ああ」

風華に怒られると思ってたらしい利家は、拍子抜けしたらしい。
しばらく呆然としていて、フツと気付いたように、私たちの後を追ってきた。

……たしかに、あんな楽しそうな宴は、参加しないと損しそうだな。

日も傾いてきたころ、広場の真ん中に、いつの間にか大きな焚火が燃え盛っていた。

「じゃあ、いきますか！」

「おーい！衛士の誰か！風華の相手をしてやれ！」

「なんだ？」

「呑み比べだよ。村じゃ風華に敵うやつは、もういないんだよ……」

呑み比べだな。

「オレが行こう」

「よっ！隊長！大蛇つぶりを見せ付けてやってください！」

「ああ、任せとけ！」

「あんなこと言ってるぞ！風華！あの女隊長なんか潰してやれ！」

「もっちろん！」

かくして、私と風華の呑み比べ大会が開催された。

空になった容器を逆さにしてみせる。

もう何杯呑んだらうな。

「おゝい！もつと強い酒はないのかゝ！」

「ふふ…紅葉もやるね…」

「ふん。こんなのまだまだ序の口だ。どうだ？風華はもう限界か？」

「こんなの…まだまだ…」

「無理するなよ」

「無理なんか…してないもん…」

「おゝい！医務班！待機だ！」

「全員潰れて寝てますよ！」

「むう…仕方ないな…」

「医務班なんて…いらないよ…。紅葉の方こそ…限界なんじゃないの…？」

「オレ？オレは全然平気だけど」

「どうか…な…」

と言ったところで、風華は倒れてしまった。

「言わんこっちゃない！おい！医務班を叩き起こせ！」

「はいっ！」

「大丈夫か、風華！」

「うん…ちょっと…無理…」

「まったく…」

風華を担いで、医療室まで運んでいく。

利家はというと…こっちも酔い潰れていた。

「紅葉…ホント…強いんだね…」

「ん？オレ？自分ではそんな強いって印象はないんだけど、気が付いたらみんな寝てるから、いつも一人で呑んでたな」

「今…酔い…回ってるの…？」

「んゝ、酒を呑んでも、水を飲んだときと変わらん…」

「…ホント…鉄の肝臓だね…」

「なんだそれ」

「はあ…ヤマタノオロチもびっくりな酒豪っぷりだよ…」

「隊長！すみません！」

「解酒剤でも調合してやれ。あと、風華。酒は禁止だ。お前にはまだ早い」

「え…バレてた…？」

「当たり前だ」

「どういうことですか？」

「どうでもいいから、早く調合を」

「あ…はい…」

ゴリゴリと薬草を磨り潰す音だけが、しばらく続いた。

…医療室には、金にものをいわせて買い集めさせた薬品が、無駄に並べられている。

何に使うのか分からない、得体のしれないものも多数見受けられるが…。

「あれは…リグナの毒を中和するための…血清…」
「え？」

「紅葉…なんか…見てたから…。でも…管理の仕方になってない…。貴重な血清なのに…」

そう言つて、身体を起こして薬棚に向かおうとする。

「おい！安静にしてろ！」

「ダメだよ…これは…ちょっとした温度変化で…成分が変わるんだから…」

「オレがやるから、お前は寝てろ！」

「あう…ごめん…」

「調合出来ましたよ」

「ほら、それ飲んで」

「うう…嫌な匂い…」

「自業自得だ。そんなんで、今までどうやって村人を負かしてきたんだ…」

「先に中和剤を飲んで…。でも…紅葉は全然潰れなくて…」

「そんなことをしてたのか」

「だって…美味しそうだったもん…」

「もうやるなよ。あと四、五年つてところだろ。我慢しろ」

「うう…お酒…」

「バカ」

風華の頭を軽く叩く。

…まあ、分からんでもないけど…な。

「うえ…マズ…」

「良薬口に苦し。今までの罰だと思えばいい」

「罰…。あ…あの血清は…暗くて涼しい場所に置いといて…」

「はいはい」

床下の収納庫に入れておく。
ここならいいだろ。

「あ…あと…あそこの薬は…」

そのあとはずっと、風華の指示の通りに薬品を保管する作業に追われた…。

ん…？

朝か…。

いつの間に寝たんだろう…。

風華の指示がやっと終わって…。
それから覚えてない…。

「おはよ！姉ちゃん！」

「ああ…おはよう…。もういいのか？」

「うん。あの薬、ホント効くね！」

「あれは…オレが昔…」

しまった…。

「昔…何？」

「なんでもない…」

「えーっ！気になる！」

「オレは気にならない」

「そりゃ、姉ちゃんは自分で知ってることだもん！」

「もうこの話は終わり終わり」

「ううゝ、気になるゝ！」

風華くらいとき、私も同じように酒を呑んで倒れて、そのとき教わった薬だなんて言えない…。

2（後書き）

未成年の飲酒は禁止されています。
二十歳になってから呑んでください。

「うえ…気持ち悪い…」

「だらしないなあ。弱いなら吞まなきゃいいのに」

「弱いんじゃない…吞みすぎるんだ…」

「一緒でしょ？自分が吞める量くらい把握しといてよ！」

「もっと…静かに喋ってくれ…」

二日酔いで真つ青になつてゐる利家に、大声で迫る風華。

…まあ、たぶんわざとやってゐるんだろう。

「はい、これ。昨日サボつた分も溜まつてゐるんだから、さつさと片付けてね」

「ていうか…なんで兄ちゃんがやらないといけないんだ…？」

「一揆の首謀者なんだから、次代の王は兄ちゃんに決まつてゐるでしょ？」

「ええ…そんなあ…。それに…王政が前回の失敗だつたんだから…王はもういらないだろ…」

「そんなこと言い出すんじゃないかと思つて…。ほら、これ。議会設置の資料もあるんだから、目を通していてね」

「うう…分かつたから…ちよつと休ませてくれ…」

「何もやってないじゃない！休むのはやることやつてから！」

「うう…」

風華の方が、よっぽど人の上に立つのに相應しいと思つただけど…。

「姉ちゃん！ちよつと来て！」

「ああ」

フラフラの利家を残し、政務室を出る。

…政務室といっても、急あつらえだけども、前は政務室なんていらなかったからな…。

「あ！いろはねえ！」

「ん？桜か」

「ねえねえ、ボクの部屋に来てみない？」

「ダメ。姉ちゃんは忙しいの。それに、いつの間に桜の部屋なんて作ったの？」

「さつき！」

「さつき？」

「どこだ。後で行くから」

「この前のところ！じゃあね！待ってるから！」

と言って、桜は走り去っていった。

…この前のところって、もしかして地下牢かなんでまたそんなところを…。

「あ、そうそう。衛士さんだけど、それぞれの農村に配備出来ない？特に国境付近とか…」

「無理ではないが、各村に一人か二人になるだろうな」

「うーん…じゃあ、どうしよう…」

風華が心配してるのは、内乱に乗じて他の国が攻めてくることだろう。

情勢が不安定なときに攻め上がるのが一番楽で確実。だから、国境付近は非常に危険だ。

「…オレの選りすぐりの衛士を派遣する。罌や奇襲に長けたやつらをな」

「そつか。少ない人員で簡単に防衛出来る手段…。それに、やり方さえ教えてもらえば、衛士さんがいなくても、ある程度の抵抗も出来る…」

「ああ。基礎中の基礎だが、非常に有効な手段だ」

「うん、ありがと。じゃあ、そういう方向でいくね」

「今日中に行かせた方がいいだろうな…。あ、風華の用事ってなんだ？」

「え…あ…うん…。わ、私のはあとでいいよ！それ、先にやつちゃって」

「……？ああ、分かった」

よく分からないが、私用らしいな…。

何をしたかったんだろ…。

まあいい。

近くにいた衛士を呼び寄せる。

「おい、大吾郎」

「はっ！どうしました、隊長」

「農村…特に国境付近の農村に、警備・指導に行ってもらいたい」

「では、少人数対多人数を想定した…ということでもよろしいでしょうか」

「ああ。みんなに知らせてくれ。今すぐ、広間に集合だ」

「はっ！了解しました！」

あっという間に姿が見えなくなってしまった。

やっぱり、あいつを伝令班に入れて正解だったな。

「あ…じゃあ、私は医療室にいるから、終わったら来てね」
「分かった」

そして、風華は医療室、私は広間に向かった。

よし、これでいい。

「じゃあ、よろしく頼んだぞ」

「はっ！行ってまいります！」

「ああ。行ってらっしゃい」

行ってきます、行ってらっしゃい。

派遣の際は、必ずこのやり取りを交わす。

無事に帰ってこれるように。

また会えるように。

「泣くなよ」

「しかし…！」

「別れるときに泣いちゃいけない。泣いたら、もう会えなくなるから。泣くのは、再会するとき。そのときは、たくさん泣けばいい。また会えたねって」

「はっ…！」

「頑張ってこいよ」

「はっ！」

そして、旅立っていった。

小さくなってゆく衛士たちの後ろ姿が次第に滲んてくる。

頑張ってこいよ…！

桜が覗き込んでくる。

「どうした」

「ん？」

「ん？じゃ分からんだろ」

「いろはねえ、目、腫れてない？」

「…寝不足なんだろ」

「そうかな…？」

変なところで勘のいい桜。

頼むから、あまりジロジロ見ないでくれ…。

「姉ちゃん。これだけ…」

「え？ああ、好きなのを買えばいい」

「ありがと！」

風華の用事というのは買い物だった。

普段、こんな中心の方には来ないから、市場だとかが珍しいんだろ
う。

だいたいは日用品だとか、身の回りのものだったけど、薬なんかも
買い集めたりしてるみたいだ。

そして、私にねだるのは、お菓子類。

村の方では甘いものが手に入りにくいんだろう。

…最初、家の金では買えないと思ったのか、お菓子を恨めしそうな
目で見ていた。

それを見かねて、なんでも買ってやると言ったんだけど…。

風華はだいぶ遠慮しているらしい。

「でも、そんなんでもいいのか？もうちょっと…これとかどうだ」

「た、高いよ…」

「遠慮するな。どうせ、オレの金なんだ」

「ダメだって…ホントは私のお金で買わないといけないのに…」

「ボクは食べてみたいっ！」

「じゃあ、おやつさん！これ、三つ！」

「あいよ！それで…嬢ちゃん。これ、おまけだ」

「わあ！ありがとう！」

金平糖を両手いっぱい貰って喜ぶ桜。

「でも、おっちゃん。ボク、こっちの風華と同年なんだからね！」

「え…あ…そうなのか…。いや、ごめんね、嬢ちゃん。もっとちつちやいかと思ったよ」

「むう…。いいよ。おまけ、貰ったし」

そして、桜は上機嫌で菓子屋の親父と別れた。

…でも、身体だけでなく、言動も幼いんだから、間違われても仕方がないと思うんだけどな。

「ほら。これ、食べてみ」

「ありがとう！いろはねえ！」

「…ごめんね」

「感謝こそされど、謝られるようなことはしてない」

「うん…。ありがとう」

「どういたしまして」

「ん～！甘～い！」

「美味いだろ？」

「うん！」

「どうだ？風華は」

「うん！美味しい！」

「そうか。よかった」

買い物に来てから、遠慮がちで気を遣ってた風華だったが、ここで

やつと本当の笑顔を見ることが出来た。

「じゃあね、ボクは…」

「お前は少し遠慮を覚えた方がいいな」

「ええー！なんでも買ってくれて言うたじゃん！」

「だからって、なんでもかんでも欲しがるんじゃない」

「むう…だって…欲しいんだもん…」

「…仕方ないな。今日だけだぞ」

「うん！」

風華に止められながらも、いろんなものをしてたま買った桜。帰るときは持ってきた袋が破裂しそうなほどだった。そして、桜は満足そうにニコニコしていた。

…やっぱり、笑顔が一番、だな。

市場から帰ると、早速、派遣班が無事に到着したとの連絡が入った。他国から攻め入られるような雰囲気は今のところない、ということだった。

「連中も、向こうが気に入ったらしい」

「え？なんで分かるの？」

「この字。楽しさが滲み出てる」

「……？分かんないや」

まあ、そうだろうな。

「それよりさ、どう思う？」

「どう思うって……」

「可愛いでしょ？」

いつの間にか運び込まれた生活用品。

でも、全部手作り感あふれてて、どこか温かった。

地下牢と思えないくらいに綺麗に飾り付けられ……。

「しかし、なんで地下牢なんかを自分の部屋にしたんだ。もっといい部屋があるだろうに」

「ない」

「え？」

「ないよ」

「……なんで」

「なんでも！」

布団を頭から被り、そのままジツとして動かなくなった。
…窒息なんてしてないだろうな。

「…だって、大切な場所なんだもん」

「え？」

「いろはねえ と出会った。いろはねえ が助けてくれた。身体を張って。だから、大切な場所。ボクの大好きな場所」

「…そうか」

布団から出てきて、私を正面から見る。

「ここに住んでいい？」

「…風華次第だな」

「ええー！絶対ダメ！それはダメ！」

「桜の保護者は風華だ。オレじゃない」

「だって、絶対に、帰りなさい！って言うもん！」

「聞いてみたのか？」

「聞けるわけないよ！絶対無理だもん！」

「やりもしてないのに、絶対無理だと決め付けるのは早計すぎるだろ」

それより、同い年の風華が保護者ということには異論はないのだから。
うか。

「うう…いろはねえ の意地悪…」

「ほら、聞いてこい」

「嫌…」

「じゃあ、オレが聞いてきてやろうか？」

「……………」

不機嫌そうに尻尾を振るだけで、返事はなかった。

…まあ、勇気を搾り出す時間も必要だろう。

何か呻き声を上げている桜を置いて、地下牢を出た。

「ここはもう地下牢じゃない。女の子の部屋なんだ。あんまり立ち聞きしてやるなよ」

「はっ！あ、いえ…立ち聞きしてたわけじゃ…」

「ふふ。まあ、牢番の任は今日で終わりだ。好きな部署に移るといい」

「では、調理班がいいのですが…」

「お前は料理が上手いからな。適任だろう」

「はっ！ありがとうございます！」

早速厨房へと向かう嬉しそうな後ろ姿。

今日の夕飯が楽しみだな。

「さてと…」

医療室…いや…風華の部屋へと向かう。

「らんらんらん」

戸を開けると、鼻歌なんか歌いながら、楽しそうに薬棚を眺める風華がいた。

私が来たのにも気付いてない様子なので、しばらく放っておくことにした。

「これとこれを使えば、もっと強力な中和剤を作れるかなあ」

…まだ酒を呑む気なのか。

「あ、酔いを早める薬を作って、姉ちゃんを潰すのが先かなあ……」

そんな薬があるのか？

「こんなにたくさんあるもんね。なんでも出来そうだよ」

「そうか。それは良かったな」

「うん。ホント、楽しみ……」

こちらを見て、ニコリとする風華。

「どの辺から聞いてた？」

「中和剤あたりだな」

「……………」

「おい、どこに行くんだ」

「もう！来てるなら来てるって言ってよ！」

「来てるぞ」

「遅いよ！」

「酒は禁止だつて言っただろ。強力な中和剤なんて、もつての他だ」

「うう……私の計画があ……」

「バカな計画なんぞ立てるんじゃない」

風華の頭を軽く叩く。

「はあ……あと四年なんて待てないよ……」

「未成熟なのに酒なんか呑んでると、発育が止まるぞ」

「……姉ちゃんみたいに？」

「な、なんでオレが出てくるんだ！」

「……分かったよ。我慢する」

「自分一人で納得するな！」

「あ、そうだ。なんで私のところに来たの？私の計画を潰すためじゃないでしょ？」

「ああ、忘れるところだった」

上手くはぐらかされたような気もするが…。

「たぶん、もうすぐ桜が来る」

「分かってる。桜、ここが本当に気に入ってるみたいだから」

「ああ」

「私も止めるつもりはなかったの。それに、桜、私と同年じゃない。私が桜のことをどうこう出来る立場じゃないことも分かってる」

「ならいい。…で、風華はどうするんだ。帰るのか？」

「私？私は…」

何か考えるように、外を見る。

そして、私の方に向き直ったとき、少し哀しげな表情を浮かべていた。

「私には帰るべき場所がある。だから、ここにはいられない」

「…お前も好きにすればいいんだ。誰かに束縛される歳でもないだろう？」

「でも…」

「残りたければ残ればいい」

「兄ちゃん…」

部屋の入り口には、いつの間にか利家がいた。

やっと片付いたというかんじで、どこかグツタリしたかんじも見受けられるが、なんとか恰好がつくように踏ん張っている。

「紅葉、これ、議会召集の伝令。頼む」

「ああ。分かった」

「風華。どうなんだ？…ここに残りたいんだろ？」

「そんなこと…」

「じゃあ、荷物をまとめて今すぐ帰るんだ」

「え…」

「ほら、早く。村のみんなも待つてるだろう」

手早く風華の荷物をまとめだす利家。

みるみるうちに、帰り支度が済んでしまった。

「じゃあな、風華。たまには遊びに来いよ」

「え…私…」

「どうした。村に帰るんじゃないのか？」

「私…」

「兄ちゃんはここに残らないといけないからな。寂しいけどお別れだ」

荷物を持って部屋を出ようとする。

「私…！ここにいたい！」

今までの遠慮がちなかんじからは想像もつかないほど大きな声で、自分の心を吐き出す。

「姉ちゃんと、もっとお話がしたい！買い物もしたい！桜と、もっと遊びたい！衛士さんとも、もっと仲良くなりたい！私…私…もっともっと、ここでやりたいことがある！」

「…そうか」

何か殺伐とした態度だった利家は、ここでやっと笑顔になる

「自分の気持ちに嘘をついたらダメだ。分かるな？でも、風華は、特に、自分の気持ちを押さえがちだ。たまには全部吐き出してやるんだ」

「うん…うん…」

…兄妹水入らずの方がいいだろ。
私は立ち去ることにする。

「姉ちゃん…ごめんね…」

「オレは、謝られるようなことはされてない」

「うん…でも、ごめんね…」

「…ああ」

夕日がいつもより眩しく感じられた。

4（後書き）

この兄妹、ホントに仲が良い。
書きながら、某水の都の兄妹を思い出してしまいました。

「あ！^{はやて}隼！それ、ボクの！」

「え…あ…ごめん…」

「いつぱいあるんだからケチケチしないの、桜」
「だって…」

「おかわり！」

「もうないよ」

「えー！なんで！」

「なんでって…みんなよく食べるからね…」

「厨房に知らせろ！」

「てんでこ舞いだよ。向こうも」

昨日の宴に勝るとも劣らない盛況ぶり。
みんな、心置きなく夕食を食べている。

「これは、もうないの？」

「ないよ。諦めるんだね」

「え…」

「もーらいつ！」

「あー！またボクの！」

「油断してるのが悪いんだよ」

ん？

見慣れない顔だ。

少なくとも、衛士ではない。

「おい、お前ら」「ねえ、キミたち」
「ん？」「え？」

「紅葉からどうぞ」

「そうか？じゃあ…」

「響！」

「ええ…もっと食べたい…」

「ダメ！」

「うう…」

「逃がすわけないだろ」

二人の襟首をつかむ。

「離して〜！」「あう…」

「お前ら、どっから入ったんだ？」

「も…門から…」

「響！」

「門番がいたはずだけど？」

「横からよじ登って…」

「で、何しに来たんだ？」

「お腹空いて…美味しそうな匂いがしたから…」

「そうか。じゃあ、次。空」

二人を投げて寄越す。

「さてさて…何を質問しようかな？」

「うう…」

「夕飯、美味しかった？」

「え？」「うん。美味しかったよ」

「キミは？」

「…美味しかった」

「そ。ならいいよ。ゆっくり食べな」

と言って、二人を放す。

怒られると思っていたのか、二人ともしばらく呆然としていたが、何かハッと気付いた様子で、宴の席へと戻る。

「どうしたの？姉ちゃん」

「いや、なんでもない。それより、もう食べないのか？」

「うん。私はもういいよ。ほとんど残ってないしね」

「まあ、それもそうだけど」

「あー！望が狙ってたおかず！なくなってる！」

「望お姉ちゃんは食べすぎだよ」

小さいのが望、もっと小さいのが響というらしい。

ホント、どこから来たんだろう。

以前ほどではないけど、かといって、警備や見回りに穴があるとは思えない。

もしかしたら、掘り出し物かもしれない…。

ってダメだダメだ。

こんな小さな子を班に配置なんか出来ない…。

壮絶な戦いが終わり、厨房の方も一段落ついたらしい。

各自、自分の部屋に戻り、休息を取っている。

「うう…あんまり食べれなかった…」

「充分食べ過ぎてるよ、望お姉ちゃんは」

「成長期だもんね。いっぱい食べないと」

「そうそう。風華なんて、望くらいのご飯十杯くらい食べっ

！」

「そんなに食べてない！」

思いつきり肘鉄砲を喰らわされた利家は、声にならない悲鳴を上げて転げまわってる。

「七杯くらいしか食べてないよ!」

「それでも充分だと思っけどな」

「え...?そう?」

「ホント、風華ってよく食べたから、私も作り甲斐があつたってもんだけどね」

「もう!私が食いしん坊みたいじゃない!」

「あれ?違つた?」

「違う!」

顔を怒りと恥ずかしさで真っ赤にさせる風華。

でも、食いしん坊は悪いことではない。

たくさん食べられるということは、それだけ幸せだということ。

そして、幸せを幸せと感じないことが、本当の幸せなのかもしれない。

「いろはねえ、何考えてるの?」

「ん?そうだな...桜の背がなんで伸びないか、かな」

「余計なお世話だよ!」

「オレはお節介だからな」

言いながら、桜の頭を撫でてやると、背のことを言われて不機嫌だった顔が、次第に和らいでくる。

そして、ゆっくりと眠りに落ちていった。
疲れてたのかな。

「あ、桜、寝ちゃった?」

「ああ」

「しょうがないな…」

「俺、部屋まで運ばうか？」

「ダメ。それに、隼、桜の部屋、知ってるの？」

「それは…」

「じゃあ、どうやって部屋まで運ぶのよ」

「うう…」

「オレが運んでくるよ」

「ごめんね。よろしく」

「ああ」

そして、桜を担いで部屋を出る。

見た目に違わず、相当軽い。

本当に十六なのか疑いたくなるくらい。

「…あんまり失礼なことは考えないでね」

「起きてたのか？」

「ううん…ちよっと目が覚めただけ…」

「そうか」

「はあ…あつたかい…」

「生きている証だ。オレがあつたかいのも、桜があつたかいと感
じるのも」

「うん…そう…」

「桜に助けられた、大切な命だ」

「ボクも、いろはねえ に助けてもらった」

「おあいこってことだな」

「…ううん。おあいこじゃない。足して二になるの」

「ふふ、そうだな。助けて助けられて。今ある命は、互いに引いて
零にするんじゃないくて、足して二にする」

「うん…。二が四、四が八、八が十六。どんどん足して、大きなひ
とつの命」

身体は小さいけど、考えてることは、ホントに奥が深いようだ。

「…また失礼なこと、考えてたでしょ」

「ああ。考えてた」

「もう…」

部屋に着く頃には、桜はぐっすりと眠っていた。

…大きなひとつの命、か。

世の中全部がそうあるように、願いたい。

再び広間。

そろそろ夜勤の衛士たちが出てきたみたいだ。

「隊長、この子たち、どうしましょうか」

「適当に部屋を割り当ててやれ」

「はっ。隊長も、早めにお休みくださいね」

「分かってる」

そして、ぐっすり眠ってしまった望と響を運び出す。

響の話によれば、フラフラと子供二人、流浪の旅をしてるらしい。

…またどこかに旅立つのかな。

ここが気に入ったようなら、住み着いてもらっても構わないんだけど…。

まあ、それは二人に任せるしかない。

「じゃあ、私たちは帰るね」

「俺は残りたい！」

「ダメ」

「なんで！」

「理由が聞きたいのかしら？」

「あ…いや…うう…」

空の不気味なほど自然な笑顔で気圧されてしまった隼は、すっかり縮こまってしまった。

…何かあるというんだろ。

「紅葉。ちゃんと利家と桜、見張つていてね。風華にも頼んどいたけど」

「ああ、空も隼も、また遊びに来てくれ」

「うん。分かってる」

「任せとけ！」

「じゃあね」

「ああ。またな」

そして二人は、夜の空へと向かって飛び去っていった。

昇り始めた月…。

ホントに綺麗な…。

「風華」

「ん？どうしたの？」

「月が綺麗だ」

「うん。そうだね…って、姉ちゃん…目の色…赤くなってるよ…？」

「ああ…昔からなんだ…」

「昔からなの…？」

「ああ。でも、オレは月が好きだ」

「うん…。私も…」

月の光は、やわらかく、全てを包み込んでくれる…。
たとえ、何も見えなくなったとしても、私は月が好き。

「……………」

「姉ちゃん」

「え…あ…どうした？」

「月、ホント綺麗だから」

「うん」

「半月だけど…ホントに綺麗な月…」

「うん」

「姉ちゃん…。私…待ってるからね…。ずっと…」

「え…？」

「じゃあ、おやすみ」

「…おやすみ、風華」

風華の足音が遠ざかっていく。

…オレも寝るかな。

立ち上がると、近付いてくる足音がひとつ。

「隊長。お連れいたしましょうか？」

「いや、いい。ありがとう。配置に戻ってくれ」

「はっ…」

昔から…。

本当に、昔から…。

私は、暗闇の中を歩いていった。

5 (後書き)

サブタイトルってちゃんと考えた方がいいんですかね…？
まあ、それは置いて…。

紅葉に見られた謎の変化の正体とは？
風華は何か知っているようですが…。

部屋に戻ると、何かお香のような匂いが充満していた。

「誰か…いるのか？」

「……………」

気配はするけど、部屋中の匂いが邪魔をして、その誰かの匂いがよく分からない。

「姉ちゃん……」

「え……？」

誰がいるのか見定めようとしていると、不意にその誰かが声を掛けてきた。

「やっぱり、見えてないんだね……」

「風華？」

「行商のおばあさんに聞いたことがあるの……。月光病って……」

月光病……。

私はそんな名前は聞いたことはない。

でも、この病気に違いないだろう。

……月の光には不思議な力があるらしい。

普通の人には、それに対抗する力が備わってるらしいが、なんらかの要因で、その力が失われることがある。

すると、月の力に耐えられなくなり、身体のだこかに異常をきたす。私の場合、目だ。

太陽が沈んで、月が空を渡る間、私は目が見えなくなる。

その印として、瞳の色が赤くなるというわけだ。

「ねえ、昔からっていつからなの？ずっと？ずっと、月を見てないの？」

「……………」

「ねえ、答えてよ…！」

「…ずっとだ。生まれてこの方、月を見たことがない」

息を呑む声がした。

「そんな…姉ちゃん…」

「心配するな。もう…諦めはついてる」

「諦めちゃダメ！…諦めたら、本当にそこで終わり」

「でも…」

「先天性の月光病は一生治らないって聞いた。でも、それは今までの話。これから、新しい治療法が見つかるかもしれない…ううん、見つけるの。私が」

「風華が…？」

「絶対、見つけるから！私…絶対に！」

空気が動く感触。

そして、風華の温もり。

「待っててね…姉ちゃん…」

「…ああ」

風華は、強く、強く、抱きしめた。

しばらくして、ふと気付いた。

「この匂い、お香か？」

「あ…そうだった…」

風華が何かごそごそすると、匂いはいつぺんに消えてしまった。

「疾風の術式にデガナの匂いを乗せて、部屋に入ってきた人に纏わりつくようにしておいたの」

「疾風の術式…？」

「ああ…。昔、変な書簡を拾ったの。そこに、術式って不思議な力のことが書いてあったんだ」

「ふうん…」

術式？

なんだろう…。

最初、火を消したときも使ってたんだろうか…？
とにかく、本当に不思議な力らしい。

「デガナ、いる？」

「ああ、貰おうか」

「じゃあ…はい。半分こね」

手に重さを感じる。

…ちよつと、半分より多いんじゃないのか？

「美味しい」

「でも、デガナなんてどこから持ってきたんだ？」

「厨房の人に貰ったの。余ったから食べないかって」

「そうか」

「まあ、今なら、私の村でいくらでも取れるんだけどね。夕食のた

めに、空姉ちゃんが持つてきてくれたんでしょ」

「いくらでも取れるのか？」

「うん。ちょうど収穫期だしね」

「ほう…」

ずっと衛士をしてたから、その辺のことについては疎い…。

これから、風華にいろいろ教わらないといけないみたいだな。

「あ、そうだ。私の部屋、まだ決まってないんだ。ここで一緒にいていい？」

「え？医療室じゃなかったのか？」

「そんなわけではないでしょ！まあ、ほとんど私室化しちゃってるのは確かだけど…。でも、いくらなんでも、あそこで寝泊りなんか出来ないよ」

「そうか？」

「あそこは怪我した人、病気の人のための部屋。こんなピンピンしてる私が、治療以外のときにいちやダメなの」

「え…？医務班に入ったのか？」

「うん！」

「無理にどこかに所属しようなんて考えなくてもいいんだぞ？」

「そんなのダメ。みんな一所懸命働いてるのに、私だけのんびりしてられないよ。それに、桜も伝令班に入るみたいだし」

「…そんなこと聞いてないぞ」

「だって、今言うのが初めてだもん」

「ちよつとはオレに相談しろよ」

「相談したところで、さっきみたいなこと言うだけでしょ？それなら相談しても相談しなくても一緒じゃない」

昨日今日の付き合いなのに、もうそこまで分析されてるのか…。
なんか…不甲斐ない…。

「ううん。そうじゃないよ。なぜか分かったんだ」
「え…？」

「昨日、分かった。医療室に運んでもらったとき。ずっと昔から知ってるみたいな、懐かしいかんじがしたんだ」

「“記憶”か…」
「ん？」

「いや、別の世界の”記憶”が、唐突に流れ込んでくることがあるらしいんだ」

「ふうん…別の世界…。じゃあ、私と姉ちゃんは、そのどこかの世界でも、こうやって仲良しだったのかな？」

「ああ。きつとな」

別の世界の”記憶”なんだ。

きつと…いや…絶対、別の世界の私と風華は、親密な関係なんだ。
…そう考えると、私も、何か懐かしいようなかんじに包まれた。

「よしっ！部屋も決まったし、もう寝ますか！」

「そうだな」

「あ、私の布団、どこに取りに行けばいい？」

「広間だけど…重たいし、誰かに取りに行かせようか？」

「ううん。いいよ。重い荷物には慣れっこだから」

「そうか？」

「うん。じゃあ、ちょっと行ってくるね」

と言って、走り去ってしまった。

…それじゃあ、えーっと、私の布団は…あれ？

いつもの場所がない…。

どこ…？

「よつと…」

「あ…風華…早かったな…」

「うん。医療室に運び込んでくれようとした衛士さんに会ったんだ」

「そうか…」

「つて！ごめん！姉ちゃん！お昼に布団、干しちゃった！すぐに敷くね」

「あ…ごめん…ありがとう」

「ううん。私が悪いんだから、そんな、お礼なんていいよ」

「…でも、ありがとう」

「うん」

そして、バサバサと布団を慌てて敷く音がした。

「はい、姉ちゃん。出来たよ」

「ああ」

「じゃあ、私は隣に寝ようかな」

「お好きにどうぞ」

「うん」

部屋の中ほどに敷かれた布団。

太陽の光を浴びて、ふかふかになっていた。

「ね、気持ちいいでしょ？」

「うん」

「私のところでは、五日に一回は干すんだ。気持ちいいしね」

「うん…」

「あと、万年床にしちゃダメだよ」

「分かった…」

「敷きにくいのは分かるけどね。でも、今日から私がいるんだから

…

遠い彼方で、風華が話しているのが聞こえた…。
太陽の匂い…温もり…。
久しぶりだな…。

6（後書き）

話がなんとなく粗いのは気にしない。
別の世界のお話はブログで公開中です。
とか宣伝してみたり。

この戦国絵巻も公開していますよ。

うつすら目を開ける。

…もう夜は明けたらしい。

「いろはねえ」

「うわっ！」

「何びつくりしてるのさ」

「いるならいるって言ってくれ…」

「声掛けたじゃない」

「視界の外からいきなり声を掛けるやつがあるか！」

「それよりさあ、朝ごはん、食べないの？冷めちゃっよ？」

「はあ…。今何時だ」

「もうすぐ巳の刻だよ」

「はあ！？」

「な、何？」

「そんな…思いつきり寝坊じゃないか！」

「そ、そうなの？」

まずい…。

急いで服を着替えて、部屋を出る。

「あ、待ってよー！」

待ってられるか！

ああ！もう！

なんで寝坊なんかしたのかな…。

「メシ！」

「あ…はいっ！」

厨房に入っすぐに、大声で怒鳴る。

って、ここの連中に当たっても仕方ないよな…。

「…ごめん」

「あ…いえ…」

しばらく、トントンとまな板を叩く音が響いた。

「あ…あの…」

「どうした」

「いえ…その…きよ、今日は非番なんじゃないんですか…？そんな…制服なんて着て…」

「非番！？誰がそんなことを言ったんだ！」

しまった…。

またやってしまった…。

「あ、あの…風華さんが…」

「風華が？」

「はい…」

非番？

何を考えてるんだ…風華は…。

「あ、あの…」

「なんだ」

「朝食の支度が整いましたが…」

「そうか…。いただこう」

お粥か。

珍しい。

栄養補給にはもってこいだけだな。

「美味しい」

「そ、そうですか！ありがとうございます！」

「美味しい料理は心を豊かにしてくれる」

「は、はいっ！精進します！」

「ごちそうさま。ありがとう。美味しかった」

「はいっ！」

嬉々とする源次を残し厨房を後にして、医療室に向かう。

「い、いろはねえ…どこにいたのよ…。探したじゃない…」

「ん？厨房だけど」

「もう…」

「医療室に行くんだが、桜も行くか？」

「うん。でも、どうしたの？おなか、痛いのか？」

「桜じゃないんだから」

「むう…！どういうことよ！」

「食べ過ぎで腹痛とか起こしそうだからな、桜は」

「そんなこと…ないもん…」

あるんだな。

まあ、食べられるうちにたくさん食べておかないと。

…と、そんなことを話してる間に医療室の前まで来た。

「入るぞ。風華」

「あれ？姉ちゃん、もう起きてきたの？」

「どういうことだ」

「あ…うつん…なんでもない」
「ふうん？」

明らかに動揺してるけど…。
何か隠し事、してるのかな。

「そういえば、今日、オレが非番だって言っただってな」

「あ…うつん…」

「なんでそんなことを言っただって？」

「だって…姉ちゃん、ずっと働き詰めだって聞いたから…」

「余計な心配は無用だ」

「余計じゃない！」

「さ、桜…」

「衛士さんから聞いたよ！いろはねえ、最近全然寝てないって！それに、私を逃がしてくれたときだって、揺すっても叩いても起きなかったじゃない！」

「そんなことをしてたのか？」

「あう…。そ、そんなことはいいの！みんな、心配してくれてるんだよ？ちよつとくらい、甘えたっていいんじゃないの？」

みんなのことが心配だったから、私が頑張ってた。

みんなに、少しでもゆつくりしてもらいたかったから、一所懸命に働いてた。

でも、それは私の独りよがり…。

みんなに、心配を掛けてた。

みんなのことがよく見えてなかったんだ。

「…ごめん」

「違っでしょ？」

「…そうだな。…ありがとう」

「うん。どういたしまして」

「桜が言っただうするのよ」

「じゃあ、誰が言うの？」

「そりゃ、兄ちゃんでしょ」

「犬千代が？」

「うん。最初に衛士さんから話を聞いたの、兄ちゃんだし。それに、休暇届は兄ちゃんの管理だしね」

「名前、紅葉。所属、戦闘班。役職、衛士長。衛士各員に、五日に

一日の休暇を賜りたく候。これは休暇届というのか？風華？」

「言っんじゃない？」

犬千代が、またいつの間にか入り口に立っていた。

「これはむしろ、法案改正要求だろ」

「そうなの？私は出してないから分からないよ」

「明らかに風華の字だろ」

「そう？」

「…まあいい。紅葉。この書状、確かに受け取った。議会召集まで、とりあえずこれは有効にしておく」

「うん。ありがとう」

「…まあ、今日はゆっくり休め」

「分かった」

そしてまた、音もなく去っていく。

「どうしたの？いろはねえ。顔、赤くない？」

「え…そ、そうか？」

「うーん…そうだね…。あ」

「あ？」

「うつん、なんでもない」

「ええ〜！何なの、風華！気になる！」

「なんでもないよ」

顔…赤いのかな…。

それに、風華があんな止め方をしたから、桜、すつごく気になるみたい。

しつこく問いただしては、上手くはぐらかされていた。

昼ごはんも済み、もうそろそろ太陽も傾きだした。

未の刻つてところかな…。

こんなのにんびりと日向ぼっこをしたのは初めてじゃないだろうか。

「むう…お母さん…」

隣では、望と響が可愛い寝顔を見せてくれている。

…それにしても、やっぱり母親が恋しいのかな。

どこから来たのかとか、全く話してくれない…というか、覚えてないみたいだ。

気が付けば、あっちへウロウロ、こっちへウロウロの生活だったらしい。

「あ…」

目を開ける望。

「お母さん…」

「お母さんが恋しいのか？」

「うつん…。違う…。お母さん、ここにいる…」

こちらに擦り寄ってきて、服をギュッと掴む。

「望の…響の…お母さん」

「え？オレでいいのか？」

「うん…」

「そうか」

望をさらに引き寄せ、強く、抱き締めてやる。

母親の温かさ。

この子たちの母親の代わり…ううん、母親として、その温かさを教えてあげたい。

7 (後書き)

うん。

見直してみると何か変なところがあったので、修正しました。
ブログの方も修正しないと…。

日も暮れて、もうそろそろ夕飯かという時間。
下弦の月だから、昇る時間も遅い。
まだ…もうちょっと大丈夫だな。

「姉ちゃん、どうする?」

「何がだ」

「みんなと一緒に食べる?」

「ああ。なんでそんなことを聞く?」

「あ…いや…」

「…心配するな。みんな、オレの病気のことは知ってくれている。
それに、そんなことを気にかけるようなやつじゃない」

「そう…」

風華とともに広間へと向かう。

そこでは、すでに戦が始まっている。

「ああ!それ、望のだよ!」

「食べるのが遅いのが悪いんだよ」

「むう…そりゃ!」

「あ!またボクの盗った!」

「油断してるのが悪いの!」

「ふ、二人とも、ケンカしないでっ」

ふふ、やってるやってる。

大勢で食べる食事というものは、本当に楽しいものだ。

「あ、隊長!ここ、空いてますよ」

「隊長の分は避難させてありますから！」

「そうか。ありがとう」

「ふふ、人気者だね」

「そうか？」

「うん」

そう言つて、風華は利家の横に座り、食べ始める。

…私も食べるかな。

「いろはねえ の、もーらいつ！」

「甘いな」

桜の箸は空を掴む。

「あう…。まだまだ！」

「望も」

「二人まとめてかかってこい」

…戦いは熾烈を極めた。

桜を止めてる間に、望が仕掛けてくる。

それを紙一重で防ぐと、今度は共同戦線を敷く。

この二人、ホントに息ぴったりだな。

まあ、机の上に登っているとかは気にしない。

たまに響が割り込んできたりしたが、最終的には、四本の箸が宙を舞うことになった。

「ああ…」 「むう…」

「勝負ありだな」

「はあ…全然敵わなかったよ…」

「でも、次は負けないからね！」

「望むところだ」

「…でも、最後はアレだよね」

「いきますか！」

「せーのっ！」

「」「ごちそうさまでした！」「」

広間の全員の心がひとつになった瞬間だった。

さっきまでの興奮もだんだん落ち着いてきた。

衛士たちは各々の部屋に戻り、ゆっくり休んでいることだろう。

私は、調理班が片付けをしていている音を聴きながら、外の風景をぼんやりと眺めていた。

「隊長…そろそろ…」

「ああ。分かってる。ありがとう」

「はっ…」

夕食が済んだあとには、必ず外の風景を眺めるようにしている。

たとえ、満月の日であろうと。

不思議と、この夜という時間帯、あるいは、月というものに嫌悪の念を抱くことはなかった。

愛おしさを覚えるくらいだ。

この病気のお陰で、普段触れられない、人の心の温かさを感じることが出来る。

…いつの間にか、私は心待ちにするようになっていた。

この、闇の世界を…。

「…姉ちゃん」

「ああ。もう寝ようか」

「うん…」

風華は、私の手を取り、先導してくれる。

そんなことをしてもらわなくても、自分の部屋くらいには行けるんだけど…。

でも、風華の厚意に甘えさせてもらう。

「どうしたの？」

「ん？何が？」

「姉ちゃん、なんか嬉しそう」

「…そうだな」

温かくて柔らかい風華の手。

今まで、感じたことのない感触。

衛士のみんなも、案内役を買って出てくれた。

それは、ありがたいことではある。

けど…寂しかった。

みんな、割れ物を扱うように、慎重になりすぎていた。

贅沢を言っではいけないんだけど。

「でも、風華は違う」

「え？」

「私を、私として扱ってくれる。目が見えない私としてではなく、あくまで、私として」

「…当たり前じゃない。姉ちゃんは姉ちゃんだもん。月光病であるうとなかろうと。他の誰かに変わったりはしないでしょ？」

「うん」

そう…。

他の誰でもない。

私は私なんだ。

「ところで、なんで”私”なの？さっきまで”オレ”だったじゃない」

「あ…いや…」

「ふふん。意外と姉ちゃんって…」

「もう！風華！」

「あははっ、内緒にしておいてあげるねっ！」

ホント頼むよ、風華…。

8（後書き）

どうやら、心の声が漏れてしまったようです。
意外と紅葉は、他の子たちよりも女の子なのかもしれません。

部屋に近付くと、何かバタバタと走り回るような音がする。

「……？なんだ？」

「ああ！あの子たち、まさか！」

私の手を離し、部屋まで走っていく。

「こらっ！暴れちゃダメでしょ！」

「あ、お姉ちゃん」

「こいつ、言うこと聞かないんだもん！」

聞こえたのは望と響の声。

…こいつって誰のことだ？

「誰がいるのか？」

「あ、ごめん、姉ちゃん…。ちょっと、森の方で拾って来ちゃったんだ…」

「拾ってきた？」

「うん。この子なんだけど」

と言って、風華は何か大きな毛玉のようなものを寄越す。
触ったかんじ、子犬…いや、この匂いは狼か…。

「ちっちゃい子犬なんだけど…」

「こいつは犬じゃないぞ」

「え？」

「お母さん、目、どうしたの？」

「これか？何、心配はない。それより、どうだ、響。こいつが何か当ててみる」

響に子狼を渡す。

「うーん…フダツ？」

「違う」

「じゃあ、クルス」

「違う」

「望、分かるよ！狼でしょ！」

「ええ！？狼！？」

「そうだ。よく分かったな。偉いぞ」

「えへへ」

「わたしも！わたしもなでなでして！」

「分かった。分かったから、押すなっ」

二人が見せているであろう可愛い笑顔を拝めないのは残念だが、私の服を掴む感触、抱きついてくれている感触は感じられる。
今は、それだけで充分だ。

「私…狼なんて拾ってきちやったの…？」

「どうした。何か問題でもあるのか？」

「だって、狼って、すぐく獐猛で…」

「じゃあ、オレや望も獐猛なのか？」

「そ、そういう意味じゃないよ。でも…」

「獐猛だとか凶暴だとかは、人が自分勝手な基準で決めたこと。人間に比べたら、こいつらの方がよっぽど大人しいよ」

「お母さん、わたし、難しい話、分かんないよ」

「そうだな。こんな話はこれで終わりだ。…でも、風華、そのこと、ちゃんと分かっておいてくれ。動物というのは、決して獐猛でも凶

暴でもないってことを」

「うん…」

「じゃあ、望、響。こいつの名前、決まってるのか？」

「うん！明日香！」

「あすか？」

「うん。明日、香るって書いて明日香！」

「ほう、響、漢字が出来るのか」

「うん！」

「望も出来るよー！」

「そうか。二人とも、偉いな」

「えへへ」

またガシガシと頭を撫でてやる。

本当に可愛いやつらだ。

「さて、もう寝る時間だぞ。お前らの部屋は…」

「あ…姉ちゃん…」

少し部屋の外まで引つ張り出される。

「どうしたんだ」

「昨日も、二人ともここで寝てたんだ。匂いを消すのが遅れたし、デガナも食べてたから分からなかったかもだけど…」

「そうなのか？」

「うん…衛士さんは、別の部屋に連れて行っただけで…」

「そうか。でも、まあいいじゃないか」

再び部屋へ戻る。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。それより、もう寝る時間だ、二人とも」

「うん」「分かった」

「えっと…そこか」

「何が？」

「布団、もうちよつとこつちに寄せたらどうだ？」

「いいの？」

「悪いわけがないだろう」

「「やった！」」

布団を擦る音がした。

それが、部屋の中ほど…私と風華の布団があるであろう場所で止まる。

「それなら、こうでしょ」

「あ！お姉ちゃん、頭いいね！」

「そうかな」

風華の照れたような声。

たぶん音からするに、望と響の布団を私と風華の布団の間に入れたのだろう。

そして、バサバサと布団に潜り込むような音。

「おやすみ、お姉ちゃん、お母さん」

「おやすみ」

「ああ、おやすみ」

「おやすみ、望、響」

「うん…」

…すごく寝付きがいいな。

ていうか、早すぎないか？

響なんかは、もう寝息を立て始めてる。

二人の寝顔は、また昼寝のときか、もうしばらく先までお預け。昼の、二人の寝顔を想像すると、思わず笑みがこぼれてしまう。

「姉ちゃん、変なの」

「そうか？」

「…ううん。やっぱり、変じゃない。だって、私と同じ顔、してるもんね」

「ふふ、そうだな。…あ、こいつ、どうするんだ？」

「私が世話するつもりだけど」

「そうか。まあ、オレも出来る限りのことはする。それに、オレの方が狼の扱い方に関しては上だろうしな」

「え？なんで？」

「なんでってそりゃ…」

そこで止める。

これを、今言ってしまったてもいいのだろうか…。

「そりゃ…何？」

「いや、今日はもう遅い。続きはまた今度にしよう」

「ええー！気になるよ！」

「次のお楽しみってやつだ。また話してやるから」

「絶対だよ！ねえ、絶対！」

「分かってる。それと、そんな大きな声を出すな」

「あ…そうだね」

聞こえてくる二つの寝息。

起きる気配はないけど、それでも配慮するに越したことはない。

「オレたちも寝るか」

「うん。あ、布団、どこか分かる？」

「匂いでだいたいな。…ここか」

「やっぱり、嗅覚が鋭いんだね」

「ああ。狼だしな」

「私は全然だな」

「よく利く鼻がなくても、風華には聡明な頭脳がある」

「ふふ、そうだね」

「ちよつとは謙遜しろよ」

「ええ」

「くっ…ふふふっ」

「あははははっ」

二人して笑った。

何事かと、明日香が頬を舐めてきて、それがくすぐったくて、また笑った。

9（後書き）

笑う門には福来る。

さあ、みなさん、笑いましょう。

意味なんていらないのです。

幸せになったもの勝ちなんですから。

目が覚めると、寒さがこたえた。
どうやら、布団からだいぶ離れているらしい。

重たい身体を引きずって這い戻り、掛け布団を上げてみると…明日香がいた。

私を押しつけて寝るなんて…。

「おい、明日香。どける」

言ってみるが、動く気配はない。
まだ寝ぼけてるのだろうか。

『明日香。もうちょっと向こうに行ってくれ』

今度は、ちゃんと向こうに行ってくれた。
はあ…いつの間に潜り込んでたんだろ…。
まだ夜明けは遠いみたいだ。
もう一眠り…しようか…。

目が覚めた。

今度は布団の中。

ついでに、夜も明けたみたいだ。

「あ、姉ちゃん。起こしちゃった？」

「いや」

「そ。おはよ」

「おはよう」

望と響はすでにいない。
というか、布団もない。

「いいお天気だから、布団、干してるの」

「そうか。でも、昼を過ぎたらすぐに取り込んだ方がいいな」

「え？なんで？」

「昼過ぎになったら分かる」

「それじゃ遅いでしょ？」

「まあ、そうだな。とにかく、昼過ぎまでには取り込んでおけ」

「…分かった」

「ほら、明日香も起きろ。布団を干せないだろ」

軽く叩いてやると、明日香は欠伸をして、大きく伸びをする。

私も布団を抜け出し、適当に畳んで持ち上げる。

「あ、私が干すから、姉ちゃんは朝ごはん食べてきなよ」

「自分の布団くらい自分で干す。なんでもかんでも風華任せには出来ないからな」

「でも…」

「でも、じゃない。…それに、夜は風華に任せっきりになるからな」
「…うん。そうだね」

風華に案内され、布団を干しているところに行く。

…まあ、洗濯物を干すところなんだけど。

でも、今日は綺麗に洗われた衛士たちの服が、ずらっと並んでいた。

「わあ…すごいな…」

「ええー、どどういう意味で？」

「ん？」

ふと、声をした方を見える。

「よっ！紅葉！元気だった？」

「空！」

「手伝いに来たよ」

「そんなこと言つて。サボりに来た、の間違いでしょ？」

「あれ？バレてた？」

「もう……」

「それにしても、ここの衛士たちは何を着てるの？洗濯物、こんなに溜めてさ」

「二週に一回、みんなで洗うんだ」

「ええっ！そんなことしてるの！？毎日洗いなよ！」

「……だつて、面倒くさいじゃないか」

「そんなんじゃないダメ！毎日洗いなさい！」

「……約束は出来ない」

小突かれた。

「毎日やること！いいね！」

「……」

「返事は？」

「はい……」

これが、毎朝の洗濯の時間が定められた原因の一部始終だ。

布団を干して、厨房へ。

空はもう食べてきた、とのことで、私と風華だけで向かう。

「空姉ちゃんったら、まだ夜が明けないうちから来てたんだよ？そんなに収穫作業が嫌なのかな…」

「風華はどうなんだ？」

「私？私はね、結構好きだったよ。採れたてのデガナ、美味しいね」

「それが目的か」

「え？あ…あはは、そんなわけないじゃない…」

そんなわけ、あるんだな。

まあ、採れたての野菜というものは、どれも最高に美味しいものだ。特に夏野菜ともなると…な。

「も、もう！なんか、私が食いしん坊みたいじゃない！」

「自分が口を滑らせたんだろ？」

「う…」

「たくさん食べるということは、悪いことではない。むしろ、歓迎されるべきことだ。だから、遠慮せずにたくさん食べるといい」

「…うん」

「認めたな」

「…え？…………。ああーっ！姉ちゃん！」

「ふふ、ホント、風華って面白いよな」

「もう！」

顔を真っ赤にさせる風華。

…でも、食べることは悪いことではない。

しっかり食べて、しっかり遊んで、しっかり寝る。

成長期には必要不可欠なことだ。

そんなことを言つと、また怒るだろうから、心の内にしまっておく。

「朝ごはん、頼む」

「私もお願いします」

厨房に着いて、早速注文してみるが、衛士は包丁を熱心に砥いでいるらしく、全くこちらに気付いていないようだった。

「命を磨く。いい心がけだな」

「あつ！隊長！風華さん！すみません！すぐ作ります！」

「ああ、そんなに急がなくてもいいから」

「わわっ！」

と、砥石を落としてしまった。

「あつつう……」

「大丈夫ですか！？」

足に直撃したらしい。

少し血が出ていた。

「ジッとしていてくださいね……」

風華が何か集中するようなそぶりを見せると、その足の傷はどんどん癒えていった。

「え……？何なんですか……？これは……」

「これは応急手当だから、あとでちゃんと医療室に来てもらいます」

「あ……はい」

「じゃあ、朝ごはん、よろしくお願いしますね」

「はっ！」

そして、何事もなかったようにテキパキと働く。

「なんだったんだ？今は」

「術式のひとつだよ。『手当』っていうの」

「ふうん…。傷が癒えていたみたいけど？」

「あくまで一時的なものだよ。傷を騙してるだけだから、放っておくとまた傷口が開いてくるの」

「そうか」

何かよく分からないけど、そういうことらしい。

「治療は、もっと集中力があるし、再生ともなると、術者はもちろん、対象者にも負担をかけちゃうんだよね…」

「なんだそれは？」

「手当のさらに上位の術式だよ。いざというときにしか使っちゃいけないって書いてあった」

「なら、今は使うべきではないな」

「うん」

今日の朝ごはんは、何かの魚を焼いたもの。
適度な味付けだな。

焦げ目も上手く付いてて、視覚的にも楽しめるものだった。

「ご馳走様」

「ご馳走様でした！」

「あ、はいっ！お粗末さまでした！」

「砥石、もう落とすなよ」

「はっ…」

「医療室、ちゃんと来てね？」

「はっ！」

「じゃあな」

「また後で」

厨房を後にした。

風華は何か薬の調合をするとか言って、そのまま医療室に向かってしまった。

何もすることがない私は、見回りも兼ねて、グルッと外周を回っていた。

「あ、お母さん！」

「ん？望か。どうした」

「お散歩？」

「そんなところだ」

「じゃあ、望も一緒に行く！」

「そうか。じゃあ一緒に行こうか」

「うん！」

望は明日香を連れていた。

やはり、狼同士は気が合うのだろうか？

「お母さん、夜、明日香と何話してたの？なんか、変な言葉が聞こえたの」

「聞いてたのか？」

「うん。眠たくて、よく聞こえなかったけど」

「明日香がオレの布団で寝てたから、どいてくれて言ってたんだ。な、明日香」

「ワウ！」

「ふうん。お母さん、明日香と喋れるんだね！」

「まあな」

「すごいね！」

「でも、このこと、誰にも話すなよ？」

「なんで？」

「あれは、秘密の言葉なんだ。だから、誰にも言っちゃいけないんだ」

「じゃあ、望は…？望、聞いちゃったよ…？」

「望は賢い子だから、誰にも喋らない。オレはそう信じてるから、大丈夫」

「うん！誰にも言わないよ！」

「えらいな、望は」

「えへへ」

頭を撫でてやると、なんとも可愛い笑顔をこちらに向けてくれる。

…いつか話さないといけないな。

少なくとも、風華には。

約束だしな。

まあ、その時はその時だ。

今、心配しても、どうなるわけでもないからな。

今は、望を撫でてやることに専念しよう。

可愛い笑顔のためにも。

10（後書き）

ついに、ナンバリングも二桁突入です。

次は三桁ですね（え

食べ物に関しての話題が多いのは、自分が食べることが好きだからです。

あと、寝ること。

昔、食べたくても食べられないときがあったからでしょうか。

食べ物を残すなんて、そんな恐ろしいこと、考えられません。

お腹が破裂しそうでも、嫌いなものがあっても、無理矢理押し込みます。

後にどうなるかなんて考えません。

とにかく、食事中は、残さないことだけを考えてますね。

「……………」

「ん？どうした、明日香」

「どうしたの？」

「あ、いや、明日香が…」

「明日香、どうしたの？」

「…そうだな。望、あそこ、見てみる」

「……………」

指し示した場所に向かって、恐る恐る歩いていく望。
明日香もそのあとに続く。

「……………」

「……………」

ゴクリと唾を飲む音が聞こえそうなくらい、緊張している。
そして、意を決したのか、軽く頷く。

「ええい！」

「ひゃう！」

「！？」

「どうだ。望」

そこにいたのは、小さな女の子。
見たところ…龍か。

「おい、お前、ここで何してるんだ？」

「あ…あの…」

「ねえねえ、お名前は？」

「え…あ…ひ、光…」

「光！」

「な、なんですか…？」

「行こっ！」

「え…ど、どこに…？」

なんて質問は聞こえてないようだ。

望は光の手を引き、どこかに行ってしまった。

「大変だな。光も」

「ワウ」

「ん？お前は行かないのか？」

その場に座って、何を言ってるのか分からないという風に首を傾げる。

『お前は行かないのか？』

「……………」

『そうか』

どうやら私についてきてくれるらしい。

『でも、まあ、もう何も無いと思うけどな』

「……………」

『ふふ、そうかもしれん』

のんびりと散歩を楽しむことにしようか。

外周を二周ほどしてきて、戻ってくる。
まだ昼ごはんには早いな…。

「響！光！次、あっち行ってみよ！」

「待ってよ」

「はあ…はあ…」

城内を探索でもしてるのだろうか。

先頭を走る響、それに追いつこうとする響、そして、すでに息を切らせている光が脇を通り過ぎていく。

「光」

「……？」

「飛んでみせてやれよ」

「でも…」

「二人とも負けん気が強いからな。もしかしたら追いついてくるかもしれないだろ？」

「あ…うん…そうかも…」

「ほら、行け」

光は、その場で何回か羽ばたいて宙に舞い、一気に加速して飛び去っていった。

「ああ！先頭は望なんだから！」

「二人とも待ってよ」

その名に恥じぬ速度。

…白龍は”光”

明るく照らすだけでなく、その速さは他の追隨を許さない。

「待つてよ」

響は…黒龍のはずなんだけどな…。

”水”を司る、とかいう噂は嘘だったのかな…？

「ああっ！いろはねえ！こんなところにいたの！？」

「ん？どうしたんだ、桜」

「ずっと探してたんだよ！」

「何か約束でもしてたか？」

「してないけど。でも、今日は買い物に連れて行ってもらおうって
思ってた」

「ついこの前、行ったじゃないか」

「今日届いたって手紙が来たの！」

「何が」

「行ったら分かるよ！」

「あ、おい、待つて」

桜は強引に私の手を引っ張るが、それを一旦振りほどく。

「は～や～く～！」

「待つて。この格好じゃダメだ」

「いいじゃない！その格好で！」

「衛士の格好で市場に行くときは、取締りのときだけだ。ちょっと
待つて。上から羽織るだけだから」

「早くしてよね！」

「分かった分かった」

急いで部屋に戻り、羽織を取ってくる。

「早く早く！」

何をそんなに急いでるんだろうか…。

「あ、姉ちゃん、どこ行くの？」

「知らん。桜に聞いてくれ」

「市場！」

「えっ、私も行く！」

「じゃあ、早くして！」

「あ…うん…」

風華は、桜の勢いに気圧されたみたいだった。
珍しいこともあるものだ。

市場へ着くと、桜は真っ先に装飾品を売っている店に向かった。

「ねえねえ！」

「ほらよ」

「わあ！ありがと！」

「どういたしまして」

桜が何かを受け取る。

綺麗な袋の中に入ってるみたいだけど…。

「はい、いろはねえ」

「…え？オレにくれるのか？」

「うん。そのために注文してたんだもん」

「…ありがとう」

「いいのいいの。ね、開けてみてよ！」

「ああ、そうだな」

この袋自体も、相当な手の込んだ作りなんだけどな。
紐を解いて開けてみると、中には…。

「腕輪…？」

「うん！」

中には、銀色の…というか、銀だな…。

銀の腕輪が入っていた。

表面には綺麗な細工がしてあつて。

「どう？綺麗でしょ！」

「ああ…でも、これ、高いんじゃないのか…？」

「鉱石自体は嬢ちゃんが持ってきたからな。加工代だけだから、ほとんどこからなかったよ」

「そうなのか？」

「うん！ねえねえ、それ、付けてみてよ！」

「そうだな」

腕輪をはめてみる。

…ぴったりだな。

「ぴったりだね！」

「ああ」

「それはよかった」

「ありがと！おじさん！」

「いや。礼には及ばんさ。これが仕事だからな」

「でも、ありがと！」

「ふふ、また来てくれよ」

「うん！」

装飾屋に別れを告げ、店を出た。
外に出ると、別行動を取っていた風華がいた。

「あ、終わった？」

「ああ。風華は？」

「私も終わったよ。お昼、食べていかない？」

「そうだな…。帰ったら遅くなるか…」

「やった！外食だ！」

「それ聞いたら、厨房のやつら、がっかりするぞ？」

「あう…みんなが作ってくれる料理も美味しいよ！」

「後で直接言つてやれ」

「分かった！」

「じゃあ、どこにする？」

「露店で買つてもいいんだが」

「ええ…。お店がいい」

「高くつくでしょ」

「いや、まあいいだろ。どのみちオレのおごりだ」

「ダメだつて、姉ちゃん！」

「年長者の言うことには素直に従つとくもんだ。な、桜？」

「そうだよ！風華！」

「それでもダメ！私、半分出すから」

風華が強情なことはもう分かつてる。

どうしても引き下がないだろうな。

…このままではいつまで経っても昼ごはんにありつけない。

「分かったよ…。風華の好きなようにすればいい」

「うん」

「じゃあ、行こー！」

「分かったから引つ張るなっ！」

「あ、ちよつと、待ってよ！」

風華の制止の声も、もはや桜には聞こえてないみたいだ。

外食。

たしかに、普段とは違う、何か魅力的な響きがある。

まあ、どちらにせよ、楽しんで食べるというのは、とても大切なことだ。

風華や桜たちが来てから、それを痛感するようになったな。

11（後書き）

ということで、皆さんもごはんは出来るだけ大勢で楽しんで食べましょう。

「ねえねえ！あそこにしょ！」

と言って、桜が入っていったのは大衆食堂だった。

「いらっしやい！なんにします？」

「ボクはねゝゝえっとゝ」

「私は、このキツネ蕎麦で」

「オレは日替わり」

「えっとね、ボクは焼き魚定食ゝ」

「キツネ蕎麦に日替わり、あと焼き魚定食だね」

「はい」

「了解っ！」

お昼時より少し早いからか、客は少なかった。
ていうか、その客ゝ知った顔なんだけどゝ。

「あれ、隊長じゃないか？」

「シーツ！今は隊長じゃないだろ！」

「あゝそうかゝ。改めてゝあれ、紅葉さんじゃないか？」

「いや、どうだろうゝ。紅葉さんがこんな店に来るわけないしゝゝ」

「こんな店で悪かったな！」

「あ！オヤジ！違うって！」

何をしてるんだかゝ。

厨房に言えば昼ごはんは作ってくれるんだけど、こつこつとこゝろで
食べるやつらもいるんだな。

みんなの、いつもと違う一面を見た気がする。

「衛士さんもここに来るんだね」

「まあ、そうなんだろうな」

「え？姉ちゃん、知らなかったの？」

「まあな…あんまり外に出ることもなかったから…」

「ふうん」

「おなか空いた〜」

「もうちよつと待ってくれよ、嬢ちゃん。そのやつらの、後回しにしてるから」

「ええっ！そりゃないよ！」

「うう〜」

机に突っ伏す。

無意味に足をバタバタさせてみるが、結局体力を浪費するだけだと気付いたらしい。

グツタリとして、そのまま動かなくなった。

「ところで、風華は何を買ったんだ？」

「えっと…お薬の材料と、新しい本だよ」

「何の本なんだ？」

「お料理の本」

「料理、作るのか？」

「あ…うん…ちよつと、今度やってみようかと思って…」

「ふうん…。まあ、厨房のやつらにも教わるというい」

「うん、そうだよね」

「嬢ちゃん、お待たせ。焼き魚定食だったね」

「やった！いただきます！」

「どうぞ」

早速がつつく桜。

そんな急いで食べることはないだろうに…。

「それにしても、料理の本か…。いいねえ。お姉さんに何か作ってあげるのかい？」

「そうですね。姉ちゃんにも何か作ってあげようかな」

「ははっ！美味しい料理、作ってやりな！」

「はい！」

「じゃあ、お姉さん方はもうちょっと待っていてくれよ」

「ああ。急がないから、ゆっくりでいいぞ」

「ふふ、そんなわけにはいきませんで。衛士長さんを待たせたとありゃあ、末代までの恥だ！」

「なんだ、知ってたのか」

「お噂はかねがね…ってやつでさあ。いや、噂と実際で見るのでは雲泥の差ってやつだね！思ってたよりずっと美人さんだ！」

「な…何を…」

「ははっ、姉ちゃん、照れてる」

「もう！からかうんじゃない！」

「オヤジ、こつちも早く頼むよ…」

「お前らは一番後だ！ここで屯ってる暇があったら、城の警備に戻りな！」

「ええ…隊長とはえらい違いだあ…」

「そんなこと言って、衛士長さんに苦勞かけてんじゃないだろうな！」

「ええ…そんなこと…ないですよ、隊長？」

「さあな」

「そ、そんな…酷いです…」

「あははははっ、面白いね」

「食事は楽しく！これが一番でさあ！」

「そつだな」

「俺たちは、いつになったらその楽しい食事にありつけるんだあ…」

？」

みんなで笑った。

「いや、食べることに夢中になってた桜だけは、みんなが笑ってるのを見て首を傾げるばかりだった。それがまた面白くて。」

ふむ…。

なかなか美味しかったな。

桜に何個かおかずを取られてしまったが、まあいいだろう。夕飯のとき、覚えておけよ…。

「ご馳走様」

「ご馳走様でした」「ご馳走様〜」

「毎度！」

「いくらだ？」

「三人で八百円でさあ」

「ほう…安いんだな」

「安いだけがうちの取柄なんですね」

「そんなことないぞ。美味しかった」

「美味しかったよ〜」

「へへ、ありがとうございやす」

「じゃあ、四百円出すね」

「いや、いい。オレが出すから」

「ダメだって！」

「せっかくお姉さんがおごるって言うてくれてるんだ。甘えとくのが、妹の役目ってもんだよ」

「オヤジ、なかなかいいこと言っな」

「それでもダメなの！」

「あ、そつだ。今度、お姉さんに料理を振舞ってやるんだろ？それの代金を今払ってもらう、って考えればいいんだ。いい案だろ？」
「でも……」

「なつ。姉妹同士だろ？遠慮すんなつて。じゃ、衛士長さん。八百円な」

「ああ」

八百円をオヤジに渡す。

「はい、ちようどね！毎度あり！」

「また来るね」

「お、ありがとな。嬢ちゃん」

「うん。じゃあね」

店を後にする。

桜は、人ごみに紛れて見えなくなるまで、外まで見送ってくれたオヤジに手を振っていた。

「ごめん……姉ちゃん……」

「謝られるようなことは、何もしてない」

「そつだよ、風華」

「桜は、やっぱりもうちょつと遠慮を覚えた方がいいな」

「ええ……」

「ね、絶対、埋め合わせはするから」

「そんなことをしてもらいたくて金を出したわけじゃない」

「分かってるけど……」

「なら、そんなこと言ってくれるな」

「……………」

「もつ言わないな？」

「……うん」

「よろしい」

頭を軽く撫でてやると、風華は何か複雑な笑顔を見せた。

「あ！いろはねえ！あれ欲しい！」

「お前は…。ほら、小遣いやるから、自分で欲しいものを買って来い」

「やった！じゃあ、行ってくるね！」

「オレたちは帰るから。桜も夕飯には帰って来いよ」
「分かってる！」

そう言つて、桜はどこかへ走り去つていった。

「あ、風華はもういいのか？帰るなんて言つちやつたけど」

「うん。もう粗方買ったから」

「そうか。じゃ、帰るか」

「うん」

昼になつて、いよいよ騒がしくなつてきた市場を出て、帰路に就く。風華は、まだ気にしてるみたいだったが、口に出さなかっただけ良しとしよう。

それにしても、オヤジ、私たちを姉妹つて言つてたな。

…ふふつ、姉妹かあ。

最近会つてないけど、あいつら元気にしてるのかな…。
また逢えるといいな…。

12（後書き）

自分も、こんな太っ腹な姉貴が欲しいです。

「あぁっ！早く帰らないと！」

「ん？なんでだ？」

「お昼過ぎまでに布団、取り込まないといけないんでしょ？」

「あぁ、そんなこと言ってたな」

「ちよっ、これ、持ってた！私、急いで取り込んでくるから！」

「あぁ。頼む」

「じゃあね！」

風華は、私に荷物を預けると、急いで帰っていった。

…まだもう少し大丈夫だって言ってた方が良かったかな。

「まぁ、いいか」

私はのんびり帰るとしよう。

部屋には、すでに布団が取り込まれており、チビたち三人が、明日香と一緒に昼寝をしていた。

「はぁ…はぁ…」

「そんなに焦らなくても良かったのに」

「そ…そういうことは先に言ってたよ…」

「まぁ、急ぐに越したことはないからな」

「結局何だったの…？」

「もうそろそろ分かる」

言うか言わないかというところで、空がだんだん暗くなってきた。

「え…？」

「窓、閉めておこうか」

つつかえ棒を取って閉めるとすぐに、雨粒が窓を叩いた。

「姉ちゃんすごいね！なんで分かったの？」

「さあな。オレも理由は分からない。でも、今日は雨が降るなあつて分かるんだ」

「へえ…。じゃあ、次はいつ降るの？」

「それは分からない。その日にならないとな」

「うーん…。便利そうで、ちょっと不便だね」

「でも、布団と洗濯物は濡らさずに済んだだろ？」

「そうだね。ありがと」

「どういたしまして」

「さて…雨に降られると、やることないなあ」

「こいつらと昼寝でもしたらどうだ？」

「そうだね…って、そういうえば、この子、誰なの？望に引っ張り回されてみたいだけだ」

「光だ」

「ふうん…光、か。白龍だね」

「ああ」

「この髪、姉ちゃんみたいに綺麗…」

「光の方が綺麗だろ」

「ううん。姉ちゃんのも綺麗だよ」

「そ、そうか？」

「うん」

光の、キラキラと輝く白髪…に近い銀髪を撫でる風華。
腰の辺りまであるだろうか。

響のように切り揃えることもなく、ずっと伸ばしてきたんだろうな。私は…切るのが面倒だから伸ばしっぱなしなんだけど…。

「桜、どうしてるかな」

「まあ、雨宿りでもしてるんじゃないか？」

「そうだといいんだけど…」

「ん？何か問題があるのか？」

「うん…。桜、雨なんて気にしないから、ずぶ濡れで帰ってくるこ
とがあるんだよね…」

「風呂の準備をさせておこうか？」

「そうだね」

一旦立ち上がり、部屋を出る。

「あ、私も行くよ」

「ああ」

そして、風呂場へと向かう。

「それにしても、このお城って複雑な形、してるよね」

「ああ。複雑だと、仮に城内まで攻め込まれても、すぐには奥まで
辿り着けないだろう？敵兵が迷ってる間に討ったり、王を逃がした
りするんだ。ほら、通路も狭いから、大勢攻めてきても少数対少数
に持ち込みやすいし」

「ふうん。いろいろ考えてあるんだね」

「この城もそうだが、城の周りに堀を掘るのも、戦略のうちのひと
つだ。堀を渡る手段が、たった一本の橋だけなら、その橋を上げて
しまえば攻め入られない。食料さえ充分にあれば、そのまま籠城し
てもいいだろう。それに、橋で防衛線を敷けば、この通路と同じく、
少数対少数に持ち込めるからな。あ、そうそう、畳にエダルの蔓を

織り込んで籠城戦に備えてる王もいるみたいだぞ。まあ、そういつた、戦に特化した住居の極限が『城』というわけだ」

「へえ。よく知ってるね」

「伊達に衛士長はやってないからな」

「あはは、そうだったね。忘れてたよ」

「衛士たちに隊長って呼ばれるまで、オレも忘れてることがよくあるからな」

「ええ、それはダメでしょ」

「そうか？」

「…まあ、いつか」

「そうだろ」

そして、二人して笑った。

…最近、ホントによく笑うようになったな。

後で、一人のときに考えてみると、私自身、すごくびっくりすることなんだけど、風華たちと一緒にいると、それが当たり前のように感じられる。

ううん。

きっと、当たり前でないとけないんだと思う。

人が、なぜ笑顔に惹かれるか。

それは、人が笑顔を求めているからに違いない。

求めているものを手に入れられたら嬉しい。

求めているものが手に入らないのは哀しい。

だから、笑う。

一緒に笑う。

私は、今まで笑えなかった分も含めて。

みんなが、求めているものを手に入れられるように。

みんなが、幸せになれるように。

…まず出迎えたのは水飛沫だった。

「もう！桜！ちゃんと拭きなさいって、いつも言ってるじゃない！」

「ええ…。面倒くさいじゃん…」

「風邪引くよ！」

「いいもん」

「また、苦いお薬飲まないといけなくなるよ？」

「うえ…それは嫌…」

「じゃあ、ちゃんと拭きなさい！」

「うう…分かったよ…」

桜は、少し早めに買い物を持ち上げて帰ってきたらしい。

私たちが風呂場に着いたとき、ちょうど一風呂浴びて出てきたところだったみたいだ。

身体を震わせて水を切っていたところに、私たちが入ってきたというわけ。

「着替えは？」

「衛士さんが用意してくれたよ」

洗濯物籠の横に置かれた服を指差す。

…誰が用意したのかは知らんが、これは衛士の服じゃないか。
まあいいけど…。

「ふふ、ボクも衛士さんに見える？」

「服だけならね」

「ええ…、酷い…」

「伝令班に入っただんだろ。桜も立派な衛士だ」

「えへへ、いろはねえ、ありがと。…それに比べて風華は」
「な、何よ」

「はあ……」

ため息をつき、首を横に振る。

「衛士さんに見えないから見えないって言っただけじゃない！」

「なんで見えないのさ！」

「そりゃ……ちっちゃいから……」

「ああっ！酷い！」

「桜が理由を聞くからでしょ！」

「そういつところは隠しておいてよ！」

「こんなところで嘘言っても仕方ないでしょ！」

「ほらほら、お前ら、喧嘩するな」

「だって……！」

「風華。衛士は、みんな、自分の力が発揮出来るところで働く。力を発揮するのに大きいも小さいもないだろ？それと、桜。小さいことを気に病むことはない。小さい分、心を大きく持てばいいんだ。他の人に負けなくらい、大きな心を持つ。背では負けても、心では負けない。それでいいんじゃないのか？」

「……………」

「……………」

「二人とも。やることがあるだろ？」

「……ごめんなさい」

「ううん……。私の方こそ、ごめんなさい」

「よし、この話はこれで終わりだ。部屋に戻ろうか」

「うんっ！」「うん」

喧嘩するほど仲がいい……か。

喧嘩をすればするほど仲がよくなる……だけじゃなくて、喧嘩が出来るほどの仲つてもあるんだろっな。

友達同士、家族同士。

絆が深ければ深いほど。

自分のことを、自分の考えを、もっと相手に知ってもらいたくて、喧嘩をする。

仲直りをする頃には、さらに絆は深まっている。

もちろん、喧嘩をせずに伝えられるのが一番だけど。

さっきの喧嘩が嘘のだったかのように楽しく笑い合う風華と桜を見て、それを痛感した。

13（後書き）

好きな人に自分の想いが伝わらなかったら、喧嘩してみてください。
最終手段ではありますが、これで伝わる人が多いです。

そして、喧嘩したあとは仲直り。
これがないと始まりませんよね。

風華と桜は、チビたちに加わって昼寝をしている。
…私は、そのまま部屋を後にした。

「ん？紅葉、どうした？」

「うわっ！いい、犬千代…いたのか…」

部屋を出てすぐのところに利家は立っていた。

「ああ。ちよつと散歩にな」

「そうか」

「それより、空、見なかったか？もう帰ったのかな…」

「朝見たきりだけど」

「そつか…頼みたいことがあったんだけど…」

「何だ？」

「いや、村長さんに手紙を届けてほしかったんだ。議会召集の返答があつてね。それについてちよつと相談があつて」

「伝令班に届けさせようか？」

「いいよいいよ。それに、みんな忙しいだろうし」

「犬千代が来てからは、だいぶ暇になった。オレだって、休日でもないのに、こんなにゆつくりしたのは始めてだ。…前は休日もなかったけどな」

「そうなのか？まあ、あんな王じゃね…」

「…ああ。それより、本当にいいのか？」

「いいよ。自分で考えろつてことだろうしね」

「そうか」

「ありがと、紅葉。じゃあ、政務に戻るとするよ…」
「頑張つてな」

「ああ」

ニコリと笑顔を見せて、利家は去っていった。

「…どうしたの、お母さん？」

「ひゃう！」

「……？」

思わず変な声を出してしまった…。

いつの間にか、眠い目を擦りながら、光がそこに立っていた。

「…お便所、どこ？」

「こっちだ。ついてこい」

「…うん」

いまだに心臓が早鐘を打っている…。
ホント、びっくりした…。

「うーん…」

「とと、危ない」

まだ寝ぼけているのか、フラフラとして危なっかしい。

「ほら、手、繋いで」

「…うん」

光の小さい手は、私の手より温かくて。

光からすると、私の手は冷たいんだろうか？

「…ううん。あったかいよ」

「ん？そうか」

「…うん」

そうこうしている間に廁に着いた。

「ほら」

戸を開けてやる。

…ボヤアとして、はまったりしないといいんだけど。

……。

そういえば、私はなんで部屋を出たんだっけ…。

何かあった気がするんだけど…。

えっと…。

忘れた。

まあ、忘れる程度のことだったんだな。

うん、そういうことにしておこう。

「…ただいま」

「お帰り。戻ろうか」

「…ふむ」

…半分寝かけてるな。

仕方ない…。

「ほら、おんぶしてやるから」

「……………」

もうほとんど無意識だったんだろうか。

返事をするこゝもなく背に乗ると、そのまま眠ってしまった。

「あつ。隊長、お疲れ様です。私が運びましょうか？」

「いや、大丈夫だ。もうすぐそこだし。ありがとな」

「いえつ。では、頑張ってください」

「ああ」

たまたま通りかかった恭二に声を掛けられた。

あれだけ周りに気を遣えるんだ。

戦闘班なんかより、医務班の方が良かったんじゃないだろうか。

…まあ、それは恭二の決めることだ。

私とやかく言うことは出来ないんだけど。

「光、着いたぞ」

光を布団の上に下ろしてやる。

明日香が少し目を開けたが、光だと分かれると、また眠りに落ちた。

「私はどうしようかな」

外は雨。

…それに、みんなの寝顔を見ていると、私も眠くなってきた。
ちよつと…寝るかな…。

生温かいものが顔をなぞる。

「うわっ！」

「あ、起きた」

「…ん？望？」

「ごはんだよ」

「あ、うん、そうか。ありがとう」

「じゃあ、明日香。行こっか」

明日香と共に広間へと走っていく。

…今のは、明日香が舐めたのか。

もつと良い起こし方があるだろうに…。

それにしても、もう夕飯か…。

ちよつと寝すぎたな…。

「行かないの？」

「行くよ。光も一緒に行こう」

「うん」

まだ部屋に残っていた光と一緒に広間へ向かう。

「わたしね、一所懸命飛んだんだけど、すぐに、望に追いつかれちゃったの」

「ん？ああ、昼の話か」

「うん」

「望は光よりお姉さんだからな。まあ、そのうち望でも追いつけなくなるよ」

「そうなの？」

「ああ。白龍は”光”。”光”より速いものはない」

「でも、わたし、望に追いつかれちゃったよ？」

「ふふっ、そうか。そうだったな。”光”。良い名前だ」

「???」

首を傾げる。

”光”の光…か。

これからが楽しみだな。

「あつ！隊長！お疲れ様です！」

「ああ。お疲れ様。お前も夕飯にするといい」
「はっ！」

広間に入ると、すでに戦は始まっていた。

「風華！また盗られた！」

「桜！大人気ないことしないの！お姉ちゃんでしょ！」

「望が先に盗ったのが悪いの！」

「おい、狼がお前の、食ってるぞ」

「こら！どっから来たんだ！」

「あ！衛士さん！それ、明日香です！」

「明日香？拾ってきたんですか？」

「はい。あ、それと、あんまり人の食べ物を食べないよう、見張っててくださいね」

「了解いたしました」

そんなやり取りを聞きながら、いつもの席に座ると、空気が変わった。

「ふふふ…今日こそ討ち取ってあげるからね…！」

「覚悟しててね」

「望むところだ。お前からこそ、その首を綺麗に洗って待ってるよ」

「あつ！あんまり暴れないでね！後片付けが大変なんだから！」

それは無理だと分かっているだろう？

戦は、常に他の誰かを犠牲にしないと成り立たない。

それがたまたま風華や調理班だったというわけだ…！

私がこの箸を握ったときが開戦のとき。

さあ、今日はどう来る…？

「いただきます」

光の声を合図に、箸を取る。

すると、間髪入れず、ご飯に手を出す望。

それを受け流し、同時に漬物へと迫っていた桜の箸へぶつける。

「あっ！」

「隙あり！」

一瞬怯んだその隙を突いて、桜のおかずを盗る。

「ああっ！いろはねえ がボクの、盗った！」

「昼、ほとんど桜にやっただろ。それのお返しをしてもらわないとな」

怒りに満ちた矛先が描く軌道は、あまりに真っ直ぐ過ぎるものだった。

それを受け止め、さらに痛手を負わせる。

「ほらほら。本陣がお留守だぞ」

「もう！」

望と共同戦線を仕掛けてみるが、桜が足手まといになってるのは明らかで。

どうしても噛み合わない攻撃を軽く捌いて、桜にさらなる追い討ちをかける。

もはやボロボロの桜。

これで勝負ありだっ！

「あっ……」

獲物が宙を舞う。

「ふふ、オレの勝ちだな」

「くう……！」

後は望だけ。

一人だけしかないなら、何のことはない。
適当にあしらってやる。

「まだまだ！」

「諦める。オレに勝とうなんざ、百年早いんだよ」
「うう」

一旦退いて態勢を整えた隙に、すかさず望の皿に手を伸ばしおかずを盗る。

「あっ！」

と、口を開けたところにそれを入れてやる。

「むう！」

予想外の行動に怯む。

そして、そのまま一閃、望の獲物も宙を舞った。

「二人とも、まだまだ詰めが甘いな」

「うう……」「今度は負けないんだからっ！」

「ふふ、吠えて……」

「いただきっ」

「あっ！」

……。

やられてしまった。

勝って兜の緒を締めよ、とはこのことだ。
響におかずを盗られてしまった。

「お母さんも、まだまだだね」

「くっ……」

「やった！ボクたちの勝ちだ！響、ありがとう！」

「えへへ。どういたしまして」

ホントに嬉しそう。

…今度は、響も考慮に入れておかないといけないな。
ふふふ…。

二度と同じ手は通用しないぞ…。

昼からの雨はやんで、心地良い風が入ってくる。

「お母さん、何してるの？」

「ん？外を見てるんだ」

「真っ暗でよく見えないよ」

「ジッとしてるんだ。そのうち目が慣れて、いろんなものが見えてくる」

「うん」

「ほら、ここに来な」

「うん！」

膝を叩くと、光は嬉しそうに飛びついてきた。
そして、外を見つめる。

「うーん…」

「根気良く待つんだ。すぐに慣れてくる」

「ん…」

ジーンと一所懸命に外を見る光の姿が可愛くて。

「あ」

「見えたか？」

「うん。なんか、ちょっと明るくなったみたい」

「向こうの山の方を見ても」

「……………」

「どうだ？」

「あ。あれ、お月様？」

「ああ。そのうちに良く見えてくるだろうよ。…でも、今日はもう遅い。寝ようか」

「ええ…」

「次の新月が過ぎれば、月が昇るのも早くなる。またそのときに、ゆっくり見ればいいさ」

「…うん。分かった」

「ふふ、良い子だ」

「えへへ」

光の頭をゆっくり撫でる。

「やっぱり、光は笑顔が一番だね」

「あ、お姉ちゃん！」

気を遣ってくれたのか、光の笑顔を伝えてくれる風華。

「さ、姉ちゃんも光も、もう寝る時間だよ」

「うん」「ああ」

「じゃ、行こ？」

風華の手に引かれて、広間をあとにする。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「…ねえ、お母さん」

「ん？どうした？」

「なんで、黙ってるの？」

「んゝ、なんでだろうな、風華？」

「ええっ！？私！？」

「お姉ちゃんは、なんで黙ってたの？」

「私は…別に喋ることもなかったからかな」

「ふうん」

「喋ることがなくても、三人、こうしていることで充分。光は、そう思わないか？」

「うーん…お喋りしてる方が、もっと、楽しいかな」

「ふふ、確かにそうだな」

言葉を交わさなくても、お互いに繋がっていることは分かる。

でも、言葉に表すことで、繋がりが目に見えるようになる。

この真っ暗な世界でも、それだけは見える。

確かな繋がりの糸だけは。

部屋に近付くにつれ、またバタバタと走り回るような音が聞こえてくる。

「もう！あの子たち、また何かやってるの！？」

「いいじゃないか。壊れるようなものも置いてないし」

「でも…！」

そう言つて、風華は走つていった。

「光は行かないのか？」

「うん。だって、お母さん、連れて行かないと」

「え？」

光は、私の手を握り直して、少し先行する。

「光…？」

「わたし、お母さんの、”光”になるよ。だって、わたし、光なんだから」

「光…」

光も、この病氣のことを知ってたのか？

光の足音に、迷いはなかった。

「着いたよ、お母さん」

「ああ、そうみたいだな」

「こらっ！待ちなさい！」

「わたし、もう疲れた…」

「明日香！」

「どうしたんだ」

「あ！姉ちゃん！まだ遊び足りないのか知らないけど、明日香が暴れて！」

「そうか」

「ねえ、捕まえるの、手伝ってよ！」

「構うから、余計に暴れるんだ。無視しておけばいい」

「でも！」

「でもない。追いかけると、遊んでもらってるのかと思うんだ」
「うう……」

風華は、もういいよ！と言わんばかりに足音を立てて、布団に潜り込む。

私も光に先導されて、布団へとたどり着く。

「さあ、望、響。もう寝ようか」

「うん」

「ん？響は？」

「あつ！響！そんなところで寝たら風邪引くでしょ！」

「うう……もう動けないよ……」

「そんなこと言って！ちゃんと布団で寝なさい！」

「むう……」

「ほら、響。こっちに来い。一緒に寝よう」

「うん……」

ゴソゴソと這い回るような音がして、響が私の布団に潜り込んでくる。

「あ……そういえば、光の布団、あるか？」

「うん。お昼寝のとき、光の分も出しておいたんだ」

「そうか」

「フカフカ」

「そうでしょ。お日さまの光をいっぱい吸ってるからね」
「ん」

パタパタと、何か飛ばたくような音が数回聞こえたが、すぐにやんだ。

眠ってしまったらしい。

「…みんな、寝付きが良いみたいだね」

「ああ。しっかり食べて、しっかり遊んでるからな」

「はあ。じゃあ、私も寝るかな。…ん？どうしたの、明日香？」
「クウン…」

「寂しいんだと。一緒に寝てやれ」

「そうかそうか。ほら、こっちに来な。…って、姉ちゃん、明日香の言ってることが分かったの？」

「え？なんでだ？」

「寂しいんだと…じゃあ、明日香が言ってることを代弁してるみたいじゃない。寂しいんだろ…とかでしょ、普通」

「聞き間違いなんじゃないのか？」

「絶対に違うね」

「自信满满だな…」

「うん。耳の良さには自信があるよ」

今が話すとき、か。

まあ、隠すようなことでもないしな。

「…そうだよ。オレには明日香の言葉が分かる。正確にいうと、狼の言葉、だけど」

「ふうん？なんで？」

「私は、昔、狼に育てられてた時期があつたんだ」

「え……？」

「戦で親を失つたらしい。ずっと赤ん坊の頃だから、全然覚えてないんだけどな。気付けば、私の親は狼だった。厳しいけど、優しくった」

「……………」

「ある日、縄張りの中に人間が入ってきた。母さんは、私がいることをなんとかして気付かせようとしてたみたいだ。そして、その人は私に気付いた。狼の群れの中にいる、人間の子供の存在にな。……いつの間にか母さんたちはいなくなつた。私は、母さんを必死に探した。必死に呼んだ。でも、もう姿を現すことはなかった。私とその人だけが、その場に残された」

「……それで？」

「私は、その人に連れて行かれた。今まで怖いと思つてた人間に連れて行かれるなんて、最初は嫌だった。でも、その腕に抱かれているうち、不思議と安心出来た。なんでだろう。母さんと同じ匂いがあったからかもしれない」

「その人つて、誰だったの？」

「……ここの、前の衛士長だよ。最初は、オレを狼として扱ってくれてたみたいだ。徐々に人間の生活に慣れさせて。そして、オレは衛士として教育された。ここで生きていくために」

「それで？前の衛士長さん、どうしたの？」

「母さんは死んだよ」

「あ……ごめん……」

「ううん。最期まで立派だったよ。自分の信念を貫いて、死んでいった……」

「……………」

「オレを生んでくれた母さん、ここまで育ててくれた二人の母さん。みんな、オレの母さんだ。オレの、大好きな母さん」

「……うん」

「なんで風華が泣いてるんだよ」

「ううん。姉ちゃん、幸せだったんだな…って思ってた」

「幸せだった、じゃない。幸せなんだ。今も。風華がいて、みんながいて。本当に、幸せ。それに、この子たちには、お母さんって慕われて。ああ、母親になるって、こんなかんじなのかな…って。母さん、こんな気持ちだったのかなって」

「じゃあ、私もお母さん、って呼んでもいい？」

「呼んでくれるのか？」

「ふふ、やめとくよ。姉ちゃんがお母さんなら、兄ちゃんはお父さんになっちゃうし」

「え？どういう意味だ？」

「あれ？姉ちゃんって、兄ちゃんのこと、好きじゃなかったの？」

「なっ！何をっ！」

「あれ…？違った？」

絶対ニヤニヤしてるよ！

もう知らない！

布団を頭から被ってしまっ

「あははははは。姉ちゃんって、兄ちゃんと同じで、ホントに分かりやすいね」

「……………」

「あ、怒っちゃった？」

「……………」

「ごめんね、姉ちゃん。でも、ホント…あははははは」

「何が可笑しいんだ！」

「い、いやあ、なんでもないからっ！あははははは」

「なんでもないことないでしょ！」

「くふふ…あははははは」

何が可笑しいのかは知らないけど、風華はずっと笑い続けてて。
もう！
風華なんて嫌い！

15 (後書き)

そういうことですね。

…何が？

ん？

なんだ…？

「うん…」

寝てる間に抱き締めてしまったらしい。

響はモゾモゾと動くと、また寝てしまった。

…もう朝か。

ちよっと早いみたいだけど、起きることにする。

「ふぁ…あふう…」

さて…服を着替えて…。

響が私の布団で寝ているから、私の横の布団がひとつ余る格好になる。

その余った布団に明日香が寝ていた。

そして、望、光ときて風華が寝ている。

明日香、風華のところで寝ていたはずなんだけどな…。

狭いのが嫌なのか？

…そんなことを考えてると、明日香が目を覚まし、起き上がって大きく伸びをし、私の足元までやってくる。

「ん？」

「……………」

『そうか。でも、調理班のやつらはまだ起きてないと思うぞ』

「……………」

『ああ。お休み』

そして、また布団に戻っていった。

…そういえば、明日香の親はどうしたんだろう。
拾ってきたってことは、一匹でいたってことだ。
はぐれたんだろうか？

それとも、何かの事故で死んでしまったのか…？

また明日香に聞いてみるか…。

最後に帯を締めて、部屋を出る。

さすがに誰も起きてないらしく、廊下は静まり返っていた。

「あつ。隊長。お疲れ様です」

夜勤組に声を掛けられる。

周りを気にしてか、少し小声だった。

「いや、今起きてきたところだ。それに、それはオレの台詞だ。お疲れ様。今日はもういいから、ゆっくり休んでくれ」

「はっ。あ…いえ…朝の洗濯が終わるまでは寝るわけにはいきませ
ん」

「ああ…そういえば、そんなのがあったな…」

「では」

「ああ。頑張れよ」

「はっ」

敬礼をすると、また見回りに戻る。

さて、厨房に向かうか。

やっぱり、誰もいなかった。

窓を開けて、朝の光を入れる。

えっと、これとこれがあるから…ウルクでも作るか。

小さめの鍋に適当に材料を入れて、火に掛ける。

どうせ私の分しかないから、多少不味くてもいいよね。

煮えるまでの間、たまにかき混ぜながら、ジツと待つ。

……。

暇だなあ…。

そういえば、利家はどうしてるんだろ…。

って、まだ寝てるよな…。

桜はやっぱり地下牢で寝てるのかな。

大好きな場所って言ってたけど、女の子の部屋としては不向きだと思っ。

いろいろ持ち込んでたみたいだけど…。

……。

朝の洗濯か…。

面倒くさいな…。

雨が降ったら休み、とかにならないのかな…。

今日はどっちみち晴れてるけど。

夜の間にやんだのかな。

ん？

もうそろそろいいかな。

鍋を火から下ろす。

…まあ、皿に移すこともないか。

さてと。

箸は…これこれ。

じゃあ、いただきます。

……。

うん、適当にしては美味しく出来たな。

む…。

これは生煮えだ…。

食べ終わるかどうか、というところで、調理班が起きてきたようだ。

「おはよう」

「おふあようございますう…って！隊長！今すぐ準備します！」

「いいよ。もう食べたから」

「も、申し訳ないです！隊長に作らせたりなんかして！」

「オレが勝手に早く起きただけだ。そんなことを気にするくらいなら、みんなに美味しいご飯を作ってやれ」

「は、はい！」

「じゃあな」

軽く手を振って、厨房を後にする。

早起きは三文の徳、なんて言うけど、私の場合、早起きするとみんなに心配だとか気苦労を掛けるみたいだ。
難しいものだな。

今度からは二度寝だな、うん。

桜の部屋に行ってみると、桜は一所懸命に何かをしていた。

…囚人が労役をさせられてるようで、面白くない光景だけど。

「桜、何してるんだ？」

「わひゃあ！」

「何を驚いてるんだ」

「もう！いきなり声掛けないでよ！」

「じゃあ、どうすればいいんだ。肩を叩いてもびつくりしてただろ」

「むう…。前に回るとか、戸を叩くとか…いろいろあるじゃない！」

「じゃあ、今度からはそうするよ。で、何してたんだ？」

「え？あ…いや、な、何もしてないよ！」

「ふうん？」

必死に背の裏に隠そうとしているが、硯が丸見えだ。
書き物でもしてたのか…？

「あ…うう…て、手紙を書いていたの！」

「手紙？桜、お前、字が書けるのか？」

「うん…まだ平仮名だけだけど…」

「ほう。どこで勉強したんだ？」

「風華に教えてもらったの」

「ああ、風華な。で、誰に書いてたんだ？」

すると、なぜか顔を真っ赤にさせる。

恋人宛にでも書いてたのか？

「だ、誰だっついていいでしょ！」

「まあ、それもそうだな」

「…聞かないの？」

「聞いてほしいのか？」

「そ、そういうわけじゃ…」

「じゃあ、言わなくてもいいだろ」

「でも…気にならないの…？」

「気になるけど、桜が言いたくないなら言わなくてもいい」

「う…あう…」

「じゃあな。朝ごはん、ちゃんと食べるんだぞ」

「あつ、ま、待って！」

「ん？どうした。オレはもう食べたから、昼まで厨房に行く予定はないけど」

「ち、違うよ！こ、これ、隼に書いてたの！」

「ほう。隼か。でも、なんで教えてくれたんだ？」

目を逸らし、モジモジしながら。

「い、いろはねえ　には言っとかないと…。ボ、ボクのお姉ちゃんだもん…」

「ふふ、そうか。ありがとう」

横に座り、優しく頭を撫でる。

桜は、こちらに向かってニッコリとし、ゴロゴロと喉を鳴らす。

「隼のこと、好きなのか？」

「そ、そんなんじゃないよ！で、でも、ボクがいなくて寂しがってるかな、なんて…」

「そうか。隼も喜ぶだろう。…ところで、隼は字が読めるのか？」

「あ」

「…そんなことだろうと思ったよ。一回、村に帰ったらどうなんだ？」

「ダ、ダメだよ…」

桜のことだ。

隼の前では上手く自分の本心を出せないんだろう。そうなると、さて…どうしたものか…。

「あ、そうだ。絵で伝えたらどうだ？」

「絵？」

「絵なら誰にでも分かるだろう？」

「そ、そうかもしれない」

と、早速机に向かう桜。

…この机、どこから持ってきたんだろ。

衛士の部屋に置いてあるのと同じ書き物机だけ…。

まあ、使っていないやつらがほとんどだから、持っていっても大して問題にはならないんだけど…。

それにしても、この箆笥とかはどうやって入れたんだろうか。

戸の大きさより、幅、あるよな。

中で組み立てたのかな？

布団があるところを見ると、ここは寝間みただけど、他の部屋も最大限利用してるみたいだ。

「出来た！見て見て！」

「どれどれ」

ふむ…。

なかなか上手いな。

「いいんじゃないか？」

「これ、なんて言ってるように見える？」

「男の子が寂しがってないか、女の子が心配してるってところだな」

「そ、そう見える？」

「ああ」

「ふう〜」

良かった…と言わんばかりにため息をつく。

「じゃあ、これ、伝令班の誰かに届けさせようか？」

「うん…お願い出来る…？」

「ああ。一番速いやつに任せるとしようか」

「うん、ありがと」

「お礼はそいつに言ってくれ」

「うん。でも、いろはねえ にも。ありがと」

「どういたしまして」

頭を撫でてやると、またニツコリして。

…私に出来る範囲のことは、なんでもやってやりたい。
たぶん、衛士のみんなも、そう思ってくれてるだろう。
なにしろ、可愛い妹のため、だもんな。

16（後書き）

絵手紙、いいと思いますよ。
絵は文字よりも強し。
あれ？違いましたっけ？

「じゃあ、頼んだぞ」

「はっ！」

「あ。あと、派遣班の様子も見てきてくれないか？」

「はっ！了解しました！」

「頼むぞ」

「はっ！では、行って参ります！」

一度大きく羽ばたいたと思うと、もう姿が見えなくなった。
うん、やっぱり、あいつが一番速いな。
…今のところ。

「あ、おはよ、お母さん」

「おはよう。早起きだな、光は」

「うん」

「朝ごはんは食べたのか？」

「ううん」

「厨房の場所は分かるか？」

「うん」

「そうか。じゃあ、しっかり食べてこい」

「お母さんは？」

「オレはもう食べたから」

「分かった」

そう言つて、トテトテと走っていく。

…そっちは逆方向なんだけどな。

「おい、光！」

「……？どうしたの？」
「こつちだ。ついてこい」
「うん」

光の手を繋ぐと、私の方を見てニコリとする。

「えへへ」
「ちゃんと覚えとくんだぞ」
「うん！」
「それと、迷ったら誰かに言うんだ。案内してくれないやつなんていないから」
「分かった」

しばらく歩いて、厨房に出る。

「こいつに朝ごはん、作ってやってくれ」
「お願いしまゝす」
「了解」
「じゃあな、光」
「え？行つちやうの？」
「いてほしいか？」
「うん」
「じゃあ、いようか」
「うん！」

光は、楽しそうに足をパタパタさせる。

「どうした？」
「えへへ」
「ん？」

「なんでもないよ」
「ふふ、そうか」

何かは分からないけど、光が嬉しそうにしてるのを見ると、私も嬉しくなってきた。
本当に、可愛いな。

「あ。姉ちゃん。ここにいたんだ」
「おはよう」「おはよう、お姉ちゃん」
「おはよ」
「あ、風華さんの分も作りますね」
「お願いしまゝす」
「えへへ」
「どうしたの？嬉しそうだね」
「なんでもないよ」
「そう。でも、ホント、嬉しそうだね」
「うん！」

光の嬉しさは、風華にも伝染したようだ。
そして、あいつにも。

「ふふ、出来ましたよ。さあ、どうぞ」
「ありがとう」「いただきまゝす」
「美味しいか？」
「うん、美味しいよ」「うん！」
「ありがとうございます！」
「良かったな」
「はいっ！」

光のお陰で、朝ごはんは終始和やかな雰囲気だった。

二人の朝ごはんも終わり、いよいよ例の時間が来た。

「こら！遊ばないの！」

「ちべたい〜…」

「なんで望が洗濯されてるのよ！」

「だって…」

「ほら、着替えて。もう…」

「ひゃう！だ、誰！？水掛けたの！」

「あははっ、桜お姉ちゃん、面白い〜」

「このっ！喰らえ！」

二週に一回でも嫌だった、この退屈な時間が、これだけ楽しくなるものなんだろうかと思った。
不思議なものだ。

「紅葉、手が止まってるぞ」

「ああ」

「ふう… やっぱり疲れるけど、綺麗になるのは気持ち良いな」

「そうだな」

「ほら、響たちの方ばかり向いてないで…」

「そりゃ！」

「冷たっ！誰だ！」

「へへ、油断してるのが悪いんだよ！」

「待てこら！桜！」

そろそろ私のところにも来る頃だな…。

「えいっ！」

「残念だったな！」

「やゝ…冷たい…」

「まだまだだな」

「むう…」

響を返り討ちにしてやる。

…そして、もうひとつの気配。

「それっ！」

「甘い！」

「わっ！冷たい…」

「ふふ、どうした？」

「うう…」

桜との時間差攻撃か。

なかなかのもののだが、詰めが甘い。

…そういえば、利家はどうしたんだ？

さっき、桜を追いかけてたよな…？

「やつ！」

「お見通しだ！」

「あう…」

「ああ！姉ちゃん！望、さっき着替えたばかりなのに！」

「オレに挑んでくるやつが悪い。それに、すぐに乾くだろ」

「もう！」

「たあ！」

「ひゃっ！こ、こら！光！」

「あははっ、やった！」

「作戦成功だね！」

どうやら、最初から狙いは風華だったらしい。

陽動をかけてからの奇襲か。

桜あたりが作戦を立てたのかな？

なかなか筋が良いな。

結局のところ、最後までずぶ濡れにならなかったのは、私と、戦闘班の中のごく少数と、光だけだった。

…光は、誰にも狙われなかったというのが正しいけど。

「はあ、やっと終わったよ」

「桜はずっと遊んでたじゃない」

「そんなことないよ。みんなで作戦立てたりしてたもん」

「それを遊んでるって言うの」

「あれ？チビたちは？」

「もう遊びに行ったよ」

「そうか」

「姉ちゃんはどうするの？」

「そうだな…」

「買い物！」

「昨日行っただけじゃない」

「うう…」

「買い物もいいんだけどな。まあ、その辺を見回っとくよ」

「ボクも行く！」

「好きにすればいい」

「じゃあ、私は医療室にいるから」

「ああ。分かった」

そして、風華と別れて城の外へ向かう。

「あ、買い物行くの？」

「残念だが、外周の見回りに行くだけだ」

「なあんだ……」

「買い物に行きたいなら買い物にいけない」

「いろはねえ　が一緒じゃないとヤ」

「自分の小遣いを使わないといけないからか？」

「それもあるけど、一人で行くのはやっぱりつまんない」

「ふふ、そうか」

昨日、割と早く帰ってきてたのも、そういう理由からなのかな。

「はあ……」

「ん？手紙が気になるのか？」

「そ、そんなんじゃないよ……」

「じゃあ、どうしたんだ？ため息なんかついて」

「うーん……なんだろう……」

「ため息をつくと、幸せが逃げるんだぞ」

「ええ！？そうなの！？も、もうため息つかない！」

「ふふ、まあ、頑張ることだな」

グツと口を押さえて、息も止めてるみたいだ。

…何もそこまでしなくてもいいようなものだけだ。

「くっ……くっ……」

「………」

「うくっ……」

「………」

「くっ……」

「………」

「はああああ……」

「今、大量に幸せが逃げていったな」

「ち、違うもん！今のはため息じゃないもん！」

「そうか。じゃあ、何だったんだ？」

「あれだよ！えっと…し、深呼吸だよ！」

「えらく長く溜めてたな」

「あれがボクのやり方なの！」

ふふ、意地になってる。

それに、深呼吸は息を止めるものではないけどな。

「ふう〜…」

「あ、いろはねえ、ため息ついた」

「ああ。幸せのため息だ」

「幸せのため息？」

「幸せなときにつくため息だ。幸せは幸せを呼ぶ。幸せのため息は、いくらついても幸せが減ることはない」

「じゃあ、ボクも、今度から幸せのため息だけつく！」

「ふふ、そうするといい」

幸せのため息。

うん。

そうだな。

幸せのため息だ。

17 (後書き)

そうですね。

幸せのため息です。

「ん」

「退屈なら帰ってもいいんだぞ」

「退屈じゃないよ」

「ならいいんだけど」

「でも、すつごく暇」

「暇と退屈は違うものなのか？」

「うん」

「どう違うんだ？」

「暇は、することがなくてつまんないっていう意味。退屈は、つまなくて面白くないっていう意味」

「ふうん」

「ねえ、ちゃんと分かったの？」

「いや、全然」

「ダメダメだね、いろはねえ　は」

「そうかもな」

つまりは、何もすることがない、だから面白くない、というのが暇。することがある、あるいは、何かをやっても、それが全く面白くない、というのが退屈。つてことなんだろう。

「暇だね」

「じゃあ、伝令班の仕事でもしてみるか？」

「うーん…そうだね」

「よし。ここに重要文書がある。これを、市場の革屋に届けてほしい」

「何を書いてあるの？」

「それは機密事項だ。ちなみに、この紐、特殊な結び方で結んである。開けたら分かるし、結び方を知らなかったら元にも戻せないぞ？」

「う…」

「いかに迅速に、いかに正確に。それが、伝令班の心得だ。ほら、行つてこい」

「分かった…」

中身を見れなくて残念…といったところだが、やることはしっかりとやるのが桜だ。

文書を入れた箱を渡すと、伝令らしく素早く駆けていった。

うん、伝令の素質もあるみたいだな。

私はもつと別のところが気になるんだけど。

…それより、革屋の場所は分かるんだろうか。

まあ、分からなくても、道を聞くなりなんなりするよな…。

ん？

帰ってきたみたいだ。

「お帰り」

「ただいま戻りました！」

「で、どうだった？」

「はっ！これが隼殿からの返信です！」

「うん、ありがと」

「いえっ！あと、派遣班ですが、隣国からの侵略の心配は今のところなさそう、とのことですよ！デガナの収穫も順調で、毎日やり甲斐を感じている、との報告もあります！」

「デガナ…。まったく…どこのどいつなんだ…。ちゃんと訓練もやってるんだろうな…」

「はっ！その辺は大丈夫とのことです！」

私がぼやくことを見越して答えを用意する、この周到さは伊作だろうな…。

まあ、相変わらずみんな楽しそうで良かった。

「うん、分かった。ご苦労様」

「ありがとうございます！」

「あと、もっと肩の力を抜け。疲れるだろ？」

「はっ！あ…いえっ！そんなことはありません！それに、隊長の前にダラけた姿を晒すわけにもいきませんので！」

「そうか…」

「あ、いろはねえ。こんなところにいたんだ」

「桜か。革屋の場所は分かったか？」

「うん。大きな看板が掛かってたからね」

「…ほら、これくらいゆったりしてみたらどうなんだ？」

「……？」

「いえっ！そういうわけには参りません！」

「そうか…残念だな…」

「申し訳ないです！」

「謝ることじゃないよ。…とにかく、ご苦労様。ゆっくり休んでくれ」

「はっ！では、失礼いたします！」

「ああ」

そして、また大きく羽ばたいて、城の方へ帰っていった。

あの堅苦しい雰囲気当てられて、肩が凝るのは私の方なんだけだな。

まあ、出来ないって言うなら仕方ないけど。

「あ、そうだ。これ、貰ったよ」
「ん？そうか。ご苦労様」

桜は、綺麗な模様が織り込まれた綺麗な小袋を差し出す。

「これ、何なの？」

「開けてみな」

「いいの？」

「ああ」

「えっと…」

そつと袋を開ける。

うん、中は見なかったようだな。

「わぁ…。これ…」

「桜に、だ。ほら、着けてみな」

「うん」

中身を取り出して、早速身につける。

「どう？」

「似合ってると思う」

「思うだけ？」

「似合ってるぞ」

「えへへ、そうかな」

「ああ」

この銀の腕輪のお返し。

特注の首輪は、桜にとっても似合っていて。
鈴がチリンと心地良い音色を響かせる。

「ありがと、いろはねえ」

「どういたしまして」

「ふふっ、ボクの首輪」

「あ、そうだ。隼から、返事が届いたぞ」

「えっ！もう！？」

「ああ。読んでみな」

「うんっ！」

半ば奪うように手紙を受け取ると、バツと勢いよく開いた。
鈴がチリンチリンと激しく揺れるくらいに。

「……………」

「……………」

…桜のに比べると、だいぶ拙い絵だな。
でも、言いたいことは伝わってきた。

「隼……」

「良かったな」

「うん…って！いろはねえ！見たの！？」

「そんなに大きく、見てくださいと言わんばかりに広げてたら、そりゃ見るだろ」

「にゃあ〜！」

顔を真っ赤にさせて、その場にうずくまる。
フルフルと頭を振っているが、もう後の祭りだ。

「うう〜……」

「ふふふっ」

「笑い事じゃないよ……」

「でも、ちゃんと想いは伝わった」

「うん……そうだね……」

「また、たまにでも手紙を書いてやるんだな」

「うん」

書かれていたのは、女の子を想う男の子の絵。

二人とも、手紙を持って、幸せそうに笑っていて。

……どんなに遠くても、想いが通じる。

ホントに、手紙ってというのは、不思議なものだな。

18（後書き）

不思議なものです。

外周を二周りほどすると、ちょうど昼ごはんの時間になった。
桜と一緒に厨房へと向かう。

「あゝ…お腹空いたなあ…」

「口に出すから、余計そう感じるんだ」

「だって…お腹空いたんだもん…」

「ほら、もつとしっかり歩いて。いつまで経っても厨房に着かないぞ」

「いろはねえ…昼ごはん、ここまで運んできてよ…」
「断る」

「うう…ケチんぼ…」

「じゃあ、桜はオレがここでへばったら持ってきてくれるんだな？」

「う…それは…」

「桜もケチんぼだな」

「なし！さっきのなし！」

「ふふふっ」

そんなことを言ってる間に、厨房に着く。

「あ、お母さん、桜お姉ちゃん」

「ん？光だけか？」

「うん。望と響は、市場に、行ったよ」

「ええっ！ボクも行きたくった！」

「行ったじゃないか」

「仕事で、じゃない！」

「で？昼ごはんも向こうで食べてくるって言ってたのか？」

「ううん。お姉ちゃんに、お昼までには帰ってきなさい、って言わ

れてた」

「もう昼だけ…」

「食べてたら、戻ってくるんじゃないですか？…はい、光ちゃんの方、出来たよ」

「いただきま〜す」

「はい、どうぞ」

「まあ、そうかもしれないな。じゃあ、オレたちにも」

「了解しました」

「早くね〜」

「ふふ、分かってますよ」

早速調理に取り掛かる。

「桜さん、その首輪、どうしたんですか？朝はしてませんでしたよね？」

「うん！姉ちゃんに貰ったんだ！」

「そうですか、隊長が。へえ〜」

「…なんだ」

「いや、珍しいなあと思って」

「何が」

「誰かに贈り物をするなんて、滅多にしませんからねえ」

「そうなの？」

「そんなことない」

「みんなに酒を振舞う…なんてことはあっても、特定の一人に特別なものを贈る…なんて、私はまだ一回しか見たことないですね」

「あつ！」「誰に贈ったの？」

「えつとですね〜…」

「言うなよ！」

「ふふ、分かってますよ。というわけで、内緒ですよ、桜さん」

「ええ〜っ！気になる〜！」

「わたし、分かったよ」

「え？誰？誰なの？」

「うんとね、お母さんの、お母さん」

「いろはねえ　のお母さん？ええ、どうかな」

……。

勘というのは恐ろしいものだ。

桜は信用してないみたいだから良いけど。

「ふふ、それはもう置いておきましょう。隊長も大変ですし。さあ、出来ましたよ」

「やった！」

「おかわり、ありますからね。光ちゃんも遠慮せずに」

「うん」

「じゃ、いただきます！」「いただきます」

「どうぞ」

今日の昼ごはんは、ご飯に味噌汁、あとはエタカの鉄板焼きとホウレン草のお浸しだった。

「ん！美味しいね！」

「ああ、美味い」

「ありがとうございます」

「おかわり、ちょうだい」

「はいはい。ご飯ですか？味噌汁ですか？」

「ご飯」

「はい、ただいま」

「ボクも！」

「ちゃんと、よく噛んで食べてるのか？」

「食べてるよ」

ホントなのかな…。

見てなかったから分からないけど、あの短い間に、どうやって茶碗いっぱい盛られたご飯を食べたんだ？

…やっぱり、ほとんど飲み込んでるとしか思えない。

「はい、光ちゃん。どうぞ」

「ありがと」

「ボクも」

「桜さん、味噌汁でご飯を流し込んでじゃダメですよ。夕飯以外は、急がなくても簡単には無くなりませんから」

「やっぱり、ちゃんと噛んでないんじゃないか」

「うう…だって…」

「早食いの癖は直した方がいいですね。はい、どうぞ」

「うん、ありがと」

「隊長はどうします？」

「ああ、じゃあ、貰おうか」

「はい」

そして、光はモクモクとご飯三杯を、桜はガツガツとご飯五杯を平らげた。

私は…やめておこう。

「はあ、お腹いっぱい」

「うん…」

「ん？光、眠いか？」

「うん…」

「じゃあ、部屋に戻ろうか。桜はどうする？」

「うーん…ボクも部屋に戻るよ」

「そうか」

「じゃあね。ご馳走様でした」

「ご馳走様」「うにゅ……」

「お粗末様でした」

光を背負い、厨房を出る。

桜とは反対方向なので、ここで別れる。

「じゃ、また後でね」

「ああ」

「これ、ありがと」

チリン、と鈴を鳴らして、走っていった。

「あ！お母さん！」

「ただいま」

「お帰り。昼ごはんか？」

「うん！あ、光、どうしたの？」

「ごはん食べたら眠くなったみたいだ」

「ふうん」

「お昼ごはん」

「あ、うん！じゃあ、望たちもお昼ごはん食べたら、部屋に行くね」

「ああ。でも、ゆっくり食べるんだぞ」

「分かってる！」「うん」

そして、二人は厨房の中へと入っていった。

…さて、戻るか。

ん？

もう届いたのか。

相変わらず良い仕事をしてくれる。

光は…また後で良いか。

ぐっすりと眠っている光を、ゆっくりと布団に下ろす。

「うん…」

つと、起こしたか？

…大丈夫みたいだな。

ふふ、可愛い寝顔だ。

あ、そうだ。

忘れないうちに…。

えつと…これかな…。

うん、これだ。

白地に銀の龍の刺繍がされた小袋を、枕元に置く。

「あ、姉ちゃん。帰ってたんだ。お昼ごはん食べたの？」

「ああ。風華は？」

「食べたよ、私も。…光、寝ちゃったの？」

「うん。お腹いっぱい、ごはんを食べてたからな」

「ふふ、可愛い」

「あ、そうだ。風華。これ」

風華に、小袋のひとつを渡す。

「え？何これ」

「開けてみて」

「うん…」

袋の中に入ってたのは、首飾り。

「これ…」

「風華にだ。昨日、桜にこれを貰って、思いついたんだけど」

銀の腕輪を見せる。

「もしかして、これ、水晶の勾玉…？」

「ああ。どうだ？」

「うん、ありがと。すごく綺麗…」

「そうだな」

「でも…これ、すっごく高かったんじゃないの…？」

「…風華。お前の悪い癖だ。すぐに値段を気にする。金の話に持つていく。値段なんてどうでもいいだろ？オレが風華に贈りたいから贈る。それだけのことじゃないか」

「あ…ごめん…」

「謝るところじゃないだろ？」

「ふふ、そうだね。…ありがと、姉ちゃん」

「どういたしまして。ほら、着けてみて」

「うん」

風華は髪が長いからな。

後ろで留められるようにしてもらって正解だった。

「どう？」

「うん。似合ってる」

「えへへ、ありがと、姉ちゃん」

「うん」

昨日のような、何か思うところがあるような笑顔は、そこにはなかった。

ただ純粹に、贈り物を喜んでくれている、そんな笑顔。
うん、やっぱり、こっちの方がいいな。
そして、思わず

「わわっ！何！？」

「ふふっ、なんでもないよ！」

風華を抱き締めてしまった。

19（後書き）

革屋に依頼を出したのは、この日の朝。

桜の手紙と一緒に持っていったもらった、ということになっています。

水晶の勾玉ということは、革屋と言いながら宝石の加工もやってるんですね。

「わあ、何これ」

「お母さん、ありがとう」

「どういたしまして」

望と響が厨房から戻ってきたので、それぞれに小袋を渡す。
望には首輪、響には足輪。

二人とも、よく似合っていた。

…それにしても、会ったこともない子の装飾具を、こんなに似合うように作れるものなんだろうか。
大きさもちょうど良いかんじだし。

「えへへ、首輪だ」

「似合ってるよ、望」

「わたしは？わたしは？」

「響も似合ってる」

「うん、ありがとう」

喜んでくれて良かった。

あとは…

「私が渡してきてあげよっか？」

「な、何のことだ？」

「まあ、自分で渡せるっていうなら、それでもいいけど」

「何を渡すんだ？」

「はわっ！に、兄ちゃん！もう…びっくりするじゃない…」

「紅葉、これ、伝令、頼めるか？」

「あ…うん…」

風華ほどではなかったけど、私も相当びっくりしてしまった…。と、風華が肘でつついてくる。

…分かってるよ。

「い、犬千代…。これ…」

「ん？何？」

「あ、開けてみて…」

「……？うん」

「……………」

「…これは？」

「オ、オレから…なんだけど…」

「そうか。ありがとう。…つけてみてもいいか？」

「…うん」

利家のは、風華と同じ、首飾り。

ただ、細工が少し違っていて、こちらは剣を模したものになっている。

「わあ、格好良いね！」

「そうだな。ありがとう、紅葉」

「う、うん…」

「あ。急ぎの仕事があったんだ…。ごめん、紅葉。また後でな。これ、ありがとう」

「ど、どういたしまして…」

「じゃあな」

軽く手を振って、向こうへ走っていつてしまった。

「ちゃんと渡せたね」

「うん…」

「じゃあ、私は兄ちゃんをからかいに行くかな？」

「か、からかう…?」

「ふふ、じゃあね」

「あ、待つて!どういう意味なの!？」

それには答えず、ニコリとして、走っていった。

…どういう意味だったんだろ。

すごく気になる…。

「うむ…」

気が付くと、望と響も、光の横で寝ていた。

…私はどうするかな。

うーん…桜の部屋に行こうか…。

っと、その前に伝令だ…。

四つの部屋を順に覗いていくと、右奥の部屋に桜はいた。

「…ん？」

「あ、起こしたか？」

「ううん…ちよつと目が覚めた…」

「入っていいか？」

「良くないわけじゃない…」

「そうか」

扉を開けて中に入る。

桜は布団にくるまって寝転がっていた。

「首輪は外してるのか？」

「うん…壊しちゃいけないもん…」

「そうか」

「せっかく、いろはねえ に貰ったんだから大切にしないと…」

「ありがとう」

「えへへ…なんで いろはねえ がお礼を言うのさ…」

「オレが贈ったものを大切に想ってくれてる。だから、ありがとう」

「うん…」

頭をゆっくり撫でてやると、心地良さそうな表情を浮かべて、また眠りに落ちていった。

…チビたちに桜。

そろそろ私も眠たくなってきた…。

ちよつと寝るかな…。

目が覚めると、布団が掛けられていて、桜はいなかった。
今何時くらいなんだろう…。

とりあえず、布団を畳んで部屋の扉を開ける。

「あ、いろはねえ、起きたんだ」

「ん？」

隣の部屋から桜の声がした。

「何してるんだ？」

「お裁縫だよ」

「ほう…どれどれ」

「どう？」

桜に渡されたのは、小さな袋。

首輪が入っていた袋だ。

桜が首を傾げると、チリン、と鳴った。

袋の下の方には桜色の糸で、綺麗に「さく」という字と、「ら」の途中と思われる字が刺繍されていた。

「上手いな。こういうのは得意なのか？」

「うん！あ、いろはねえ　にも、何か作ってあげよっか？」

「ああ、頼むよ」

「何がいい？あれかなあ、髪留めとか！」

「そうだな…でも、髪はあまり気にしないかな…」

「ええ、そんなに長いのに、勿体無いなあ…」

「桜は伸ばさないのか？」

「うーん…一回、伸ばしてたときもあるんだけど、すっごく邪魔になったからやめちゃった」

「自分で切るのか？」

「ううん。風華が切ってくれるんだ。としにい　の方が上手いんだけどね」

「ふうん」

「でも、そうになると、何がいいかな…」

そういえば、私は、特別に何かを欲しいと思ったことがないかもしれない。

母さんは、帯止めとか、簪とか、とにかく可愛いものには目がなかった。

夜勤組だったり外回りのときなんかは、それを嬉しそうにつけていた。

でも、なんでだろう。

私は母さんの身につけるものを可愛いとか格好良いとか、そんなことを思いこそすれ、自分も欲しいと思ったことはなかった。

…母さんは、そういったことに興味を持ってほしかったみたいだけ
ど。

狼としての生活が長かったからかな。

とにかく、装飾具や、贅沢品と呼ばれたりするものについては、だ
いぶ疎かった。

「何考えてるの？」

「ん？ちよつとな」

「……？」

「やっぱりいいよ。その気持ちだけで充分だ」

「ダメだよ！ボクが、いろはねえ のために、何か作ってあげたい
の！ねえ、何が良い？たいがいなんでも作れるからさ」

「うん、ありがと。でも、ホントに……」

「……………」

桜が一瞬、泣きそうな顔をする。

「ボクからの贈り物は受け取ってくれないの……？」

「いや……そういうわけじゃ……」

「でも……でも……」

そして、ついに泣き出してしまった。

「いろはねえ……うっ……うっ……」

「桜……泣くなって……」

「だって……うう……」

「桜……」

考えるんだ。

私が今、欲しいものは？

なんだ。

考える…。

……。

「あ、そうだ」

「……？」

「これだよ」

懷から箸を取り出す。

…桜に一番最初に貰った朱塗りの箸。

毎食後に、綺麗に洗ってはいるが、清潔しておくべきものだ。

懷に直接入れるのは気が引けるので、今は適当な布にくるんでいるんだけど…。

「これを入れる袋を作ってくれないか？」

「これ…ボクがあげた…」

「ああ。大切に使ってるよ」

「これを…入れる袋がいいの…？」

「ああ。作ってくれるか？」

すると、袖で涙を拭いて、ニッコリとする。

「うん！頑張って作るね！」

「ああ。頼んだぞ」

「うん！」

そして、桜をギュッと抱き締め、頭をガシガシ撫でる。

「えへへ、痛いよ」

やっぱり、笑顔が一番！だな。

20（後書き）

桜は嘘泣きが出来るほど器用ではありません。
泣いてるときは、本気で泣いているんですね。

部屋に戻ると、誰もいなかった。

またどこかに遊びにいったのかな…。

布団も散らかして…。

ここで遊んでたのかな？

とりあえず、綺麗に畳んでおく。

つと、これは…。

光、気付かなかったのかな…。

ん？

中身は入ってない。

ということは、ちゃんと気付いてたってことか。

うん、それならいい。

光が身に着けているところを見られなかったのは残念だけど。

まあ、夕飯のときの楽しみに取っておこう。

「さて…」

どうしようかな…。

本当にやることが少なくなった。

今までの忙しさが嘘のよう。

五日に一回の休日なんて取らなくても充分なくらい。

…うん、医療室に行ってみようか。

風華もいるだろうし。

部屋を出て、医療室に向かう。

「あ、お母さんだ〜」

と、すぐにチビたちと出会う。

「どこ行つてたの？」

「お外？」

「ちよつと桜の部屋に行つてたんだ」

「ふうん」

「あ、そうだ。光、どうだ？それ」

「うん。すつごく、良いよ！ありがとう、お母さん」

「ふふ、どういたしまして」

白い肌に黒い足輪が映えていて綺麗だった。

響のは白で、光のは黒。

色まで注文したわけじゃないのに、これはすごく巧妙だと思った。

「じゃあね！」

「ああ。しつかり遊んで来いよ」

「うん！」「じゃあね」

そしてまた、駆けていった。

ん？

入る部屋を間違えたかな？

「あう……」

「……………」

うん、医療室だ。

でも、風華はいなくて、代わりに風華をちっちゃくして金髪にしたような子がいた。

「うう…」

「呻いてるだけでは分かん」

「えっと…」

「名前は？」

「く…葛葉…」

「どこから入った？」

「お、お母さん…どこに行ったの…？」

「お母さん？お母さんと一緒に来たのか？」

「ううん…葛葉…葛、葉は…お、お母さん…お母さんに…会いに…」

「おい、泣くなって」

「うう…うええ…」

「困ったな…」

葛葉の横に座り、ゆっくりとなだめるように頭を撫でる。

ていうか、ここ何日かでチビっ子がどんどん増えてるのは気のせい
か？

城の門はいつも開いてるとは言え、許可なしでは入られないはずだ
けど…。

…まあいいか。

それだけ平和になったということだ。

門番には厳重注意しないといけないけど。

「……………」

「あ…」

泣き疲れたらしい。

私の服をギュッと握って眠る様子はすごく可愛くて。

この子の母親はどこにいるんだろうな…。

城の中にいるのか？

「うむ…」

それにしても、この子…。
実際に見るのは初めてだな…。

百年生きること一本増えるというが、ということは、この子は八
百歳を超えてることになる。

…まあ、それはないな。

所詮は迷信だったってことか。

それだけ珍しいとも言えるけど。

「あ、姉ちゃん。来てたんだ」

「ああ」

そんなことを考えていると、風華が戻ってきた。

「あ…葛葉…。泣いたりしてなかった？」

「いや。全然」

「そう…」

「誰なんだ？」

「葛葉っていうの。身寄りがないのか知らないんだけど、村の周りで
ウロウロしてたから保護してみんなで面倒を見てたの」

「ふうん…」

「ちゃんと言い聞かせたのに、来ちゃったみたい…」

「お母さんって？」

「あ…そんなこと言ってた…？」

「ああ」

「…私のことだよ。なんでか知らないんだけど、私のことをお母さ
んって言って慕ってくれて。嬉しいんだけど、なんか複雑な気持ち
で…。私が母親の代わりなんて出来るのかな…って」

「風華は、葛葉のこと、好きか？」

「うん…」

「葛葉のためになら、一所懸命になれる？」

「うん…」

「じゃあ、不安になることはない。相手のために一所懸命になるのが親だ。風華は、立派な母親だよ」

「…うん」

ニツコリと笑って、私をギュッと抱き締める。

「ありがとう」

「ううん。私は、思ったことを言っただけ」

「でも、ありがとう」

「うん」

一所懸命に面倒を見て、一所懸命に叱り、一所懸命に褒めてやる。相手のために一所懸命になれるなら、誰だって親になれる可能性がある。

風華が葛葉の親であるように、葛葉も風華の親だろう。そういうものだよ、親ってというのは。

21（後書き）

八月の終わりくらいに自分のパソコンがお亡くなりになってしまった、更新が滞ってました。

さて、葛葉の登場ですね。

この子はどういう動きをしてくれるんでしょうか。
楽しみです。

「うにゅ…」

「あ、起きたか？」

「お母さん…」

「オレはお母さんじゃない」

「……………」

「……………」

「うう…お母さん…」

「また泣くのか？」

「うっ…くっ…泣かない」

「よしよし、えらいな」

頭を撫でると、気持ち良さそうに額を擦り付けてくる。
ホントに可愛いな…。

「ん」

「あ、そうだ」

「え？」

「いや、なんでもない」

葛葉には首輪が似合いそうだ。
明日にでも買いに行こうかな。

「ねーねー」

「…え？オレのことか？」

「うん。ねーねーは、あぶらげ好き？」

「油揚げか？…まあ、好きな部類に入るだろうな」

「じゃあ、これ、あげる」

「ん？ありがとう…」

稲荷寿司を渡される。

…え？

こんなベタベタのものをどこに入れてたんだ…？
ていうか、ねーねーって…。

「葛葉も食べる…」

また稲荷を取り出す。

えっと…食べればいいのか？

葛葉も食べようとてるし…。

「いただきます」

「…いただきます」

変な匂いはしないな…。

腐ってるわけでもなさそうだ。

…一口。

ん？

なかなか美味いな…。

調理班の稲荷より断然美味しい。

「もう一個…」

「どこに入れてるんだ？」

「ふむ。ほほはお」

二個目の稲荷を頬張りながら、ちょうど死角になっていた場所から
弁当箱のようなものを取り出す。
帯に繋がってるのか？

村から持ってきたんだろうか。

「これ、空が作ってくれたの」

「ほう。空がねえ」

って、空のことは、ねーねーとは呼ばないんだな…。

「ねーねーも、もう一個食べる？」

「ああ、貰おうか」

三個目に取り掛かっている葛葉から、また稲荷を貰う。

もうこの稲荷で終わりみたいだけど、来る前はどれだけ入ってたのかな…。

結構大きな弁当箱だし…。

「もう一個」

「え？」

さらにもう一個、同じような弁当箱が出てきた。

「その弁当箱で何個目なんだ…？」

「えっと、三個目だよ」

「三個目！？」

道中で食べてきたんだろうけど、こんなにぎっしりと稲荷の詰め込まれてるんだ。

弁当箱の重さは相当なものなんじゃないのか…？

「はい、ねーねーにも、もう一個あげるね」

「あ、ああ…ありがとう…」

「んゝ、美味しい」
「そ、そうだな…」

葛葉の向こう側にまだまだ山積みになってる弁当箱が思い浮かんで怖くなった…。

三個目で終わりだよな…？

「あぁっ！葛葉！ごはんの前は何も食べちゃダメって言ったでしょ！」

「あう…お母さん…」

と、風華が帰ってきた。

葛葉は必死で弁当箱を隠そうとするが、もう遅かった。

「今日はこれで終わりだからね！」

「あぁっ…あぶらげ…」

「もう…空姉ちゃんも、葛葉にこないっぱい持たせて…。すぐに来れるのに…」

「近いのか？」

「城下町を抜けて四半刻くらい歩いたところだよ」

そんなに近かったのか…。

知らなかったな…。

「あぁっ！もう！五個も持たせてたの！？」

「あう…葛葉のあぶらげ…」

「五個…」

「葛葉、これ、衛士さんと食べなさいって言われなかった？」

「……………」

「どうなの？」

「言われた…」

「もう…ふたつも開けちゃって…」

「うう…」

「まあ、食べちゃったのは仕方ないね…。次からは、ちゃんと我慢するのよ」

「…うん」

風華が、弁当箱に挟まってたらしい手紙を見せてくれる。
その手紙には綺麗な字で、

『葛葉が食べちゃうだろうから、多めに作ってます。』

まあ、ふたつくらいなら食べても大丈夫かな。

この稲荷は、豊作感謝祭で、村のみんなで作ったものです。

紅葉と衛士のみなさん、あと、利家と桜、チビたちと一緒に食べてください』

と書いてあった。

誰がこの手紙を見るか分かっていて、さらに、葛葉が食べる量も計算してる…ということは、空は相当頭が切れるんだろうな。
是非とも参謀についてほしいところだが…。

「夕飯まで何も食べちゃダメだからね。分かった？」

「うう…」

「返事は？」

「…うん」

「よろしい。じゃあ、姉ちゃん、私、これ厨房に届けてくるね」

「ああ」

そして、医療室を出て行った。

また二人だけになってしまったな。

…そうだ。

「葛葉、ちょっと待ってるよ」
「うん」

立ち上がって、中庭に面した窓に向かう。
そして、ちょっと特殊な笛を吹く。

「隊長、どうしました？」

すぐに伝令の一人が来て。
うん、良い仕事をしてるな。

「望たち、どこかで見なかったか？」

「えっとですね…。あ、来ました」

「ねえ、その笛、貸して」

「ダメです。この笛は大切なものなんです」

「ええ…」

「望、他の二人は？」

「桜お姉ちゃんの部屋でまた寝てるよ」

「そうか。まあ、望だけでもいい。ちょっとこっちに来てくれないか？」

「うん」

「香具夜。ありがとう。戻ってくれ」

「はっ！では、失礼します」

「あと、笛だけど、一個都合してやれ」

「あ…はい。分かりました」

笛に興味を持ったみたいだし、早いかなと思うけど、ちょっと良いかもしれない。

伝令班で少し仕事をさせてみよう。
また後々に別の班が良いとなれば、変えれば良い話だしな。

「どうしたの？」

「ん？いや。望に、ちょっと仕事してもらおうかと思ってな」
「えっ！仕事！？」

目をキラキラ輝かせる。

うん、仕事にも興味を持てるなら、良い兆候だな。

「でも、まずはこっち。この子は葛葉って言うんだ」

「葛葉？」

「この子は望」

「望……」

「葛葉は走るの好き？」

「えっと……あんまり好きじゃ……ないかな……」

「じゃあ、寝転ぶのは？」

「それは……好き……かな……」

「じゃあじゃあ、良いところがあるんだ！一緒に行きー！」

「あ……うん……」

望は、どうやったら友達になれるか、ということを知ってるらしい。

葛葉は人見知りか激しいみたいだけど、望にかかればそんなことは問題にはならないんだろう。

ちよっと強引だけど、楽しい時間を共に過ごせば関係なくなる。

そして、いつの間にか友達になってる、ってなかんじなんだろうな。
まったく、驚くべき才能だ。

22（後書き）

その才能、少し分けて……いえ、なんでもないです。
小さい子には、本当に驚かされます。
魔法を使ってるんじゃないかってくらい。

医療室で何をするわけでもなく宙を見つめる。

葛葉はここに留まるんだろうか。

望や響みたいに、旅から旅の生活をしてるわけでもないし、やっぱり帰るのかな。

…光ってどうなんだろうな。

なんであんなところに隠れてたんだろう。

かくれんぼ…というわけでもなさそうだったし。何をしてたんだろ…。

…それはまた本人からゆっくり聞けばいい。

「ふう…」

それにしても、風華は何をしてるんだろうか。

稲荷を厨房に届けるだけなのに…。

道草を食ってるのかな。

まあいいや。

響と光の様子でも見に行くか。

桜の部屋って言ってたよな。

…そういえば、ここにはあまり入ったことがなかったな。

少し戸を開けて、隙間から覗いてみる。

すると、正面に利家がいる。

「ん？」

しまった…！

目が合ってしまった…。

「なんで入ってこないんだ？」

「あ…うう…」

諦めて、戸を開けて中に入る。

「ああ、紅葉か。風華かと思った」

「う、うん…」

「議会は五日以内に召集出来ると思う。各村から代表を一人ずつだから…二十四人が泊まる場所があるんだけど、大丈夫か？」

「ああ。それくらいなら大丈夫だ」

「まあ、僕のところみたいに近い村なら泊まる必要もないんだけど…」

「何か他にいるものはないか？」

「うん。今のところはない」

「そうか」

「ところで、なんで覗いてたんだ？」

「え…いや…あ、あんまり入ったことないなあ…って思ってた」

「そつえばそうだな」

うう…。

なんでだろ…。

議会在どうこうとか話してたときはそんなことはなかったのに、いざ、こういう普通の会話になると、すっごく緊張する…。

「そつだ。これ、紅葉が作ってくれたのか？」

首飾りを見せる。

「いや…市場の革屋が…」

「革屋？」

「うん…。母さんのお気に入りのお店だったんだけど。新しく弟子を取ったって聞いたから…」

「ふうん。紅葉のお母さんって、どんな人？」

「…生みの親は覚えていない」

「育ての親は？」

「立派だった。二人とも」

「二人？」

「ああ。物心ついてしばらくまでは、狼に育てられてたんだ」

「へえ」

「…あんまり驚かないんだな」

「子供を守りたい、育てたいって感情は、どの親も同じ。狼であるうが人間であろうと、それは変わらない。それで？もう一人は？」

「…この衛士長だった」

「今の衛士長は紅葉だから…」

「うん。もういない」

「そうか」

「…犬千代は不思議だな」

「え？なんで？」

「オレが衛士長の母さんの話をする、みんな暗い顔をしたり謝ったりするんだ。なのに、犬千代は平然としている。…あ、悪い意味じゃなくてだな」

「うん。紅葉が暗い顔をしてるならともかく、どこか誇らしげな顔をしてた。ということは、紅葉は母親に誇りを持っているということ。じゃあ、僕が暗い顔したり、謝ったりするのは失礼な話だろ？」

「ああ。そうだな」

「だから、僕はそうしなかった」

「くっ…ふふふっ」

「…何がおかしいんだよ」

「いや、何かは分からないんだけど…ふふふっ」
「ふふ、変なの」

うん。

自分でも変だと思う。

でも、なんだろうな…。

この、心の底から湧いてくるような楽しさは。

「やつ！」

「わわっ！？な、なんだ！？」

「なんでもない〜！」

ギュッと抱き締めた。

何かは分からない。

この感情を言葉で言い表すことなんて、きっと出来ない。
けど、こうやって伝えることは出来る。

もっとも伝えたい相手に。

もっとも近い距離で。

どれくらい時間が経ったのか、利家と談笑していると

「利家さん、隊長。夕飯、出来ましたよ」

「うん。すぐ行くよ」「ああ、ありがとう」

「では、失礼いたします」

「はあ、紅葉とこんなに話したのって、初めてじゃないか？」

「え？そうか？」

「だって、僕はここに来てからずっと、この部屋に軟禁状態だったし…」

「そうかな…」

久しぶりなかんじはするけど、初めてとは思わなかった。
何か、昔からずっと知った仲のような、何かそんなかんじ。

「”記憶”かあ…」

「え？」

「聞いたことあるよ。別の世界での”記憶”が、急に流れ込んでくることあるって」

「あ、オレも聞いたことがある」

「そうなのか？じゃあ、結構有名な話なのかな」

「そうだな」

「別の世界では、僕と紅葉はきっと、すごく仲良しかったんだろうな」

「なんでそう思っただ？」

「紅葉のことが、好きだから」

「え…っ!？」

顔が熱くなる。

…今、利家が、私のこと、好きって、言った？

「ははっ、冗談だよ、冗談」

「え…？」

「ふふ、紅葉、顔、赤いぞ？」

「嘘だったの…？」

「……………」

「え？」

「さ、夕飯、食べに行こうか。桜と望に全部食べられるぞ」

「ちよっ！ねえ、嘘なの！？犬千代ーっ！」

さっき、何を言ってたの!？

聞こえるように言つてよ！
利家ーっ！

光が顔を覗き込んでくる。

「お母さん、どうしたの？」

「なんでもないっ！」

「あう……」

「なあ、紅葉。機嫌、直してくれよ」

「じゃあ、あの時なんて言つたか教えてよ」

「え……うーん……」

「もういいよ！犬千代なんて知らない！」

「ありやりや。夫婦喧嘩始めちゃったよ。一方的に姉ちゃんの勝ちみたいけど。ほら、光、葛葉、危ないからこつち来なさい」

「え……？隊長つて利家さんと……？」

「マジで……？」

「誰が夫婦だ！」

「怖いね……。ほら、桜と望も手を出せないでしょ？」

「だ、出せないことないもん……」

ソロソロと出してきた箸を弾き飛ばす。

「ひゃあ……」

「ふん」

「ねえ、なんでお母さんの機嫌悪いの？」

「それはねえ、響。兄ちゃんが悪いんだよ」

「え、ええ……？僕……？」

「他に誰がいるのよ」

「うう……。なあ、紅葉……」

睨む。

「…すみません」

「今日はどこで寝よつか。こんな怖い姉ちゃんの横で寝たくないよね」

「うん」

「ちよっ…響…！口には気を付けた方がいいよっ…！」

「なんで？」

「あんまり刺激しちゃダメ…！」

「……？」

「の、望、桜お姉ちゃんの部屋で寝るっ！」

と言つて、望は広間から出て行ってしまった。

「じゃあ、わたしも桜お姉ちゃんの部屋で寝ようっ」と

「…いろはねえ、今日だけだからね」

「何が」

「…なんでもありません」

桜と響も、早々に広間を出て行く。

「私たちは、衛士さんの部屋で寝かせてもらおっか」

「え？わたし、お母さんと、寝たい」

「今日はダメだよ。危ないから」

「………」

「ほら。危ないでしょ？」

「…うん」

「葛葉は、お母さんとなら、どこでもいい」

「うん。じゃあ、二人とも、先に行つてて。あ、部屋分かる？」

「私が連れて行きましょう」

「あ、香具夜さん…でしたっけ？」

「はい。覚えてもらって光栄です」

「そんな、あんまりかしこまらないでくださいっ」

「そうですか…」

「まあ、とにかく、二人、よろしくお願いしますね」

「はい。任せてください」

「もっと砕けた言い方で結構ですよ」

「じゃあ、風華さんも、砕けてくださいね」

「あちゃ…そうだった…」

ふふふ、と笑いながら、広間をあとにする。

片付けに当たってない衛士たちは、望たちと同じようにそそくさと立ち去り、片付けに当たってる衛士たちも、なるだけ早く終わらせようとしている。

…なんなんだ。

この、危険を察知して逃げていく小動物のような状態は。

「実際、今日の姉ちゃんは大変だからね。誰かさんのせいで」

「……………」

「ふん…。ご馳走様」

「お、お粗末様でした…」

「なんで怯えてるんだ」

「い、いえ…」

「八つ当たりしちゃダメだよ」

「してない！」

「はいはい」

…なんか、風華にだけは軽くあしらわれてるような気がする。それはそれで嫌だ。

「ほら、姉ちゃん。星、綺麗だよ。見てみなよ」
「言われなくても見る」

夜空にはたくさんの星が瞬いていて、天の川もよく見える。

あっちの方に風華たちの村があるのかな？

そこでも、同じ空が見えてるんだろうか。

空も、この”空”を見てるんだろうか。

”空”はどこまでも続いている…。

…こんな広い空の下で、私は小さなことで怒ってる。

そう考えると、すっごくバカバカしくなってきた。

なんであんなことで怒ってるんだろ。

「どう？落ち着いた？」

「ああ。少しな」

「もう…。今日だけだよ？」

「うん」

「じゃあ、兄ちゃん」

「…え？」

「姉ちゃんを部屋まで連れて行くこと。それが今日の最後の仕事」

「「え？」」

「じゃあね。二人のこと、気になるし、もう行くね」

「あ！ちよつ！風華！どういうことだよ！」

「…お休み。姉ちゃん。今日は兄ちゃんでご我慢してね」

「ああ。お休み」

そして、風華の足音は遠ざかっていく。

「まったく…どういふことなんだ…」

「じゃあ、犬千代。オレを部屋まで送り届けてくれるか？」

「…ああ。分かったよ」

私の手を取る。

利家の手はすごく温かくて…って、あれ？

「知ってたのか？」

「何を？」

「月光病のこと…」

「月光病？ああ、そういえば、目が赤いな。見えてないのか？」

「あ…うん…」

「そっか。大変だな」

「え…？じゃあ、なんで手を…？」

「そういえばそうだな…。なんでだろ？」

もしかして、”記憶”なのかな。

「まあいいじゃないか。僕は紅葉と手を繋ぎたくて繋いだ。それで良いだろ？」

「ふん。好きでもないやつと手を繋ぐのが嬉しいのか」

「…まだ許してくれないのか？」

「当たり前だ。機嫌を直してほしいなら、ちゃんと白黒はつきりさせてくれ」

「……………」

「うわっ！な、何！？」

「……………」

グイグイ引つ張られる。

ど、どこに行くの…？

何分か連れ回したところで、急に足を止める。

「はあ…はあ…なんなんだ…」

「…ちよつと待っててくれ」

「え？」

ちよつと待っててって…。

ここ、どこだろう…。

…外？

土の匂いが…。

「わわっ！」

「……………」

「え…？」

背中に感じる温かさ。

…今度は、はつきり聞こえた。
聞こえたよ…。

23 (後書き)

何でしょうか。
この展開は。

「着いたぞ」

「ああ。ありがとう」

「うん。お休み」

「お休み」

そしてそのまま足音は遠ざかっていく。

さて、寝るか…。

戸を開けて部屋に入る。

「あ、遅かったね」

「あれ？風華？」

それに、この匂い…。

「みんないるよ。結局ここで寝るんだね。香具夜も、連れて行っ
たはいけど、光がやっぱりここで寝たいって言ってたって」

「そうか」

「うん。で、どうだったの？」

「何が？」

「兄ちゃんに聞いたんでしょ？」

「な、何を！」

「そっか。良かった良かった」

「だから、何が！」

「ふふ。あれ？姉ちゃん、目だけじゃなくて、顔も赤いよ？」

「風華！」

「ふふふつ、可愛いなあ」

「もう！」

「でも、良かったじゃない。ちゃんと聞けたんでしょ？」
「…うん」

「じゃあ、良かった良かった」

頭を撫でてもらう。

いつも撫でる側だから、何か変なかんじ。
けど、すごく気持ち良い。

「兄ちゃん、頼むね」
「うん」

撫でている手を取り、引き寄せる。
そして、強く抱き締める。

「でも、風華も一緒だ。みんな一緒」
「うん…そうだね」

みんな一緒。
みんな好き、だよ。

警鐘が鳴り響く。

「な、なんだ!？」

「隊長! 町で火事です!」

「今何時だ!」

「丑の刻です!」

「放火の線をあたれ! 戦闘班はただちに消火活動に回れ! 医務班は
怪我人を!」

「はっ!」

「うん…何…？」

「風華。町で火事があつたらしい。医務班として出勤してくれ」
「……！分かった」

「あ。衛士の服を着ていつてくれ。見分けがつきやすいように」

「うん。はい、姉ちゃんも」

「私…？」

「うん」

「私は…何も出来ない…」

「そんなことないでしょ！ほら、早く！」

「あ…うん…」

何も出来ない…。

目が見えない私は…足手まとい…。

「行くよ！」

「うむ…お母さん…？どこ行くの…？」

「ちよっとお便所に行ってくるだけだから。葛葉はゆっくり寝てなさい」

「ふあ…あふう…。分かった…」

「良い子だね」

そして、軽く手を引く。

「行くよ」

「でも…」

「もう！」

右頬に感じる痛み。

「しっかりしなさいよ！衛士長なんでしょ！？目が見えないくらい

で弱気になるような衛士長なら辞めればいいんだよ!」

「…そう…だな」

「行くよ!」

「うん!」

見えないからと逃げて、何も見てなかったんだ。

見えるものも、目を閉じて見てなかった。

衛士長…失格だな…。

「分かったんだから、これからはちゃんとしていけばいいんだよ。失格なんて思うことはない」

「え…?」

「どうせ、衛士長失格だ…とか考えてたんでしょ?そうやって逃げるんじゃないくて、次からはちゃんと見据えてやっていけばいいこと。失格なんて思う必要はないの。それに…やっぱり姉ちゃんが衛士長じゃないと、誰がやるっていうのよ」

「そうですよ。私は隊長以外の隊長は嫌です」

「香具夜…?」

「避難指示、完了しました」

「ああ、分かった。引き続き、避難の遅れたものがないか、あと、不審者がいないか確かめてくれ」

「はっ!」

「ほら、出来ることがあるでしょ?」

「…うん」

そうだよな。

誰にでも、出来ることは何かあるんだ。

何も見えない、何も出来ないと悲観して、出来ることを探そうとしなかった。

…ありがとう、風華。

炎の匂いと熱さが、火事の大きさを物語っていた。

「延焼を防ぐんだ！」

「はっ！」

「被害の状況は！？」

「現在、十戸が全焼、約二十戸が半焼です！怪我人多数、しかし、犠牲者は出ていません！」

「よし。良くやった。あとは火を消すだけだ！踏ん張れよ！」

「…五元素がひとつ、水よ。その力で以て、火を剋せ！」

水の匂い…？

そして、次の瞬間、蒸気が顔を撫でた。

「くっ…足りない…」

「風華！？」

「ごめん。班の仕事を放って」

「いや…今は…？」

「術式。でも、私に力がないから…」

「わたしが手伝ってあげる。だから、頑張って」

「…響？」

「ふふ、そうだけど、違う」

「……？」

何か、あの幼い響とは違った、なんというか…風格のようなものが漂っていた。

誰…なんだ…？

「行くよ、風華」

「あ…うん！」

「五元素がひとつ、水よ。その優しさで以て、火を剋せ！」

…ん？

なんだ？

何が…。

「空が…」

「え？」

冷たいものが頬を打った。

「雨…？」

「雨だ！やったぞ！」

「手を休めるな！引き続き、消火活動にあたれ！」

「はっ！」

雨…。

これも、術式の力なのか…？

「はあ…はあ…」

「良く頑張りました。もう大丈夫だよ」

「う、うん…」

「じゃあね。わたしは帰るよ」

『お姉ちゃん、お母さん、お休みなさい』

「お休み」「お休み…」

なんだったんだろう…。

響だけど、響じゃないようなかんじ…。

そして一度、大きく羽ばたく音がして、響の匂いは遠ざかっていっ

た。

「良かった…。これで、大丈夫だね…」

「……！風華！」

「はぁ…はぁ…」

風華をなんとか抱きとめる。

…息が荒い。

なんで…？

術式のせいなのか…？

「はぁ…大丈夫だから…。ちょっと…疲れただけ…」

「ちよっとつて…おい！医務班！来てくれ！」

「どうした？」

「犬千代…？なんで…？」

「僕も医務班だけど。ん？風華、どうしたんだ？」

何をしてるのは分からないけど、しばらくゴソゴソとやって。

「…極度の疲労だろうな。早めに引き上げてゆっくり休養を取るんだ」

「はぁ…分かった…」

「ほら、紅葉も」

「え…でも、私は…」

「僕に任せて。大丈夫だから」

「うん…分かった…」

「誰か！隊長と風華を送ってくれ！」

「じゃあ、ボクが行く」

「ああ。よろしく」

「桜…？」

「そつだよ。帰ろ？」

「あ…うん…」

「風華、大丈夫？」

「え？」

風華はもう眠っていた。

…よつと。

担ぎ上げる。

意外と軽いんだな…。

「いろはねえって、力持ちなんだね」

「いや、風華が結構軽くてな…」

「そつなの？まあ、早く帰ろ」

「ああ」

少し先行するように歩く桜の足音を頼りに、あとをついていく。

「そついえば、桜はなんでここに？」

「伝令班の仕事。避難の指示と不審者の搜索」

「ああ、そついえば伝令だったな」

「うん」

「わつと…」

「……？どつしたの？」

「いや…」

「鳥目なの？」

「いや…まあ、そんなものだな…」

「そつか。じゃあ、こうだね」

空いてる方の手を繋いでくれる。

「えへへ。なんか久しぶりな気がするなあ。手を繋ぐの」

「そうなのか？」

「えへへ」

「っとと…もうちょっとゆっくり歩いてくれ」

「ごめんごめん」

嬉しい雰囲気を感じ取れるほどに滲み出ていた。

手は、人間にとって、もっとも敏感な場所だ。

手を繋ぐということは、相手を感じるだけでなく、同時に、相手にも感じられるということを表す。

大人になると、感じ取られたくないことが増えるからだろうか。

どんどん、手を繋ぐ機会が減っていく。

それはとても哀しいこと。

でも、必要なことなのかもしれない。

「どうしたの？」

「ううん。なんでもないよ」

必要なことだとしても、やっぱり、大事なことだと思う。
たまには、手を繋いでみるのもいいよね。

24（後書き）

いいよね。

でも、手を繋いでくれる人が十三歳下の従弟しかないのは秘密です。

大きく伸びをする。

けど、眠気は解消されそうにもなかった。

「ふぁ…あふう…」

仕方ないので、布団を抜け出す。

身体を動かしていれば、そのうち目も覚めてくるだろう…。

「おはよ、姉ちゃん」

「風華か…おはよう…」

「眠そうだね」

「ああ…眠い…。風華は元気そうだな…」

「うん。まあね」

「ふう…朝ごはん食べてくるよ…」

「分かった」

欠伸が止まらないな…。

どうしたものか…。

そんなことを考えてる間にも。

「あふう…」

…締まらないなあ。

風華はピンピンしてるってのに…。

「ふぁぁ…」

「寝不足ですか？」

「ああ…そんなものだ…」

厨房に入って席に座ると、急な眠気がする。

「……………」

「隊長」

「……………！ど、どうした」

「寝てきたらどうなんです？無理は禁物ですよ」

「あ、ああ…すまない…」

「謝られても困ります。ほら、これ、飲みます？」

「ん…なんだ…これは…」

「特製の飲み物です。ほら、グイッと行って」

「むう…」

何か…変な匂いがする…。
うう…。

「……………！」

「ど、どうです？」

「不味い…」

「そうですか…なるほど…」

「なるほど？」

「あ、いや、こつちの話です」

「お前…オレで実験してたのか？」

「いやあ…そういうわけじゃないんですけどね…」

「その後ろに隠してるものを見せろ！」

「あ！ダメですってば！」

ん？

これは…。

「…睡眠導入剤ですよ」

「睡眠導入剤？」

「薬じゃなくて、良い眠りに効果があると言われてるものをかき集めて作ってみたんですが…」

「ふうん…」

「さあ、朝ごはん、出来ましたよ。これ食べて、今日はゆっくり寝てください」

「他に誰か飲んだのか？」

「いえ。さっき作ったばかりなので」

「自分で飲んでみたのか？」

「昨日飲んでみました」

「どうだったんだ」

「よく眠れましたよ」

「そうか」

「はい。さ、これ食べて」

「ああ」

よく眠れたって…火事のことは知ってるんだろうか…。
まあ、いいか。

「む…？なんだこれ…」

「どうしました？」

「味が無い…」

「ええっ!？」

少し取って味見をする。

「…もしかして」

「どうした？」

「す、すみません！さっきので味覚が麻痺してるかもしれません！」
「え…？」

「これがですね…人によつては副作用があるとは聞いてたんですが…」

と言つて、睡眠導入剤の材料の中から半分に切られた何かの実のようなものを出す。

…何か、ちよつと禍々しいかんじがするんだけど。

「本当にすみません！すぐに治るみたいなんです…」

「ああ、もういいよ。昼は…あれだから、夜、上手いものを食べさせてくれ。それでいいから」

「すみません！」

「じゃあな。ご馳走様。あれ、ありがとな」

「いえ…すみません…」

「気にするな」

肩を軽く叩いてやつて、厨房をあとにする。

むう…。

さっきのが効いてきたのか、厨房を出るとすぐに猛烈に眠くなってきた…。

部屋まで行けるかな…。

「おっと、危なっかしいな」

「ふむう…？ひぬちよかあ…」

フラフラと倒れそうになったところを受け止めてくれたのは利家。朝ごはんを食べにきたんだろうか。

「呂律が回ってないな。何か悪いものでも飲んだのか？」

「ちゅうぼふのひやつに…ちょっとにゃ…」

「ふうん…またあとで聞いとくか…。それより、どこに行くんだ？」

「はたしのへやにゃ…」

「狼なのに、ニャーニャー言って…」

「いいじゃにゃひかぁ…」

「ほらよつと…」

「はわっ!？」

突然、私を抱き上げる。

そして、ちょうどそのとき角を曲がってきた衛士と目が合ってしまった。

そのまま、そいつは角の向こうへと再び姿を消した。

「そんなフラフラじゃたどり着けもしないだろ」

「は、はじゆかしいのら…」

「分かった分かった」

眠気のせいで充分な力も出ず、結局縮こまって大人しく運ばれるしかなかった。

顔が熱いよ…。

「顔、真っ赤だぞ」

「むう…」

いつも通ってる道のりも、今日は随分と長く感じられた。

こんな恥ずかしいことってあるだろうか…。

朝っぱらから子供のように抱きかかえられて部屋まで送って貰って…。

いつまでも続くと思われたこの時間も終わりを告げ、ようやく布団の上に下ろされる。

「はい。眠気を解消するには、寝るのが一番」
「ふむう…」

「お休み」
「うん…」

利家の姿が次第にばやけて…。

目を開けると、風華が見えた。

「風華…？」

「あ、起きた？」

「今…何時だ」

「そうだね…もうすぐ午の刻かな」

「そうか…」

もつと眠ってたかと思ったけど。

「昼にどこかに行く予定でもあったの？」

「どうして」

「厨房の人が言ってたよ。昼は食べないって」

「ああ、また市場に行こうと思ってな」

「じゃあ、私も行こうかな」

「…でも、やってるのかな」

「やってるでしょ」

「そうかな」

「うん」

そうだよな…。

焼けたのは市場とは反対方向だし、それに、こんなときだからこそ商売をやるんだ。

少しでも、活気を分け与えられるように。

「それにしても、このお城って意外と広いんだね」

「なんで？」

「焼け出された人、みんなお城に収容出来たじゃない」

「空き部屋はいっぱいあるからな」

「そういうの、無駄じゃないの？」

「こういうとき、役に立つだろ？それに、演出でもあるんだ」

「演出？」

「これだけたくさんの部屋がある、これだけ広い城に住んでる、という演出だ」

「ふうん…よく分からないけど…」

「金持ちであることを示すには、広い家を建てるのが一番だろ？まあ、この城は軍事目的で建てられたものだが、そういう見栄も入ってるだろうな。こうやって大きな城を建てることで、王としての威厳も保てる」

「へえ…。あ、ところで、調子はどう？」

「調子？」

「うん。なんか変なの飲まされてみたいだから」

「変なの…」

「兄ちゃんが言ってたよ。ダルイルの毒を大量に摂取してる可能性があるって」

「ダルイルの…毒？」

「うん。まあ、人によって効果はまちまちなんだけど、主に催眠作用、副作用として、各神経の麻痺だとか筋肉の弛緩だとかが見られるね」

「ふうん…」

「で、よくよく聞けば、味覚の麻痺も見られたし、全身脱力も見ら

れた。ダルイルが何かに混じってたのかなあって」

「あ…あの変な果物…」

「変な果物？」

「ああ。こつ…表面が黒くて、中身が白いんだ。蜜柑の色違いみたいなので…」

「ああ…それがダルイルだよ…。厨房の人、兄ちゃんが行ったときには材料を全部捨てちゃってたみたいで…」

「捨てた？」

「うん。いくら良い睡眠が取れるといっても、こんな不味いものは誰も飲まないだろうって」

「ふうん…」

それを飲まされただけど…。

「まあ、ダルイルで良かったよ。同じ催眠作用でも、もしヤングルだったら危なかったよ」

「ヤングル…？」

「うん。ダルイルの何百倍もの催眠作用があるんだ。同じ量を摂ってたなら、永遠に目が覚めないとこだったよ。それに、副作用も幻覚症状だとか被害妄想だとか、きついものばかりだし。正しく使えば問題ないんだよ？一万倍くらいに薄めて飲むの。そしたら、八時間は眠れる」

「へえ…」

でも、あいつはダルイルかヤングルか、すら知らなかった。ということとは、私…死にかけてたの…？

「薬草、薬品の類は、まず薬師^{くすし}さんに相談してから摂取した方がいいよ。素人が半端な知識で扱つと、大変なことになる可能性もあるからね」

「そうだな…」

「身に染みて分かったってやつ？」

「ああ…。薬師ってのは、医務班のやつらでいいのか？」

「うーん、そうだね。年配の方なら大丈夫だと思うよ」

「ふうん…。風華は？」

「わ、私！？ダメダメ！全然！薬師さんとは程遠いよ！」

「でも、さっき、すつごく詳しくそうだった」

「ダメだよ！わ、私なんて…。兄ちゃんは薬師さんだけど…」

風華の正面に座り、ジッと目を見る。

「自分を卑下したらダメだ。どうせ自分なんて…と考えるたびに、未来の可能性を潰している。器を小さくすればするほど、入れられる未来の量は少なくなっていくんだ。過信するのは禁物だが、自分に自信を持つて。器を大きく持つんだ。分かるか？」

「…うん」

「じゃあ、風華。薬のこと、お前に聞いても良いんだな？」

「うん。兄ちゃんに負けないくらい、いっぱい勉強してる。絶対、薬師さんになりたいから。未熟かもしれないけど、私の分かる範囲でなら答えるから、聞いて」

「そうか。頼りにしてるぞ、薬師さま」

「もう！姉ちゃん！」

「くっ…ふふふ」

「笑わないでよー！」

前に約束してもらったことも果たしてもらわないといけないしな。楽しみにしてるよ。

自他ともに認める、薬師さま、風華を。

25（後書き）

いいですね。夢があるって。
風華には是非とも頑張ってほしいです。

「ねえねえ、どこ行くの？」

「お腹空いた」

「じゃあ、先にごはんを食べに行こうか」

「うん！」

「あ！こら、葛葉！走らないの！」

チビたちを一齐に管理するのは無理な相談で。

あっちに行ったりこっちに行ったりするのを、目で追うのがやっと。唯一大人しくしているのが、私と手を繋いでいる光。

両手にあるたくさんのお店には興味があるけど、近付いて見てみる勇氣はない、といったかんじか。

反して望と響は、店を片っ端から覗いていき、ときたま戦利品を持つてくる時がある。

葛葉は中間みたいなもので、少し遠目から望たちのことを観察する風に見ている。

まあ、みんなそれなりについてきてはいるので、心配することあまりないんだけど。

「望、あれ食べたい」

「昼ごはんを食べてからにしろ」

「うう……。ねえ、お母さん！」

「風華の言う通りだ。ごはん食べたら買ってやるから」

「ホント？」

「ああ。ホントだ」

「じゃあ、早く食べに行こ！」

「ほら、その店だから。先に行け」

「うん！」

この前の食堂に駆け込む。
そして、私たちも入る。

「いらつしゃい！ご注文はお決まりですかい？」

「今来たばかりだろ」

「そりやそうだな。まあ、ゆっくり決めてくれ」

「ああ」

「えつとね、望はねえ」

「むう…なんて書いてあるのか分かんない…」

「お、し、な、が、き」

「葛葉…それは違うよ…」

「今日はえらく賑やかだな。衛士長さん」

「ああ。うちの娘たちだ」

「ほう。衛士長さんは子持ちだったのか」

「正確には、オレの子じゃないんだけど」

「衛士長さんは結婚はしてるのかい？」

「いや」

「ええ、嘘だよ」

「な、何を！」

「へえ、そうなのかい。んで、チビたちは何にするんだい？」

「えつとね…これ、何？」

「それは、油揚げの入った蕎麦だ。きつねそばって言うんだけど…」

「あぶらげ！葛葉、それ！」

「はいよ。一番ちつこいのがきつねそばだね。じゃあ、他は？」

「わたしは、これ」

「鯖煮込み定食？また渋い趣味してるねえ。じゃあ、そっちの黒い

龍のチビは？」

「わたしはね、えつと…」

「望はこれ！」

「本日のお薦め定食だね」

「わたしはね、これがいいな」

「はいよ。親子丼定食！お姉さん方は？」

「私は、きつねそば」

「お薦め」

「きつねがふたつ、お薦めもふたつ、鯖煮込みと親子丼がひとつずつだね」

「はい」

「じゃあ、ちよいと待っててくれよ！」

「おやっさん、こっちなさ」

「チビたちを待たせるわけにはいかんだろうが！考えろ！このバカ！」

「うう…結局また最後かよ…」

ぐつたりと突つ伏す衛士たち。

この前来たときにも、似たような光景を見た気がする。

…おやっさんの人徳だろうな。

文句を言いながらも、こうやって通う人たちがいる、ということとは。

半分くらい食べ終わって、衛士たちにもようやく注文の品が出るといったとき。

「隊長！ここにいたんですか！」

「ん？どうした」

「ちよつと来てください！」

「ああ、待ってくれ。お代、ここに置いておくから、釣りは風華に渡してくれ！」

「あいよ！」

「じゃあ、ちよつと行ってくるよ。望、その残り、食べておいでく

れ」

「いつてらっしゃい」「分かった」

軽く手を振って、食堂を出る。

「で、どうしたんだ。香具夜」

「火事現場に来てください!」

「何かあったのか?」

「見てもらった方が早いです!」

と言って、すぐに駆け出す。

私もあとを追い、火事現場へと急行する。

「どうした」

「あ、隊長!お疲れ様です!」

「そんなことはいい。何があったんだ?」

「はい。こちらに」

「ん?」

野次馬を掻き分けて、その中心へと向かう。
なんのことはない。

ただの火事現場だった。

ただひとつの因子を除いては。
炭と灰の上に座る女の子…。

「誰だ…?」

「それが…分からないんです…」

「聞かなかったのか?」

「き、聞けませんよ…怖くて…」

「はあ…呆れたやつだな…」

「そ、そうでもなきや、隊長なんて呼びませんよ……」
「……………」

「あっ！す、すみません！」

「まあいい。ちよつと聞いてくるよ」

「はい…お願いします…」

黒と白の絨毯を踏みしめながら、女の子に近付く。

「おい、お前。どこから来たんだ？」
「……………」

なんとも無機質な目をこちらにゆっくりと向ける。

「……………」

「大丈夫か？」

「…目標、確認しました」

「はあ？」

「ただいまより、排除行動を開始いたします」
「……………」

無機質な声と共に発せられる殺気。

「離れる！」

「はっ！」

「な、なんだ…寒気が…」

衛士たちはもちろん、野次馬でさえも感じ取れるほどの大量の殺気……。

こいつは…誰なんだ…。

「……………」
「……………」

どこからともなく、何本もの刀が飛び出してくる。

「くっ… なんなんだ…」

「……………」

「はあっ！」

また飛んできた刀の一本を掴み、大きく跳躍。
そのまま女の子の後ろをとり、後頭部を柄で殴る。

（痛い…）

「な、なんだ！？」

「……………」

「うわっ！」

一瞬の躊躇が命取りだった。

香具夜が助けられていなかったら串刺しだっただろう。
でも、あの声は何…？

さっきの無機質な声とは違う… 生の声…。

「はは…。しかし、伝令には惜しい腕だな…」

「隊長！しっかりしてください！」

「分かってる」

「慎重に行きましょう」

「ああ」

左右に分かれる。

さて、どっちを狙うのか…。

あるいは、どっちも？

「……………」

「ふんっ！」

全て、私狙いか…。

香具夜に目で合図を送る。

「……………」

「はあっ！」

また、全て私狙い。

刀を射出し終えた隙を突いて、香具夜が女の子を取り押さえる。

「公務執行妨害で現行犯逮捕します！」

「そら、手錠だ」

「ありがと」

「…排除、失敗」

まったく…排除だとか失敗だとか、何を言ってるんだ…。

散々暴れやがって…。

いや…暴れたというより、刀を飛ばしまくった…？

…まあ、そんなことはどうでもいい。

「さ、お城まで連行するからね！」

「ああ、オレが行くよ」

「え？あ、はい。隊長、よろしくお願いします」

「そら！野次馬も散った散った！」

「うえへへ。最強と謳われる銀狼さまの戦いをこの目で拝めるとは思わなかったぜ」

「しかも、二人だ！」

「来て良かった」

「もう！危ないところにはもう来ないでください！」

「「はい」」

…本当に分かってるんだろうか。

それにしても、香具夜に取り押さえられてから、急に大人しくなったな…。

誰なんだ？

「おい、お前。名前は」

「……………」

「黙ってちゃ分からないだろ」

「…分からない」

「え？」

「分からないよ…何も…うつ…うつ…」

「ちよっ！泣くなって！」

「あたし…何してたの…？怖い…怖いよ…」

「はぁ…困ったな…」

独り言のように呟いて、泣き出す女の子。

さて…こういうときは…。

みんなはまだ食堂にいた。

…腹を満たせば心も満ちる。

我ながら、完璧な理論だな。

「あぁー！それ、わたしが貰うの！」

「望に食べておいてって言ってたんだから、全部望のものだもん！」

「お母さん、あぶらげ、ちょうだい？」

「はい、どうぞ。あと、望、響。喧嘩しないの。半分こずつすればいいでしょ？」

「うう…半分…」

「嫌ならオレが貰うぞ」

「お母さん！」「お帰り」

「ただいま」

「その子、誰？」

「火事現場で保護した」

「手錠、かかてるみたいだけど」

「大丈夫だ。それに、オレがいる」

「…どういう意味かは分からないけど」

「おっ！そっちの子は何にします？」

「え…あの…」

「適当に」

「あいよ！」

「ほら、そこに座って」

「……………」

言われるがままに座る女の子。

「お名前は？」

「分からないんだと」

「分からない？記憶喪失か何かかな…」

「きおくそーしつ」

「そうそう。記憶喪失。思い出が消えちゃうんだ」

「思い出、消えるの？」

「うん。一時的だったり、ずっと戻らなかったりするんだけど…」

「思い出が消えるの…や…」

「大丈夫だよ。葛葉」

「お母さあん…」

すすり泣く葛葉をギュツと抱き締める風華。
そして、それをジツと見守る謎の女の子。

「はいよ！きつねうどん、あがり！」

「あ…」

「へへ、近くで見ても、やっぱり美人さんだねえ。おやっさん、お嫁に貰っちゃおうかな」

「え…あの…」

「そんなこと言ってる、また涼さんに絞められますよ」

「おっと、危ねえ。ま、ゆっくりしてくれ。衛士長さん」

「ああ。ありがとう」

お嫁に貰う、という言葉に反応して頬を赤らめるあたり、感情はあるようだ。

最初とは全く違う…。

最初は…本当に人形みたいなの…。

「う…むう…」

「ああ、ごめんごめん」

食べにくそうだったので、手錠を外してやる。

「ね、姉ちゃん！？」

「大丈夫だ」

「…ありがとうございます」

「敬語なんて使わなくてもいい」

「で、でも…」

「……………」

「わ、分かりました…」

「そら。言ってるしりから敬語になってる」

「す、すみません…」

「はぁ…」

しばらく、敬語は直りそうもないな。

でも、本当に誰なんだろう？

名前も分からない。

何も分からないとなると…。

26 (後書き)

誰なんでしょうか？
気になります。たぶん。

「これがいいんじゃない？」

「首輪か」

「赤くて可愛いよ」

「じゃあ、これにする」

「お前はとうだ？」

「え…あたし…ですか…？」

「ああ」

「えっと…あの…」

「遠慮はするな」

「その…」

「なんだ」

「あたし…お金…持ってませんよ…？」

「オレの奢りだ。それに、昼ごはんだって奢りだったじゃないか」

「え…でも、そんな…。今日始めて会ったのに…」

「いいってこと」

「でも…」

「ねえ、その子、紅葉の友達？」

「まあ、そんなところだ」

「ふうん…。まあ、なんでもいいや。その人」

「あ、あたしですか…？」

「そうだよ。あのねえ、奢ってくれてるってんだから、素直に奢られなさい。分かった？」

「は、はい…。あ…」

刹那の気迫に圧されて、思わず返事をしてしまう。

「ふふ。そら、好きなのを選びな！」

「うう…」

「大丈夫だから。それに、葛葉に買ってお前には買わない、なんて不公平だしな」

「あたしは…」

「これなんかどう？」

「えっと…」

「ユカラは、これがいいと思う」

「ユカラ…？」

「足輪…ですか…」

「じゃあ、ふたつで一万円ね！」

「…もうちょつと負からんか」

「負からんね！」

「はあ…まあいいか…」

「そうそう。お金は溜め込んでても良いことないよ！」

「はいはい…」

財布から代金を取り出し、刹那に渡す。

「あいよ！まいどあり！ほら、二人とも、早速着けてみな」

「それはオレの台詞だろ」

「ありゃ？そうだっけ？」

「うう…どうやってつけるの？」

「こつ」

葛葉の首輪を受け取り、しっかりと着けてやる女の子。

「えへへ、ありがと！ユカラ！」

「どういたしまして」

ニッコリと笑う葛葉につられ、ニッコリと笑い返す。

それにしても…

「なあ、葛葉。ユカラってなんだ？」

「ユカラはユカラ」

「説明になってない…」

「あ、あたしの呼び名だと思います…」

「そりゃ分かるけどな。なんでユカラなんだ？」

「それは…」

「ユカラだからユカラなの！」

「…そうか」

かくして、謎の女の子は葛葉によってユカラと名付けられた。
…どういう意味なんだろう。

革屋を出て、市場の中をグルリと回ってみる。

「ああ〜っ！隊長！その子の手錠はどうしたんです！」

「香具夜か…。そら」

ユカラの手を拘束していた手錠を投げて寄越す。

「もう！こんなの渡されてもどうしようもないですよ！」

「食べにくそうにしてたからな」

「ええ！？」

「そんなに驚くことなのか？」

「逮捕者は連れまわさないで、すぐに城まで連行してください！」

「固いことを言うな」

「隊長だからって、自由気ままに振舞ってもらっては困ります！」

「暴れたらまた取り押さえれば良い話だろう？」

「もう！知りませんよ、私は！」

「はいはい」

「ふんだ！隊長のバーカ！」

そう言つて、機嫌悪そうに尻尾を振りながら城の方へ歩いていった。
まったく…どこのガキンちよだよ…。

「あの…暴れたつて…」

「ああ、なんでもないから。それにしても、風華たちはどこに行ったのかな…」

「…対象搜索機能へ移行します」

「え？」

「…検索中」

「おい、ユカラ？」

「ユカラ…？」

「…検索終了」

「大丈夫か？」

「あ…えつと…なんですか？」

「いや…」

あの無機質な声の間の記憶はないのか…？

「そうだ。風華の居場所は分かったのか？」

「はい。この先の駄菓子屋にいるみたいです」

「ほう…」

「だがしや？」

「お菓子がたくさん売っている場所だよ」

「おかし！早く行こ！」

「はいはい。分かったから引つ張るな」

葛葉に引かれるまま、駄菓子屋まで行く。

…そしてたしかに、風華たちはいた。

「あれ？姉ちゃん」

「何か良いものでもあったのか？」

「望と響がなかなか決まらなくて…」

「光は？」

「わたしは、これ」

と言って、飴でいっぱいになった袋を見せてくれる。

「いや、クジで当たりを引かれちゃってねえ。ホントびっくりだよ」

「…いくつかの中に何個当たりを入れてるんだ？」

「さあねえ…数えたことがないんで…」

「ふうん…」

「…衛士長さんにだけ教えますけどね、百個に一個くらいですよ」

「ほう…。まあ、当たりが入ってるだけまだマシだな」

「ありがとうございます」

「ところで、なんでオレが衛士長だってことを知ってるんだ？」

「そりゃ…あの時、火事現場にいましたからね…。良いものを見せてもらいました」

「…もう危ないところには近付くな」

「分かってますよ。飛んできた刀で怪我をした人もいるみたいですし…」

「やっぱりな…」

「お母さんにも、これ、一個、あげるね。お姉ちゃんも、どうぞ」

「ん？ああ、ありがとう」「ありがとう、光ちゃん」

「望と響もいい加減決めなさい！」

「ええ…だつてえ…」

「じゃあ、わたしはこれにする」

と言って、響は独楽を店主に渡す。

「毎度あり。さて、黒い狼の子だけになっちゃったよ」

「うう……」

「何で悩んでるんだ」

「えっとね、飴か、ケンダマか」

「飴かケンダマ……」

「ね、ね。お母さんも悩むよね!」

私は飴かな……。

「ううむ……」

「早く決めないと、置いていつちやうよ!」

「うう……」

「あんまり急かしてやるな」

「でも……」

「じゃあ、こうしよ、望ちゃん。あたしがケンダマを買ってもらうから、望ちゃんも飴を買ってもらう。あたしがケンダマで遊んでないときは誰でも使っていていいことにするから、そのときにケンダマで遊べばいいよ。それでいいですよ、ね、紅葉さん?」

「ああ」

「ホント!?じゃあ、望は飴にする!」

「あたしはケンダマ」

「上手いこと考えるね、お嬢ちゃん……って……」

店主を思いつきり睨むと、なんとなくでも状況を把握したのか、私に軽く頷いて続ける。

「お、お嬢ちゃん、流石だね！」

「それほどでもないですよ」

「毎度あり！」

「じゃあ、行こっか」

「ああ、ちよつと先に行つててくれ」

「……？分かった」

風華がみんなを連れて外に出たのを確認して

「ユカラ…あの子は、今は大丈夫だ。それに、火事現場でのことも全く覚えていない。

あまり、あのことは言わないでほしい」

「わ、分かりました…」

「他の野次馬たちにも伝えておいてくれ。分かるんだろ？」

「は、はい…ある程度は…」

「頼んだぞ」

「はい…」

「…オレもこれを貰おうか」

「は、はあ？」

「そら、代金だ」

「あつ！ま、毎度あり！」

店主に軽く手を振り、飴を頬張りながら外に出る。

…風華たちは、と。

向かいの店でまた何かしているようだ。

「さあさ、今日の夕飯に出来たての豆腐はどうだい！」

「お母さん！あぶらげ、いっぱいあるよ！」

「お豆腐屋さんだからね」

「おっ！油揚げが好きなのかい！？」

「うん！」

「じゃあ、何か買ってくれたら、二枚おまけで付けちゃおっかな！」

「…商売上手いですね」

「ははっ！伊達にウン十年やってませんよ！」

「そうだな…。じゃあ、この豆腐を三丁」

「あ、姉ちゃん」

「あいよ！毎度あり！じゃあ、約束の油揚げだ！」

「やった！」

「そのまま食べても美味しくないと思うよ」

「むう…じゃあ、あとで食べる」

「鍋、貸してくれないか？」

「了解！貸し出しは無料だけど、明日までに返してね！」

「分かった」

「毎度あり！」

そしてそれから、ユカラと、ユカラの監視下に置かれたチビ三人と合流し、豆腐を入れた鍋を持って城に帰った。

27（後書き）

駄菓子屋、最近あまり見なくなりましたね。

ヤッターメンとか十円チョコとか、昔はよく食べてたんですが…。

「ねえ、そのお豆腐、どうするの？」

「ん？まあ、ちよつとな」

豆腐を適当に切り分けて、果物を乗せる。

「おい、蜂蜜あるか？」

「はい。これですね」

「ありがとう」

これを掛ければ…

「出来上がり」

「おやつ？」

「ああ。三丁で二十四個か…。四個はチビたちにとやるとして…」

「あと二十個だね」

「どうするんです？」

「争奪戦だな」

「……………」

「はあ。そうですか…」

おやつを手に入れるのは誰？

昼過ぎの激烈争奪戦、開始だ。

一旦、広間にみんなを集める。

「これより、おやつ争奪戦を始める」

「おやつって何ですか？」

「これだ」

冷奴、杏仁豆腐仕立てを見せる。

「そこでチビたちが食べてるのと同じものだ」

望なんかはもうなかったけど。

舌鼓を打つ四人の姿を見て、唾を飲み込む。

「な、何人が食べられるんですか？」

「二十人」

「二十人……」

「ああ」

「どうすれば獲得出来るんですか？」

「手加減無用の生き残り合戦だ」

「て、手加減無用……」

「参加者にはこの鉢巻をしてもらおう」

赤い鉢巻を見せる。

「なんと……」

「何をしてもいいから、相手の鉢巻を取る。そして、最後まで残った二十人がこれを食べられる」

「はいはい」

「桜」

「ホントに、何してもいいの？」

「常識の範囲内だな。致命傷や重度の怪我を負わせるのはダメだ」

「それは分かってるよ」

「どうか。それと、何かを破損させた場合、壊したものの責任に

なるからな」

「はいはい」

「桜」

「鉢巻を取られた人はどうするの？」

「再度、この広間に集合だ」

「分かった」

「夕飯までに決まらなかった場合、残ってるものでじゃんけんだ」

「結局じゃんけんかよ…」

「なんか文句あるのか」

「いえっ！ありません！」

「はい。じゃあ、参加者は拳手」

「はい！」

参加者は五十三人。

風華や桜はもちろん、ユカラや利家も参加している。

「鉢巻は、すぐ解けるように蝶々結びでな。じゃあ、常識ある行動を。いくぞ。よいい…」

挙げた手を一気に振り下ろす。

「どん！」

と同時に、飛び上がる。

「あっ！」

やはり、開幕直後を狙ってくるやつがいたか。でも、それで落ちたやつはいなかったようだ。

「ふふ…さすが隊長…」
「散！」

徒党を組んでるものもいるか。
まあ、それも作戦のうちだな。
さてさて、これからどうなるかな。

とりあえず、自分の部屋に戻り、獲物を取り出す。

「これこれ。やっぱりこれでないと」
「取った！」
「残念だな」

後ろから忍び寄ってきていた桜の攻撃を難なくかわす。

「まだまだ甘いな」
「それはどうかな」
「ん？」

足をついたその場所。
桜が、自分の横に垂れ下がっていた縄を思いっきり引く。

「のわっ!？」
「ふふふ…いろはねえ、討ち取ったり〜」
「くっ…」

足を縄に取られ、逆さ吊りとなる。
こんな単純な罠にかかるとは…。
開始早々、諦めるしかないのか…。

「ってあれ？ちょっと…」

「どうした」

「うーん…」

どうやら、この逆さ吊りは起点となる縄…つまり、桜が引っ張っている縄を持っていないと維持出来ないらしい
必死に結びつけるところを探すが、見つからない。
縄を引っ張りながら手を伸ばしてみるが、これまた届かない。

「むう…あう…」

「……………」

「よっしょー！うう…届かない…」

「はあ…」

いつまでも逆さ吊りになってるのも辛い。

上体を起こし、足の縄を噛み切る。

そして、着地。

「わわっ！」

「まったく…罌に掛けた後のことも考えておけよ……」

「あう……」

もはや無抵抗の桜に近付き…頭を軽く叩く。

「はえ？」

「次はちゃんとやれよ」

「あ…うん……」

「じゃあな。頑張れよ」

そのまま窓から飛び出す。

「ああっ！なんで出入口から出ないのさ！」

「さっきのは上手かったけど、出入口のはバレバレだからな」

「もう！」

そして、堀に飛び込む。

大きく息を吸い、潜水。

隠し水路へと向かう。

それにしても、ホント、なんであんな単純な罠に引っかかったんだろ…。

焼きが回ってきたのかな…。

うーん…まだ二十歳くらいなのに…。

「目標、認識しました。攻撃します」

ええっ！？

水中でも声を発してる！？

って、そんなことに感心してる場合じゃない。

素早く近付いてくるユカラをなんとか間一髪でかわし、水路へと逃げ込む。

「目標、喪失。対象搜索機能に移行します」

まずいなあ…。

あれ、風華を見つけたやつだよな…。

いくら水路が迷路になっても無駄か…。

「検索中…」

ユカラの無機質な声を後ろに聞きながら、最短距離で水路から脱出する。

「はぁ…はぁ…。追いかけて…くるよな…」

間違いなく。

でも…ちよつと息を長くしすぎたみたいだ…。
休憩…。

「はぁ…はぁ…」

小部屋に響く息遣い。

それにしても、ユカラは堀に誰かが来るまで、ずっと待ってたんだろうか…。

そうだとしたら、相当息が長いことになる。

ていうか、今もまだ水路にいるはずだし…。

と、ユカラの気配が足元あたりに来た頃に、相棒を支えにして立ち上がる。

とりあえず、この部屋から出ないと…。

「姉ちゃん発見!」

「ふ、風華…」

「ありやりや? だいぶ弱ってる? ていうか、ビショビショだね。お風呂にでも入ってたの?」

「……………」

「ふふふ…まあいいや。私は手加減しないからね!」

「臨むところだ…」

「目標、再認識。攻撃します」

「くっ…」

ユカラ、思ったより速かったな…。
挟み撃ち…。
万事、休す…か。

「痛い…」

「ん…？」

「痛いよ…」

「ユ、ユカラ？」

「ゴホツ…！」

咳と共に、大量の吐血をする。

「ユカラ！」

「おい！ユカラ！」

「損傷大。自己修復機能起動。…続行可能。全ての脅威を排除します」

「な、何…？」

「風華！離れる！」

「あつつ…」

風華を突き飛ばす。

くそっ！

なんだってんだ！

「対象壱に敵意を確認。排除します」

「伏せろ！」

「ひゃう！」

放たれた無数の凶器を相棒で弾き飛ばしていく。

「背後からの接近を確認。応戦します」

「はあっ！」

「損傷軽微」

「くっ！硬い…！紅葉！」

「そら！」

打ち落とした武器の中から薙刀を選び、香具夜に投げる。

それにしても、曲刀、直刀、大剣、ヌンチャク、釘、矢、金槌…。
ホントになんでもありだな…。

「感心してる場合じゃないでしょ！」

「ああ。分かってる！」

「対象壺、参に敵意を確認。排除します」

笛を咥え、特殊な信号を鳴らす。

「隊長！」「参上つかまつりました！」「なんですか…この殺気は

…！」

「任務！ユカラの無力化、そして拘束だ！全力でかかれ！半端だと死ぬぞ！」

「はっ！」

「風華を安全な場所へ！」

「大丈夫だ。もうやった」

「犬千代！」

「僕と風華が待機してる。怪我をしたら後退するんだ」

「分かった」

「対象多数。敵意を確認。排除します」

「かかれ！」

昼下がり、楽しいはずの時間がこんなことになってしまっなんて…。

ユカラ…。

本当にお前は何者なんだ…。

28（後書き）

次からしばらく血生臭い展開になってしまっています。
その間は殺伐戦国絵巻に…。

狭い通路では、一気に多くは当たれないが、挟み込めば逃げられない。

よほどの突破力がなければ、だけど。

「状況把握。攻撃に移ります」

瞬間、再び無数の凶器が舞う。

まったく…これだけ大量のものをどこから出してるんだ…。

弾き返しながら、説明を加える。

「ユカラ…いや…やつは見た通り、武器を射出する技術に長けている！それと、数の制限はないと思え！いくらでも出してくるぞ！」

「…いえ。どうやら、同じものを使いまわしているようです」

言われてみて良く見てみると、確かに、壁に刺さったものや弾かれたもの、とにかく、やつにとって、それだけでは全く殺傷能力のない武器は次々と消えていつている。

しかし、そういった意味で殺傷能力はないはずの、香具夜が持つてゐる薙刀は消えない。

「…なんだ？」

「分かりません」

「まあいい。かかれ！」

射出と射出の間。

少しの間だけ、止まるときがある。それは、朝でも今でも同じだった。

その一瞬の間を利用して、一気に近付く。

「対象接近。迎撃します」

やつの手には、いつの間にか大きな剣が握られていた。

「くっ！」

「……………」

辛うじてその切先をかわし、背後に回りこむ。

「はぁっ！」

そして、強烈な一撃を加える。

「…損傷中。排除、続行可能」（痛いよ…）

「くうっ！」

「紅葉！？」「隊長！」

またか…またなのか…。

ユカラ…。

「……………」

「はっ！」

「ぐっ……………」

加助が私を突き飛ばす。

次の瞬間、様々な武器が私にいた空間を串刺しにする。

「隊長！しっかりしてください！」

「紅葉！またなの！？」

「くっ…すまない…」

「謝ってる場合じゃないでしょ！」

「ああ…」

体勢を立て直し、しばらく様子を見る。

加助、雄輝、勝元の三人は、息の合った攻撃で、やつに確実に一撃を入れていく。

「脚部、損傷大」（痛い…痛いよ…）

「うう…」

「紅葉！？」

「ああ…大丈夫だ…大丈夫…」

呪文のように繰り返す。

大丈夫、大丈夫…。

「はあっ！」

「右上腕部、損傷甚大。自己修復機能の最大値を超えます」（助けて…）

大丈夫、大丈夫…。

あれはユカラじゃない。

ユカラじゃない…。

「右上腕部の修復を優先」（もう嫌だよ…痛い…痛いよ…）

ユカラじゃ…ない…？

「隊長！？」

いや、ユカラだ。

この温かさは、たしかにユカラのもの。
無機質な何かじゃない。

ユカラだ。

「姉ちゃん！」

足輪を買ってやった時の複雑な笑み。

チビたちを慈しむような眼差し。

必ずおやつを獲得してやると燃える瞳。

「対象壱の排除が完了しました」（温かい…）

なんだろうな…。

今日会ったばかりなのに…。

放っておけない気がして。

不思議な気持ち…。

はは…記憶の流入ってやつなのかな…。

「対象壱の壱の壱壱…か、かか、かんかん…」（ねえ…ちゃん…）
「姉ちゃん！」

何かが抜ける感触がした。

同時に、視界が赤く染まっていく。

「ねえ…ちゃん…あたしの…」

「ユ…カラ…良かった…」

薄れゆく意識の中で

「もう…大丈夫…夫…だよな…」

「姉ちゃん…あたしの…大切な…」

考えることは

「うわあああああ！」

楽しい昼下がりの、おやつ争奪戦のことだった。

目が覚めた。

…覚めたという言葉が適切なのかは分からないけど。

真っ暗。

何も見えない。

でも、意識ははっきりとしていて。

これが死後の世界なのか…？

それなら…あまりにも寂しい…。

…身体のあちこちが痛いな。

まあ、串刺しになって死んだなら、それが妥当な線だろう。

ダメだ…。

全身の痛みに加え、手足が全く言うことを聞かない…。

ずっとこのままなのかな…。

死んでも傷は癒えるのかな…。

この真っ暗な世界で一人ぼっち…か。

いつの間にか眠っていたらしい。

相も変わらず、真っ暗な世界だった。

「ユカラ…」

不思議な響きだ。

革屋で、葛葉は何か固い意思を持って、この名前を口にしたようだった。

「…これから始まる物語」

「え？」

「ユカラ。ねーねーも、いい名前だと思うよね」

「葛葉…？」

「はい、これ。ねーねーのおやつだよ」

「おやつ…？」

「あーんして」

「んう…。葛葉…？誰と喋ってるの…？」

「風華…？」

「あつ！姉ちゃん！」

「風華…なのか…？」

次の瞬間、強烈な痛みが身体中を駆け巡る。

「良かった…！姉ちゃん…！」

「いたたたたっ！」

「あ…ごめん…」

そして、そつとした温かさを感じる。

「良かった…。ホントに…良かった…！」

「お母さあん。それじゃあ、ねーねーがおやつ食べられないよ」

「ああ…そうだね…。って、葛葉。姉ちゃんはまだ絶対安静なの。おやつはまた今度」

「でも、ねーねー、ごはん食べてないよ？おなか空いてるんじゃないの？」

「じゃあ…これとこれは葛葉が食べなさい。あとは、姉ちゃんにあげてもいいから」

「うん！」

「あぁっ！こら！手で食べない！お匙を使いなさい！」

「むう…。でも、これ、おっきいおさじ…」

「もう…」

固い何かを漁るような、ガチャガチャという音がする。

「これ、使つときなさい。金属で出来てるから、あんまり噛んじやダメだよ」

「分かった」

「私、みんなに知らせてくるね」

「行つてらっしゃい」

どんどん遠ざかっていく風華の足音。

向き、距離からして、ここは私の部屋か…。

それにしても、葛葉は結局、匙を噛んでしまっているようだ。歯が欠けたりしなければいいんだけど…。

「ん。おいしい」

「全部食べてもいいんだぞ」

「ダメ。これはねーねーの。はい、あーんして」

「むう…」

「むう…じゃないの。あーんして」

「あーん…」

ひんやりと、金属の冷たさが舌を撫でる。

口を閉じると、匙が引き抜かれて。
豆腐と蜂蜜の甘さが広がる。

「美味しいな」

「うん！はい、次だよ。あーんして」

「あーん…」

そうしているうちに、たくさんの足音が近付いてくる。

「隊長！」「生き返ったってマジですか！？」

「バカ！そもそも死んでねえよ！」「バカかお前！？」「良かった

あ…」

「ゆ、夢じゃないですね！？」「夕飯のときなんか、葬式みたい
で…」

押し寄せる声、声、声。

それらみんなが、私を心配したり、喜びを表すものだった。
…何か、溢れてくるものがあつた。

「ねーねー、どこか痛いのか？」

「ううん…。痛くない…。けど、温かい…」

「あたたかい」

別れのときに流すものじゃない。

再会したときに流すんだ。

涙というものは。

また会えたね。

また一緒にいられるね。
つて。

静かな寝息が聞こえる。

チビたちのものと、風華のもの。

私はなぜか目が冴えて眠れなかった。

でも、身体中の痛みで動き回れたものでもなかった。

どうしたものかと思案していると、空気の流れが変わる。

「紅葉」

「…犬千代？」

「ああ。ちよつとごめんな」

「つう…」

抱え上げられ身体が曲がったために、全身に刺すような痛みが走る。

「大丈夫か？」

「あ、ああ…。なんとか…。でも、どこに行くんだ…？」

「ちよつとな…」

慎重に、ゆっくりと運んでくれたので、それ以降はあまり痛くなかった。

…それにしても、どこに行くんだろう。

「犬千代…」

「もうすぐだから」

「…うん」

冷たい空気が頬を撫でる。

外…ではないな…。

「ここは…」

「桜。起きてるか？」

「うん…。いろはねえ、連れてきたの？」

「ああ」

戸が軋む音がした。

桜が部屋から出てきたらしい。

「ボクは、いろはねえの部屋で寝るよ」

「え…？どういうことだ？」

「じゃあね」

足音が遠ざかっていく。

そして、布団らしきものの上に下ろされる。

というか、桜の布団なんだろう。

まだ少し温かい。

「ごめんな…。こういうことしか出来なくて」

「え…？」

「…僕たちには、どうして良いか分からなかった。たぶん、紅葉にしか出来ないんだろう」

独り言のように呟く利家。

…そつえば、ここは血の匂いが酷い。

血の匂い…。

痛む腕を無理に伸ばし、匂いの元に触れてみる。

「ユ…カラ…？」

「ああ。紅葉が倒れたあと、ユカラは恐慌状態に陥ってな…」

この様子からすると…。

恐慌状態のあと、精神が重さに耐え切れなくなって…といったところなんだろう…。

「紅葉…」

「分かった。分かっている」

「ごめん…」

「謝ることじゃないだろう？」

「そうかもしれない。でも、ごめん」

そう言つて、利家はゆっくりと立ち去つていった。

…利家や、他のみんなが謝ることじゃない。

これは事故…。

躓^{つまづ}いて前の人を押してしまった、とかそういったもの。

ユカラを止めようとして、私が串刺しになった。

誰のせいでもない。

ただの事故。

「ユカラ…」

はは…それにしても、犬千代は気が利かないな…。

無理矢理に身体を引きずつて、ユカラの隣に座る。

血…。

匂いが酷いな…。

着替えさせてもらってないんだろうか…。

「対象を捕捉…」

「ユカラ…」

今にも消えてしまいそうな声で、例の感情のない台詞を言う。

「つつう…！」

腹のあたりが痛い。

一番酷く刺されたところかな…。

でも、ユカラの痛みに比べたら、軽いものなんだろう。

これくらい…我慢我慢…。

「対象を捕捉…」

「はは…それしか言えないのか…？」

「対象を捕捉…」

ユカラの肩を抱く。

見た目よりずっと華奢な身体だった。

「対象の接近を確認…」

「ふふ…お前が接近したんだろ…」

「対象を捕捉…」

思いつきり抱き締めてやりたいところだけど、身体が言うことを聞かない。

どうやら、これが限界みたいだ。

「じゃあ、少しだけ手伝ってあげる」

「……？」

「禁忌・覚醒」

柔らかい暖かさが全身をくるんだかと思うと、痛みが引いたように思えた。

「紅葉の傷は完治してるよ。風華が”再生”を使ったからね…。でも、まだ痛みがあるのは、身体が傷のことを覚えてるから。…だから今、僅かな間だけなんだけど、傷のことを忘れさせてあげる」

「響か…？」

「ふふ…どうかな。響であって響でない。わたしは”響”」

「どういうことだ…？」

「お喋りしてる時間はない。制限時間は着実に減っていつてる。じ

やあね。お休み、紅葉」

『おやすみなさい、お母さん』

「ああ…お休み…」

響であって響でない？

遠ざかっていく”ふたつの”気配。

…聞きなおしてる時間はないんだったな。

「対象と接触…」

そんな台詞が聞こえるが、構わない。

私は、ユカラを抱き締めた。

「ユカラ…。痛かったよな…苦しかったよな…」

「対象を捕捉…」

「はは…お前は、もっと意思伝達方法を学ぶべきだな…」

「対象を捕捉…」

「もう大丈夫だから…。もう痛くない…苦しくない…」

「対象を捕捉…」

「私がいる。みんながいる。だから、もう大丈夫」

「……………」

「安心して…」

「対象を…認識しました…」
「ユカラ…？」

ユカラの頬を伝うものがあつた。
温かい、雫。

「姉ちゃん…あたし…あたし…」

「ユカラ…」

「もう嫌だよ…。痛いのも…苦しいのも…」

「うん。分かてる」

「怖い…怖かった…」

「うん。大丈夫だから。もう大丈夫」

「姉ちゃん…姉ちゃん…」

「ユカラ…」

「うつ…うつ…うええ…」

「……………」

次第に戻ってくる痛み。
でも、そんなのは関係ない。
いつまでも、いつまでも、ユカラを抱き締めていた。

ふと目が覚めた。

目を擦り、大きく伸びをする。

…あれ？

身体が随分軽くなった気がする。

「うん…」

ユカラは、私の膝の上で寝ていた。

…どうやら私は、座りながら眠ってたらしい。

そういう訓練は受けていたものの、なんとも器用なものだ。

「あ…」

私がごたごたとやってるうちに起きてしまったらしい。

焦点の定まらない目でこちらを見つめる。

「おはよう」

「おはよ…」

「もうちょっと寝ててもいいんだぞ」

「うん…。でも、起きる…」

「そうか」

ユカラは起き上がり、私も二回目の伸びをして立ち上がる。

「…昨日はありがと、姉ちゃん」

「え？なんて？」

「えへへ、なんでもない」

クルリと回って、笑ってみせる。

ふふ、私の方こそ、ありがとうだよ、ユカラ。

さて、朝食を食べに…といきたいところだが。

「まずは風呂…だな」

「なんで？」

「なんでって…」

可愛く首を傾げられても困る。

…こんな血生臭いやつの隣で、オレは飯なんか食えんぞ。

「とにかく、風呂だ、風呂！」

「わ、分かったから、そんな引つ張らないでよ！」

引つ張らないでいられるか。

血塗れの娘を連れ回す趣味もない。

と、途中で灯に会ってしまった。

「あ、隊長…とユカラさん？もう起きられるんですか？」

「ああ。心配を掛けたな」

「いえ…。それより、そんなに急いでどちらへ？」

何も言わずにユカラをつき出す。

すると、灯は苦笑いを浮かべる。

「ああ…。ご、ごゆるりと…」

そして、ユカラを出来るだけ見ないようにして立ち去る。

…これが普通の反応。

「どうしたんだろ？」

ユカラはまた首を傾げた。

基本的に朝風呂はしない。

だから、湯は張られていないのが普通なんだけど。
でも、なぜか今日は張られていた。

「はあゝ」

「広いねゝ」

「ああ。二十人いてもゆったり入れるからな」
「へえゝ」

まあ、二十人がいつぺんに入ることなんてないんだけど。

男の時間、女の時間でいたい別れてるし、ある程度の組分けもあるみたいだ。

でも、私はいつでも構わず入っていくから、もしかしたら、その暗黙の規則を知らないのでは…なんて噂があるようだ。

まったく失礼な噂だ。

だいたい、男だ女だと区別するのがおかしいんだ。

狼だった頃は、そんなことほとんど考えなかったな…。

「晴れの日は 明るい歌を歌いましょ

曇りの日は 楽しい歌を歌いましょ

雨の日は 嬉しい歌を歌いましょ

どんな日も 幸せな歌でみんなニコニコ」

「何の歌なんだ？」

「歌の歌。昨日、光が歌ってくれたんだ。でも、お礼、言えなかつ

た…。光…泣いてた…。あたし…何も出来なくて…何もしなくて…
「今日言えは良いじゃないか。もちろん、お礼はすぐに言うのが一番良い。でも、感謝の気持ちをちゃんと込めれば、いつ言っても伝わる」

「…そうだよな。ちゃんと、お礼、言わないと！」

グツと握り拳を作る。

…それにしても

「ん？どうしたの、姉ちゃん？」

「あ、いや…。なんでもない」

まだまだ油断は出来ない。

見たところ、ユカラは望より少し上といったところだ。

成長の余地はあるからな…。

私なんか、もう…。

香具夜、あれだけ大きいんだし、ちょっと分けてくれないかな…。

「姉ちゃん、髪、洗ってあげよつか？」

「え？ああ、そうか。ありがとう」

「えへへ」

湯船から上がり、ユカラの隣に座る。

「綺麗な髪…。お手入れとかしてるの？」

「いや。まったく」

「ふうん。良いなあ」

「ユカラの髪も綺麗じゃないか」

「あたしはダメだよ」

「なんで？」

腰を少し越すくらいの長さで、黄金色に光っている。
私の髪なんかより、ずっと綺麗なのに…。

「あたしの髪…うっん、あたし自身、作られたもの。全部偽物」
「……？」

「あたしは、ただ実験のためだけに作られた。最強の兵士を開発するために。…あたしの前に、十二人。十二人が、望まぬ生を受け、弄ばれ、殺された。あたしは、たまたま上手くいった。あいつらの思う通りの成果が得られた…。ホントはね、今日が戦場投入実験の日だったの。今日、たくさんの人を殺すはずだったの」

ユカラは、自分の身体を抱くようにして、震え始める。

「でも、嫌だよね…？自分のせいで、人が死ぬんだよ…？血が…血が出て…。血？血って何？分からない…見えない…。これ…もしかして血？血で濡れてるの？嫌…嫌あ…」

まずい…！

「ユカラ！しっかりしろ！」

「姉ちゃん…？あ…ああ…どうしたの…？血だらけだよ…？」

「これは血じゃない！ただのお湯だ！」

「だって、赤い…。赤い…？赤いつて何…？何色なの…？」

もしかして、赤を知覚出来ないのか…？
だから、さつきも…。

「姉ちゃん…またあたしがやったの…？またあたしが…？」
「ユカラ！」

でも、これではまた繰り返しだ…！

「あうう…」

「ユカラ…」

どうすれば良いのか分からない。

だから、私には抱き締めてやることしか出来ない。

「分かるか？聞こえるか？オレの心臓の音。オレは生きてる。傷付いてもない」

「うう…」

「ここにはユカラに人を殺させようとしてる人間はいない」

「……………」

「作られたもの？そんなこと関係ない。ユカラはユカラ。私たちの大切な家族」

「うっ…うっ…」

「もう大丈夫。そう言ったよな？」

「うう…姉ちゃぁん…」

「大丈夫だから…」

ユカラはまた泣いた。

ふふ…ホント…泣き虫だよな…。

31（後書き）

血生臭い雰囲気はここまでだと思います。
いろんな意味で。

「これは？」

「白」

「こっちは？」

「それも白」

「じゃあ、これ」

「それは藍色」

「ふむ…」

利家が見せた服は、最初が赤、次が白、最後が藍色だった。

「隙あり！」

「赤…。血の色が分からないようにして…」

「あ、あれ？」

「でも、そんな…。人間を作るなんて、やっぱり信じられない…」

「としいい？」

「なんだ」

キツと睨まれる桜。

「なんでもないです…」

そして、すごすごと戻っていった。

…桜も桜だけど、利家は水を掛けられたことに気付いてないのか？
 だとしたら、相当鈍感…。

「ねえ、服の色がどうかしたの？」

「ん？ああ、いや、なんでもないよ…。そうだ、その服、どうだ？

衛士の制服なんだけど」

「うん、すつごく良いよ！着心地もいいし、動きやすいし。でも、姉ちゃんのはちよつと違うんだね」

「そりやそうだよ。なにしろ、姉ちゃんは衛士長だもん！」

「えじちよう？」

「ああ。まあ…村長みたいなものだ」

「つまり、すつごく偉い人だよ」

「そ、そこまでは…」

「ええー！すごーい！姉ちゃん、偉い人なんだね！」

「そうそう。ユカラも隊長のこと、よく拝んどいた方がいいよ」

「か、香具夜！」

「ああ、これは失礼。楽しいお喋りの邪魔をしてしまいましたね。私は引き続き、こんなボトボトにしてくれた犯人を追跡します」

そう言つて、髪から水を滴らせながら走つていつてしまった。

「むう…」

「ユカラ…オレを拝んでも何の御利益もないぞ…」

「ふふ、良いじゃない。こういうのは気持ちの問題だよ」

「気持ちつてなあ…。拝まれる方の方になつてくれ…」

「私は姉ちゃんほど偉くはないからね…。私も拝んどこ」

「ふ、風華！」

と、二人の後ろに忍び寄る影が。

「バッシャーッ！」

「きゃっ！冷た！」

「……………」

桶いっぱいの水を掛けられれば、そりや冷たいだろうよ。

…しかしユカラは、振り向きもせず、水の掛からない的確な距離を測り、実際、ちゃんと避けていた。

それは、並大抵の訓練や経験で出来る動きではない。

「対象を確認。狙撃機能へ移行します」

「ユ、ユカラ…？」

ユカラが空中から取り出したのは…水鉄砲。

手近にあったタライで素早く弾薬を補充して”対象”へ噴射する。
…ていうか、武器以外も出せるんだな。

いや、ある意味武器か…。

「あう…。ず、ずるいよ！水鉄砲なんて！」

「不意打ちも充分ずるいと思うよ？ふふ、覚悟しなさいよね…」

「うう…。さ、桜お姉ちゃん！」

半泣きになりながら、望はどこかに走っていった。

「逃がさないよ！」

それを追って、ユカラも走っていった。

「あう…ボトボトだよ…。日に日に酷くなっていくね…」

「オレは全然濡れてないけど」

「私は姉ちゃんほど感覚も鋭くないし、勘も良くないの！」

「それくらいは訓練でどうにでもなる。訓練、受けてみるか？」

「…遠慮しとくよ」

「そうか。残念だ」

でもまあ、その方が良さだろうがな。

私のときは…母さん、特別厳しかったからな…。
目隠しして真剣で戦うなんて…。
今でも、ぞっとする内容だった。

「ユカラ。この色だけど…」

「いないよ」

「…あれ？ていうか、僕、なんでこんなに濡れてるんだ？」

「…桜に掛けられたの、気付いてなかったのか？」

「全く」

「はあ…。昔からそうだよ…。集中すると周りが全く見えなくなるの、悪い癖だよ」

「あんまり褒めないでくれ」

「褒めてない」

風華が洗濯物に目を戻した瞬間、利家は思いつき引き寄せた。
私も一步横に避けると、私と風華を結ぶ直線上に放物線が描かれる。
しかし風華がそれを見ることはなく、利家に文句を言っている。

「ああ！」

「ユカラ。お前まで桜に抱き込まれたのか？」

次なる一撃をかわし、手で即席の水鉄砲を作り、響に掛けてやる。

「やあん…」

「まだまだ甘いな」

「撃てー！」

ユカラと響は新しい水鉄砲を取り出し、さらに桜、望、光、葛葉の
六人六方向からの攻撃。

でも、水鉄砲を使ってる分、速さはあるが攻撃範囲は狭くて。

一気に加速して葛葉に接近。

腰に差しであつた水鉄砲を盗つて、一人ずつ仕留めていく。

「顔を洗つて出直してくるんだな」

「くっ…。次の作戦、考えにいくよ！」

「くっ。おおーっ！」

いつか、私を完膚なきまでに叩きのめすような作戦、立ててくれよ。楽しみにしてるからな。

「もう！ユカラまで！まったく…何考えてるのかな！」

「まあ、みんな楽しんでるみたいだし、良いじゃないか」

「私は全然楽しくないよ！」

頬を膨らまし、乱暴にゴシゴシと洗濯物を洗う。

でも、やっぱり本気でそう思っているわけではないらしく。

「くっ…ふふふ」

「顔がニヤけてるぞ」

「ふふふ。だって、楽しいんだもん」

みんなが楽しいから、自分も楽しくなる。

でも、自分が楽しいから、みんなも楽しくなる。

ひとつの輪のようになって、楽しさは連鎖する。

32（後書き）

竹筒の水鉄砲と言って、最近の子たちは分かるのでしょうか？
自分は一回だけ作ったことがあるんですが。

一日分の洗濯物だけだ。

前と比べるとずっと短い時間で終わるはずなのに、実際は前と変わらない。

まあ、イタズラ好きのあいづらのせいなんだけど、咎めることはないだろう。

「楽しく遊んでるやつらを怒ることは出来ない」

「でも、桜たちも手伝ってくれたら、ずっと早く終わるはずだよ？」

「それはそうだけど」

「ユカラも協力して、ちゃんと終わってから遊んでよ。なんで途中から、桜と一緒に遊んでるのよ」

「う、ごめんなさい…」

ユカラは別に悪いことをしたわけでもないのに、風華の剣幕に圧されて謝ってしまう。

「姉ちゃんから言っつてよ。私の言うことなんて、全然聞かないんだから！」

「それは、オレの場合も同じだと思うけど」

「…………。もう…何か良い方法はないのかな…」

と言って、薬棚を見渡す。

「従順になる薬なんてあるのかな…。大人しくなる薬とか…。鎮静剤はまた違っし…」

…薬でなんとかする気なんだろうか？

無理だと思っけど…。

「姉ちゃん」

「ん？」

「これ、どう？」

と、ユカは長刀を構えてみせる。

「長すぎじゃないか？なんだ、ほら。この前の大剣なんかはどうだ？」

「これ？」

長刀を消して、空中から幅の広い大剣を取り出す。

「風華から、これは”術式”の一種だと聞かされても、不思議なものとは思議だ。
あらゆる武器を意のままに取り出す様子は、まさに武神といったかんじ。」

「ねえ、どうなの？」

「あ、ああ。もう少し小振りの方が良いだろうな」

「うーん…」

「ユカは、大きな武器が好きなの？」

何やら怪しげな、薬の材料と思われるものを抱えて、風華が質問する。

「確かに、さつきから取り出すのは幅広の大剣、長刀、青龍刀、槍と、やたら大きなものばかりだ。」

「うん！好きだよ！だって、大きい武器って格好いいじゃない！」
「そ、そう…？」

「うん！」

「でもな、ユカラ。自分に合った武器でないと、力を充分に発揮出来ないぞ」

「むう……」

まあ、使ってみないと分からないけどな。

「ちょっと素振りしてみる。良いかんじなら、それでいこう」

「ええ！？ここではやめてよ！」

「あー、分かった分かった。じゃあ、外に行こうか」
「うん」

風華に追い出される形で、医療室を後にする。

「でも、なんで戦闘班に入ろうと思ったんだ？」

「姉ちゃん、戦闘班でしょ？だから、何かの役に立ちたいなって思っ
つて」

「そんな……どこに入っても役に立つてもらえるし、それに、無理し
てどこかに所属しようと思わなくてもいいんだぞ」

「無理なんかしてないよ。あたしはあたしのやりたいようにしてる
だけ」

「……そうか」

前にも、似たようなことを風華から聞いたな。

役に立ちたいという気持ちは嬉しいけど、何か複雑なかんじ。
特に戦闘班なんかは、戦ともなれば最前線で戦うことになる。

厳しい訓練とたくさんの経験を積んでいるとはいえ、危険なものには
変わらない。

そこに、こんなに小さな子を放り込む。
やっぱり、そんなこと……。

「この力を上手く使いたい。あたしは元より、戦うために生まれてきた。だから、戦闘班が一番の居場所なの」

私の考えを遮るように、でも、独り言のように呟く。
だからこそ、その裏側が見えた気がした。

「…それでいいのか？」

「うん」

「…本当に？」

「うん。あたしが、自分自身で決めたことだから」

「じゃあ、なんでそんなに哀しそうな顔をする？」

「え…？」

慌てて、大剣の光る刃に顔を映して確認する。

「ふ、普通じゃない！」

「そうか？オレには、哀しそうに見えるけど」

「哀しくなんて…ない」

「戦闘班じゃなくても…医務班でもいいんだぞ？」

「な、なんで医務班なんか…！」

「戦うために生まれてきた。そう言ったな？」

「う、うん…」

「じゃあ、ユカラ自身、戦いたいと思ってるのか？」

「あ、当たり前…じゃない…」

今朝のこともある。

それが本心ではないのは明らかだ。

「ユカラの人生だ。他人の私がどうこう言えるものではない。でも、

ひとつだけ言わせてくれ。…自分に正直に生きなさい。そうしないと、あとで後悔することになるから。自分だけには、嘘をついちゃダメ」

「……………」

「じゃあ、改めて聞く。…本当に、戦闘班でいいんだな？」

「うつ…うつ…。嫌だよ…。もう…もう…傷付けたくない…。あたしは…あたしは…兵器なんかじゃない…！」

「ああ。お前はユカラ。泣き虫だけど、オレの可愛い妹だ」

「姉ちゃん…姉ちゃん…。うつ…うええ…」

大剣は跡形もなく消え、ユカラの温かい涙だけが残った。

再び医療室。

「あれ？早かったんだね」

「いや、そうじゃなくてな」

「風華。あたし、医務班に入りたい！」

「え？どういうこと？」

「あたし、自分に正直になるの！」

「……………」

「みんなを助けたいの！怪我をした人、病気の人…。あたしでも…兵器として生まれたあたしでも、救えるものがあるんだって！」

「…そう。それなら大丈夫ね。その心、忘れちゃダメだよ」

「うん！」

「じゃあ、まずは薬草薬石の暗記からだね」

そして、薬棚の端のものから順に名前を言っていく。

…私には無理だな。

でも、ユカラは本当に楽しそうで。

救えるもの、か。

私の場合は、守れるもの、だろうな。

この手で守れるものは、必ず守りきる。

そう、誓ったから。

33（後書き）

ユカラは医務班に就きました。

さて、どんな働きを見せてくれるのでしょうか？

「これは？」

「セウナ」

「正解。じゃあ、こっちは？」

「ナムナ」「ナムウク」

「あれ？どっち？」

「葉脈の並びが交互だから、ナムナでしょ」

「え。ナムウクだよ」

「絶対ナムナ」

「むう……」

「ユカラが正解。ナムナは交互、ナムウクは同じ場所からだよ」

「はあ。やっぱり、望は外で遊んでる方が楽しい！」

「雨が降ってるんだから、仕方ないでしょ。それに、望もだいぶん良
い線いつてるじゃない」

「そ、そうかな？」

「うん。すごく良いかんじだよ」

「えへへ」

「じゃあ、次いくよ？」

「うん！」

巳の刻くらいから雨が降り始め、正午を前にして豪雨となっている。
洗濯物は早々に取り込み、今は風呂場や廊下で干している。
そして、外では遊べないからと帰ってきたチビたちは、ユカラと一
緒に薬草薬鉋の暗記に挑戦していたが、今は望しかない。

「ん」

「葛葉、響。床に、落書きしちゃ、ダメだよ」

「ええっ！？」

「大丈夫だ。水で綺麗に消える墨だから」

「見て見て」。あぶらげの絵」

「…もつと良い絵、描きなよ。わたしは、お母さんの絵だよ」

「上手く描けてるな」

「えへへ、そうでしょ」

…どう見ても、達人芸としか思えない絵。

鏡を見てるとしか思えないくらいのもものが、そこに描かれていた。

「うーん…えつと…」

描いてもいいと分かれば、光も筆をとって床に描き始める。

光の方は、年相応といったかんじ。

ていうか、響のが不相応すぎるのか…。

一瞬、天才という二文字が頭の中をよぎっていった。

「オレも何か描いてみるかな」

「おお」

筆をとり、サラサラと床の上を滑らせていく。

…ものの数分で描きあげてしまった。

「何これ？狼の絵？」

「ああ。オレの姉貴の一人なんだけど、ホントに器量良しで綺麗で

…」

「ふうん」

「憧れだったなあ。ああいう狼になりたい、っていう目標でもあった」

でも、もう…いないよな。

十何年も前の話だ。

姉ちゃん…。

ちゃんとお別れも言えなかったな…。

「ワウ」

『…そうだよな。きっと、姉貴も…母さんも…。ありがとう、明日香』

「お母さん、どうしたの？泣いてるの？」

「うん。再会の涙。また会えたねって」

誰も、遣された人々が哀しむことを望んだりはないだろう。

自分のために涙を流すくらいなら、笑っていてほしいと願うんじゃないか？

大丈夫だよ、って。

元気でやっていけるよ、って。

もう会えなくなるわけじゃないんだ。

これからは、ずっと傍にいててくれる。

みんなの一番近くに。

…心の中に。

涙は、別れるときに流すんじゃない。

また会えたときに流すんだ。

いつも、私自身が言ってること。

明日香に思い出させてもらうとは思わなかったけど。

うん。

私、ちゃんと元気でやってるよ。

みんなと、幸せに暮らしてるよ。

だから、心配しなくても大丈夫だよ。

気がつくと、森の中にいた。

…さつきまで医療室にいたよな？
なんで？

『紅葉』

『え…？』

振り返ると、姉ちゃんがいて。

『な、なんで！？』

『ふふ、紅葉のことが気になって』

『姉ちゃん…姉ちゃあ…』

『あら。泣き虫は治ってなかったの？』

『会いたかった…！会いたかったよお…！』

『うん。私も』

『私、ずっと心残りで…。みんなにお別れが言えなかったこと…』

『あのときは急だったからね』

『だから…私、ちゃんとお別…』

『ダメ。泣いてるときにお別れしちゃダメって、いつも言うてるでしょ？』

『…うん』

『それに、それは再会の涙でしょ？私は流せないけど、また会えたねって証だから。お別れを言っちゃダメな理由がふたつもあるんだから、ね？』

『うん。言わない』

『ふふ、えらいね、紅葉は』

そう言っで、私の頬を優しく舐めてくれる。

『ねえ…』

『もう…いつまで経っても甘えたさんなのね。ほら、来なさい』

『えへへ』

横になった姉ちゃんのお腹の上に頭を置いて、寝かせてもらう。
ふわふわの綿毛が、本当に気持ち良くて。

『利家くんにも、もうちょっと甘えてあげたら？』

『なっ!？』

『ふふ、ずっと紅葉の傍にいたからね』

『姉ちゃん!』

『ふふふ。私も利家くんは良いと思うよ。誠実そうだし』

『でも、政務ばかりで…。会うのは夕飯のときくらい…』

『紅葉から会いに行つてあげれば良いじゃない』

『そ、そんなこと…出来ないよ…』

『はあ…。二人とも奥手つて、すごく大変ね』

『お、奥手つて…』

『思いきつて行つてみなさいよ。きっと、利家くんも待ってるわ』

『よ』

『うん…。分かった…』

『お休み、紅葉。また会おうね。』

今日見る夢は 何色だろう？

明日の天気は どうなるのかな？

気になるけれど もう寝ようか

明日はきつと 今日より良い日だから』

心地良い響き。

懐かしい姉ちゃんの…子守唄…。

ゆらゆらと揺れる感覚。

「お昼ごはんだよ。お母さん起きて〜！」
「ん…？ああ…そうか」

夢…だったのか？

でも、良かった…。

姉ちゃんに、また会えた。

「えへへ。お母さん、嬉しそうな顔、してる」

「そうかもな」

「なんで？」

「内緒だよ」

「ええ〜」

そして、響と光を引き寄せて頭を撫でてやる。

「えへへ。痛いよ〜」「ん〜」

「よし、昼ごはん、食べにいくか！」

「「うん！」」「」

姉ちゃんに教わったこと。

みんなに教わったこと。

次は、私が教えていく番。

そうやって、繋がっていくんだな。

34（後書き）

紅葉は甘えたさんだったんですね。
意外でしたか？

「今日は少し西洋風にしてみました」

「この赤いの、何？」

「トマトという西洋の野菜を使った調味料らしいですよ。名前は…えっと…忘れました」

「…全体的に酸っぱい匂いがするな。それに…これはかしわの匂いか…？」

「かしわ…とは？」

「かしわはかしわだろ」

「鶏肉のことですよ。この辺の方言なんです」

「へえ」。私のところでは言いませんでしたね…。まあとにかく、鶏肉で合ってますよ。白ご飯に、その調味料を絡めて鶏肉を入れたんです。それを卵焼きで包んで」

「ふうん」

「オムライスって言うらしいですよ、西洋では」

「へえ」

「すっぱあまい」

「うん。鶏肉が美味しいね」

「響。それじゃ、葛葉の返答に、なってないよ」

「この卵焼き、甘くないよね」

「この鶏飯に充分味が付いてるからじゃない？」

「そうですね。桜さん、がつついていてるだけに見えるけど、意外と味わってるんですね」

「そりゃそうだよ！ボクだって、ちゃんと味わってるよ！」

「あはは、それは失礼」

「ホント、失礼だよ！」

みんな、思い思いの感想を述べていく。

それにしても、このオムライスというものは、なかなか美味しいな。

…西洋の料理なんか、どこで習うんだろう。

あれかな…。

風華も買った料理本とかなのかな…。

とか思っていると、灯がその本を取り出してくる。

「風華さん。こんな高価なものを貸してくださって、ありがとうございます」

「あ、それ、露店で安く買ったんです。なかなか売れないってことで、タダ同然だったんですよ」

「へえ〜。掘り出し物ですね」

「はい。それで…相談なんですけど…」

私の方をチラリと見て、灯を厨房の外に連れ出す。
そして、何かヒソヒソ話をしているようだ。

「姉ちゃん。風華たち、何話してるのかな？」

「さあな」

「ねーねーのおさじ、ボロボロだよ？」

「ああ…。噛み癖があってな…」

「噛み癖？」

「ああ。まあ、ユカラにはないだろうな。ほら、望のも見てみる」

「んむ？」

「あ、こっちもボロボロだ」

「狼とか犬の小さい子に多いみたいなんだけど、口の中に入れたものを噛む癖があるんだ」

「望、もう小さくないもん！」

「けど、オレはなかなか抜けなくてな…。木匙なんか二日で噛み潰してしまつて…。だから、いつもは金匙を使ってるんだけど…」

「ふうん」

自分の匙をマジマジと見つめるユカラ。
もちろん噛み跡なんかは一切なく、綺麗なものだった。
よく見てみると、響の匙にも噛み跡がある。
鋭く切れ込んだあれは、犬歯の跡だろうな…。
相当ガツチリ噛んでるみたいだ。

「んー」

「なんだ、葛葉。足りないのか？」

「うん」

「じゃあ、オレのをやるから。風華のをあまり見てやるな」

「えへへ、ありがと。ねーねー」

「あ！ずるいよー！望もー！」

「望はお姉ちゃんだろ。ちよつとは我慢したらどうだ？」

「お、お姉ちゃん…。望が…」

「ああ。桜は頼りないからな。望がしっかりしてくれないと」

「うん！分かった！」「なんでボクが頼りないのさ！」

「はあ。ただいま」

「おかえり」

桜が何か猛抗議をしているようだけど。

予想通り、風華と灯はニコニコして戻ってきた。

「料理講座、オレも混ぜてくれないか？」

「うん。いいよ…って、聞いてたの！？」

「いや、カマかけ」

「ふふ、隊長も悪い人ですね」

「まあな」

「もう！」

そして、二名ほど除いて、和やかな雰囲気ですごはんの時間は過ぎていく。

雨の日特有の静寂の中、聞こえてくるのはいくつかの小さな寝息。チビたちは、いつものように昼寝。それに加え、今日は桜とユカラまでいる。

「みんな、気持ち良さそうだね」

「ああ。まあ、いつもそうだと思うけど」

「ふふ、そうかもね」

葛葉の頭をゆつくりと撫でる風華。

葛葉は、暫くはうるさそうに耳をパタパタさせるが、そのうちにまた安らかな寝顔に戻る。

「ふあ…。私も眠くなってきた…」

「寝れば良い」

「ユカラも寝てるし…。いっぱい教えたいことあるんだけど…」

とは言いつけど、もうまどろんできている。

不思議なものだ。

眠っている人を見ると、自分も眠くなってくる。

安心するのかな。

…私も眠くなってしまううちに、そっと部屋を抜け出す。
向かう先は…

「ん？ああ、紅葉。どうした？」

「と、利家が、暇してないかな…とか思ってた…」

「今は暇だな」

「ふうん…」

「で、どうしたんだ？」

「い、いや…その…」

「……？」

む、無理だよ、姉ちゃん…！

恥ずかしい…！

「とりあえず、こつち来なよ。お茶、飲む？」

「あ…うん…」

机を挟んで、利家の正面に座る。

「はい、お茶」

「ありがと…」

「………」

「ね、姉ちゃんが…」

「紅葉にお姉さんがいたのか？」

「あ…いや…。そうじゃなくて…。姉ちゃんが、利家に…その…」

「ん？」

「むう…」

この恥ずかしいことをどう言ったものかと思案していると、利家が隣に座ってくる。

「不思議な夢を見たんだ。森の中で、すごく綺麗な狼に会って。その狼が、一所懸命に何かを伝えようとしててね」

「………」

「なんとなく分かったよ。なんでかは分からないんだけど」

「なんて、言ってたんだ…？」

「たぶん…」

……。

もう…姉ちゃん、ホントにお節介なんだから…。

35（後書き）

小さな親切、大きなお世話という言葉がありますが、今回は違いうです。

妹想いの姉を持って、紅葉は幸せ者ですね。

「そういえば、ユカは？みんなと一緒に寝てるのか？」

「うん」

「そうか…。赤色について、もうちょっと聞いておきたかったんだけど…」

「また後で聞けばいいじゃないか」

「そうだな。今は紅葉もいるし」

「ワウ」

「明日香も来てたのか」

机の下から顔を覗かせる。

「紅葉は狼の言葉を話せるんだな」

「え？」

「いやな、香具夜が教えてくれたんだけど」

「香具夜のやつ…！」

「明日香が言ってることも分かったりするのか？」

「ああ」

「へえ。僕にも分かる言葉なのか？」

「だいたいは分かると思う。ご飯が欲しいとき、遊びたいとき、悪さをしたとき…。言語として完全に習得するのは難しいと思うけど、一緒に生活していると分かるようになってくる」

「ふうん。動物を飼ったことはないからな」

「こいつらの言葉で、こういう音の言葉は少ない。ほとんどは身体の動きとかだな。あと…言ってもあまり信じてもらえないんだけどな…」

「何？」

「心で話すんだ。群れの中とか、心が繋がっている相手には、だい

たいこの方法で話してる。…信じられない話だろ？」

すると、利家はニッコリとして、私の肩を抱く。
しばらくジッと黙って。

「伝わった？」

「…うん」

「あるじゃないか。心の言葉。人間にも。信じる信じないじゃない。
みんな忘れてるだけ」

何も言わなくても伝わる。

そうだよな。

私と明日香。

人間と狼の間でも出来るんだ。

人間同士で出来ないわけがない。

みんな、やり方を忘れてるだけ。

「僕も狼の言葉、使いこなせるかな」

「…うん。きつと…ううん、絶対、出来るよ」

「ふふ、紅葉にそう言ってもらえると心強いな」

今だよ。

なんて、姉ちゃんの声が聞こえた気がした。

「い、紅葉？」

「クウン…」

最初は驚いた風だったけど、何か納得したようなため息をついて、
ゆっくりと頭を撫でてくれる。

そして、私はそのまま、眠りに落ちていった…。

優しい歌声が聴こえる…。
これは…。

「あ、起きた」

「もうすぐ夕飯だぞ」

「ん…ああ…」

いつの間にか、ユカラが来ていたようだ。

「って、え？」

私は今、利家に膝枕をしてもらって寝ている。
そして、まさに目の前に、ユカラがいる。

「どうしたの？顔、真っ赤だよ？」

「…まあ、だいぶ恥ずかしい光景ではあるな」

「と、利家！」

「……？」

よく分からないという風に首を傾げるユカラ。

「と、とにかく、内緒にしておいてくれよ、ユカラ！」

「う、うん…。分かった…」

何を内緒にしておくのかの分からないといったかんじだけど…。
大丈夫かな…

「そ、そうだ。さっきの歌は？なんだったんだ？」

「ユカラがな。歌が上手いんだ。だから、いろいろ歌ってもらったんだ」

「へえ」

「そ、そんな上手くないよ…」

「な、オレにも聴かせてくれよ」

「は、恥ずかしいよ…」

「一曲だけ、な？」

「分かったよ…」

モジモジとして、目を泳がせたりしながら、歌い始める。

眠れ我が子よ 安らかに

お月様に 見守られ

お日様に 思い馳せ

眠れ我が子よ また明日

歌い終わると、ユカラは顔を真っ赤にさせて俯く。

「ふふふ。本当に上手いな」

「ね、姉ちゃん…」

「子守唄か。オレも母さんに歌ってもらったなあ」

「僕はもっぱら歌う方だったな」

「風華にか？」

「風華だけじゃない。村には小さい子がいっぱいいたからな。葛葉より小さい子も何人もいたよ」

「へえ」。じゃあ、兄ちゃんは、みんなの兄ちゃんだったんだね！」

「ああ。村が大きなひとつの家族だった。もちろん、ここもな」

「家族かあ」

「嬉しそうだな」

「うん！」

理由は教えてくれなかったけど、だいたいは伝わってきた。
心の繋がり。

ここにもあった。

「夕飯中は油断するなよ。すぐに食べるものがなくなるからな」

「う、うん」

「大丈夫だろ。風華がある程度取ってくれてるだろうし。まあ、皿からいつの間にかなくなるのには注意しないといけないけど」

「なくなるの？」

「誰かに盗られたりしてな。明日香が盗っていつたりもするんだけど…」

「実際、体験した方が早いだろ」

広間の戸を開ける。

「隊長！お疲れ様です！」

「いや…今日は何もしてないけど…」

「それでも、お疲れ様です！」

「うん、ありがとう」

「ささ、利家さんもユカラさんもどうぞ。皆さんの最低の取り分だけは、私たちが死守しましたので」

「ありがとう」「あ、ありがとうございます…」

ユカラは、この戦場の様子に面食らったようだ。席に案内される間も、常におどおどとしていた。

「いろはねえ」

「ん？どうした。宣戦布告でもしに来たのか？」

「うっん。今日は、ゆっくり食べようって思ってた」

「休戦か？またなんで」

「いろはねえ…病み上がりだし…。あ、ちゃんと望にも言ってきた

よ
」

…疑うわけではないけど。
桜の目をジッと見つめる。
すると、桜は負けじと見つめかえしてくる。

「…そうか。ありがとう。今日は甘えさせてもらっよ。でも、オレはもう元気だから。明日からは遠慮なくかかってこい」
「うん！」

頭をガシガシと撫でてやると、嬉しそうにニッコリと微笑み、そして自分の席へと帰っていった。
その先で

「ああ〜っ！ボクの唐揚げ食べたの、誰！？」
「明日香が持っていてたよ」
「見てたんなら止めてよ、響！」
「ええ…」

「私の、あげるからさ。響に八つ当たりしないの」
「か、かぐやねえ…。八つ当たりなんか…してないもん…」

それにしても、桜と望が大人しくしてくれているだけで、こんなにゆっくり食べられるんだな。
ホッとしたような、でも、寂しいような。

「ユカラ、それだけで足りる？」
「うん。充分だよ」
「遠慮してない？」
「してないよ」
「それならいいけど…」

「お母さん、これ、食べていい？」

「いいけど、それで終わりにしなさい。またお腹壊すよ」

「分かった」

「風華って、葛葉のお母さんなの？」

「そうだけど、そうじゃない。血は繋がってないし、歳を考えたら姉妹くらいなだけだね。葛葉がお母さんって呼んでくれて」

「ふうん」

風華たちの会話。

こうやって耳を澄ませてみると、いろんな会話が聞こえてくる。

「明日、夜勤組なんだよ。大変だよな」

「俺たちが頑張るから、みんな安心して眠れるんだろ。それに俺たちも、みんなのお陰でここにいられる。持ちつ持たれつだよ」

「…そうだな。まあ、無理しない程度に頑張りますか」

誰のお陰でもない。

みんなのお陰でここにいる。

一人で生きてはいけないから。

みんなに頼らざるをえないから。

「お母さん」

「望か。どうした？」

「えへへ」

だから、頼るときは頼ればいい。

頼られたなら、精一杯応えてあげる。

「ん」

「甘えただな。望は」

「うん！」

望の力強い返事はとても気持ちのいいもので。
自然と笑みがこぼれた。

外はまだ雨だった。

しかし、いくら雲が月の光を遮ろうと、その時はやってくる。

「姉ちゃん、どうしたの？外なんか見て」

「毎晩やってることだ。あまり気にするな」

「ふうん」

「ユカラ。もう遅いから、早く寝ろよ」

「うん」

そして、私の手を取る。

「ん…？」

「姉ちゃんも。夜更かしは身体に毒だよ」

「…そうだな」

手を引かれるまま、広間をあとにする。

「今日は楽しかった」

「そうか。良かったな」

「うん。…明日も楽しい日になるかな？」

「ユカラが、そう願えばな」

「…そうだね。明日は、あたしにとって、みんなにとって、楽しい日になりますように。お月様、お願いしますね」

「今日は見えないだろ」

「見えないだけだよ。雲の上にはいる。毎日必ず、みんなのことを見守ってくれてる」

「ふふ、そうだったな」

見えなくても、そこに必ずいる。

私が一番、分かっていることなのにな。

「そういえば、ユカラはどこで寝るんだ？」

「桜の部屋だよ」

「じゃあ、こっちとは逆方向じゃないか」

「うん。でも、姉ちゃんを放っておけないから」

「…そうか」

「うん」

目が見えないことを知ってる風でもなかった。

でも、楽しそうに、嬉しそうに。

今日あったことを話しながら、部屋まで私の手を引いていってくれた。

37（後書き）

ユカラは他の人とは少し違うところもあるようですが、それも個性ではないでしょうか。

なんしか、ユカラは純粹で優しい子です。

甲高い音が響き渡る。

「なんだ!？」

「あ、おはよ」

「今の、望か!？」

「今って？」

「甲高い音だよ！」

「音?これかな？」

笛をくわえて吹く。

すると、さっきの音が鳴り響く。

「でも、何回吹いても音なんか出なかったよ？」

「出てるんだよ…」

「隊長。どうかしましたか？」

「いや…今のは望だ」

「望が？」

「ねえ、これ、全然鳴らないよ？」

「ああ…そういうことですか…」

「そういうことだ。戻ってくれ」

「はっ」

さて…。

「望。それは特殊伝令用の笛なんだ」

「……？」

「普通の人には聞こえない音が出る」

「お母さんは聞こえてるの？」

「ああ。訓練を積みめば、望でも聞こえるようになるぞ」

「ホント？」

「ああ」

それを聞いて、望は期待に目を輝かせて。

「訓練する！」

「そうだな。でも、まずは朝ごはんだ」

「うん！」

まだちょっと早いと思うけどな……。
部屋を出て、厨房へと向かう。

「桜お姉ちゃんも、この笛持ってたんだ」

「まあ、いちおう桜も伝令班だからな」

「伝令班？」

「大切な手紙を届けたり、いろんなところに行ったりする班だ」
「へえ」

どうやら興味を持ってくれたらしい。
笛をジッと見て、ニコリと笑う。

「望にも出来るかな？」

「ああ」

「えへへ」

「でもまあ、まずは笛の音を聞けるようにならないとな」
「うん！」

望なら、きっと良い伝令班員になれるだろう。

今から楽しみだな。

「あれ？誰もいない？」

「やっぱり、ちょっと早かったか」

厨房にはやっぱり誰もいなくて。
とりあえず、雨戸を開けておく。

「どうするの？」

「待ってみるか」

「うん…」

席について、今日の当番を待つ。

望はというと、暇そうに笛をいじっている。

と、思ってたより早く来たようだ。

足音が近付いてくる。

「ふああ…眠…」

「おはよう」

「あ、隊長…。おはようございます…。今すぐ作りますんで…」

「望のを先に作ってやれ。腹空かせてるから」

「むう…」

「どうせみんなの分、作りますから」

「まあ、そうだな」

そして、包丁とまな板を取り出して、早速調理を始める。
さすがに慣れた手付きで、あっと言う間に完成した。

「はい、どうぞ」

「早いな」

「出来合いですよ」

「いただきます！」

「いただきます」

出来合いとは言っけど、なかなか美味しかった。

「美味しい」

「ああ。美味いな」

「どうも。でも、それは灯に言ってあげてください。灯の残りです」

「まあそうだけど、冷めた料理をまた美味しくするのは至難の技だ。そこは誇って良いと思うぞ」

「えへへ、ありがとうございます」

それから、他愛のない雑談を交わしつつ、朝ごはんを済ませた。

「さあ、物干し場に行こうか」

「洗濯の時間にはまだ早いですよ？」

「訓練だ」

「へえ。何のです？」

「笛の音が聞こえるように訓練するの！」

「望は伝令班に入ったの？」

「ううん。まだだよ。でも、絶対入るんだ！」

「そう。ふふ、頑張ってね」

「うん！」

そして、厨房をあとにして、物干し場へ向かう。

今は誰もおらず、静かなものだった。

「よし。じゃあ、まず最初に、音を知るところから入ろうか」

「どういうこと？」

「知らない音を聞けと言われても聞けないだろ？」

「うん」

「だから、誰にでも聞こえる音から徐々に上げて行って、最終的に笛の音が聞こえるようにするんだ」

「うん」

「笛の先を回してみろ」

「…あ、伸びた」

「吹いて」

望が息を吹き入れると、さっきより低い音がする。

それでも、他の音と比べても充分高いんだけど。

「何か聞こえる」

「意識して聞いてみる。はっきり聞こえるようになったら、少しずつ戻していくんだ」

「うん」

聴覚に意識を集中させるため、自然と目を閉じる。

短く吹いたり、長く伸ばしてみたり。

いろんな吹き方を試しているようだ。

「だいぶ聞こえるようになったよ」

「じゃあ、試してみよう。オレが吹いてみるから、聞こえてる間、手を挙げて。聞こえなくなったら下ろすんだ」

「うん」

望から笛を受け取り、少し変則的に吹いてみる。

すると、完璧についてきていて。

少し意地悪をして、元の長さに近付けたりしても、ちゃんと聞き取

っていた。

それじゃあと元の長さに戻してみても、全く遅れることもなく。

「試験終了だ」

「どうだった？」

「次の段階に行けるだろうな」

「ホント!？」

「ああ。ほら、最後は元の音で吹いてたんだ」

「ええ!？」

望に笛を返すと、早速吹いてみる。

音に合わせて望の耳がピコピコ跳ねあがるのが面白くて。

「わあ」

「上達が早いな」

「そ、そうかな…」

「ああ。普通なら三日から五日は掛かる。それを、ほんのちよつとで終わらせたんだ。望には、才能があるんだな」

「えへへ…」

頭を撫でてやると、恥ずかしそうに頬を掻く。

「じゃあ、次は…」

「姉ちゃ〜ん!出すの手伝って〜!」

「ちようどいい。普段、騒がしい中、あるいは、距離が離れてても聞き取れるようにする訓練だ。今の洗濯の時間に吹いてみるから、聞こえたらオレのところに来て、報告してくれ」

「うん」

「望も手伝って!」

「分かった〜」

そして、風華の方へ走っていく。
…さて、次はどれくらいで聞き取れるようになるかな。
ふふ、本当に楽しみだ。

「…何してるの？」

「ん？訓練」

「訓練？」

まあ、鳴らない笛をくわえて洗濯をする様子は、どう見ても変だろう。

「この笛の音を聞けるように訓練してるんだ」

「それ、鳴ってるの？」

「今はまだ吹いてない」

「なあんだ」

と、ここで吹いてみる。

周りを見回してみると、特殊伝令班員全員と伝令班の半数、他の班員の一部、そして明日香が反応した。

「その笛ってどこで使ってるの？」

「特殊な伝令を出すときとか、あとは動物を使ったりするときに使
う」

「ふうん」

…それにしても、やっぱり望にはまだ早かったかな。

「お母さん、今、笛鳴らした？」

「ん？おお、望か」

「鳴ってたの？」

「どこにいたんだ？」

「広場だよ」

「望！遊んでないで、ちゃんと手伝いなさいよ！」

「ええ〜…」

「まあそれは置いて、広場から聞こえたのなら、だいぶすごいぞ。あと何回か鳴らすから、この調子で頑張れ」

「うん！」

「ああっ！こら！待ちなさい！」

そして、風華共々どこかへ駆けていった。
でも、風華はどんどん離されていつてる。

「良いね。望」

「ああ。走るのも速いし、良い班員になるぞ」

「ホント、紅葉つてそんなのばかりだよね」

「香具夜も似たようなものだろ」

「ええ〜、そんなことないよ」

「どうだか」

「あ、そうそう。光だけど、遠伝令はどうか？すごく速いよね」

「光に聞いてみるよ。伝令班に入りたいって言うんだったら、訓練してみればいいじゃないか」

「紅葉じゃないからね。若い芽を摘み取るようなことはしないよ」

「摘み取ってないだろ！才能を発掘してるんだ！」

「ふうん」

「人聞きの悪いことを言うなよ…まったく…」

「ふふ、いいじゃない。たまには」

…本当にたまになら良いんだけど、香具夜の場合はそうはいかないからな。

もうちょっと抑えてくれないかな…。

「はあ…。逃げ足だけは速いんだから…」

「では、隊長。持ち場に戻りますね」

「ああ。出来れば、もう来てくれるな」

「ふふふ。それは無理ですね」

「そうだろうな」

そして、香具夜は元の場所に戻っていった。

一方、風華は疲れた様子で座り込み、ため息をつきながら洗濯の続きをする。

「また笛吹いてくれない？今度こそ捕まえておくからさ」

「自分で吹いてみたらどうだ」

「でも、鳴ってるかどうか分かんないもん」

「じゃあ、風華も訓練してみるか？」

「うーん…どうしようかな…」

「やってみたらどうですか？出来ることはいくらあっても困りませんから」

「お前…今帰ったばかりだろ…」

「でも、これは何の役に立つの？」

「そうですね。個人連絡や緊張連絡に使えます。あとは、あらかじめ信号を決めておけば、秘密の連絡にも使えますよ」

「へえ…。それならいいかも」

「余り、あつたかな？」

「見てきましようか？」

「そうだな。頼む」

「了解しました」

香具夜はすぐさま駆け出す。

このついでに、二回目を吹く。

「私でも聞こえるようになるかな？」

「ああ。耳の良い狼や兎が有利とも言われるけど、人で聞こえるものもある。実際、特殊伝令班員にもいるしな」

「へえ」

「まあ、平均して五日も訓練すれば、静かな場所なら聞き取れるようになる」

「鳴らした？」

「ああ。どこにいた？」

「桜お姉ちゃんの部屋だよ」

「よく聞こえたな……」

「もう！なんでそんなところにいるのよ！」

桜の部屋……つまり、元々の地下牢といえば、中の音はよく響くが、外の音はなかなか届かないという構造になっている。

その状況で聞こえるとなれば、いよいよ本物かもしれない。

「よし。試験終了だ。……正式にこの笛を使う許可を出す。上手く使えよ」

「うん！」

「望。それも良いけど、ちゃんと洗濯も手伝いなさいよ」

「うん。分かった」

「じゃあ、今から……」

「でも、明日からね！」

「こらっ！望！待ちなさい！」

また賑やかに望との追いかけっこになる。

「あれ？また行っちゃったの？」

「ああ。それで、残ってたか？」

「壊れて音がおかしいのが一個しか残ってなかったよ。またいくつ

か発注しておく？」

「そうだな…。風華の分はまた新しく買うとして…。別にいいんじゃないか？増員もないだろうし」

「そうだね。じゃあ、風ちゃんのはどうする？」

「また洗濯物が終わったら買いに行くよ」

「ふふふっ」

「どうした？」

「いや、ホント、短い間に変わったなって」

「…誰が」

「やだなあ。紅葉だよ」

「変わってない」

「変わったよ。…すっかり丸くなって。良い顔をするようになったよ。昔みたいだね」

「……………」

「もう忘れちゃダメだよ」

「…うん」

香具夜の言う通り、変わったのかもしれない。
あの蜂起以来、心に余裕が出来たのは確かだ。

「ふふ、それだけじゃないでしょ」

「な、何が！」

「くっふふふ」

そのあとは、笑うばかりで。

他に、どんな理由があるんだよ！

「なんか、二日に一回くらい来てるよね」

「そうか？」

「うん」

風華の笛を買いに、市場へ繰り出した。

そんな頻繁に来てる気はしないんだけど、やっぱり来てるのかもしれない。

「お前らは、何か欲しいものはないのか？」

「わたしも、望お姉ちゃんみたいな笛が欲しい」

「望は？」

「別に何もいらないよ」

「そうか」

笛は響の分も追加、と。

「お昼ごはんは？」

「まだ早いでしょ」

「またこの前のところで食べようか」

「やった！」

それにしても、今日は大人しいな。
なんて思っていると

「あ、響！」

「な、何！？」

「あ！待ちなさい！」

やっぱり、こういうことになるんだな。
望は響の手を引っ張って、どこかに行ってしまった。
風華も早々に諦めて。

「もう…大丈夫かな…」

「笛も持ってるんだ。何かあったら吹くだろ」

「そうだといいけど…」

「それより、目的地、すぎたけど」

「ええっ！？なんで言わないのよ！」

「いや。風華、望を追いかけてたし」

「店の前で立ち止まるなりなんなりしてよ！」

「次からはそうしよう」

「もう…」

少し引き返して、目的の店へ入る。

「よう。隊長さん」

「笛、ふたつ」

「…待ってな」

そう言って、奥へ行く。

「知り合い？」

「ああ。昔に衛士だったんだ」

「ふうん」

「余計な話はするなよ。ほら、笛だ」

「ああ」

笛を受け取り、代金を払おうとすると。

「あー、いいよ。口止め料だ」

「そうか？悪いな」

「ふん…。ほら、散った散った」

「またな」

「…ああ」

軽く手を振り、店を出る。

「不思議な人だったね」

「そうか？」

「うん。なんというか、姉ちゃんに似た空気があったよね」

「まあ、そうだろうな」

「え？」

「あれは、オレの父さんだ。城に来てからのな」

「ええっ!？」

「紅葉！余計なこと喋ってんじゃないよ！」

さすが地獄耳。

店の中から怒鳴り声が聞こえた。

さっさと店から離れて、続きを話す。

「灯、いただろ？あいつは、父さんと母さんの実の子供だ」

「へえ」

「灯は、オレの人間で一番最初の友達であり、良き姉だ」

「でも、ずっと敬語だったよね？」

「いいって言ってるんだけどな。勤務中だから…って」

「じゃあ、私も敬語の方がいいですか？」

「やめてくれ。気持ち悪いから」

「あはは、そくだよね」

みんなも、こうやって気楽に話してくれたっていいのにな。

「あ、そうだ。望たち、どこに行ったのかな？」

「笛を吹いてみたらどうだ？ほら、風華の分」

「うん」

そして、笛をくわえて息を吹き込む。

甲高い音が鳴り響いた。

「…鳴ってるの？」

「ちゃんと鳴ってるぞ」

「ふうん…」

すると、返答があつた。

住宅地の方から聞こえてくるな…。

「どうしたの？」

「こつちだ」

「え？」

路地のひとつに入り、市場を抜ける。

「ど、どこに行くの？」

右に折れ、左に折れ。

……。

望と響の匂いを捕らえた

よし、これで。

「はあ…はあ…。何…？普通の長屋じゃない…」

でも、匂いはここに留まっている。

「お邪魔します」

「あ！ちよつと！」

「今日は客が多いな」

「あ、お母さん、お姉ちゃん」

望と響と、もう一人。

赤狼の女の子がいた。

40（後書き）

誰なんでしょうね。

気になるようなら、ならないようなら。

「まあ座ってくれ」

「失礼します…」

「何も出せないけど…」

「あ…お構い無く…」

定型の挨拶には風華が答えていく。

知らない人の家ということ、おどおどしているみたいだけど。

「名前は？」

「美希だよ。キミたちは？」

「紅葉」「風華だよ」

「紅葉に風華ね」

「美希は、ここに住んでるの？」

「ううん。留守を預かってるだけ」

「どこかに定住してるのか？」

「へえ。よく分かるね」

「土地には土地の匂いがあるけど、美希からは一定の匂いがしない」

「ふうん。鼻が良いんだな」

「美希お姉ちゃんは、いろんなところを旅してるんだ！」

「ほう。旅人か」

「そんなたいそうなものじゃないよ。骨を埋める場所を探してるんだ」

「その歳でか？」

「まあね」

見たところ、風華とそんなに変わらない。

それでいて、自分の死に場所を探してるのか…？

「美希お姉ちゃん！お城と一緒に住も！」

「お城？あそこの？」

「うん！」

「へえ。つてことは、どっちかが衛士さん？」

「どっちもだ。それに、望も衛士だ」

「はえー。望、衛士になったんだ」

「えへへ。今日なつたばかりだよ」

「響は？」

「わたしはまだだよ」

「響も、望に負けてちゃダメだぞ」

「うん！」

望も響も、すっかり美希に懐いているようだけど、一緒に旅でもしてたのか？

「ところで、美希はなんで留守番をしてるの？」

「ん？まあ、ちょっとした小遣い稼ぎだ」

「小遣い稼ぎ？」

「ああ。やっぱり、市場に並んでるものは魅力的だからな…。美味そうな肉…美味そうな野菜…美味そうなお菓子…」

「…食べるものばかりだね」

「そうか？」

道中では、野草とか、その辺の動物しかないもんな。

きちんとしたものを食べたいと思うのは、至極当然のことだろう。

「そうだ。留守番の仕事はいつまでだ？」

「今日の夕方」

「じゃあ、一緒に夕飯、食べられるね！」

「ん？でも、城だろ？一般人が入ってもいいのか？」

「門番の許可はあるが、門はいつでも開いている」

「ふうん。まあ、考えとくよ」

「絶対来てね！」

「うーん、どうしようかな」

美希が考えるフリをすると、望と響は哀しそうな顔をする。

「ふふふ、分かった分かった。ちゃんと行くから、な？そんな顔をするな」

「「うん！」」

こうして、夕飯合戦の参加者がまた一人増えた。

正午を知らせる鐘が鳴る。

待ってましたと言わんばかりに、勢いよく立ち上がる望。

「ごはん！」

「そうだな」

「美希お姉ちゃんも一緒に行こ！」

「私はダメだ。留守番、だからな。ここを出るわけにはいかないんだ」

「むう……」

「夕飯は一緒だから、な？それで我慢してくれ」

「…うん」

「よしよし。いい子だ」

「えへへ……」

撫でてもらった嬉しさと、昼ごはんと一緒に食べられない残念さが

入り混じったような顔をする二人。
すると、美希は懷から何かを取り出して、それぞれに渡す。

「約束の石だ。覚えてるか？」

「うん…」「覚えてる…」

「私は必ず、望と響、紅葉と風華と一緒に夕飯を食べます。この石に誓って」

「「ヤウ、エル、ダウタ、カムナイル」」

「ヤウ、ナム、ロウツ、カムナイル」

神々よ、約束せし者に力を。

神々よ、約束を受けし者に加護を。
だったかな。

さすが、いろんなところを旅してるだけはある。
たしか、ずっと北の民族のおまじないだ。

「これで大丈夫だな」

「うん」「大丈夫」

「じゃあ、行つてこい」

「うん！」「またね」

そして軽く別れを告げ、長屋を出た。
ふふ、今から夕飯が楽しみだな。

41（後書き）

何か短い気もしますが。
きっと気のせいでしょう。

「やっぱり大変でしょ？」

「そうね。大変」

そして、望、響と一緒に表で遊ぶ哲也を見て。

「でも、子供が…哲也がいるから、私たちは親でいられる。大変だとか、そんなこととは比にならない、そうね…感謝の気持ちがあるの」

「そうそう！それだよ、それ！」

「あんたは黙ってな」

「…ハイ」

「感謝…か」

「うん。感謝。風華ちゃんも、早く良い人見つけなさいよ。紅葉ちゃんも、もういるみたいだね」

「な、何が！」

「ふふふ」

何なんだ！

まったく…。

そりゃ…間違っではないけど…。

「そ、それはそうと、もう子供はいいのか？」

「そうねえ。ふふふ」

「ふうん。そうなのか」

「え？何？何なの？」

嬉しそうに笑う涼。

それを見て納得する私。

そして、風華だけが取り残された。

「母ちゃん!」

「ん?」

バタバタと店の中に駆け込む哲也。

一直線に涼の方へ向かう。

「のぞみねえ、えじ、なんだって!」

「へえ。そうなの?」

「今日なつたばかりだけだな」

「哲も、えじ、になれるかな?」

「どうかな。哲は泣き虫だからね」

「泣かなかつたら、えじ、になれる?」

「哲也。人間にはな、それぞれ、いなくちゃいけない場所があるんだ」

「いなくちゃいけない場所?」

「ああ。哲也は分かるか?自分の場所が」

「うーん…」

「分からないうちは、衛士にはなれない」

「分かつたらなれる?」

「分かつたら、オレのところに来い。自分がどこにいるべきなのか。聞かせてもらおう。それを考えた上で、歓迎するときには歓迎する」

「……?」

「とにかく、自分がいなくちゃいけない場所が分かつたら、このお姉ちゃんのところに行けばいいの」

「うん、分かつた」

「哲!一緒に金平糖食べよ!」

「うん!」

望に呼ばれ、また外へ駆けていった。

「自分がいるべき場所…か。ふふ、また難しい問題を吹っ掛けたね」

「難しい問題ほど、答えは近くにあったりする。答えが近くにあるからこそ、難しい問題になる」

「要は気付けるかどうか、かあ…。紅葉ちゃんって、いつもそんな難しいこと考えてるの？」

「いや、元々は母さんや父さんが教えてくれたものだ。まあ、オレなりの解釈を加えてるところもあるけどな」

「ふうん。紅葉ちゃんの親…見てみたいね」

「父さんは市場で武具屋をやってる。母さんはずっと昔に死んだ」
「そつかあ。でも、武具屋って、一徹さん？」

「ああ」

「へえ。あの頑固親父に、こんな可愛い娘さんがいたなんてねえ」

「そんなこと言っていると、また一徹さんにどやされるよ」

「おっと、いけねえや」

「まあ、オレは実の娘ではないんだけどな」

「こんにちは」

「こいつが実の娘」

なんともちようど良いときに来た。

おやつさんは目を皿のようにして、灯を見詰める。

「はえ〜、こりやびつくりだ！」

「灯ちゃんがねえ」

「ああ。頑固なところは父さんそっくりだ」

「…何の話をしてるの？それより、紅葉。なんでここにいるの？」

「昼ごはんを食べてたんだ。灯こそ、なんで？」

「涼さんにお料理を教わってるのよ。紅葉もやってみる？」

「いや、いい」

「そうだろうね」

「涼さんって、料理教えてるの？」

「まあね。今のところ、生徒は灯ちゃんただけだけど。風華ちゃんもやる？」

「うん！」

「じゃあ、今日は食後の美味しいお菓子を作ろうかな」

「賛成！」

そして三人は、嬉々として厨房へ入っていった。

空いてる椅子をいくつか並べて、その上で器用に眠るチビたち。すると、望がいきなり起き上がった。

「んー…」

周りの匂いを嗅いでみる。

でも、まだ寝ぼけているらしく、また眠りへと落ちていった。

「望、響、哲也。起きろ。おやつだぞ」

「おやつ！」

「美味しいね、これ」

「うん。えっと…なんだっけ？」

「ホットケーキでしょ」

「ああ、そうだ」

「西洋風って言っても、材料は割と市場で揃うものなのね」

「これ、何？」

「ホットケーキ。蜂蜜をかけて食べるの」

「ふうん」

望は蜂蜜の壺を取り、傾けてみるが、なかなか出てこない。

「ううゝ…」

「望お姉ちゃん、早くゝ」「のぞみねえゝ」

響と哲也に急かされて、いよいよ焦る望。
フルフルと壺を振ると…

「あぁっ！」

やはりというか、ホットケーキの上に、盛大に壺を落としてしまった。

壺こそ割れなかったが、皿の上の惨状は言つまでもないだろう。

「あうう…」

「あーあ」

「うう…」

「ほら、オレのと替えてやるから。泣くなよ」

「うん…ありがとう…」

「響と哲也も気を付けろよ」

「分かった」「うん」

蜂蜜だらけになったものと、自分の分を取り替えてやる。

すると望は、泣きそうになりながらもニコリと笑つ。

しっかりと我慢したご褒美に、頭を撫でてやる。

「優しいお姉ちゃんね」

「えへへ」

和やかな昼下がりの時間が、
ゆっくりと過ぎていく。

42（後書き）

蜂一匹が作れる蜂蜜の量って、スプーン一杯分なんですね。
この前テレビで言っていました。

城に戻ると、少し騒がしいみたいだった。

「何かあったのかな？」

「さあ？緊急の伝令はなかったし、大したことでもないんじゃないか？」

「ふうん」

「それよりこいつらだ」

「うん」

望と響は、お腹がいっぱいになったからか、おやつを食べたあとすぐに眠ってしまった。

風華と私で一人ずつ背負って帰ってきたんだけど。

灯は市場を回ってから帰ってくるらしい。

と、曲がり角でバツタリ衛士の一人と出会った。

「あ、隊長」

「何かあったのか？」

「はい。各村の代表が来たんです」

「ほう。またあとで挨拶しにいかないとな」

「夕飯のときにするらしいですよ。まだ着いてないところもあるから、ということだ」

「分かった」

「はい。では」

そう言って、忙しく走っていった。

「大変そうだね」

「ああ」

「…部屋に戻ろっか」

「そうだな」

部屋に戻ると、大きく広げられた布団に、光、葛葉に加え、何人が知らない子供も寝ていた。

「…どこの子だろ」

「村の子じゃないか？」

「うーん…うちの村の子はいないみたい」

「そりゃ、小さい子は連れて来てないからね」

「ひゃう！」

「びっくりしすぎだよ、風華」

「だって…」

「んう…」

「ほら」

空は響を抱き上げ、布団に寝かせる。
私も、そつと望を下ろす。

「それにしても、空姉ちゃん、どうしたの？」

「どうしたの、はないでしょ。見なさいよ、これ」

空は、白地に黒い糸で刺繍されたタスキを見せる。

「ヤウト…代表？ええっ！？空姉ちゃん、代表になったの！？」

「そうだよん」

「すごい！」

「利家には負けるよ。なんたって、一国の王なんだからね」

「そ、そうかな」

「なんで風華が照れてるんだ」

「風華は、利家のこと大好きだもんね」

「そ、そんなことないもん！」

風華は、顔を真っ赤にさせて否定するが、そうすればするほど、本当に利家のことが好きなんだってことが伝わってくる。

「…何話してるんだ？」

「あ、利家。ちょうど良いところに」

「全然良くない！」

「……？」

「利家は風華のこと、好き？」

「ん？好きだけど、それがどうかしたか？」

「じゃあ、紅葉は？」

「「はあっ！？」」

唐突に、何の脈絡もなしに、いきなり、意表を突くような質問が利家に投げ掛けられる。

「そ、それは……」

「な〜に〜？全然聞こえない」

ニヤニヤとして、わざと大きな声を出す。

これはもう、私にとっても拷問だよ…。

ジッと利家の答えを待っていると、意を決したように私の方を見て、手を取って強く引く。

そして、そのまま…。

「……！」

「おお〜」

「僕は紅葉を愛してる。…これが答えだ」

「よく言ったね。あの利家が、こんな大胆になるとは思わなかったけど」

すると、ハツとしたように離れる利家。

「ご、ごめん！」

「……………」

「怒ったか…？」

「ああ」

「ごめん！」

「オレが怒ってるのは、お前がそうやって謝ってることにだ」
「え…？」

きよとんとして顔を上げる利家に、さっきのお返しをしてやる。

「はあ…。もうちょっと、人目をはばかったらどうなのさ。ほら。

風華なんて、卒倒寸前だよ」

「あ…え…？な、何？どうしたの？」

「ね？」

そう言われると、恥ずかしさが一気に溢れてきた。

よく考えてみたら、なんで風華も空も見てる前であんなことをしたんだろ…。

誰が来るとも分らない、廊下のだ真ん中で。

うわあ…。

は、恥ずかしい…。

「って、そもそも空が変なことを聞いてくるからだろうが。なんで、紅葉が好きか、なんてことを聞いてくるんだよ…」

「良いじゃない。たまには。お互いの気持ちも分かったんだし。終わり良ければ全て良し」

「お前なあ…」

「それよりさ。何か用があつたんじゃないの？」

「ああ、そうだった。…忘れるところだったじゃないか」

「思い出せて良かったね」

「はあ…まったく…。まあ、とにかく来てくれ」

「はいはい。代表も思ったより大変ね」

「当たり前だろ。ほら、遅れてるから早く」

「そうね。早く終わらせて紅葉との逢瀬を楽しまないといけないし」

「空！」

「あはは。じゃあ、またあとでね」

お、逢瀬なんて…。

利家も忙しいし…。

それに、はつきりと知られていたら、逢瀬とは言わないじゃ…。

細かいことは気にしないの、という風に手を振って、空は利家と一緒にどこかへ行ってしまった。

…利家に言ってもらったのは二回目。

私の気持ちををはつきりと表したのは初めてだ。

そういう意味では、空は良いことをしてくれたのかもしれないけど、やっぱり納得がいかない。

あそこは、次に風華の気持ちを聞くとところだろ！
なんで私のことを…。

「あー！もう！」

「わわっ！？」

「私は寝る！」

「え…あ…。じゃあ、私も…」

恥ずかしさが、また込み上げてきた。
布団に潜り込んで、それを堪えるのに必死になっていた。
誰にも…見られてなかったよな…？

43（後書き）

ふう…。

何なんでしょうかね、この展開は。
自分で書いてて疑問に思います。

風華が眠ったところで、布団を抜け出す。

部屋を出て、どこへともなく歩き回る。

衛士長というのは、こういうときの的確な指示を出したり、テキパキと動いたりするんじゃないだろうか。

どこを歩いてみても、軽く挨拶を交わす程度で。

「ちよつと！紅葉、邪魔だよ！」

「あ…ごめん…」

香具夜には怒鳴られる始末だった。

もしかして、私って邪魔なだけなのかな…。

フラフラしていると、いつの間にか桜の部屋の前まで来ていた。何の気なしに入っていく。

ひんやりとした雰囲気は、全く外とは相容れない風だった。

「桜…？」

反応はない。

誰もいないんだろうか。

と思ったら、ユカラが一所懸命になって何かをやっていた。

「ユカラ」

「……………」

「ユカラ」

「……………」

クルリとこちらを向くと、驚いたように目を丸くして、何かを後ろ

に隠す。

どうやら裁縫道具みたいだけど…。

「何してたんだ？」

「な、何もしてないよ」

「そうか」

「……………」

「医療室に行くか？」

「な、なんで？」

「そんな刺し傷だらけじゃ痛いだろ」

「痛くないもん…」

後ろに回した手を、さらに隠すようにする。

針で刺した傷というのは、刺した瞬間だけが一番痛いように思うけど、それが何回も続くと痛みはますます蓄積していく。

どうしても不器用で、同じ場所を何度も刺すようなら、なおさら。

「ほら。見せてみる」

「あう……」

ユカラの右手には血がじつとりと滲んでいて、どうやればそんなところに刺さるのかという場所にまで傷があった。

…それにしても、何回刺したんだろう。

考えるだけで痛かった。

「消毒だけでもしてもらおう。菌でも入ったら大変だから」

「うん……」

「桜ほどじゃないけど、少しなら教えてやれるから。な？」

「ホント……？」

「ああ」

「やった！」

今度はユカラが手を引く番になる。

夢中になれることが出来たなら、それは大変に喜ばしいことだ。

…もう、前みたいなことにはならないよな。

まずは基本から、ということで、波縫い、本返し縫い、半返し縫いあたりから始める。

「痛っ」

「針が出てくるところに指を置くんじゃない」

「だって…。布の裏じゃ見えないじゃない…」

「針を全部裏に回すんじゃないくて、表から縫う分だけ針を刺して、目標の位置に出たら一気に通すんだ。そうすれば、針は常に見えてるんだから、指は刺さないだろ？」

「うーん…」

「こっやるんだ」

百聞は一見にしかず。

実演してみせる。

すると、ユカラは分かったような分からないような、曖昧な表情を浮かべる。

「針を半分くらい刺す。そのまま布を針先に持ってきて刺す。先が出たら、そこを持って引き抜く。ほら、ちょっとやってみる」

「えっと…」

「そうそう。うん、そうやって…。そうだ」

「出来た！」

「ああ。その調子で、もうちょっと続けてみる」

「うん！」

チクチクと、ゆっくりだけど着実に針を進めていく。
端っこまで来たところで

「どうかな？」

「よしよし。いいぞ。じゃあ、次だ」

「うん！」

次は、連続で針を通す波縫いに挑戦。

ユカラはだんだんコツを掴んできたようで、指を刺すことも少なくなかった。

「出来た〜」

「うん。いいな」

「次は？次やる！」

「分かった分かった。慌てるな」

練習用のボロから、少し良い布へ。

ユカラは目を輝かせて、指示を待つ。

「次は刺し子だ。好きな模様を縫おうか。波縫いだけでも出来るかな」

「よし！」

「あー、待て待て。ただ縫うだけじゃ皺になるからな。しっかり皺を伸ばしながら縫うんだ」

「うん、分かった」

「糸も、いろんな色を用意してもらってるから。綺麗なのを作ってくれよ」

「うん！」

そして、縫っては伸ばし、縫っては伸ばし。
少しずつ、綺麗な模様を作っていく。

賑やかな足音。

桜が帰ってきたらしい。

「あー、疲れた！かぐやねえ、人使い荒すぎ！」
「ご苦労様」

「あ、いろはねえ。いたんだ」

「ああ」

「ユカラ、何してるの？」

「刺し子だ。だいぶ上手くなったぞ」

「へえ」

「出来… たつと」

「見せて見せて」

「あ、桜。戻ってたんだ」

「うん。ついさっきね」

ユカラから完成した刺し子を受け取って見てみる。
線が歪んでるところはあるが、なかなか上手く縫えていた。

「すごいすごい！ボクより上手いんじゃない？」

「そ、そんなことないよ…」

頬を赤らめて、嬉しそうにうつむく。

「あとは桜先生に教わるんだ。オレはここまで」
「せ、先生って…」

「よろしくね。桜先生」

「う、うん」

先生と言われて、得意げに、でも、何か恥ずかしそうに笑う。
桜の様子がまた面白くて。
いつの間にか、みんなで笑っていた。

「もうすぐ夕飯ですよ」

「ああ」

「あれ？隊長、ここにいたんですか？」

「悪いかな？」

「悪くはないですけど」

行くところがないんだから仕方ないじゃないか。

それに、二人とも夢中になって気付いてないみたいだし。

「まあ、代表挨拶、頑張ってくださいね」

「分かってる」

「では」

そう言っつて、灯は部屋を出ていった。

部屋を出て、隣の部屋の二人に声を掛ける。

「おい。桜、ユカラ」

「……………」

「……………。あ、何か言った？」

「ああ。もうすぐ夕飯だつてさ」

「うん。分かった」

「……………」

「ユカラ」

「……………」

「ユカラ」

「……ん。あ、何？」

「夕飯だから」

「うん。もうちょっと待って」

夢中になって、刺繍を施している。

これがまた個性的で、いろんな色を使って、星とか月を描き出す。

「よし」

「キリの良いところまで行っただか？」

「うん！」

「じゃあ、夕飯だね！」

「ああ」

ユカは縫いかけの針を針山に刺し、立ち上がる。
身体をグツと伸ばすと、関節が小気味良い音を立てて。

「っはあゝ。疲れた」

「でも、楽しいだろ？」

「うん！」

大きく頷くユカは、本当に良い顔をしていた。

広間へ向かう途中、何か不穏な空気を感じた…気がした。

「ちょっと、先に行つてくれ」

「えゝ何ゝ？ 廁ゝ？」

「ああ」

「はあ…。無くなつても知らないよ」

「分かつてる」

軽く手を振って、二人と別れる。

気のせいだと良いんだけど…。

「紅葉」

「ああ」

香具夜も何か感じ取ったらしい。

同じ方向へ進む。

…村の代表が集まったことと、いきなり現れたこの空気が何の関係もなければ良いんだけど。

行き着いた先は、広場。

目を凝らして見る…必要はなかった。

広場の真ん中、城への出入口の真正面。

そこに、それはいた。

「…何、あれ」

「銀龍。気性の荒さは黒龍並。龍では珍しく肉弾戦が得意で、銀龍と対峙して無事に帰れるとは思うなとも言われるくらい」

「響…？」

「どうするの？あれ、追い払うの？」

「そうだな…」

ずっとあそこにいられても困る。

もう少し様子を見ていたんだけど…その余裕はないみたいだ。

こちらに気付いたらしい銀龍は、少しずつ歩み寄ってくる。

「グルルルル…」

ある程度距離を置いたところで止まり、四枚の翼のうち下の大きな二枚を畳み、頭を下げる。

「なんだ…？」

「ウウ…」

「大丈夫みたい」

「あ！響！」

銀龍に走り寄り、頭を撫でる響。

その頭だけでも響くらいはあるんだけど。

銀龍は目を細め、気持ち良さそうに額を響に擦りつける。

「えへへ、痛いよ」

「何なんだ…？」

「大人しい子みたい！」

「それは、その様子を見たら分かるけどね…」

気性が荒いんじゃないかなかったのか…？

心配して損した気分だ…

「そこに置いておいて大丈夫なのか？」

「大丈夫だと思うよ。…うん、響も大丈夫だって言ってるし」

「……？」

「そうか。じゃあ、とりあえず夕飯だ。夕飯が終わってから、また考えよう」

「うん。じゃあね。ここで良い子にしないとね」

「グルル…」

「ダーメ。またあとで来るから、ね？」

「………」

「良い子良い子」

自分の何倍、何十倍大きな龍を飼い犬のように扱う響は、まさに猛獣使いといったところ。

…それにしても、龍なんて見たのは、いつぶりだろうか。

狼時代に、綺麗な蒼龍を見たきりかな…。

でも、蒼龍とは違って、この銀龍には鱗がなくて。

フワフワの毛…特に、たてがみがすごく気持ち良さそうだ。

しかし、ここは触りたい気持ちをグッと抑えて、夕飯の席へと向かった。

私の挨拶は軽く済ませ、利家に譲ろうとしたが、利家もあっさりしたもので。

「もうちょっとやっても良かったんじゃないか？」

「長い挨拶ほど退屈なものはない。あまりに長すぎて、ごはんが冷めるのも勿体無いからな。それに、こうやって食卓を囲んでいる方が交流も出来るし」

「そうかもしれないけど……」

……まあいいか。

みんな、楽しそう。

代表という重き荷を下ろしてゆつくりできる、数少ない時間だもんな。

「あんまり近寄ると、ぶっ飛ばすのら」

「ワウ」

……あんまり忘れられるのも困るけど。

酒に酔った空は、明日香とおかずの取り合いをしていた。

「明日香。あとでまた貰えるだろ。それに、いくら美味しくても、人間の食べ物はお前には毒だ」

「……………」

そして、渋々といったかんじで空の皿から下りる。

「よしよし。良い子だ」

「……………」

「拗ねるなよ」

「……………」

「はぁ…。分かった分かった」

交換条件とは、ちゃっかりしてるな…。

まったく、誰に似たんだか…。

「そういえば、今日は桜も望も来ないんだな」

「あそこ見てみる」

端の方の机を指す。

そこでは、新たに増えた人員に、何かを一所懸命に話す二人がいた。様子からするに、この戦場で生き残る方法を伝授しているんだろう。こちらをチラチラ見てるので、目標についても説明しているらしい。…まあ、人海戦術とはよく言うけど、全く実戦経験がないようなヒヨッコがいくら束になろうとも、意味を為さないだろう。たとえ、桜が鬼才の将であっても。

「今日はもう来ないだろうな」

「そうなのか？」

「ああ。優秀な兵士は、戦わずとも相手との力量の差を見抜くものだ」

「……………」

桜、望の二人だけならともかく、多人数に加えて足並みが揃わないとなれば、結果は見えている。そんな勝負を挑むくらいなら、その時間を基礎固めに使うのが最良。それが分からない二人ではあるまい。

「…まあ、今日はゆっくり食べられるってことで良いんだな」
「ああ」

しかし、各個人が力を持ってきたら大変だろうな。
そのときは、覚悟しなければいけないだろう。
嵐の前の静けさ、と言うのだろうか。
極上の夕飯は、もう少しお預けだな。

片付けが始まるか始まらないかというところで、広間を抜け出す。
子供たちは早々に部屋に帰っていったが、大人たちの酒宴はまだ続いていた。

各村特産の酒の良い匂いに打ち勝つのは至難の業だったが、なんとか耐えた。

酔って、あの案件を解決出来るとも思えないし…。
広場に行くと、やはり巨大な銀龍はそこにいて。

「出来るなら、夢であって欲しかったんだけど」
「……？」

首を傾げる姿を、不覚にも可愛いと思ってしまった。

いや、可愛いものは可愛いんだから、不覚も何もないだろ。

…誰に対しての言い訳なんだ。

「グルルルル…」

タシ、タシ、とゆっくり近付いてきて、私の腹に額を擦りつける。
甘えているんだろうな。

毛の流れに沿って丁寧に撫でてやると、満足そうに喉を鳴らす。

「あ、姉ちゃん。こんなところにいたんだ」

「ん？風華か」

「うん。広間にいると、どうにも耐えられなくて…」

「そうか。ちゃんと禁酒してるんだな」

「うん」

風華の歳で”禁酒”なんて言葉を使うこと自体おかしいんだけど。

「ところで、後ろのそれ、何？」

「銀龍だ」

「ふうん」

私が触ってるからか、何の警戒もなしに近付く。
そして、ペタペタと頬のあたりを撫でてみる。

「グルルルル…」

「へえ」。龍つて、こんなに毛が生えてるんだね。それに、すごく
柔らかい」

「ああ。まあ、鱗のやつもいるけどな」

「見たことあるの？」

「昔に一回だけな」

「ふうん」

風華は、興味津々といった風にあちこちを見たり触ったりするけど、
銀龍は大人しく。

静かに目を閉じて、されるがままだった。

「尻尾の毛は結構硬いんだね。でも、たてがみはすごくフワフワ。
手もガツシリしてるし。羽根は四枚。前の二枚は小さくて、後ろの
二枚は強くて頑丈に出来ている。鼻先から額まではなだらかな曲線

「なってて額はだいぶ広いから、頭突きをよくするのかな」

「響に聞いたら、教えてくれるかもな。さっきちょっと聞いたんだけど、一般には気性が荒いみたいだ」

「この子は大人しいね」

「ああ」

「ウウ…」

風華がその広い額を軽く叩くと、嬉しそうに前の翼を羽ばたかせる。

「あはは、可愛い」

横に回って翼に触れる。

引つ張ってみたり、翼膜に触ってみたり。

銀龍の方もそれが楽しいのか、尻尾の先を上下させている。

「ん？」

龍の目の周りに隈取りのような模様が現れている。

…なんだ？

「龍紋。嬉しいとき、怒ったとき、哀しいとき。感情が昂ったときに出てくるんだ」

「ふうん」

「わたしや光も出るんだよ。こっ…」

そう言つて、目の下をなぞる。

…いつの間に来てたんだらうか。

「どうするの？この子」

「そうだな…」

「え？ここで飼ってたんじゃないの？」

「そんなわけないだろ。夕飯の前くらいに迷い込んできたらしいんだ」

「じゃあ、飼ってあげようよ！」

「簡単に言うけどなあ……」

「……この子は、行くあてはないって言ってるよ」

「でもなあ……」

「お願い！姉ちゃん！」

拝み倒されても困る。

これだけの龍を養うには相当な量の餌もいるだろうし、家もない。

それに、最近ただでさえ出費がかさんでいるのに、これ以上抱え込むのも……

「良いんじゃないか？」

「え？」

「ただし、寝床と食べ物は自分で確保すること。お前と明日香とではわけが違っんだ」

「グルル……」

「ああ。それが出来るなら、ここにいてくれても構わない」

「……………」

「いいよ、そんなの。あんな条件を呑んでもらってるんだ」

「ウウ……」

「はは、そうかもな。でも、ごめんな。ちゃんと迎え入れてやりたいけど、今は無理だ」

「……………」

「うん。ありがとう。よろしくな」

また何か夢でも見てるんだろうか。

……利家は龍と話していた。

響も話してたけど、それよりもずっと驚いた。

「ん？どうした？」

「兄ちゃん、この子と話せるんだね！」

「え？話せないのか？」

「わたしは話せるよ」

「そうか。響だけなのか……」

「ねえねえ、どうやったの？」

「紅葉に教えてもらった通りに。思ったよりも簡単なんだな」

「あ……そうなのか……？」

……あとでやってみよう。

「なんで、こんなに大きいのに、伝説になるくらい目撃例が少ないんだ？」

「うーん…分かんない。山の奥とか湖の底とかに住んでるからかなあ」

「へえ、そんなところに住んでるんだ」

あまり興味なさげに答える風華。

龍がどこに住んでるかより、銀龍のたてがみを編んだ腕輪を作る方が面白いらしい。

たてがみの毛は一本一本が大変に細く、十本ほどで一本の糸として編み込んでいく。

「出来た！」

「上手いもんだな」

「はい。姉ちゃんにあげる」

「ん？オレか？」

「うん」

「ありがとう」

「どういたしまして」

桜の銀の腕輪と並べて着けてみる。

銀とはまた違う、周りの光を吸収してるかのような輝きを放つ。

「あれ？この子、寝てない？」

「ホントだ」

腕輪の完成を待てなかったらしい。

地に伏せた格好のまま、深い息をしていた。

「こんなところで寝て、風邪とか引かないかな」

「大丈夫だろ。こんな暖かい布団を被ってるんだ」

たてがみをゆつくりと撫でる。

たくさん空気を含んで、ホント、すごく暖かそう。

「そういえば、逆鱗に触れるという言葉があるけど、あれは龍から来てる言葉だろ？こいつには鱗もないみたいだけど」

「銀龍とか黒龍みたいに、全身が毛で覆われている龍には逆鱗はないよ。その代わりに、元から気性が荒かったりするの。逆に、白龍とか紅龍みたいな鱗のある龍は、逆鱗がある代わりに大人しい」

「逆鱗は、言葉通りなのか？」

「ううん。触つても大丈夫だよ。でも、龍にとっては命の次くらいに大事な部分だから、よっぽどでないと触らせてくれないよ」

「ふうん」

「光なら触らせてくれると思うよ」

「光？光に鱗なんてないじゃないか」

「ああ、えっとね、”反転”っていう術式があるらしいのよ。時空を越えて、一番関わりの深かった動物になれるらしいんだけど」

「うん。だいたいは種族通りなんだけど、たまに違う人もいるんだ。それに、人は本当にいろんな姿に反転するの。お姉ちゃんも、何になるかは分からない」

「ふうん。オレなら狼の可能性が高いということか」

「そうだね」

疑うわけではないけど、そんな不思議な力があるなんて、まだ信じられない。

反転とは言っけど、要するに変身じゃないか。

本当に、そんな力があるんだろうか…？

「お母さん、疑ってるんだ〜」

「あ…いや、そういうわけじゃ…」

「私も最初は信じられなかったもん。自分で使ってみても、夢なんじゃないかって」

「元々、龍にだけ伝わってた力なんだよ。術式って。わたしは逆に、お姉ちゃんが術式を使っててびっくりしちゃった」

「まだまだ使いこなせてないけどね…」

「大丈夫だよ。元素式が使えるなら、どんな術式だって使えるよ」

「そうかな…」

「うん！」

私には、何が何だかさっぱり。

まあ、ゲンソシキというものは相当高難度らしいということは分かった。

「あ、姉ちゃん、ごめんね。置いてけぼりで…」

「そうだな。全く分からん話だ」

「ごめんって」

拗ねた風に顔を背けると、風華は慌てて謝る。

面白いから、もっと見たかったけど

「…もうそろそろだね」

「ああ」

東の雲が、月の光を反射し始めた。

「部屋に戻ろっか」

「もう少し、ここに居させてくれ」
「…うん」

夜と土の匂い。

この銀龍の、獣のような匂い。

そこに、風華のどこか甘い匂いや響の清流のような匂いが入り混じって、なんとも心地良かった。

「…じゃあ、戻ろっか。響も。もう遅いから」
「ああ」「うん」

風華は私の手を取ると、思い出したように、龍に声を掛ける。

「お休み、セト。また明日ね」
「ウルル…」
「ふふ、くすぐりたいよ」

また額を擦りつけているんだろう。
甘えるような声を出している。
そして、風華がセトの頭を軽く叩いてやると、満足そうにため息をついて、また眠りに就く。

「待たせたね。行こ」
「ふぁ…あふう…」
「ごめんね、響」
「ううん…。大丈夫…」

大丈夫じゃないのは明らかで。
風華の手を一旦離して、響を背負う。

「あ、姉ちゃん！私がやるから！」

「いいって。ほら、手を引いてくれるんだろ？」

「もう……」

片方の腕で響を支え、もう一方で風華の手を握り。

二人の温かさを感じながら。

ふふ、セトのお陰だな。

47（後書き）

風華さん、いつの間に名前を付けたんですか。
いきなり公開しないでください。

「あ、あれは何なんですか？」

「龍だろ」

「いや、それは見たら分かりますけどね……」

良い匂いがするからか、セトは興味津々といった風に厨房を覗き込んでいた。

「ウルル……」

「襲ったりしませんよね……？」

「さあな」

「ええ……」

「それより、早く朝ごはん、作ってくれないか」

「わ、分かってますけどお……」

セトの方をチラチラ見て、料理に集中出来ないみたいだった。

「おい、セト。こいつがビビってるから、ちょっと向こうに行ってくれないか？」

「ウウ……」

「よしよし、良い子だ」

「はふう……」

「さあ、早く作ってくれ」

「はい……」

厨房に来る前、試しにいつもの方法で話し掛けると、意外とあっさり応えてくれた。

そして、ずっと向こうの山から来たということ、なぜここに留まっ

たのかは分からないということを教えてくれた。

「はい、どうぞ」

「いただきます」

「うわっ！」

「なんだ…騒がしいな…」

「だ、だつてえ…」

またセトが覗き込んでいた。

次は、私の食べているものに興味があるようだった。

「そらっ」

比較的大きな魚の切り身を寄越す。

それを器用に口で受け止め、その巨体に対してあまりにも小さなものをムグムグと味わう。

「オオン！」

「そうか。美味いか」

「え、ええ…ホントにそんなこと言ってるんですかあ？」

「ああ」

バサバサと翼をはためかせて興奮してる様子を見れば、分かりそうなものだけど。

「グルル…」

「ダメだ。オレの分がなくなるだろ」

「……………」

「他のやつに貰え」

「ウウ…」

貰えないと分かると、翼を折り畳んで、どこかへ行ってしまった。
まあ、そのうちみんなが慣れてくれば、いろいろ貰えるだろう。
とにかく今は、私の分がなくなるのだけは避けないと…。

洗濯場に行くと、すでに何人が洗濯を始めていた。

「あ、隊長。おはようございます」

「おはよう」

「あの銀龍は何なんですか？」

「セトだ」

「セト？名前ですか？」

「ああ」

「いつの間に広場に住み着いたんですか？」

「昨日」

「へえ…」

何か腑に落ちないというような顔をして、また洗濯に戻る。
まあそうだろうな。

知らない間にあんな龍が住み着いていて、私は平然としている。

疑問は解決するどころか、さらなる疑問を呼んで。

私はもう考えることを放棄したただけなんだけど。

「わあっ!？」

「なんだ」

「い、いや…いつの間にか龍が来てたので…」

「龍じゃなくてセトだ」

「ウルル…」

「はあ…びっくりさせないでくださいよ…。しかし、そんなに大き

いのに、よく足音も立てずに歩けますね…」

「……？」

「まあ、あれだ。大きさは関係ないってことだな」

それに、足音はしなくても気配はだだ漏れなんだから。

戦闘班なら説教してやるところだが、あいにく医務班だ。
今回は見逃してやろう。

「それより隊長。手伝ってくださいよ」

「ああ、そうだった」

そろそろみんな集まってくる頃だな。

さあ、洗濯の時間だ。

各村の代表とその子供を交えた初めての洗濯だったわけだが、さすがと言うべきか、誰も賑やかなこの時間に動じていなかった。
たぶん、慣れているんだろう。

「こおら！何しとんねん！ちよつとは手伝い！」

「イヤやもーん」

「手伝わな、あとでどつきまわすで！」

「へーんだ」

…うん。

慣れてるといっつか、遅しい、だな。

「葛葉！待ちなさい！」

「いや」

「葛葉！」

向こうに比べると、こっちは迫力に欠けるな。
やはり、方言の力なんだろうか。

それとも…威厳？

「はあ…なんで手伝わないのかな…」

「子供は遊ぶのが仕事やし、しゃーないっちゃあしゃーないんやけどね」

「うーん…」

「ほつといても大人になるんやから。風華ちゃんも怒れるうちに怒つとかなあかな！」

おばちゃんは、大笑いしながら風華の背中を叩く。

風華は、痛いような、哀しいような、そんな顔をしていて。

そして、セトはそれを不思議そうに眺めていた。

「さ、口より手え動かさんと！」

「おばちゃんの口が、一番よく動いてるみたいだけど？」

「まあ、確かにそうかもしれんな！」

また大笑い。

本当に賑やかな人だな。

「お姉ちゃんっ」

「あ、望。どうしたの？」

「えへへ。手伝いに来たの！」

「え？」

ニコニコ笑って、洗濯桶の前に座る。

風華は、突然のことに全く頭が追いついていないようだった。

…子供の成長は早い。

たぶん、衛士になったことが望の意識を変えたんだと思うけど、子供はみんな、大人が知らない間に大きくなっているものだ。

「桜！今日という今日は許さないからね！」

「大成功！」

…まあ、童心を忘れないのも大切なことだ。

洗濯も終わり、外周の見回りなんかを試みる。

やることも何もないというのが実際のところなんだけど。それにしても

「なんでお前が付いてくるんだ」

「……？」

森の小道は決して広くはないのに、身を縮めながらセトが付いてきていた。

ていうか、ほとんど匍匐前進。

「何も面白いことはないぞ」

と、構わず進もうとは思っただけど、やっぱり気になるものは気になる。

「付いてくるなよ。風華のところにも行ってこい」

「……」

「自分で探せよ」

「ウウ……」

「分かった分かった……まったく……」

その”美味しいもの”が、変なものじゃなければいいんだけど……。後ろはセトに塞がれてるので、結局、外周をぐるりと一周して城へ戻ることになった。

外門に着くと、その上で桜が日向ぼっこをしていた。

「風華、知らないか？」

「知らない」

「そうか」

「葛葉なら知ってるんじゃない？」

「その葛葉は、普段どこにいる？」

「風華の近く」

「じゃあな。あまり役に立たなかったけど、礼だけは言っておくよ」

「ボクだって、一所懸命考えてるんだからね！」

「分かった分かった」

「もう！」

桜に軽く手を振り、中へ入る。

外門は充分大きいから、セトでも通ることが出来る。

門をくぐった先の広場では子供たちが遊んでいた。

その中に、葛葉の姿が見受けられた。

「おい、葛葉。風華を知らないか？」

「んー、知らない」

「そうか」

「ねーねーも、いつしよにあそぼ！」

「ああ。でも、今はやることがあるから、また今度な」

「ええー…ねーねーとあそびたい」

服を掴んで離さない葛葉を抱え上げる。

しばらくはグズっていたけど、次第に大人しくなってくる。

「葛葉」。何してるの？」

「ほら、呼んでるぞ」

「…うん」

下ろしてやると、一瞬こちらを見て、子供たちの方へ走っていった。私より、やっぱり同じ年代の子と遊ぶのが良いだろう。その方が学ぶことも多いしな。

「龍だ」

「セトって名前なんだよ！」

「セト、お手！」

子供たちに囲まれ、楽しそうにしている。風華を連れてこなくても大丈夫そうだな。でもまあ、いちおう探しておくか。

広場を抜け、内門を通り城に入る。

「あ、隊長。隊長の知り合いだっという不審者がうろついていたので、捕まえておきました」

「ん？名前は？」

「えっと…美希だったかと」

「いつ捕まえたんだ」

「昨日の夜に」

「なんですぐに報告しなかったんだ」

「昨日はいろいろ立て込んでいたので…」

「まあいい。どこにいるんだ」

「伝令室にいます」

「そうか。次からはすぐに報告しろ」

「はっ！」

昨日、夕飯に来てないような気がしていたけど、まさか不審者として捕まっているとは…。伝令室に急ぐ。

「あ、お姉ちゃん」

「なんだ」

「不審者に会いに行くの？」

「ああ。灯は？」

「私も、ごはんを渡しに行くんだ」

「今日は非番か」

「うん。王が代わってからは、非番ばかりになっちゃったみたいだけどね」

「…普段からそういうかんじで話してくれよ」

「ダメ。勤務中は勤務中。それ以外はそれ以外。ちゃんと分けないと」

「姉なんだから、もうちょっと威厳ある言動をだな…」

「何言ってるのよ。お姉ちゃんの方が歳上でしょ？私が妹」

「でもなあ…」

「それより、早くしないと不審者が餓死しちゃうよ」

「…そうだな」

美希のためにも急ごうか。

伝令室の戸を開けると、部屋の中ほど後ろ手に手錠をかけられ、ぐったり横たわっている赤狼の姿があった。

「美希。大丈夫か？」

「ん…？ああ…紅葉か…」

「はい、ごはんですよ」

「ありがとう…」

灯に差し出されたおにぎりを、横になつたまま弱々しく食べる。
昨日は何も食べさせてもらってなかったのか…？

「はあ…生き返った気分だ…」

「お水もどうぞ」

「ああ…」

盛大にこぼしながら、なんとか喉を潤す。

「はあ…はあ…」

「私特製のおにぎり、どうでした？」

「うむ…」

「あ、あれ？寝ちゃった…」

「安心したんだろうな」

「ふうん…」

様子からして、何日もろくに食べてなかったのかもしれない。

昨日は望と響もいる手前、格好悪い姿は見せられない…と、そんなところか。

「ふふ、それにしても、可愛い寝顔」

「そうだな」

純粹無垢の子供のような。

安らかな寝顔だった。

49（後書き）

不審者、美希。

…不憫です。

「ん…」

「あ、起きた」

「おはよう」

「うむ…」

まだ寝ぼけているのか、半分だけ目を開けてこちらを見ている

「不審者じゃないれす…」

「分かってるから」

「ごはんくらはい…」

「じゃあ、厨房に行きましょうか」

灯は、私に美希を運ぶように促す。

…分かってるよ。

未だに横になっている美希をちゃんと座らせ、背負い上げる。

「さあ、出発進行！」

灯の明るさとは対照的に、美希は力尽きてまた眠っていた。

「お姉ちゃん、早く来てね」

「ああ」

そして、灯は先に厨房へ行ってしまった。

まあ、その方が効率的だけど。

…そつえば、何か忘れてる気がするな。
なんだっけ…？

まあ、まずは美希だ。
厨房へ急ぐ。

「ああ、紅葉。良いところに…」

「オレは良くない」

「そ、そうか…。どこに行くんだ？」

「厨房」

「後ろのは？」

「美希」

「……………」

「じゃあな」

「あ、僕も行くよ」

「そうか」

利家も同伴することに。

美希は相変わらず眠っていて。

「でも、寝てるのになんで厨房なんだ？」

「さつき一瞬起きて、ごはんが食べたいって言ったから」

「ふうん…。知り合いなのか？様子からすると、浪人みたいだけど

…」

「ああ。元は望と響の同伴者だったらしい」

「へえ…」

「昨日、この辺をうろついてたところを捕まえたんだと。まったく

…あいつらも、妙なときだけ動きが良いんだから…」

「なんで昨日のうちに解放してやらなかったんだ？今こうしてると

いうことは、昨日はそのまま拘留してたんだろ？」

「ああ。捕まえた連中が、忙しくて報告出来なかったって」

「ふうん…。そうになると、報告の仕方を変えた方が良いのかもな…」

「そっだな」

直接報告より、日誌形式とかにした方が良いんだろうか…。でも、今回みたいに、忙しくて日誌を書く暇がなかったら結局同じことだ。

「まあ、それはあとで考えよう。事を急するのは、美希の方だ」
「ああ。分かってる」

最後の角を曲がり、厨房に到着。
中へ入り、まだ目の覚めない美希を椅子に座らせ、頬を軽く叩く。

「美希。起きろ。ごはんだぞ」
「調子が悪いときは、お粥に限りますね」
「……………」

薄目を開け、大きく息を吸い込み、また目を瞑る。

「おい、美希？」
「身体が動かない…」

そう言つて、机に突つ伏す。

「はぁ…。仕方ないな…」

身体を支えてやり、用意された匙を取る。
お粥を掬つて美希の口へと運んでいく。
相変わらず目は閉じたまま、少しずつモクモクと食べていく。

「あ、こら！匙を噛むな！」
「んー…」

引き抜いたときには、もう遅かった。

匙には美希の牙のあとがはつきりと残っていて。

「はい、こつちをどうぞ」

「あるなら最初から出せよ…」

「お姉ちゃんなら、金匙でもボロボロにするからね」

「今食べてるのは美希だろ…」

ヒヤリと冷たい金匙を受け取り、再び美希にお粥を食べさせる。

…灯だって、昔はよく匙を噛んで怒られてたじゃないか。

今はもう噛み癖は抜けたみたいだけど…。

「はあ…。生き返った…」

「ふふ、さつきも言っていましたね」

お粥を全て食べ終わり、なんとか自分で身体を支えられるようにもなったみたいだ。

「そつえば、あれは何なんだ…？」

美希が指し示す方。

見なくても分かるんだけど、いちおう見てみる。

そこにはやっぱりセトがいて。

「はしたないぞ、セト。良い匂いがするからといって、覗くんじやない」

「ウルル…」

「ん？」

窓から何かを押し込もうとしているが、大きすぎて上手くいかないようだ。

「まさか、それが”美味しいもの”か？」

「ウウ……」

「はあ……。あとで取りに行くから、そこに置いておけ……」

そして、それを下に置くと、どこかへ飛んでいつてしまった。
……そういえば、風華を探さないといけないんだったな。
どこにいるんだろう……。

「今の、何かな……」

「たぶん、熊だろうな」

「……………」

灯は絶句、利家は呆れ顔、美希は理解出来てないかんじだった。
熊は、狼だった頃にも食べたことはなかったけど、美味いとは聞いていたので楽しみだ。

……それにしても、龍は肉食なんだろうか。
それとも、たまたま熊を捕ってきただけ？

「そうだ。望と響はどこにいるんだ？」

「さあな。広場にでもいるんじゃないか？」

「そうか」

「あ、今日は夕飯、食べていきますよね？」

「そうだな。今日こそ食べないと」

「分かりました。美希さんのために、美味しい料理、作りますね」
「うん。ありがとう」

礼を言う美希に、利家が忠告する。

「美希。旅の生活もいいけど、ちゃんと食べるよ」

「分かってるけど…」

「食に困るなら、ここに住んだらどうなんだ。衣も住も揃ってるし」

「それも良いけど…」

「問題があるのか？」

「やっぱり迷惑は掛けられないよ」

「迷惑だなんて！大歓迎ですよ！」

「そうだな。今でも、こんな大所帯だ。一人や二人増えたって変わらない。でも、ここにいかどうか、決めるのは美希自身だ。好きなようにすればいい」

「僕としては、浪人の行き倒れ事件の処理をしなくて済む方が良くけどな」

「…うん。ありがとう。でも、もう少し考えさせてくれないか？ここが、本当に私の居場所なのかどうか…」

「さっきも言ったけど、誰が決めるのでもない。自分の生き方は、自分で決めるんだ」

「…うん」

そして、美希は静かに厨房を出ていった。

ここに腰を据えるのか、放浪の旅に戻るのか。

ふたつの相反する生き方を背負いながら。

風華は利家の言う通り、医療室にいた。

横に覚書を置きながら書簡に何かを書いている。

たぶん、目録を作ってるんだろうな。

「ワツカ…解熱、鎮痛作用…。処方量に注意…」

…ものを書きながら、内容を喋る癖でもあるんだろうか。

極秘の文書は風華に書かせないようにしないと。

横に積み上げられた書簡を広げて見てみると、五十音順にまとめていることが分かる。

ワ行まで来てるなら、もうすぐ終わるんだろう。

風華も気付いてないようなので、そのまま待つことにする。

「ワライグサ…鎮静作用…。備考なし…」

…ないのか。

「ワライタケ…幻覚作用…。猛毒…」

そんなものが、ここにあるのか？

「ワライメカブ…解熱作用…。美味しい…」

そんなことも書くのか。

それにしても、さっきからワライなんかが多いな…。

「ワラビリンドウ…効用なし…。良い匂い…」

…薬棚にしまうより、外に出しておいた方が良いと思うんだけど。

「ワリトウマイ…止血作用…。食べずに、患部に塗ること…」

そんな備考を書くということは、やっぱり”割と美味しい”のだろうか。

そのあとも、ワルイグサとかワルクナイグサとか、本当にそんなものがあるのかというような名前が続いた。

備考によると”いぐさ”の一種らしいけど…。

悪い草、悪くない草…ではないようだ。

「はあ、終わった」

「ご苦労様」

「うわっ！？い、いたの？」

「ああ」

「もう…いるならいるって言ってよね…」

「次からはそうしよう」

「で、どうしたの？」

「ん？セトに風華を探してくれって頼まれてな。報酬も先に貰ったし」

「報酬？」

「ああ。まあ、今日の夕飯にでも出るだろう」

「ふうん…？」

書簡を丸め、紐で縛って棚へしまう。

書簡の表には、その書簡の一番最初と最後のものの名前が書いてあるらしい。

風華はそれを確認しながら、順番に並べていく。きちんと整理整頓するというのは大切なことだ。

欲しいものがすぐに取り出せるし、他の人から見ても分かりやすいなにより、整然とした部屋は気持ちの良いものだ。

しっかり食べる、よく寝る、思いっきり遊ぶ、寝床だけは綺麗にしておけ。

どちらの母さんも、いつも言っていたこと。

「あ、そうだ。昼ごはんを食べてから、灯が涼さんのところに行くんだって。料理教室。私も一緒に行かせてもらうことになったんだけど、どうする？」

「ん？オレか？」

「他に誰もいないじゃない」

「オレは…やめておくよ」

「ええ、なんで？」

「ガラじゃないしな」

「でも、今日も暇なんですよ？」

「それはそうだけど…」

「じゃあ、行こうよ」

「衛士長が毎日遊んでるのは…」

「いいじゃない。誰も姉ちゃんに働いてほしいなんて思っていないだろっし」

「うう…」

それは真実かもしれないが、改めて言われると心に突き刺さる…。

「ねえ、行こうよ」

「うーん…」

セトのように額を私のお腹に擦りつけて甘える。そんなことされても…。

「やっぱりダメだ…」

「むう…。それじゃあ仕方ないね…」

「ごめんな…」

「ううん。姉ちゃんも、衛士長らしいところを見せないといけないもんね」

「そ、そうだな…」

衛士長らしいところって…どんなところ？

午の刻の少し前。

早めの昼ごはんを食べに、厨房へ行く。

「お願いしまゝす」

「はい。分かりました」

「セトが覗いてるぞ」

「…もう慣れました」

「あ！セト！迷惑かけちゃダメでしょ！」

「ウウ…」

「ははは…。もういいですよ…」

諦めたように料理に取り掛かる。

でも、風華は止まらない。

「朝もいたよね？なんで、お仕事の邪魔をするの？」

「……………」

「黙ってちゃ分からないでしょ！」

「ウルル…」

「謝ってもダメ！なんで、お仕事の、邪魔を、したの？」

「キュウ…」

「自分で食べてるんでしょ？なんで、ここに来る必要があるのよ」
「……………」

「はぁ！？」

「オオン…」

風華に圧され、完全に畏縮してしまつてゐる。

…まさか、こんな構図が成立するとは思わなかった。

小さな風華は大声で捲し立て、大きなセトは情けない声を上げ。

「風華。ごはん、出来てるぞ」

「ちよつと黙つてて！」

「まあ、それは良いけど、涼のところに行けなくなるぞ」

「あ！そうだった…」

「さあ、セトを解放してやれ」

「ああもう！とにかく、厨房を覗くのは禁止！夕飯のときは、広間も禁止だよ！分かった？」

「……………」

「分かったの？」

「ウウ…」

「唸つてたら分からないでしょ！」

「……………」

「はぁ…。最初からそう言えば良いでしょ。…もういいよ。行きなさい」

そう言われて、逃げるように去っていくセト。

…相当怖かつたんだろうな。

恐怖の原因、風華は、頬を膨らませ乱暴に椅子に座り、ごはんを食べ始める。

「喉に詰まらせるぞ」

「……………」

「いただきます」

「…うつつ」

「ほら、言わんこつちやない」

風華の背を叩いてやる。

しばらく苦しんでいたが、ちゃんと飲み込めたらしい。

「はぁ…はぁ…」

「大丈夫か？」

「ふう…」

軽く頷くだけだった。

まあ、これ以上刺激することもないだろう。

不機嫌な空気のまま、昼ごはんの時間は過ぎていった。

風華と灯は涼のところへ行き、セトは広場の隅でいじけている。
子供たちは、私の部屋に集まって昼寝。

私は、その横でただ空を眺めているだけだった。

「ふう……」

ため息をついてみても、何が変わるわけでもない。

流れていく饅頭のような雲を見て、いたずらにお腹を空かせるだけ。
桜やユカラは何をしてるんだろうか。

利家と空は議会だし。

美希は見掛けない。

と、葛葉がモゾモゾ動き出して起き上がる。

「ねーねー……」

「ん？ どうした？」

「おしっこ……」

「よし。歩けるか？」

「うん……」

葛葉の手を取り、厠へと向かう。

そういえば、前にも光を連れていったな……。

フラフラと歩く葛葉を、なんとか厠まで引っ張っていく。

「ほら。着いたぞ」

「んー……」

戸を開け、中に入っていく。

…開けっ放しだったので、いちおう閉めておく。
ちゃんと閉める習慣を付けさせないといけないな。

「あう…」

「どうした？」

「うう…」

「……？」

戸を開けて見てみると、寝ぼけていたせいか、下着を下ろさずに用を足そうとしたらしい。

下着だけでなく、着物までびしょびしょに濡らしていた。

「あーあ…」

「うう…お母さんにおこられるよお…」

「大丈夫だから、な？泣かないで」

「うん…」

葛葉の頭を撫でてやり、ひとまず落ち着かせる。
さて…

「おい！ちよっと手拭いを取ってきてくれ！」

「……？了解しました」

ちょうど近くに来た誰かに頼む。

その間に、下着を脱がせて粗方拭き取っておく。

こりゃダメだな…。

全部着替えさせないと…。

そうしてるうちに、さっきの誰かが戻ってきて、戸の隙間から手拭いを差し出す。

「隊長。どうぞ」

「ありがとう」

「どうしたんですか？」

「ちよつとな…」

「うう…」

「ああ…葛葉ちゃんですか…。他にご入り用のものは？」

「風呂と着替えの用意を頼む。すぐ行くから」

「はい、分かりました」

受け取った手拭いで、きちんと拭いてやる。

そして、下着を手拭いで包み、葛葉を肩に担ぐ。

「あう…」

「よし、行くぞ」

厠を出て、真っ直ぐ風呂場へと向かう。

距離も近いので、誰と会うこともなく到着。

さっきの誰か…清正が、葛葉に合う服を探していた。

「あ、隊長。汚れた服はその辺に置いておいてください。あとで洗つておきますので」

「ああ。ありがとう」

「いえいえ。あとですね…この服って誰のか分かりますか？」

そう言って、綺麗に折り畳まれた服を指す。

「…美希のだな」

「美希？誰です？」

「オレの知人だ」

「へえ…」

「入ってるのかな…」

「さあ…？中は見てませんので」

葛葉に服を脱がさせて、風呂場に入る。
戸を勢いよく開けると

「きゃっ！」

「やっぱり入ってたのか」

「い、紅葉…？」

「ああ。葛葉もいるぞ」

「葛葉…？」

「お風呂」

「あ、こら！先に身体を洗え！」

「むう…」

葛葉を抱えて止め、洗い場の椅子に座らせる。
しっかりと洗い流し、尻尾も洗ってやる。

「ん」

気持ち良いのか、足をパタパタさせる。

それにしても、やっぱり九本は多いな…。

つて、あれ…？

どれが洗い終わって、どれが洗い終わってないんだっけ…。

「んー、それはもうあらったよ」

「そうか。どれが洗ってないんだ？」

「これ」

すると、器用に二本だけ振る。

…どういつ構造になつてゐるんだろう。
と、美希がジツとこちらを見ていた。

「美希もやるか？」

「え、あ…良いのか？」

「うん、良いよ」

「そ、そうか。ありがとう…」

「なんで美希が礼を言つんだ」

「な、なんでだろ…」

そして、緊張した様子で湯船からあがつてきて、おそろおそろ葛葉の尻尾に触れる。

「えへへ…」

「あ…」

すると、葛葉はわざと尻尾を避けてみたりする。
美希は一旦手を引つ込めるが、意を決したように

「やつ！」

「きやう」

「葛葉は可愛いなあ」

「えへへ」

葛葉を抱き締める。

頭を撫でたり、尻尾を触ったり。

葛葉も嬉しそうにはしゃいでいる

…二人とも、当初の目的を忘れてないだろうか。

「ちゃんと洗っておけよ。オレは出てるから」

「はい」

「紅葉も、服、脱いできたなら？」

「…また今度な」

「そう…」

まったく…。

…美希のは、ちょうど良い大きさ、形だな。

香具夜までとは言わないけど、せめて美希や灯くらいは欲しかった…。

はあ…。

同じ狼なのに、なんでこんなに違うんだ…？

「ん？どうした？」

「あ、いや…」

「……？」

負け犬の気分を引きずったまま、風呂場をあとにする。

「楽しそうでしたね」

「そうだな」

「葛葉ちゃんの替えがこれです。美希さんの服もすごく汚れていたので、ついでに洗っちゃったんですが…。替えは狼用でよろしかったですでしょうか？」

「ああ。ありがとう」

「いえ…。あと、二人とも衛士の服しか用意出来ませんで…」

「いいよ。ご苦勞様」

「はい、ありがとうございます。では、失礼させていただきます」
「ああ」

丁寧な敬礼をして戻っていった。

風呂からは、まだ楽しそうな二人の声が聞こえる。

… やっぱり私も入ろうかな。

服を脱いで、風呂場へ舞い戻った。

52（後書き）

あー…。

やっちゃってくれましたね、葛葉は。

美希は葛葉のことが大好きみたいですが、どうなんでしょう。

「グルル…」

セトは大きくため息をつく。

風華に怒られたことが、相当効いているらしい。

「シャキツとしろよ。女々しいぞ」

「……………」

「お前が悪いんだろ。風華だって、むやみに怒ったりはしない」

「ワウ」

「ほら。明日香も言ってるだろ」

「ウウ…」

「紅葉は…動物と話が出来るのか…？」

「利家も風華も、セトとなら話せるぞ。明日香はまだダメみたいだけど」

「へえ…」

「簡単だ。心を通じ合わせればいい」

「……………」

「まあ、あれだ。こいつらと話がしたいと想えば良いんだ」
「ふむ…」

目を瞑り、念じるように眉間に皺を寄せる。

「あんまり気張るな。最初は目を合わせるところから入れ」

「むう…」

「聞いているのか？」

全く聞いてないらしい。

念波を送るかのように、唸ってみたりしている。

「美希。おい」

「ん？ああ、なんだ？」

「まず目を合わせる。念じるんじゃないくて想うんだ。話がしたいと」
「ふむ…」

明日香を目の前まで抱き上げて、ジッと目を見詰める。

「……………」

「おい、明日香が怯えてるぞ」

「え？そうなのか？」

「睨むんじゃない。もっと楽に」

「難しいな…」

ていうか、利家と風華のことを考えると、練習相手として明日香を選べる時点で、難易度を相当引き上げてるんだけど…。

まあいいか。

明日香と話せば、セトとも話せるだろう。

「まずは目を合わせて…。念じるんじゃないくて、相手を想う…」

「……………」

「ちょっとセトは黙ってて」

「ワウ」

「ウルル…」

…明日香と話せるようになるのも、時間の問題だろうな。
風呂からあがり、また昼寝をしている葛葉の鼻をつまむと、たいした苦もなく口からの呼吸へ切り替えていた。

日もだいぶ傾き、空も赤くなってきた。
美希と葛葉は、セトのたてがみに埋まって眠っている。

「ただいま」

「ああ、お帰り」

風華と灯が帰ってきた。

良い匂いのするものをたくさん抱えて。

「お姉ちゃん、良い匂いがするからって、はした端ないよ」

「あ、いや…」

「これは夕飯のあとね。…どう？セトは」

「ずっといじけてたぞ。風華に怒られて」

「あ、あれは、セトが悪いんだからね！」

「分かってる分かってる」

「私だって…セトのことを想って…」

「まあ、気にすることはないさ。セトだって、こつやっつのつのと寝てるんだから」

「むう…」

風華はそつとセトの鼻先に触れ、ゆつくりと撫でる。

それに気付いて起きたセトは、甘えるように額を風華のお腹に押し付ける。

「仲直り、だな」

「セトが一方的に悪いんだけどね…」

「ウルル…」

「夕飯、もうすぐ出来ますよ」

「はい！」

さあ、美味しいごはんの時間だ。

風華はセトによく言い聞かせ。

セトは風華のことをよく聞いて。

思ったよりすんなり済んでしまい、夕飯の準備の最中に広間に着くこととなった。

「あー、お姉ちゃん、邪魔！」

「ああ…すまない…」

「隊長。席に座っててください。もうすぐ済みますからね」

「ありがとうございます」

言われるままに席に着く。

…ていうか、よく考えたらあいつにも間接的に邪魔だと言われたようなものじゃないのか？

隊長…衛士長って何なんだろうな…。

「しかし、広い部屋だな」

「ん？ああ、広間だしな。そりゃ広いだろう」

「なんか…落ち着かないな…」

「……？なんで？」

「こう…広すぎるといふか…」

「自然の方がもっと広いだろう」

「いや…でも、自然とは違う…。人間によって区切られた空間といふのは…」

「そういうものなのか」

「うん」

狼のときは自然に暮らしていたとはいえ、限られた縄張りの中で、こつちに来てからは、この街…この城からもあまり出たことはなかった。

だから、自然の広さは感じこそすれ、実際に体験したことはなかった。

「美味そうだなあ」

「あまりのんびりしてられないぞ」

「なんで？」

「美希」

「おつ、葛葉」

「いつしよに食べよ」

「ああ。一緒に食べような」

「葛葉となら大丈夫だな」

「だから、何の話なんだ」

「見てれば分かる」

そろそろ準備も出来て、みんな集まってきた。
…桜と望だけがないけど。

「はい、お姉ちゃん。もう食べていいよ」

差し出されたご飯茶碗を一気に手元に引き寄せると、その場所には箸が刺さっていた。

「こら！二人とも！危ないことはしない！」

「今日はダメなの！」

「望！次行くよ！」

「あ、ちよつと！」

灯は二人を追いかけてようとするが、もちろん上手くない。
すぐに見失ってしまう。

「なんだ…今のは…」

「ここは戦場だ。気を抜くな」

「美希、あーんして」

「え？あ…あーん」

「ん」

楽しそうだな。

でも、こっちも負けてられない。

唐揚げのひとつを素早く取り、食べてしまう。

「あつ！」

「やつ！」

「甘い甘い！」

さっきの箸を抜き、桜の箸に投げつける。
弾き飛ばすところまではいかなかったが、軌道は変えることが出来た。

「くっ…」

「たあつ！」

「ふん！」

桜の箸を払い、望の箸へと当てる。

望の箸を一本弾き飛ばし、桜の箸は宙へ舞った。

「勝負ありだな」

「うう…」

「みんなの前で良い格好しようと気張りすぎだ。もっと楽にしろ」

「分かってるよ…」

「じゃあ、それを実践するんだ」

「……………」

「分かったか？」

「うん…」 「はあい…」

そして、各々の箸を拾い、自分たちの席へ帰っていく。
今を見て、他の子たちも思うところがあっただろう。
さあ、次はどう来るかな。

多人数との戦いか。

燃えるな。

「く、葛葉…。自分で食べられるから…」

「あーん」

「むう…」

「あーん」

「はい、ねーねー」

「ああっ！私のなのに！」

「早く口を開けないのが悪いんだ」

「もう！」

やっぱり、ごはんは美味しく食べないとな。

月が昇る時間は、日ごとに遅くなってきた。
そのうち新月になって、また満月に向かう。
満月は新月に向かい…

「何を考えてるの？」

「いや…」

「あ、まだダメだよ！」

「……………」

ごはんを目の前にして待たされるのは相当辛いだろう。
それでも明日香は、ダラダラと涎を垂らして待っている。

「良いよ。食べなさい」

「……………」

早速駆け寄り、一心不乱に食べる。

今日はセトが捕ってきた熊の肉も入ってるから、いつもより豪勢だ。
いつも明日香の夕飯はみんなのあとなので、不平不満が積もっているみたいだから、これで少しでも機嫌が取れば良いんだけど…。

「ワウ！」

「ない。それで終わりだ」

「クウン…」

「ないものはないんだ。セトにまた捕ってもらえばいいだろ」

「……………」

「お前一人じゃ無理だろうな」

「……………」

明日香はそのまま広間を出て行ってしまった。
…明日香”一人”では無理だろう。
でも、まだ続きがある。
それに気付いているんだろうか。

「あ、そういえば、美希さんは？」

「さあな」

「明日には発っちゃうのかな…」

「…さあな」

美希は夕飯のあと、誰にも何も言わず、どこかへ消えてしまった。
別れを言つと、余計に去りにくなるからだろうか。
もしかしたら、もう遠くに旅立ったのかもしれない。

「まあいいや。また会えるよね」

「ああ。きつとな」

理由は分からないけど。
必ず、また会える。
そう確信出来た。

「グルル…」

「あ、セト。どうしたの？」

「……………」

「うん。もう夕飯は終わったよ」

「ウウ…」

「良いけど、なんで？」

「……………」

「黙ってちゃ分からないでしょ」

「……………」

「もっ…ちょっと待ってて。ごめんね、姉ちゃん」

「謝ることはないだろ。ゆっくりしてこい」

「うん、ありがと」

そう言うと、風華は広間を出ていった。

それにしても、女の子を夜の散歩に誘うとは、セトも隅には置けないな。

覗き…なんて野暮なことはやめて。

どうしようかな…。

「紅葉、暇か？」

「んー、どうだろ」

「暇なら…さ、散歩にでも行かないか…？」

さっきのセトの様子を見てたから驚きは半減。

それに…セトの方が誘うのが上手かった。

だから、少し意地悪を試してみる。

「どうしようかな」

「嫌ならいいんだ…」

「……………」

「……………」

「ふう…」

「…そうか。ごめんな、変なこと言って」

そして、そのまま立ち去ろうとする。

その後ろ姿に抱きついて

「ふふ、嘘だよ。さあ、行こうか」
「え？あ、うん」

利家の手を取り、広間をあとにした。

城の外周は真つ暗だった。

市場の方に行くと、夜店なんかもあるんだけど、そちらには行かず。

「議会も無事に集まり、それほど大きな事件もなく、この国は安定している」

「うん」

「僕がヤウトにいた頃、ずっと願っていた世界が、今ここにある」
「うん」

「まさか、自分が中心になるなんて思わなかったけどね」

「うん」

「…あ、ごめん。こんな話ばかりで…」

「ううん。犬千代の話、もっと聞きたい」

「それじゃ不公平だろ。今度は紅葉の話を聞かせてくれ」

「オ、オレの話？そんなのないよ…」

「ないはずないだろ？小さい頃の話とかさ」

そ、そんなこと言われても…。

「あ、そうだ」

「何か思い付いた？」

「綺麗な龍を見た」

「セトじゃなくて？」

「ああ。蒼い鱗の龍」

「へえ…」

「響が言っただけど、龍は感情が昂ったときに龍紋という模様が出るらしい。というか、セトの龍紋を昨日見たんだけど」

「龍紋か…」

「あの蒼龍の龍紋は本当に綺麗だったな…。どういう理由で感情が昂っていたのかは、そのときは分からなかったんだけど」

「へえ…。僕も見なかったなあ」

「その蒼龍は、いつも同じ場所にいて眠っていたんだ。オレが近付くと起きて、綺麗な龍紋を見せてくれた。それが楽しくて、毎日のように通った。母さんには危ないから近寄るなって言われてたんだけど」

「母さんって、狼の？」

「ああ。オレがまだ狼だった頃の話だ」

「うん。それで？」

「ある日、龍が話し掛けてきたんだ。私はもうすぐ行かなきゃいけないから、もうここに来てはダメだって。どこに行くのか、なんで来ちゃダメなのか、聞いても答えてくれなかった。ただ、何回も”ありがとう”って」

「……………」

「次の日に行ったときには、もう龍紋を見せてくれなかった。顔を舐めてみても目を開けてくれず、話し掛けても答えてくれず。思い付く限りの全てをしてみたけれど。いつの間にかお母さんが来ていて、もうやめてあげなさいって。お互いに哀しくなるだけだからって。…私はそこで初めて、身近な死を経験した。初めて…泣いた」

「……………」

「そして、私たちは規律に従い…その龍を…」

「そうか…」

利家は優しく肩を抱いてくれて。

ふと見上げると、木々の間から綺麗な星空が見えた。

部屋に戻ると、チビたちと風華はもう寝ていた。

「ごめんな…。辛いこと、思い出させて…」

「いや。あれはオレにとって大切な思い出だから」

「うん…。でも、ごめん…」

「はあ…。じゃあ…」

利家を抱き締めて、頬に口付けをする。

「……………」

「これで許してあげる」

「あ、うん…。どうも…」

「じゃあね。お休み、利家」

「お休み…紅葉」

振り返りざま、少し流し目で利家を見て、軽く尻尾を振る。

それが伝わったか伝わらなかったか、利家はこちらを見てニコリと笑った。

変な夢を見た気がした。

小さな蒼い龍が広い空を気持ち良さそうに泳ぎ回ってるのを、ただ見てるだけの夢。

昨日、あんな話をしたからだろうか、その龍はあのとときの龍に似てたような。

「んうーっ…」

大きく伸びをして、布団から抜け出す。

みんなは…まだ眠ってるよな。

上着を羽織って、冷たい廊下に出る。

廊下には誰もおらず、ただ静寂だけが挨拶を交わしてくれて。

「うう…寒…」

独りごちてみても、もちろん返事はない。

何か余計に寂しくなったので、広場に行ってみる。

端の方では、セトと明日香が眠っていた。

明日香は、布団なんかよりずっと寝心地の良いものを見つけたらしい。

「よっ…と」

その明日香の横に座り込んで、セトのたてがみを抱く。

たてがみは、外の冷氣など全くの嘘だったかのように暖かった。

「グルル…」

「起こしてごめんな」

「ウルル…」

「うん。ありがとう」

セトのたてがみに抱かれて、もう一眠り。

月の光が、太陽の光と交代するときまで…。

明るい光を感じて、目を開ける。

太陽がちょうど、外堀の上から顔を覗かせたところだった。

「……………」

「おはよう、セト」

「……………」

「ああ。お陰さまで」

「ウルル…」

「また今度な」

セトの頭を軽く撫でて、城の方へ向かう。

中に入るとすぐに、眠そうな夜勤組と鉢合わせた。

「ご苦労さま」

「あ、隊長…。おはようございます…」

「おはよう。今日はもうゆっくり休んでくれ」

「はい…。お言葉に甘えさせてもらいます…」

「ご苦労さま」

「ああ、そういえば、夜中はどちらへ？」

「ん？ちよつとな…」

「そうですね…。では、失礼します…」

「ああ」

そして、大きな欠伸をしながら部屋に帰っていった。

…しかし、見てたなら声くらい掛けてくれよ。

無駄に寂しい思いをしたじゃないか…。

そんなことを考えながら厨房へ。

今日は早かったにも関わらず、もう誰かがいるみたいだった。

料理の良い匂いが、食欲を刺激する。

「一番乗りだな」

「そうなのか？」

「もう少し待っててくれ。今、よそうから」

「ああ」

グツグツと煮えた鍋。

そこから漂う匂いは独特なもので。

「さあ、召し上がれ」

「いただきます」

何かの肉と野草を煮た、まさに旅人料理だった。

身体の中から力が湧いてくるような、そんな不思議な料理。

「どう？美味しい？」

「ああ」

「ふふ、良かった」

これは鹿の肉だろうな。

昔はよく食べていたけど、そういえば城に来てからは滅多に食べてないな。

風味からして、干し肉だろう。

「でも、良いのか？大切な保存食だろ？」

「良いんだ。もういらないから」

「…そうか」

匙を置いて、横に座っていた美希を引き寄せる。

「ようこそ。歓迎するよ。それと…お帰りなさい」

「うん…。ただいま」

帰ってきたわけじゃないんだけど。

でも、そんな気がして。

家族…だからかな。

美希の残留は、大変に歓迎された。

調理班のある一名は、このことを知ってたみたいだったけど。

「ええ…。お姉ちゃん、知らなかったの？」

「全くな」

「ごめん…。何も言わないで…。組合への挨拶とかに回ってたら…」

「いや、それはいいんだ。問題は、そんな重要なことを報告しなかったやつがいるということだ。誰なんだろうな？」

「誰でしょうかね、隊長？」

「お前だろ。灯」

「あれ？」

「まったく…」

でも、残ってくれたのは本当に嬉しいこと。
それに…

「今日は大人しいね」

「まあね」

「だって、美希お姉ちゃんが帰ってきたんだもん」

「美希さんの在不在に関わらず、いつもこうだと良いんだけど」

「考えとくよ」

望と響は特にベツタリで。

こうやって、滅多に参加しない洗濯の時間にも、顔を見せている。

「歓迎の祝砲」

「わっ、冷たっ！」

「ふふん。美希もまだまだだね」

「……………」

「こらっ！桜！」

「退散退散」

「ごめんね、美希さん」

「いや…。でも、いつもこんなのか？」

「お恥ずかしながら…」

「そうか」

これから、思いつきり楽しめそうだな。

…美希の尻尾が、そう言っていた。

「美希さんの部屋はどこがいいかな？」

「そんなの、どこでもいいぞ」

「望たちの部屋！」

「もう限界でしょ……」

「ええーっ！」

「一人用の部屋がまだ空いてただろ」

「いや……。やっぱり、誰かと一緒にいいな……」

独りはもう充分堪能したから。

美希の表情が、そう語っていた。

「じゃあ、私の部屋に来ます？」

「灯！いつの間に来てたの？」

「んー、今」

「今って……」

「そんなことより、どうですか？私の部屋。楽しいですよ」

「どの部屋も変わらないだろ……」

「変わるよ。何事も、おまけが肝要。買い物も部屋探しも」

「部屋探しには当てはまるのかな……」

「美希さん、どうする？」

「まあ、部屋を見てからだな」

「よし、決まりっ！」

……まだ決まっていなくて。

とにもかくにも、灯の部屋へ向かう。

しかし、灯の部屋か……。

灯は、三人部屋を一人で使っている。

元々は二人で使っていたんだけど、一人が別の部屋に移ったから、一人になってしまった。

移らないか誘ったんだけど、強情に突っ跳ねて。

「それにしても、一人で寝るのが怖いからって…」

「何が？」

「なんでもない」

「……？なんで姉ちゃんが答えるの？」

「あ…いや…」

風華の鈍感さに感謝すべきか。

それとも、分かった上での演技なのか。

とりあえず、美希には聞かれてないみたいだった。

「そうだ。昨日はどこに寝てたんですか？城の中にはいなかったみたいですけど」

「組合の宿にな。脱退手続きと、今までのお礼に」

「ああ、なるほど」

「組合って？」

「旅人補助組合。何かと苦勞の多い旅人のために、旅人補助同盟の同盟国が設置してる組合のことだよ。ルクレイも同盟国なんだけど、ユーロオ、ルイカミナ、ヤマトの三都市に組合が設置されてるの」

「ふうん」

「ルクレイが提供してる施設は宿と旅費稼ぎの短期採用斡旋所。他にも、提携商店では組合の証書があれば安く買い物が出来たりするんだ」

「へえ。よく知ってるね」

「まあね」

…衛士としての一般教養なんだけどな。

まあ、風華も知らなかったみたいだし、偉そうに胸を張ってる灯のためにも、今回だけは黙っておいてやろうか。

「本当に有難いことだ。組合のお陰で、私は安心して旅が出来た」
「でも、組合の維持にはお金が掛かるよね？どうするの？」

「宿に泊まるのにはお金が掛かるし、食事は付かない。仕事を斡旋してもらえば報酬に応じて紹介料を徴収される。だいたいはそれで運営してるみたいだ。あとは、寄付だな」

「美希さんも詳しいね」

「当たり前だろ」

「そりゃそうか」

「ところで、私の部屋、通り過ぎちゃったけど、どうする？」

「ええっ！？姉ちゃんみたいなことしないでよ！」

「お姉ちゃんもやってたの？」

「…忘れた」

「ええ…」

えっと…いつだったかな…。

ていうか、なんでそんな細かいことまで覚えてるんだよ…。

少し引き返して、灯の部屋に入る。

「わぁ、ぐちゃぐちゃだ」

「失礼ね。片付けてないだけよ」

「……………」

「な、何よ」

「ゴキブリでもいるんじゃないのか？…ほれ」

部屋の真ん中に敷かれた万年床をひっくり返してみる。

…ゴキブリこそいなかったが、埃が物凄かった。

「うわぁ……」

「これ、何？」

「なんで下着が散らばっているんだ」

「あつ！それはダメ！」

そんなかんじで、ひとしきり思い思いの感想を述べ終わると、一度廊下に避難する。

「……ふう」

「汚かったね」

「よく勧められたね」

「他の人の部屋より、ちょっと汚いだけじゃない……」

「ちよつと、ねえ……」

相変わらずだな、灯は。

片付けるのは上手いんだけど、散らかすのも上手い。

ある日、思い出したように綺麗さっぱり片付けたりするんだけど、

次の日には元通り。

私が毎日のように片付けていないと、寝るのにも苦労するくらいだった。

「決めたよ」

「何を？」

「この部屋に入る」

「ええっ！？」

「やった！」

「ただし、毎日片付けをすること。それと、散らかさない癖を付けること。それが条件」

「わ、分かったよ……」

入る方が条件付けなんて珍しいこともあるものだ。
でも、これくらいが灯にはちょうど良いのかもしれない。
…私は少し甘やかしてしまったのかな。

「さて…」

「大掃除、だね」

「ああ」

「頑張ろ」

美希を迎え入れるべく、しっかりと気合いを入れて戦いに挑む。

右を左に、左を右に。

窓も戸も全開にして。

「なんだ、これは」

「それはそっちに置いていて」

「そっちってどっちだ」

「あ、ゴキブリだ」

「ちよつと望！ゴキブリで遊ばないの！」

「手、洗ってこい」

「うん」

望はゴキブリを外に投げ捨てて、部屋を出ていった。
ふう…。

しかし、さっきからヤモリやら蛇やらゴキブリやら…。
さっきはなんで見つけれなかったのか不思議なくらい、多種多様な生物に溢れていた。

もしかして、こいつら、ここで飼ってるのか？

「おい、また蛇がいるぞ」

「ああ、その子はそこに置いてあげて」

「はいはい……」

やっぱり飼ってるんだな。

「はあ、だいたい片付いたね」

「まあ、普通の散らかり具合くらいにはなったな」

「もつと綺麗にしないと」

「ええ……。ちよつと休憩……」

「休むと始めるのが辛くなるだろ。こういつのは一気にやるのがいいんだ」

「へいへい……」

「ただいま」

「ほら、望も帰ってきた。再開だ」

ここまで来れば、あとは早い。

テキパキと片付けていく。

一番多かったのは、やはり覚書だった。

調理班として、料理好きとして。

飽くなき探究心と言うのだろうか。

料理の作り方や隠し味に入れるもの、さらには、食べた人の感想を書いたものもあった。

「それにしても、姉ちゃんの感想、”美味しい”とか”なかなかいける”とか、そんなのばかりだね。ほら、こっちなんで、”うん”としか書いてないよ」

「あはは。お姉ちゃんは、感想だけ聞いても分からないんだよ」

「他に聞くものがあるの？」

「うん。目は口ほどにものを言う……じゃないけど、お姉ちゃんにも

情感豊かなところがあるんだよ」

「え？どこ？」

「……………」

「ふふ、内緒。言ったら怒られちゃう」

「ええ…残念」

自分では全く分からないんだけど、灯が言うには、私の尻尾は本当によく喋るらしい。

うーん…。

まあ、尻尾で伝わるなら良いか…。

「はあ、疲れた」

「散らかさなければ、疲れることもない」

「美希はホント、きっちりしてるよね」

「旅人としての心得だ。後始末をきちんとするということは、世話をしてくれた人や自然への感謝にも繋がる」

「へえ」

「灯も一度、旅に出たらどうだ」

「んー、考えとく」

旅人としての心得だけじゃない。

自然に生きるものとしての当然の心構えでもある。

私も、よく母さんに言われたものだ。

「さて、布団だね」

「オレが取ってくるよ」

「望も行く」

「よし、じゃあ一緒に行こうか」

「うん！」

「ありがとう。本来は私に取りにいくべきなのに……」

「良いんだ。自分の荷物の整理でもしておけ」

「うん。ありがとう」

美希に軽く尻尾を振ってみせて、部屋を出る。

「お母さん」

「ん？どうした？」

「うーん……。えへへ、やっぱりなんでもない」

「そうか」

それでも、手を繋いでやると、こちらを向いてニッコリと笑い、ユラユラと尻尾を振った。

衛士と認められてから、望は急に大人びたかんじがする。
なんでだろうな。

何であれ仕事を任されたということが、意識を変えたのかな。

「ん」

なんて思っていると、手を離して腕に抱きついてきた。

…やっぱり、望は望だな。

甘えたで寂しがりだけど、しっかり者。

明るく元気な、可愛い女の子。

「ああーっ！望お姉ちゃんだけずるいー！」

「へへ、いいでしょ」

「わたしも」

「ぎゅ」

「こらこら…」

響、光、葛葉の三人も合流、私に群がってきた。

両手に花ならぬ、両手にチビだな、こりや…。

ていうか、重い…。

なんとか四人を引きずって布団を取りに行き、帰りはそれぞれ分担して運んだ。

「取ってきたぞ」

「遅かったね…って、あれ？増えてない？」
「気のせいだろ」

私が敷布団を置いて、葛葉が布を被せる。
そして光が枕を乗せ、また葛葉が布を敷く。
その上から望と響が掛布団を被せて、端を折り込めば完成。

「見事な連携だな」

「まあね」

「荷物は片付いたのか？」

「お陰さまで」

「元々少なかったしね」

「一日何里も歩くんだ。荷物は最小限にしないと」

美希の荷物は、見たところ大きな袋と調理道具、あとは小刀などの
雑多なものくらい。

服や下着はもうしまったのだろう。

と、光が美希の荷物の中から、木の板に模様が彫られたものを取り
出す。

「これ、何？」

「北の国のお守り。私は狼だから、”月の神”ルウムナの象徴であ
り、彼女の使徒である”純粋な心”ルウエの紋章を授かったんだ」

「ルウエ…」

「どうしたの、望お姉ちゃん？」

「うん。なんか懐かしいかんじがしたの」

「懐かしい？」

「うん」

「ふうん…不思議だね」

ルウエか…。

たしかに、なぜだか親近感が湧く…ような気がする名前だ。でも、望はその程度では収まらないらしい。

うーんとかえーつとか言いながら、大切なことを必死に思い出そうとしてるようだった。

「望。思い出せないなら、無理に思い出すことはない。たぶん、今はそのときじゃないんだろう。今は、その気持ちを大事に心にしまつておいて、そのときにちゃんと取り出せるように準備しておくんだ」

「…うん。分かった。ありがと、美希お姉ちゃん」

「そうだな。部屋も心も、きちんと整理しておかなければ、肝心なときに必要なものが取り出せない。な、灯」

「え？私？」

「…他に誰がいるんだよ」

「えっと、風華？」

「なんで私なのよ！」

「風華って、なんか適当そうだもん」

「何よ、それ！」

そして、それからしばらく風華と灯の口論が続いた。

…口論と言っても、風華だけが興奮してて、灯はほとんど冗談混じりなんだけど。

「本当に良かった」

「何がだ？」

「ここに留まることを決めて」

「……………」

「ここには、私の求めていたものがある。…家族が。たくさんのに…温かい光が」

「…そうだな」

「美希お姉ちゃん、呼んだ？」

「ん？」

「この子の名前は光だ」

「そうか。光か。ふふ、良い名前を貰ったな」

「うん！」

「世をあまねく照らす、光になりますように…」

「……？」

桜の花が咲く春も。

葛の葉が茂る夏も。

紅葉が色付く秋も。

風に華が舞う冬も。

美しき希望で以て。

天下に名を響かせて。

世をあまねく照らす光となりますように。

さあ、灯りを点けて。

物語を紡ぎ出そう。

望は熱心に葛葉の尻尾のお手入れ。

響と光は美希に北の国の言葉を教わっていて。

風華と灯は、膨大な量の覚書の整理をしていた。

「姉ちゃん、手伝ってよ」

「また今度な」

「今度はないの」

「美希の講義の方が面白そうだ」

「お姉ちゃん、北の言葉、話せるじゃない」

「え？そうなの？」

「まあ、向こうで生活が出来るくらいはな」

「ええ！？すごく話せるじゃない！」

「大したことじゃない」

「謙遜？嫌味？」

「お前のそういう質問が、一番嫌味だ」

「あれ？」

「姉ちゃん、私にも今度教えてよ！」

「ああ。分かってる」

ゆるやかに時は流れてゆく。

一文字ずつ、歴史を刻みながら。

…そろそろ腹の虫が鳴き出す頃だな。

厨房に行くと、朝にはいなかった本来の当番が暇そうにセトの頭を撫でていた。

「あつ！セト！」

「ウウ…」

「こんにちは。昼ごはんですかあ？またいっぱい来ましたねえ」

「ああ。八人…だな。頼むよ」

「了解しました」

「あと、風華。誰もいなかったんだから、別に良いじゃないか」

「でも！」

「そうですね。僕が暇して外を眺めてるもんだから、来てくれたんですよ」

「ウルル…」

「ホントですか…？」

「ホントホント」

「はあ…。仕方ないね…。でも、誰かが来たら、すぐに退散しなさいよ」

「オオン」

「ささ。座って座って。すぐ作りますからね」

「望のは大盛りね！」

「葛葉も」

「わたしたちは普通でいいかな」

「うん」

「はいはい。了解了解」

手際良く料理を作っていく。

灯や他のやつらとは違い、寛太の料理には芸術性を感じる。

食べてしまえば一緒なのかもしれないが、視覚でも味わえるというのは斬新だ。

…寛太以外の料理の見た目が不味いというわけではないんだけど。

「セト、セト」

「葛葉、ごはんのときは呼んじゃダメ」

「でも、セト、さみしい顔してたよ？」

「…そうかもしれないけど、行儀が悪いからダメ。言えば分かる子なんだから。その代わり、あとでたくさん遊んであげてくれる？その寂しい顔が吹き飛ぶくらいに」

「うん！」

「ありがとう。葛葉は良い子だね」

「えへへ」

寂しいと感じるのは、楽しい時間を知ってるから。

”楽しい”は”寂しい”を増幅させ、”寂しい”は”楽しい”を増幅させる。

どちらか一方だけを手に入れるのは無理だから。

だから、精一杯楽しむんだ。

寂しいときが少なくなるように。

だから、精一杯寂しがるんだ。

また来る楽しいときのために。

「はい、出来ましたよ」

「わあ、綺麗ですね！」

「いただきま〜す」

「望お姉ちゃんは、もうちょっと見るべきだと思うんだ」

「…何を？」

「はい。わたしの、見せてあげる」

「……？」

「これ、なに？」

「葛の葉を真似て作ったお菓子ですよ」

「くずのは？」

「”の”を取ってみなよ」

「くず…のは」

「取れてないって…」

「く、ず…は。くずは…。葛葉！」

「はい、よく出来ました」

「本物はまた今度です。今は、これで我慢してくださいね」

「ん、美味しい」

見事なものだな。

こんなに手の込んだもの、いつから用意してたんだろうか。

「朝ですよ」

「え？」

「隊長、いつ用意したのかって聞きたそうな顔してました」

「そんな顔してたか？」

「はい」

「朝は挨拶も兼ねて、代わってもらったんだ」

「美希さんの旅人料理、本当に美味しかったです」

「自然の恵みだ。感謝するなら自然にな」

「それもそうですが、やはり素材を生かすのも殺すのも、料理人次第ですから」

「そ、そうかな…」

「はい」

その点に於いて、うちの調理班に抜かりはないな。
みんな、美味しい料理を作ってくれる。

…美希は、どの班に所属するのかな。

やっぱり調理班？

「それ、望のだよー！」

「うむ？」

「葛葉。他の人のを盗らないの」

「…ごめんなさい」

「もういいよ。でも、次からは気を付けてね」

「うん」

優しく葛葉の頭を撫でる望。

短い間に、すっかりお姉ちゃんになってきたな。

「この赤いのは梅干しだよね…。あ、そのお肉、ちょっと頂戴」

「あつ！灯！」

「ふむ…。これは…猪かな…」

「うう…楽しみにしてたのに…」

「…オレのをやるから」

長い間見てきたけど、こっちは全然変わらないな。

変わらない良さもあるのかもしれないけど、やっぱりそこは変わるべきだろう。

研究熱心なのは良いけど、ろくに許可も取らずに盗っていくのはやめてほしい。

風華は医療室でユカラに講義。

灯と美希は自分たちの部屋へ。

チビたちは広場へセトと遊びに。

「楽しそうだな」

「犬千代も行ってきたらどうだ」
「いいよ、僕は」

私は自分の部屋で利家と外を眺めて。

「それにしても、良い眺めだな」

「ああ。私が一番好きな場所だ」

「…良い風だ」

「そうだな」

「……………」

「……………」

「紅葉」

「ん？」

「こ、これ…受け取ってくれないか？」

「え…？」

利家が懷から取り出したのは小さな刀。

…心の準備が出来ていなかったわけではない。

でも、あまりにも唐突だったので、一瞬、頭の中が真っ白になった。

「……………」

「あ…ごめん…。いきなりすぎたよな…」

「待って」

慌てて直そうとする利家を止めて、小刀を取る。

そして、それを顔に近付けて頬を斬る仕草をする。

「紅き血は日の光。銀の刃は月の光。空を廻る二人がごとく。汝と結ばん。永久の契りを」

「紅き血は絆。銀の刃は心。我らを結ぶ固き契り。ここから刻まん。

永久の時を」

利家が刀を受け取り、同じように頬を斬る仕草をする。

…昔は本当に斬ってみたいだ。

二人が結ばれた証として。

「ありがとう、紅葉」

「うん。私も。ありがとう、利家」

空は澄み渡り、太陽が輝いていた。

58 (後書き)

うん。

なんかあれですね。

利家が政務に戻り、私は暇を持て余していた。

…まさか、こんな日が来ようとは思わなかった。

儀のあと、貰い受けた小さな刀を取り出す。

…この刀が、契りの証人。

さっきのことを思い出すと、胸のところが温かくなった。

「利家…」

「うわっ！灯！？」

「もう…。お姉ちゃんったら、つれないなあ。それ、契りの証人でしょう？」

唐突に現れた灯。

そして、刀をジッと見詰める。

「うん。やっぱりそうだ。名前が彫ってある」

「あ、灯…」

「おめでとう、お姉ちゃん。さあて、今日は盛大に祝わないとね！」

「あ…いや…」

「…分かってるよ。私も、お姉ちゃんとお兄ちゃんが言うまで黙ってる」

「うん…」

「でも、私に何の相談もしてくれなかった罰」

そう言つて、私を抱き締めて、額を合わせてくる。

「二人の未来が明るいものとなりますように。順風満帆、家庭円満。夫婦喧嘩はほどほどに」

「…うん。ありがとう」

「嫌になったら、お兄ちゃんを張り倒して、私のところ来なよ」
「ふふ、分かってる」

しつかり灯を抱き締めて。

…ありがとう、灯。

暇をしてるならと、灯に部屋に来るよう誘われた。

「ただいま」

「お帰り」

「何をしてるんだ？」

「ん？ちよつとな」

美希は、灯の覚書を横に置いて、丁寧にそれを書簡に写していた。

「ほう。左利きか」

「羨ましいか？」

「いや、別に」

「えへへ。お姉ちゃんは両利きだから」

「へえ」

「羨ましいか？」

「うん。羨ましい」

「ふふ、良いだろう」

「うん。良いな。私にも分けてくれ」

「また考えておくよ。それで、何をしてるんだ？」

「私の覚書の整理と、美希の勉強を兼ねて」

「勉強？」

「うん。料理のね。実際に作るのが一番良いんだけど…」

「食材を出るだけ無駄にしないように…だな」

「ああ。実験の真似事するのは、もつと腕を磨いてからだ」

「ということは、美希は調理班に入るのか？」

「うーん…そうだな…」

美希は筆を止めて、しばらく考える。

「他にどんな班があるんだ？」

「戦闘班、医務班、伝令班。それぞれにいろんな仕事割り当てられてるから、班名通りにはいかないんだけどね」

「ふうん…」

「戦闘班にはお姉ちゃん、医務班には風華、伝令班には望、調理班には私がいるよ」

「ほう…」

「あと、今ならどこに入っても暇だよ」

「余計なことを言うな」

「葛葉は？」

「葛葉？葛葉はまだどこにも入ってない」

「そうか…そうだよな…」

葛葉が気になるんだろうか。

「よし…。やっぱり私は調理班に入るよ」

「やった！」

「そうか。じゃあ、暇なときで良いから、登録書を政務室に出しておいてくれ」

「分かった」

「登録書は灯が取ってきてくれるから」

「ええっ！？私！？」

「何か問題でもあるのか？新人の世話は先輩が見るものだ」

「せ、先輩…。む…。分かったよ…」
「よろしくな。先輩」
「うん」

先輩と言われて、悪い気はしないようだった。
照れくさそうに頬を掻き、少しうつ向いて。

「さて、先輩。ちょっと喉が渴いたから、飲み物を持ってきてくれないか？」

「うん…。って、何かおかしくない？」

「おかしいか？」

「おかしくないだろ」

「もう！二人して！」

灯の反応がまた面白くて。

…結局、みんなで厨房へ水を貰いにいった。

「よし、これで…終わりだな」

「私も終わったよ。お姉ちゃんは？」

「ん？ずっと前に終わってたけど」

「終わったんだっただけ言っただけよ！私の分もやってほしかったのに…」

「灯の分が一番少ないだろ。単に書くのが遅いだけなんじゃないのか？」

「だから、余計に手伝ってほしいんでしょ！」

「それもそうだな。今度からはそうしよう」

「今度じゃ遅いの！」

「くっ…ふふふ」

「美希！何がおかしいのよ！」

「ふふ、なんか本当の姉妹みたいだな」

私は灯と顔を見合わせて、示し合わすように笑う。

「そりゃ、本当の姉妹なんだから」

「え…？でも、銀狼と白狼…」

「血は繋がってないよ。けど、血が繋がってないと兄弟姉妹とは言えない…なんてことはないでしょ？私は、お互いに認め合ってるかどうかが決め手だと思うな」

「風華も私のことを姉ちゃんと呼んでくれている。チビたちに至ってはお母さんだ。私も、言葉に出すことはないけど、弟や妹、子供として、大切に想っている」

「照れくさいのか、お姉ちゃんも滅多に口に出すことはないんだけど、兄や姉として慕ってる人もいるんだよ」

「余計なことを言うな！」

「いったあゝ」

一発どついてやる。

灯はホント、余計なことばかり言うよな…。

…そんな様子を、美希は羨ましそうに見ている。

「ふふふ。だから、美希もオレの可愛い妹だ」

「私にとっては、お姉ちゃんかなあ」

「……………」

「どうした？」

「あ…うん…。ホントに嬉しくて…」

「そうか」

「ごめん…涙が…」

「謝ることはない。今まで泣けなかった分、これからたっぷり泣く
といい」

「そうそう。お姉ちゃん、胸はないけど、いつでも貸してくれるか
らさ」

「だから、余計なことを言うな！」

「ふふん。羨ましいいんですよ」

「なっ！バカなことを！」

豊満な胸…私にとっては豊満な胸を、これみよがしに見せつけてく
る。

そして

「むふふ、美希も結構あるよね。私と同じくらい？」

「きゃっ！さ、触るな！」

「いったあゝ！」

ふん。

自業自得だ。

灯は美希に思いっきり殴られた頭をさすって。

「確実に、たんこぶ出来たよ……」

「い、いきなり胸に触るやつが悪い!」

「そうだな」

「うう……」

座り込んで唸っているけど、反省してるのだろうか。

「でも、お姉ちゃんみたいな喋り方してても、やっぱり”きやつ”
なんて悲鳴、上げるんだね」

「いいだろ!別に……」

「我が姉ながら、可愛いね!」

「か、可愛い……」

少し頬を赤らめる。

外面には出すまいと必死のようだが、尻尾がせわしなく動いてしまっている。

「ああ、もう!」

「ああっ!ずるい!私も!」

「二人ともやめろ……!く、苦しい……!」

美希は嬉しそうだった。

今のこの状況では分らないけど。

でも、長い一人旅を終えて根を張ったこの地で、ようやく手に入れた家族。

それは、確かに美希を良い方向へ導いているのだろう。
どこことなく曇っていた表情も、今はすっかり消え失せ。

「ははっ、やめろ、くすぐったいって！」

「やっ！」

「ひゃう！あ、灯！触るなって言っただろ！」

「いったあゝ！同じところ、殴らないでよ！」

「触るお前が悪いんだ！」

「くっ…ふふふ」

「ふふ、あはははは」

綺麗に晴れ渡っていた。

さて、このときが来た。

昨日は、良いところを見せようとして惨敗に終わった二人だが、今日はどういった作戦を見せてくれるのだろうか。

「お母さん、もう食べていい？」

「ダメ。もうちょっと待ってなさい」

「うう…」

美希の膝の上に座り、目の前に並べられる料理をジッと見詰める葛葉。

…料理や皿を通り越して、机にまで穴が空くんでなからうか。

「はい、これで最後ですよ」

「ありがとうございます。じゃあ葛葉。手を合わせて」

「うん！」

パチンと大きな音を響かせて。

「いただきます」

「いただきます！」

そして、箸を取って食べ始める。

「私の分も食べてくれて良いんだぞ」

「うん！」

「ふふふ。ほら、あーんして」

「あーん」

この二人は、今日昨日の関係とは思えないほど仲が良いな。
不思議なものだ。

「いろはねえは、ボクたちにはくれないの？」

「ああ。一切やらん」

「むう……。ケチ」

「ケチで結構。それで、望は？」

「向こうで食べてるよ。かぐやねえに、伝令の心得を聞かされてるみたい」

「桜への説明でもあるんじゃないのか？」

唐揚げを盗られた仕返しに、鮭の塩焼を盗ってやる。

「そんなの面倒くさいよ。心得って、結局普通のことしか言わないじゃない」

「でも、心得という形で留めておくことで、常に意識して行動出来るだろ？旅人の心得もそうだ。ごく当たり前のことばかりだけど、それを当たり前前のこととして思っているだけよりも、心得として残しておく方が、意識する度合いが違っただろう」

「美希！早く！」

「分かった分かった」

「葛葉。あんまり美希に甘えちゃダメ」
「むう……」

風華に咎められ、シユンとする葛葉。

「葛葉。これ、食べるか？」
「うん！」

でも、やっぱりごはんの力には抗えないようだ。
さっきの様子はどこへやら。
また美希にベツタリ甘えている。

「じゃあさ、当たり前のことをきちんと意識出来たらいいの？」
「出来るか？」

「出来……ないかも……」
「心得の大切さ、分かったか？」

「分かったけど……でも、やっぱり納得出来ない……」

「まあいいじゃないか。そのうち分かるときが来るかもしれない」
「うん……」

「ほら、行ってこい。お姉ちゃんなんだから。望に負けてられないぞ」

「うん……そうだね。ありがと、いろはねえ、美希」
「ああ」「ん？」

そして、桜は私のご飯を茶碗ごと持って行ってしまった。
……まあいいか。

少し成長したお祝いだ。
それを食べて、もっと成長してくれたら嬉しいんだけどな。

「ある日 あなたと 歩いてた
いつか 今より 良い日をと

歌を 歌って 嬉しいな

笑顔 描いて 永遠に

想い 想われ 想い合い

愛の歌を歌いましょう」

「何の歌なんだ？」

「んー、今、考えたの」

「え？」

本当に今考えたのか？

だとしたら…。

光の並外れた才能を見た気がする…。

「か行以降もあるのか？」

「今、考えてる」

「また出来たら歌ってくれるか？」

「うん！」

未来の歌姫は、小さな翼を嬉しそうにはためかせて、ニッコリ笑顔を見せてくれた。

「んーんん」

「それにしても、ご機嫌さんだな」

「えへへ」

何があつたかは分からないけど、光はすごく機嫌が良かった。

いや、いつも機嫌は良いんだけど、今日は殊更機嫌が良かった。

「家族 関わり 風の音

希望 聞いたよ キミの声

来る日 挫けず 苦しいときも

決して 消されぬ 結束は

超えて こうして 心まで

帰ろうキミと腕を組み」

「ほう。もう出来たのか」

「うん！」

「何してるの？」

「響もやってみるか？五十音を頭に並べて、歌を作るんだ」

「……？」

「響には、難しいかな」

「そ、そんなことないよ！」

「じゃあ、やってみて」

「……。どうやったらいいのか分かんない……」

「ふふふ」

「むう……。何がおかしいのよ……」

「ちゃんと、教えてあげるから。響も、一緒に、考えよ？」

「え？あ……うん！」

光は一から丁寧に歌の作り方を教えて。

響は説明を熱心に聞いて、早速考えているみたいだった。

「さ……さ……五月雨？」

「五月雨なんて、どうやって繋げるんだ」

「さ……桜」

「桜か。次は？」

「さ……裁縫……」

「それは”桜”だろ」

「むう…。難しい…」

「ゆっくり、考えよ。時間が掛かってもいいから、納得のいく、歌を作る」

「…そうだね」

「うん。じゃあ、桜に続く、言葉だけど…」

ひとつずつ、それでも確実に。

何回も何回も吟味して、二人だけの歌を紡いでいった。

窓から、セトが大きな欠伸をしているのが見えた。
明日香もセトのたてがみに潜り込んで。

「そろそろ寝る時間だ。また明日考えよう」

「もうちょっと!」

「ダメだ。子供が寝ないで誰が寝るんだ」

「響、寝よ。歌は、逃げないから」

「うう…。せつかく波に乗ってきたのに…」

「明日はもっと大きな波が来るかもしれないだろ?」

「来ないかもしれない…」

「…響。悪い方に考えてたら、悪い結果しか招かない。分かるか?」
「……………」

「明日はきつと、今日よりもっと良い日になる。…どうせ考えるなら、そう考えた方が得だとは思わないか?」

「…思う」

「じゃあ、どうする?」

「明日も良い日となりますように。大きな波が来ることを祈って」

「今日は、おやすみ。また明日。きつと、明日は、今日より良い日」
「そうだな。よし、部屋に戻ろうか」

「「うん！」」

二人に手を引かれ、部屋に戻る。

響は、なんとか寝るまでもと、必死に考えているようだったけど。部屋に着いて中に入ると、風華と葛葉だけがいた。

葛葉はすでに静かな寝息を立てていて。

風華の服をギュツと握り締めているのが可愛かった。

「望は？」

「香具夜のところだと思うよ。すごく熱心に話を聞いてたじゃない」

「熱心なのも良いけどね。あんまり気を張られても困るって言うておいてよ」

「ん？香具夜？」

「はい、望。途中で寝ちゃった。昼もいっぱい遊んでたし、疲れてたんですよ」

「ご苦労さま。確かに最近、意識も少し変わってきたみたいだしな」

「あ、私も思った。なんとなくお姉ちゃんになったというか」

「望お姉ちゃんは、望お姉ちゃんだよ？」

「うん。そうだけど、違うんだ」

「……？」

「まあとにかく、ありがとう」

「可愛い妹のため。礼には及ばないよ」

「ふふ、そうかもな」

「じゃあね。お休み」

「お休み」「お休みなさい」「おやすみ」

香具夜は軽く手を振って帰っていった。

それを見届け、望を布団まで運んでいく。

「さあ、寝た寝た。寝ないと明日は来ないぞ」

「うん。おやすみ。お母さん、お姉ちゃん」
「おやすみ」
「お休み」「お休みなさい」

布団は並んでいるだけで、誰がどこで寝るなんて区別は、もうなかった。

響も光も自由な布団に潜り込んで。
私は残った布団に寝転ぶ。
響はうつ伏せ、光は横向きで寝ている。

「お母さん…」
「ん？どうした？」
「えへへ…なんでもないよ…」
「そうか」

光の方に近寄って頭を撫でてやると、一瞬ニッコリ笑って、眠りに落ちていった。

「…姉ちゃん」
「風華も撫でてほしいのか？」
「うん。でも、そうじゃなくて」
「どうした」
「…おめでとう。兄ちゃんから聞いたよ」
「そうか」
「契りの証人、見せてくれない？」
「ああ」

引き出しにしまっていた刀を取り出して、風華に渡す。
風華はいろんな方向からそれを見たあと、柄を持って目を瞑る。

「二人の旅路が良きものとなりますように。出来れば、甥か姪の顔も早く見たいな」

「ふ、風華……！」

「ふふふ。でも、兄ちゃんが嫌になったら、早く見切り、付けなよ。姉ちゃんには勿体無いくらいなんだから」

「ふふ、ありがとう」

「どういたしまして。それにしても、これでやっと姉ちゃんの妹になれるね」

「風華は私の可愛い妹だ。今までも、これからも」
「……うん」

それは変わらない。
ずっと、ずっと。

「おきて〜」

「ん…？」

「早くおきないと、おくれるよ〜」

…何に遅れるんだろう？

とりあえず、葛葉を横によけて、身体を起こす。

「早く〜」

「何があるんだ？」

「えつと、えんそく」

「はぁ？遠足？なんで？」

「知らない」

とにかく早く起きると言わんばかりに腕を引く葛葉。
分かった、分かったから…。

布団を抜け出して、大きく伸びをする。

それにしても、なんで遠足？

いつ決まったんだろ…。

そういえば、私と葛葉以外、部屋には誰もいないし…。
帯を締めなおして、葛葉の手を取る。

「よし。行こう」

「うん！ちゅうぽう、だよ！」

「厨房だな」

弁当でも作るんだろうか。

まあ、厨房に行けば分かることだ。

「髪、ボサボサだぞ」
「えへへ」

ボサボサだと言われて、なぜか嬉しそうに笑う葛葉。
手櫛で、ある程度整えてやる。

「しかし、なんでまた遠足なんか…」
「ん」
「よしよし。葛葉は可愛いな」
「えへへ」

ホントに、どこに行くんだろ。
ていうか、私も行かないといけないのか？
そんなことを考えている間に、厨房に到着。

「お母さん！」
「あ。おはよ、姉ちゃん」
「おはよう。遠足って何なんだ？」
「遠くにみんなでお出掛けすることだよ」
「それくらい知ってる」
「ああ、もう葛葉に聞いちゃったんだ。日帰りだね。ちょっと遠くに行こうかって話をしてたんだ。昨日、ユカラと」
「ふうん」
「それを子供たちが聞きつけて、行きたい行きたいって言うから、香具夜に相談したら、行つてきなさいって」
「ほう」
「それで、親たちにも相談したら、よろしくお願いしますって任されたから、もう、今日すぐに行くことにしたの」
「ふむ」

「姉ちゃんに報せなかったのは、びつくりさせようと思ったから。忘れてたわけじゃないよ」

「だいたいは分かった」

「分からなかったのは？」

「どこに行くんだ？なんで、オレが呼ばれた？」

「ユールオとヤウトの間の森に行くの。近いし、私もよく知ってるし。姉ちゃんを呼んだのは、保護者として同伴してもらったため。私とユカラ、美希だけじゃ不安だし」

「美希も行くのか」

「当番が決まるまでは非番なんだって」

「ふうん」

毎日非番みたいなの私って何なんだろう。

衛士長なのに。

そりゃ、侵入者がないようにピリピリすることもなくなったし、戦闘班への新規参入もないし、班としての出勤もないし、目の都合で夜勤組にも参加出来ないし、その他の仕事もみんなよくやってくれるから、やることがないと言えばそれまでなんだけど。

…衛士長って何なんだろう。

「ほら。お弁当の中身は美希が作ってくれたから。一緒に詰めよ？」

「うん…」

「どうしたの？」

「いや…」

「……？」

はあ…。

なんか、自信なくした…。

弁当の用意を済ませ、一旦部屋に戻って私服に着替え、いざ広場へ。

「良い天気だな」
「うん」

空はどこまでも蒼で、雲ひとつなかった。

「あ。やっと来た」
「お母さん、お姉ちゃん、早く」
「分かってる」

広場の真ん中に集められた子供は十四人。

四人は自前のチビだから、十人が代表たちの子供なんだろう。

「ほら、注目。今から、注意事項をいくつか言うから」
「どこに行くのかな」「楽しみだね」
「注目、注目」
「ふあ…まだ眠たい…」「昨日、遅くまで起きてるからだよ」
「注目！喋ったやつは置いていくぞ！」
「」「……………」

……………。
美希、すごい迫力だな。

「よし。じゃあ、衛士長、どうぞ」
「え？オレか？」
「他に衛士長はいないだろ」
「そうだけど…」

無茶振りにもほどがあるぞ…。

「あー、えつと、オレたちの言うことはちゃんと聞くこと。怪我をしないこと。仲良くすること。拾い食いはしない…」

「誰がそんなことするのよ…」

「あー、それと、思いっきり楽しむこと。分かったか？」

「うん！」「分かった」「はい」

「じゃあ、出発進行！」

「」「おおーっ！」「」

さあ、楽しい遠足への第一歩を…

「セトはお留守番！」

「グルル…」

「そんなこと言ってもダメ。だいたい、森の中で何ができるのよ」

「オオン…」

「ね？良い子だから。あ、そうだ。お土産、たくさん持って帰ってきてあげるから」

「……………」

「うん。良い子良い子」

「ウルル…」

風華に撫でられて、気持ち良さそうに目を細める。

…まるで大きな子供だな。

「じゃあ、行ってくるね。ちゃんとお留守番しといてよ」

「ウルル…」

「お姉ちゃん、風華、置いて行っちゃうよー！」

「あ、今行く。姉ちゃん、行こ」

「ああ」

セトに見送られ、城を出る。

急でびつくりしたけど、今ではすごく楽しみ。

みんなが、また行きたいと思えるような一日になりますように…。

「明日香もお留守番！」

「クウン…」

…あの二人にも、何か良いことがありますように。

「風華ちゃん。どこに行くの？」

「あ、涼さん。森まで遠足ですよ」

「へえ、遠足」

「哲も、えんそく、いきたい！」

「…風華ちゃん」

「良いですよ。断る理由もないし。ね？姉ちゃん」

「ああ。どうせ、こんなにいるんだし、一人二人増えたところで変わらない」

「ごめんね。…哲也。良い子にしないとダメだよ」

「うん！」

「あ、お弁当とかいるよね？」

「大丈夫ですよ。いっぱい作ってきてますから」

「そう？ごめんね」

「いえいえ」

「母ちゃん、いつてきます！」

「はい、行つてらっしゃい」

哲也は、先行してるユカラと美希の集団まで走って行って。

「じゃあ、お願いね。言うこと聞かなかったら、遠慮なく殴つてちょうだいね」

「はは…そうします…。では、行つてきます」

「行つてらっしゃい」

そして、風華は後続の集団をまとめあげて出発する。

「で、どうしたの？紅葉ちゃん？」

「お腹の方は大丈夫なのかと思ってな」

「ふふ、ありがと。順調みたいよ」

「そうか。それは良かった」

「うん。ありがとね。…紅葉ちゃんはどうなの？」

「な、何が」

「前に来たときより、もっと可愛くなっただけって思って
「なっ！」

「ふふ、冗談よ。ほら、置いていかれるよ」

「あ、ああ…」

「行つてらっしゃい」

「行つてきます…」

涼には隠し事は出来ないんだろうな…。

でも、それは良いこと。

自分に嘘をつかなくて良いってことだから。

「姉ちゃん、どうしたの？」

「内緒だ」

「ええ」

もちろん、嘘をつく必要はないんだけど。

でも、人間なら誰しも、隠しておきたいことのひとつやふたつはある。

…それを包み隠さずに話せる相手も、一人や二人いても良いんじゃないだろうか。

「風華も、だな」

「何が？」

「隠さない相手」

「……？」

涼や風華だけでなく、私にはたくさんいる。
ありがたいことだ。

この繋がり、大切にしないとな。

街を抜けて、そんなに歩かずに森へ到着。

先行組の美希とユカラ、子供たち九人が入口で待っていた。

「お待たせ」

「全員揃ってるか？」

「んー、うん。いるよ」

「よし。じゃあ、今からこの森に入る。私と風華が、危険な場所、
行っではいけない場所を説明していくから、そこには絶対に行くな。
分かったな」

「うん」「はい」「分かった」

「じゃあ、この班のまま行こっか。はい、集まって」

「広場に集合だよな」

「うん」

「よし、行こっ」

美希とユカラの班が森へ入っていく。

「私たちも行こ」

「ああ」

残りの八人を引き連れて、森へ…

「ん？」

「どうしたの？」

「二人、増えてないか？」

「んー、そうだね。でもまあ、良いんじゃない？」

「そうだけど…」

あの子と、この子。

響や光くらいの歳かと思うあの子は望と楽しそうに話していて、葛葉くらいの子は私のことをジッと見ている。

…何なんだろう。

なんか、ちよつと居心地悪いな…。

そんなことを考えているうちに、最初の目的地に。

「ここから向こうは危ないよ。絶対に行っちゃダメ」

「なんで危ないの？」

「熊の住処が近いからね」

「なんで知ってるの？」

「ヤウトでそういうのは調べてあるんだ。この森も生活の一部だからね」

「へえ」

「とにかく、来ちゃダメだからね」

「はい」

そして、次の場所へ。

…さっきの子は、いつの間にかすぐ傍まで来ていた。

「狼の姉さま」

「…ん？オレか？」

「うん」

予想外にも、向こうから話しかけてきて。

蒼い目は、真っ直ぐ私の目を見詰めている。

「狼の姉さま…」

「どうした？」

「むう…」

「ん？」

「お腹…痛い…」

「何か食べたのか？」

「お腹空いたから、生えてた草…」

「拾い食いはするなって言ってたんだけど…。最初からいなかったから聞いてなかったのか…。いつ食べたんだ」

「ユール才出て、すぐなんだぞ…」

「はあ…。風華！」

「ん？」

「この子がお腹痛いって」

「ええっ！？なんで？」

「街を出てすぐのところで拾い食いをしたんだとさ」

「もう…。何を食べたの？」

「草…」

「どんな？」

「スクン…」

「ああ…。カルトレと間違えたんだね…。えっと…」

風華は周りを見回す。

そして、すぐに目的のものを見つけたらしい。

木の根元に生えていた草を摘んで持ってくる。

「これ。よく噛んで」

「うん…」

渡された草を一噛み。

「うええ……」

「苦くても食べる」

「うう……」

「大丈夫？」「拾い食いしちゃダメって、衛士長が言ってたのに……」

「ルウエ！ルウエ、大丈夫？」

「うん……」

みんなが心配する中、特に心配そうにしていたのは、望と話していた子。

オロオロとして、落ち着く様子がない。

「風華。この草を噛ませておけば良いのか？」

「うん。それで大丈夫」

「じゃあ、集合場所の広場ってところを教えてくれ。ルウエと一緒に往けるよ。風華は、説明の続きに往てくれ」

「あ、うん。分かつた」

そして、広場までの道を教えてもらい、ルウエを連れて向かう。

「風華の説明、聞かなくて良いのか？」

「ルウエの方が心配」

「望も」

「そうか」

黒狼の二人も連れて。

…この子たちは誰なんだろうな。
ルウエ。

昨日、美希からも聞いた名前。

まあ、あれは”月の使者”としてのルウエなんだけどな。

もしかすると、こっちの子は”日の御子”ヤーリエだったりするの
かな…。

まあ、あとで聞いてみるか。

「ルウエ、大丈夫？」

「うん…。ちよつとマシになったんだぞ…」

「良かったあ」

ホツと胸を撫で下ろす女の子。

…広場に着いて、適当な切株にルウエを座らせて様子を見ていた。
一番酷いときと比べると、顔色もだいぶ良くなったかな。

「うええ…。やっぱり苦いんだぞ…」

「野草は食べちゃダメって、いつも言ってるでしょ？」

「だって…」

「だってじゃないの！」

「うう…」

「ヤーリエって、ルウエのお姉ちゃんみたいだね」

「え…あ…お、お姉ちゃん…。ぼ、ぼくが…」

「うん。お姉ちゃんは、自分のお姉ちゃんなんだぞ」

「ル、ルウエ」

改めてお姉ちゃんだと意識させられて、嬉しいような恥ずかしいような、そんな少しぎこちない笑みを見せる。

耳と尻尾がせわしなく動いているのが可愛くて。

それにしても、本当にヤーリエとはな。

”月”と”太陽”か。

良い組み合わせだ。

「うーん…。これ、いつまで噛んでれば良いの？」

「さあな。でも、いちおう風華が戻ってくるまで噛んでおけ」

「はあ…。姉さま、早く戻ってこないかな…」

まだ大量に残っている薬草を見て、ため息をつく。

…自業自得とはいえ、少し可哀想かな。

手近にあった野草を一握りほど摘んで、ルウエに渡す。

「これと一緒に嚙んでみる」

「何、これ？」

「名前は知らないけどな。不思議な草だ」

「ふうん…」

匂いを嗅いで、確かめるようにペロリと舐める。

「甘い！」

「え？ホント？」

「お姉ちゃんと望も、食べてみて！」

「う、うん」

二人はルウエから草を受け取り、口に含む。

「……？」「甘くはないね…」

「ふふふ。それは、苦味を甘味に変える草。苦味がなければ、ただの草だ」

「ええ…」「なあんだ…」

「じゃあ、苦い草、食べるか？」

「それは嫌」

「ええ…」

「ふふふ。結局、苦い思いをしたのはルウエだけだったな」
「むう…」

でも、苦味が甘味に変わる不思議な体験をしたのもルウエだけだ。その点では得をしたのかもな。

何良かった、あるいは、悪かったかなんて、捉え方次第だ。ルウエは、毒草を食べて腹を壊し、苦い薬草を食べる羽目になったが、そのお陰で、なかなか味わえない体験をすることが出来た。それに、下手に野草に手を出してはいけないことも学べた。

「んゝ。甘いゝ」

「でも、本当は苦いんだからね」
「えへへ」

そういった経験が、今後のルウエのためになるんだろう。気付かないうちに、みんな、こうやって成長していくんだな。

説明が終わり、二班ともほとんど同時に広場へ着いた。

「よし。さっきの場所はちゃんと覚えてるな？」

「うん」「覚えてるゝ」

「そこには絶対に行かないこと。約束出来るか？」

「はい」「出来る」

「じゃあ、今から自由時間だ。昼ごはんとか、緊急のときは、この笛を鳴らす。聴こえたらすぐに集合すること。来なかったら、探しに行くことになるから。分かったか？」

「分かったゝ」「うん！」

「何か危ない状況になったら、さっき渡した笛をすぐに吹くこと。みんな、持つてるな？」

「これ？」「持つてるよ」

「よし。ああ、それと、お腹が空いたからといって、その辺の草とか木の実とかは食べるなよ。ちゃんとごはんは用意してあるから。」

じゃあ、解散！」

美希の号令と共に、子供たちはそれぞれ思い思いの方向へ散っていった。

みんな、すっかり楽しんでこいよ。

美希と風華は見回りに。

広場にいるのは、ルウエとヤーリエ。

日向ぼっこを始めた光と葛葉。

あと、私とユカラ。

ユカラは、ポカポカと暖かそうに眠る光と葛葉の横に寝転んで、ジツと空を見ている。

「いつも思ってた」

「何を？」

「あたしは誰なんだろって」

「ユカラはユカラだろ。他に何があるんだ」

「分からない。でも、ずっと遠くの方に、あたしと違うあたしがいるような気がして」

手を上に伸ばし、何もない空中から青龍刀を取り出す。

「こんな能力のない、普通の女の子としての」

クルリと回すと、青龍刀は跡形もなく消えてしまう。

そのあとも、身体を起こして、武器を出しては消しを繰り返して。たしかに、不思議な能力だ。でも…

「その能力の有無に関わらず、ユカはユカだ。普通の女の子」
「うん。ありがと」

ニコリと笑ってみせるが、やっぱりどこか哀しげで。

「あたしの身体から、たくさんの術式の波長が感じられるんだって。響が言ってたんだけど。転移、探知、召致、再生……」

術式。

風華も使っていた、あの力か。

あれは何なんだ？

雨を降らせたり、傷を治したり……。

「同時にたくさんの術式を維持するには、相当な力があるんだって。響が全く無駄な術式は取り除いてくれたみたいだけど。でも、この”召致”みたいな大きな術式は、均衡が崩れるからダメだって言ってた」

「ふうん……」

「あたしにも分からないけど。そういうことなんだって」

四分の一も理解出来たとは思えない。

そもそも術式という力のことも、にわかには信じがたいと思っているくらいなのに、それ以上のことを理解するのは大変に難しい。

「桜には裁縫を教えてもらってるし、風華には医道を。ここに来てから、みんなにいろんなことを教えてもらってる」

「……………」

でも、今は理解うんぬんの話じゃない。

それ以前に、術式なんて全く関係のないことだ。

「けどね、あたし、思うんだ。人形が人間の真似事をしてるだけなんじゃないかって。実験のために作られた人形が、たまたま偶然幸せを手に入れて。人間になったつもりで、必死に幸せにすがってる」

「……………」

「人形のあたしには、分不相応の幸せなのかな。あたしがあたしじやなくて、別の誰かだったなら、この幸せに甘えても良かったのかな」

「ユカラ」

「姉ちゃん…。あたし…怖いよ…。この幸せは、別の誰かの幸せだったの…？あたしは、それを奪っちゃったの…？」

「ユカラ」

いつの間にかユカラの頬を伝っていた涙を拭いてやり、そっと抱き締める。

「ユカラの幸せはユカラのものだ。誰のものでもない。それに、ユカラは人形なんかじゃない。誰それに作られたとか、どういう目的で以て生まれたとか。そんなことは問題にならない。こうやって、今を生きている。それだけで良いんじゃないのか？」

「……………」

「そうやって考え、傷付き、涙を流すやつが人形なのか？こんなにも温かいのに人形なのか？…私の可愛い妹のユカラは、人形だったのか？」

「姉ちゃん…」

「不安になったら独りで考え込むな。私がいる。桜も風華もいる。たくさん家族がいる」

「うつ…うつ…」

「みんな、ユカラのことを想ってくれてるから、な？」

「うん…うん…」

泣き虫ユカラは、また泣いた。
その涙は、やっぱり温かいもので。

一度、大きく笛を吹いた。

ぐつすり眠っていた光と葛葉は、何事かと驚いて辺りを見回している。

「よし。みんなが来る前に、昼ごはんの準備をしておこうか」

「お昼ごはん！」

「ヤーリエ、その布を取ってくれ」

「分かった」

「葛葉は？」

「はい。布」

「葛葉、ルウエ。そっちの端をしっかりと持って。光とヤーリエはここ。ユカラはそこ」

「どうするの？」

「よし、後ろに下がって」

「うん」

みんなでゆっくり下がっていくと、布が大きく広がる。ある程度広げたところで

「離さないように、しっかりと掴んでおけよ」

「うん」「何するの？」

ユカラに合図を送り、大きく上へ膨らませる。

「わあ」「すごい！」

「そのまま下ろして」

「ゆっくりね」

フワリと地面に。

葛葉は我慢しきれず、上に飛び乗る。

「フカフカ」

「あつ！葛葉、ずるい！」

「こらっ！まだ離さないの！」

葛葉とルウエが端を離したことで、布に皺が寄る。

でも、そんなことは気にしない。

転げ回ったり、足をバタバタさせてみたり。

「もーっ！暴れないの！」

「えへへ」

「ほら、弁当広げて」

「はあい」

美希が作った弁当は、本当に美味しそうで。

…稲荷寿司がちよつと多いようにも思っけど。

色彩豊かな料理が並んでいた。

「美味しそ」

「まだ食べるなよ」

「わ、分かってるもん…」

「はやく、みんな来ないかな」

ヤーリエと葛葉は、とても待ちきれないといった様子で。

箸を持って、まだかまだかと周りをキョロキョロ見回している。

でも、そんな心配をしなくても、お腹を空かせた子供たちはすぐにやってきて。

…さあ、楽しい遠足の昼ごはんの始まりだ。

大きく分けて三つ。

ひとつは、ゆったりおっとり食べる派。

響や光、葛葉、ルウエ、哲也がこの派閥。

ただし、葛葉はゆっくりでも確実に。

特に稲荷はほとんど一人で食べてしまった。

「美味しいね」

「この卵焼き、甘くて、美味しいよ」

「うん！すっごく甘いんだぞ！」

「あぶらげ、おいしい」

「葛葉、おいなりさまばっかりたべてるね」

次に、食事は戦争派。

望やヤーリエ、多くのチビがこの派閥。

「それ、望のだよ！」

「ぼくが取ったんだもん。ぼくのだよ！」

「あぁっ！落とした！」

「落ちても食べられるもんね」

「ええ。汚くない？」

「食べ物、粗末にしちゃダメなんだよ」

…それはそうだけど。

腹痛の子が増えるのは勘弁願いたい。

そして、最後はとにかく忙しい派。

風華とユカラがここに入る。

「うう…こぼした…」

「あつ！舐めないの！これで拭きなさい！」

「返せ！」

「もう食べちゃったもんね」

「ううーっ！」

「こらっ！喧嘩しないの！喧嘩するなら取り上げるよ！」

「ふうかねえ！裕太が喉に詰めた！」

「ああもう！急いで食べるからでしょ！」

…大変だな。

私も加わるべきなんだろうか。

カボチャの煮物を頬張りながら、そんな他人事。

もうひとつ付け加えるなら、私と美希のような傍観者派だな。

「賑やかだ」

「ああ。独りでは味わえないだろ」

「そうだな。こんな楽しい昼ごはんはいつ以来だろ。望と響がいた頃も賑やかだったな…」

「そういえば、二人と一緒に旅をしてたんだっただな」

「うん。ほんの短い間だったけど」

「美希は、なんで旅をしてたんだ？」

「だから、死に場所を…」

「それだけじゃないんだろ？」

「……………」

美希は箸を止めて、少し考えるように俯く。

そして、決心したように顔を上げ

「笑うなよ…？」

「ああ」

「昔に見た、銀色の狼を探してたんだ」

「昔？」

「私が三歳か四歳の頃だから…十三年くらい前だな。森の中で見たんだ。銀色の狼を。その頃の記憶は全くなってるのに、それだけは覚えてる」

「ふうん…」

「狼は、近付くと逃げてしまったんだけど、それから週に一回は夢に見るようになった。ジッとこっちを見て、誘うように尻尾をユラユラとさせてるんだ。そして気が付いたら、旅に出てた」

「そうか」

「うん。親がいなかったのも助けたのかな。旅へ出るのに抵抗はなかった」

「親がいなかった？」

「戦。村ごと焼き払われたんだ。そのとき、親も死んだって聞かされた。寺の和尚に」

「……………」

寺が孤児を迎え入れるのは珍しくない。

子供で溢れ返ってる、なんとも賑やかな寺があるという噂が流れるくらいだ。

「最近は毎日、狼の夢を見てた。ユール才に近付くにつれ、夢の中の狼は喜んでるようだった。そして一昨日だ。城に留まろうかどうか考えてたとき、いつの間にか眠ってたらしく、また銀色の狼が目の前にいた。狼は、楽しそうに跳ね回っていた。…ああ、私が求めている場所はここなんだなって分かった」

「…そっか」

「私は感謝してるよ。ここへ案内してくれた狼に」

「うん」

「…ありがと、紅葉お姉ちゃん」

「…え？わ、私？」
「ふふふ」

美希はそれ以上はもう何も言わず、ごはんを食べていた。
…なんで私なんだろ。
たしかに、銀狼ではあるけど…。
うーん…。

昼ごはんが終わって、再び自由時間。

また森へ探検に出掛ける子もいれば、広場で昼寝をする子もいた。

午前と変わり、美希とユカラが見回りをして、風華と私が広場に残っている。

…結局、私は残るのか。

「ふぁ…あふう…」

「葛葉、眠たいの？」

「うん…」

「それじゃ、ゆっくり寝ると良いんだぞ」

「うん…」

葛葉はそのまま横になり、クルリと丸くなって眠る。

ルウエは、葛葉の頭を優しく撫でて。

「ふふ、葛葉のお兄ちゃんみたいだね」

「…………。そうだな」

「…………どうしたの？」

「ルウエが男に見えるのかな…って思ってた」

「え？」

「ルウエは女の子だぞ。外見も喋り方も、たしかに男の子っぽいけど」

「ええっ！？嘘っ！？」

「ルウエ。ちよっとこっちに来てくれ」

「うん」

トテトテと少し駆け足。

私の前まで来ると、少し首を傾げる。

「どうしたの？」

「ここに来い」

膝を叩くと、嬉しそうに座ってくる。

手を回してそつと抱き締めると、とびきりの笑顔を見せてくれて。

「えへへ」

「ルウエは、どこに住んでるんだ？」

「おばちゃんの家、お姉ちゃんと一緒に住んでるんだぞ」

「おばちゃん？」

「うん。優しいおばちゃん」

「ほう」

「狼の姉さまは、どこに住んでるんだ？」

「オレは、城に住んでる。風華もな」

「城って、市場の向こうにある、あのお城？」

「ああ」

「じゃあじゃあ、狼の姉さまは衛士なのか？」

「ああ」

「もしかして、姉さまも？」

「そうだよ」

「へえ。すごいんだな！」

「ルウエも、衛士になりたいか？」

「自分もなれるのか？」

「ああ。なりたい人は誰でもなれる。大事なのは心だ」

「心……」

「とにかく衛士になりたい。ユールオが好き。この国……ルクレイを守りたい。何であれ、強い心があれば出来ないことはないんだ」

「うん」

「ルウエも、強い心を持つてくれるか？」

「うん！」

「よしよし」

「えへへ」

頭を軽く叩いてやると、ニコリと笑ってくれて。

「あ、そうそう。ルウエって、男の子と間違われたりしないのか？」

「うん…。よく間違われるんだぞ…」

少し哀しそうに俯くルウエ。

風華を見てみると、決まりが悪そうな顔をしていた。

「もうちょつと髪を伸ばして、女の子っぽい服装を試みたらどうだ？」

「女の子っぽい服装？」

「葛葉が着てるみたいなのとか」

「でも、あんな服、持っていないんだぞ…」

「そういえば、ヤーリエもこんなかんじだったよね」

「うん」

ヤーリエは望とどこかに行ったな。

思い返してみれば、たしかに男の子っぽい服装だった気がする。

あまり意識してなかったけど。

「桜に言ったら仕立ててくれるかな」

「うん。いくらでも仕立ててあげるよ」

「ええっ！？さ、桜！？」

「もう！灯に聞いて、初めて知ったんだよ？なんで、ボクも連れていつてくれないのさ！」

「だって…ユカラが、何をしても起きなかつたって言ったから…」
「昨日、言ってくれたら起きたよ！」
「ごめんって…」

…言わなくても、朝はちゃんと起きるのが普通だと思っけど。

「猫の姉さまは、寝坊助なのか？」

「ああ。相当な寝坊助だな」

「いろはねえ！」

「朝、ちゃんと起きないと、ヤンリオに怒られるんだぞ」

「…ヤンリオ？」

「”日の神”ヤンリオ。”月の神”ルイムナの兄だ」

「神様？」

「ああ。知らないか？」

「宗教は興味ないの」

「宗教じゃない。北の国の伝承だ」

「どう違うの？」

「宗教は、人々が信じて初めて成り立つ話。伝承は、実際にあった話だ」

「どういうこと？」

「ヤンリオとルイムナは本当にいたってことでしょ」

「ええっ!？」

「ああ。まあ、本当に神様というわけじゃなくて、英雄だったりするらしいんだけどな」

「へえ〜」

「でも、あらゆるものに神様が宿っているという考えは、正しいと思う」

「そんな考え方なの？」

「うん!この草にも、地面にも、空気にも、みんなにも。神様が宿ってるんだぞ!」

「みんなにも宿ってるって？」

「桜なら”大地の神”クノが宿っている。”豊作の報せ”クルクスが護獣だろうな」

「クルクス？」

「ああ。黒龍だ」

「へえ」

「クルクスは”災厄”とされることもあるけど、それは”確認の時”。災厄を通して、改めて繋がりを確かめさせる…という役割だ」

「狼の姉さま、お姉ちゃんよりよく知ってるんだぞ！」

「好きだからな。こういうことは。昔、勉強したんだよ」

「じゃあ、私は？」

「風華は…”水の神”ルクエンだろうな。護獣は”恵みの雨”ユヌト」

「ユヌトは、白い狼なんだぞ！」

「白い狼かあ。明日香かな」

「ふふ、そうかもな」

…本当に、ルクエンの遣いだったりして。

「ルクエン…ユヌト…」

「どうした、桜？」

「聞いたことあるな…って思って」

「あ、そういえば…」

「さあ、何なんだろうな」

「姉ちゃん、知ってるの？」

「まあな」

「自分も知ってるんだぞ！」

「ええ…。何かな…」

二人は、うんうん唸りながら記憶を手繰ってゆく。

それが面白いらしく、ルウエは笑いをこらえきれないみたいだった。

「ルクエン…。うーん…」

「あっ！」

「え？分かったの？」

「ルクレイ！」

「ああっ！」

「正解だ。じゃあ、ユヌトは？」

「ユ…ユ、ユールオ？」

「惜しいが違う」

「あつ。もしかして、ヤウト？」

「当たり前！ルクレイとヤウトは、ルクエンとユヌトから来てるんだぞ！」

「へえ」

「あ、そういえば、村長から白き獣の昔話を聞いたことあるよ」

「え？いつ？」

「ずっと前。そのとき、桜はずっと寝てたなあ」

「やっぱり、猫の姉さまは寝坊助なんだぞ！」

「うう…。風華、余計なことは思い出さないでよ…」

「ふふ、残念。記憶力は良い方なんだから」

「むう…」

ルクエンとユヌトは、逆に、ルクレイとヤウトから来たのではない
かと言われるくらい、親密な関係だったらしい。

理由はよく分からないんだけど。

北の国の白き獣伝説も、この辺が舞台になっている。

…こうやって、調べれば調べるほど新しい関係が見えてくる。

それが面白いところ、私のがめり込んだところだ。

日もだんだん傾いてきて、木の影が広場の半分ほどを覆っている。

「もうそろそろかな」

「ああ」

ひとつ、笛を吹く。

今日は一日、ルウエが腹を壊したこと以外は平和だった。
遠足としては理想だけど…

「家に帰るまでが遠足、だもんね」

「ふふ、その通りだ」

本当に気を付けないといけないのはこれからだ。
そのためには、もう一度気合を入れておく。
みんなが無事に帰れるように。

四、八、十二…。

うん、全員揃ってるな。

「注目」。衛士長から話がある」

「「「……………」」」

朝のが効いてるのか、少し疲れたのか。
とにかく、みんなはすぐに静かになった。
…ていうか、また私なんだな。

「よし。衛士長、どうぞ」

「…今から帰るけど、気を抜いちゃダメだ。最後の最後で怪我なんかすると、一気に台無しになるからな。帰りだからこそ、しっかりと引き締めて。分かったか？」

「…はい」「」

「よし。じゃあ、帰ろうか」

忘れ物は…ないな。

笛も全員分回収したし。

あとは…

「桜！起きなさいって！置いて帰るよ！」

「……………」

「猫の姉さま、やつぱり寝坊助なんだぞ」

「はあ…。仕方ないな…」

荷物を一旦置き、桜を背負う。

相変わらず、羽根のように軽くて。

「あ、じゃあ、荷物はあたしが持つね」

「え？ああ、すまない」

「良いの良いの」

「まったく…。桜は何しに来たんだか…」

「きつと、寂しかったんだよ」

「…そうなのかな」

「うん」

「おい、行けるか？」

「ああ。大丈夫だ」

「よし。それじゃあ、出発進行！」

「…「おおーっ！」」「」

桜は、何かムニャムニャと寝言を言っていて。
無防備な耳を少し触ってやると、煩そうにピコピコと動かす。
今は眠りが浅いのかな。
でも、目を開ける気配は全くない。

「何やつても起きないでしょ」

「ああ。ある意味、才能だな」

「良いなあ。裁縫の才能に、寝坊の才能」

「寝坊の才能は良いのか？」

「うん。だって、姉ちゃんにおんぶしてもらえるもん」

「それは今日だけだ。普段なら、殴ったり蹴ったりして無理にでも起こしてる」

「ふふ、そうかもね」

ユカラは、桜の鼻をつまんで、優しく微笑む。

「ううん…」

「桜の寝顔って可愛いよね。なんか、こっ…おぼこくて」

「元からだろ」

「あはは、それもそうだね」

「何話してるの？」

「ヤーリエの寝顔は可愛いなって話」

「み、見てたの？」

「ああ。バッチリな」

「むう…」

怒ったような恥ずかしいような、そんな顔をする。
そして、少し機嫌が悪そうにバタバタと尻尾を振る。

「”日の御子”ヤーリエ。そんな顔していると、ヤンリオが哀しむぞ」
「でも…」

「はい、笑顔笑顔。ヤーリエは、笑顔が一番素敵だと思うよ」

ヤーリエの頬を揉んで、笑った顔にさせる。

「えへへ」

「そうそう」

ユカラに撫でられ、尻尾もパタパタとご機嫌さん。
身体全体で感情を表す天才だな、ヤーリエは。

「ああっ！ヤーリエだけズルい！わたしも！」

「はいはい…」

「ん〜」

響の相手もして。

いや、響だけじゃなく、ワラワラと他の子も集まってきた。

「こら、遅れてるぞ」

「ほら。こっちの美希お姉ちゃんも撫でてくれるよ〜」

「ええっ!?!」

「みきねえも?」「大好き〜」

「お、おい。歩きにくいつて!」

「えへへ」

困ったような顔をしてても、やっぱり嬉しそう。

純粋な子供だからこそ、純粋に接することが出来る。

美希とユカラ。

二人の笑顔は、きつと、心からの笑顔。

ルウエとヤーリエとは、市場の真ん中あたりで別れて。

そして、向こうの山に太陽が沈むかどうかというところで城に到着。広場に入っすぐに、セトがなりふり構わず風華に飛びついてきて。

「グルル…」

「痛いよ、セト」

「ウウ…」

「うん」

「ウルル…」

「何もなかったよ。みんなが無事に帰ってきた」

「ただいま、セト」「ただいま」

「オオン」

チビたちはセトに群がって、無事の帰宅を告げる。
セトも、それに応える。

「あ、みなさん。お帰りなさい」

「ただいま」「ただいま帰りました」「ただいま」

「先にお風呂にしますよね？」

「そうだな」

「沸いてますんで、どうぞ」

「ああ。ありがとう」

「いえ。では、失礼します」

軽く敬礼をして、城へ戻っていった。

「さあ、夕飯の前に風呂だ」

「お風呂」」「ええ」」「お腹空いた」

「ほら、競争だ。一番最初に着いた人は、衛士長と一緒に入れるぞ！」

「ええっ!？」

「よいい、ドン！」

「わぁー」「かけっこだ」

「待て、こら！」

なんでまた私なんだ！

さ、桜はどうしよう…。

ああもう！

頭からお湯を掛けてやる。

「ん」

「気持ち良いか？」

「うん！」

「うう…。私の葛葉…」

「美希お姉ちゃん、背中、流してあげるね」

「ああ…。ありがと…」

意外にも、一番だったのは葛葉だった。

…まあ、四本足で走れば、そりゃ速いだろうけど。
本物の狐のように、城の中を疾走していった。

「ねーねー。葛葉も、せなか、流してあげる！」

「ああ。よろしく」

「葛葉あ…」

「美希はダメ」

「うう…」

「美希には望がいるだろ」

「そうだな…。ありがと、望」

「えへへ。どういたしまして」

「ゴシゴシ」

葛葉は一所懸命に背中を洗ってくれて。

美希には悪いけど、自分が作った規則なんだからな。

「せなか流して、きれいになりましたよ」

「お風呂の歌か？」

「うん！」

「私も知ってるよ。葛葉に教えてもらったから」

「へえ」。葛葉が作ったのか？」

「そうみたい」

「しっぱ、しっぱ。先まできれいに」

背中からいつの間にか尻尾に。

すぐく丁寧に洗ってくれている。

「お水を流して、できあがり」

「ふふふ。ありがと、葛葉」

「えへへ」

ギュッと抱き締めてやる。

すると、葛葉は嬉しそうに笑ってくれた。

「よし。最後に、湯船に浸かっておこうか」

「うん！」

ペタペタと歩いていき、ゆっくり慎重に入る様子がまた可愛くて。

「はにゃ〜…。可愛いなあ…」

「美希。涎、垂れてるぞ」

「ええっ!？」

「ふふ、嘘だよ」

「い、紅葉!」

平和な時間が、ゆっくりと流れてゆく。

そつえば、結局桜は私の部屋に置いてきたけど…。

まあ、夕飯の匂いを嗅ぎ付けて起きてくるよな…？

67（後書き）

桜は食い意地が張ってるので、きつと起きてくるでしょうね。

「ボクも、みんなとお風呂に入りたかった!」

「起きなかつた桜が悪いんだろ」

「むう…」

「あとで一緒に入つてやるから」

「もういいよ…」

「じゃあ、入らないぞ」

「ええっ!」

「もういいんだろ?」

「よくない!」

桜が盗ろうとした唐揚げを、先に食べてやる。

「そういえば、いつの間にいなくなつたんだ? 桜に頼もうと思ってた仕事があつたのに」

「と、としい…」

「桜。仕事を抜け出してきたのか?」

「抜け出してない!」

「たしかに、頼む前だったから抜け出してはないな」

「はあ…。仕方のないやつだな…」

「い、良いじゃん! たまには…」

「たまに、ならな」

桜の頭を軽く撫でてやると、頬を膨らませる。

その頬をつまんで横に引っ張ると、なかなか面白い顔になった。

「うう…」

「まあ、気楽にな」

「紅葉はいつも気楽そうに見えるけど」

「ふん。どうせ暇人だよ」

「一番上が暇なのは、組織が優秀な証拠だ」

「ああ。自慢の衛士たちだ。もちろん、桜もな」

「んむ？」

桜は私のおかずを食べるのに必死だったらしい。

顔をあげた桜の頭をまた撫でてやると、今度はニッコリ笑って。

「そんなに食べると太るぞ」

「うつ…」

凍りついた桜の笑顔をおかずに。

ご飯を美味しくいただいた。

夕飯を食べ終わるとすぐに、風呂場まで引っ張っていかれる。

「そんなに急がなくてもいいだろ」

「ダメ。早くしないと、いろはねえ、逃げるもん」

「逃げないって…」

「お母さん、早く…」

そして、なぜか望も付いてきて。

葛葉は風華に止められてたけど。

「お風呂、お風呂…」

「さつきも入っただろ」

「うん。でも、お風呂大好きだもん」

「ボクも…」

桜って、猫なのにな変わってるよな。

猫は協調性に欠けると言われるのに、桜は率先して連携を重視した作戦を考えるし、風呂嫌いという評判も当てはまらない。

…まあ、いろんな人間がいるということだな。

「早く〜」

「明日になっちゃうよ!」

「分かった分かった」

二人に急かされ、少し駆け足。

間もなく、風呂場に到着する。

先に着いていた二人は、もう服を脱ぎ始めていて。

「桜。脱ぎ散らかすな。望を見習え」

「むう…」

「桜お姉ちゃんのも畳んであげるね」

「あー。良いよ、そんなの。桜にやらせておけ」

「うん、分かった」

「いろはねえ!余計なこと、言わないでよ!」

「余計なことじゃない。桜のためになることだ」

「うう…」

「ほら、呻く前に手を動かす!」

「はあ…」

桜が服を畳むのを見届けて、私も服を脱ぐ。

「先に入ってるよ」

「ああ」

そう断つて、桜は風呂へ入っていった。

望のは少し形が崩れているが、桜のは角まできっちり折り畳まれていて。

…これだけ綺麗に畳めるのに、勿体無いな。

桜の服を洗濯籠に入れ、丁寧に”さくら”と刺繍がしてある服を出しておく。

さて、私も入ろうか。

「はふう…」

「望。早めにあがれよ」

「うん」

「いろはねえ、石鹸、どこ？」

「棚の上にないか？」

「ちっちゃいのしかない」

「じゃあ、外だな」

「ええ…」

「オレが取ってくるよ」

「大丈夫だよ。はい、石鹸」

「あ。ありがと、灯」

いつの間にか、灯が入ってきていた。

大きな石鹸を桜に渡すと、湯船に向かう。

「あー、こちら。先に身体を洗って、いつも言ってるだろ」

「むう…。細かいなあ、お姉ちゃんは」

「みんなが気持ち良く入れるための作法だ」

「私は身体を洗う前と後の二回、湯船に浸からないとイヤなの」

「じゃあ、せめて前だけでも流しておけ」

「…お姉ちゃんって、そういうこと、割と平気で言うよね」

「何が」

「前とか後とか」

「そんなこと、恥ずかしがっててどうするんだ」

「もうちょっとさあ、女の子っぽくしないと、お兄ちゃんに嫌われるよ?」

「うっ…」

嫌われる…。

女の子っぽくしないと、利家に嫌われる…。

そうなのか、利家…?

「よいよい。今日も良い湯ですねえ、望さん」

「……………」

「望?」

「はう…」

「お姉ちゃん、桜!大変だよ!」

「どうした」「え?どうしたの?」

「望が逆上せた!」

「ええっ!?!」

早めにあがれって言ったのに…。
望を抱え上げて、湯船から出す。

「私、風華呼んでくるね」

「ああ。頼む」

「ボクは…」

「望を見ててくれ。オレは水を取ってくるから」

「うん。分かった」

風呂から出て身体を拭き、簡単に上着だけ羽織って厨房へ向かう。
そして、その途中で利家と会った。

「あ、紅葉。どうしたんだ？」

「望が逆上せた」

「水か？」

「ああ」

「ほら、これ。まずはそれを持っていつて。水は僕が持つていくから。紅葉も、そんな格好で身体を冷やさないようにしろよ」

「うん。ありがとう」

利家から水筒を受け取って、風呂場へ引き返す。

着いた頃には、風華はすでに来ていて。

望は風呂から出されていて、冷やした手拭いを額に乗せられていた。

「あ、姉ちゃん。それ、水？」

「ああ。ほら」

「うん。じゃあ、望。ゆっくり飲んで」

「ふむう…」

真っ赤な顔をした望は、風華が傾ける水筒から少しずつ水を飲む。

「はあ…はあ…」

「葛葉と一緒に止めておけばよかったよ…。一回入って体力を消耗してるんだから…」

「説教はあとだ」

「…うん、そうだね」

「望、大丈夫？」

「うん…」

「良かったあ」

「はいよ。水だ」

「あ、兄ちゃん。ありがとう」

利家は、新しい水筒とタライにいっぱいの水を持ってきてくれて。
…これから風呂に入るときは、もっといろんなところに目を配って
おかないといけないな。
反省しないと。

望を含め、チビたちは静かな寝息を立てている。
望はあのあと、風華にきつちりと叱られていた。

「ふふ、ホント、可愛い寝顔」

「ああ。そうだな」

「…新月が近いね」

「ああ」

「月は好き？」

「好きだ。見たことはないけど」

「ふうん」

「どうしたんだ？」

「不思議とね、月光病の人は月が好きな人が多いんだって」

「へえ」

「姉ちゃんは、なんで好きなの？月は、姉ちゃんの視力を奪うんだ
よ？」

「なんでだろうな。月の光が温かいからかもしれない」

「え？」

「月の光は温かい。ルイムナの優しさだ」

「優しさ…」

「ああ。月の光は、みんなを優しく包み込んでくれる」

「うん」

そっと抱き締めると、風華はゆっくりと目を瞑った。

「温かいね…」

「ああ」

今日も月は昇る。

夜の世界を見守るために…。

「お前ら、何をそんなに怒っているんだ」

「うう…」

「……………」

「喧嘩なら他所でやってくれ。ごはんが不味くなる」

「むう…」

「……………」

まったく…。

何か早起きしてるかと思えばこれだ。

風華も葛葉も分らないって言うし、望はまだ起きてすらいない。

「何なんでしょうね…」

「さあな」

「うう…」

「……………」

「響。せめて黙ってくれないか」

「むう…」

「……………」

「光はもうちょっと喋れ」

「神道だから」

「はあ…。どこでそんなの覚えてくるんだ。昨日は楽しそうに喋っ

てたじゃないか」

「……………」

そして、また黙りこくってしまふ。

…ホントに、何なんだ。

二人を横目で見ながら、味のしない味噌汁を飲む。

洗濯の時間になっても、響と光の喧嘩は続いていて。

「いろはねえ。あの二人、どうしたの？」

「さあな」

「ふうん…」

桜も、その不穏な空気を感じたんだろう。
今日は大人しくタライの前に座っていた。

「響と光の喧嘩に関わらず、いつもそうやって洗濯してくれたら助かるんだけどね、桜」

「ええ〜。面倒くさい〜」

「え？よく聞こえなかった。もう一回言ってくれる？」

「なんでもないです…」

「そ。じゃあ、手伝ってくれるんだね」

「うう…」

ここまで力の差があれば、なかなか喧嘩にはならないんだけど。
あの二人は、そうはいかないようだった。

「光、どうしたの？響とけんかしてるの？」

「……………」

「なんで答えてくれないの？葛葉のこと、きれい？」

「……………」

「ねえ…光…」

「……………」

「うう…うええ…」

「…ごめんね」

「うつ…うつ…」

ようやく口を開いた光。

泣きじゃくる葛葉を抱き締めて、ゆっくり背中を叩いている。

でも、響は無視を決め込んでいて。

「嫌なら話さなくても良いけどさ、二人でちゃんと解決するんだよ。

二人のせいで、みんな暗くなってることに気付いてさ」

「…望お姉ちゃんには分からないよ」

「うん。分からない。でも、喧嘩してる二人が分かってたら良いんじゃないかな」

「……………」

何も言い返せなくて俯く響。

これにも、光は反応しない。

「はあ…。空気が重たいね…」

「そうだね…」

葛葉は泣いてるし、セトも遠巻きに様子を見てるだけだし。

唯一、軽い雰囲気なのは利家。

…何か知ってるのかな。

「兄ちゃん、何か知ってるんですよ」

「ん？ああ、まあな」

「何があつたの？」

「んー。それは、あの二人の口から話すことだろ」

「そうだろうけど…」

「じゃあ、待つんだな。あいつらが話してくれるときまで」

「むう…」

たしかに、それが一番なのかもしれないけど…。でも、やっぱり気になる。

あれだけ仲の良い二人が喧嘩するようなことか…。

いや、仲が良いから喧嘩をするのか？

うーん…って、そんなことはどうでもいい。

何なんだろう？

二人はずっと背を向け合っていて。

真実のほどは、全く闇の中だった。

洗濯も終わり、広場の真ん中でセトの背中に乗って空を眺めていた。相変わらず私に仕事は回ってこず、暇を持て余しているんだけど…。

「ウルル…」

「ああ。理由は分からないけど」

「……………」

「そうだな」

鳶がクルクルと旋回していて。

ホント、何を喧嘩してるんだろうな。

「それで、どうしたんだ？」

「うん…」

身体を起こして下を見ると、そこには光がいた。

フカフカのたてがみに身体を半分埋めるようにして座っていて。

「わたしね、響と、喧嘩しちゃった」

「ああ。知ってる」

「でも、わたしが悪いの。響に、酷いこと、言つて…」

「………」
「謝りたいのに、謝れないの…。響を見たら、なんでか分からないんだけど、胸のところが、こつ…熱くなるの」

「………」

「言葉が、喉のところまで来てたのに、出てこないんだ…」

「…そうか」

「ねえ、お母さん…。わたし、どうしたら良いの…？響に、謝りたいよ…」

光の声は震えていて。

…人一倍純粋な子だから、それだけ考え込んでしまふんだろう。
私はセトの背中から下りて、光をそつと抱き締めてやる。

「私が手伝つてあげるから。光の気持ち、ちゃんと響に伝えような」
「うん…。でも、出来るかな…」

「大丈夫。光なら出来るよ。だって、私の自慢の娘なんだから」

「…うん。えへへ…ありがと、お母さん。わたし、頑張ってみるね」
「ああ。その意気だ。じゃあ、昼から市場に行くから、そのときに上手くやれよ」

「うん、分かった！」

光の頭を軽く叩いてやると、ニツコリ笑ってくれて。

そして、城の中へ戻っていった。

…さて、どういう作戦がいいか。
こついうときは、あいつだな。

69（後書き）

二人はなんで喧嘩をしてるのでしょうか。
仲直り出来るんでしょうか。

部屋の隅で、モゾモゾと何かやっている。

覗いてみると、どうやらまた絵手紙を描いたらしい。

粗末な紙に、たくさんの子供たちの絵が描いてあつて。

ヒラヒラさせて、墨を乾かしていた。

「昨日の遠足のことを描いたのか？」

「ひゃう！」

「言ったら、もう少し綺麗な紙をやったのに」

「も、もう！びっくりさせないでよ！」

「何回びっくりしたら気が済むんだ」

「何回でもびっくりするよ！なんで、足音も立てないのさ！」

「癖だな」

「はあ！？どんな癖！？」

「こんな癖」

「そういうことじゃないでしょ！」

「でだ。響と光が喧嘩してるのは知ってるな？」

「うん」

二人の名前を出すと、手紙を横に置いて真剣な顔をする。

絵手紙はやっぱり昨日のことで、細い筆を使ってかなり描き込まれていた。

「あ、そうだ。ユカラは？」

「医療室だよ。ねえ、ユカラが関係してるの？」

「いや、分からない。でも、三人寄れば文殊の知恵とも言つだろ」

「二人を仲直りさせる作戦でも立てるの？」

「ああ」

「じゃあ、医療室に行こうよ。風華もいるはずだし」

「そうだな」

「うん。行こう」

すっかり乾いた手紙に裏紙をあてて丸め、黒い紐で結ぶ。
重要文書に使う結び方で。

「そんな結び方だと、向こうが解けないだろ…」

「うーん…」

「そっちの赤い紐で普通に結べ。それで大丈夫だから」

「どういう意味があるの？」

「赤は重要文書。黒は一般文書だ。香具夜に教えてもらわなかったのか？重要文書の結び方は知ってるのに？」

「えっと…」

講義、聞いてなかったんだな…。

目は泳ぎ、額に汗をかいている。

…そこまで焦ることもないと思うけど。

「まあいい。早く手紙を出して、医療室に行こう」

「う、うん…」

怒られると思っていたんだろうか。

桜は、ほっと安堵のため息をついていた。

「でも、覚えないといけないことは、ちゃんと覚えてもらっからな」

「ええ…」

「香具夜に厳しく指導するように頼んでおくから」

「ええっ！」

「聞いてない桜が悪いんだろ」

「うう…」

ガツクリとうなだれる桜。

…まあ、実際にやって覚える方が早いんだけど。
香具夜もその辺は分かっているんだろ。
やる前の準備も大事なんだけどな。

「あ、縁^{ゆかり}。ちょうど良いところに」

「んー？ああ、隊長ですかあ。どうしましたあ？」

「これ、届けてくれないか？」

「えへへ、良いですよ。んー、ヤウトですねえ。分かりましたあ」

「絶対、見ちゃダメだよ！」

「桜ちゃんが書いたんですかあ？ふふ、大丈夫ですよ。ぜーったいに見ませんからあ。じゃあ、返事も貰ってきますねえ」

「う、うん」

手紙が潰れないように小さな木の箱に入れると、縁はゆつたりと敬礼をして。

「では、行って参りますう」

「ああ。よろしく」

「よろしくね」

「はあい」

そして、おっとりと歩いていった。

「大丈夫かなあ…」

「何が」

「いつ帰ってくるんだろ…って思っ…」

「ふふふ。いつになるかな」

「むう…」

「さあ、医療室だな」

「うん…」

桜は、まだ向こうの角のところにいる縁をチラチラ見ていて、目が合ったらしく、縁はニツコリ笑い、手を振っていた。

「あ、あはは…」

桜も手を振るが、ぎこちないもので。

縁が角を曲がったのを見届けて、大きくため息をついていた。

「ふふふ」

「何が可笑しいのさ」

「いや、なんでもない」

「むう…」

桜の頭を軽く撫でてやると、不満そうな顔をする。

そのまま耳を引っ張ってやると、嫌そうに頭を振った。

「耳、触らないで」

「なんでだ。良いじゃないか。こんなフカフカの耳は珍しい」

「そ、そうかな…」

「ああ。こんなに触り心地の良い耳は初めてだ」

「うーん…。ちょっとだけなら…良いよ」

「そうか」

ここぞと言わんばかりに、桜の耳を堪能する。

耳の内側の細かい綿毛が特に気持ち良い。

お返しに、耳の付け根を搔いてやると、ゴロゴロと喉を鳴らして擦

り寄ってきた。

そんな可愛い様子を見てる間に、医療室に到着。

「…ん？」

「どうしたの？」

「いや…。入ろうか」

「…うん」

戸に手を掛け、一気に開けてしまう。

「あ、姉ちゃん。今、探しに اینجا と思ったところ」

「ああ。そうだろうな。響の匂いが、まだ新しかった」

「ふふ、さすがだね。ほら、ユカラ、起きて」

「んう…」

「葛葉は寝てていいから」

「あ…ねーねー…」

寝ぼけ眼でフラフラとこちらまで歩いてくると、しっかりと抱き付いてきて。

…洗濯の時間のあれが響いているんだろうな。

葛葉を抱き上げて、ゆっくり背中を叩いてやると、安心したようにため息をついて、また眠りへと落ちていった。

「ユカラ、起きなさい！」

「む…もうちょっと…」

「はあ…」

「まあ、ユカラは起き次第、話に参加してもらえば良いじゃないか」
「そうだね」

ユカラの鼻をつまんだりして遊ぶ桜の頭を叩いて、こっちに向き直

る。

私も、葛葉を起こさないように歩いていき、ゆっくりと腰を下ろす。

「葛葉、邪魔じゃない？」

「ああ。それに、不安がつてるんだから」

「そうだね」

「で、響と光の仲直り大作戦だけさ」

「そういえば、響、姉ちゃんたちのところにも行ったの？」

「いや。オレのところに来たのは光だ。響に酷いことを言っただけだ」

「へえ。響も一緒だよ。光に嫌なこと言っちゃったって」

「ふむふむ。つまり、二人はお互いに謝りたいとは思ってるけど、相手は許してくれないだろうって思ってる怖がつてるんだね」

「うん。一番簡単だけど、一番難しい問題だね」

相手の気持ちに気付けば、簡単に解決出来る。

お互いに謝りたいと思ってるんだから。

でも、気付かなければ、いつまでも擦れ違ったまま。

さあ、どうやって気付かせてやるかなんだけど…。

「ボクたちに来れることは、ほんの少し。そっと背中を押してあげるだけ」

「ああ」「うん」

そして、作戦会議が始まった。

「ジツとしてないと上手く出来ないだろ」
「ん」

葛葉の尻尾を押さえて、櫛を入れる。
通すたびに金色の毛がキラキラ輝いて、本当に綺麗。

「鼈甲の櫛なんて、どこから持ってきたんだ？宝物庫にはなかった
と思うけど…」

「もらった」

「ええっ！？誰に！？」

「ルウエ」

「ほう。なんでこんなもの、持ってるんだろうな。パツと見たかん
じ、本物だけど…」

「返してきなさい！」

「うう…ヤ…」

「葛葉！」

「むう…」

「貰ったものは仕方がないよな。返す方が失礼だ」

「でも…！」

「じゃあ、これが飴なら返せと言ったか？」

「そ、それは…」

「じゃあ、なんでこれは返せと言ったんだ」

「そんな高価なもの、貰えないよ！」

「つまりそれは、贈り物をお金で勘定してるということだ。安い飴
だろうと高い櫛だろうと、ルウエは葛葉にあげたかったからあげた。
その気持ちが一番なんじゃないか？その気持ちを無下にするような
ことを、葛葉にさせようとしてるんだ」

「でも…」

「もし、ルウエが勝手に持ち出して葛葉にあげたなら、向こうから返してくれと言ってくるはずだろ？そのときに返せば済む話だ。心配なら確認を取れば良い。今日、市場に行くんだから、そのときにでも」

「むう…」

「ねーねー、早く」

「はいはい」

スーッと櫛を通す。

葛葉は機嫌良さそうに足をバタバタさせて。

それでも、風華は難しい顔をしていた。

「ふぁ…」

「退屈か？」

「うん…。だって、読めない字ばかりだもん…」

「風華に教わればいいだろ」

「んー…面倒くさい…」

「まあ、桜には絵があるからな」

「絵？」

「あぁーっ！なんでもないよ！」

「……？」

「もう！いろはねえ！余計なこと、言わないでよ！」

「んー、何か余計なこと、言ったかな？」

「言っていない」

「そうだよな。葛葉は良い子だなあ」

「えへへ」

「さあ、尻尾、終わったぞ」

「ええーっ！」

「葛葉がこのまま一日良い子にしてたら、風呂のあとにもしてやる

から。それでいいな？」

「うん。良い子にしてる！」

振り返ってギュッと抱き締めてくる。

その頭を優しく撫でてやると、嬉しそうに額を擦り付けてきて。

「ふぁ……」

「寝たらどうなんだ？」

「うん……。作戦はさっきの通りで良いんだね……」

「作戦というほどでもないけどね……」

「まあいいだろ」

「ふむう……。分かった……。お休み……」

「ああ。お休み」「ちゃんと起きなさいよ」

そして桜は、ユカラの横で丸まって眠ってしまった。

……葛葉もまた寝てるし。

ちゃんと膝に乗せて、お尻のところを支えて。

「あ、また寝ちゃったんだね」

「昼寝が好きなんだろ」

「日向ぼっこも好きだよ」

「ふふ、そうだな」

「失礼しまあす」

と、縁が入ってきた。

「桜ちゃんの手紙……あれえ？寝ちゃってますねえ」

「桜が手紙？誰に？」

「ふふふ。それを聞くのはあ、野暮というものですよあ」

「うつ……」

「悪いけど、桜の部屋に届けておいてくれるか？」
「はあい。了解しましたあ」

そして、ゆつたりと敬礼をして医療室を出ていった。

「えらくおつとりした人だったね…」

「ああ。でも、仕事の速さでは伝令班の中でも一、二を争うんだぞ」
「え？」

「縁は最速で、ヤマトまでの往復が半刻だった」

「ええっ!？」

「まあ、見た目や喋り方で人は判断出来ないということだな」
「そうだね…」

私にも、あのゆつたりおつとりの縁がどうやったらあんな速さを出せるのか分らない。

でも、縁は確かに猛烈な速度で仕事をこなす。
それが真実。

と、バタバタと足音が近付いてきて

「お姉ちゃん！」

「望？」

「大変だよ！」

「どうしたの!？」

「お昼ごはんが…ないの!」

「…はあ？」

…たしかにそれは、由々しき事態だ。

話を聞くと、厨房で仕込んでいた料理が、少し目を離れた隙に消え

てしまったらしい。

「で、昼ごはんはちゃんと作れるんだな？」

「はい…。手の込んだのは無理ですが…」

「それなら良い。万事解決だ」

「何も解決してないよ！」

「大声を出すな。葛葉が起きるだろ」

「何も解決してないじゃない」

「腹の減った誰かが綺麗に食べた。それじゃダメなのか？」

「その誰かが問題なんですよ。警備的な問題でもあるし」

「警備は万全だ。その網を潜ってくるやつなら、簡単に捕まりはしないだろ」

「はあ…。じゃあ、このまま放っておくのか？」

「ん？まあ、追いかけたいなら追いかける」

「どうやって」

「望に連れていってもらえ。まだ、だいぶ匂いは残ってるぞ」

「うん。残ってるよ」

「じゃあ、行こうよ」

「分かった」

二人はそのまま匂いを追って、厨房を出ていった。

「ホントに、誰なんでしょうかね…」

「本人に聞いてみるよ」

「本人？」

「二人が追っていったのは、入ってきたときの匂い。そして、出ていった匂いはない」

「ええ？厨房にいるってことですか？」

「ああ。例えば、保管室の中とか」

ギクリという音が聞こえた気がした。

分かりやすいやつだな。

…望にはもう少し、気配を察知する技を教えてやらないとな。

「腹が減ったなら、そう言えば良いのに」

「……………」

「なんで、つまみ食いなんかしたんだ」

「……………」

「喋らないなら、追加の昼ごはんはなしだ」

「ええっ！」

「嫌なら話せ」

「つまみ食いなんか…してない…」

「でも、実際、鍋は空になってる。つまみ食いじゃなかったら、何なんだ」

「……………」

「そうか。そのままそこで飢え死にするか」

「うう…」

「おい、こいつはもういいから、昼ごはん作ってくれ」

「え…？」

「昼ごはんを、作ってくれ。早く」

「は、はあ…」

もう仕方がないということでご飯だけを炊いて、昼ごはんはお握りになったんだけど。

釜の蓋が開けられると、良い匂いが厨房に広がる。

「良い匂いだ。特製のお握りを食べられないなんて、勿体無いな」

「そうですねえ」

「うう…」

「葛葉、起きろ。もうすぐごはんだぞ」

「ん…。ごはん…」

「ああ。今日はお握りだ」
「おにぎり！」

一気に目を覚ました葛葉は、すでに涎を垂らしていて。
…手近にあつた布巾で拭いてやる。

「おなかすいた」
「はいはい。分かってますよ」

そして、お握りが葛葉の前に並べられていく。

「食べていい？」
「ああ」
「いただきます！」
「分かった！喋るよ！」
「そうか。葛葉、そっちに移ってくれ」
「……………」

葛葉は気付いていないのか、黙々とお握りを食べていて。
横の椅子に座らせると、一瞬私の方を見て、お握りをひとつ渡してくれた。

それを受け取り、頭を撫でてやると、足をバタバタさせて喜ぶ。

「さて、何を喋ってくれるんだ？」
「盗ったごはんは、さっきのところに隠してある……」
「それだけか？」
「それだけだ！」
「そうか……。残念だ」
「昼ごはん！寄越せよ！」
「全部話したらな」

「今ので全部だ！」

「保管室の中に、料理があるんだと」

「はい。分かりました」

そして文太は保管室に入っていき、間もなく大きな革袋を持って戻ってきた。

「たしかにありました。でも、もうお握りも作りましたし、これは夕飯にしますね」

「ああ。それにしても、このお握り、美味しいな」

「ありがとうございます」

「お腹、空いた〜」

と、お腹をさすりながら光が入ってきた。

「良いところに来たな。今日の昼ごはんはお握りだ」

「お握り〜」

「これ食べたら、市場に行こうな」

「うん……」

「大丈夫だって。必ず仲直り出来るから」

「うん」

「隊長。市場に行くなら、買ってきてほしいものがあるんですが」

「何だ？」

「今、ちよつと覚書にしますね……」

「そんなにたくさんあるのか？」

「ええ。申し訳ないんですが……」

「いや、大丈夫だ。書き忘れないようにな」

「はい。ありがとうございます」

机の上にあった紙と鉛筆を取り、ひとつひとつ思い出しながら書い

ている。

光を見ると、大きなお握りを取って、上の方から少しずつ食べていて。

葛葉はというと、両手にお握りを持って、がつついていた。

「うっ…」

「唸っても何も出ないぞ」

「お握り…。な、一個で良いから！」

「じゃあ、隠していることを話せ」

「分かった！分かったから、夏月に食べさせてやってくれ！」

「夏月？」

「頼む…頼むよ…。俺はどうなっても良いから…」

後ろ手に縛られたまま、額を地面に擦り付ける。

…夏月が誰かは知らないけど、その辺は大丈夫そうだ。
バタバタと、急ぐ足音が近付いてきた。

「姉ちゃん！誰かが倒れてた！」

「空腹と栄養失調だろう。助かるか？」

「え？あ、うん。でも、いろいろ道具を用意しないと…」

「オレも手伝おう」

「うん。医療室に」

「分かった」

そして、床に突っ伏して泣いている夏月の兄貴の縄を解いてやる。

「医療室にいるからな。昼ごはんを食べてから、来るといい」

「うっ…うっ…」

「葛葉、光。こいつを案内してやってくれるか？」

「うん！」「はあい」

「よろしくな」

「お粥でも作りましょうか？」

「そうだな…。今は無理だろうから、夕飯に。いちおう、風華に確認取るけど」

「はい。了解です」

「覚書、ちゃんと書いとけよ。じゃあな。ごちそうさま」

軽く手を振って、厨房をあとにする。

夏月の兄貴は、まだ泣いていた。

利家が言うには、昏睡状態からは抜け出したらしい。
でも、いつ目を覚ますかは分からないとのことだった。

「こんな小さな子が、何日食べてなかったのかな…。顔色も悪いし、頬も痩けてる…」

夏月の額をゆっくりと撫でる風華。
その目はとても哀しげで。

「当分は点滴だな。こっちの男の子は、まだ大丈夫みたいだけど…」
「うん」

「なんで、こんな小さな兄妹が空腹で…」

「戦だろうな。隣国の」

「戦…」

利家は、深く考えるように宙を見つめて。

「何か、助ける手立てはないのかな…」

「……………」

そして、呟くように言う。

泣き疲れて眠ってしまった夏月の兄貴は、それでも、夏月の手を離さなかった。

…一瞬、それが利家と風華に見えて。

二人は、この兄妹に同じものを見ているようだった。

「響、連れてきたよ！」

「シート」

「あ…ごめん…」

「この子たちは僕が看てるから。そっちも、よろしくな」

「ああ。分かってる」

「私も残るよ」

「ダメだ。風華は紅葉たちと市場に行け」

「でも…」

「風華は、いろいろ重ねすぎるだろ」

「……………」

「ほら。行ってこい」

「うん…」

何を重ねるのは分からないけど。

でも、風華はここに残らない方が良いということは、私にも分かる。だから、風華の手を引いて、医療室から出た。

響と光はお互いに何も言わないまま、距離を開けて歩いていた。はしやぎ回る望と葛葉をも無視するように。

「ねえ、お母さん。あれ、買っていていい？」

「ん？」

「あの可愛いぬいぐるみ」

望が指すのは、白い虎のぬいぐるみ。

北に伝わる、護獣のお守りだった。

「小遣いをやっただろ。あれは望が自由に使っていていいお金だ。それで買ってくればいい」

「うん」

懐のお金を取り出して、グツと握りしめる。そして、店へと走っていった。

「ねーねー、葛葉もほしい」

「どれが欲しいんだ？」

「姉ちゃん！ダメだよ！」

「何が」

「あんまり葛葉に買い与えたら！」

「おかしなものを欲しがってるわけじゃないんだから、良いじゃないか」

「それでも…ダメだよ」

「望に小遣いをやって、葛葉に何も買ってやらないのは不公平だろ」
「でも…」

「ほら。五百円やるから、この中で好きなものを買え。追加はなしだ。分かったな？」

「ごひゃくえん？」

「あの小さなぬいぐるみなら二個買えるお金だ。あっちの金平糖なら五袋。上手く組み合わせで、たくさん買っただぞ」

「うん、わかった」

「姉ちゃん！」

「金銭感覚を付けさせる良い機会だ。ああだこうだ教えられるより、実際にやってみる方が身に付きやすいだろ」

「そうだろうけど……」

「あまり力り力りするな。葛葉なら上手くやれるよ」

「うう……」

葛葉を見ると、何やら店主と話し込んでいた。それに望も加わって……。

「ほら。上手く買えたみたいだ」

「……………」

「おまけ貰った」

「ふふ、良かったな」

「葛葉も」

「初めてにしては上出来だな」

「えへへ」

葛葉の頭を撫でてやると、せわしなく尻尾を振って。

風華は複雑な顔をしていたけど、やっぱり嬉しそうだった。

「葛葉。ちゃんと買い物が出来て、偉かったね」

「うん！」

終わり良ければ全て良しだ。

…こっちの二人も、そうなってほしいんだけど。

「いろはねえ！これ、美味しいよ！」

「桜は、もつと慎ましく買い物をするべきだな。いくら残ってるんだ？」

「んー、十八円」

「ええっ！？」

「はい、風華にもあげる」

「なんで、もつと大切に使わないの！」

「良いじゃない。ケチっても仕方ないし」

そう言つて、両手にいっぱい抱えたお菓子を、満足げに眺める。

…みんなに配るのかな。

とても一人で食べきれぬ量ではない。

「桜……。重いよ……」

「頑張つてね」

「頑張つてね、じゃないよ……」

そして、哀れな犠牲者が一名。

自分の分だけでなく、桜の余剰分まで持たされているユカラ。

「桜。自分の分は自分で持て」

「もう持てないもん」

「じゃあ、ユカラが持つてる分は全部返してくるよ。ユカラ、どれが桜の分だ」

「えっと……」

「わーっ！分かった！分かったから！」

「まったく……」

慌ててユカラから荷物を受け取る。

荷物はみるみる少なくなり…ユカラの分は、飴が詰まった大きめの袋と、何かが入った小さな綺麗な袋だけになった。

「はあ…」

「千円をどう使ったら、そんなに大量のお菓子を買えるんだ」

「んー」

「ええっ！？それ、千円分なの！？」

「使ったのは千円だけだよ」

「へえ…」

気になる言い方だけど、おまけしてもらったとか、そういう意味だろう。

桜は、響と光にも飴を渡して。

「……………」

「……………」

二人は何も言わず、飴を舐めていた。

市場の端の方に行くにつれ、人は少なくなる。
だから、通りに出て遊ぶ子供たちが増えてくる。

「あつ！狼の姉さま！」

「よう、ルウエ。元気にしてたか？」

「えへへ。昨日会ったばかりなんだぞ」

「そうだったな」

早速飛び付いてきたルウエの頭を撫でてやる。

「ん」

「ルウエ。この櫛なんだけど…」

「……？」

「大切なものなんじゃないの？」

「うん。すっごく大切なものなんだぞ」

「じゃあ、これ、返すね」

「なんで？」

「なんでって…」

「大切なものだから、葛葉にあげたかったの。葛葉は大切な人だから」

「昨日会ったばかりなのに？」

「えへへ。会った日の数なんて、関係ないんだぞ！」

ルウエの笑顔は、まさしく”純粋な心”だった。

「ルウエー！おやつー！」

「そら、みんなと遊んでこい」

「うん！」

そして、また走っていく。

響と光は、離れてはいるが、みんなと混じって遊んでいて。

…どうやら、作戦の前半は成功したようだ。

それより、桜に蟻のようにたかる子供たちが気になる。

お菓子目当てだろうが、さっきここに来たときより、明らかに数が増えている。

「……………」

「どうしたんだ？」

「会った日の数なんて、関係ない…。ルウエにとって、葛葉は大切な人…」

鼈甲の櫛を見ながら呟く。

「私、重要なことを見落としてたんだ…」

「そうだな」

「やっぱりダメだな…。何も考えないで、頭ごなしに叱ったりして…」

「今、気付けたんだから良いじゃないか。これから間違わなければ良い話だ。生きていれば、必ず間違うんだ。間違いは落ち込んだり、恥じたりするためにあるんじゃない。次、間違わないようにするためにある。成長するためにあるんだ。分かるよな？」

「うん…」

「じゃあ、ダメだとか、そんな自分を卑下するようなことは言わないでくれ」

「うん」

「ふふ、良い子だ」

「もう…」

頭をゆっくり撫でてやると、そっと身体を預けてきて。

「あつ！コイビト、みたい〜！」

「こ、恋人！？」

「おねーちゃん、わたしもなでて〜」

「ぼくも！」

「あー、こらこら。オレの手はふたつしかないんだからな。いつペんに来るな」

結局はこうなるんだな。

群がってきたチビたちの相手は大変で。
でも、風華の表情はずっと良いものになっていた。

「じゃあね〜」「また遊ぼ〜」
「またね〜」

日も傾き、もう家へ帰る時間。
葛葉はいつまでも手を振っていた。

「……………」
「……………」

響と光は、少し近づいたとはいえ、まだ距離は離れていて。
桜の言ってた通りだな…。
さて…

「ねえねえ、ボクね、まだ行きたいところがあるんだ」
「ええっ！？なんで、先に行っておかなかったのよ！」
「こつちこつち！」
「え？あ、あたしも？」
「あっ！待ちなさい！」

桜はユカラの手を引き、風華がそれを追いかけて。
路地の方へと入っていった。

…次は私たち。

「まったく…。何なんだ、桜のやつ…」
「むう…」
「葛葉、どうしたの？」
「ねむたい…」

「じゃあ、望がおんぶしてあげるね」
「ん…」

望は、フラフラの葛葉をおぶって。
…予期せぬ事態が発生。
どうするか…。

「お母さん。望、先に帰ってるね。葛葉、ちゃんと布団に寝かせてあげないと」
「ああ、じゃあ、オレも一緒に行くよ。響、光。二人で帰られるよな？」

「…うん」「帰られる」
「夕飯までにはまだ時間があるから。ゆっくり帰ってこいよ」
「うん」「分かった」

二人の頭を軽く撫でてやり、望のあとを追う。
まさか、葛葉がここまで機転が利くとは…

「んう…」
「えへへ。可愛いね」
「…ああ。そうだな」

そんなわけないか。
本当に眠たかったらしい。
まあ、あれだけ遊び回ったからな。
でも、お陰で考えていたより自然に抜け出すことが出来た。

「望。先に帰っててくれるか？」
「え？なんで？」
「ちよつと用事があるんだ」

「…うん、分かった」

そして、二人の姿が見えなくなったあたりで、望と別れる。
お詫びの代わりに、昼に買った飴をひとつ、口に入れてやると、ニ
ツコリ笑ってくれた。

…そのまま望を見送って。

葛葉を背負って歩いていく望の後ろ姿は、すっかり頼れる姉のそれ
になっていた。

短い間に、大きく成長したんだな。

「よし…」

手近にあった梯子を使って店の屋根の上に登る。

遠くに見えた二人の様子からすると、まだ何も話せないでいるよう
だった。

屋根伝いに近付いていくと、似たような影がもうひとつ。

「おい。すごく目立つぞ」

「え、嘘っ」

「…屋根の上ではな」

「もう…びっくりさせないでよ…」

「とりあえず、慎重になりすぎだろ。匍匐前進はやめろ」

「あ…うん…」

「風華とユカラは？」

「帰ったよ。あの兄妹が心配だっつて」

「ああ…そういえば…」

「ええ…。いろはねえ、忘れてたの？」

「ああ。すっかり」

「はあ…。まあ、今はあの二人だよ」

「そうだな」

屋根の上から少し顔を出して見てみる。
やっぱり二人は微妙な距離を保って歩いていた。

「……………」
「……………」

人通りがないわけではない。
前から来た人を避けたりして、距離が近付いたり離れたたり。

「うう……。もどかしいなあ……」
「シッ。気付かれるだろ」
「むう……」

それでも、もどかしいのは確かだ。
今すぐ出ていって誤解を解いてやり、仲直りさせたいところだけど、
それでは意味がない。
と、そのとき

「響……」「光」
「どうしたの……？」
「光こそ」
「……………。朝のこと……怒ってるよね……」
「……………」
「ごめんなさい……。わたし……響に酷いこと言っちゃった……」
「ホント、そうだよ」

桜が飛び出そうとするのを止める。

「でも、わたしも光に酷いこと言った……。わたしも、光に謝りたか

「つた…！」

「響…」

「ごめん…ごめんね…」

「うん…うん…」

…もう大丈夫だろ。

桜に目で合図を送って、その場を離れる。

二人の影は、夕日に照らされ、長く長く伸びていた。

一足先に城へ戻る。

広場ではセトが迎えてくれたが、早々に切り上げて医療室へ向かう。

「目、覚めたかな」

「さあな」

「としい、ちゃんと看てたのかな」

「たぶんな」

「あの男の子、なんて名前なのかな」

「五郎左衛門虎彦麻呂乃助伊右衛門だろう」

「え、ええ…。覚えらんないよ…」

「そんな名前なわけないだろ…」

「ええっ！嘘なの！？」

「…気付けよ」

「むう…」

そんなことを行ってる間に到着。
戸を開けて中に入る。

「あ、お帰りなさい」

「ただいま」

「どうなの？」

「夏月はまだ目が覚めないみたいだけど、顔色も良くなってるし、時間の問題だろうね。祐輔は、姉ちゃんの部屋で寝てる」

「このぬいぐるみ……」

「うん。望が買ってたぬいぐるみだよ」

「夏月のためだったんだな……」

「ユカラは？」

「自分の部屋にいると思うよ」

「分かった」

そして、桜は部屋を出ていった。

…夏月の顔を見てみると、最初とは違う、安心したような表情になっていて。

「私が帰ってきたとき、兄ちゃんが、政務をほったらかして何やってんの！って空姉ちゃんに怒られてた」

「そうか」

「そしたらね、大真面目な顔して、政務には僕は必要ないけど、この子には看病する人が必要なんだ！って。兄ちゃんらしいなあって思った」

「ふふふ。自国の王がこんなのだって知ったら、国民はどう思うんだろうな」

「ホント、おかしな王様だよね」

「ああ」

他の医務班員に頼むという選択肢に思い至らなかったのか、政務を休みたかったのか。

そのほどは分らないけど。

でも私は、そんな人がこの国の王であることを誇りに思う。

…もちろん夫としても、だ。

負担が掛からないようにと、祐輔の夕飯はみんなが部屋に戻ってからだった。

「あーんして」

「……………」

「いらないの？」

「あーん……」

「えへへ」

葛葉が出す匙を、恥ずかしそうにくわえ込む。

「わ、私にも……」

「はい、美希もあーん」

「あーん」

「おいしい？」

「うん。葛葉が食べさせてくれたら、なんでも美味しいぞ」
「ん」

美希に撫でてもらって、嬉しそうに目を細める。

「はあ……。それ、祐輔の分だからな」

「あ……すまない……」

「あーんして」

「……自分で食べられるから」

「ダメ。葛葉が食べさせてあげるの」

「うう……」

葛葉は断固として匙を渡そうとしない。

…自分の妹とさして変わらない年齢の女の子に食べさせてもらうというのは、やはり気恥ずかしいのだろうな。

しかも、こうやって私や美希が見てる前で。

こちらをチラチラ見て、顔を真っ赤にさせている。

「ふふ、こっちはかり見て。オレに食べさせてほしいのか？」

「えっ、あ…うう…」

「ねーねーがやるの？」

「そうだな…」

葛葉から匙と器を受け取り、祐輔を見る

祐輔は俯いてしまって、さっきより紅潮しているようだった。

「な、葛葉は私のをやってくれ」

「んー。いいよ」

「よしっ！じゃあ、何か食べるもの貰ってくる！」

そして、バタバタと厨房へ駆けていった。

…祐輔の恥じらいを、半分ほど美希に移すことは出来ないんだろうか。

今度、風華にでも聞いてみよう。

「さあ、続きだな」

「……………」

「ほら、あーんして」

「あ、あーん…」

「なんだ。素直だな」

「……………」

匙を口の中に入れてやる。

閉じたところで引き抜くと、すぐにまた俯いてしまった。

「美味いか？」

「う、うん……」

「そうか。良かった」

「あ、あのっ！」

「ん？」

「夏月……ありがとう……ございました……」

「なんだ。そんなことか。ほら、あーんして」

「う……むう……」

何か言いかけたところに、匙を押し込む。

「あのっ！」

「次だな」

「んう……」

間髪入れず、次を。

「葛葉！貰ってきたぞ！」

「うん」

美希は葛葉を膝の上に乗せると、貰ってきたお粥を匙ですくって、

葛葉の口へ運んでいく。

葛葉はそれを大きな口を開けて美味しそうに食べる。

……さっき言ってたのと逆じゃないだろうか。

「……………」

そして、何か言おうとしてたことも忘れて、それをジッと見つめる祐輔。

「あれ、やってほしいのか？」

「え、ええっ!？」

「葛葉、あーん」

「あーん」

「美希、葛葉。オレたちは先に戻ってるよ」

「ああ。分かった。ほら、葛葉。次だぞ」

「うん」

美希の返事はなんともなおざりだったけど。広間を出て、部屋へ向かう。

祐輔は素直に付いてきていたが、ずっと俯いたままだった。結局、部屋に着くまで全く無言で。

いちおう部屋の中を見てみるけど、やはり誰もいなかった。…今日、干したのかな。

きつちり並べられた布団の上に正座して膝を叩く。

「ほら。二人だけだから、恥ずかしくないだろ？」

「…うん」

トテトテと歩いてきて、ちょこんと膝の上に座る。

「えへへ」

「急に可愛くなったな」

「ねえ、姉さまって呼んでいい？」

「ああ。なんとも呼べばいい」

「ん」

見たところ、響や光と同じくらいだ。

まだまだ甘えたい年頃なんだろう。

だけど、甘える先がいなかった。

器からお粥をすくって、祐輔の口元へ持っていく。

すると、今度は純粹に。

「美味しいか？」

「うん！」

今夜だけは、兄という荷を下ろして。

年相応の小さな男の子として。

お腹いっぱいとなった祐輔は、疲れもあるんだろう、すぐに舟を漕ぎ始めた。

「ほら。布団で寝ろ」

「姉さま……」

「どうした？」

「一緒に寝てくれる……？」

「ああ」

「えへへ……」

膝から下りて、布団に潜り込む。

私もすぐ隣に寝転んで。

「姉さま……」

服を握って、ピッタリと身体を寄せる。
その頭をゆっくり撫でてやり

「お月さま　こんばんは
今日はとても良い日だったよ
だから　僕は眠る
明日もきつと良い日だから
おやすみなさい　また明日
お月さま　また明日」

唄い終わる頃には、祐輔は深く息をしていて。

「寝ちゃった？」

「ああ」

「望たちは、医療室で寝るんだって。いつ夏月が目覚めても良いようにって」

「そうか」

「葛葉は美希と灯の部屋に行ったみたい」

「風華はどうするんだ？」

「私はここで寝ようかな。夏月のところには、兄ちゃんもいてくれるし」

そう言って、祐輔の横に寝転ぶ。

そして、そっと祐輔の頭を撫でているようだった。

「ふふ、可愛い」

「そうだな」

「昼は虚勢を張ってたのかな…」

「さあな。今、特別に甘えたかったのかもしれない」

「そうだよ…。まだまだ甘えたい時期だもんね…」

「風華も、甘えていいんだぞ？」

「うん。でも、大事に取っておくよ。本当に甘えたいときまで」

「ああ。賢明な判断だな」

「ふあ…。祐輔見てたら、なんだか私も眠たくなってきた…」

「じゃあ、お休み。風華」

「うん…。お休み…」

そのまま、風華も眠りへ落ちてゆく。

「ふあ…。あふう…」

そして、私も…。

お休み…。

「姉さま、起きて」

「ん…？」

「姉さま」

「祐輔か…」

揺さぶられて起きると、祐輔が腹の上に乗っかっていて、さすがに、葛葉より重たいな…。

「起きて、姉さま！」

「あー、分かった分かった…」

祐輔を横にどかせて身体を起こす。

まだちょっと眠たい…。

でも、こちらを見て首を傾げる祐輔を見て、起きないわけにはいかない。

頭を撫でてやると、ニツコリ笑って応えてくれた。

「姉さま！夏月の様子、見に行こうよ！」

「ああ。そうだな」

風華は…もう医療室に行ったのかな。

それとも、朝ごはんだろうか。

どちらにせよ、少なくともこの部屋にはいなかった。

「夏月、起きたかなあ」

「さあな。でも、悪くはなってないはずだ」

「うん！」

もう一度、頭を撫でてやって立ち上がり、着物の乱れを粗方直す。
上着を羽織って帯を締め、準備が出来ると、祐輔は手を握ってきて
ふふ、とんだ甘えたを拾ってきたものだ。

「よし、行こうか」
「うん！」

部屋を出てすぐに、夜勤組が大欠伸をしているところに出くわした。

「あ…隊長…。すみません、お見苦しいところを…」
「いや。ご苦労さま。今日はゆっくり休んでくれ」
「ありがとうございます…ふあ…」
「はは、締まらないなあ」
「はい…すみません…。では、失礼します…」

そして、部屋とは正反対の方向へ歩いていった。
…どこに行く気なのかな。

「ところで祐輔。昨日の昼に黙っていたことは、夏月のことだったのか？」
「うん…」
「なんで正直に言わなかったんだ」
「牢屋に入れられるって思ったから…」
「……………」

たしかに、普通なら城に忍び込むのは大罪だ。

ここも、この前までそうだった。

…極端だったけど。

即刻死刑は有り得ないけど、長期の禁固刑は免れないだろうな。

それだけの危険を冒してまで、その日の生命を繋ぐだけの食料を盗みに入る。

こんなに小さな子が。

「姉さま…ごめんなさい…」

「ん？ああ、いや、謝らなくて良いよ」

黙りこくっていたのを、怒ってるんだと思っただけ。

怯えた顔をして、窺うようにこちらを見ていた。

…お詫びと言ってはなんだけど、空いてる方の手でゆっくり頭を撫でてやる。

すると、少し安心したような表情を見せてくれた。

「えへへ」

「誰も、ここでは祐輔たちを牢屋に入れようとする人はいない」

「…うん」

「だから、安心して。ここは、祐輔たちの家だから」

「うん」

少し、握る手に力が入ったようだった。

そして、医療室に到着。

物音が全くしないので、そっと戸を開けてみる。

「あ、姉ちゃん。おはよ」

「おはよう」

「夏月は？」

「うん。夜中に一回、目が覚めたんだって。でも、夜だって分かったら、また眠ったって」

「夏月、起きたのか！？」

「シッ」

「あう……」

夏月だけでなく、望やチビたちもまだ寝ていて。

「夏月……」

「そのうち起きてくるから、ね？朝ごはん、食べにいく？」
「うん……」

夏月を見て、逡巡しているようだった。
風華は祐輔に近付いて、そっと肩を抱く。

「夏月はこの子たちに任せて」

「……………」

「ふふ、大丈夫だよ。この子たちは、自慢の妹たちなんだから」

「……うん。分かった」

「よし。じゃあ、行こうか」

「うん！」「お腹空いたあ」

安らかな寝顔のみんなを見て。
そして、朝ごはんへ。

厨房では、灯がセトと話し込んでいた。

「でね、お姉ちゃんが、汚い部屋は嫌だーって飛び出していったんだ」

「……………」

「ちよっと物が散らかってるだけなのにね」

「ほう。ちよっと、ねえ」

「ひゃあー！」

「あのときは酷かった。数日オレが留守にしてた間に、よくもまああの汚い部屋にいて、よく調理班に入ろうと思えたな」

「い、今は綺麗だもん…」

「美希が片付けてるからだろ」

「そ、そんなこと…」

「ある。覚書をしては散らかし。服を脱いでは散らかし。とにかく、灯は散らかし上手だ」

「みんなが綺麗好きすぎるんだよ！」

「そんなことないだろ。私くらいで普通だと思っけど。でだ。朝ごはんか？」

「ん？灯が当番じゃなかったのか」

「違うよ。今日は美希」

「ああ。やっと決まったみたいだから」

そういえば、灯は敬語を使ってなかったな…。
変なところだけ、きちんとしてるやつだ。

「今日の朝ごはんは、胃に優しい元気の源、お粥だ。山菜風にしてみた」

「ほう」

「さあ、どうぞ召し上げれ」

美希に差し出された器には、なんとも豪快なかんじのするお粥が。山菜は丸々そのまま入ってるし、匙も投げ入れられたかのようだった。

「いただきます」 「いただきます」

「いただきます」

匙を取り、食べ始める。

ていうか、私のだけ金匙だな…。
別に良いんだけど…。

「んゝ、美味しいね！」

「ああ」

豪快な見た目とは裏腹に、とても手の込んだもので。
このお焦げは別々に作ったものだろうな。
お粥の食感を上手く補っている。

「美希は、料理が上手いな」

「そ、そうかな…」

「しかも、勉強熱心だね。きっと、一流の調理師さんになるよ、美希は」

「……………」

顔を赤くして俯く。

嬉しいのと、照れるのと。

あともう少し。

祐輔は、夢中になって食べていた。

「ねーね、あれ、なに？」

「あれはセトだ。ここに住み着いてる龍」

「これは？」

「特殊伝令用の笛だ。吹いてみるよ」

「うん」

笛を渡してやると、一所懸命に息を吹き込む。
でも、音は聴こえなくて。

「ならないよ？」

「ふふ、そうだな。なんでだろうな？」

「夏月のふきかたがわるいのかな」

「そうかもしれない。練習してみるといい」

「うん」

あれやこれや試してみるけど、やっぱり音は聴こえない。
次第に泣きそうな顔になってくるけど、それでも我慢強く試行を重
ねて。

「ちょっと貸してみろ」

「うう……」

「ルイムナ、ムルア」

「……？」

「これで鳴るようになったぞ。ほら、吹いてみる」

「……うん」

おそろおそろ息を吹き込む。

すると、さつきより低い音が響いた。

「なっ た！」

「鳴っ たな」

「ねーね、ねーね、さっきの、なに？」

「ルイムナ、ムルア。不思議な言葉だ」

「ルイムナ、ムルア！」

夏月は嬉しそうに、不思議な言葉を繰り返していた。
そんな夏月を見ながら、風華がこっそり話し掛けてくる。

「ねえ、どういう意味なの？ルイムナって月の神だったよね？」

「”夏の月”だ」

「夏の月…。そのまんまだよね」

「良いじゃないか、別に」

「良いけど？」

「けど、何なんだ」

「なんでもないよ」

ニシシと笑う風華の頭を軽く小突いてやる。

…良い考えだと思ったんだけどなあ。

「手が止まってるよ！」

「分かったから、耳元で大声を出さないでくれ…」

「口と手を同時に動かす！そらそら！」

「わわっ、水、飛んでるって！」

「それよりさあ、議会ってすぐく大変なんだよ？チビたちが乱入してくるから。セトは何のためにいるの？」

「少なくとも、子守のためじゃないだろ」

「セトだって、なんでここに來たのか分からないって言ってるんだ

しさ」

「そうだけどねえ。取り分が減るんだよ」

「…何の？」

「お茶菓子」

「何してるのよ！議会ってそんなだったの！？」

「ん？みんな、相手を食い干切らんばかりに殺気を放ちながら討論してると思ってた？」

「そこまでは思ってたないけど…。お茶会をしてるなんて思わないよ…」

「お茶会じゃないよ。議会。ちゃんと重要なことを真剣に話し合ってるんだから」

「要は、そこにあるものは大した問題ではないということだな」

「そういうこと」

「むう…」

「まあ、お喋りも良いけど、洗濯もしつかりな」

「あ…」

「ふふ、空まで手が止まってたら世話ないな」

「と、利家…」

利家は困ったような笑みを浮かべて、洗ったものを干しに行った。

「はあ…。じゃあ、頑張ろっか」

「ああ」「そうだね」

そういえば、桜たちは何をしてるんだろっ…なんて考えながら、洗濯物に取りかかった。

まだ体力が完全には回復しきってなかったのか、夏月はまた夢の中だった。

祐輔も、その横で眠っていて。

「望ね、さっきの、ちゃんと聴こえてたよ」

「そうか。偉いな、望は」

「えへへ」

頭を撫でると、気持ち良さそうに目を細めて、尻尾をパタパタと振る。

「むう……」

「あ、ごめんね」

望の尻尾を鼈甲の櫛で鋤いていた葛葉は不満そうな声を洩らす。慌てて望は元の位置に尻尾を戻して。

「ん」

「上手だね、葛葉は。とっても気持ち良いよ」

「えへへ」

そして、葛葉は望に抱きついて。

望は優しく葛葉の頭を撫でる。

「高い空の向こう 深い海の底

川は奏で 木々は唄う

気の向くまま 風の吹くまま

今日は何して遊ぼうか 今日もきつと楽しい日

さあ行こうよ 手を繋いで

さあ行こうよ みんなの待つ あの場所へ」

望は葛葉をそっと抱き上げ、夏月の横に寝かせる。

「寝ちゃった」

「望は唄が上手いんだな」

「えへへ」

「今の唄は何なんだ？」

「旅の唄だよ。美希お姉ちゃんに教えてもらったの」

「へえ。美希がなあ」

「うん」

頷き、こちらに擦り寄ってきて私の胡座の上に座る。
後ろから抱き締めてやると、そつと腕を掴んで。

「お母さん」

「どうした？」

「お母さんにも、唄、教えてほしい」

「そうだな…」

遥かに記憶を遡り。

お姉ちゃんに教わった、あの唄を。

「朝日が昇る 地平線の遥か向こう

セルオ ユクラウ

大きく伸びをしよう 尻尾の手入れは忘れずに

空と大地におはようと 月と星におやすみを

セルオ ユクラウ

今この場所に わたしはいるよ

今この場所で あなたと一緒に

歩き出そうか 手を繋ぎ

歩き出そうよ どこへでも

セルオ ユクラウ

さあ紡ぎ出そう　ただひとつだけの　物語を」

しばらく望は黙ったままで。

静かに目を瞑り、眠っているかのようにも見えた。

「セルオ、ユクラウ……」

「ああ。……望も紡いでくれるか？長い、長い、この物語を」

「うん。紡いでいく。ずっと、ずっと」

望は、また静かに目を閉じて、腕を掴む手に強い意志を加える。

私も、それに応えてギュツと抱き締める。

……決して切れることのない糸は、紡がれてゆく。
いつまでも、いつまでも。

「ふぁ…あふう…」

「あ、起きた」

「姉さま…」

「ん？」

「抱っこ…」

「ああ。ほら」

膝を叩くと、フラフラと近付いてきてギュッと抱き締める。
望はそれをジッと見ていて。

「ふふ、望も来るか？」

「うーん…」

「えっ！」

ハッとして後ろを振り返り、望の姿を確認すると慌てて離れる。
耳まで真っ赤にさせて。

「どうしたの？」

「……………」

「ふふ、恥ずかしいのか？」

「恥ずかしいの？」

「……………」

祐輔は固まったまま動かない。
その様子がとても面白くて。

「うう…」

「望もお姉ちゃんだ。甘えたいなら、甘えても良いんだぞ」

「お姉ちゃん…」

「ああ」

「お姉ちゃん」

「ん？どうしたの？」

「…むう」

「ほら、言いたいことがあるなら言えよ」

「うう…」

「……？」

「望は俺の…お姉ちゃん…？」

「うん。そうだよ」

「…抱っこ…してくれる？」

「うん。ほら、来なよ」

望が微笑んで手を広げると、祐輔はおそろおそろ近付いていく。そして、ギュッと抱き締めて。

「良い子良い子」

「お姉ちゃん…」

本当の姉弟みたいだった。

いや、本当の姉弟より姉弟らしいかもしれない。

…二人とも、元は同じような境遇だったから。

言わずとも分かりあえるところがあるんだろっな。

「お姉ちゃん」

「ん？」

「これからも、ときどき抱っこしてくれる？」

「うん。もちろんだよ」

「ありがとう…」

そう言つて、祐輔はそつと離れる。
今度は弟としてではなく、兄として。

「おにいちゃん…」

「おはよ、夏月。よく眠つてたな」

「うん…。夏月ね…。ゆめ、みたの…。おとうさんと…。おかあさんが、ニツコリわらつてるの…。よかつたねって…」

「夏月…」

「夏月、さみしくないよ…。おにいちゃんがいる。ねーねがいる。葛葉もいる…。みんないるから…。だから、さみしくないよ…」

祐輔は夏月の横に座つて、そつと抱き締める。

夏月の目には、いつの間にか涙が溜まつていて。

「さみしくない…。さみしくないのに…。さみしいよ…」

「夏月…」

「おとうさん、いつかえってくるの？おかあさん、いつかえってくるの？…さみしいよ…」

”ある”ものを感じて、”ない”ものが際立つ。

ここには家族はいるけど、親はいない。

夏月の哀しみは、どこまでも深くて。

…祐輔も同じ。

あの甘えは、”ない”ものを感じて、より強められたものだったんだ。

でも、私は姉さまでありお母さんではない。

その溝に、祐輔も同じ哀しみを見た。

「でも、哀しいのは夏月と祐輔だけじゃないんだよ」

「うつ…うつ…」「お姉ちゃん…？」

「二人が哀しいと、望も哀しい。葛葉も哀しい。お母さんも哀しい。みんな哀しい。望は…お母さんにはなれないけど…。でも、夏月と祐輔の家族なんだよ。一緒に泣いてあげられる。一緒に笑ってあげられる。ダメだよって怒ってあげられる。よく頑張ったねって褒めてあげられる。ギュッて抱き締めてあげられる。だから、哀しまないで。いつでも傍にいるから。いつまでも一緒だから」

「うええ…おねえちゃん…」「お姉ちゃん…」

望は優しく二人を抱き締めて。
温かい雫が、頬を伝っていた。

「ねーねー…」

「ほら、こっちに來い」

「うん…」

そしてそれを見ていた葛葉は、私に抱き付いて離れようとはしなかった。

…しかし、最近感じていた望の成長だが、まさかここまでとは思わなかった。

小さな望が、急に大きく見えて。

78（後書き）

子供っていうのは、いつの間にか大きくなってるものです。
望もどんどん大人になっていくんでしょね。

「んー、美希お姉ちゃんが言ってたのを真似しただけだよ」

「そうなのか？」

「うん」

望が急に大人びたかと思ったけど、そういうことだったのかな…。
じゃあ、美希は望と響に対して言ったのかな。

「ふあ…あふう…。美希、まだあ？」

「さっき聞いてから一分も経ってないぞ」

「お腹が空きすぎて、ボクのお腹と背中がくっついたらどうするのさ」

「内臓があるからくっつかない。安心しろ」

「むう…」

「桜。ちよつとは祐輔たちを見習え。何も言わないで待ってるじゃないか」

「寝てるだけだよ」

「えっ」

後ろを振り返る美希。

すると、確かに祐輔と夏月、それに加えて葛葉も、机に突っ伏して眠っていた。

…さっきまで寝てたのにな。
泣き疲れたんだろうか。

「はあ…。葛葉の涎を拭いてやれ…」
「うん」

桜は布巾を受け取ると、葛葉を起こさないようにそつと拭き取る。
その葛葉はというと、涎だけでなく口をモグモグさせたりもしてるけど、昼ごはんを食べる夢でも見てるんだろうか。

「それよりさあ、まだなの？」

「桜が聞く限り完成しない。それに、まだ昼には早いだろ。ちょうど昼ごはん時に出来るように作ってるから、出来るときにしか出来ない」

「ええ……。生煮えでも良いからさあ……」

「ダメだ。いい加減なものは食べさせられない」

「はあ……」

ため息をついて、ぐったり机に伏せる。
尻尾も力なく床に垂れて。

「他にやることはないのか？」

「あつたら待ってないよ……」

「まあ、そうだろうな」

「そういえば、ユカラはどうした？」

「風華のところ。響と光も一緒だよ」

「ふうん」

響と光は一緒にいるんだな。

うん、やっぱり仲良しが一番。

ユカラは、薬師修行だろうな。

「ルウエの服も四着くらい考えてるんだけど、どれが良いのか分かんないんだよね……」

「聞けばいいじゃないか」

「んー、そうだね……」

「ついでに葛葉と夏月のも作ってやれよ」

「葛葉は、衛士の服、すごく気に入ってるじゃない」

「外着も衛士の服じゃ窮屈だろ」

「そんなこと、考えてないんじゃないかなあ」

「望のも作って」

「うん。すつごく可愛いので、作ってあげるね」

「えへへ」

「望は袴が良いかなあ。裾を絞って動きやすくして…」

「くすぐつたいよ」

望の身体をあちこちペタペタ触って、どういった服を作るか吟味している。

どこからか巻き尺を取り出して、採寸も始めた。

「ヤーリエは明るい色が似合うよね…。ルウエは髪が短いから…。

葛葉は金が多いから赤か白が似合うかな…。夏月は割と大人しいみたいだから…」

「たくさん作らないとな」

「うん。でも、楽しいから。みんな、ボクを頼ってくれてるし。それ嬉しい」

「ふふふ。良いの、作ってやれよ」

「うん！もちろん！」

「ほら、出来たぞ」

「待ってました！」

さっきまでの真剣な表情はどこへやら。

桜にとっては、どんなことも食欲には敵わないらしい。

「いただきます！」

「熱いから気を付けろよ」

「あつつ！あつつい！」

「はあ…。ちゃんと注意したのに…」

「ふあ…。ごはん、まだ？」

「お、葛葉。ほら、出来てるぞ」

「わあ…。たべていい？」

「ああ」

「いただきます」

「熱いぞ。ふーふーしてやろうか？」

「うん！」

「あちち…。舌、火傷しちゃったよ…」

美希は私と望の分を入れると、葛葉を膝の上に乗せて食べさせ始めて。

…仲が良いのは喜ばしいことだが、少し甘やかしすぎじゃなからうか。

「ふーふー」

「葛葉。あーんして」

「あーん」

「美味しいか？」

「うん！」

「美希お姉ちゃん。これ、すっごく美味しいよ！」

「ふふ、そうか。それなら良かった。また作ってやるからな」

「えへへ」

「ほら。望もあーん」

「あーん」

…まあいいか。
楽しそうだし。
それよりだ。

「二人とも起きろ。昼ごはん、出来てるぞ」

「ん…むう…」「ふぁ…」

「ほら、ちゃんと起きて」

手が塞がっている美希に目で合図を送られ、代わりに昼ごはんを用意する。

匂いでどんどん目が覚めてきたようだ。

器を渡す頃には、完全に食べる体勢に入っていた。

「ほら。熱いから気を付けろよ」

「これ、全部食べていいのか？」

「ああ。遠慮なんてするなよ。夏月もな」

「いただきます！」「いただきます！」

「ちゃんと冷ましてから食べるよ」

「うん」

忠告をしっかりと聞き、多少がつついてはいるが二人ともちゃんと冷まして食べていた。

…結局、火傷をしたのは桜だけだったというわけだ。

「むう…。なんで、こつちを見てるのさ…」

「いや、別になんでもない」

「うう…。絶対、火傷してるのはボクだけだとか思ってるよ…」

「お、心の中が読めるのか」

「読めないよ！」

「そうか」

「はぁ…。舌がジンジンするよ…」

そう言って、舌を手団扇で扇いだりしている。

：風華に言つて、軟膏でも付けてもらった方が良^いんじやないだらうか。

「葛葉、あーん」

「あーん」

「私のこと、好きか？」

「うん、だいすき！」

「ふふふ。私も大好きだぞ」

うん、美希に付ける薬はなさそうだ。
これは、利家でもお手上げだろうな。

「北の言葉には文字がない。話し言葉だけなんだ」

「ふうん」

「基本的には、主語、術語、その他の順番なんだけど、内容が伝われば順番なんてあまり関係ない。ただ、神を表す言葉や神の名前だけは、絶対に最後に持ってくる」

「なんで？」

「最後の言葉というのは一番新しい言葉だ。つまり、最後に言葉を持ってくるというのは、その言葉の…なんていうのかな…。その言葉の霊力…を強く残しておくということだ」

「言霊信仰？」

「あー、まあ、そんなかんじだ」

「へえ」

「コトダマシンコウ？」

「言葉には霊力や神が宿っているという考え方だ。神関連の言葉を一番最後に持ってくるということは、神の恵みをあなたにも…という思いやりになるんだな」

「言葉は大切、なんだぞ」

「ふふ、そうだな」

「ちよつと、ルウエ。動かないでよ」

「う、うん…」

ルウエは本当に好奇心が強いな。

分からない言葉があれば、すぐに聞き返してくる。とても良いことだ。

「ねえ、お母さん。お話の続き」

「ん、よし」

「ヤーおねえちゃん、夏月にかわって」

「うん。どうぞ」

「…いちおう言うておくけど、オレは椅子じゃないからな」

「えへへ」

ヤーリエがどけると、すかさず夏月が座る。

頬に触れてやると、嬉しそうに甘噛みをして。

…鋭さが足りないな。

まだ全然生え変わってないんだろう。

「姉ちゃん。たとえばさ、神様を表す言葉って、どんなのがあるの？」

「ルイムナ、ヤンリオ、タルクメス…。とにかく、たくさんいる。全てのものに神が宿っているという考え方だからな」

「今のは何の神様なの？」

「ルイムナは月の神。使徒はルウエ。ヤンリオは日の神。使徒はヤーリエ。タルクメスは炎の神だな」

「火と炎って違うの？」

「日は太陽の日だ」

「ああ。それにしても、ルウエとヤーリエかあ」

「ヤンリオとルイムナは兄妹なんだよ。とっても仲が良いんだ」

「ふふ、ヤーリエとルウエみたいだね」

「「うん！」」

二人は元気良く頷く。

月と太陽、光と闇か。

仲がいいのは至極当然なのかもしれないな。

「お母さん、続き」

「ん？ああ、そうだな」

望は袖を握ってきて、催促をする。

”知りたい”という願望が強いんだな。

まだ甘噛みをしている夏月の頭を撫でながら、話し始める。

「じゃあ、北の言葉で一番多い言葉は何か。分かるか？」

「どういう意味？」

「ひとつの事柄に対して表す言葉がいくつもある言葉だ」

「笑う”って意味で、笑う、微笑む、嘲笑する…みたいな？」

「ああ」

「うーん…何だろ…」

「あつ！あたし、分かったかも！」

「何だ？」

「”寒い”！北だから！」

「うん。”寒い”もたしかに多いけど、それよりも多い言葉があるんだ」

「ええ…自信あったのに…」

「使徒の二人は分かるか？」

「え？自分のことか？」

「そうそう。ルィムナとヤンリオの使徒」

「うーん…」

「ぼくは、”暖かい”だと思うな」

「じゃあ、自分も！」

「なんだそりゃ…。まあ、”暖かい”も少なくとも多くもない」

「うう…」

「祐輔は？」

「”神様”…かな」

「ふふ、なるほど。でも、神様はたくさんいても、こっちの”神様”にあたる言葉は”カムナイル”しかないんだ」

「むう…」

「とんちみたいだけどな。それでも、着眼点は良かった。神様がたくさんいるって話を聞いて、すぐにそれを応用出来たから」

「えへへ」

「祐輔は偉いんだぞ」

「う、うん。ありがと、ルウエ」

ルウエに褒められて恥ずかしいのか嬉しいのか、自分の尻尾をいじっている。

…もしかして、ルウエのことが好きなのかな。

桜の色合わせから解放されて、横に寄り掛かるように座ってきたルウエをだいぶ意識しているようだった。

「夏月はどう思う？」

「んー。 ”かむ”」

「噛むのは良いけどな…」

「 ”かぞく” ！」

一際大きな声でそう言つと、ニツコリ笑って私の手をギュツと握った。

「正解だ、夏月。よく分かったな」

「やった〜！」

「 ”家族” ？なんで？」

「寒いから、それだけ家にいる時間も長いんだろうな。それに、一番身近なものだから、いろんな言葉が出来た」

「へえ〜」

「そう考えられるというだけだな」

「ん〜」

また指を噛み始める夏月。

もう涎でベトベトだが、まあ良いだろう。

ご褒美に頭を撫でてやると、嬉しそうに耳をパタパタさせて。

「美希、もつと」

「ダメだ。これ以上食べたなら夕飯が食べられないぞ」

「ううゝ…」

「良い子にしてたら、夕飯に美味しいものを作ってやるから」

「むう…」

「葛葉は良い子か？」

「うん」

「よしよし」

「えへへ」

美希が撫でると、葛葉は足をバタバタとさせて、ニッコリ笑う。

「美希と葛葉みたいな、とても仲の良い兄弟姉妹のことは、ヤンルナって言うんだ」

「”家族”の言葉のひとつだね」

「ああ。じゃあ、語源は分かるか？」

「語源かあ…」

「あつ！分かった！」

「はい、祐輔」

「ヤンリオとルイムナ！」

「ああ、ヤンルナかあ」

「正解だ。祐輔なら気付くと思ってたよ」

「えへへ」

「祐輔の言う通り、ヤンルナはヤンリオとルイムナから来てる。北で、神がいかに大切にされてるか分かるよな」

「ヤンルナも一番最後に持ってくるのか？」

「良いところに気が付いたな。ヤンルナは神の名前が語源ではある

けど、ヤンルナ自身は神に関係のある言葉ではない。だから、どこに持ってきてても良いんだ」

「へえ〜。じゃあさ…」

厨房での講義は続く。

言葉を学ぶということとは、文化を学ぶということだ。
みんな真剣に、私の話を聞いてくれた。

講義も終わって部屋に戻り、望やチビたちは昼寝。先に戻ってきていた響と光も一緒に眠っている。

桜は服を作り zu 自分の部屋へ。

そして、風華とユカラは薬師になるための勉強を。

「姉さま」

「どうした？」

「むう……」

「言わないと分からないぞ」

「あ、あのね……」

「うん」

「うう……」

顔を真つ赤にさせて俯く。

何が言いたいのかはだいたい分かるけど、祐輔が言うまで待つ。

「か、噛みたい……。俺も……」

「何を？」

「姉さまの手……」

「ああ。いいぞ」

「えへへ」

頭を撫でてやり、そつと頬に触れる。

すると、祐輔は私の手を掴んで甘噛みを始める。

夏月とは違って、だいぶ歯は生え変わっているようだ。

立派な牙もある。

それでも夏月のときと変わらない感触なのは、自分の歯の状態を分

かつて、ちゃんと加減してくれているからだろう。

「姉ちゃん、手、きちんと洗った？」

「ああ。大丈夫だ」

「それなら良いけど」

「大切な弟や妹の口に入るものだ。清潔にしておかまいとな」
「ん」

こうやって甘噛みをさせていると、昔を思い出す。

お母さんやお父さんの膝の上に座って、同じように甘噛みをさせてもらった。

あのときは、自分がこの立場になるとは思ってもみなかったけど。空いた手で祐輔の頭を優しく撫でると、可愛い笑顔を見せてくれた。

「ユカラ。甘噛みは、姉ちゃんみたいな狼、祐輔や夏月みたいな豹、葛葉みたいな狐とかの、永久歯が鋭くなる種族の子供によく見られるの」

「うん」

「カミカミでも良いんだけどな。でも、誰かの手というのが一番安心出来る。な、祐輔」

「うん！」

「カミカミって？」

「市場で売ってるの、見なかったか？昨日、桜のお菓子の中にもあったんだけど」

「あの茶色い骨みたいななの？」

「ああ。あれは、カミカミ草という植物の茎を加工したものだ」

「カミカミ草は通称。正式にはカミユナっていうの。カミユナの茎を束ねて、スクンとかを混ぜ込んで乾燥させたのがカミカミだよ」

「へえ」。風華、よく知ってるね」

「昔に兄ちゃんに教わって、自分で作って食べてたから」

「美味しいの？」

「カミカミ草自体に味はない。ただ、齒応えがものすごく強いんだ。オレも、口が寂しいときはよくカミカミ草を嚙んでいた」

「ふうん」

「まあ、狼や犬、虎なんかは良いかもしれないけど、人にとっては齒応えが強すぎるから、あまり食べられてないみたいだ」

「え…。じゃあ、風華とか兄ちゃんって何…」

「希有な人ということだな」

「そ、そんなことないもん！兄ちゃんはともかく…私は普通だもん！」

「犬千代は変なのか…」

「変！すごく変！」

そこまで力強く言うこともないと思うけど…。

「あと、お淑やかな女の子は、人前でカミカミをくわえるのは端ないとして嫌厭するものだ」

「風華、端ないんだ」

「は、端なくない！」

おねだりをするときの祐輔よりも顔を真っ赤にさせて。

「まあ、”お淑やかな”女の子は、”人前で”くわえるのを端ないと嫌厭するものだけど、カミカミは万人に愛されている。」

少し言葉遊びをしたつもりだったけど、予想外に面白い反応が見られた。

「姉さま」

「ん？」

「えへへ。なんでもない」

「そうか」

最後に付け加えるとしたら、甘噛みは親や兄、姉などの近しくて信頼出来る相手にしかやらないということ。

「ありがとな、祐輔」

「……？」

首を傾げる祐輔の顎を搔いてやると、ゴロゴロと喉を鳴らして。

…私も、甘噛みをしてもらえる姉でいられるように頑張らないとな。

空も赤くなってきた、そろそろ厨房から良い匂いがしてきた。

「狼の姉さま」

「どうした？」

「また来ても良い？」

「ああ。いつでも歓迎するぞ」

「えへへ。ありがと、なんだぞ」

「ヤーリエも。また来いよ」

「うん！」

二人の頭をガシガシと撫でてやると、ギュッと抱き付いてきた。

「へへっ。ルウエ、ヤーリエ、また遊ぼうぜ！」

「うん！」「また遊ぼう」

「今日は昼寝ばかりだったけどな」

「えへへ」

「さあ、みんな心配するから。真っ直ぐ帰るんだぞ」

「分かってるよ」「はあい」

そして、ルウエとヤーリエは帰っていった。

祐輔は二人が見えなくなるまでずっと手を振っていて。

「隊長、祐輔くん。夕飯、もうすぐ出来ますよ」

「ああ、分かった。じゃあ戻ろうか」

「うん…」

「…ルウエか？」

「ええっ!？」

「なんだ。一目惚れか？」

「うう…」

「恥ずかしがることはない。自然な感情なんだから」

「そうなの…？」

「ああ。オレだって同じだ」

「姉さまも…？」

「ああ」

「あ、紅葉。ちょうどよかった…」

確かに、ちょうどよかった。

利家の手を取り、祐輔の前に立たせる。

「こいつが、オレの夫だ」

「こ、こいつ…」

「兄さま。姉さまを始めて見たとき、どう思ったの？」

「なっ、何をいきなり…!」

「それはオレも聞きたい」

「あ、あの…」

真剣に見つめる祐輔に、少しどきまぎしているようだった。

…それだけかどうかは、私には分からないけどな。

「兄さま」

「か、可愛い女の子…だと…思いました…」

「なんで敬語なんだ」

「いや…」

「俺も一緒！」

「え、ええ？」

グツと握り拳を作って、確認するように頷く。

「夫…。俺も、ルウエの夫になれるかな？」

「ルウエに気持ち伝われれば、きつとな。ただし、焦りは禁物。女の子は複雑だからな」

「うん。分かった」

「なんだかよく分からないけど、頑張れよ」

「うん！」

「よし。じゃあ、戻ろうか」

「夕飯」

夕飯の歌を歌いながら、祐輔は中へ駆けていった。
さて…

「オレに始めて会ったとき、どう思ってたんだ？」

「いや…だから…」

「どう思ってたんだ？」

「……………」

「ん？」

「き、綺麗だと…」

「実は？」

「いや…これが本当だから…。銀色の髪が風に流れて、日も当たってたし、キラキラ輝いて綺麗だって…」

「……………」

「目の前で、誰かが今にも処刑されそうってときに、そんなことを思うのは全くの場違いだとは思ってたけどな……」

なんだか胸のところが熱くなった。

利家の顔は、夕日に照らされ赤く染まっでいて。

「まだまだ甘いな」

「なんで…？完璧な作戦だったのに…」

「完璧かどうかは、実践してみても初めて分かるということだ」

「むう…。撤退撤退！」

桜の号令で蜘蛛の子を散らすように逃げていくチビたち。

人海戦術といっても、烏合の衆では全く意味がない。

桜も望も、少し焦りすぎたようだな。

「ねーねー、これ、おいしいよ」

「ああ。そうだな」

「あつ！葛葉！こぼしてるって！」

「あう…」

「あーあ。着替え、私が取ってこようか？」

「ありがと、美希。でもいいよ。またどうせお風呂に入るし」

「じゃあ、葛葉。あとで一緒に風呂に入ろうな」

「うん！」

ベタベタになった服を拭いてもらいながら、葛葉はニッコリと笑う。
美希も、それに応えて。

「夏月、お兄ちゃんのもやるから、しっかり食べるんだぞ」
「うん！」

「祐輔もしっかり食べるんだ。ほら、僕のをあげるから」

「あ、兄さま」

「たくさん食べて、たくさん遊んで、たくさん寝る。それが祐輔たちの仕事だ。分かるな？」

「うん」

「よしよし。良い返事だ」

「えへへ」

利家に撫でられて、耳をパタパタさせる。

夏月はそれをジッと見ていることが出来なくて

「夏月も！夏月もなでて！」

「あー、分かった分かった。分かったから、ちゃんと座ってる」
「ん」

夏月は利家の膝の上に座り撫でてもらう。
そして、その手を掴んで甘噛みを始めた。

「あつ！こらっ！先に夕飯を食べろ！」

「むう……」

「拗ねるなよ。ほら、あーんして」

「……えへへ。あーん」

「……………」

「祐輔もやってほしいのか？」

「ええっ!？」

「ふふ、また今度な」

「う、うん……」

また顔を真っ赤にさせているけど、嬉しそうに頷いて。

「わわっ！ね、姉さま!？」

「ふふふ」

その様子がとても可愛かったので、ギュッと抱き締めた。

祐輔の、さらに火照った顔がまた可愛くて。

片付けの慌ただしさも収まり、そろそろ夜勤組が起きてくる頃。

「ん」

「夏月。甘噛みも良いけどな、むやみやたらにやるなよ」

「んー？」

「手というのは、いろんなバイ菌が付いてるんだ。汚い手を噛むと、お腹が痛くなるぞ」

「んー…」

「兄ちゃんみたいな汚い手は噛んじゃダメってこと」

「え…。にーに、きたないの？」

「ちゃんと綺麗に洗ってるから大丈夫だよ…」

「ねーねは？」

「オレは、いつでもピカピカだ」

「じゃあ、ねーねにする！」

利家から私の膝へ移り、手を握ってニツコリ笑う。
頭を撫でてやると、足をバタバタさせて。

「あ…だから、綺麗だって…」

「ん」

「はあ…」

「ボクがしてあげよつか？」

「桜の場合、”噛み付き”になりそうだから嫌だ」

「そ、そんなことないもん！」

「じゃあ、するか？」

「え、あ…うう…」

予想外の展開に耳を忙しく動かす。

利家は夏月の涎でベタベタになった手で桜の頬を突ついて。

「うがぁ！」

「ふん。甘いな」

桜が噛み付こうとしたところで、サッと手を引く。

カチンと歯が合わさる音だけが響いた。

「ただいま」

「あ、おかえり」

「美希……。としにいに噛み付いて……。」

「なんでそんなことをしないといけないんだ」

「ボクの仇討ち……。」

「じゃあ、やる義務はないな」

「なんでさ……。」

「美希、美希。おやつ」

「ああ、そうだったな。…望は？」

「部屋に戻った。響と光も一緒に」

「そうか……。まあ、一個ずつ残しておいてやろうか」

そう言つて、美希は懷から袋を取り出して、みんなの中心に置く。
中に入っていたのは

「カミカミだ。昼、夏月が甘噛みしてるのを見て、久しぶりに食べ
たくなつてな。灯に買ってきてもらったんだ」

「カミカミ」

「でも、端ないって聞いたんだけど……」

「ん？風華はお淑やかじゃないから大丈夫だ」

「なっ！」

「はい、お母さん」

「うん…。ありがと、葛葉…」

「ほら、祐輔と夏月も」

「うん」「ん」

私もひとつ。

懐かしい食感だった。

噛んだ歯を跳ね返すような、独特のあの食感。

「市販のも、意外と美味しいんだな」

「自分で作ったのしか食べてなかったのか？」

「ん？誰から聞いたんだ？」

「風華から。犬千代から作り方を教わったって」

「なるほど。昔の話だけだな。店で買う余裕もなかったし、ユール
オまで行かないといけなかったから。僕はスクンじゃなくて、ムツ
カイとデガナを磨り潰したものを入ってたんだけど。その方が甘味
を強く感じられる」

「ふうん…」

「へえ…。スクンは甘さは控えめだけど、少し旨味が出るんだな…。
勉強になる…」

…何かブツブツと言ってるけど、またカミカミを作る気になったん
だろうか。

新しい味の実験は嫌だけど、利家の作ったカミカミなら食べてみた
いな…。

「んー…」

「どうした？」

「ねーね、これ、かたい…」

「じゃあ、これと替えてやるよ」

まだまだ原型が残っている夏月のカミカミと、片方はだいぶ噛み潰して柔らかくなった自分のとを交換してやる。

祐輔はともかく、夏月にはこの固さはまだ少し早かったようだ。

「お母さん、葛葉も」

「はいはい」

「えへへ」

「私のもあげような」

「ありがと、美希！」

葛葉のものは夏月と同じくらいか、少し上といったところ。そして風華のは、意外と噛み潰されているみたいだった。

「風華は顎の力が強いんだな」

「そ、そんなことないよ……」

「んふふ」。風華は凶暴だもんね」

「…桜？」

「やゝ、噛み碎かれる」

ギロリと睨まれ、桜は茶化すように私の後ろに隠れる。

風華は怒髪天を衝くといったかんじで。

「おいしいね」

「うん」

「葛葉、あとでちゃんと歯を磨こうな」

「はみがき」

葛葉や夏月にとって、そんなことはお構い無しのようなった。ただ、祐輔だけはガタガタと震えていて。

「風華。夕飯が怯えてるぞ」

「えっ。あ、ごめんね、祐輔」

「う、うん…」

「やーいやーい」

「近所の悪ガキか、お前は」

「あたっ」

利家は桜に制裁を加えて。

祐輔も、風華に撫でてもらって落ち着いたようだ。

とりあえず、これで一件落着だな。

静かな寝息と虫の声。

ルイムナは、今夜も私たちを見守ってくれる。

「月の神”ルイムナ。”星の御子”カルア。”夜の帷”ヤツカル」

「暗記が得意なんだな」

「まあね。”日の神”ヤンリオ。”護りの樹”トルアト。”情熱の炎”タルクメス。”遥かな大地”クノ。”白銀の獣”カウユ。”生命の源”ルクエン」

「使徒は？」

「えっと…」

「ふふ、いいよ」

「それにしても、ホントたくさんいるよね」

「ああ。だから、北の人はあらゆるものを大切にする。神が宿っているからな」

「うん」

風華はそっと私の胸に額を当てて。

「私には、神様じゃないけど、大切な人がいる。大切なものがある」
「ああ」

「私は私が好き。私は私が好きなものが好きだから。私はみんなが好き。みんなは私が好きなみんなだから…」

風華の頭を優しく撫でると、額を擦り付けてくる。
そしてそれも次第に緩やかになっていつて。

「んう…」

「お休み、風華」

ちゃんと肩まで布団を掛けてやり、もう一度、風華を抱き締める。
…私は風華が好きだよ。

風華は私が好きな風華だから。

「朝が来て、昼も過ぎたら、夜が来る。夜が更けたら、また朝が来て」

「何を言ってるんだ。お前は」

「短歌調に今の気分を」

「憂鬱なのか？」

「え？なんで？」

「自分たちが何をどうしようとも、時間はひたすら過ぎていく。ああ、無常だなあ……とか詠んだんじゃないのか」

「違うよ。朝が来れば昼が来る。そしたら夜が来て、また朝が来る。でも、同じ日は二度と来ないんだ。だから、一日一日を大切にしていけないといけないんだなあ……って意味だよ」

「……深読みしすぎなんじゃないのか、それは」
「詠んだ人の本当の気持ちなんて、詠んだ人にしか分からないんだよ」

それでも、詠んだ人にしか分からないような解釈では短歌として成り立たないだろう。

短歌自体、なんのヒネリもないし。

「はあ、お腹空いたなあ」

「自分で何か作ればいいじゃないか」

「ええ……。当番じゃないのに……」

「お前は当番じゃなければ働かないのか」

「当番のときだけでも働く分、まだマシだよ」

「当番でも働かないやつがいるのか」

「お姉ちゃんは、当番すらないよね。毎日暇そうで良いなあ」

「……………」

「あ…ごめんね…」

「いや、暇なのは事実だ。それは否定しようがない」

「でも、お姉ちゃんはいつもみんなの支えになってくれてるよ。お姉ちゃんがいるから、みんな頑張れるんだ」

「うん。ありがとう」

「だから…暇で羨ましいなんて言って、ごめんね」

「ああ」

灯をそつと抱き締めてやると、パタパタと尻尾を振って応えてくれた。

…みんながそう思ってくれるのは嬉しい。

それでも、隊長として何かもつと出来ることがあるんじゃないのかな。

やはり、じっくり考える必要がありそうだ。

「す、すみません！寝坊しまして！」

「もう…遅いよ！」

「はい！今すぐ作りますんで！」

寝坊助の大助が、ようやく到着。

私のお腹の虫も鳴き出したようだ。

「ホント、寝坊助だよね」

「縁に起こしてくれるように頼んでるんですが…」

「自分で起きる訓練をしないとな」

「は、はい…」

「早くしてね」

「あ、はい。仕込みは昨日のうちにしておりますから」

「良い心掛けだけど、寝坊をしなかったらもつと良いのにな」

「…猛省します」

「ホントだよ」

灯は催促するように、わざと尻尾をバタバタと振って。
大助はそれに圧されて、作業の手をさらに速める。

…灯の尻尾を叩いて止めると、不機嫌そうに唸り始めた。

「子供だな、お前は」

「だって、お腹空いたんだもん」

「まったく…」

「お腹空いたな。朝ごはん。美味しい朝ごはん」

「…また子供が増えたぞ」

「ん？」

奇妙な歌を歌いながら厨房に入ってきたのは桜。

まだ出来てないってことが分かったら…

「あれ？まだなの？」

「はい…すみません…。寝坊しまして…」

「ええーっ！」

「贅沢を言っな。朝ごはんが食べられるだけ有難いと思え」

「むう…」

灯に加えて桜まで唸り始める。

こいつらは…。

「姉さま、おはよ」「ねーね、おはよ」

「おはよう。よく迷わず来れたな」

「うん。良い匂いがしたから」

「そうか。まだもうちょっと掛かるみたいだから、座って待ってる」
「うん」

祐輔は私の隣に、夏月は膝の上に座る。

夏月の頬を引っ張ってやると、嬉しそうに足をバタバタさせて。

「ん」

「夏月の頬つぺたは柔らかいな」

「えへへ」

「頬つぺたではお腹いっぱいにならないよ」

「誰もそんなこと言ってないだろ。それと、少しはこいつらを見習え。何も言わないで待ってるじゃないか」

「むう……」

一瞬、祐輔の方を見て、桜はそっぽを向いてしまった。

そして灯はというと、祐輔の尻尾で遊んでいる。

…どっちが歳上か歳下か分からないな。

「はい。出来ましたよ」

「はあ、やっと来たよ」

「割と早かったな」

「ほとんど温めるだけでしたから」

「いただきます」「いただきます」

「ねーね、ふーふーして」

「はいはい」

お粥を少なめにすくい、冷ましてから夏月の口へと運んでゆく。
夏月は大きく口を開けて、それを食べる。

「美味いか？」

「うん！」

「ふふ、そうか」

「ねーね、つぎ」

「夏月は甘えん坊だな」

「えへへ」

夏月を撫でていると、祐輔がジッとこちらを見ていて。

引き寄せて抱き締めると、ゴロゴロと喉を鳴らしていた。

窓から、外門の見張りと何かをして遊んでいるセトが見えた。

「んー」

「どうした？」

「ねーねーは、雨、すき？」

「そうだな…。好きなときもあるけど、嫌いなときもある」

「葛葉は好きだよ」

「へえ…。なんでだ？」

「雨はね、音がするの。タムタ、クルク、タムタ、クルク…って」

「ほう。タムタ、クルクか」

「うん。それでね、おはなしするの。タムタ、クルク、タムタ、クルク」

「雨はなんて言ってるんだ？」

「わかんない。でもね、おはなしするの」

「そうか。じゃあ、私もお話ししてみようかな」

「うん！」

タムタ、クルク…か。

知ってか知らずか、素晴らしい偶然だな。

タムタ、クルク、タムタ、クルク…と繰り返す葛葉の頭をそつと撫でる。

…手の動きに合わせて尻尾がゆっくりと動くのが面白いな。

「雨 雨 雨が降る

タムタ クルク タムタ クルク

お話し お話し 楽しいな

タムタ クルク タムタ クルク

ゆっくりお話ししようよ 今日雨

ゆっくりお話ししようよ タムタ クルク

雨 雨 今日は雨

「光は歌姫だな」

「えへへ。でも、響の方が、もっと、上手だよ」

「そ、そんなことないよ」

「ふふ、二人とも上手だよ。だから、もっと聴かせてほしいんだけどな」

「葛葉もききた〜い」

「うん!」「えへへ」

光の歌声は丸く優しく。

響の歌声は元気でハリがある。

そんな二人の歌声は互いに混ざりあつて。

二人は互いに信頼しあつて。

葛葉を膝に乗せて、窓から外を眺める。

雨は相変わらず降り続いていて、セトは見張り遊ぶのに飽きたのか毛繕いをしている。

「ん」

「布団に付けないようにしろよ」
「うん」

響と光は、この前の墨をどこからか持ってきて床に落書きをしている。

「あつ」

「ん？何か見えたか？」

「あそこ」

葛葉の指す方、街の少し向こうに。

「ふふ、面白いものを見つけたな」

「何？何が見えたの？」

「もうちょつと待ってれば分かる」

「ふうん」

さて、賑やかになりそうだな。

本隊が来るのは三ヶ月ぶりか。

前に出来なかったこと、今日出来ればいいな。

「あつ。おっきいとー！」

「え？どこに？」

「おそらのうえに、ちよつとだけ見えたの」

「ほう。もしかしたら不死鳥かもな」

「ふしちよう…」

「金色に輝くその姿を見た者は、その美しさに身を焦がす。生命果
てるときは紅蓮の炎に包まれ、その灰からはまた新しい生命が生ま
れる」

「むう…」

「はは、難しかったか？」

「うん…」

「とにかく、とても綺麗な鳥だ」

「あっ！」

葛葉は窓から飛び出さんばかりに身を乗り出し、空を見て。

…確かにいるな。

金色の火の粉を散らしながら優雅に飛ぶ姿。
響と光も見つけたらしい。

絵を描くのをやめて外を見ている。

「わあゝ、火の鳥だあゝ」「綺麗だね」

「キラキラしてるゝ」

「じゃあ、あとで見に行こうか」

「え？」「見れるの？」

「見たい！」

「よし。決まりだな」

不死鳥はまた雲の上へ隠れて。

…あいつも相変わらずだな。

はしゃぐ葛葉の頭に手を乗せ、空の向こうを見た。

馬車の数は次第に減っていき、最後の一台だけが外門を通って広場にやってきた。

セトは雨に濡れるのも構わず、珍しそうに馬車のあとを追っている。響と光、葛葉は、待ちきれずに部屋を飛び出していった。

そして、屋根縁に降り立つ影がひとつ。

「よう。久しぶりだな」

「お前にとつては、三ヶ月なんて取るに足りないほどだろ？」

「同じ一日は二度と来ない。取るに足りない日なんてものはない」

「ふふふ」

「ん？どうした」

「意味するところは微妙に違うけどな。灯も朝に同じことを言っていた」

「ほう。灯は、少しは部屋を片付けられるようになったのか。あれが三ヶ月で変わるとも思えんがな」

「ああ、全然だ。でも、新入りが来てな。灯の部屋に入ったから、今は綺麗だ」

「新入り？」

「美希って名前だな。元浪人、赤狼の優しい子だ」

「そうか。その子も大変だな。…ところで、噂に聞いたんだが、前王政が倒れたあとはどうだ。上手くいってるのか？」

「まだ分からないけどな。でも、きっと上手くいくよ」

「信頼してるのだな」

「ああ」

「それで、誰と結婚したのだ」

「ええっ!？」

「なんだ。本当だったのか」

「カマを掛けたのか!」

「紅葉は三ヶ月前と比較しても、随分変わっている。何かあったと

考えるのが自然だろう」

「……………」

「まあ、話したいときに話してくれればいい」

「…ああ」

そこで一度大きく羽ばたいて、火の粉を散らす。

「じゃあな。またあとで」

「あ、そうだ」

「ん？」

「子供たちに会ってやってくれ。さっき、飛んでるのを見てたんだ」

「どこにいるんだ？」

「さあな。城の中だろ」

「…まあ、善処しよう」

「うん。ありがとう」

「それじゃあ」

「またあとでな」

小さく頷くと、そのまま屋根縁の柵を軽く蹴って飛び立った。

羽ばたきながら大きく旋回して、雲の上へと上っていく。

…今すぐにでも会いにいつてほしかったんだけど。

「はあい、衛士長さん。元気だったあ？」

「お陰様でな」

「そう。よかったわあ」

「紅葉さま、お久しぶりです」「久しぶり」

「久しぶり」

続いて部屋に入ってきたのは、あの馬車に乗っていただろう三人。
全く変わりはないようで何よりだ。

「どうだ？ラズイン旅団は」

「ふふ、順調よお」

「クーア旅団は？」

「んー、なんのことかしらあ？」

「義賊なんて言ってもな、犯罪は犯罪だ。捕まれば重刑は免れない」
「要するに、捕まらなければいい話でしょ？」

「長之助。口が軽いと信用されないぞ」

「オイラは紅葉のことを信用してるから、口が軽くなるんだよ」

「オレがお前たちを捕まえないという保証はない」

「そうだけどね」

そう言つて、長之助は壁を背もたれにしてドカリと座り込む。
タルニアも、窓の縁、私の隣に座つてゆっくりと扇子を扇ぐ。

「クノもどこかに座れよ」

「いえ。それより、タルニアさま、長之助。客人と言えど、断りもなく座り込むのは紅葉さまに失礼かと」

「いいじゃない。私と紅葉姉さまの仲なんだから」

「親しき仲にも礼儀あり。気心の知れ合った友人同士であっても、常に礼儀を忘れない。人間として、当然の心構えです」

「相変わらず堅苦しいな、お前は」

立ち上がつてクノの方へ行く。

驚いたように少し後ろへ下がったところを逃がさないように、手を掴んで。

そのまま手を引いて窓に戻り、タルニアの横に無理矢理座らせる。

「い、紅葉さま！？」

「今日は無礼講だ。楽しんでいつてくれ」

「じ、しかし……！」

タルニアをチラチラ見ながら顔を真っ赤にさせる様子は、すごく面白くて。

ふふ、やっぱりクノはからかい甲斐があるな。

「クノ、つぎは？」

「はい。中を開いて、四角にするんです」

「んー？」

「こう…ですね」

「おお」

「裏もやってみてください」

「うん！」「はい」

クノがやるように折ってみる。

端が少し不揃いなものもあるけど、みんな上手くいったようだ。

「出来た！」「みて」

「ふふふ。上手く出来ましたね。じゃあ、次にいきましょうか」

「悪いな。相手をしてもらって」

「あ、いえ。こういうことは好きなので」

「子供のお世話といえはクノだよな」

「長之助お兄ちゃん、次」

「ほいほい」

盤面をチラリと見てパチリと駒を動かし、祐輔の顔を見る。

祐輔は一瞬考える風に眉間に皺を寄せたが、またすぐにパチリと次の手を打つ。

「良い手だけどねえ。そうすると、こう…だね」

「あっ！」

守りが薄くなったところへ鋭く香車を食い込ませた。

こうなると辛いな。

でも、両刃の剣でもあるんだがな。

「長之助は容赦ないな」

「オイラの辞書には手加減の二文字はないからね」

「手加減は三文字だ」

「あれ？」

「じゃあ、私は祐輔に加勢するとうかかな」

「ええ、そりゃないよ」

「よし、祐輔。勝ちに行くぞ」

「おおーっ！」

「まずはこの香車だ。取ればどうなる？」

「飛車が来る」

「そうだな。でも、放っておくと傷は広がる。さあ、どうする？」

「うーん……」

顎に手を当て、尻尾の先をユラユラと動かす。

祐輔の、考えるときの癖らしい。

そして、手持ちの駒を見て何か思い付いたらしい。

素早く手を伸ばし、次の手を打つ。

「あちゃ」

「さあ、長之助の番だな」

「んー、攻め込むのはちよつと早すぎたかなあ」

「よくこの段階で攻め込もうと考えたな」

「いやあ、祐輔ならいけるかなと思ってさあ。まさか紅葉が加勢するとは思わなかったから」

「いや、祐輔は自力でこの手を思い付いた。どのみち、こうなってただろうな」

「そっかあ。祐輔は賢いんだな」

「えへへ」

少し恥ずかしそうに頬を掻いて、耳をパタパタさせる。
まったく…可愛いやつだな。

「つる」

「はい、よく出来ました。どうですか？みんな、出来ましたか？」

「出来た」 「できたよ」

「私も出来たわあ」

「タ、タルニアさま！お帰りなさいませ」

「タルニアおねえちゃん、みて」

「ふふ、可愛い鶴が出来たわねえ」

「えへへ」

「ほら。クノお兄ちゃんに、もっと教えてもらいなさい」

「うん！」

「タルニアお姉ちゃん」

「えっと、望ちゃんだったかしらあ？」

「うん。あのね、タルニアお姉ちゃんも一緒にやる？」

「そうねえ。じゃあ、私もクノお兄ちゃんに教えてもらおうかしらあ」

「タ、タルニアさま…」

「クノ、つぎ」

「よろしくねえ」

「は、はい」

タルニアが加わったことで、クノはカチコチに緊張して。
…あんなので、よくタルニアと一緒に旅が出来るな。

「ありやう、まずいね」

「へへっ。どんなもんだい！」

「いやあ、祐輔は強いなあ。ホントに今日が初めて？」
「うん」

「へえ。良い将棋師になれるよ」

「そうだな。またオレが教えてやるから、しっかり勉強して強くなるうな」

「うん！」

頭を軽く叩いてやると、祐輔はそつと身体を預けてきた。
だから、ギュツと抱き締めて。

今日は一日中雨だろうな。

なぜか広場の真ん中でその四枚の翼をバタバタさせているセトを眺めながら、そんなことを考えてみる。

「んー…もっかい！な、頼むよ」

「へへっ、いいぜ。もっかいやる！」

「おかしいなあ…。なんで負けるのかなあ…」

「お前は勝負を焦りすぎるのだ。もう少し準備をしたらどうだ」
「自分ではちゃんとやってるつもりなんだけどなあ…」

「まだまだ足りないってことだろ」

「ふうむ…」

「ところで、タルニアとクノはどこへ行った」

「さあな。チビたちは広間だと思うけど」

「そうか」

「ねえ、鳥さん」

「ん？」

「鳥さんの名前は？」

「名前？名前か。名前など、とうの昔に忘れた」

「じゃあ、なんて呼べばいい？」

「まず、お前の名前から聞こうか」

「望だよ」

「望。望は火の属性が強いようだな」

「……？」

「内に燃える赤き炎。相手を想う気持ちは誰にも負けず、明るく全てを照らすだろう」

「……うん」

「望が私の名前を決めればよい。私は望を主と認めよう」

「……カイト」

「カイト。私の名前はカイトだ」

カイトは大きく数回羽ばたいて、火の粉を振り撒く。
そして、望を見て

「私はいつも望の傍にいる」

「望もカイトの傍にいるよ」

カイトは一度、目を瞑ってまた開ける。
そのまま上を向くと、空へと飛んでいった。

「何だっただんだ？」

「契約……」

「契約？何の？」

「えへへ、内緒だよ」

「そうか」

望を抱き上げて膝の上に乗せ、また窓の外を見る。
遠くの方に、カイトが火の粉を散らしながら飛んでいるのが見えた。
それが、何か望に向けたもののように思えて。
いや、実際に望に向けたものなんだろう。

「綺麗だな」

「うん」

「王手」

「あー、えーっと、うーん…」

静かな雨の日、長之助の唸り声だけが部屋に響いていた。

「お前は守りが薄すぎるんだ。攻めのことばかりで、全然守ってないじゃないか」

「攻撃は最大の防御なりって言うじゃん」

「いつまでも、勝てない戦法に固執するな」

「長之助さんは、将棋か何かをしてるんですか？」

「そうだよ。祐輔にどうしても勝てないんだけどね」

「へえ」。祐輔、強いんだね」

「えへへ」

風華に頭を撫でてもらって、ご機嫌さんのようだ。
まだ少し床に届かない足をブラブラさせている。

「ところで、タルニアさまはどこ行ったのかな」

「この中で長之助が知らなかったら誰が知ってるんだ」

「んー、誰だろ」

「考えるな。お前しかいないだろ」

「あれ？」

「タルニアさんは、市場に行ったよ。クノさんは広間にいるけど」

「へえ」。じゃあ、そろそろオイラも街に行かないとね」

「え？なんでですか？」

「薬の処方ね」

「えっ、長之助さんって薬師なんですか？」

「似たようなものだね。旅団だから、常には診てあげることが出来ないけど、全国いろんなところの薬を持ってきてあげられる。だからまあ、風華みたいな薬師の補助をするってかんじかな」

「あれ？私、薬師なんて言いましたっけ？」

「言わなくても分かるよ。薬の匂いがするからね」

「えっ、そんなに匂いますか…?」

「お姉ちゃんは、苦いお薬の匂いがするよ」

「え?俺は分からないけど…」

「望は狼だからな。匂いに敏感なんだ」

「長之助お兄ちゃんは?」

「長之助は…知らん」

「ええ、酷いなあ」

「でも、望はお姉ちゃんの匂いも長之助お兄ちゃんの匂いも好きだよ」

「へへっ。そう言われると照れるなあ」

「お薬は苦いけど、みんなを元気にしてくれるんだ」

「そうだね。望は、お薬、好き?」

「えへへ。嫌い」

「そうだよね。でも、それで良いんだよ。お薬がいらないなら、それが一番なんだから」

「うん!」

薬を飲まなくていいのなら、それが一番確かにそうだな。

健康であることは、何よりの財産だ。

「さあて。お腹いっぱいになったし、行ってくるよ」

「ああ」

「ごちそうさま。美味しかったよ」

「あ、お粗末さまでした」

「夕飯、楽しみにしてるよ」

「はい。腕によりを掛けますので」

「じゃあ、行つてきまゝす」

「行つてらっしゃい」

そして、長之助は厨房を出ていった。

「あ、そうそう」

「なんだ」

「…いや、なんでもない」

「はあ？」

「じゃあ、今度こそ行つてきまゝす」

「おい、何なんだ！」

結局分からなかった。

何なんだ、まったく…。

「私も戻るね。ユカラも戻ってるはずだし」

「ああ」

「望も行く」

「じゃあ、一緒に行こっか」

「姉さま、俺も行つていい？」

「なんで聞くんのだ。祐輔の好きなようにすればいいじゃないか」

「うん」

「姉ちゃんはどうするの？」

「ん？そうだな…。オレも行こっかな」

「じゃあ、みんな一緒だね」

「ああ」

でも、行く前にやることがひとつ。

箸を置いて、手を合わせる。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさま」 「ごちそうさまでした！」

「ごちそうさま」

「はい。お粗末さまでした」

席を立ち、大助に軽く手を振る。

そして、なんだか嬉しそうな祐輔の頭に手を置いて、厨房を出た。

夏月の甘噛みが続く。

生え変わりの時期で、歯が痒いんだろうか。

「後ろ向いてください」

「は、はい…」

「うーん…」

「……………」

クノは顔を真っ赤にさせて俯いている。

それに気付いているのかいないのか、風華は真剣な表情で。

「あ、あの…」

「喋らないで」

「……………」

「うん。異常はないみたいです」

「は、はい…。ありがとうございます…」

「あれ？熱、あるんですか？顔、赤いですよ」

「あ、え、いや、これは…」

そう言つて、そそくさと上着を着て、部屋の隅の方へ行つてしまつた。

風華は、何かなんだか分からないという風に首を傾げて。

…歳下の女の子に検査されることなんてなかったろうから、恥ずかしかったんだろうな。

可愛いやつだ。

「ねーね。さつきね、きれいなとりさんがいたの」

「ほう」

「それで、なまえはカイトなんだって」

「なるほどな」

望と祐輔は聞こえてない風で、葛葉たちと一所懸命に床に落書きを
していて。

用意した雑巾はすでに真っ黒で消せないから、落書きの領域はどん
どん広がってきている。

「あつ！雑巾、真っ黒じゃない！それと、落書きの範囲、広すぎる
！」

「だって…」

「雑巾、洗ってきなさい。あと、タライでも持ってきて、いつでも
洗えるように」

「あ、私が行きます」

「ああ、いいですよ」

「いえ。子供たちのためですから」

「…そうですか。ありがとうございます」

「お安い御用ですよ」

クノはそう言うと、雑巾を持って部屋を出ていった。

「クノさん、顔が赤かったみたいだったけど、大丈夫かな」

「大丈夫だろ」

「そう？」

「ああ。あれは、風華のことが好きなのだから」

「ええっ！？」

風華の顔がみるみる赤くなっていく。
…思ったより面白いな。

「嘘だよ」

「う、嘘!？」

「ああ。それにしても、風華は面白い反応をするな」

「もう!姉ちゃん!」

「ふふふ。…クノには想い人がいるんだ」

「え?誰?」

「タルニアだよ」

「へえ。タルニアさん」

「見てたら分かるけどな」

「ふふ、確かに」

「あの…。よく考えたら水道の場所を知らなかったです…」

「わわっ!クノさん!？」

「……?どうしたんですか?」

「あはは、なんでもないですよ!水道ですね!私も一緒に行きます
!」

「は、はあ…」

風華は慌ててクノを押して部屋を出ていった。

クノもそうだが、風華も分かりやすい性格をしてるよな。

まあ、それがあの二人の良いところでもあるんだけど。

市場の中を抜けて、こちらに向かってくる馬車が一台。
タルニアの馬車だろうか。

…それにしては、少し大きい気もするが。
ていうか、タルニアの馬車は既に繋がれてるままだな。

「クノ。あの馬車は何だ？」

「ん？ああ…あれは、輸送車ですね」

「輸送車？」

「はい。最近始めたんですが、街から街へ私たちが安全に送り届けるんです。あれは分隊の輸送車ですから、ルクレイ内のどこから来た人つてことになりますね」

「ふうん。クノは知らないのか？」

「誰でしょうね」

誰だろうか。

何か少し笑ってるし、誰が来るかクノは知ってるんだろう。
セトがまた物珍しそうに馬車のあとから付いていつている。

「まあ、それは良いとして、クーア旅団は実際のところ、どうなんだ」

「クノさんとクーア旅団つて、何か関係あるの？」

「関係あるも何も、ラズイン旅団の裏の顔はクーア旅団だ」

「ふうん…」

「なんだ、あまり驚かないんだな」

「クノさんが悪役なら、義賊ってかんじがするから」

「ギゾクってなに？」

「悪いことをする良い人のことだよ」

「……？」

「悪いことは悪いことだ。確かに法で裁かれない悪人もいるだろうが、だからといって、義賊の存在を認めるわけにはいかない」

「そうかもしれないけどさあ」

「あ、あの……。話が跳躍してるように思うんですが……。私たちライズイン旅団は、クーア旅団と何の関係もありません」

「隠す必要はない。自分たちの信念に従って、正しいと思うことをやっているのだろうか？」

「わっ、びっくりした」

突然、会話に入り込んでくるカイト。

医療室の屋根縁に降り立つと、少し身体を震わせて火の粉と水滴を飛ばす。

「ふむ？水か。かなり強いな」

「水……？」

「娘、名前は？」

「風華です……」

「風華。良い名だ」

「カイト。何か用事か？」

「ん？ああ、望を知らないか？」

「広間に行ったけど。なんでだ？」

「ちよつと話があつてな。それは少し置いておいて。風華。いいか？」

「あ、はい……。なんでしょうか……」

「……というか、なぜそんなに怯えているのだ」

「普通、人間の言葉を喋る鳥と遭遇したら怯えるものだ」

「む？そうなのか？」

「え……すみません……」

「謝ることはない。私の不注意だった。話はまた今度に……」

「あ、いえ…。大丈夫です…。ちょっとびっくりしたただけなんで…」
「そうか。では、手短に済ますとしよう」

少しの間、カイトは考えるように目を瞑る。
そして、ゆっくりと目を開けた。

「全ての源である水。全てはここから始まり、ここに終わる。風華は、その流れの根源となれる力を持っている。常に流れ続け、いつの日か大海原となってくれるか？」

「…はい」

「ありがとう。…では、私は望を探してくる」

また翼を広げ、カイトは空へと羽ばたいていった。

…ひとところに落ち着くことはないのだろうか。

今日来てからジツとしていたときがないな。

少なくとも、私の前では。

「はあ…。緊張した…」

「なんでだよ」

「だって…うーん…。なんか緊張した」

「なんだそりゃ」

「カイトさまは貫禄がありますからね。だからなのかもしれません」

「夏月はどうだった？」

「ん」

「緊張しなかったって言ってるぞ」

「何も言っていないでしょ…」

「そうか？」

夏月はカイトが来たことに気付いていたのだろうか。
とにかく、夢中で私の手を噛んでいるけど…。

空いてる手で尻尾を触ると、遊ぶように避けたり絡ませたりする。
完全に無我夢中というわけではなさそうだ。

「それにしても、夏月の尻尾の毛はフワフワだな」

「姉ちゃんもフワフワじゃない」

「んー？そうか？」

「うん」

自分ではそうは思わないけどな…。

でも、夏月の綿のような毛は本当に柔らかくて気持ち良い。

…こっちはどうだろう。

「うわっ！？」

「ふむ…。クノのは、また違った柔らかさがあるな…」

「い、紅葉さま！は、離してください！」

「イヤだ。クノの尻尾は私のものだ」

「紅葉さま！？」

「そういや、クノさんの尻尾ってクリンと巻いてて可愛いですね」

「風華さま！」

「何か手入れをしてるのか？」

「ま、毎朝、櫛を入れてるくらいです…」

「ふうん」

クノは、また顔を真っ赤にさせて。

ホントに、いちいち反応が面白いな。

タルニアがしょっちゅうクノにちょっかいを出す理由が見えた気がする。

「ねーね、夏月のしっぽもさわって」

「よしよし。任せとけ」

「えへへ」

「じゃあ、私はクノさんだね」

「ふ、風華さま!？」

「いいなあ。私も、こんなクリンクリンの可愛い尻尾が欲しかった」

「風華は今のままで充分可愛いじゃないか」

「そ、そんなことないよ……」

「ねーねのしっぽ、さわらせて」

「ああ。どうぞ」

「ん」

夏月は、私の尻尾をギュッと抱き締めたり、毛繕いの真似事をしてみたりする。

ときどきバサリと大きく動かしてやると、楽しそうにはしゃいで。

クノは恥ずかしそうに俯いて、風華は遠慮なく触り倒して。

この絵は、なんだか面白い気がする。

「も、もうやめてください!」

「ええ。クノさんの尻尾、すごく気持ち良いのに」

「風華」

「はあい…」

渋々といったかんじでクノの尻尾を解放する風華。

クノはどつと疲れたようで、どこことなくグッタリしていて。

「隊長」

「なんだ、灯。またそんな口調で」

「隊長に客人です」

「客人？」

「こんにちは…」

灯に連れられて入ってきたのは、見覚えのない女の子だった。

肌は真っ白で、分厚そうな羽織を着込んでいる。

身体が弱いのだろうか。

「あ、あの…」

「紅葉さま。この子は柚香という名前で、ヤマトから来たんです」

「ほう。ヤマト」

「遠いところから来たんだね」

「えっと…」

「昔から病気がちだったんですが、最近は調子も良いみたいなので連れてきたんです」

「へえ。ところで、クノさんと柚香ちゃんって兄妹なんですか？」

「あ、はい…。血は繋がってないんですけど、クノお兄ちゃんは私

のお兄ちゃんです…」

「ふうん」

「それで、いつまでそこに立ってるつもりなんだ？ 灯も入ってこいよ」

「うん。 そうだね」

いつもの調子に戻った灯は、少し強引に柚香の手を引いて中に入ってくる。

柚香はおどした様子で。

「あれ？ 夏月、寝ちゃってるよ」

「ああ。 ちょうど昼寝時だからな」

「広間も大昼寝会になってるよ。 美希とユカラと一緒に見てたんだけどね」

「なんでお前は抜け出てきたんだ」

「だって、二人とも寝ちゃって誰とも喋られなくなったもん。 それに、なんか新しい馬車が来てるのが見えたり」

そう言つて柚香を私の隣に座らせると、自分は風華の横に座る。 無防備に尻尾をパタリ、パタリと振るものだから、風華の目に止まつて。

「ひゃあっ！？」

「わあゝ。 灯の尻尾つてすごくモフモフしてるね」

「ふ、風華！」

「んゝ。 クノさんのの良いけど、灯のの良いなあ」

「あの… 風華お姉ちゃんは何をしてるんですか…？」

「灯の尻尾を触ってるな」

「は、はあ…。 尻尾、ですか…」

「柚香の尻尾は艶があるな。 髪の毛も。 手入れしてるのか？」

「普段はしてないんですが、今この旅の間は毎朝クノお兄ちゃんが髪と尻尾に櫛を入れて、香油を付けてくれてるんです」

「ほう。なるほど。柚香からしてる良い匂いは香油だったのか」

「あ…鼻が良いんですね」

「まあな。狼だから」

「クノお兄ちゃんに聞いてた通りです」

「何が？」

「紅葉お姉ちゃんは、優しくて格好良い狼さんだって」

「クノがそんなことを言ってたのか？」

「はい」

クノの意図するところはよく分からないけど、褒めてくれるのなら嬉しいことだ。

風華と灯に、もみくちやにされてる様子を感じながら、柚香はそつと笑う。

「クノお兄ちゃん、タルニアお姉ちゃんのことが好きだって言っていました」

「そうだろうな」

「でも、紅葉お姉ちゃんのこと好きみたいですよ。お姉ちゃんとして」

「ふうん」

「いつも、うちに来たときはタルニアお姉ちゃんか紅葉お姉ちゃんの話ばかりです。好きなら好きって言えればいいのにね」

「なかなかそう簡単にいかないこともあるんだ。あんな堅物は特にな」

「へえ」

「はあ…はあ…。も、もう勘弁してください…」

尻尾を庇いながら、こちらへ命からがら逃げてきたクノは、肩で息

をしながら。

ちょうど手のところにあつたので、ギュッと尻尾の根元を握ってみると、クノの顔はみるみる赤くなっていく。

「い、紅葉さま!？」

「なんだ。お前の尻尾には顔を赤くする機能が付いているのか」

「離してください!」

「えへへ。クノお兄ちゃんは、昔から尻尾が弱いよね」

「ゆ、柚香…」

「いいなあ、クノは。そんなにフカフカで」

「灯の毛も良いかんじじゃない」

「私は毛が太いからダメだよ。クノのは細いのがいっぱい生えてるから、フカフカで気持ち良いんだよ。それに、きっちり手入れもしてあるみたいだし」

「巻き尾なのが良いよね」

「あー、うん。それもあるね。巻いてるから、余計にフカフカモフモフに見えるんだよ」

「尻尾談義もいいけど、ほどほどにしとけよ」

「はあい」

「だとさ、クノ」

「…………。え？あ、はい」

「ふふふ。クノお兄ちゃん、ちゃんと聞いてたの？」

「あ、いや…。何…？」

「やっぱりクノさんの尻尾って可愛いよね」

「うん。このなんとも言えない絶妙な曲線が良いよね」

「お前たちのせいでボロボロになってるけどな」

「ふう…」

クノはもう話も耳に入らないようで、ため息をつきながら尻尾を手櫛で整えている。

…ホントに几帳面だな。

「柚香の尻尾は細いよね。なんか良い匂いするし」

「クノお兄ちゃんが香油を付けてくれるんです」

「へえ。優しいお兄ちゃんなんだね。私の兄ちゃんは…あんまり何もしてくれないかな。でも、いつも傍にいてくれるんだ」

「うん」

いつも傍にいてくれる。

もしかしたら、それが一番なのかもしれないな。

「もうすぐ夕飯ですよ」

「あ、はい」

「灯さんも、食べるのはすっぱかさないでくださいね」

「お前、準備当番だったのか」

「あれ？どうだったかなあ？」

「……………」

「ははは。まあいいじゃない。次に失敗しなかったら良いんだよ」

「そう言って、毎回すっぱかすんですよね」

「もう！余計なこと、言わないでよ！」

「灯？あとでゆっくり話そうか」

「あ、あはは…。遠慮しますっ！」

そう言って、灯は部屋を飛び出していった。

まったく…。

みっちりと説教する必要があるようだな。

「じゃあ、私たちも行こっか」

「ああ。先に行ってくれ。夏月を起こしていくから」

「うん、分かった。じゃあ、クノさん、柚香ちゃん、行こ？」

「あ、私は紅葉お姉ちゃんたちと一緒に行って良いですか？」

「うん、もちろん」

「ちゃんと柚香の分は確保しておけよ」

「分かってるって。任せなさい」

「では、お先に」

「ああ」

風華はクノの手をギュッと握ると、こちらに手を振って部屋を出て

いった。

相変わらずクノは顔を真っ赤にさせていて。

…ウブなんだな、クノは。
さて

「…おい、夏月。夕飯だぞ」

「んう…」

「ほら。起きろ」

「んー…」

夏月は耳を少しパタパタさせて、うつすら目を開ける。
尻尾をユラリ、ユラリと揺らして、なんだかご機嫌さんのようだった。

「えへへ…」

「どうしたんだ？」

「ゆめ…」

「夢を見たのか？」

「うん…」

「どんな夢だったんだ？」

「うーん…。わかんない…。でも、たのしいゆめ…」

「そうか」

そつと夏月の額に手をあてると、ゴロゴロと喉を鳴らして。

「さあ、夕飯だぞ」

「うん」

グーッと大きく伸びをすると、その反動で身体を起こす。
そして、大きな欠伸をすると立ち上がって。

「ねーね、早く行こ！」
「ああ」

柚香の手を引いて立たせてやる。

夏月は柚香を見てニツコリ笑うと、その手を取って

「おねえちゃん、だれ？」

うん、誰か分からない人の手握ってそんなことを聞けるのは、あの意味才能だと思う。

でも、ここまで無防備なのは考えものだ。

客人在るからか、みんな今日は妙に大人しかった。

「へえ、あの子とねえ」

「カイトだよ」

「望ちゃんはカイトに相当気に入られたみたいねえ」

「……？」

「ふふふ。まあ、本当の契約はもうちょっと体力が付いてからねえ」

「うん。カイトもそう言ってた」

「でも、珍しいわねえ。あの子から引き込むなんて」

「そうなのか？」

「ええ。基本的に、人との交わりは避けてるみたいだから」

「そうは見えないけどな」

「カイトはそうしてるつもりなのよ」

あれで人を避けてるつもりなのか。

ていうか、あの大きさ、容姿からして、人目を避けるのは不可能に

近いだろう。

それこそ、雲の上を飛んだり、どこか山奥にでも隠れたりしない限りは。

「さあて。クノ」

「はい」

「ん？」

クノが合図をすると、ラズイン旅団員は全員立ち上がった。どこに隠していたのか、楽器も持っている。

「本日は、この盛大な晩餐会にお招きいただき、感謝してもしきれませんわあ」

「お礼と言ってはなんですが、我がラズイン楽団の演奏をお聞きください」

タルニアが素早く指揮棒を挙げると、一斉に構えて。

クノは横笛、長之助は太鼓。

他にも豎琴や木琴、尺八なんかもいる

そして、シンと静まりかえったときを見計らって、タルニアは指揮棒を操り始める。

最初はクノたち横笛から入って。

どこか少し寂しげに歩くような曲調は、特に流れるような旋律に強調されている。

と、寂しく一人で歩いてゆく旅人に一迅の風が吹いた。

優しい風は、旅人の背中をそつと押す。

続けて動物たちが集まってくる。

鳥の鳴き声、頼もしい犬たち、ズシリズシリと熊まで一緒に。

いつの間にか曲調は明るいものへと変わっていき、旅人の足取りも軽くなる。

空を仰げば白い雲が。

遙か遠くの地平線は確かにこの道に繋がっていて。

太陽が昇り、旅人を勇気付ける。

月が昇り、旅人を優しく見守る。

うん。

どんなときでも、自分は一人じゃない。

真っ直ぐ前に進めば、きっとあの虹を越えられる。

旅は、まだ始まったばかりなんだ。

優しい子守唄が部屋に響く。

子供たちは、もう夢の中。

「すごかったですね」

「ええ。自慢の楽団です」

「ラズイン旅団は、みんな楽器の心得があるんですか？」

「そうですね。楽器に触れる機会が多いです」

「へえ。いいなあ」

「ふふふ。簡単なので、風華さまもやってみますか？」

「はい。また明日に」

「また明日」

そう言つて、クノはまた笛を吹き始めた。

そつと撫でるような旋律は、眠気を誘うには充分だった。

「お休みなさいませ」

重たくなる瞼の向こう、クノが優しく微笑むのが見えた。

「アン！」

「食べちゃダメなんだぞ」

「クウ……」

「こら！舐めないの！」

「……なんだ、こいつは」

顔を舐めている子狐をつまみ上げ、目の前まで持ってくる。
金色に輝くその毛並は、葛葉を思い起こさせた。

「ウウ……」

「あ……狼の姉さま……」

「ん？ルウエか。どうしたんだ。こんな朝早くに」

「昨日、雨が降ってて来れなかったから、今日は早く来ようって思ってたの」

「で、こいつは？」

「クーアなんだぞ」

「”黄金の魂”クーアか」

「うん」

クーアを投げて寄越し、布団から抜け出す。

空気はまだ冷たく、本当にまだ朝が明けたばかりなんだということが分かる。

「ふぁ……あふう……」

「まだ眠たいんだろ。もう少し寝るといい」

「眠くないもん……」

「意地を張るところじゃないだろ。ほら、こっちに来い」

「むう…」

クーアを抱き締めたままフラフラと布団の中に入る。
そして、すぐに寝息を立て始めて。

「ルウエ、寝ちゃったの？」

「ああ。ヤーリエも眠るといい」

「うん…」

ヤーリエはルウエの隣に入って、ニツコリと笑う。

「ルウエ、今日は絶対にお城に行くー！って、すごく張り切ってたの」

「そうか」

「うん…。私も…」

「…そうか」

頭をそつと撫でてやると、もう一度ニツコリ微笑んで眠ってしまった。

…じゃあ、私も寝るか。

太陽の光が射し込む。

もうそろそろ風華も起きたようだ。

「おはよう、風華」

「あ、おはよ。この子たち、いつ来たの？」

「朝のもつと早い時間にな」

「えっ。眠たかったんじゃないの？」

「そうだな。だから寝てる」

「ああ、うん。そうだよね」

風華は二人の寝顔を見て、大きく伸びをする。

「それにしても、何か急ぎの用事でもあったのかな」

「急ぎの用事なら、ルウエはともかくヤーリエは寝る前に伝えるだろ」

「んー。そうかも」

「んう」

「ありやりや。起こしちゃったか」

「姉さま」

「おはよ、ルウエ」

「おはよ」

ルウエは布団の中でしばらくモゾモゾすると、どうやら湯タンポ代わりに抱いてたらしい白い狼を引き出してきた。

「明日香…じゃないよね」

「どこから連れてきたんだ」

「んー」

「ダメだね。寝惚けてる」

「おい、お前はどこから来たんだ」

「ワウ！」

「……？」

「……」

「どうも分からんな。じゃあ、お前は護獣なのか」

「ワウ！」

「んー…。ルウエ、うるさい…」

「ルウエ？お前もルウエなのか？」

「ワウ」

「ややこしいな…」

「なんて言ってるの？」

「こいつは、ルイムナの使徒であるルウエなんだと」

「へえ…。って、ルイムナは実在するの？」

「実在”した”というのが一般的な見方だけだな。でも、もしかしたら、伝承の英雄は本当の神だったのかもしれない、という考えもあるくらいだから…」

「じゃあ、この子も本物の使徒かもしれないってこと？」

「その可能性は捨てきれないな」

「ワウ！」

ルイムナの使徒か…。

いつかは北に行って護獣を授かってこようと思っていたが、こんな近くに本物かもしれない子がいたとは思いもしなかった。

…そういえば、さっきの狐はどこに行ったんだろう。

と、また布団がモゾモゾ動いて、金色の毛玉が転がり出てきた。

「ハツ、ハツ…」

「なんだ。ルウエの下敷きにでもなってたのか」

「アン」

「そうか。災難だったな」

「何？この子も？」

「クーアだそうだ」

「クーア…クーア…。あ、カウユの使徒だっけ？」

「ああ」

「へえ…。こんな可愛い子なんだ」

「ワウ」

「あれ？ルウエ、焼きもち焼いてるの？ふふ、ルウエも可愛いよ」

風華は二人を優しく撫でて。

ホント、普通の子狼と子狐にしか見えないけど。
でも、ルウエが少し発光しているあたり、確かに普通の子狼とは違
うのかもしれない。

「お母さん…。おなかすいた…」

「あ。葛葉、おはよ」

「うん…おはよ…。ふぁ…」

「よく眠れた？」

「えへへ…。いっぱいねた…」

「良かったね」

「うん…」

「じゃあ、朝ごはん、食べに行こっか」

「うん」

「先に行っておいてくれ。オレはこいつらを起こしてから行くよ」

「あ、うん。よろしくね」

「ああ」

そして、風華と葛葉を部屋の外まで見送って。
…狼ルウエとクーアまで付いていったけど、まあいいか。
さてと

「朝だぞ。起きろ。起床、起床」

「んー…」

「響、光。起きろ」

「むう…」「ふぁ…」

「望、柚香」

「おはよ」「おはよ、紅葉お姉ちゃん」

「おはよう。ほら、ルウエとヤーリエも」

「あと五分…」

「ダメだ」

「じゃあ、十分なんだぞ……」

「増えてるじゃないか。祐輔と夏月も起きろ」

「んーっ……はあゝ。よく寝た」………」

「夏月、起きろ。ルウエも！」

また眠り始めたルウエと夏月の布団を剥ぎ取り、外気に触れさせる。冷たい空気にガタガタ震える二人に羽織を着せてやり、布団をある程度整え、光の髪を手櫛で鋤き、ヤーリエの服をしっかりと正して。

「よし。朝ごはんを食べに行こう」

「朝ごはん！」「行こー」「お腹空いた〜」

いざ厨房へ。

いつになく大人数で。

美味しい朝ごはんになりそうだ。

「ん」

「どうしたんだ？」

「えへへ。狼の姉さまは、やっぱり良い匂いがするんだぞ」
「ん？そんなに匂うか？」

袖や尻尾など、自分で嗅いでみても分からない。

自分の匂いは自分では分からないっていうのは本当なのか？

「いいにおい」

「いろはねえ、そんなに匂うんだ」

「桜は分かるか？」

「ん」。あ、ホントだ。良い匂い

「ええ」。ちゃんと風呂にも入ってるのになあ

「良い匂いなんだからいいじゃない。臭いならまだしも」

「臭いって」

「ホント、良い匂い。何か香油とか付けてたりしないの？」

「全然」

ちようどいい場所に来たから、桜の鼻をつまんでみる。

すると、桜はムスツとした顔をして。

「むう」。いいじゃん、匂わせてよ

「一日十秒までだ」

「ケチ」

「褒められても、身体の匂いを嗅がれるのは嫌なものだ」

「え？そうなのか？」

「ルウエは気にしないか？」

「うん」

「じゃあ、ルウエの匂いは…」

「夏月も」

「おい…」

桜はルウエの首筋に近付いていき匂いを嗅ぐ。

「ん？なんか、すごく獣臭い」

「獣？」

「ルウエとクーアの匂いなんだぞ」

「……？ルウエ？」

「あそこの狼がルウエ、この狐がクーアだ」

足下にいたクーアをつまみ上げて桜に渡す。

クーアは桜に抱えられて、しばらくの間バタバタと暴れていたが、やがて観念したように静かになった。

「クーアはいいけどさ、ルウエが二人もいるなんてややこしいよね」

「そうかな？」

「お前は呼び分ける必要がないからな。でも、ルウエって呼んでもどっちが呼ばれてるのか分からなかったら不便じゃないか？」

「んー…」

「あ、そうだ。ルウエ壱号とルウエ貳号は？」

「そんなの、ヤ」

「オレは、ルウエと狼ルウエって思ってたけど」

「それならいいよ」

「ええ…。なんでボクのはダメなのさ…」

「可愛くない」

「夏月はね、オオカミさんとキツネさんに、なまえをつけてあげたらしいとおもふの」

「え？ルウエとクーアが名前なんじゃないの？」

「ルウエはルイムナの遣いとしての名前で、他に名前を貰うこともあるって大和が言ってた」

「大和って？」

「ルウエのお兄ちゃん」

「ルウエにお兄ちゃんがいるの？」

「ルウエやクーアというのは、いわば種族の名前であって個人を指すものではない」

「びつくりした…。いきなり出てこないでよ…」

桜の後ろ、私の正面にカイトが。

ただ、いきなり出てきたわけではなく、ずいぶん前からいたんだけど。

「若い聖獣には普通は名前がないから、ルウエだとかクーアだとか、そういう名前で呼ぶのだ。私は、我が主から昨日貰ったばかりだが」

「ふうん」

「カイト～。あつたかい」

「む？たしか、夏月だったか」

「うん！」

「私で暖を取るのはいいが、火の粉には気を付けるのだぞ。夏月に火傷をさせるのは忍びない。私も努力するが、夏月自身も気を付けてくれ」

「うん。わかった」

「ところで、カイトってなんで人間の言葉を話せるの？そりゃさ、ボクだってセトとか明日香と話すこともあるけど。でも、人間の言葉は使わないし」

「人間と意志疎通をしようと思うなら、人間の言葉を使うのが一番手っ取り早いだろう。それに、なぜ桜は私が人間の言葉を使うことを疑問に思うのだ」

「だって…普通は話せないでしょ？」

「話せないのが普通なら、なぜ人間は話せるのだ。人間だけが特別なわけでもあるまい」

「え、えーっと…」

「言語を考えたのは人間かもしれないが、その習得には人間も人間以外にも関係ないということだ。要は、それを使う必要があるかないかということ。あの銀龍の若者も幼き白狼も、意志疎通の手段として言語を使う必要がないから使っていないだけだろう。私は聖獣として、より人間と通じ合いたいと思ったから、こうして言語を使っている」

「カイト、なにいつてるの？」

「難しい話なんだぞ」

「む…。お前たちには少々退屈な話になってしまったな。すまなかった」

「ボクにも難しかったよ…」

「む？」

「ふふ、オレはなかなか面白い話だったと思うけどな」

「ええ…」

「狼の姉さまは、今の話、分かったのか？」

「まあな」

「ねーね、すごいね！」

「ルウエも夏月も、いつか分かんときが来るよ」

「ボクは？」

「もちろん、桜も。だから、そのときまでたくさん経験を積み、知識を蓄えて。よく食べよく寝て。しっかり成長してくれよ」

「分かってるよ」「えへへ」「うん」

「…特に桜」

「ええっ！？ボク！？どちらかというと夏月でしょ！」

「歳を考えると、お前が一番成長していない。オレは、桜の成長を切に願う」

「もう！なんなのさ！いろはねえのバーカ！」

「そういうところを言われてるんだろ？」

「あ…としにい…」

すでに洗ってある洗濯物が満載されているカゴを抱えた利家が通りかかる。

あとから風華と葛葉も付いてきて。

「お喋りもいいけど、しっかり手も動かしてくれよ。前にも言った気がするけど」

「ねーねー、葛葉がてつだう」

「ホント、姉ちゃんはお喋り好きだよね」

「オ、オレか？」

「もう…姉ちゃんがすっかりしないと、この中で誰がすっかりするのよ」

「ボク！」

「それは却下」

「ええーっ！なんでさ！」

「ふふふ。桜はまだまだ認められていないということだな」

「もう！カイトまで何さ！」

頬を膨らませ、ムツとした顔をする桜。

それがまた面白い顔で。

…まあ、その子供っぽさが桜の良いところでもあるんだけどな。

その心は、いつまでも無くしてほしくないな。

「ウウ……」

「もう、暴れないでよ!」

「お前の抱っこの仕方が気に入らないんだろ」

「じゃあ、どうやるのさ」

「後ろ足をしっかり持ってやって、前足と胴体をもう一方の腕に乘せるんだ」

説明しながら、狼ルウエで実演してみせる。

桜もそれを見てクーアの抱き方を変えて。

「あ、大人しくなった」

「大人しくなったんじゃなくて、さっきまでは嫌がってただけだ」

「ええ……。なんで」

「抱き方が雑だからだろ」

「雑じゃないもん。ね、クーア」

「……………」

「ねえ、クーア」

「……………」

そっぽを向いたまま、クーアは返事をしなかった。

よっぽど気に入らなかったのか。

と、柚香が服の裾を引っ張る。

「紅葉お姉ちゃん、名前、付けてあげるんじゃないの?」

「ああ、そういえばそうだったな。ルウエ、どうするんだ」

「えっと……。姉さまはどう思う?」

「え?私?私は、ルウエの好きなようにしたらいいと思うよ」

「じゃあ、名前、付けてあげるんだぞ。いいよね、ルウエ、クーア」
「ワウ」「アン！」
「ふふ、どんな名前が良いかなあ」

狼ルウエの喉をくすぐりながら。

クーアは桜に抱かれて大欠伸をしている。

「何をしてるの？」

「あ、お姉ちゃん」

「え？ルウエ、タルニアさんのこと知ってるの？」

「ううん。知らない」

「ええ……」

「お姉ちゃん、ルウエとクーアの名前、どんなのがいいと思う？」

「その子たちのことかしらあ？」

「うん」

「そうねえ。聖獣だからといって、特別な名前を考える必要はないわあ」

「え？聖獣だつて分かるんですか？」

「ええ。私にも似たようなのがいるから」

「……？」

「如月、聞いてたわよねえ。一緒に考えてあげてくれない？」

と、タルニアの横に何かが降ってきた。

…金色の狐。

クーアが大人になったような、黄金の美しい狐。

「なんだ。お前も聖獣だったのか」

「ええ。お久しぶりです、紅葉さま」

「久しぶり。それにしても、ラズイン旅団には聖獣がたくさんいるんだな」

「私だけだと記憶しておりますが。他にもおられましたか」
「カイトは？」

「あの子は同行者ねえ。ずいぶん長いけど、誰かと契約しているわけではないわあ」

「へえ。でも、聖獣と一緒になんて珍しくないですか？」

「あのセトという銀龍も明日香という白狼も、見たところ聖獣のようです。違いましたか？」

「えっ、そうなの？」

「まあ確かに、あいつらがどこから来たのかすらも分かってないけどな。ある日突然ここにいたわけだし」

「ほう。興味深い話だな」「あ、お母さんいた？」

「ん？響か。どうしたんだ？」

屋根縁に下りてきたのはカイトと響だった。

意外な取り合わせだけど、何かしてたんだろうか。

「光、知らない？」

「いや、見てないな」

「うーん…。どこに行ったのかな…。望お姉ちゃんもいないし…」

「昼になったら帰ってくるだろ」

「そだね。でさ、みんなで何やってたの？」

「聖獣の話だよ」

「ええーっ！ルウエとクーアに名前を付ける話なんだぞ！」

「あれ？そうだったけ？」

「もう…。猫の姉さま、もっとしっかりしてほしいんだぞ…」

「ごめん…」

「ふふふ。私は銀龍の若者と幼き白狼の話の方に興味をそえられるかな」

「え？なんで？」

「もしかすると、誰かに引き寄せられたのかもしれないからな」

「ええ、誰に？」

「さあな」

そう言つて、カイトは少し目を細めて周りをグルリと見回す。

「風華のあたりを重点的に見ていたようだけど。」

「風華なのか…？」

「まあいい。名前だったな」

「うん」

「”純粹な心”ルウエ、”黄金の魂”クーア。二人に贈る名前は…」

「属性の違う二人の聖獣と契約するなんて、ルウエちゃんは心が強いのねえ」

「そういえば、契約つて何なんだ？望も言つてたけど」

「んー。説明してもいいんだけど、上手く出来る自信がないのよねえ。よく知つてる人がいればいいんだけど。とにかく、とても感覚的なものよお」

「ふうん」

「狼の姉さま、お姉ちゃん、名前！」

「ああ、そうだったな」

さて、どうしたものか。

狼ルウエもクーアも、待ち切れずに眠つてしまっている。

「特別な名前を考える必要はないかもしれないけど、名前はその人にとって特別なものだ。」

「ユウナ、イナヒメ」

「ユウナは良いとして、稲姫…？どこかの戦国武将の娘みたいな名前だな…」

「うん。あ、ネネ」

「柚香は戦国時代が好きなのか？」

「うん。でも、今、いっぱい勉強してるんだ」

「柚香は学者さんか何かになりたいの？」

「…薬師さまになりたい。長之助お兄ちゃんみたいな、立派な薬師さまに」

「へえ。じゃあ、風華と一緒にだね」

「風華お姉ちゃんも薬師さまになりたいの？」

「うん。兄ちゃんが薬師だから…。それに、姉ちゃんとの約束もあるし」

「えへへ。じゃあ、一緒に頑張ろうね」

「うん。頑張ろう」

風華…。

約束、覚えててくれたんだな。

…私自身が忘れてたなんて言えないけど。
でも…ありがとう。

「うーん…。やっぱり難しいんだぞ…」

「そうですね…。名前というものは、難しきものです…」

「名前、名前…」

どんどん話が脱線していく中、ルウエと如月、響だけはひたすら名前を考えていた。

「あつ！それは食べちゃダメ！」

「クーア、吐き出して！」

「まったく…。何やってるんだ」

まだ飲み込んでないみたいだから、クーアの口に手を突っ込んでそれを取る。

涎でベタベタになったネギは、原形は留めてないけど欠損してる部分はないようだ。

「ほら。何か口に入れたと思ったら、すぐに取らないと。飲み込んでからじゃ遅いからな」

「ウウ…」

「お前も勝手に他人のものを食べるな。お前にとって危ない食べ物だつてあるんだから」

「クウ…」

「ワウ！」

「またあとで作ってもらえ」

「なんて言ってるんです？」

「こいつらも腹が減ってるんだと」

「ああ、そういうことですか。今すぐ作りますね」

そして、すぐに料理に取り掛かる。

「よかったな」

「ワウ！」「アン！」

「如月も食べますか？」

「あ、よろしくお願いします」

「はい」

「そういえば、護獣と聖獣って同じなの？美希はルウエを護獣としてお守りを貰ってたよね」

「厳密に言えば違います」

「はんぺん…かまぼこ…」

「…ルウエちゃん、そんな名前にするのぉ？」

「うーん…」

「やめときなよ」

「うん」

「…あの。続き、いいですか？」

「あ、うん。どうぞ」

「護獣は、その人の本質を表す獣です。だから、狼だったり狐だったり、そういった抽象的な名前であることが多いのですが、狼ならルウエ、狐ならクーアなどと具体的にあらわすのはめて護獣とする場合もあります」

「じゃあ、聖獣は？」

「はい。聖獣は…」

「ただいま戻りました」

「ただいま」」「ただいま」

「お帰りなさい。どうだった？クノは良い子にしていたかしら？」

「タ、タルニアさま…」

「お菓子買ってもらった」

「響にも、お土産、あるんだよ」

「光…。どこに行ったの？」

「市場で、クノお兄ちゃんと、お買い物だよ」

「ええ、わたしも行きたかった！」

「ごめんね」

「むう…。いいよ、もう」

「うん。ごめんね」

不機嫌そうにパタパタと翼をはためかせる響をたしなめるように頭を撫でる。

悪い気はしないみたいで、パタパタも次第に収まってきて。

「ねえ、この狐さんは誰なの？」

「如月。私と契約してる聖獣よお」

「望は望っていうの。如月、よろしくね」

「はい。望さまですね。よろしく願います」

「葛葉みたいに金色だね」

「葛葉さま…ですか？」

「うん。えっと、今は美希お姉ちゃんと一緒かな」

「そうなの？お昼ごはんはどうするって？」

「うーん…分かんない」

「美希さまと葛葉さまは、市場中程の食堂に入っていました。おそらく、あそこで食べるのでしょうか。同じ食堂に、ユカラさま、祐輔さま、夏月さまも入っていました」

「へえ。よく見てるんですね。食堂って涼さんのところかな」

「望は気付かなかった」

「職業柄、いろんなところを見回してしまうので…」

「え？行商ですよ。そんなに見回すことが…」

「クーア旅団なら、その職業病も領ける。盗賊として完璧な仕事をするためには、誰にも目撃されないのが理想だからな」

「はい。そうですね」

「クノ」

「あ…いえ…。今のは忘れてください…」

「仕方がないな。周りのことをしっかり気に掛けるのはいいが、迂闊な発言にも気を付けろよ」

「はい…」

「ふふ、しっかりしてるようで少し抜けてるのが、クノの良いところねえ」

「タ、タルニアさま!？」

タルニアに鼻を突かれて、燃え上がるように顔を真っ赤にさせて。
…もうひとつ追加。

とても分かりやすいのも、クノの良いところだ。
同じことを考えているのか、タルニアもこっちを見てニッコリして
いて。

「ところで、護獣と聖獣の違いについてですが…」

「あ、忘れてた。如月、続きお願い」

「はい」

「今日はよく話の腰を折られる日みたいねえ」

「そうですね…」

「ルウエとクーアのごはん、出来ましたよ」

「ワウ!」「アン!」

「はあ…」

「早速折られちゃったね…。ね、また折られないうちに早く」

「はい…。ありがとうございます、風華さま…」

「じゃあ、はい、どうぞ」

「えっと、聖獣なんですが…大丈夫ですか？」

「大丈夫だから。ね？」

「では…ホントに大丈夫ですか？」

「大丈夫大丈夫。早くしないと、また来るから」

「はい、分かりました。では。聖獣なんです、聖獣は使徒である
獣のことです。どちらかと言うと、幽霊に近い存在でしょうか」

「幽霊…?」

「精神的な存在ということです。まあ、幽霊がいるかどうかは私に
は分かりませぬですが」

「あ、そうだ。契約って何なの？」

「契約…ですか。実は、私たちも詳しくは知らぬのですが…。分か

るのは、契約者と聖獣双方の生命が混ざり合うということだけですね」

「望は、まだカイトとホントの契約は結んでないんだよ」

「そうなのですか？」

「うん」

「契約は力を相当使いますからね。ルウェヤクーアはともかくカイトくらいにまでなつてくると、望さまが耐えられぬ可能性もありますから」

「え…？耐えられないって…そんなに危ないものなの？」

「いえ。しかし、生命の強さに差がありすぎると負担も多大なものになるのも事実です」

「へえ」

「もうお腹いっぱいなんだぞ」

「光のお土産って何？」

「んー、大福だよ」

「みんなで食べましょうね」

「美味そうだな」

「そうねえ」

「僕にもひとつ貰えますか？」

「ちょうど話も終わったから、如月も一緒に食べようか」

「はい。最後まで話せてよかったです」

「ワウ！」「アン！」

「分かった分かった」

光が開けた箱の中には、苺大福が詰まっています。

薄い白の生地に酸っぱい苺と甘い餡子が入っていて、その三つがピッタリ調和していた。

…つまり、とても美味しい苺大福だった。

おやつのはとは、みんなでお昼寝。

良い風が吹いていたから、屋根縁でチビたちの寝顔を風華、如月と一緒に見ていた。

「ただいま」

「お帰り」「お帰り」

「お帰りのさいませ。えつと…」

「あ。初めまして、狐さん。ぼくはヤーリエっていうの」

「ヤーリエさまですか。私は如月と申す者です。よろしく願います」

「うん、よろしくね」

ヤーリエはみんなを起こさないように、抜き足差し足でやってきて。そして、窓の縁に座る。

「今までどこに行つてたの？」

「えつと、頼まれてたものを市場で買つて、家に届けてたの」

「へえ」。偉かつたんだね」

「えへへ」

「お昼ごはんは済ませたのですか？」

「うん。家で食べてきたよ」

「そうか。じゃあ、この大福、食べるか？」

「え？いいの？」

「美味しいよ。食べてごらん」

「うん！」

ヤーリエは私の前にちょこんと座り、なんとか確保しておいた苺大

福を手取る。

…しかし、城のチビたちからこの数個を守るのは骨が折れたなあ。

「いただきま〜す」

「はい、どうぞ」

大きく口を開けて、まずは半分。

一瞬顔をしかめたのは、酸っぱい苺のせいだろうか。

「ん〜。美味しい〜」

「でしょ〜。光が買ってきてくれたんだよ」

「へえ〜。胡月堂の苺大福かなあ」

「有名なのか？」

「ううん。裏道のちっちゃいお店だよ。でも、美味しいお菓子をいっぱい売ってるの」

「そうですね。この苺大福が一番人気だと、長之助さまから聞いたことがあります」

「ほう。じゃあ、また案内してくれるか？」

「うん！」

元気よく頷いて残りの半分为口に入れ、ゆっくりと味わう。
そして、最後に指を舐めて。

「ごちそうさまでした〜」

「まだもうちょつとだけあるぞ」

「ううん。もういいよ」

「そうか」

「…ねえ、紅葉お姉ちゃん」

「ん？どうした？」

「あのね…。うーん…。むっ…」

「どうしたんだ」

「お腹が痛いのですか？」

「ううん…」

似たような光景を、ついこの前にも見たな。

風華も気付いたみたいで、チラチラとこちらに合図を送るけど。
でも、敢えてヤーリエが言い出すまで待ってみる。

「あのね…」

「うん」

「えっとね…」

「うん」

「……………」

「……………」

「うう……。風華お姉ちゃん…」

「ありゃりゃ。ヤーリエ、ちゃんと言わないと姉ちゃんも分からないよ？」

「うう……………」

顔を真っ赤にさせて、せわしく尻尾を振ったりしながら。
ようやく決心がついたのか、私の方をキッと見て口を開く。

「……………。やっぱりダメ……………」

しかし、開いた口は結局パクパクさせただけで、言葉にはならなかった。

相当な恥ずかしがり屋さんだな、この子は。
仕方ない。

少し助け船を出してやろうか。

「ヤーリエ。ほら、ここに座れ」
「…うん」

私の胡座の上に座ると、嬉しそうに自分の尻尾を抱えて。

「それで、どうしたんだ？」

「えっとね…。紅葉お姉ちゃん、甘噛みしてもいい…？」

「ああ。よくないわけがないだろ」

「うん！」

ヤーリエの頬を突ついてやると、少し恥ずかしそうにその指をくわえる。

…奥歯以外は全部生え変わってるみたいだな。

他はそうでもないけど、牙だけは祐輔のよりずっと鋭い。
なんでだろ。

狼の特徴が出ていて、舌は祐輔より滑らかだ。

「ん」

「良かったね、ヤーリエ」

「うん！」

「あ、そういえば、葛葉は甘噛みしないなあ…。なんでだろ。夏月はしてるのに」

「個人差があるからな。それに、狐は少し遅めだと聞く。それもあ
るんじゃないか？」

「そうかな」

「タルニアは今のヤーリエくらいのおきに出てきた。まあ、あのお
姫さまは猫だな。対して、クノは夏月より小さいときに、すでに
現れていたな」

「お前はまたいきなり出てくるんだな」

「ふむ。では、どういう風に出てくればよいのだ」

「…もういいよ。普通に出てきたら」

「そうか」

「カイトは、タルニアさんとクノさんのこと、よく知ってるんだね」
「まあな」

「私より長い間、タルニアさまとご同行なされていますから」

「へえ」

「嫉妬か？」

「いえ。しかし、嫉妬も混じっているかもしれない。でも、あなたには敵わぬということは、ずっと昔に思い知らされましたので」

「ふふふ。そういえば、お前との付き合いも長いな」

「ええ」

「どれくらいの付き合いなの？」

「そうですね…。初めて会ったのは、私の尻尾がまだ七本のと看でしたので…二百年ほどの付き合いでしょうか」

「…え？二百年？」

「ええ」

「ほう。ずいぶんと長かったんだな」

「二百年って、今、あなたたちは何歳なの…？」

「歳など、百を超えたときから面倒で数えておらぬ」

「私は今年で八百と五歳ですね。五年前に尻尾が九本に増えましたので」

「え？じゃあ、葛葉は何歳なの？九本、尻尾あるけど…」

「八百を超えてるのではないか？」

「ええっ!？」

「…嘘を教えないください。人間の九尾は確立されたひとつの人種です。尻尾が増えて九尾になるということはありませぬ。だから見たままの年齢ですよ。ご安心ください」

「はあ…。びつくりした…」

「……？」

ヤーリエは、よく分からないという風に可愛く首を傾げる。

まあ、こいつらが何歳であろうと、今ここに一緒にいるという事実は変わらない。

同じ時間を生きているということは変わらないんだから。

「んう……」

「ふふ、可愛いね」

「はい。誠に愛らしき寝顔ですね」

「風邪引くといけないから……」

「あつ！姉ちゃん、今、どこで手を拭いたの？」

「ん？服……かな。意識してなかった」

「ちゃんと手拭いで拭きなよ！」

「え？なんで」

「汚いでしょ……」

「オレは汚いとは思わないけど。な、ヤーリエ」

「うむ……」

「もう……」

ヤーリエの頬を突ついてみると、小さく口を開けてモゴモゴし始めた。

そこに指を入れてやると安心したようにため息をついて、しばらくして落ち着いてから、布団まで運んでやる。

「こつちもお願い出来るか？」

「あ、美希。お帰りなさい」

「あたしたちもいるよ」

「夏月も寝ちゃった」

「お帰り。ユカラ、祐輔」

「ただいま」「ただいま」

美希に続いて、ユカラと祐輔も帰ってきた。

葛葉と夏月をそつと布団に下ろすと、屋根縁に出てきて。

「涼さんの食堂に行ってたの？」

「ああ。よく分かったな」

「クノさんが、みんなが食堂に入っていくのを見てたんだって」
「ほう」

「でも、なんで市場に行ってたんだ？ 買い物でもあったのか？」

「いや。灯に付き合わされてたんだ。葛葉は私に付いてきただけ」

「じゃあ、肝心の灯はどうしたんだ」

「涼が大変だろうからって、食堂の手伝いだ」

「え？ 大変って？ 涼さん、どうしたの？」

「身重だろ」

「えっ、嘘！？ 全然知らなかった！」

「風華は鈍感だからな。誰かに似て」

「鈍感じゃないもん！」

「どうかな」

「もーっ！」

「それで、ユカラたちは？」

「あたしは、お裁縫のための布を買いに行ってたんだ。祐輔と夏月は、市場をいろいろ見て回りたいって。ね？」

「うん。いろんなところを見せてもらってたんだ」

「良かったな」

「うん！」

祐輔の頭を撫でてやると、尻尾の先をクルリと動かして。

「そういえば、市場で長之助さんに会ったよ」

「何をしてたんだ？」

「回診と仕入れて言ってたかな」

「長之助さんは薬師だからね」

「そうなの？」

「うん」

「へえ。じゃあ、お薬の材料でも買いに行ってたのかな」

「だと思っよ」

「ところで、さっきから気になってたんだが、その狐は？朝はいなかったよな？」

「申し遅れました。私、如月という者です。現在、タルニアさまにお仕えさせていただいております。どうか、よろしくお願いいたします」

「私は美希だ。あの金髪の九尾が葛葉、隣で寝てるのが夏月」

「あたしはユカラだよ」

「美希さま、ユカラさま。それに、葛葉さまと夏月さまですね。

あと…そちらの坊っちゃんは…？」

「ん？あ、寝てる。こいつは祐輔。夏月の兄貴だ」

「祐輔さまですね」

「ああ。よろしくな、如月」

「よろしくお願いいたします」

如月は深々と頭を下げる。

それに合わせて、ユカラも慌ててお辞儀をして。

「そっといえば、さっきタルニアに仕えていると言っていたが、如月は護獣なのか？」

「いえ。私は聖獣ですね。ちなみに、タルニアさまの護獣は龍です。強いていうなら、クルクスあたりでしょうか」

「ん？聖獣？護獣とは違うのか？」

「はい」

「美希も、お昼に厨房にいたらよかったのにね」

「いや、あそこに美希までいたら、如月の話は永遠に始まらなかった」

「ふふ、そうかも」

「……？」

「護獣はその人の本質を表す獣、聖獣は神の使徒である獣のことです
ね」

「あ、まとめた」

「ええ。いつまでも失敗は出来ませぬので」

「まあ、今この場所で話に割り込むやつなんていないけどな。祐輔
も寝てるし」

「むう……」

残念そうに尻尾をパタリと振って、耳の裏を掻く。
その間に、祐輔を布団に寝かせて。

「今日は空が蒼いな」

「そうだね。良い天気」

「空の蒼は包容の蒼なんだぞ……」

「あ、起こしたか？」

「ううん……。ちよつと目が覚めたの……」

「空の蒼は包容の蒼か……。海の蒼は哀しみの蒼……」

「北の伝承だな」

「ああ」

「自分は……望に……」

「望？望が北の伝承を知ってたのか？」

「……………」

「寝ちやつたね」

ルウエに布団を掛け直してやり、屋根縁に戻る。

空を仰ぐと、そこには確かに蒼い空があった。

「空の蒼。全てを見てるが故に受け止められる包容の色。海の蒼。
全てを内包してるが故に見せられない哀しみの色。しかし、ふたつ

は互いに混ざり合い、いつか希望に変わるだろう。蒼は癒しの色、生命の色」

「へえ〜。そんな伝承があるんだね」

「”高き空” シイリアと”生命の源” ルクエンの物語だな」

「ねえ、如月。シイリアとルクエンも本当にいるの？」

「ええ。お二方は今も昔も、非常に良き親友のようです。それこそ、姉弟のように」

「そうなんだ〜」

「伝承でも、そう伝えられているな」

空のシイリア、海のルクエン、そして陸のクノ。

さっきの伝承ではシイリアとルクエンしか出てこないが、クノも二人とはとても仲が良いと言われている。

「私たちはみんな、ひとつの大きな家族です。喧嘩やいがみ合いをすることもありますが、その心はいつもひとつなんです」

「いつもひとつ…」

「ええ」

家族、心、ひとつ。

北の伝承でよく使われる言葉。

みんなにとって、大切な言葉…。

「ふぁ……」

「柚香、夕飯だぞ」

「あ、うん……」

「ルウエも起きろ」

「んー……」

頬を叩くと、顔をしかめてそっぽを向いてしまった。

「おい、ルウエ」

「ダメだよ、そんなんじゃ」

「ん？ ヤーリエか。先に行ったんじゃなかったのか？」

「心配だから戻ってきたの」

「そうか。じゃあ、ルウエを起こしてくれ」

「うん」

頷くと、ヤーリエはルウエの角をギュツと握る。

そして、激しく頭を揺することもなく、そのままジツとしていて。

「うん……。何……？」

「夕飯だよ、ルウエ」

「夕飯！」

「うん。行こ」

「あ。狼の姉さまと柚香も一緒に行こ！」

「ああ」「うん」

ルウエに手を引かれ、部屋を出る。

柚香は少し慌ててるみたいで。

「おい、ルウエ」

「あ…柚香、ごめんなさい」

「うっん、大丈夫だよ。早く行こ？」

「うん！」

「でも、慌てちゃダメなんだからね」

「えへへ。分かってるよ、ヤーリエ」

そして、慌てず急がず。

まっすぐ広間まで。

落ちてきた箸を取って、すかさず鯖の煮付けを食べる。

直後、桜の箸は何もない場所を掴んだ。

そして、それを軽く捌いてやる。

「ああもう！なんで？」

「無闇やたらに突っ込んでくるだけじゃ勝てないってことだろ」

「なんでかなあ…」

「桜。望を見習いなさいよ。静かに食べてるでしょ」

「望、最近すごく落ち着いてきたよね」

「はあ…。桜はなんで落ち着かないのかな？」

「さあ？」

「風華がしっかりしてるせいかな」

「え？私？」

「ああ。姉がしっかりしていれば、妹は天真爛漫に育つものだ」

「ええ」。ボク、風華と同じ年だよ」

「見た目も言動も、とても同年とは思えないからねえ」

「あ、そらねえ。お帰りなさい」

「ただいま」

「空姉ちゃん、どこかに行ってたの？」

「いや、ずっと城にいたよ」

「ええ……」

「まあ、代表がどこかに出掛けるなんてことはそうそうないだろう」
「たまに市場に行ったりするけどね。あ、そうだそうだ。明日からしばらく村に帰るんだった。風華たちはどうする？」

「どうしようかな……」

「ボクは帰ろっかな。ラズイン旅団も明日発つって言ってたし」

「えっ、嘘！？」

「嘘じゃないわあ。私たちは、ひとところにあまり長く留まらないから」

「あ、タルニアさん」

「寂しくなるな」

「私はまた当分の間は来ないけど、クノと長之助はまたすぐに回ってくるわあ」

「え？なんでですか？」

「クノと長之助はルクレイ分隊だからよあ」

「ルクレイ分隊はだいたい一ヶ月に一回、本隊は三ヶ月に一回、ここに来るんだ」

「へえ。でも、明日まではいるんですね」

「ええ」

「じゃあ、たくさんお話させてください！」

「ボクも」

「ええ。もちろん」

「私も、たくさんお話したいな」

「ふふふ。じゃあ、柚香ちゃんもねえ」

「あの…私、みなさんが明日発つなんて知らなくて…。だから、暢気にしてて…。でも、いっぱい、いっぱい話したいことがあって…」

「ふふ、今日は眠れなさそうね」

「あっ…明日、早いですね…」

「クノ、どうだったかしらあ？」

「明日は昼に発つ予定ですね」

「じゃあ、村に行くのもそれくらいにしようかな」

「空姉ちゃん……」

「たっぷり話しなよ。次は三ヶ月後なんだからね」

「うん！ありがと！」

「結局、風華も村に帰るんだな」

「あ、うん。姉ちゃんも来る？」

「そうだな……。明日までに考えておくよ」

今はとにかく、風華たちの邪魔をしないことが肝要だ。

空に目で合図を送り、そつとその場を離れる。

……みんなはすでに話し込んでいた。

一瞬をも惜しむように。

このときは二度と訪れないから。

星が優しく瞬く夜空。

広間の熱気はまだまだ冷めないようで、片付けが済むと布団を持ち込む者もいた。

私はそんな熱気とは少し外れて、自分の部屋の屋根縁に。

「お前の角はどうなってるんだ？」

「分かんない」

「なんで角を握ったら目が覚めるんだ」

「目が覚めるんじゃないんだぞ。狼の姉さまに頭を撫でてもらったときみたいに、なんだか気持ちいいんだ」

「ふうん。こっか？」

ゆっくりと頭を撫でると、ルウエはギュッと抱きついてきて。

「えへへ」

「そういえば、狼ルウエとクーアの名前は決まったのか？」

「あ…。忘れてたんだぞ…」

「ふふふ。また明日、考えような」

「うん！」

ルウエは龍なのに、響や光のような翼はないんだな。

でも、三人の中で一番小さいにも関わらず、角は一番立派だ。

「紅葉さまはみなさんとお話しにならないのですか？」

「また今度な」

「クノお兄ちゃん」

「ルウエさま、まだ起きていたんですね。ヤーリエさまのように早く寝た方がいいですよ」

「あう…」

「まあいいじゃないか。クノもこっちに来いよ」

「…はい」

「その堅苦しい喋り方もやめて」

「……………」

「クノとはまた一ヶ月後だな」

「そうだな」

「一ヶ月後なの？」

「僕と長之助はだいたい一ヶ月後。タルニアさまは三ヶ月後だな」

「寂しいんだぞ…」

「僕がいなくなつて寂しいと思つてくれるのは嬉しい。でも、良き兄、姉がいるだろ？それを忘れちゃダメだ。ルウエが寂しいと思つていると、みんなが寂しくなるんだから」

「うん…」

「それに、また一ヶ月後に会えるんだから。哀しい顔をするな」

「うん…そうだよね」

「笑って笑って。ルウエは、笑ってる顔が一番だ」

「えへへ」

クノに撫でられてニッコリ笑顔。

それで安心したのか、大きな欠伸をして。

「さあ、寝ようか」

「うん…」

「紅葉はどうする？」

「もうちよつと星を見てるよ」

「分かった」

「笛、吹いてくれるか？」

「ふふ、分かったよ」

クノは、ルウエを寝かせて笛を取り出す。

私も懐から笛を取り出し、そつと口をあて。

そして、どちらともなく吹き始める。

ルウエは虚ろな目でそれを眺めていて。

ふたつの旋律は、月が昇り始めた夜空に遠くまで響いていった。

「んー…」

「風華ちゃん、大丈夫？」

「はい…。タルニアさんこそ大丈夫ですか…？遅くまで付き合わせちゃって…」

「ターニヤは大丈夫だよな。夜の生活に慣れてるから」

「そうねえ」

「え…？姉ちゃん、なんか言った…？」

「…もう一回、ちゃんと寝てこい」

「でも…タルニアさんたちが昼に発っちゃう…」

「ラズイン旅団のやつらも、そんなへ口へ口のやつに見送られたくないだろう」

「むう…」

「そら、部屋に戻って」

「うーん…」

風華の手を取って、来た道を引き返す。

でも、風華はグツと引っ張って抵抗して。

「まだ…足りないもん…」

「足りないのはお前の睡眠時間だ」

「やだよ…」

「まったく…」

「私が連れていくわ。それなら風華ちゃんも納得するでしょう」

「ああ。すまないな」

「いいのよ」

「んー…」

タルニアは風華の手をそつと握つて、廊下を歩いていく。
角を曲がる時、一瞬こつちを見てニコリと笑つて。
と、同じ角からルウエが飛び出してきた。

「ルウエ、おはよう」

「お、おはよ…狼の姉さま…」

「ん？そわそわしてどうした。廁か？」

「うん…」

「すぐそこだ。一緒に行こう」

「う、うん」

前を押さえて走るルウエを誘導して。

間もなく廁に到着したが、戸は全部閉まっていた。

一番手前の戸を叩いて声を掛けてみる。

「おい、誰かいるのか」

「あつ、え？紅葉？ち、ちょっと待つて…」

「ん。いや、いい。隣が空いてた。ルウエ、こつちだ」

「うん…」

よし、間に合つたみたいだな。

この前の葛葉みたいには…ならないよな？

「戸が閉まつてると、どこに誰が入ってるか分からないな。どうにかならんか」

「うーん…そうだね…。って、これ、今話すこと？」

「そうだったな。ごゆるりと」

「…なんか嫌だね、それも」

「そうか？」

「うん」

何か呻いているルウエの様子が気になるけど、とりあえず外でジッと待つてることにする。

「はあ…。男女で別々の厠にならないかなあ」

「まあ無理じゃないか？」

「男の人はいいかもしれないけどさあ…」

「香具夜は気にするのか？」

「当たり前じゃない」

「そうか」

「紅葉は気にならないの？」

「ならんが」

「紅葉の神経は注連縄くらい太いんだね」

「どついう意味だ」

「さあね」

厠に入つてることを知られるのが嫌なのか、厠から出てくるのを見られるのが嫌なのか。

いろいろ考えられるが、私はどれも嫌だとは思わない。

そして、戸が開いて香具夜が出てきた。

「さっぱりしたか？」

「もう！紅葉つて、本当に下品だよね！」

「下品つてなあ…」

「狼の姉さま…」

「ん？」「何？」

「えつとね…」

「そついえば、お前も狼の姉さまだな」

「え？私のことじゃなかったの？」

「どつちでもいいから！」

「まあ、そうかもしれん」

「それで、どうしたの？」

「か、紙がないんだぞ…」

「あれ？切らしてた？もう…。掃除当番は何してるのかな…。しっかり注意しないと…」

「いや、それよりルウエの紙だろ」

「あ、うん。私のところにならあったよ」

「そうか」

一番手前の個室の中に入ろうとすると、香具夜が前に立ちはだかる。心なしか、顔が赤くなってるようなかんじもする。

「私が取るから！」

「なんで」

「もう！なんでそうなの？」

「なんでって言われても…。それに、先にオレが聞いてたんじゃないか」

「普通は恥ずかしいものなの！」

そう言って私を睨み、紙を取る。

…恥ずかしいって、何が？

「ルウエ、紙」

「うん…ありがと…」

「こんな下品なお姉ちゃんでごめんね」

「……？」

「下品はないだろう」

「下品でしょ。少なくとも、上品ではない」

「まあ、それはそうだけど」

「なんでこんな風に育ったのかな…」

「母さんの教育が良かったんだろ。ところで、手は洗ったのか？」
「あつ！紅葉のせいで忘れてたよ！」

「え？オレのせいかな？」

「当たり前じゃない」

「なんでオレなんだ…」

「ふん」

そして、手洗い場に向かう香具夜。

その後ろ姿、丁寧に結われた銀色の髪は、ちょうど射し込んできた日の光を反射してキラキラと輝いていて。

「相変わらず綺麗な髪だな」

「ん？ああ。ありがと」

「オレも結おうかな…」

「どうか。紅葉はそのままが一番綺麗だと思うよ」

「そうかな？」

「うん」

「香具夜お姉ちゃん、自分は？自分はどう？」

いつの間にかルウエが出てきていて。

香具夜の隣で手を洗う。

「ルウエは、まず髪を伸ばさないといけないね」

「どれくらい？」

「そうね…。紅葉くらい伸ばしたら、きっとモテモテよ」

「モテモテ？」

「好きになつてくれる男の子がたくさんいて大変、ってこと」

「大変なの？」

「大変よ」。紅葉もだけど、灯って子がね。モテてモテて仕方ないのよ」

「灯は白狼だからな」

「……？ハクロウ？」

「数多ある種族の中で、最も美しいと言われる種族だ」

「灯も例に漏れず、ね」

「ふうん」

「なんか呼んだ？」

「お前の話をしてたんだ」

灯は、ちょうど名前だけ聞こえたらしく、ほとんど何も聞いてないみたいだった。

どんな内容だったか知りたいという風に目を輝かせていて。

「さあ、朝ごはんだな」

「朝ごはん！」

「そうだね。じゃあ、行こっか」

「え？何？何の話だったの？」

「今日は何かな」

「昌士が当番だから…魚が中心だろうね」

「お魚！楽しみなんだぞ！」

「ねえ、待つてよ。なんで私が出てきたの？ねえ！」

灯のことを褒めてたなんて、そうそう言えたものではないからな。まあ、また今度だ。

「魚は良いですよ。焼いても煮ても刺身でも食べられますからね」

「あれ？お姉ちゃん、骨は？」

「食べたけど」

「ええっ!？」

「魚は骨まで食べられますからねえ」

「いや、今日の魚は無理でしょ！」

「え？私も食べたけど……」

「……ねえ、見て。この太さ。いくら狼っていつても、これは噛み砕いちゃいけないでしょ」

「狼の姉さまも香具夜お姉ちゃんも、すごいんだね」

「すごいんじゃないくて、意地汚いんじゃないの？」

「酷い言い様だな」

「だって、そうじゃない」

「残さず食べるというのは、オレたちの生命を繋いでくれた他の生命への感謝の気持ちを表すのに最も簡単な方法だ」

「骨まで食べることないでしょ……」

「硬い骨は揚げ物にしたりして食べますけどね。おやつに作りましょうか」

「おやつ」

ルウエは足をパタパタさせて。

私のも骨煎餅にしてもらうべきだったかな。

「そういえば、今日から代表の人たちが一度帰郷するらしいですね」
「そうらしいな」

「へえ」。全然知らなかった。ラズイン旅団だけじゃなかったんだ

ね。なんだか、ちょっと寂しいかな…」

「そうだね…」

「三ヶ月なんて、あつと言う間ですよ。それに、分隊は毎月来てく
ださるんですから」

「…うん。そうだよ。それに、旅団天照ももうすぐだよ」

「あれ？そうだった？」

「たぶん」

「何それ…」

曖昧な灯の発言に呆れ顔の香具夜。

たぶんじゃなくて、ホントにもうすぐ来るんだけど。
今月はいろいろと忙しい月だな。

「あ、そうだ。オレもヤウトに行こうと思う」

「え？なんで？」

「なんとなく」

「何それ…」

「私は良いと思うよ。紅葉、こっちに来てから、ユールオから出た
ことないでしょ」

「そういえばそうかもしれない」

「この前の遠足が最高記録じゃない？」

「そうだな」

「自分も、ユールオから出たことないんだぞ」

「へえ。あ、でも、ルウェってどこに住んでるの？」

「えっと、市場の一番向こう」

「一番向こうってことは…」

「孤児通りだな」

「うん。コジドオリなんだぞ」

「…ごめんね。変なこと聞いて」

「……？どういう意味？」

「ルウエ…お父さんもお母さんもないの…?」

「いるよ」

「えっ?」

「孤児通りには、ぼくたちのお世話をしてくれる人がたくさんいるの。その人たちが、ぼくたちのお父さんでありお母さんであり」

「おっ、ヤーリエ。おはよう」

「おはよ、紅葉お姉ちゃん」

「ヤーリエ」

「おはよ、ルウエも。灯お姉ちゃん、香具夜お姉ちゃん、昌士お兄ちゃん、おはよ」

「おはよ」「おはよ」

「おはようございます。すぐに準備しますね」
「うん」

ヤーリエは私の横に座ると、そっと寄り掛かってきて、頭を軽く叩くように撫でると、尻尾をユラユラと揺らす。

「それにしても、お姉ちゃんはともかく、私たちの名前までちゃんと覚えてくれてるなんてね。びっくりしちゃったよ」

「うん。覚えるの、結構得意なんだ」

「へえ。じゃあ今度、紅葉と絵合わせやってみなよ」

「オ、オレか?」

「何言ってるのよ。絵合わせと将棋は、誰も紅葉に勝てないじゃない」
「い」

「え?弓矢と剣術じゃなかったの?」

「確かにそっちもだけど…」

「あつ!自分、こんなときになんて言うか知ってるんだぞ!」

「へえ。なんて言うの?」

「ブンブンリョウトウ!」

「…文武両道でしょ?」

「そう！それなんだぞ！」

「もう…。この前教えたばかりなのに…」

「えへへ」

「でも、難しい言葉の使い方を覚えていただけてもすごいぞ」

「うん！」

「その言葉自体もちやんと覚えてよね」

「うん。頑張るんだぞ」

両手をギュツと握り締めて。

…二人とも文武両道、才色兼備の立派な人物になってくれよ。

「さあ、出来ましたよ。焼きツグと龍魚のヒレの白和え、さつぱりお澄まし。あと、ご飯はおかわり自由ですよ」

「ツグ…龍魚…」

「ん？どうしました？」

「ヤーリエはね、お魚が嫌いなの」

「ええっ!？」

「大声を出すな」

「出したくもなりますよ！」

「はあ…」

「ヤーリエ。なんで魚が嫌いなんですか？」

「…臭い」

「臭い、臭いですか…。私には分かりませんが、狼のお三方はどう思いますか？」

「んー。どうだろうな。クサヤは臭いけど」

「クサヤは私も苦手だなあ。灯は？」

「クサヤは城に持ち込まれた瞬間から分かるよ」

「あの…クサヤじゃなくて、今日の料理の話をしてるんですが…」

「ヤーリエは、この魚、臭いと思うか？」

「うん…」

「だとさ」

「えっと…隊長たちの意見も聞いておきたいなあ…なんて」

「私は上手く消せてると思うよ。特に、龍魚のヒレだね。この龍魚のヒレは酒で匂いを飛ばしてある。私がこの処理をすると、逆に酒の匂いが残るんだよね。でも、これは残ってないから不思議に思ってたところ」

「ああ、それはちょっと秘密があるんですよ」

「まあそうだろうね」

「でも…臭いもん…」

「じゃあ、目を瞑ってみろ」

「…なんで？」

「いいから」

少し眉間に皺を寄せて、渋々といったかんじで目を瞑るヤーリエ。

「よし。じゃあ、問題だ」

「問題…？」

「第一問。今日の朝食の献立は？」

「焼きツグと龍魚のヒレの白和え、さっぱりお澄まし。ご飯はおかわり自由」

「正解だ。じゃあ、第二問。昨日の夕飯の焼鳥の種類、分かるか？」

「ネギマ、つくね、焼肝、皮」

「そうだな」

「二人とも、よく覚えてるね。私なんて全然だよ」

「灯は注意を払わなすぎなんじゃないの？」

「ええ…」

「次。そのつくね串の肉は何の肉？」

「鶏肉じゃないの？」

「そうだったか？灯」

「えーっと…。昨日のつくね串は、たしかナムの肉だったはずだよ」

「えっ、ナム!？」

「どうだ。昨日のは臭かったか？」

「うう…」

「じゃあ、これは？」

「臭い…もん…」

「頑固だな。…分かった。それなら、もう食べなくていい。昌士、片付けてやってくれ」

「はい」

「あ、あっ…」

「どうした。臭い魚は食べたくないんだろ。じゃあ、無理して食べる必要はない。ちなみに、今日の当番は昌士だから、朝から晩まで魚料理だ」

「今朝は良い魚が大漁でしたから。どこでも魚料理でしょうね」

「うう…」

「さあ、そろそろ洗濯の時間だ。行こうか、ヤーリエ」

「あっ、あう…」

ヤーリエの手を無理矢理取って、立ち上がらせる。
そして、厨房の出口まで引っ張っていく。

「ヤア…。朝ごはん…。お腹空いたぁ…」

「魚は臭いから食べたくないんだろ？無理して食べなくていいって言ってるじゃないか」

「イヤだもん…。食べたいの…。うっ…うええ…」

頃合いだな。

泣き出したヤーリエを元の席に座らせて、昌士に目で合図する。
すぐに、さっき下げた朝ごはんが出てきて。

「さ、どうぞ」

「うつ…うつ…」

泣きながら、箸に手を伸ばして。
そして、ゆっくりと食べ始める。

「ごめんな、ヤーリエ」

「うつ…。紅葉お姉ちゃん…」

「ヤーリエ、美味しい？」

「うつ…。美味しいよ…」

そして、また大粒の涙が頬を伝って。

「ごめんなさい…お魚さん…。臭いなんて言って食べないで…。ごめんなさい…」

「きつと許してくれますよ。ヤーリエは優しい心を持っていますからね」

「ごめんなさい…」

そうだな。

ヤーリエは優しい子だから。

これからは、ちゃんと魚も食べてくれるだろう。

泣きじゃくるヤーリエの頭を、ルウエはそっと撫でていた。

「またここだな」

「いいじゃないか。楽しく喋ってるんだから」

「口と一緒に手も動かしてくれると助かるんだけど」

「一度にふたつ以上のことをすると、ひとつひとつが疎かになる」

「じゃあ、お喋りを疎かにして、洗濯を一所懸命やってほしいんだけどな」

「そんなこと、出来ると思うか？」

「出来ないだろうな」

「そうだろ」

「開き直るな」

利家に小突かれてしまった。

頭を押さえて可愛く上目遣い…なんて柄じゃないので、キッと睨み付けておく。

「じゃあな。香具夜、しっかり頼んだぞ」

「任せといてよ」

「まあ、香具夜も一緒に喋ってたタチだけだな」

「そうかもしれないけど、紅葉よりは頼りになるだろ」

「どういう意味だ」

「そのままの意味だよ」

「……………」

洗濯物籠を取り上げて、足払いを掛けておく。
転んだ利家の横にその籠を置いて。

「いてて…。いきなりなんなんだ…」

「知らない」

「ふふ、仲良しだねえ」

「どこが」

「とぼけちゃって。隠してるつもりだった？」

「か、香具夜お姉ちゃん……」

「いいじゃない。もう知らない人はいないでしょ？」

「そうだけどさあ……」

「何の話だ」

「あはは……。なんでもないよ……」

「……？」

隠してる？

何か隠してたかな？

あつ……。もしかして……！

「灯！お前……！」

「ち、違うつて……！」

「じゃあ、なんで……！」

「紅葉、契りの証人を持って窓のところで呆けてたでしょ。広場から丸見えだったよ」

「なっ……！」

「まあ、その前から噂されてたことくらいは知ってるよね？」

「そんな……。全然知らないぞ……！」

「……本気で言ってるの？」

「当たり前じゃないか……！」

「鈍感だねえ……」

鈍感……。

鈍感なのか、私は。

自分が噂されてるなんて全く考えなかったし、気付かなかった。

利家との結婚も、大々的に知れ渡ってるとは…。

「お姉ちゃん、顔がすごく赤くなってるよ」

「だ、だって…」

「みんなが知ってるのは紅葉と利家の結婚だけだから。月夜に城の外周を二人で歩いてたとか、紅葉が大胆な行動に出たとか、毒の実を食べてへ口へ口になった紅葉を利家が部屋まで抱えていったとか、そんなことは全然知らないからね」

「も、もうやめてくれ…」

「他にも、あることないこといろいろあるけど、全然知らないんだから」

「……………」

「あ、お姉ちゃんが爆発した」

…そりゃ、爆発もするよ。

なんでそんなに見られてるんだよ。
全く全部全てじゃないか…。

「お嫁さんに行けないね」

「もう結婚してるから大丈夫だよ」

「あ、そっか」

「でも、もう普通には往来を歩けないだろうね」

「…そだね」

「はあ…」

「まあ、気を落とさずに。みんな祝福してくれてるよ」

「…もう決めた。ヤウトから帰らない。向こうに住む。帰りたくない」

「ほらほら、バカなこと言ってないで。あとちよつとなんだから、さっさと洗濯、済ますよ」

「うう…」

もう嫌だ…。

今すぐにでも放浪の旅に出たい…。

恥ずかしいよ…。

上に何かズシリと重いものが乗っかる感触。
何度振り払っても、何度でも乗っかってきて。

「お母さん、起きて〜」

「うう…。嫌だ…」

「寂しさで死ぬことはあっても、恥ずかしさで死ぬことはないよ」

「じゃあ、灯の恥ずかしい噂を流してやる…」

「えっ、あつ、今のなし！」

「灯は頭を洗うとき目を瞑るのが怖くて、一人では風呂に入れない
…」

「お姉ちゃん！ちょっと！」

「灯は未だに夜中に厠へ行けない…」

「もう！やめてよ！」

「みんなが知ってることは噂になり得ないよ」

「じゃあ…夜中に厠へ行けないことが原因で…」

「ダメ！ダメだよ、お姉ちゃん！」

「ほら、灯も嫌がつてるしさ。いじけてないで出てきなよ」

「お母さん、いじけてるの？」

「いじけてない」

「ふうん」

不思議そうにこちらを覗き込む望。

尻尾がユラユラと揺れて、何か誘ってるように見えたから

「そらっ！」

「わわっ!？」

「ギューッ」

「えへへ、お母さん、くすぐりたい」

布団の中に引き込んで、ギューッと抱き締める。
望は楽しそうにバタバタと暴れて。

「こらっ。なんでお前はそんなに可愛いんだっ」

「えへへ」

「ムギュー」

「ムギュー」

子供特有の少し高めの体温に触れている間に、もうなんだかどうでもよくなってしまった。
布団をどけると、望をもう一度抱き締める。
望はニッコリ笑って応えてくれて。

「お母さん、大好き！」

「オレも大好きだよ」

「はあ…。ホント単純だよね…」

「灯は、夜中に厠に行けないせいで…」

「もう！それはやめてよ！」

「ホント、灯も恥ずかしい秘密がたくさんあるよね…」

「そ、そんなことないもん！香具夜お姉ちゃんが持たなさすぎなの！」

赤くなる灯と、ニヤニヤする香具夜。

…私は香具夜の恥ずかしい秘密もいくつか知ってるんだけど、とりあえず今は、切札としておいておこうかな。

「それより、望。ちよつと歯を見せてみる」
「うん」

「どうしたの？」

「ああ。ちよつとな…」

望の歯は全部綺麗に生え変わっていて、歯並びもいい。
でも、今気付いたけど…

「やっぱり二牙症か」

「えっ、ホント？」

「ああ。ほら、見てみる」

「わっ、ホントだ。すごいね」

「三牙症か四牙症くらい行ってるんじゃないの？」

「段階が決められてるわけじゃないから、二牙症は二牙症だ」

「ニガシヨウって何なの？」

「まあ、それはあとだ。まずは風華のところに…」

「風華って、そこで寝てるよね」

「……………」

「じゃあ、次の候補だね」

「えゝ？誰かなあ？」

灯はわざとらしく大きな動作で。

そして、二人してニヤニヤと私を見る。

「な、なんだ」

「利家のところ」

「だね。さあ、行こう」

「三平太とか、郁代とか、医務班員は他にもいるだろ！なんで犬千代なんだ！」

「さあ行こ。望もほら」

「うん」

「出発」

「こらっ！待て！」

なんで今、利家なんだよ！

収まった恥ずかしさが、また押し寄せてきて。
もう！

なんで風華はこんなときに限って寝てるんだよ！

「あー、これは大変だな」

「なんで今まで気付かなかったんだろね」

「狼は元々から鋭いからな」

「ねえ、お父さん。ニガシヨウって何なの？」

「ほら。見てみる」

そう言つて、鏡に望の顔を映す。

望は気恥ずかしいのか、少し目を逸らしている。

「イーッてして」

「イー……」

「見えるか？この真ん中の歯が前歯だな。左右二本ずつで四本、上下にあるから八本だ」

「うん」

「それで、前歯の両脇の歯が犬歯だ」

「うん」

ひとつずつ指し示して説明していく。

灯なんかは、自分の歯を触って確かめたりして。

「犬歯の隣から、第一臼歯、第二臼歯……って続いていくんだけどな。臼歯っていうのは臼みたいな形をしていて、ものを噛み砕いたりするときに使うんだ」

「ふうん」

「でも、ほら。望は犬歯の横にもうひとつ犬歯があるんだ。これが二牙症」

「病気なの？」

「病氣といえば病氣だけど、二牙症が直接的に健康を害することはない」

「……？」

「犬歯が他の人より多くても、別にどうってことはないってことだよ」

「ああ。オレも二牙症だしな」

「お母さんも？」

「そうだ。ほら」

しっかりと生えた二本並んだ牙を見せてやる。

望はそれを興味津々といった風によく観察して。

「紅葉は月光病に二牙症と、いろいろ忙しいな」

「お姉ちゃん、忙しいの？」

「そうだな。灯にちよつかいを出せるくらい忙しい」

「それは忙しいって言わないの」

「紅葉は、何かといろんな病気を引っ張ってくるからねえ」

「なんだ。人を疫病神みたいに言って」

「そういえば、お姉ちゃんって変わってるよね。一人だけ食中りしたかと思ったら、みんなが中つたときはケロッとしてたりしてさ」

「集団食中毒があつたのか？」

「何年も前の話だよ。ちょうど旅団天照の駐留期間中だったから、みんなが寝込んでる間に城の警備にあたってくれて」

「旅団天照か。あそこはヤウトの自警団が元々だからな」

「へえ、そうなんだ。知らなかった」

「灯は料理のこと以外、何も勉強してないからな」

「むう……。そんなことないよ……」

「ねえ、お父さん。望は大丈夫なの？」

「ん？ああ、そうだったな。今のところ歯並びも良いし、ちゃんと生え変わってるみたいだし、大丈夫だよ。でも、もうちょっと経過

観察を続けないといけないかな」

「うん。分かった」

望はコクリと頷いて、利家の膝の上に座る。

求めるように尻尾を振ると、利家もそれに応えて望の頭を優しく撫でる。

「えへへ」

「望は甘えん坊だな」

「うん！」

「あ。ところでさ、利家お兄ちゃんもヤウトに帰るの？」

「いや、僕は残るよ。やらなきゃいけないこともたくさんあるしな」
「そっか」

「みんなはどうするんだ？」

「私は残るかな。帰るつても、ここが家だし」

「父さんのところに帰ってやれよ。喜ぶだろ」

「また年末ね」

「はあ。お前なあ。そんなこと言つて、去年も帰らなかっただろ」
「だって。家に帰つても、お父さん、緊張して何も喋らなくて、仕入れの確認とかばかりしてるんだもん。飯は俺が作るからとか言つて、ごはんも作らせてくれないし。ジツとしてるだけなんて、つまんないよ」

「それがどれだけ幸せなことか分かってないだろ。それに、全く音沙汰なしの娘がいきなり帰ってきたら緊張もするだろ」

「音沙汰なしって、お姉ちゃんが話してくれてるんじゃないの？」

「そりゃ、ちよつとくらいは話してるけど。お前が直接、近況報告くらいしてやれよ」

「…また考えとく」

「ふふふ。…私は帰りたいな。みんなに報告しないといけないし。ルクレイはこんなに平和になりましたって」

「相変わらず信心深いな」

「だから、宗教じゃないって。ただ単なるお墓参りじゃない」

「おい、灯。オレたちってさ、前に母さんの墓に行ったのっていつだっけ」

「えっと…いつだっけ」

「…私が信心深いんじゃないで、紅葉たちが不謹慎なだけなんじゃないの？」

「そうかもしれないね」

「死んだ人は墓に住んでるわけじゃないからな。墓というのは、あくまでその人が死んだということを示す立て看板みたいなものだ。墓参りは故人を思い起こす良い機会かもしれないが、みんな、私たちの心の中で生きてるんだから。墓に行かなかったとしても、ときどき心の中のその人と一緒に話をしてあげるだけでもいいんじゃないのか？」

「…そうかもしれないけど。でも、お墓参りも大事だと思うよ。流れてゆく時間の中、一瞬でも時を止めて、その人との時間を作るってことは。前を向いて進んでいくことも大切だけど、たまには立ち止まって道端で談笑してもいいんじゃないかな」

「あのね、望のお父さんもお母さんも、お兄ちゃんも。みんな、望の心の中で生きてるんだって教えてくれたの。みんなのお墓はないけど、みんなといつも一緒なんだって」

「誰に教えてもらったんだ？」

「美希お姉ちゃん。あと、タルニアお姉ちゃん」

「…そうか」

「だから、寂しくないよ。それに、新しいお父さん、お母さん、お姉ちゃん、お兄ちゃん。弟も妹も。いっぱい、いっぱい、家族が増えたから。だから、寂しくないよ」

「そうだな」

望は強い子だな。

自然と伸びた手は、望の頭をそつと撫でていた。

「ん」

「それで、紅葉は？」

「オレは風華や空と一緒にヤウトに行くことにするよ」

「そつか。良いところだから、紅葉もきつと気に入るだろ」

「うん」

望の頬を突ついて口を開けさせ、鋭い二本の牙を爪でくすぐる。すると、望は利家の膝から私の膝に乗り換えて甘噛みを始めた。

…まだまだ甘えたい年頃、なんだよな。

ここに来たときは短く切り揃えられていた髪も、もう肩を超える長さになっていて。

手櫛を入れながら耳の裏を搔いてやると、嬉しそうに尻尾をパタパタさせる。

と、そんな静寂も、この城では五分と保たないらしい。

バタバタと廊下を走ってくる音が近付いてきた。

「兄ちゃん、兄ちゃん！なんで起こしてくれなかったの！？」

「何がだよ」

入ってきたのは、案の定風華だった。

相当慌ててるらしく、寝癖だらけで。

「ラズイン旅団のみんなは！？もう発ったんじゃないの！？」

「何言ってるんだ」

「だって、もう馬車が…！」

「お前の目は銀紙で出来てるんじゃないのか？」

「え…？」

利家は、窓の外、広場の端の方を指して。
そこには、まだ確かにラズイン旅団の馬車が何台か止まっていた。

「でも、タルニアさんが出ていくのを…」

「風華ちゃん、何か呼んだかしらあ？」

「え、あ、あれ？タルニアさん…？」

「はあ…。夢でも見てたんじゃないのか？」

「あ、あはは…。そうかも…」

そしてタルニアは、そのまま風華を部屋に押し込んで中に入ってきた。
で。

別れの挨拶だろうな。

いつの間にかクノと長之助も揃っていて。

さらにおまけに、クノにはルウエも付いてきていた。

「クノお兄ちゃん、行っちゃうの…？」

「はい…。でも、私と長之助はまた来月にも来ますから」

「絶対なんだぞ！約束！」

「はい。約束です。そうだ、次のときには美味しいお菓子をたくさん用意してきますからね」

「えへへ。ありがと…なんだ…ぞ…」

「ルウエさま…」

「うつ…うつ…。絶対、絶対…！約束だもん…！」

「はい。約束、ですよ」

「…そういうことだから。短い間だったけど、ありがとうね、利家くん」

「いや。何も出来なくて、すまなかった」

「そんなことないわ。楽しかったわよお」

「そう言ってもらえると有難い」

「ふふふ。じゃあ、また。よろしくお願いするわねえ」

「ああ。またな」

「利家。面白い医学書があったら、また持ってくるからな」

「よろしく頼むよ」

「貸出してるやつは、またいつ返してくれてもいいから、風華と一緒にゆっくり読みなよ」

「ふふ、そうさせてもらうよ」

そしてタルニアはニッコリ笑うと、一度深く礼をして立ち上がる。

長之助もそれに続いて。

「でも、泣きじゃくるルウエのお陰で、もう少し一緒にいられそう
だ。」

クノは、あやすようにルウエをそっと抱き締めていた。

100(後書き)

ついに百話目です。

長かったような、短かったような。

「じゃあ、行ってくるね」

「行つてらっしゃい。残つてるチビたちのことは心配いらないから。それより、村に行くみんなの体調管理だけは気を付けて」

「うん」

「村長によろしく言つておいてくれ」

「分かった」

そして、利家は風華の頭をそつと撫でて。

風華も応えて、利家を一度抱き締める。

セトは不思議そうにそれを見ていた。

風華は次にそんなセトの額に手を当てて。

二人とも目を瞑り、何か話してるようだった。

「風華」

「あ、うん。分かった。タルニアさん、お待たせしました」

「はあい。じゃあ、行きましようか」

「はい」

そつとセトから離れると、タルニアの馬車に乗り込んで。

最後にもう一度だけ、利家に手を振る。

「行ってきます!」

「行つてらっしゃい」

「では、出発します」

そして、馬車が動き始める。

門の前に立つ利家も、長年住み慣れた城も、どんどんと遠ざかって

ゆく。

当分見なくても寂しくないようにじっくり目に焼き付けて、そっと幌を閉じる。

「すみません。無理言っちゃって」

「いいのよお。ルウエちゃんを家に送るついでだし」

「ふふ、そうですね」

「えっと、市場の一番端っこだよ」

「はあい。了解よ」

ルウエは泣き疲れて、よく眠っている。

寝てる間に…なんていうのは良いやり方ではないけど。

でも、クノと別れることは、いちおうなんとか納得はしてくれた。

「おべんとう」

「あつ、葛葉！まだ開けないの！」

「おなかすいた」

「もうちよつと待ってなさい」

「いいじゃない。食べさせてあげなさいよ」

「こぼしたりしたら大変ですから…」

「馬車が汚れるくらい、平気よお。汚れなんてすぐに取れるんだから。でも、葛葉ちゃんのご機嫌は、簡単には取れないわ」

「いただきます」

「あつ！ちよつと！葛葉！」

「ヤーリエも食べるよ。昌士特製の魚弁当だけど」

「うん」

頷くと、ヤーリエは弁当箱を開けて。

朝のことを考えてか、葛葉のものと比べても、明らかに魚の量は少なかった。

昌士がここまで魚を抑えることが出来るとは思わなかったけど。

「いただきます」

「もう…。はい、どうぞ。こぼさないように気を付けなさいね」

「うん」

ヤーリエは箸を取り出すと、まずは蒸かし芋から食べ始める。

…嫌いなものは最後まで残す派なんだろうか。

「お魚さんは最後だよ」

「ほう。なんでだ？」

「朝、食べてみたら美味しかったの。だから、最後まで取っておくんだ」

「ヤーリエ、魚が嫌いだったの？」

「うん。匂いがイヤで、今まで食べたことなかったの。でも、紅葉お姉ちゃんが美味しいよって教えてくれたの」

「オレは何もしてないよ。ヤーリエが、自分自身で魚を食べられるようになったんだ」

「へえ…。偉かったね、ヤーリエ」

「えへへ」

「魚はいろんな美味しい食べ方があるから、食べられないと勿体無いしねえ」

「今はツグの季節ですからね。私は刺身がお勧めです」

「あら、気付かなかったわあ。じゃあ今日の夕飯は、クノのためにツグのお刺身にしましょうかねえ」

「夕飯！」

「あ、いえ、その…そういうつもりでは…」

「ツグのお刺身…。ぼくも、お母さんに頼んでみる」

「魚の匂いが嫌いだったなら、いきなりお刺身はキツいかもしれないけど…」

「まあ、何事も挑戦だ。立ち向かわなければ分からないこともある」
「そうだけど…」

「大丈夫だよ。もう魚の匂いは嫌いじゃないもん。それに、もっともつと美味しいもの、食べたいもん。今まで食べてなかったから…だから、今からいっぱい食べるの！」

「…そつか。そうだよな。頑張つてね、ヤーリエ」
「うん！」

風華が頭を撫でると、耳を寝かせてニツコリ笑う。
いろんなものを美味しく食べて、心豊かに。
しっかり成長してくれよ。

「おゝいなりゝ。いなりゝ」

「えつ、稲荷？」

「美希だな」

「んゝ」

「ぼくのにも入ってるよ」

「あつ！二重底なんて…。葛葉が食べすぎるからやめてって言ったのに…」

「ふふ、美希ちゃんも葛葉ちゃんを喜ばせてあげたいのよ。今日は見逃してあげなさいな」

「はあい…」

本当に美味しそうに稲荷寿司を食べる葛葉を見ると、こっちまで幸せになる。

美希も、これが見たくて稲荷寿司を作るんだろう。
食べ過ぎるのは確かに心配だけど。

「お母さんにもあげるゝ」

「いいよ。葛葉が食べなさい」

「むう。すききらいはダメ」

「好き嫌いじゃないけど…。じゃあ、ひとつだけ貰おうかな」

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

「おいしい？」

「まだ食べてないよ…」

葛葉がジツと見守る中、風華は一口で食べて。

頬を膨らませて噛む様子は、かなり面白い。

「ふふふ。風華ちゃん、大きい口ねえ」

「ん！んんっ！」

「食べてから話せよ」

「んーっ！」

「お母さん、なに言ってるのかわかんない」

「…………。はあ…。恥ずかしい…。いつも通りやっちゃった…」

「恥ずかしいの？」

「まあ、今のは相当恥ずかしいな」

「姉ちゃん！」

「ねえ、おいしかった？」

「え、あ、うん。美味しかったは美味しかったけど…」

「うん！おいしい！」

「…恥ずかしかったけどな」

「もう！改めて言わないで！」

「ふふふ。風華ちゃん、可愛かったわよあ。リスみたいで」

「可愛くないです！」

顔を真っ赤にさせて俯く風華。

それを見て、タルニアはニコニコしている。

「このお魚、なんて言うの？」

「それはカムリだな。旬はまだもうちょっと先だけど、もう充分脂も乗ってるし、美味いぞ」

「へえ」

「ねーねーにもあげる」

「ん？そうか。ありがとう」

「どういたしまして」

葛葉に貰った稲荷寿司を、私も一口で食べてしまつ。

風華は、見逃すまいと顔を上げるけど。

「残念。もうないよ」

「ええっ！？ちゃんと噛んだの！？」

「ああ。ちゃんと噛んだぞ」

「二、三回ね。よく喉に詰めないわねえ」

「二、三回は噛んだうちに入らないの！ちゃんと噛んで食べなさい！」

「んー、また考えておく」

「それじゃダメなの！」

「ふふ、そうねえ」

そして、説教を始める風華。

タルニアは、ひたすら笑いをこらえていて。

葛葉とヤーリエはそんなことなんてお構い無しで、夢中で弁当を食べていた。

「ありがとうございました」

「いいえ、いいのよお。それより、ルウエちゃんを早く寝かせてあげてね」

「うん」

「じゃあね。また遊びに来てね」

「オレたちは、しばらくいないけどな」

「うん、分かった。ルウエにも言っておくね」

「ああ」

「じゃあ、行つてらっしゃい」

「行つてきます」

ルウエを背負うヤーリエの頭をそつと撫でる。
パタパタと揺れる黒い尻尾が可愛かった。

「あ、紅葉お姉ちゃん」

「ん？どうした」

「ありがと」

「何が？」

「えへへ」

ヤーリエは、ゆっくりと額を合わせる。

狼の、最愛の印。

「なんでもないよ」

「そうか」

「じゃあ、今度こそ、行つてらっしゃい」

「行つてきます」

もう一度、ヤーリエの頭を撫でて。
そして、馬車に乗り込む。

「では、出発しますね」
「ああ」

車輪が回り始める。
風華はヤーリエの姿が見えなくなるまで手を振っていた。

森の中を進む。

悪路のはずなのに、馬車はほとんど揺れなくて。
お腹いっぱいになって眠っている葛葉が、全く起きないくらいだった。

「不思議かしらあ？」
「ああ」

「車軸と車体の間にバネが入ってるのよ。バネが揺れを打ち消してくれるから、車体はあまり揺れないの」

「ほう。よく考えたな」
「ユンディナ旅団の技術よ。あそこは副業で技術屋もしてるからへえ」。ラズイン旅団は何か副業はしてないんですか？」

「してないわねえ」
「よく言うよ」
「どっちなんですか？」

「ラズイン旅団は、やってないわあ」
「んー、まあ、そう言ってしまうえばそうだな」
「……？」

クーア旅団はラズイン旅団の裏の顔かもしれないが、クーア旅団はクーア旅団であり、ラズイン旅団ではないし副業でもない…といったところか。

”裏”専門とはいえ盗賊は盗賊だから、隠すのは当然だけど。

「副業といえば、旅団天照も面白いことをしてるわぁ」

「面白いこと？」

「正式には公開してないけどねえ」

「え？何なんですか？」

「ふふ、団長に聞きなさいな。今、ヤウトにいるはずだから」

「えっ、そうなんですか？」

「ええ。そう報告を受けてます」

「へえ…。久しぶりだなぁ」

「団長に会ったことあるのか？」

「うん。ヤウトに来たときは、いつも村でちょっとしたお祭りをやるんだ。そのときに」

「ほう。じゃあ、ちょうどいいときに帰るわけだ」

「うん」

「私たちも少し寄っていきましようか。ねえ、クノ」

「ダメです」

「もっ…相変わらず堅いわねえ」

「堅くて結構です」

「いいじゃないですか。寄っていつてくださいよ」

「やめとけ。団長ともなれば、いろんな予定があるんだ」

「姉ちゃんは隊長なのに暇じゃない」

「ふふ、それは部下が優秀だからよお。部下が優秀であればあるほど、上は暇なの」

「…力不足ですみません」

「あら。ラズイン旅団のみんなも優秀よお。お陰で、私は最低限の仕事しか出来ないし」

「出来ないってことは、もっとやりたいのか？」
「ふふふ。やっぱり、みんなに任せておくわあ」
「ありがとうございます」

部下が優秀なほど、上は暇になる。

でも、組織が大きくなるほど、仕事の量も多くなる。

私の場合、城の衛士というごくごく小さな組織だから仕事が無くなってしまう。

でも、タルニアの場合は、ラズイン旅団という全国に網を広げる巨大な組織をまとめあげてるわけだから、どうしてもやらないといけない仕事も出てくるんだろう。

「……………」

「ああ。分かった」

「クノさん、何か言いましたか？」

「どうやら、囲まれているみたいです」

「え？誰に？」

「まあ、盗賊だろうな」

「ええっ！？盗賊！？」

「十人か。オレが追い払ってくるよ」

「いえ、如月に行かせるわあ」

タルニアが何か合図すると、如月が何も無い空中から現れる。

…聖獣って不思議だな。

「タルニアさま、呼びましたでしょうか」

「ええ。外の曲者を追い払ってほしいのよ」

「お安い御用です」

「頑張つてねえ」

「はい」

そして、如月は外へ飛び出していった。
一人で大丈夫なんだろうか。

「大丈夫よ。あの子、ああ見えて武闘派だから」

「武闘派ですか…」

「ええ」

「そういえば、クノはさっき誰と喋ってたんだ？」

「千早ですよ」

「千早？服ですか？」

「そんなわけではないだろ…」

「名前ですよ。この子の」

そう言つて、クノは何かを窓から投げ入れる。

それは、小さな黒い龍だった。

「あわわ…」

「ん？」

「千早、みなさんに挨拶しなさい」

「うう…」

「クノ、この子は？聖獣かしらあ？」

「ええ。黙っていてすみません」

「それはいいのよ。いつ契約したの？」

「二ヶ月前です。千早は人見知りが激しくてなかなか出てこないから、紹介出来なくて…」

「そう。人見知りねえ」

タルニアは、カチコチに固まった千早の黒い翼にそつと触れる。
すると、だんだん涙目になってきて。

…龍って泣くんだな。

「うわぁん！お兄ちゃぁん！」

「タルニアさま。追い払ってまいりました」

「そう。ご苦労さま」

「いえ。ところで、この者は？」

「クノの聖獣よ。千早っていうらしいわぁ」

「千早ですか」

「うええ…」

”豊穰の報せ” クルクス。

黒い龍は、ただひたすら泣いていて。

「すみません…。こんな形で紹介になって…」

「ふふふ。いいじゃない。可愛いわよぉ」

「クルル…」

「風華？」

「龍の安心する声だつて。セトが言ってた」

「ほう」

「クルル…」

「クルル…」

風華に合わせて、千早も喉を鳴らす。

そして風華は、千早をそつと抱き上げて。

「クルル…」

「クルル…」

千早はゆっくりと目を瞑り、そのまま眠ってしまった。

「ふふ、龍をあやすのが上手いのね」

「いえ。始めてで…」

「へえ。それなら、なおさらすごいわあ」

「そ、そんなことないですよ」

褒められて、満更でもないようだった。

…それにしても、世界は広い。

まだまだ知らないことがたくさんあるんだな。

空がいよいよ赤く染まる頃、馬車はゆっくりと止まった。

「さあ、着きましたよ」

「どうもありがとうございました」

「歩いた方が速かったんじゃないかしら？」

「馬車はちゃんとした道しか通れませんか。どうしても蛇行してしまいます」

「でも、楽しかったですよ」

「そう。それなら良かったわあ。それで、クノ」
「はい」

クノは頷くと、御者台から降りて。そして、裏に回って幌を上げる。

「どうぞ、紅葉さま、風華さま」

「ありがとうございます」

「葛葉はオレが背負っていくよ」

「うん、ありがとう」

「千早。風華さまから離れなさい」

「ヤだもん」

「あはは……。別にいいですよ……」

「いえ、しかし……」

「すっかり気に入られたみたいだな」

千早は風華の服にしがみついて離れない。
器用なものだ。

爪を立てるわけでもなく、それでいて、ギュッと握っているわけで

もない。

…吸盤でも付いているのか？
前足を裏返してみる。

「……！」

「吸盤じゃないな」

「何が？」

「いや、どうやってくっついてるのかと思って」

「細かい毛が生えてるんでしょ。それより、葛葉、落とさないでね」

「ああ」

「あつ！風華だ！」

「風華お姉ちゃん！」

「みんな、元気にしてた？」

「うん！」「元気だった！」

「そう。よかった」

「お姉ちゃんは、誰なの？」「あ、葛葉だ」

「ああ、おい。危ないから、葛葉を引っ張るな」

「銀色だ」「すぐく、髪、長いよ」

「こらこら。まずは、そこをどける。またあとで相手してやるから」

子供たちに囲まれて身動きが取れない。

千早も、風華の頭の上へ移動していて。

ずり落ちてきた葛葉を背負い直し、どうしようか思案してみる。

「ほれ、チビたち。綺麗なお姉さんが困っているではないか」

「あ、団長さんだ」「団長さん」

「お久しぶりです」

「おつ、風華ちゃん。久しぶり。話は聞いてるよ。ずいぶん大それたことをしたねえ」

「ふふ、首謀者は兄ちゃんですけどね」

「旅団天照団長。お変わりないようで」

「ん？よく見りゃ、タルニアとクノじゃないか。久しぶり」

「久しぶり」「お久しぶりです」

「どう？上手くいつてる？」

「お陰様でねえ。それより…」

「ああ、何か込み入った話なら遙に言つて。ぼくは分からないから」

「遙ちゃんも大変ねえ。それに、そんな込み入った話でもないわ」

「ふむふむ。じゃあ、聞いておこう」

「森で盗賊に会ったわ。今回は如月が追い払ったけど、また出るかもしれない」

「ほう、そんなことが。すぐに出頭するように説得させにいくわ」

「ずいぶんと手荒い説得もあつたものねえ」

「まあまあ。そこは大目に見てあげて」

「はいはい」

「チビたち。ぼくは用事が出来てしまった。あそこの犬のお兄ちゃんに遊んでもらいな」

「えっ。わ、私ですか？」

「他に誰がいるのさ。じゃあ、よろしく頼んだ」

「お兄ちゃん」「お名前は？」

「あつ、ちよつと！桐華さま！」

「よろしくね」

相変わらず台風みたいなやつだな。

それより、葛葉をどうにかしないと…。

「姉ちゃん、こっちだよ」

「え？あ、うん」

いつの間にか風華はずっと先に行つてて、
クノの方に流れるチビたちの間を縫って、風華のところまで行く。

「こつちこつち」

「ああ」

「あそこが私の家なんだよ」

「ほう。結構大きいんだな」

「そうかな？」

「ユールオでは長屋が主流だから」

「ああ。そりゃ長屋に比べたら大きいかもしれないけど。でも、やつぱりお城よりは狭いよ」

「そりゃそうだ」

そんなことを話してる間に到着。
近くで見ても、やっぱり大きい。

「あ、そうだ。空姉ちゃんと桜の家は向こうだよ」

「ああ。分かったから、まずは葛葉だ」

「そうだね」

家に入って、土間で下履きを脱ぐ。

そして、風華のあとに付いていって。

一番奥まで行くと、風華は押し入れから布団を出して手際よく敷いていく。

「はい、どうぞ」

「ああ」

葛葉をゆつくりと下ろし、布団を掛けてやる。

よく眠っていて、もしかしたら明日まで起きないかもしれないな。

「さて、お祭りだね」

「え？空の家じゃないのか？」

「そんなの、いつでも行けるじゃない」

「……………」

「さあ、いっぱい食べないと」

「…そうだな」

ホント、食い意地ばかり張ってるな。

そうやって呆れているうちに、風華はまた眠ってしまった千早を抱えて外に出る。

…太陽も、もうすぐ山の向こうへ沈む。
外から聞こえる音は、陣太鼓だろうか。
城と負けず劣らずの夕飯になりそうだ。

祭りというより、大食事会だった。

旅団から食材が提供されてるんだろう。
様々な料理が並んでいた。

そして

「むふふ」。相変わらず、隊長しゃんはお酒に強いのだ」

「まったく…。そんなに呑んで、明日どうなっても知らんぞ」

「いいのいいの…。どうせ、遙ちゃんがやってくれるんだもん」

「桐華は、もうちょっとくらい団長らしくしたらどうなの？」

「堅いこと言わにやいの、タルニアちゃん」

そう言つて、笑いながらタルニアの背を叩く。

タルニアは呆れ顔で。

「それにしても、クノちゃんはお酒に弱いね」

「あなたが無理矢理呑ませたのでしょ？」

「あり？そうだった？」

「…あなたは、もつとお酒を控えるべきね」

「うう…隊長しゃん、タルニアちゃんがいじめるの」

「まわりつくな」

「隊長しゃんも冷たいでしねえ…」

「お酒って美味しいの？」

「千早にはまだ早いな」

「ねえ、ちよつとだけ」

「ダメだ」

「むう…」

すっかり懐いた千早は、酒に興味を示し、盃の匂いを嗅いだりして、
…盃を少し傾けて酒を頭から掛けてみる。

「うにゃ…。な、何これ…。やあん…」

「だから言っただろ？」

「うう…」

「あはは。なんか、ちつこい龍がいるのら」

「やあ、離して！」

「桐華。それはあなたのおもちやじゃないのよお」

「じゃあ、タルニアちんの？」

「クノのよ」

「ほう。クノちんの」

「離して〜！」

桐華は、バタバタと暴れる千早を面白そうに観察する。
小さな黒い龍は必死に抵抗を試みるが、上手くいかない。
…そして、今日も月は昇り、夜は更けてゆく。

…なんだかいつもと違う匂いがする。

「ん…？」

すぐそばに葛葉の匂い。

そつと頬に触れると、モゾモゾとこちらに寄ってきた。

寝ぼけてるのかな。

服をギュッと握られてどうにも動けないから、もう一眠りすることにした。

「ふぁ…」

まだ月が見ていてくれてる…。

お休み…。

目が覚めた。

まず葛葉の寝顔が見えて。

耳をくすぐると、大きな欠伸をして目をパツチリと開けた。

「ねーねー」

「おはよう、葛葉」

「うん。おはよ」

「髪がボサボサだぞ」

「えへへ」

「何が嬉しいんだ？」

「ルウエのくしですいて」

「ああ、そういうことか」

たしか、私の書き物机の引き出しに仕舞っていたはずだ。
早速、布団から抜け出して…

「あれ…？」

「どうしたの？」

「あ、いや…」

「……？」

そうか。

そういえば、ヤウトに来てたんだっとな。
道理で、匂いも雰囲気も違うはずだ。

「あ、姉ちゃん。おはよ」

「おはよう。葛葉の櫛、知らないか？」

「荷物の中にあると思うよ。ちょっと待ってね」

そう言つて、風華は持っていた箱を床に置いて荷物を漁りだす。

「あ、そうだ。葛葉、おねしょとかしてない？最近は大丈夫だったみたいけど」

「してないと思うけど。どうだ、葛葉」

「してないよ」

「そう。それなら良いんだけど。はい、櫛。あと、朝ごはん、すぐに作るね」

「ああ」

風華から櫛を受け取り、布団のところに戻る。

葛葉はゴソゴソ布団の中で動き回って、楽しそうにしている。

「楽しいか？」

「うん！ひさしぶりにかえってきた！」

「そうだな。オレは初めてだけど。それより、ほら。髪をすいてやるから、こっちに来て」

「えへへ」

布団から抜け出すと、私の膝の上にちょこんと座る。
九本もある尻尾を上手く身体に纏わせて。

「そんなにくつついたら、前髪しかすけないぞ」
「ん」

今度はこちらに振り返って、ギュッと抱きついてくる。
髪をすいてもらうより、こっちの方が好きなんだな。
ひとまず櫛を置いて、葛葉を抱き締める。

「えへへ。ねーねー、大好きだよ」
「ああ。オレも大好きだ」
「ん」

尻尾をユラリユラリと振って。
久しぶりに故郷へ帰ってきて、気持ちが高揚しているんだろうな。
ゆっくり頭の後ろを撫でてやると、胸に額を擦り付けてきて。

「朝から仲良しだねえ」
「桜か。おはよう」
「おはよ」

「昨日はどこで寝たんだ？こっちはいなかったみたいだけど」
「そらねえの家だよ。昔からあそこに住んでるの」

「そうなのか」

「うん。ところで、光、見なかった？」

「いや。いないのか？」

「うん。ボクが起きたときにはいなくてさ。こっちに来てるのかと思っただけだ」

「オレは今起きたところだからなんとも言えないが、たぶんこの家にはいない」

「そっかあ。旅団のところに行っただのかなあ」

「ラズイン旅団はもう発ったのか？」

「さあね」

「もう朝の暗いうちに発っていったよ。クノさんが酷い二日酔いだっただから、薬を出してあげただけだ」
「ほう」

ちょうど部屋の前を通りかかった風華が答える。

朝の暗いうちか。

私が一回起きたのはそのせいだったのかな。

「挨拶もしないで、ごめんなさいって。昨日のうちに発つ予定だったのに、ちよつと遅れたから急いでたみたい」

「そうか」

「引き止めてすみませんって謝っただけだ…」

「そんなのいいわあ。どうせ、ゆっくり行く予定だったから。楽しい時間をありがとうね。また会いましょうねえ。…だろ？」

「えっ、聞いてたの？」

「いや。でも、タルニアならそう言うだろうと思って」

「タルニアさんのこと、よく知ってるんだね」

「まあな」

付き合いも長いしな。

三ヶ月に一回の付き合いだけど。

いや、その期間が逆に大切なのもかもしれない。

毎日顔を合わせる付き合いも良いが、そういう付き合いも良いものだ。

「あ、そうだ。光だ。風華、光、知らない？」

「光？見てないよ」

「どこに行つたのかな…」

「光のことだから、何も言わないで勝手に遠くに行くなんてこと、ないでしょ。桜じゃあるまいし。村の中にいるんじゃない？」

「ん…？今、なんか気になること言わなかった？」

「気のせいでしょ。それより、光に何か用事でもあるの？」

「うつん。朝起きたらいなかったから心配になっただけ」

「空姉ちゃんは何も知らないって？」

「あ…。そういえば、聞いてなかった…」

「空がどうかしたのか？」

「村の中のことなら、たいがいなんでも知ってる情報屋だよ」

「情報屋ねえ…。ただの噂好きなんじゃないのか」

「そうとも言つかもしれない」

「正確に言えば、噂好きじゃなくて事実好きだけだね」

「ふうん。まあそれはそれとして、光の行方は空に聞く、でいいのか？」

「うつん、そうだね。じゃあ、ボクは一旦帰るよ」

「寄り道しちやダメだよ」

「…どこに寄り道する場所があるのさ」

「桜はどこでも寄り道出来るからね」

「むう…」

と、そのとき、誰かのお腹の虫が鳴いた。

「あ、そうだ。朝ごはんだった。ごめんね、姉ちゃん」

「いや、今のは葛葉だ」

「おなかすいた…」

「葛葉だったの？もうちょっと待ってね。すぐに作るから」

そして、風華は部屋を出て朝ごはんを作りに行った。

「あはは。大きな音だったね」

「笑い事じゃないぞ。な、葛葉」

「……………」

「ほら、ご立腹だ」

「ふふ、ごめんね。それじゃあ、ボクは帰るよ」

「ああ。またあとで」

「うん。あとでね」

葛葉の頭を軽く撫でると、桜も部屋を出ていった。

私も、話が長引いてすっかりご機嫌斜めの葛葉の背中をそっと叩いて。

「むう……」

そんな風に呻きながらも、葛葉の尻尾はまたユラリユラリと揺れていた。

風華の特製朝ごはんは、なんとも言い難い味だった。

「美味しい…?」

「ん…。まあ、うん…」

「もしかして不味い…?」

「ん…ん…」

「涼さんの料理教室で、少しくらは上手になったと思ったんだけど…」

「あ、いや、不味くはない…な」

「無理しなくていいよ…」

「ほら、あれだ。城の連中が上手すぎるだけだ。風華が下手なわけじゃない」

「うん…。ありがと…」

そして、風華は箸を止めてしまった。

…不味くはない。

でも、美味しくもない。

なんだろうな、これは。

不思議な味だ。

「お母さん、食べないの?」

「葛葉…」

「葛葉が食べてもいい?」

「うん…」

「えへへ」

葛葉は風華の分を取ると、またゆっくりと食べ始める。

しかし、こんな小さな身体のどこに、これだけのものを入れる場所があるのだろうか。
目が合うとニツコリ笑って。

「ねーねーにもあげる〜」

「ん？ いいのか？」

「うん！ あーんして〜」

「あーん…」

口を開けると、南瓜の煮物を入れてくれた。
私が好きなものを知ってくれてるのかな。

「おいしい？」

「ああ。美味いぞ」

「えへへ」

葛葉はまた笑う。

美希が見ていたら五月蠅いだろうな。

…風華は苦笑いを浮かべていた。
自信なさげに、申し訳なさそうに。

「風華にも食べさせてやれ」

「うん！」

「あ…私は…」

「お母さん、あーんして〜」

「う…。あーん…」

「はい、どうぞ」

「うん…」

私と同じ、南瓜の煮物を貰って。

決まりが悪そうにこちらを見る。

「おいしい？」

「う、うん…美味しいよ…」

「むう…。美味しくなさそう…」

「そ、そんなことないよ…」

「うう…」

「あつ、ごめんね…。美味しいよ。美味しいから…」

「うええ…」

葛葉は泣き出してしまった。

必死に葛葉をなだめようとする風華だけど、上手くない。

「うつ…うつ…」

「ごめんね、葛葉…。ごめん…」

「葛葉、あーんして？」

「ひ、光？」

「お母さんが…葛葉…おいしくなさそう…」

「うん。泣かないで、あーんして？」

「うつ…うつ…。あーん…」

「はい」

光が入れた焼き魚を泣きじやくりながら食べる。

今言ってたことから考えるに、葛葉は風華が自分のことを嫌いだから、美味しくなさそうにしていると感じたんだろうな。

優しく葛葉の頭を撫でる光を、風華はただ見ているだけで。

「美味しい？」

「うん…」

「じゃあ、お姉ちゃんも美味しいって思ってたはずだよ？なんで、

美味しくなさそうだななんて思ったの？」

「かなしそうだったから……」

「葛葉は、哀しい顔、好き？」

「ううん……」

「私も、好きじゃないよ。お姉ちゃんも、きっと、そうだよ」

「うん……」

「好きじゃないことなんて、したくないよね。だから、お姉ちゃんも、してないよ」

「ホント……？」

「うん。ね、お姉ちゃん」

「え……あ、うん。してない」

「ほらね」

「うん……」

「お姉ちゃんは、葛葉のこと、嫌いなんかじゃないよ。だから、安心して」

「うん」

「じゃあ、続き、食べよ？」

「うん！」

そして、葛葉はまた食べ始める。

光はその横で静かに微笑んでいて。

…風華も私も、見ていることしか出来なかった。

いや、見ているだけでよかった。

それだけ光は、葛葉を上手くなだめていた。

「……………」

風華は何も言わず、光を見ていた。

片付けも終わり、いつもなら洗濯の時間くらいなんだけど、今日はやらなくていいらしい。

風華は村長の家へ行き、葛葉と光は広場で遊んでいる。結果として暇を持て余している私は、寝間で寝転んで天井を眺めていて。

すると突然、桐華の顔が割り込んできた。

「なんだ」

「んー、風華がさ。元気なさげだったから」

「ああ。そうだな」

「原因は葛葉でしょ」

「まあな」

「風華ちゃん、前から葛葉のことで悩むことが多かったんだよね」

「ふうん」

「あれ？興味なし？」

「いや。オレだって、長いとは言えないかもしれないが、親密な付き合いをしてきたつもりだ。風華が何を考えているか、だいたいは分かる」

「ほむほむ。紅葉も相変わらずだねえ」

「年を取ると、変わることが難しくなる」

「またまた」。ぼくとそんな変わらないクセしてさあ」

「お前、何歳だ」

「永遠の十八歳、永遠の青春時代だよ」

「頭の中が永遠の春なのか」

「そうそう。一面お花畑でキャッキャウフフ…って、なんでやねん！」

「お前は、ノリツツコミの修行をするために旅団を率いているのか」

「ムッフ、実はそうなのだ」…って、なんでやねん！

「もついいから。それで、何か用なのか」

「うん…って、なんでやねん！」

「用がないなら帰れ」

「むう。冷たいなあ、紅葉ちゃんは。ちょいとボケてみただけじゃない」

「お前には悩みがなさそうで何よりだ」

「あはは、悩むだけ無駄だもんね」

「それで、用件は」

「まあまあ。お茶でも飲みながら、ゆっくり話そうじゃないか」

「はあ…。まったく…」

桐華はいつもそうだな。

とにかく自分の歩調を崩さない。

それどころか、周りもみんな巻き込んで自分と同じ速さで歩かせる。それでも嫌な気分にならないのは、桐華自身が人を惹き付ける何かを持ってるからだろう。

「シイズのお茶だよ。しかも、水で淹れられる冷茶なんだよ。落ち着くよ」

「ほう、冷茶か。オレは、ナウタムの知覧茶というのも好きだがな」

「ふむ。また取り寄せておこう」

「よろしく頼む」

「それでさあ、光のことなんだけどお」

「風華のことじゃないのか」

「ああ、そうだった」

「まったく…」

「お茶、お茶。緑茶、麦茶、玄米茶。でも、ぼくは沢庵が好き」

「支離滅裂だな」

「あり？そうかな？」

「ああ。全くもって」

「昔にねえ、沢庵っていうお坊さんか何かがいたんだって」

「何かって何だよ…」

「まあいいじゃない。それで、お坊さんはお茶菓子忘れた」

「沢庵の話とお前の話を続けなくていいか」

「あはは。お坊さんがお茶菓子忘れちゃったね。ちょっと取ってくるよ」

「行つてらっしゃい」

「行つてきまゝす」

笑いながら、桐華は部屋を出ていった。

本当に騒がしいやつだ。

それが桐華の良いところでもあるのかもしれないけどな。

「この巾着餅、美味しいね」

「…オレは饅頭とか団子だと思ってたんだがな」

「いいじゃん。お昼のおでん、ちよつと貰ってきたんだよ」

「だから、なんでおでんを貰ってくるんだよ」

「そりゃ…ちよつと作ってたから」

「……………」

「あはは、大丈夫だつてえ。この巾着餅、美味しいからさあ」

「そつという問題じゃない！」

「まあまあ、抑えて抑えて。遙、ちよつと」

「はい、なんでしようか」

「うおつ！いたの！？」

「じゃあ、なんで呼んだんですか…」

「ちよつと呼びたかっただけ」

遙は呆れた顔で桐華を見て。

大きいため息をつく、手に持っていた風呂敷を置く。

「…お茶菓子、ここに置いときますので」

「おつ、ありがとね」

「いえ。間抜けな団長を支えるのも、私たちの役目ですから」

「いやあ、照れるなあ」

「喜べるようなことは言っていないぞ」

「ありゃりゃ」

「では。ごゆるりと」

「うん」

一度深くお辞儀をすると、部屋を出ていった。

遙も大変だな。

こんな団長を支えないといけないなんて。
その桐華は、早速風呂敷を開けている。

「わはゝ、みたらし団子だよゝ」

「ほう」

「それじゃ、冷茶を淹れて…」

「ふうん。冷茶でも結構香りが立つんだな」

「特注だかね」

「相変わらず、お茶が好きなんだな」

「お茶は良いよゝ。落ち着くからね」

「じゃあ、お前はもつとお茶を飲むべきだ。落ち着きがないから」

「うーん。あんまり飲みすぎると、すぐに厠に行きたくなるから」

「ほう。お前でも厠に行くんだな」

「旅の途中は無理だけだね。その辺の草むらでやるしかないよ」

「…まあ、お茶のお陰かもしれないな」

「ん？何が？」

「さあな」

「ええゝ」

桐華が天真爛漫でいられるのは、な。

ていうか、もうちょっと怒ってもいいようなものだけど。

…桐華はいつ怒るのかな。

「そんなにジツと見つめられたら照れるなあ」

「じゃあ見ない」

「ヤだよお。見て見てゝ」

「ジツ…」

「あはは。やっぱり恥ずかしいなあ」

「…………。それで、何しに来たんだ？」

「んー？なんだっけ？」

「……………」

「えっとあ……」

「…風華の話じゃないのか」

「ああ、そうだった」

「それで？」

「うん。風華ちゃんがね、葛葉のことで悩んでるから、どうしてあげたらいいのかわって」

「別にどうしなくてもいいじゃないか」

「ええ〜」

「助けが必要なときは、風華から言ってくるだろ。自分自身で抱え込むようなら、そのときは叱らないといけないけど」

「うーん……」

「それに、風華の周りにはたくさんの人がいる。私たちだけじゃないんだから」

「…そだね」

桐華はニツと笑うと、お茶をすすする。

みたらし団子に手を伸ばして、ひとつ、口に入れる。

「美味しいよ。紅葉も食べなよ」

「ああ。そうだな」

私もひとつ貰う。

…うん。

タレの辛さと団子の甘さが絶妙だな。

「どこのみたらし団子なんだ」

「ヤクウルかなあ」

「ほう。美味しいもんだな」

「うん」

「しかし、なんで二本しか入ってないんだ」

「さあ？」

「四本くらいは入れられるのに……」

「遙じゃない？食べ過ぎるとお昼ごはんが食べられないからね」

「ふうん」

「はあ。お茶が美味しい」

「そういや、昨日の盗賊はどうしたんだ」

「ああ、あの盗賊。すぐに逮捕してユールオの警察署に突き出してきたよ」

「そうか」

「見つけたなら、ラズイン旅団で処理してくれたらいいのにねえ」

「まあいいじゃないか。旅団天照が一番強いんだから」

「クノだっているじゃない。如月も」

「お前のところは、クノや如月と互角以上の者だけでも十人はいるじゃないか。お前含めて」

「やだなあ。ぼくは全然だよ」

「いつもうちの戦闘班を半分ほど伸していくのは誰だったかな」
「遙」

「平然と嘘をつくな」

「だってさあ、城壁をよじ登ってたら、お前は誰だーっ！なんて聞いてくるんだよ？」

「それが普通の反応だ。ていうか、他のやつらと一緒に普通に正面から入ってこい。それに、前王のときはみんな気が立っていたんだ」
「なんで？」

「何度も極刑をギリギリ免れたやつがよく言うよ」

「ああ、あのおっさんね。くふふ。ちよつと珍しい食べ物をチラつかせるだけで簡単に釣れるんだもん。魚釣りより面白かったよ」

「はあ……。こっちはどれだけヒヤヒヤしたと思ってるんだ。それに、毎回毎回戦闘班を伸さないと入ってこれないのか」

「あはは。全種族最強の銀狼がよく言うよ」

「それはただの迷信だろ」

「そんなことないよ。うちに伝わるある伝説によると……。ある月夜の晩、一人の銀狼の少女が武装した兵士二十人に囲まれてたんだって。でも、次の瞬間、立ってたのは赤い目のその少女だけだったって」

「……………」

「ほらあ。小さい女の子でもこんななんだよ？ やっぱ銀狼が最強なんじゃない？」

「そうか」

「うんうん」

「でも、頼むから普通に正面から入ってきてくれ」

「検討しとく」

「はあ……」

またオレが抑えにいかないといけないんだろうな……。

あのときだって、夜に乗じて侵入を試みた桐華を抑えつけたところを天照のやつらに見つかっただけであって……。

ていうか、こいつは小さい頃から傍迷惑なやつだったな……。

「はあ……。やっぱ紅葉は強いねえ……。目が見えないのに、熟練の兵士を二十人も完膚なきまでに叩きのめすなんてねえ」

「……………！ お前！ 伝説とか言っておいて！」

「やだなあ。いくらぼくでも、紅葉との初めての逢瀬のことは忘れないよ」

「お、逢瀬なんて、変な言い方をするな！」

「あのときは楽しかったなあ。全く敵わなかったんだもん。一撃も当たらないんだから」

「お前は振りが大きくて、隙も多いからな」

「初戦、目が見えないのに、即座に分析して対応するんだから、末

恐ろしいよねえ」

「本人に対して直接言うことじゃないだろ」

「いいじゃない。幼馴染みとして素直に尊敬するよ」

こいつにはよく驚かされる。

恥ずかしげもなく、こういうことを軽く言ってしまったたり、態度に示したり出来るから。

桐華はニコニコと笑って、お茶をすする。

…オレはお前のそういうところを尊敬するよ。

手を引かれるまま、広場まで行く。
そこでは大きな鍋でおでんを作っていて。

「あ、団長。ちょうどいいところに」

「ん？」

「みんなに箸を配ってください」
「ん」

大量の箸を受け取った桐華は、しばらくジッと考えると

「集合。チビども、集まれ」

「団長さん、どうしたの？」「お昼ごはん」

「ここに箸がある。一人二膳ずつ取って行って、箸を持ってない人に渡してくるんだ。それで、一番多く配って来た子には、豪華賞品、このお姉ちゃんの日独占権を与えよう」

「オ、オレか？」

「当たり前じゃん。じゃあ、始め！」

「頑張る」 「俺！俺が優勝するからな！」

桐華は素早く箸を子供たちに渡していつて。

子供たちも、あっと言う間に散ってしまった。

「はあ…。なんでオレを景品にするんだ…」

「紅葉ってさあ、なんか子供ウケ良さそうだから」

「なんだそれは…」

「桐華！次！」

「はいよ」

「団長さん、早く〜」

「む。思ったより忙しいな…」

「ちよつと団長！なんて横着の仕方ですか！」

「今真剣なの！話し掛けないで！」

箸を四本渡すだけの作業に、何を真剣になることがあるんだろうか。でもまあ、桐華が真剣だって言うなら真剣なんだろう。

「何してるの？」

「オレの争奪戦だ」

「…何それ」

「そのままの意味だけど」

風華はわけが分からないという風に首を傾げて、箸を渡す作業に没頭する桐華を見る。

…汗までかいて、ホントに必死だな。

「…あのね、姉ちゃん」

「ん？どうした？」

「私、朝みたいに、葛葉と上手く付き合えないことがある。葛葉を哀しませるようなことをしてしまうことがある」

「うん」

「そんなとき、助けてくれる？私だけじゃ、どうしようもないとき」

「…頼まれるまでもないよ。それに、それはみんなにも言えることだ。みんな、何も言わなくても風華を支えてくれる」

「…うん」

「誰も一人では生きていけない。互いに支えあつて生きているんだ。だから、みんなが風華を支えているように、風華もみんなを支えてくれ」

「うん。分かってる」

頭をそつと撫でると、ニツコリと笑ってくれた。
そうだな。

風華はこの笑ってる顔が一番だ。

「ふえゝ。やっと終わったゝ」

「自分で配って回った方が楽だったんじゃないか？」

「んー、どうだろ。あんまり変わんないんじゃない？」

「いや、オレに聞くなよ……」

「配ってきた！」「ねえ、結果は？」

「はあい。ちよつと待ってねゝ」

「まだあ？」「早くゝ」

「んー、よし。はい、結果発表するよゝ。集まれゝ」

「誰かな」「俺だつて！」

「よし。じゃあ、見事にお姉ちゃんを獲得した栄えある一位の子は

……」

「……………」

「リュウだ！」

「やった！」

集まった子供たちの真ん中くらいにいた女の子が飛び跳ねる。
見たところ、光と同じくらいだろうか。

リュウは、桐華のところまで出て行つて。

「はい。じゃあ、リュウにはお姉ちゃんを進呈しまゝす」

「えへへ、ありがと！」

「大事に使つてね」

「うん！」

「大事に使つてねって……」

「いいなあ」「絶対、俺だと思ったのに……」

「今日はリュウのお姉ちゃんだけど、いつもはみんなのお姉ちゃんだからね。喧嘩はなしよ」

「はあい」「分かってるよ!」

「よし。じゃあ、お昼ごはんだ。準備、出来てるよね?」

「バッチリですよ。さあ、みんな座って座って」

「お姉ちゃん、こっち」

「ん? ああ。分かった」

「ふふ、リュウはとっても良い子だよ。じゃあ頑張ってね、姉ちゃん」

「ああ」

リュウに手を引かれ、みんなからは少し離れたところに座る。子供らしい、ちよつとした独占欲なのかな。

「お姉ちゃんの名前は?」

「紅葉だ」

「いろは...。いろはお姉ちゃん」

「ああ」

「わたしね、いろはお姉ちゃんと仲良しになりたくて、一所懸命頑張ったの」

「そうか。よく頑張ったな」

「えへへ」

ゆつくり頭を撫でると、嬉しそうに抱きついてくる。

オレと仲良くなりたいから頑張った、か。

可愛いことを言ってくれる。

「早速、仲睦まじいようで。はい、おでんだよ」

「ありがとう。ほら、リュウも」

「遙お姉ちゃん、ありがとう」

「どういたしまして。…紅葉、ごめんね。団長には厳重に注意してくよ」

「いや、いいよ。あいつなりに、オレがヤウトに馴染めるように考えてくれたんだと思う」

「そんな難しいこと、考えてないと思うよ」

「まあ、そうかもな」

「ふふふ。じゃあ、ごゆるりと」

そして、リュウの頭を軽く撫でると、遙は賑やかな広場の真ん中の方へ戻っていった。

「いろはお姉ちゃん、おでん食べよ」

「ああ、そうだな」

「わたしね、卵が好きなの」

「そうか。オレは大根かな」

「大根はね、茶色くなるまでじっくりしゅましてあるのが美味しいの。でも、まだあんまり茶色くないのも、結構美味しいの」

「ほう、なかなか渋いことを言うな」

「えへへ。桐華お姉ちゃんが言ってたの」

「…なるほどな」

「いろはお姉ちゃんは、銀狼さん？」

「ああ。リュウは？」

「わたしは、赤龍なの」

「そうか。赤龍か」

頬や手の甲にある赤い鱗に大きな翼。

そして、燃えるような”紅蓮の瞳”。

どうあっても見紛うことはないくらいの赤龍っぷりだった。

「”紅蓮の瞳”リュウだな」

「うん！いろはお姉ちゃんも知ってたんだ！」

「まあな。”紅蓮の瞳”は、綺麗で優しい龍だ。リュウみたいにな」

「えへへ」

「そして、家族想いで心の強い龍だ。リュウもそうか？」

「うん！」

「そうか。それなら良かった」

”守る強さ”を持つ龍。

ふふ、リュウもそうなんだろうな。

村を離れて、小高い丘になるところに寝転んで空を眺める。
透き通った蒼い空は、深く遠く。

「ねえ、いろはお姉ちゃん」

「ん？」

「何かお話知ってる？」

「お話？昔話のことか？」

「うん」

「いくつか知ってるけど、それがどうしたんだ？」

「そのお話、聞かせてほしいの」

「いいけど、どうして」

「わたしね、たくさん、たくさんお話を聞いて、お星さまに届けてあげるの」

「ん？どういうことだ？」

「お星さまにお話を千個届けてあげると、願い事を叶えてくれるんだって」

「ほう。それで、リュウはどんなお願いをするんだ？」

「お父さんとお母さんに会いたい」

「ふうん…」

リュウが言ってるのは、千夜物語のことだろうな。

毎夜毎夜、星に物語を届けて、全てを満足させることが出来たら願いが叶うという”物語”。

会いたいという親は、戦乱ではぐれたのか、もしかしたら…。

「ねえ、どんなお話？」

「ん？そうだな…。じゃあ、千個のお話を星に届けた女の子の話は

知ってるか？」

「わたし以外にもいたの？」

「ああ。千個のお話を届けた女の子の話…」

広い野原に、一人、女の子がいました。
女の子の名前はリュウ。

「あはは。わたしと同じ名前だ」

「ふふ、そうだな」

リュウは、今日も星たちとお話します。

「むかしむかし、あるところに。おじいさんとおばあさんが住んでいました」

リュウのお話は、いつも夜に始まって朝に終わります。
そして、一日にひとつずつ、星たちを喜ばせていきました。

「めでたしめでたし」

今日は九百九十九個目の星が、キラキラと輝きました。
リュウはニッコリと笑うと、そっと目を瞑ります。

「リュウ。今日もありがとう。また、お話を聞かせてね」
「うん。また夜に」

太陽の光が世界を照らし始め、星たちは静かに消えていきます。

リュウもそのまま草に抱かれて、しばらく眠ります。

「お母さん……」

夢に出てきたのは、リュウのお母さん。

ずっと昔、リュウがまだ小さな赤ちゃんだった頃、優しく抱いてくれたお母さんです。

夢の中のお母さんは、昔と同じように、リュウをギュッと抱き締めてくれました。

「お母さん……！」

ハッとして目を開けると、もうそこにお母さんはいませんでした。

リュウは、自分が泣いていることに気がつきました。

お母さんにもう一度会いたい。

お母さんに、もう一度抱き締めてもらいたい。

それが、リュウの願いでした。

「リュウ……。わたしと同じ……」

「……そうだな」

また夜が来ました。

星たちと一緒にお話が出来る夜を、リュウは楽しみにしていました。

「お星さま。今日もお話、してあげるね」

星たちはキラキラと光って応えます。

リュウはそつと野原に寝転んで話し始めます。

「月と太陽のお話。月と太陽はとても仲良し。いつも一緒にいました」

今日は月と太陽のお話でした。

星たちは耳を澄ませてリュウのお話を聞き、ときどきカラカラと笑ったり、シクシクと泣いたり、ホッと安心したりしました。

「だから、月と太陽はいつもみんなを見守っているのですよ。おしまい」

リュウが話し終わると、千個目の星がキラキラと輝きました。でも、今日は少し様子が違いました。

星たちはゆっくりと空の真ん中に集まり、そして、ひとつの小さな光の球となると、リュウの目の前まで下りてきたのです。光の球は話します。

「リュウ、ありがとう。毎晩、僕たちを楽しませてくれて。お礼に願い事を叶えてあげるよ」

リュウは驚きましたが、すぐにひとつの願い事が思い浮かびました。

「わたしね、お母さんに会いたい」

「えっ……」

今度は星たちが驚きました。

でも、リュウの願いを聞かないわけにもいきません。

「お母さんに会いたい……。それでいいの……？」
「うん」

「そう…。じゃあ、叶えてあげる。目を瞑って」
「うん」

リュウは言われた通りに目を瞑ります。

光の球は、リュウの周りを回って空へと舞い上がりました。

「わあゝ」

リュウは、何かフワフワしたかんじがしました。
まるで空を飛んでいるような。

「目を開けていいよ」

星たちに言われるまま、リュウは目を開けました。

すると、目の前にはお母さんがいました。

お母さんだけでなく、お父さんもお兄ちゃんもいました。

みんなはリュウを抱き締め、頭を撫でてくれました。

リュウは、なぜだか泣いていました。

みんなの顔がぼやけるくらい、泣いていました。

でも、今までの涙とは違います。

それは、とてもとても温かい涙でした。

「ありがとう、リュウ。…さようなら」

ふと、リュウは振り返りました。

ちょうど、星たちが空に帰っていくのが見えました。

「ありがとう、お星さま。本当にありがとう」

リュウは、手を振って星たちを見送りました。

何度も、何度も、ありがとうと言いながら。

…次の日、広い野原を通った旅人が、季節外れの白星草の花に囲まれて眠っている小さな女の子を見つけました。

その女の子の寝顔はとても安らかで、まるで家族を想う”リュウ”のようでした。

「おしまい」

「リュウ…良かったね…」

「…ああ」

「リュウ…リュウ…」

リュウは、女の子の名前を何度も呼んで、泣いていた。そっと抱き締めてやると、堰を切ったように涙が溢れてきて。

「うつ…うええ…いろはお姉ちゃん…」

女の子が家族に会えたことに対する涙なのか、それとも…。

リュウの涙は温かくて、そして、哀しかった。

リュウの頭をゆっくりと撫でる。

もうだいぶ落ち着いたらしく、喉を「ロロロ」と鳴らしていて。

「ねーねー」

「うわっ！葛葉か！？」

「うん」

「あ、葛葉」

「……？リュウ、ないてたの？」

「うん、ちよっとだけ」

「ふうん」

「それで、どうしたんだ」

「桐華が、にがい水をのませようとするの」

「苦い水って、お茶だろ……」

「でもね、おかしくれたの」

「良かったじゃないか」

「うん！それでね、お母さんが、ねーねーとリュウにもわたしてきなさいって」

そう言つて、葛葉は懷から包みを取り出す。

それをリュウが受け取り、開いてみる。

「わぁ、お饅頭だね」

「美味そうだな」

「でも、なんだか潰れちゃってるね……」

「うう……。ごめんなさい……」

「なんで葛葉が謝るんだ」

「さっき、そこでころんじやったの……。だから、こんなになっちゃ

「ったのかも…」

「怪我しなかった？」

「うん…。でも…」

「じゃあ、よかった」

「でも…でも…」

泣きそうになる葛葉を、リュウはそつと抱き締める。

そうやって少し葛葉を落ち着かせると、ひとつ、饅頭を手にとって

「お饅頭はね、ほら。食べちゃったら、元の形なんて関係ないの。

でも、葛葉が怪我をしちゃうと、わたしもいろはお姉ちゃんも哀しいの。村のみんなもそう。だから、今回は葛葉じゃなくてよかったね？」

「うん…」

「一緒に食べよ？美味しいよ」

「うん！」

リュウから殊更酷く潰れた饅頭を受け取ると、嬉しそうにかぶりつく。

「美味しい？」

「うん！」

ご機嫌に、尻尾と足をバタバタさせる。

リュウもそれを見て静かに笑って。

…頬や手の甲の鱗がキラキラと赤く光っている。
龍紋…だったかな。

響や光、それと、ルウエには鱗がないからな。

その代わり、綺麗な模様が浮かび上がってたけど。

「ほわあゝ、綺麗な龍紋だねえ」

「ひゃう!？」

「あつ…にがい桐華…」

「ぼくは苦くないよ」

いきなりリュウの背後に現れた桐華は、早速お茶の用意をしている。
…葛葉はあからさまに嫌な顔でリュウの後ろに隠れてるけど、そんなものはどこ吹く風で。

「葛葉が苦いのはイヤって言うから、朝から淹れてた麦茶を用意しました。はい、どうぞ」

「リュウ、先にのんで…」

「あはは…。麦茶は苦くないよ。飲んでみなよ」
「ヤ」

「まったく…。何を飲ませたんだ」

「んー、普通の番茶だけど」

「お前が飲んでもうに子供たちも飲んでもとは限らないだろ。甘いのから始めてやれよ」

「でも、光は美味しいって言って飲んでたよ？お茶菓子も、他の子たちが黒糖のやつを取り合ってる横で、和三盆のやつを一番美味しくすに食べてたし」

「…なんだか年寄りみたいだな」

「あはは。だからさ、光とはよく気が合ってたさあ」

「ほう。って、そうじゃなくて葛葉の話だろ」

「ああ、そういえば」

「まあ、葛葉。麦茶は苦くないから」

湯飲みに特大の水筒から麦茶を入れて、葛葉に渡す。
葛葉はおそろおそろ受け取ると、端からチロリと舐めてみる。

「ほら、もつとガバツて飲まないと分からないよ」

「お前は黙ってる」

「葛葉、苦くないから。ほら、ね？わたし、もう全部飲んじやったよ」

「うう…」

「ほら。オレも一緒に飲んでやるから」

「うん…」

自分の湯飲みに麦茶を入れて、飲むところを見せる。
すると、葛葉も決心がついたのか、少しずつ飲み始めて。

「どう？」

「苦くない！」

「だしよだしよ。あー、よかった」

「リュウ、もういっぱい！」

「あんまり慌てて飲んだら、おしっこに行きたくなるよ」

「むう…」

「唸ってもダメ。お饅頭を食べながら、ゆっくり飲もうよ」

「うん…」

お茶を飲めたことが、相当嬉しかったんだろうな。

だけど、リュウの言う通り、慌てて飲むこともない。

ゆっくり、お茶の時間を楽しもう。

饅頭も無くなり、葛葉は満腹になって草の布団で昼寝をしている。
桐華は更なる布教を目指して、村に帰ってしまった。

「この草は蜜が美味しいんだ。こうやって、花の根元を舐めると…」
「うん…」

「ん？どうした？」

「な、なんでもないの…」

「ん…？」

なんでもないわけではない。

妙にソワソワしてて…。

「厠に行きたいのか」

「えっ…。あ…うん…」

「はあ…。早く言えばいいのに…。村まで我慢出来るか？」

「う…うう…」

「…無理そうだな」

葛葉以上に速い割合でたくさん麦茶を飲んでたんだ。

そりゃ行きたくなるだろう。

しかし、どうしたものか…。

その辺でさせるしかないだろうな…。

「リュウ。オレが見張っておいてやるから、その辺の草むらでやってこい」

「うう…」

「恥ずかしくないよ。誰も見てないから」

「で、でもお…」

鱗と肌の見分けがつかないくらいに、顔を真っ赤にさせている。

でも、座り込んで、前をギュッと押さえる様子から、もう限界に近いことが分かる。

…私は狼の頃にやってた分、抵抗は全くないのだけど、やっぱりこれくらいの子になると恥ずかしさが対抗してくるんだな。

「ほら、あそこにちよつと深い草むらがあるから」
「うう……」

「大丈夫だよ。ちゃんと見張ってるから」
「や、約束だからね……！」
「ああ。約束だ」

そう言った瞬間、その大きな翼を広げて飛んでいく。
ガサガサと草むらに入っていく、見えなくなつて。

「およ？リュウは？」

「……！」

「なんて間の悪いやつなんだ、お前は……」
「んー？」

一気に引き寄せて桐華の口を手で塞ぎ、声を潜ませて。

「用を足してるんだよ。恥ずかしいからって、向こうの草むらで」

「んー」

「静かにしてろ」

「んー」

桐華の口から手を離すと、今度は自分で自分の口を塞いでいる。

…真面目なのか、ふざけてるのか。
こいつだけは分からない。

「い、いろはお姉ちゃん……」

「ん。問題ない」

「ホ、ホント？」

「ああ。それより、どうだ。終わったか？」

「う、うん……」

桐華にしばらく退散するよつに目で指示すると、口を押さえたまま後退していく。

「それで、どうしたんだ」

「えつとね…誰もいない…？」

「いないけど」

「ホント…？」

桐華が充分撤退しているのを確認して

「ああ。誰もいない」

「さ、さつき、桐華お姉ちゃんの声がした気がしたけど…」

「気のせいだろ。誰もいないから安心しろ」

「うん…」

そして、自分でも周りを確認しながら草むらから出てくる。
ある程度確認が済むと、一気にこちらまで飛んできて。

「すつきりしたか？」

「うん！」

「そうか。それはよかった」

「えへへ。ありがと、いろはお姉ちゃん！」

「ん？ああ。ふふ、どういたしまして」

リュウの頭をガシガシと撫でてやると、また綺麗な龍紋を見せてくれた。

…桐華は、まだ口を押さえて後退していて。
何をやってるんだ、あいつは。

村に帰ると、広場の大きな木の根元で風華が本を広げていた。
その横には光もいる。

「あ、お帰りなさい」

「お帰りなさい。リュウ、どうだった？」

「うん。楽しかったよ」

「それなら、良かった」

「リュウの家はどこなんだ？送っていかうと思うんだが」

「んーと…」

「姉ちゃん…ちょっと…」

「ん？」

風華に手を引かれ、少し離れたところへ。
葛葉がずり落ちてきたので、背負いなおす。

「あ。葛葉、また寝ちゃったんだね」

「ああ。それより…」

「うん。リュウとか葛葉みたいな孤児はね、村全体で面倒を見てるんだ。だから、特別にどこで寝泊まりしてるとかはしないの」
「ほう」

「でも、だいたい葛葉と一緒に私のところにいたのかな」

「そうか」

「ねえ、何のお話なの？」

「リュウの、お話？」

「あつ、リュウ、光…。な、なんでもないよ」

「そうなの？」

「うん…」

「それより、お腹空いたの」

「わたしも」

「じゃあ、夕飯にしようか」

「うん！」

「今日は夕食会をしないんだな」

「毎日は疲れるからね。だいたい二日か三日に一回だよ」

「ふうん。長く滞在するんだな」

「うん。いつも一週間くらいはいるよ。そのあとにユールオに行つてたのかな」

「そうか」

「ねえ、ごはん」

「はいはい」

風華はリュウと光の頭を撫でて。

リュウの鱗が、またキラキラと輝いている。

光には鱗はないけど、綺麗な模様が浮かび上がっていた。

「さあ、帰ろうか」

「うん」

向こうの山に沈みかけた太陽が作る長い影を追いかけて。
家路へ就いた。

醤油も… だいたいこんなものか。

「ああっ！ 入れすぎじゃないの!？」

「ん？ そうか？ でも、入れてしまったものは仕方ないだろ」

「はあ…」

「こんなものは、感じたままに入れるのが一番だ。わざわざ計って

ると時間も掛かるし」

「……………」

「なんだ」

「姉ちゃんって、ホントにいつも適当だね」

「褒めても何も出ないぞ」

「褒めてない！」

「それより、皿とお碗を用意してくれ」

「あ、うん」

風華は、カタカタと五人分の皿とお碗を並べていく。

…お碗ひとつ取ってみても、面白い発見があるものだ。

「これは葛葉のだな」

「うん。よく分かったね」

「縁に細かい傷がたくさん付いている。これは噛んだ跡だ。それに、ところどころ修繕した跡がある。これは、落したりしてヒビわれたりしたときに直した跡だろ？」

「へえ。すごいね。じゃあ、これは？」

「それは風華のだろうな」

「なんで？」

「他より少し黒ずんでいる部分がある。これは、何度も同じところから飲んでるということだ。そんなにきっちりしてるのは、風華くらいしか思い浮かばない」

「わあ、すごいね。じゃあ、これは？」

「それはリュウのだろう。他の三つより明らかに小さい。つまり、小食の者が使うお碗だ。昼ごはんのとき、リュウは竹輪と大根を一個ずつと卵を二個しか食べなかった。それだけ食が細いということだ」

「すごいね。もうそんなに観察してたんだ」

「まあな」

先に作ってあった味噌汁をお椀に入れていく。
ご飯も、もうそろそろかな。

「あ、私がよそうよ」

「そうか。ありがとう」

「はあ…。それにしても、姉ちゃんって料理も出来るんだね…。万能じゃない…」

「料理は灯に無理矢理教えられた程度だ。作れる料理は少ない。それより、美味しい肉とか薬草の方が詳しいかもしれない」

「ふうん…あ、狼の頃だっけ」

「ああ。詳しいと言っても、名前は知らんがな。これが美味しいとかしか分からない」

「なるほどね」

「さて、これももうすぐ出来るから」

「うん。分かった」

「わたしたちも手伝うね」

「あ。光、リュウ。ありがと。じゃあ、これ、持っていって」

「はい」「分かった」

「ぼくの方もね」

「え、あ、桐華さん…？」

そこにいたのは、確かに桐華。

どうしてこいつはこつも神出鬼没なんだろうか。

「光、リュウ。どっちでもいいから、配膳が終わったら遙を呼んできてくれないか」

「うん」

「むう…。ぼくだって、紅葉の肉じゃがが食べたい」

「お前の分は作ってないから」

「さらつと酷いことを言うねえ」

「オレ、風華、光、リュウ、葛葉の五人しか、この家で夕飯を食べる者はいない。そう考えるのが普通だろう。なんで、桐華の襲来を予想して余分に作る必要があるんだ」

「ぼくだって、お腹ペコペコだよ？」

「はいはい。分かりましたから、旅団の宿営地で食べましょうね」

「は、遙……」

「早かったな」

「ええ。可愛い龍たちが即座に報せに来てくれましたから」

「そうか。よくやったな、二人とも」

「うん！」「えへへ」

「やだ〜。ぼくも紅葉の肉じゃがが食べたい〜」

「みつともないことをしないでください。さあ、帰りますよ」

「うああ……」

そして、遙はズルズルと桐華を引きずっていった。

…遙の気苦労は絶えないんだろうな。

ご苦労さま。

「よし。じゃあ、夕飯だ。各自、肉じゃがを持っていてくれ」

「夕飯だ〜」「美味しそう」

呪詛のような桐華の呻き声が聞こえなくもないような気もするが、きつと気のせいだろう。

葛葉が待つ居間へ行き。

楽しい夕飯の時間だ。

静かな寝息が聞こえる。

リュウは、話の完結を待たないうちに眠ってしまったらしい。

「…めでたしめでたし」

「もうみんな寝てるぞ」

「うん。いつもそうだったからね」

「そうか」

「それにしても、すっかり懐いたみたいだね」

「リュウか？」

「うん」

「一日、こいつのお姉ちゃんだったからな」

「ふふふ。これからも、なんですよ？」

「ああ。そうだな」

「…姉ちゃんは、これからも、私の姉ちゃんできてくれる？」

「当たり前だろ。オレはずっと、風華の姉ちゃんだ」

頬を撫でると、そっと胸に額を押し付けてきて。

風華の龍紋が見えた気がした。

なぜだろうか。

布団で寝ていたはずなのに、今は床の上だ。
とりあえず布団に戻る。

「……………」

原因はこいつか。

リュウは、その大きな翼をのびのびと伸ばして眠っていた。
起こすのもなんだし、羽織を着て眠ることにする。
えっと、羽織は…あった。

リュウの頭をそつと撫でて、部屋の隅へ行く。

「お休み…」

また心地良い闇の中へ。

今日もきつと良い日だから…。

目が覚めた。

でも、さつき眠ってからそんなに時間が経っていないのだろうか。
まだ真つ暗…。

「……………」

いや、朝の気配はする。

鳥も鳴いてるし、空気の流れも朝のそれだ。

「ん…？」

…羽織がやけに重いと思ったら、頭から布団を被っていた。布団をどけると、朝の眩しい日射しが目に飛び込んでくる。

「ふぁ…」

それにしても、誰だろうか。

風華も寝てるし、ちゃんと全員布団を被って寝ている。

そうになると、この布団の出てきた先も気になってくるけど。

…まあいいか。

だいたい分かった。

「おい、起きろ」

「お茶はもういいです…」

「寝ばけてるんじゃない。起きろ。なんでここにいるんだ」

「ふむ…」

「まったく…」

どうも起きそうにないので、布団で簀巻きにして部屋の端っこに転がしておく。

…桐華は起きてないだろうな。

遙はここにいてるし、他に事情を知ってそうなのは…。

「カルア…かな」

羽織だけでは心許ないので、内側にちゃんちゃんこも着て。

まだ明けたばかりの朝の空の下へと出た。

さすがに誰もいないな。

村全体が静かに息をしている。

「ワウ」

「なんだ。どうした？」

「クウン…」

「そうか」

擦り寄ってきた子犬を抱き上げる。

背は黒、腹は白。

額のところにマロ眉。

もしかしなくても黒柴だろうな。

しかし、母親とはぐれたとは…。

向こうも捜してると早いんだけど…。

「ワウ」

「分かった分かった」

羽織の内側に入れてやると、温かいのだろうか、次第に瞼が重くなってきたみたいで。

完全に寝てしまったところで、ゆっくりと歩き始める。

…この子からは独特の匂いがする。

特定の匂いがない匂い。

旅の匂い。

「となると…」

ちょうどいい。

目的地が一緒のようで良かった。

旅団天照の宿営地は、風華の家から正反対の方向。
だから、村の中をのんびりと横切っていく。

「ふぁ…」

「お、桜。珍しいな。こんなに早いなんて」

「あれ？いろはねえ？どうしたの？廁？」

「廁だつたら、なんでわざわざこんなところまで出てこないといけないんだよ…」

「ああ、そつか」

「旅団天照のところに行くんだ。桜は？」

「ボクは曉詣りだよ」

「……？曉詣り？」

「うん。朝日にお詣りするんだ。今日一日よろしくお願いしますすつて」

「ほう。神道か何か？」

「違うよ。宗教というより習慣かな。それに、神道って曉詣りなんであるの？」

「いや、知らん」

「…何それ」

「でも、お詣りといえば神道だろ？」

「ふうん。それより、ボクはもう一回寝てくるよ…」

「なんだ。寝るのか」

「当たり前じゃない。今日だって、たまたま早くに目が覚めたから曉詣りしただけだし…」

「…習慣って言ってたよな」

「もう！細かいことにツツコまないでよ！朝早くに目が覚めたら絶対に行くんだから、習慣といえば習慣じゃない！」

「いや、それはただの気まぐれだろ」

「むう…」

「ふふふ。でもまあ、ただ二度寝するよりかはマシかもしれないな」

「えへへ。うん」

桜の頭を撫でると、気持ち良さそうに目を細めてくれて。

「じゃあ、寝坊しないようにな」

「それは約束出来ないね」

「…まあ、そうか」

「もう…。そこはやりわり否定してくれるところでしょう？」

「そうか？」

「むう…。もういいよ。じゃあね。お休み」

「お休み」

軽く手を振ると、家の方へ走っていった。

それにしても、暁詣りか。

オレも今度やってみようかな。

「よし」と

ひとつ頷いて、また歩き始める。

広場に出て、真ん中の大木の下へと進んでゆく。

この木は、何年、この地を見てきたんだろうな。

ふと見上げると、大きな鷹が泊まっていた…。気がした。

”千年の記憶”リア。

千年を生きる樹に棲み、その地の来し方行く末を見る。

見た目は鷹のようであり、子供と会話を交わすこともある…。か。

もしかしたら、そういう聖獣がいるのかもしれない。

カイトや如月、悠奈に七宝、あと、千早か。

身近にこんなにいるんだから、世界にはそれこそ数えきれないほどいるのかもしれない。

「まあ、そんなことを考えてても仕方ないか」

確認するように言ってみる。

でも、返事がないのはやっぱり少し寂しかった。
昔から必ず誰かと一緒に生活してきた私には、孤独は最大の毒みたいだ。

もう一度だけ見上げて、旅団天照の宿营地へ急ぐ。
黒柴は相変わらずぐっすり眠っていて。

少しずつ登ってくる太陽は、世界に影を作り、いろんなものを浮かび上がらせる。

草花だったり、家だったり、山だったり。

明暗のはっきりした景色からは、昼とは全く違う印象を受ける。

太陽の光は闇の光。

光そのものではなく、闇を強調する光…だったか。

この景色を見ていると、それが実感出来る。

…たまに早起きするのも良いものだな。

「そうですか…。遙さんが…」

「何か理由があるのか？」

「いえ。ただ家出をしたかったただけだと思います」

「はあ？家出？」

「はい。ときどき家出をして、団長を困らせて楽しんでいるんです」

「同じ村内で家出とは、またお手軽だな」

「ええ。まあ、それでも団長は遙さんを見つけられないんですが」

「なんでだ。すれ違ってくるくらいあるだろ」

「いえ。遙さんは変装をするので、全く気付かないんです」

「”副業”か」

「ええ、まあ」

「それでも分かりそうなものだが」

「遙さんは種族も変装で変えますからね」

「そんなことが出来るのか？」

「遙さんだけですけどね。人から龍までなんでもやってくれますよ」

「ふうん」

まあ、遙は虎で尻尾も細いからな。

オレみたいに太い尻尾だと隠しきれない。

それでも、耳はどうするんだろ。

帽子か頭巾でも被るんだろうか。

「まあ、寝てたんなら寝かせておいてあげてください」

「ああ。分かった」

「それより、副業のことですが…」

「何か良い情報でもあるのか？」

「いえ…そうじゃないんです…。僕は、隠れてやるくらいならやら

なければいいんじゃないかって、ときどき思っんです」

「非合法だから隠れてやってるだけじゃないのか？」

「それですよ。法に触れてまで、情報を手に入れる必要があるのか
と思って」

「でも、護衛と表の情報だけでは食べていけないんだろ？」

「それはそうですが…」

「情報を流すのは、厳密に審査された上で請け負った依頼にのみ。
何が不満なんだ」

「裏があることが嫌なんです！」

「なんだ、そんなことか」

「そんなことって！」

「まあ、お前にもそのうち分かる」

「分かりませんよ…」

カルアはふいとそっぽを向くと、もう話したくないという風に尻尾
を振る。

やれやれ…だな。

「じゃあな。遙は任せておけ」

「はい。よろしく願います」

「ああ」

立ち上がって、一度大きく伸びをする。

カルアも立ち上がり、帷の出入口を開ける。

「すまないな。ありがとう」

「いえ。では、よろしく願います」

「ああ」

「カルア！た、大変だよ！また遙がいなくなった！」

「はいはい。またすぐに戻ってきますよ」

「なんでそんなこと分かるのよ！今度こそ、帰ってこないかもしれないじゃない！」

「じゃあな、桐華。オレは帰るよ」

「勝手に帰りなよ！あ、遙を見つけたら報せてね！」

「ほいほい」

確かに、桐華のこの慌てっぷりは見てて楽しいな。

笑いを堪えながら、宿营地をあとにする。

帰りに、あの柴犬の孝太郎が走り寄ってきた。

「ワウ！」

「今度は知らないからな。自分で帰れよ」

「ワウ！」

「返事だけは良いんだから…。ほら、また母さんとはぐれるぞ」

「……！」

母親の方へパタパタと走っていく。

途中、こつちを一度だけ振り返って、また走っていった。

「もうはぐれるなよ」

母親にじやれる孝太郎を見て、私も家に向かう。

…羨ましいっていうのかな、この感情は。

私はもう母親に甘えることは出来ない。

すでに母親でもあるのか。

望や響、光は私をお母さんと呼んでくれるが、でも、私にその資格はあるんだろうか。

親となるのに相応しい人間なんだろうか。

「あ、姉ちゃん。おはよ。どこに行ってたの？」

「旅団天照の宿营地にな」

「ふうん。で、どうしたの？悩み事？」

「…犬の親子を見たんだ。楽しそうに母親にじゃれつく子を。優しく子供の相手をする母を」

「うん」

「光みたいに、私をお母さんと呼び慕ってくれる子はいるけど、私には母親である資格が果たしてあるんだろうかって考えてな」

「へえ〜。姉ちゃんでも、そんなことで悩むんだ」

「意外だったか？」

「うん。いつも私に助言をくれるからね。葛葉のことで悩んでるとき」

「はは、オレはとんだ詐欺師だな」

「ううん。悩まない人なんていないんだから。詐欺師なんかじゃないよ」

「……………」

「私ね、思うんだ。母親に資格なんていらない。でも、だからこそ、責任も重いし不安にもなる。子供を育てるっていうのは、それだけ大変なこと」

風華は一度、空を仰ぐ。

そして、また私の方へ向き直って。

「けど、私たちは一人じゃない。周りには、支えてくれる人がたくさんいる。親と子の間だけじゃない。お互いを支え合って生きていくのは、みんな一緒なんだよ」

「…そうだな」

「ふふふ。ほとんど姉ちゃんの受け売りだけどね」

「あれ？オレ、そんなこと言ってたか？」

「言ってた言ってた。たしか、姉ちゃんだったはず」

「はずってなあ…」

「まあ、そうじゃなかったら兄ちゃんかな」

「犬千代か？」

「うん。…って、そういえば、姉ちゃんって兄ちゃんのこと、犬千代って呼ぶよね。それってなんでなの？」

「ん？んー、教えてやってもいいが…」

「教えて教えて」

「…じゃあ、さっきのお礼だ。犬千代っていうのは、前田利家の幼少時代のときの名前だ」

「ふうん。それで？」

「それで終わりだ」

「ええ。肝心なこと、聞いてないよ」

「…なんだ」

「なんで、兄ちゃんのことを素直に利家って呼べないか、だよ」

「なっ、何を！」

「ふふ、慌ててる慌ててる」

「慌ててなんかない！」

「へえ」

「なんだ、その含みのありそうなかんじは」

「さては、照れ隠しでしょ」

「そ、そんなんじゃない！」

「そういえば、初めて会ったときから犬千代だったなあ」

「あ、あれは、犬千代がそう呼べと言うから…」

「ふうん」

「ホ、ホントだって！」

「あはは。慌ててる姉ちゃんって、すごく面白いね」

「風華！」

まさか、そんなことを聞かれるとは思ってもみなかった。

ああ、遙がいなくなっ慌てる桐華を見て笑った、さっきの自分を叩きのめしたい…。

「朝ごはん食べる？ちよつと遅いけど」

「いや、向こうで食べてきた」

「そう」

「葛葉とリュウは？」

「村の外で遊んでるよ」

「村の外？」

「うん。追手でもしてるんじゃないかな」

「ほう。追手」

「うちのは壮絶だよ。村の中でやるとものが壊れるから、禁止してるんだ」

「ふうん…」

見てみたい気もする。

「お昼に一回帰ってくるから、そのあとに一緒に行ってきたら？戦闘班の姉ちゃんでも充分楽しめると思うよ」

「それは楽しみだな」

「それでね、最初の数秒から最後まで当たりにならなかったら、武勲章を貰えるんだよ」

「本格的だな」

「それだけ本気ってことだよ」

「なるほどな」

「まあ、十回に一人いるかいけないかの超難関だけどね」

「ふうん」

それは燃えるな。

貰えるように頑張らないと。

「あ。ところで、遙は？」

「姉ちゃんが帰ってくるちょっと前に出ていったよ。すぐに帰るか
らって」

「そうか」

「今日は無難に狼だった」

「無難なのか？」

「うん。姉ちゃんを見て決めたんだって」

「ふうん」

「格好良かったよ。ちょっと悪いお兄さんみたいで」

「男に変装してるのか？」

「うん。平べったい胸が、こういうときに役に立つんだよとか言っ
て。ホント、仕事熱心だよ。今回は仕事じゃないけど」

「……………」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

「そうか…そんなことに役立つんだな…。
でも、変装することなんてないし…。」

「ただいま」

「あ、お帰りなさい」

「ほう。なかなかのものだな。声も変えるのか」

「あれ？聞いてた？」

「ああ。カルアと風華からな」

「なあんだ、つまんない。びっくりさせようと思ったのに」

「そういえば、遙の変装を見るのは初めてだな」

「そうだね。向こうでは変装する意味もないし」

「ここでは毎回桐華さんを困らせてるよね」

「仕方ないじゃない。面白いし。それに、ね」

「え？何？」

「…うん。やっぱりなんでもない」

「ええ…。気になるなあ…」

確認、だろうな。

桐華が自分を必要としてくれているのか。

自分のことを好いてくれているのか。

「はあ…。桐華も、もっとしっかりしてくれたらいいのに…。せめて、私がいなくても慌てずに済むくらいには」

「まあ、それは言ってるかもしれない」

「口を開けばお茶だもんね。ホント、旅団天照の団長とは思えないよ」

「でも、そこが桐華さんの良いところなんですよ？」

「まあね。悔しいけど、そうみたい」

「悔しいのか」

「…いや、悔しくないね。羨ましい、のかな」

「確かにそうだな。桐華の能天気さは呆れを通り越して尊敬出来るくらいだ」

「あはは、そうかもしれない。でも、ちょっと違うかな。そういうんじゃないと思う」

「ふうん。じゃあ、何なの？」

「おい、風華。そういうことは聞くものじゃない」

「あ…ごめん…」

「謝ることもないでしょ。うーん…。まあ、強いて言うなら恋愛感情に似たものかな」

「えっ、遙って…」

「ち、違うつて！そういうんじゃないって！」

「桐華に心酔してるということだろ。役立たずで頼りないやつだけだな」

「そう、かな。うん、たぶんそうなんだと思う」

「心酔か…。私はどうか」

「まあ、なかなか心酔なんて出来ないけどな。文字通り、心から酔わないといけないから」

「そっか…。じゃあ、私は姉ちゃんかな」

そして、風華はこっちに擦り寄ってくると、ギュッと抱きついてきた。

「仲良いねえ、二人とも」

「悪くはないな」

「その言い方だと、良くもないみたいじゃない」

「そっか？」

「そっだよ」

「そっか」

「ふふ、面白いね」

「面白くないよ生きるか死ぬかの瀬戸際なの」

「え？そんなに深刻なの？」

「うん」

「へえ。知らなかった」

「オレも知らないよ」

「当事者じゃない」

「当事者だからといって、なんでも知ってるわけじゃないだろ」

「姉ちゃんは、私のこと嫌いなのか？」

「嫌いじゃない」

「それってどういうことなのよ」

「言葉のままだ」

「もう！そんなんじゃ分からないよ！」

「はあ…。言葉は不自由なものだ。言葉に表すことで、余計に伝えにくくなったり、全く違う意味になってしまふこともある」

「…どういうことよ」

「わざわざ言葉にしくなくても伝わることがあるということだ。お前は、言葉にして伝えないとオレの気持ちが分からないのか？」

「…分かんないよ。言葉にしないと分かんないことだってあるですよ」

「じゃあ、明日香はどうだ。セトはどうだ。言葉を使わずとも話が出来る。相手の気持ちが分かる。そうじゃないのか」

「……………」

「ふう…。じゃあ、これで分かるだろ」

風華を引き寄せてギュツと抱き締める。

早鐘のような鼓動、いつもより少し高い体温、良い匂いの髪。

全部を感じられる。

全部を伝えられる。

「お前だって、こうやって伝えてくれたんじゃないか。言葉にせずとも分かることは言葉にしない方が良く、オレは思う」

「うん…」

「あー、それで、私がいることを忘れてたりしない？」

「しないけど」「……………！」

風華は慌てて離れる。

顔は茹ダコのように真っ赤だった。

「ふふん。仲睦まじいことで」

「は、遙！」

「顔、真っ赤だよ」

「もう！」

そのまま、風華は外に出ていつてしまった。

それを見て、遙はニヤニヤしていて。

「上手く誤魔化したね」

「なんの話だ」

「ベタベタ触れ合う方が得意だもんね、紅葉は。言葉にするより」

「まあ、それは事実だ」

「ふふふ。でも、羨ましいな。私はあんな大胆な真似は出来ないから。不器用な方法でしか確かめられない」

「それは人それぞれだからな。結局は、自分を好きになってもらいたい、自分のことを好きかどうか確かめたい、というところに行き着くんだから」

「そうかもね」

遙は窓から外を見て、一瞬寂しそうな顔をした。

でも、本当に一瞬で。

次にこっちを向いたときには、元通りの遙だった。

「光、起きなさい。お昼ごはんだよ」

「むう…」

「そういえば、朝から寝てたのか？」

「うん。朝ごはん食べて、葛葉とリュウが行く直前に」

「ふうん」

「二人、呼んでよかった？」

「あ、いや、いいよ。それより、お昼ごはんの準備、しと」

「分かった」

「オレは光を起こしてから行くよ」

「うん。よろしく」

そう言つて、風華も部屋を出る。

さて、光だな。

縁側でも一番日の当たる場所で、気持ち良さそうに眠っている。起こすのは可哀想な感じもするけど…。

「やつほ。いろはねえ、昼ごはん？」

「オレは昼ごはんじゃない」

「もう…。今からお昼なの？」

「ああ」

「じゃあ、ボクも一緒に食べていい？」

「それは風華に聞け」

「いろはねえが答えてくれたっていいじゃない」

「オレは光を起こさないといけないからな」

「いいかダメか答えるだけじゃない」

「今は、光を起こすことが最優先だ」

「むう…。なんで一言答えるくらい出来ないのさ!」

「だから、風華に聞けと言ってるだろ。こつやって無駄な受け答えをしてる間に聞きに行けるじゃないか」

「ふんだ。いろはねえのバカ！」

「バカで結構。バカだからお前への返答は出来ない」

「むうゝ！もういいよ！風華に聞きに行く！」

「行つてらっしゃい」

「ふんだ！」

そして何か悪態をつきながら、桜は表へと回っていった。
…よし、光だな。

「紅葉あ…。遙が…遙が見つからないよあ…」

「そうか」

「うつ…うつ…。きっと、ぼくのこと、嫌いになったんだあ…」

「そうか」

「紅葉あ…。紅葉なら分かるでしょ…？遙の匂い…」

「オレには地面を嗅ぎ回る趣味はない」

「そんなあ…」

「そのうち帰ってくるから泣くな。宿営地に戻ってお茶でも飲んでこい」

「うん…。分かった…」

涙を袖で拭きながら、桐華は帰っていく。

まさか、オレの鼻を頼ってくるなんてな。

まあいいけど。

…周りに人の気配はないな。

よし、光を…

「望から伝書を預かってきているのだが」

「ああもつ！さっきから何なんだ、お前らは！」

「いやしかし、今がちょうどいい頃合いだと思ったんだがな」

「まったく…。それで、なんだ」

「だから、伝書だと言っているだろう。脚に結わえてある。自分では取れないのでな。お前が取ってくれないか」

「ん？これは…」

「我が主は、誰にもこれを秘匿しておきたかったようだ。私も、中身を絶対に見るなと釘を刺されたのだが」

「これは絵手紙だ。ほら、見てみる」

「む。見てもいいのか？」

「喋らなければ分からないだろ」

「そうかもしれないが…」

「まあ、見てみるって」

「ふむ…。なんとも愛らしい絵だな」

「ふふ、そうだな。この絵からすると…城でかくれんぼをやったのか？」

「ああ。昨日、灯が主催してな。街の子供たちや衛士の半数が参加する、大々的なものだった」

「ほう。楽しそうだな。でも、灯が主催って…」

「かくれんぼが終わったあと、美希と香具夜にこつてりと絞られたようだ」

「やっぱりな…」

「どうする、返信は。また取りにこようか」

「ああ。そうしてもらえると有難い。光や葛葉も書きたいだろうし「そうだな。では、夕方くらいでいいか？」

「いや、夜の遅めで頼めるか？今日の分も書きたいから「ふむ。楽しみにしていることがあるのだな」

「ああ。向こうがかくれんぼなら、こっちは追手だ」

「ほう。追手。ふふ、それは楽しみだな。では…夜だったな」

「ああ。よろしく」

「うむ。それでは、早く昼ごはんの席へ向かうといい」

「いや、光を起こさないと…」

「もう、起きてるよ」

「え、あ、あれ？」

「ふふふ。では、また夜に」

「うん。またね、カイト」

光が手を振ると、カイトも何回か翼をはためかせて火の粉を散らす。そして、そのままフワリと浮かび上がると、城の方角へと飛んでいった。

「それじゃあ、昼ごはんだな」

「うん！」

光の手を掴んで立ち上がらせる。

少し癖になっていたところを手で鋤いて、ついでに頭を撫でてやると、ニツコリと笑顔を見せてくれて。

角…。

角が気持ち良いってルウエが言ってたよな…。

「えへへ。お母さん、くすぐったいよ」

「くすぐったいのか？」

「うん。くすぐったい」

「ふうん。ルウエは気持ち良いって言ってたけど」

「気持ち良いよ。なんかね、頭を、撫でてもらってるときに、なんとなく、似てるの」

「こうか？」

「えへへ。うん」

角を掴んだり頭を撫でたり、光の表情を見ながらいろいろ試してみる。

すると、喉のところに手を当てると、少し嫌な顔をした。

「ここ、嫌か？」

「ううん…。お母さんならいいよ…」

「あつ…そうか…。ここが逆鱗なんだな…」

「うん…」

「…ごめんな」

光を引き寄せて、ギュツと抱き締める。

光は、胸に額を擦り付けてきて。

まだ肩が震えていたので、そつと背中を叩いて気分を落ち着かせる。

…響にも言われていたのに迂闊だった。

逆鱗は、なるべく触ってほしくないもの。

大切なもの。

「逆鱗はね…」

「ん？」

「逆鱗はね、わたしとか、リュウミたいな、鱗のある龍にとって、
とっても大切なもののな」

「ああ。響にも聞いた」

「でも、大切な人には、触られてもいいなって、思うの。触ってほしいなって、思うの。さっきは、いきなりで、びっくりしたけど、
わたし、いつかは、お母さんに、触ってほしいなって、思ってたの」

「…そうか」

「うん。だから、触っても、いいよ」

「でも、ごめんな」

「ううん。いいの」

「…ありがとう」

「うん」

改めて、そつと光の喉に触れる。

ここが逆鱗…。

光はクルクルと喉を鳴らして、また笑顔を見せてくれた。

…ごめんな、光。

昼ごはんが思ったより長引いてしまい、集合場所まで走るはめになった。

葛葉が昼寝のために家に残ったから、まだ速く走られたけど。

ていうか、光もリュウも飛んでいるから、走ってるのは私だけか…。

「ここなの」

「ごめんね。待った？」

「ううん…って」

「よう。オレも混ぜてもらえるか？」

「銀色のお姉ちゃんだ！」

「ん？銀色？」

「うん。銀色」

「いろはお姉ちゃんなの！」

「銀色のいろはお姉ちゃん？」

「銀色はいらないぞ」

「分かった」

「それで、紅葉も参加するんだよね！」

「ああ」

「うちの追手は厳しいけど、泣いちゃダメだぜ」

「望むところだ」

「よし。全員集合！」

隊長格の男の子が声を掛けると、いろんなところから子供が出てきた。

草むらや窪地、さらには隠れ蓑や迷彩服を使ってる子供もいた。

「…かくれんぼも兼ねているのか？」

「甘いな。これは生き残り合戦だ。生き残るためには手段を選んではいけない」

「ほう」

「よし、集まったな。じゃあ、分かっているとと思うけど、新入りがいるからな。注意事項を説明しておく。まずひとつ。怪我をしない、させない。楽しく遊ぶための最重要条件だ。分かっているな」

「うん」「いいから次に行けよ」「まだ？」

「うおっほん！」

咳払いをして、手を挙げる。

そして、相槌や野次がなくなったところで話の続きを始めた。

「次は、この追手の規則についてだが……」

「前の条件を守ればなんでもあり。ただし、村に入るのは禁止」

「行動可能範囲は村の鐘が聞こえる場所、だろ？」

「俺の台詞を取るな！」

「言うのが遅いんだよ。それを先に言えば、俺たちも言わなかったよ」

「そーそー」

「うぐぐ……。もういい！当たりを決める！」

そう言つて双子らしい兄妹を睨みながら、懐からたくさんの紐を取り出す。

「先が赤色になってる紐を引いたやつが当たりだ。当たりは十人。さあ、引け！」

「あ。白だ」「私は黄色だったよ」「緑」

「なんで色を統一しないんだ……」

「い、いいだろ！いろんな色がある方が綺麗だって言ってたし……」
「誰が？」

「……！な、なんでもないよ！」
「ふうん……」

なんでもないわけはないんだろうけど。
さて、誰なのかな。

チラチラ見てる先は……。

……ふうむ。
なるほど。

「は、早く引けよ！」

「むう……。和正、乱暴なの」

「う、うるさい！」

「あ。いろんな色が付いてるの」

「よ……」

「……？よ？」

「よ……良くないことが起こる前触れかもな！」

「もう！和正なんて嫌いなのに！」

「あう……」

……まだまだ子供だな。

それにしても、和正って名前だったのか。

他の子の名前も分かればいいけど……。

「紅葉も引けよ……」

「あの紐、どうやってリュウに引かせたんだ？」

「なっ！何の話か分からないな……」

「嘘をつけ。リュウに引かせる直前、懐の内側で何かやってるのが
見えたぞ」

「……！」

「でも、リュウがどれを引くか分からないのに、的確にあの紐を引

かせていたな。何か仕掛けがあるのか？」

「ひ、秘密だ…」

「ねえ、いろはお姉ちゃんは何色だった？」

「オレは今からだな。どれどれ…」

どの紐にしようかと、ゆつくり手を伸ばす。

すると和正は、さっきと同じ動作を今度は目の前でやってみせる。

「ふむ。なるほどな」

懷の中で紐の束を変えていたのか。

しかし、また大掛かりだな。

リュウに虹色の紐を引かせるためだけに、あれだけの紐を準備するとは。

さて。

じゃあ、これにしようかな。

和正がニヤリとした瞬間、一気に手を後ろに引く。

「よし。紅葉が当たり…」

「ほら。オレも虹色だ」

「わあゝ。一緒なの！」

「え？あれ？」

「どうしたんだ。和正」

「あ、赤い紐は…？」

「赤い紐？寝ぼけているのか？」

「そうだよ！どう見ても虹色じゃない！」

「うつ…。リュウ…」

「次がつかえてるぞ。早く回れ」

「お、おう…」

首を傾げながら次へ向かう。

…私が”赤い紐の束”から素直に引くわけがないだろ。

「ほら。リュウ。返すよ」

「え？ いろはお姉ちゃんのもでしょ？」

「まあまあ。持っとけ」

「…うん」

私が当たりをやってもつまらないだろうからな。それにしても、狩りなんて久しぶりだな。じっくり楽しませてもらうぞ。

決まった十人の当たりの中には光の姿もあった。

「頑張つてね、光」

「うん。リュウも、頑張つてね」

「えへへ。分かつてる」

「注目」

「当たりの説明だろ？ 早く済ませろよ」

「そうだそうだ」

「その双子、五月蠅い！」

「ほいほい」「和正の方が五月蠅いけどね」

「うおっほん！ じゃあ、当たりの説明だけど、当たりは絶対にこの腕輪を付けること。腕輪をしてない当たりに触られても交代しないでいいぞ」

「分かつてるから早く！」

「万一、腕輪の大きさが合わない場合は、ここに置いておくから取りにくること」

「分かつてるって！」

「…………。じゃあ、俺の合図で始める」
「いよっ！待ってました！」「真打ち！」

…こいつらは、そんな言葉をどこで覚えてくるんだ。

「三、二、一…」

「「始め！」」

「あっ！俺の台詞！」

「とう！」

目の前にいた子が、早速攻撃を仕掛けてくる。

横に一步動いてそれを避け、次の一步で一氣に開始地点から離れる。

「こら！双子！待て！」

「へへ〜んだ。バカ和正」

「悔しかったら、捕まえてみなよ。当たり前でしょ〜？」

「お前らのせいだ！」

いきなり半数以上が交代したようだな。
たしかに激戦らしい。

「お母さん、捕まえた！」

「甘いな」

「あにやつ！？」

後ろから突っ込んできた光をかわし、押さえつける。
さすが白龍といったところだな。
接近してきた速度は相当だった。

「あうう…。痛いよお…」

「あつ。すまない…。つい癖で…。大丈夫か？」

「うん。大丈夫だよ」

「そうか。良かった」

「えへへ」

光の頭を撫でてやる。

でも、抱きつこうとしたのはきちんと避けておくけど。

「あう…」

「それは、当たり前じゃなくなるまでお預けだな」

「むう…」

「じゃあな。頑張れよ」

「うん！」

軽く手を振って、素早くその場を離れる。

さあ、狩りの始まりだ。

…でも、さっきみたいなことにならないように気をつけないとな。

ふむ。

森に入っすてすぐに左右から挟み込みか。

隠れられたと油断したところを狙う作戦だな。

前後には罠を仕掛けたあとがある。

ということは…。

「跳んだ！」

「よしっ！掛かった！」

「うわっ！？」

左にいた子を押さえ込み、地に伏せる。

直後、頭上を何かが通過した。

それが、さっき投げた木片に当たって落ちてくる。

「あっ！変わり身の術…」

「そうだな。それにしても、これは唐辛子の粉か…」

「うう…」

「成功した？」

「どうだろうな」

「あっ…」

「動くなよ。動けば、この唐辛子をこいつに食わせる」

「うっ…」「ええっ！？」

「さあ、立て。お前は人質だ」

「……………」

腕輪を外しておいた人質と唐辛子入りの袋を盾にして、少しずつ下がっていく。

一、二、三…。

「よし。行け」

「んむ!？」

袋を人質の口に押し込み、前へ突き飛ばす。
腕輪を返すのも忘れずに。

「うああ!辛っ!辛い!」

「もう!逃げられちゃったじゃない!」

「水!水!」

「バツカじゃないの!?!それ、飴でしょ!」

「え?あれ?」

唐辛子の粉か。

持って帰ったら灯が喜ぶだろうか。

口をきちんと縛って、懷にしまっておく。

「やあっ!」

「おっと」

「うべっ…」

後ろから突っ込んできた影を避けて、腕輪を確認する。

…って、光じゃないか。

腕輪は付いてないみたいだけど…。

「ほら。立てるか?」

「うん」

「どうしたんだ?」

「さっき、出来なかったから」

「ん？ああ、そういえばそうだったな」

「えへへ。抱っこ」

「はあ…。仕方ないな」

抱き上げて背中をゆっくり叩いてやる。

光はグリグリと額を擦りつけてきて。

龍紋も綺麗に浮かび上がっている。

本当に楽しみにしてたらしい。

…さっきは悪いことをしたかな。

「ん」

「よしよし」

「えへへ」

ここが戦場であることを忘れるくらい。

当たりの交代に相当手間取ったのか、ここぞと言わんばかりに光は甘えてくる。

…それに応えてやりたいのはやまやまだが。

「もうそろそろ終わりだ」

「むう…」

「投げ上げるから、そのまま飛んで逃げる。左回りなら抜けられるだろう」

「…うん」

「よし、いくぞ。三、二、一…そら！」

投げ上げた直後、前に見えた落とし穴に飛び込む。

次の瞬間、閃光が炸裂する。

「あつ！一人逃げた！」

「光だ。追いつけないよ！」

「もう一人は？」

「えっと…。あれ？」

地面に下りてきた三つの足音。

近くをウロウロしている。

充分探索すると、ちょうど真上に集合して。

「おつかしいなあ…」

「二人、確かにいたよね？」

「いた」

「どっちか、見てなかったの？」

「俺たちが閃光にやられてたら意味ないだろ」

「じゃあ、誰も見てなかったの？」

「……………」

「はあ…。仕方ない。まだ近くにいますはずだ。光より速いやつなんていないんだから」

「搜索だな」

「さっきの誰かか、他の誰かを見つけたらすぐに報せるんだぞ」

「うん」「分かってるって」

「よし、解散」

そして、三つの足音はそれぞれの方向へ散っていった。

…この落とし穴はあの三人が作ったものではないらしい。

気配が完全に消えたところで隠れ蓑を取って、地上に戻る。

さて、三方向に均等に散っていったからな。

どこに行くか…。

「あつ！ 飴のお姉ちゃんだ！」

「追いかけるよ！」

「おっと。見つかったか」

唐辛子の二人が追いついたらしい。
とりあえず、一步後ろに飛びのく。

「やあ！」

「おい、危ないぞ」

「え？」

飛び掛かってきた一人は、そのまま落とし穴に落ちた。
それを見て、もう一人は左から回ってきて…。

「そら、唐辛子だ」

「もう引つ掛からないもんね」

そう言つて、投げた袋を叩き落とす。
中からは赤い粉が出てきて。

「うわっ！唐辛子！」

「ふふ、じゃあな」

「あっ！ま、待て…」

「目に入つた！痛い、痛い！」

「もう！ただの食紅の粉でしょ！」

「え？あれ？ホントだ。辛い」

二人とも食紅を全身に浴びて真っ赤になつたのを見届けて、次の場所へ。

落とし穴を作つたやつは相当イタズラ好きらしい。
底に食紅なんか敷き詰めて。

…私もあと一瞬気付くのが遅かつたら、真っ赤になるところだ

った。

「あ、いろはお姉ちゃん」

「ん？リユウか」

腕輪は…してないな。

「調子はどうだ？」

「えっとね、一回当たりになっちゃったの。でも、和正が助けてくれて、すぐに戻れたの」

「ほう」

ずっと思っていたが、ここの追手の変わっているところは、当たりがだいたい二人から四人の班で行動しているところだ。

獲物が班の人数より少なくても、交代のときに喧嘩することもない。…互いが互いを思いやり、助け合う。

自分が不利益を被るとしても。

そんな精神を学ぶ場所になってるんだな。

「それでね、ハルお兄ちゃんから差し入れを貰ったの。はい、これ」

「おっ、ありがとう。それにしても…ハルお兄ちゃんって？」

「うん。狼さんですごく格好良いの。朝、いろはお姉ちゃんがいな
いときに来たんだけど」

「ふうん…」

遙だな。

ハルと名乗ってるのか。

そのまんまだけど。

…それにしても、この饅頭はお茶が欲しくなる味わいだな。
ふむ…どうしたものか…。

「はい、どうぞ」

「ん。ありがとう……って、はる……」

「うん、ハルだ。うん」

「あ、ハルお兄ちゃん」

「饅頭、だいぶ配ってくれたみたいだな」

「うん！」

「よしよし。良い子だ」

「えへへ」

「それで、お前は何しに来たんだ」

「見て分からないかな。お茶を持ってきたんだよ。喉が渴いてきたころだと思って」

「そうか」

「じゃあ、リュウ。一緒に配りに行こうか」

「うん！」

「リュウを当たりにしないように気をつけろよ」

「ああ。紅葉も」

「分かってる」

そしてハルは軽く手を振ると、リュウと一緒に茂みの向こうへと歩いていった。

…よし、だいぶ日も傾いてきた。

もう一踏ん張りだな。

油断大敵。

しっかりとカブトの緒を締めていこう。

「注目、注目」

「何回当たりになった？」

「わたしは一回だけだったの」

「へえ、すごいね」

「えへへ、そうかな」

「注目だってば！」

「はい」「分かったよ」

「うおっほん！では、結果を発表する」

「……………」

「今回、武勲章を獲得した者がいる。それは紅葉だ」

「おお」「やったね」

「紅葉、前へ」

子供たちの横から回って前へ出る。

すると、頭ひとつくらい低い和正がなぜか得意げに胸を張っていで。

「武勲章を渡せるのは、みんなの主導者だけなんだぜ」

「ああ、なるほどな」

「和正が一番年上だってだけでしょ」

「そうだよ」

「う、五月蠅い！とにかく、武勲章の授与だ」

後ろの大きな石の上に置いてあった何かを取って、こちらに振り向く。

その何かは、石で作った勲章だった。

「武勲章、授与」

「はい、拍手！」

「おめでと〜」「結構久しぶりだよね」

盛大な拍手と例の双子による草笛の演奏の中、武勲章を受け取った。よく見ると石には精密な細工がしてあり、今日の日付まで彫っていた。

「前は遙だったからな」

「ほう。遙もやったのか」

「うん。すごかったんだぜ」

「ふうん。見てみたかったな」

「また今度な。今日は遙は家出してるって聞いたから誘えなかったんだ」

「そうか。それは残念だ」

後ろの方に立っているハルをチラリと見る。

ハルは何かを聞くように首を傾げて。

「よし。じゃあ、武勲章受章者から話がある」

「え？」

「そういうしきたりなんだよ。なんでもいいから話すんだ」

「あー、そうだな…」

なんか、前にもこんな風に話を振られたような記憶がある。

あれは美希からだったな。

さて、何を話したのか…。

「あー、本日、この荣誉ある章を受けられたことを大変誇りに思います。今回のことを励みとして、更なる高みを目指してゆく所存で

あります」

「何を言ってるのか分かんない」

「あー、まあ、そうだな。武勲章を貰って嬉しい。これからも更に良くなるように頑張る、ということだ」

「おおー」「私も頑張るよ！」

「よし。これで授与式も終わりだ。最後にもう一度確認するけど、みんな、怪我はないな」

「ないよ」「大丈夫」

「うん。それじゃあ、解散！また明日、思いっきり遊ぼうぜ！」

「」「おおーっ！」「」

そして、太陽も沈みかけた赤い世界の中、家路へと就く。ピカピカに磨かれた勲章は、夕日を反射して輝いていた。

家に帰ると屋根にカイトが泊まっていて、一所懸命に羽根繕いをしていた。

「夜の遅めって言ったのに」

「む？ああ、お帰り」

「ただいま」「ただいま」

「なんかおつきい鳥がいる」

「ありや？タルニアにくっついてた不死鳥じゃないのか？」

「ん？ふむ。なるほどな。しかし、桐華をあまり困らせてやるなよ」

「分かった分かった」

「ハルお兄ちゃん、この鳥と知り合いなの？」

「まあね。って、そういえばリュウは、こいつが喋っててもあまり驚かないんだな」

「うん。ずっと前に見たことがあるの。この鳥じゃないけど……」

「私には、我が主から貰ったカイトという名がある。出来ればそち

らで呼んでほしいのだが」

「気に入ってるんだな」

「我が主に貰った、一番最初の贈り物だ。気に入らないわけがないだろう」

「まあ、そうだな。それで、なんでこんなに早くに来たんだ？」

「望がな。早く返事が欲しいからと、届くのは明日の朝だと何度言っても急かすのでな」

「向こうに着くまでそんなに時間が掛かるのか？」

「いや、十分ほどだが、それでも言っておかないと寝ないだろう」

「ああ……」

それはありえるかもしれない。

美希や香具夜がいるとはいえ、望はあれで結構頑固だから、夜が遅くなると言えば手紙が到着するまで起きているだろうな。

そうなれば、響や祐輔、夏月なんかも起きてる可能性も出てくるわけ。

「手紙って？」

「ああ、そういえば、リュウには言つのを忘れてたな。まあ、夕飯を食べながら話すよ」

「うん」

望とリュウか。

見ず知らずの二人が手紙を交わすとは、なんだか面白くなりそうだ。

チビたち三人は夕飯も早々に切り上げて、手紙を描くのに一所懸命になっていた。

私たちはそれを眺めながら少し雑談。

「あ、そうだ」

「何？」

「何か足りないと思ったらさあ、男っ気がないのよ」

「はあ？なんだ、それは」

「六人も集まっつてさ、男の人が一人もないんだよ」

「…そんなに男が好きなら、旅団に戻ればいいじゃないか。あつちは男の方が多いだろ」

「ち、違っつよ！そんなんじゃないって！なんというか、華がないというか」

「…普通は逆だけどな」

「ん？」

「まあいいじゃないか。女三人の中になんて、男も入っつてきにくいだろ」

「そうかもしれないけどさ。…あ、そうか。いつもなら利家がいるんだね」

「兄ちゃんは政務で忙しいから。なかなか帰っつてこれないんだよ。たぶん」

「たぶんっつて…」

「そういえば、兄ちゃんっつて全然気にしないよね、男とか女とか。姉ちゃん以外は」

「ん？ん？今、なんか聞き捨てならないことが」

「…風華」

「いいじゃない、別に」

「何？すっつごく気になるなあ。情報屋として」

「兄ちゃんは、姉ちゃんのことを女性としてみてるっつてこと」
「……………」

「ほうほう。二人は恋仲っつてこと？」

「違っつよ。もう結婚してるんだ」

「えっ、じゃあ、紅葉っつてば皇后さまっつてこと？」

「そうなるね」

「はあ、こりやすごい情報だ。紅葉が結婚。色気も何もない紅葉が」

「う、五月蠅い！もういいだろ！この話は終わりだ！」

「うん？照れてる？可愛いなあ」

「五月蠅い！オレはもう寝る！」

「手紙、書かないの？」

「あ…そうだった」

「愛しの利家陛下にも書きなよ」

「お前は黙ってる！」

遙を一度睨み、チビたちのところへ行く。

チビたちは気付いてないのか、黙々と手紙を描き続けて。

私も筆と紙を取り、手紙を描いていく。

利家宛にも一通書くかな。

…ニヤニヤする二人に、描き損じらしい丸められた紙くずを投げた。
おいた。

「そっかあ。灯、なんかいろいろやってるんだね」

「そうだな。鬼のいぬ間に命の洗濯、か」

「鬼はいるでしょ？美希とか香具夜とか」

「まあな。ていうか、主にその二人が鬼だ」

「あはは、怒られるよ」

「風華もな」

「それにしても、たくさんあるね。これが望。これがユカラ。これは…」

「よく分かるな」

「うん。裏に名前が書いてあったから」

「なんだ、つまらん」

「そりゃ、絵だけじゃ分かんないよ。みんなの描いた絵を見たことがあるわけじゃないし」

「まあそうかもしれんが」

絵だけを見てスラスラと答えるものだから、少し期待したじゃないか…。

でも、絵と名前の関連付けが出来てるだけでもすごいかな。

「灯の絵は何回見ても下手つぴだね」

「見るたびに絵が変わるわけじゃないからな」

「もう…そういうことを言ってるんじゃないでしょ」

「分かってるよ…」

「うん、まあね。それより、これ見てよ。美希はマメだね。ほら、この紙を灯の絵に重ねて光に透かしたら、解説が読めるんだよ」

「ほう。灯を横に置いて聞きながら書いたんだろっか」

「さあ…。でも、灯がないと分からないよね」

「まあ、それはそうだが」

この絵が分かるのは葛葉くらいだろうな。
葛葉は熱心にこれを見てたし…。

「ん？ちよつと待て」

「え？」

「今の紙」

「これ？墨が乾いてなかったから当てた紙だけど」

「いや、柑橘系の香りがする」

「ええ？じゃあ、これって…」

「たぶんな」

「へえ。誰が描いたんだろ」

「さあな」

「炙ってみようか」

「いや、葛葉たちが帰ってきてからの方がいいだろ」

「あー、うん。そうだね」

たぶん、香具夜か美希あたりが気を利かせたんだろうな。
何が描かれてあるんだろ。

「これは兄ちゃんだね」

「なんだこれは。城の見取図か」

「違うでしょ。ここの見取図だよ」

「いや、どちらにしろ、なんでこんな絵を描いてるんだ」

「姉ちゃんが迷わないようにじゃない？」

「どうやって迷うんだ」

「さあ…」

「ん？でも、この絵からすると二階があるのか？」

「ああ、うん。二階というか屋根裏だけだね」

「ほう」

「居間の裏のところに階段があるんだ。行ってみる？」

「ああ」

「こっちだよ」

そう言っただけで立ち上がる。

見取図には階段もきちんと描かれていて。

「えっと、ここなんだけど」

「問題でもあるのか？」

「いや、なんでもないけど……」

「……？」

「や、やっぱりちょっと待ってて」

「ああ、いいけど」

そして、風華は慌てて階段を上がっていった。

何なんだろ。

長い間留守にしていたから、埃が溜まっているんだろうか。

…それにしても、何回もここを通っているのに気付かなかったな。

納戸が何かだと思ってた。

でも、よく考えてみると、納戸としては幅が狭いし位置的にも納得がいかないな。

「こら！ダメだって！ちょっとどこかに行ってて！」

…何なんだろ、ホントに。

バタバタと暴れまわるような音がしたり、何かが倒れるような音がしたり。

犬か猫でも飼ってるんだろうか。

でも、それだったら城に連れてくるはずだし…。

「もう、分かった分かった！私が悪かった！」

村の人に世話の代行を頼めなくもないが…。

でも、それなら屋根裏に置いてる理由が分からない。

ふむ…。

「よし」

行ってみるか。

階段を一段ずつ上がっていく。

風華はまだ気付いてないようで、謎の何かにブツブツと語りかけていた。

そして、この一段を上げれば問題の屋根裏が見えるというところで一旦止まる。

音を立てないようにゆっくりと覗いてみると…

「姉ちゃんが待ってるから。早く行って」

「グルル…」

「ね、お願い」

「ウウ…」

龍がいた。

龍だ、確かに。

燃えるような、赤い龍。

「えらく甘えただな」

「わっ、姉ちゃん！？」

「ウウ…」

「オレは敵じゃない。信用しないなら、それでもいいが」

「……………」

「よしよし、良い子だ」

「ね、姉ちゃん…」

「あんまり遅いんでな。それに、声も音も丸聞こえだったぞ」

「うう…」

「しかし、なんで龍を飼ってることを隠すんだ」

「この子、すぐく人見知りだから、知らない人にはさっきみたいにすぐに威嚇するんだ…」

「それで会わせたくなかったと」

「うん…」

赤い龍は、その大きな身体を風華の陰に隠すようにして。

…それにしても、こんなのが頭の上にいるなんて気付かなかったな。最近はずっと平和だったから、勘が鈍っているのかな…。

「ここに住んでたときは、屋根裏で寝てたんだ。この子と一緒に。

葛葉もリュウも、いろんな家に行ってたし、ここに来たときは兄ちゃんと寝てた」

「知ってるのは風華と犬千代くらい、というわけか」

「うん。あと、桜と隼かな」

「ハヤテ…？ああ、空の弟か」

「そうだよ。留守中の世話はずいに頼んでたんだ。まあ、この子だけでも大丈夫なだけだね」

「まあ、それはいいが。あ、そうだ。セトを見たとき、初めて見た風な様子だったじゃないか。こいつを知ってるのに、なんで」

「毛の生えた龍は初めてだったし。ていうか、龍だってこの子とセトしか知らないよ」

「ふうん…」

「それに、初めて見たとは言ってなかったと思うけど」

「ん？そうだったか？」

「たぶんね」

そして、イタズラっぽく笑った。

「それにしても、こんなやつが上にいたなんて気付かなかったな……」
 「いつもここににいるわけじゃないからね。本当の家は森の中にあるんだ」

「ほう」

「まあ、ずっと奥の方なんだけど。前の遠足のときに説明した熊の住処よりもまだ向こう。人もほとんど近寄らないし、食べ物もいっぱいあるから」

「行ったことがあるのか？」

「何回かね。蓮と一緒に行けば、他の動物も近付いてこないんだ」
 「レン……？こいつの名前か？」

「あ、うん。ハスって書いてレン。私が付けてあげたんだ」

「ふうん。蓮か」

鱗で覆われた背中を撫でると、喉を鳴らしながら額を腹に押し付けてきた。

えらく大きな甘えん坊だな。

「もう一人いるんだけど、その子はあまり森から出てこないんだ」
 「なんでだ？」

「今みたいはこの子たちと話せなかったから、詳しいことまでは分からないけど……」

「そうか。今は話せるのか」

「うん。セトで訓練したから。コツもバッチリだよ」

「ふふ、コツか。オレは考えたことなかったな」

「そりゃ、姉ちゃんはずっと狼と一緒に暮らしてたんだから」

「んー。まあ、そうかもしれんな」

「でね、その子の名前が伊織っていうんだ」

「ほう。男か？」

「え？女の子だけど」

「……………」

「どうしたの？」

「いや、もともと伊織っていうのは男の名前なんだ。今はどっちにも付けるけどな」

「へえ。知らなかった」

「しかし、甘えん坊の蓮に、出不精の伊織か」

「あはは……。伊織は森から出ないだけで、出不精じゃないけどね……」
「ふうん」

伊織か。

見てみたいな。

どんなやつなんだろうか。

「……なあ、蓮。伊織ってどんなやつなんだ？」

「グルル……」

「それじゃ答えになってないぞ」

「オオン……」

「いや、撫でるけどさ……」

「もう、蓮。ちゃんと答えなさいよ」

「ウウ……」

「え？なんで？喧嘩でもしたの？」

「……………」

「はあ……」

「なんで喧嘩したんだ」

「……………」

「黙ってちゃ分からないだろ」

「……………」

蓮はプイとそつぽを向くと、不機嫌そうに長い尻尾を左右に振る。
…身体は大きいのにまだまだ子供だな。

「よし。じゃあ、行こうか」

「えっ、どこに？」

「森に決まっているじゃないか」

「ええっ!？」

「なんだ、不都合でもあるのか」

「うーん…」

「チビたちの昼は、旅団天照で面倒を見てもらえばいい。オレは他に困ることもないし」

「私もないけど…」

「じゃあ行こう」

「うん…」

「なんだ。問題があるなら言えはい」

「うん…。ちよっと…」

「ん？」

「さっきも言った通り詳しいことは分からないんだけど、伊織が森から出てこないのは病気がちだからみたいなんだ…。それでね、人一倍警戒心も強くて、なかなか懐いてくれなくて…」

「風華にもか？」

「私には懐いてくれてると思うんだけど、もしかしたら思い込みかもしれないし…」

「思い込みじゃないだろ。しかも、そう思ってることで伊織を傷付けてるかもしれない」

「グルル…」

「うん、ありがと…。えへへ。なんだか自信が出てきたよ」

「ふふ、その調子だ」

「じゃあ、私から伊織に姉ちゃんを紹介すればいいんだね」

「ああ。頼む」

「分かった」

風華はスツクと立ち上がると、握りこぶしを作って。
よし。

じゃあ、行くか。

嫌がる蓮を連れて、家を出る。

遙が旅団に戻ると、またいつも通りになってしまった桐華。
宿営地の端っこで、暢気にお茶をすすっていた。

「紅葉も飲みなよ。美味しいよ」

「それもいいが、チビたちの今日の昼を頼みたいんだ」

「ああ、いいいいいよ。任せて」

「すまないな」

「それで、あの子は何なの？風華が飼ってるの？」

「いや。飼ってるというか、屋根裏に住み着いてると言っただ方が正しいんだろうな」

「ふうん」

「あいつの家族が森にいて、どうやらそいつと喧嘩したらしいんだな」

「へえー。それで、仲直りさせに行くんだ」

「ああ。ところで、龍の病気に効く薬とか知らないか？」

「んー？龍薬のことかな？情報はあるけど実物はないよ」

「どこにならある？」

「そうさねえ。龍の住む村って噂の龍在村にならあったかな。あとは、ユンディナ旅団だね。でも、ホントに龍に効くかは分かんないよ」

「ああ。分かった」

龍薬か…。

龍在村といえば、ルイムナでもかなり南の山の奥だな…。

ユンディナ旅団から買っにしても、その旅団がどこにいるかも分からない。

そのうち、ユールオにも来るけど…。

「まあまあ。効くかどうか分からない薬をアテにするより、今出来ることをすればいいんじゃない？とりあえず薬草を与えてみるとかさ」

「ああ。そうかもしれん」

「でさ、どんな病気なの？龍の病気なんて聞いたことないから、興味津々だよ」

「さあな。オレは会ったことないから。それに、他人の不幸をそうやって嬉しそうに聞くのは感心しないな」

「嬉しそうには聞いてないけどさ…。でも、ごめん…」

「分かればいい」

「お詫びに、このお茶、あげるよ」

「いや、それはお前の飲みさしだろ。そんなのはいらん」

「ええ…」

「ええ…じゃないだろ、まったく…」

「姉ちゃん、どうしたの？」

「あ、いや、桐華がバカなことばかり言うからな」

「ええっ！ぼくのせい！？」

「事実なんだから仕方ないだろ」

「うう…。酷いよ、紅葉…」

嘘泣きを始めた桐華の頭を一発殴って。

まあ、さっきお茶は遙から貰ったからそれでいいか。

「じゃあ、頼んだぞ」

「うん。分かった」

そして桐華に軽く手を振って、森へ。

「今日は宴か？」

「たぶんね。旅団も今日で最後のはずだし」

「そうなのか？」

「たしか、そうだったと思う」

「ふうん」

「安全面を考えて、旅団と一緒に帰る方が良いと思うんだけど……」

「そうだな。盗賊に会ったばかりだし」

「うん。如月が退治してくれたみたいだね」

「油断は禁物だ。ああいう輩は、いつ、どこから湧いてくるかわからないからな」

「うん……」

「大丈夫だ。風華と蓮はオレが守るから」

「うん、分かってる。でも、思ってたことは違うの」

「ん？」

「姉ちゃんにボコボコにされる盗賊って可哀想だなんて思って」

「……………」

「あはは。冗談だよ、冗談」

「…ふん。本気であつてたまるか」

「ふふふ」

「冗談なら言わないでほしいよ……」。

本気にするじゃないか……。

「それにしても、本当に寄ってこないな」

「何が？」

「動物だよ。気配はするんだけど……」

「あ、うん。そうなんだ。不思議だよな」

「ここはまだ道があるからな。人間を恐れて寄ってこないのかもしれないが」

「森の奥でもそうだよ。全然寄ってこないんだ。その方が安心出来るけどね」

「ああ。まあ、風華はそうだろうな」

「姉ちゃんは寄ってきてほしいの？」

「さあ、どうだろうな。城に行ってから他の動物と話す機会がなくなってしまったから、久しぶりに話してみたいという気持ちはある」

「でも、やっぱり話したくない？」

「いや、話したいが踏ん切りがつかないというのが正しいだろうな。すっかり人間になった自分が、自然に生きる者と対等に語らうことが出来るのか、なんて考えたりするんだ」

「人間だって自然の一部でしょ？人間だけが、自然から切り離された、別の世界で生きてるなんてことはないんだから。人間だって自然の一部。自然は、人間が考えるよりも、ずっとずっと広いんだよ」

「…ああ、そうだな。人間だけが特別じゃない。人間だって、この世界に生きている一員なんだ」

「うん」

人間だって自然の一部、か。

いつの間に、こんな境目を作っていたんだろう。

私にも分かっていたはずなのに。

私だから、分かっているはずなのに。

狼として、人間として、生きてきた自分だから。

「あ、広場だよ」

「ん？この前の？」

「うん」

「へえ。ヤウトの目と鼻の先なんだな」

「そうだよ。遠足のときにも、森を抜けて村に出た子もいたんだよ」
「ふうん」

「まあ、みんなにも説明はしてあったんだけどね。村の子と遊んでた子もいたみたい」

「ユールオとヤウトの交流だな」

「うん」

それなら、また企画してもいいな。

今度はヤウトまで行こうか。

「私、姉ちゃんが考えてること、分かるよ」

「奇遇だな。オレも分かるぞ」

「ふふふ。じゃあ、また遠足に行こっか」

「ああ。そうだな」

風華と私が笑い合っているのを、蓮は不思議そうに見ていた。

広場で一休みして、また歩き始める。

いよいよ道から離れ、森の奥へと進んでいく。

「懐かしいな」

「ん？森の中が？」

「ああ。こんなに奥まで来るのは、本当に久しぶりだ」

「へえー。そういえば、城に行ってからほとんど外に出なかったって言ってたね」

「そうだな。子供の頃は訓練、母さんが死んで父さんが衛士を辞めてからは衛士長として。出なかったというか、出られなかったんだな」

「ふうん。大変だったんだね」

「そう…だな。大変だと思う暇もなかった。特に、前王の時代は」
「私たちが倒しちゃったあれだね。今はどうしてるんだろ」

「さあな。意外と近くにいたりして」

「はは…。もしそうだとしたら、笑えないね」

「まあ、大丈夫だろ」

あいつに力は残っていなかった。

それまで頼っていた王としての権力も、人間としての知力も、生き物としての生存力も。

どうなったのかわなくて、考えたくはないが。

「ワウ」

「ん？今の、蓮か？」

「うん。たまに犬みたいな鳴き方をするんだ」

「オン」

「変なやつだな」

「んー、そうかも」

「……………」

「はは、拗ねない拗ねない」

「それより、まだ掛かるのか？」

「そうだね。あと半刻近く掛かるかな」

「そうか…。早めに済ませて早めに出ないと、宴に間に合わないな」

「あ、そうだね」

「お前も、早く仲直りするんだぞ」

「……………」

「強情になってると、いつまでも擦れ違ったままだぞ。たまには自分から折れないと」

「そうそう。いつも伊織から謝ってるもんね」

「なんだ。そんなに頻繁に喧嘩してるのか」

「蓮がうちに来るのは、喧嘩したときか寂しいときか。そのどっち

かがほとんどだよ。まあ、そのまま何泊もしたりして、結局ほぼ毎日いたりするんだけどね」

「ふうん。じゃあ、伊織が寂しがってるんじゃないのか？」

「そうだね…。でも、そんなの知らないとかいったかんじで…」

「……………」

「喧嘩の原因は、お前のその態度にあるんじゃないのか？」

「オオン…」

「まあ、その判断は伊織にも話を聞いてからだな」

「伊織、体調崩してないといいんだけど…」

「そうだな…」

「…ねえ、お城に連れて帰ったらダメ？」

「それが伊織の幸せになればいいが、ほとんどの場合、そうはならない。連れて帰ったことで、さらに負荷が掛かって病状が悪化することもある。薬師なら分かることだろう？」

「…分かんないよ。苦しんでる子を見て、それでも放っておくなんて…私には出来ない」

「放っておくんじゃない。あるがままでそっとしておくのが一番良いんだろっ、ということ saying っているんだ」

「同じだよ…。近くにいれば、容態が変化してもすぐに分かる。すぐに治療が出来る。そうと分かっててやらないのは、見殺しにするのと一緒にだよ…」

「じゃあ聞くが、なんでお前は今までそうしようと思わなかったんだ。いくらでも、その機会はあったはずだろ」

「それは…兄ちゃんが反対したから…。それに、龍の知識もなかったし…」

「ふん。結局、お前の覚悟はそんなものだったんだ。利家の反対や知識の不足くらいで、伊織の治療を断念する。その程度だったんだ」
「……………」

風華は俯いて、唇を噛んでいた。

相当悔しいのだろう。

でも、あと少しのところまで来ているはずだ。

「私は…」

奥歯を噛み締めて、言葉を絞り出す。

そしてこちらに向き直り、真っ直ぐに。

「私はもう逃げない！私は、伊織の…伊織と蓮の家族だから！」

森の奥深くまで響いたその決意。

はつきりと受け取ったぞ。

ちょうど腹が鳴り始めた頃、切り立った崖の足元にある大きな洞穴の前に出た。

中からは、水の匂いと微かな獣の匂いがする。

「ここか」

「うん。この奥」

「……………」

「もう…蓮が怯えてたら話にならないでしょ？」

「ウウ……………」

ズリズリと後ろに退がっていく蓮。

風華はその首根っこを掴んで、厳しい目で見詰める。

「ウウ……………」

「イヤだ、じゃないでしょ？ほら、行きなさい！」

「オオン……………」

「…やつぱり、喧嘩の原因はあなたにあるんでしょ。だから、帰れない」

「……………」

「まだ掛かりそうみたいだし、先に行ってるぞ」

「あ、うん。ごめんね」

「…分かってるか？」

「何が？」

「…まあいいか。」

蓮を叱る風華を置いて、洞穴に入る。
懐かしい。

私の家族も洞穴に住処にしていた。
この上なく快適な家だったな…。

「ウウ…」

「ん？お前が伊織か？」

「ウウ…」

「唸っていても分からないだろ」

「……………」

「そうだ。良い子だ」

「……………」

「オレか？オレは紅葉って名前だ」

「……………」

そして、暗がりから少し出てきて空気の匂いを嗅ぐ。

風華や蓮の匂いがしたんだろう。

首を傾げて、もう一度確める。

「どうだ。良い匂いでもするか？」

「……………」

「ほら、疑うなら直接嗅げばいい」

一歩、近付く。

すると、少し驚いた様子で身を竦め、牙を見せる。

「警戒することもないだろ？オレが怪しいやつに見えるのか」

「ウウ…」

「そんなだと、風華にも蓮にも嫌われるぞ」

さらにもう一歩近付く。

伊織は牙を剥いたまま、同じ分だけ退がる。

「つれないやつだな」

「ウウ……」

「ほら、こっちに来い」

屈んで、伊織と目の高さを合わせる。

それでも、いつでも飛び掛かれる体勢は崩さない。
屈んだまま、ゆっくりと前に進んでみる。

伊織と視線を外さないようにして。

「ウウ……」

「……………」

唸ってはいるが、後ろに退がらなくなった。

ひとつ、進展だな。

そのまま近付いていく。

「ウウ……」

「……………」

すぐ目の前まで来て。

そっと手を伸ばす。

「ガウ！」

「……………」

グツと力を込める。

伊織の牙の間から、血が滴り落ちる。

「あっ！姉ちゃん！」

「待て、風華」

「で、でも…！」

「伊織。これで分かったか？オレはお前の敵じゃない。まだ分からないなら、そのまま食い干切ってしまってもいい。それで分かってくれるなら、腕の一本や二本、安いものだ」

「姉ちゃん！何言ってるの！」

「静かにしていてくれ」

風華に目配せする。

すると、まだ何か言いたげに口をパクパクさせたが、グツと言葉を飲んでくれた。

そして、もう一度伊織を見る。

ギリギリと腕を噛む力は変わらない。

…伊織の目は迷っていた。

私を信用してもいいのか。

それとも、仕留めてしまった方がいいのか。

それでも、真っ直ぐに私の目を見詰め返して。

「……………」

「……………」

噛む力が弛んだ。

腕を見ると、はっきりと歯形が付いていて。

「姉ちゃん！傷、見せて！」

「こんなの、舐めとけば治るよ」

「ダメだよ！伊織も舐めないの！」

「オオン…」

「うわぁ…酷い…。ちょっとそのままにしてて」

「ん？ああ、分かった」

風華は血がダクダクと出ている腕に手をかざし、意識を集中させる。
何が始まるのか、ジッと待っていると

「ん…？」

「動かないで！」

「あ、ああ…」

なんだ…？

傷がみるみる小さくなっていく。

そして、数秒の後に傷は完全に消えてしまった。

「……？」

「はあ…。ホント、姉ちゃんって無茶するよね…。ユカラのときも
そうだったけど…」

「性格だろうな。しかし、今、何をしたんだ？」

「術式だよ。前にも何回か見せたでしょ？」

「ああ、雨を降らせたりするやつか」

「うん。今使ったのは”治癒”の術式だけど」

「ふうん…」

目の当たりにしても…実際に術式の対象となった今でも、信じがたいものは信じがたい。

でも、傷が一瞬で治ってしまったのが、今ここにある真実だ。

不思議な力…なのか。

「それより伊織。どういうことなの？なんで、姉ちゃんの腕を噛んでたの？」

「いや、それはだな…」

「姉ちゃんは黙ってて。伊織がやったことは伊織に説明してもらおう

から」

「でも……」

「でも芋もないの。弁護するなら、伊織が話してからにして」

「はぁ……」

こうなると勝てないな。

助けを求めるようにこちらを見る伊織に、首を振って諦めるように諭す。

「伊織？」

「ウウ……」

「唸ってちゃ分からないでしょ」

「………」

「逃げようたって無駄なんだから」

「……？」

「私だってね、ただなんとなく毎日過ごしてるわけじゃないんだよ。今だったら、伊織が言ってること、分かるんだから」

「……！」

「だから、声に出して考えてたら分かるからね」

「オオン……」

「ダメ」

キツと伊織を睨み付ける風華。

……なんだか、妹を叱る姉を見てる気分だ。

いや、娘を叱る母だろうか。

「伊織。ちゃんと言わないと、お昼ごはん作ってあげないからね」

「………！」

「じゃあ、早く話さない」

「………」

「黙ってちゃ分からないでしょ」

「オオン…」

「謝ってもダメ」

… まだしばらく昼ごはんにありつけそうにないな。

そういえば、蓮はどこに行ったんだろうか。

洞穴に入ってきたのは風華だけだったみたいだし…。

昼ごはんでも探しに行ってるのかな。

「伊織！」

「オオン…」

… 厳しいな、風華は。

それだけ愛情を注いでいるってことなんだけどな。

「ねえ、伊織。私たちと一緒に来ない？」

「……？」

「なんでって…。伊織のことが心配だからだよ」

「………」

「ねえ、伊織ってば」

「ウウ…」

「なんで怒るのよ。心配して言ってるのに」

「心配は押し付けるものじゃない。そうとは思ってなくても、そんな言い方をすると誤解される恐れがあるぞ」

「あ…うん…」

「それと、伊織もだ。すぐには決められないことだとは思う。風華のことも五月蠅いと思うだろうが、そんな態度を取ることもないだろ。嫌なこと、言いたいことがあるなら、ちゃんと伝えるんだ」

「………」

伊織はフイとそっぽを向いて、そのまま前足に頭を乗せて目を閉じた。

あっちへ行けと言わんばかりに尻尾を振って。

「…一人にしてやろう」

「でも…」

「伊織にも考える時間が必要だ。風華じゃないんだから」

「うん…。分かったよ…。って、今の、どういう意味？」

「何の話だ」

「もう！私だって悩み事くらいあるんだから！」

「そうか。それはよかった」

「姉ちゃん！」

頬を膨らませている風華を連れて洞穴から出る。
すぐ外では蓮が身体を丸めて退屈そうに目を瞑っていた。

「お前も早く仲直りしろよ。いつまで強情を張ってるつもりなんだ」

「……………」

「そつだよ。ずっと外にいるの？」

「……………」

不機嫌そうに尻尾を振る。

…難しいやつらだな、ホントに。

風華に合図をして、しばらく森の中を散歩することにした。

「私たちが帰ってくるまでに仲直りしなさいよ」

「……………」

「まあ、無理だろうな」

「もう…。そういうこと言わないの」

「はいはい」

蓮の背中を撫でて森の中に入る。

風華も遅れて付いてきて。

…ここに来てから、ずっと感じていたこと。

それを今も感じる。

懐かしい。

森全体の匂いこそ少し違うが、個々の木や草の匂い、いろんな声や音、何かがいる気配。

あの頃と変わらない…。

「どうしたの？」

「ちよつとな。懐かしくて」

「ふうん。森で生活してたもんね」

「ああ」

「…寂しい？」

「どうして」

「…ううん。なんでもない」

そう言うと、風華は目を伏せて。

…寂しくないと言えば嘘になるんだろうな。

母さんやお姉ちゃんには、たぶんもう会えない。

私を知ってる森の住人はもういない…。

「オオン」

「ん？」

「あれ？」

そこにいたのは蒼い龍だった。

蒼い鱗の龍。

「小さいね。迷子かな」

「さあ。それにしても、この森は龍の森だな。なんでこんなに伝説の龍が住んでいるんだ」

「うーん。なんでだろ。龍にとって住みやすいのかな」

「まあ、食べ物豊富だけど」

「オオン」

「オレはお前の母親じゃないぞ。ていうか、どう見ても違うだろ…」

「この子の家族、どこに行ったのかな」

「さあな。その辺にいるんじゃないのか？」

「…適当だね」

「呼んでみればいい」

「呼ぶって…どうやって？」

「それが分かれば苦労はしない」

「もう！真剣に考えてよ！」

「ふむ…」

私たちを不思議そうに見上げる龍の子供。

ときどき、何か嬉しそうに翼をパタパタさせたりして。

「探し回るしかないのかな…」

「オオン」

「どうか。ジツとしておいた方がいいんじゃないか？」

「あ、そうだ。姉ちゃんが匂いを辿ればいいじゃない」

「こいつの家族が、ただここを通っただけの渡り龍ならいいが、こ
こを縄張りにしていたら匂いの特定は難しい。ある程度、新しい匂
いや古い匂いを嗅ぎ分けられてもな」

「そつか…。でも、やってみる価値はあるんじゃない？」

「いや、もうない」

「え？」

「もう確めた」

「なあんだ。じゃあ、言わないでよ…」

「でも、この辺に住んでるってことは分かったんだ。それだけでも
少し進展だろ」

「そうだけど…」

「オオン」

「そうだ。もっと母親を呼べ。そのうち気付くだろ」

「ウルル…」

「おいおい…。だから、違っって…」

子蒼龍は甘えた声を出しながら、私のお腹に額を擦り付ける。
うーん…困ったな…。

「思っただけどさ、姉ちゃんって子供に人気あるよね。みんな、すぐに懐くし」

「こいつは懐きすぎだ…」

「ふふ、いいじゃない。でも、なんでなのかな」

「そんなの、オレが知るわけないだろ」

「まあ、そうかもしれないけどさ」

と、すぐ横の草むらが微かに動いた。

どうやら、本当の母親がこちらの様子を窺っているらしい。

気配を殺してはいるが、動揺を完全には隠せなかったらしい。

風華と母親の間に割り込むように、立ち位置を変える。

…周りに他の気配はないな。

「ガウ！」

「ひゃっ！な、何！？」

「威嚇なんてするなよ。危害を加えてないのは一目瞭然だろ？それに、こいつも怯えてる」

「え？え？」

「……………」

少し間を置いて、草むらから蒼い龍が出てきた。

まだ警戒は解いてないが、子供の怯える姿を見て少し緩める。

「……………」

「さあな。こいつが勝手に懐いてきたんだ」

「……………」

「そんなの、オレが知るわけないだろ。こいつに聞けよ」

「……………」

「オオン」

そして、子龍は名残惜しそうに戻っていく。
それにしても、お姉ちゃんだった？

「母親はどうした」

「…ワウ」

「えっ、病気でって…。もういないってこと…?」

「……………」

「風華」

「あ、うん…」

「……………」

「そうか。元気でな」

「オオン」

「ああ。また来るよ」

「約束、だね」

「ウルル…」

二人では辛いかもしれないが、頑張って生きてくれよ。
また、会いにくるから…。

「あっ」

「え?どうしたの?」

「いや、なんでもない」

「何よ。変な姉ちゃん」

そうかもしれない。

いや、きっとそうだ。

あの姉弟は、あのときの龍の子供なんだ。

あのときの…。

「じゃあ、姉ちゃんを知ってる森の住人がいたんだ」

「ああ。人間は不釣り合いなくらい長生きするからな……。森にはもうオレの居場所はない気がしたんだけど、今、ひとつ見つけれられたみたいだ」

「ふたつでしょ？」

「……ああ。そうだったな」

目の前に再び現れた赤い龍。

蓮は出掛けたときのままの格好で、洞穴の前で眠りこけていた。

「おい、蓮。起きろ」

「……！」

「はあ……。それで、謝る決心はついたのか」

「………」

「そうだよ。他に誰が謝るのよ」

「………」

「ダメだよ。それに、蓮にはやってもらわないといけないことだってあるんだから」

「……？」

「伊織を引っ張り出すことだよ。なんとしても、伊織を城に連れて帰りたいから……」

「オオン」

「もちろん。蓮も一緒だよ。伊織の病気のことが気になるし、カイトあたりに聞けば何か分かるかもしれないって思ったんだけど……」

「……？」

「ああ、カイトってのは聖獣だよ。不死鳥なんだって」
「オオン」

「それは分からないけど…。でも、手掛かりくらいは知ってると思う。知識の量だけは豊富みたいだからね」

「あれでもっと堅苦しくなければ良いんだがな」

「ふふ、そうだね。でも、やっぱりあれくらいの威厳は欲しいかも」

「そうか？」

「うん」

「……………」

「そういうことだから。蓮、協力してね」

「……………」

「いつまでそんなこと言ってるのよ！蓮は、伊織のこと、心配じゃないの？」

「……………」

「じゃあ、お願い。意地なんて張らないで」

「……………」

蓮は一度、風華から目を逸らした。

そして、後ろ足で頭の裏を搔いて立ち上がると、また風華と目を合わせる。

「ウルル…」

「うん」

「よし。じゃあ、行こうか」

「ワウ」

一度身を震わせると、蓮は洞穴の中に入っていく。風華と私もそれに続いて。

目が慣れるのを少し待つて、さらに奥へと進む。

昼にいたところより、まだ奥に伊織はいて。

こちらに背を向けて丸まっていた。

「オオン」

「……」

「……」

「……」

「ウルル……」

「ウウ……」

「……！」

「ちよつと、伊織……」

「待て。口出しするな」

風華の口を押さえる。

こういうことは、本人たちで決着させるのが一番良い。
口出しするのは、どうにもならなくなったときだけだ。

「オオン……」

「……」

謝る蓮に向かって煩そうに尻尾を振る伊織。

蓮はしどろもどろになって、こちらへ助けを求めるような視線を投げ掛けるが、自分でなんとかするようと睨み返す。

「オオン……」

「ウウ……」

「……」

「ウウ……」

「ウルル……」

「……」

「オオン……」

「……」

そして蓮は伊織に近付き、額を伊織の腹に擦り付ける。
伊織はそっぽを向いて不機嫌そうに尻尾を振っていたが、それも次第に収まってくる。

「……………」

「オオン…」

「仲直り、だね」

「ワウ」

「なんで礼を言っただ。お前たちが自分で解決したんだろ」

「……………」

「うん」

「じゃあ、次は伊織だ」

「……………」

「オレたちと一緒に、城に帰らないか？風華はお前の身を案じて言ってるんだ」

「……………」

「伊織…！」

「オオン」

「そっだよ！蓮もこう言ってるんだし…一緒に帰ろ？」

「……………」

伊織は前足に頭を乗せると、ため息をついた。
城に行く気はないということだろうか。

「ウルル…」

「……………」

「ねえ、伊織…」

「……………」

「何か行けない理由があるのか？」

「え？そっなの？」

「……………」

「なんだ。言ってみろ」

「オオン」

「えっ、なんでよ」

「いいじゃないか。すまないが、少し外に出ていてくれないか？」

「…うん。分かったよ。行こ、蓮」

「……………」

「ね、行こ」

「……………」

そして、二人は洞穴から出ていった。

それを気配で確認すると、伊織は起き上がってこちらに向き直る。ジツと私の目を見詰めて、しばらくそのまま動かなかった。

やっと口を開いたとき、出てきた言葉は予想外にも予想通りのものだった。

「……………」

「ん？」

「オオン…」

「なんで、そう思うんだ？」

「……………」

「お前の知らない世界はたくさんあるだろう。その中に、お前の言う怖い世界もあるかもしれない。でも、それが全てじゃないだろう？ 蓮を見てみる。オレは今日知ったばかりだけど、あいつは全く物怖じしないで、いろんな世界に翼を広げていつてゐるってことは雰囲気に分かる。蓮は、怖い世界に出会ったからといって、進むのをやめない。その先に、今よりもっと良い世界があることを知ってるからだ。でも、それも最初から知ってたわけじゃない。何回も経験して、失敗して。それから知ったんだ。オレは、お前にも知ってほしい。怖がっていたら、何も見えないままだってことを」

「……………」

「ん？そうだな…。昔のオレがそうだったから。蓮からは、昔のオレと同じ匂いがする」

「……？」

「冒険と発見の匂いだ」

「……………」

「まあいいじゃないか。それで、どうだ。一緒に帰る気はないか？」

「…オオン」

「ふふ、そうだな。その向上心が重要だ」

「ウルル…」

伊織はゆっくりとこちらに近付いてきて、額を腹に擦り付ける。

私もそれに応えて、背中をゆっくりと撫でてやる。

すると、その手に逆鱗をそつと触れさせてきて。

…まさか、逆鱗にまで触らせてくれるとは思わなかった。

半日ほどでここまで信頼してもらえたのは嬉しい。

カリカリと逆鱗を搔いてやると、気持ち良さそうに喉を鳴らして。

ということ、風華と蓮への報告は少しくらい遅れてもいいよな。

森を抜けると、広場ではもう賑やかな宴が始まっていた。

「ありやあゝ。紅葉しゃんでねゝのゝ？」

「桐華。もう呑んでいるのか」

「あはは。いいじゃんゝ。今日でまたお別れなんだからあゝ」

「そうだよ。明日、二日酔いで起きられなくなっても知らないよ？」

「堅いこと言わないの。ほらあ、空も呑みなさあい」「うわっ、ちよつと！やめなさいって！」

「んふふゝ」

グイグイと盃を押し付けられて、空も呑み始める。

押しに弱いみたいだ。

…それより、遙はどこに行つたんだろうか。

遙がいたら、こんな時間帯にこんなに酔うまで呑ませないはずなんだが…。

「ほらほらあ、紅葉しゃんも呑みなってえ。番茶割りゝ」

「番茶割り？これ、ほうじ茶だろ」

「いいのら。番茶割りなのら」

「はあ…。またあとでな」

「ええゝ」

盃を持って迫ってくる桐華の頭を一発殴って、遙を探しに行く。

…風華に盃を渡そうとする桐華の頭をもう一発殴っておく。

そして風華の手を引いて、歩くお茶から離す。

「番茶割りかあ。私は水割りばかりだったなあ」

「オレは割ったことなんてないぞ」

「姉ちゃんは大蛇だから」

「いや、狼だ」

「ふふ、そうだったね」

「あつ、お母さんだ！」

「おかえり〜」

「ただいま」

「ただいま。リュウはどうした」

「家に、いるよ」

「そうか。夕飯は食べたのか？」

「うん。今からだって、遙お姉ちゃんが、言ってた」

「遙はどこに行った？」

「分かんない」

「そうか。よし。じゃあ、夕飯、食べてこい。オレたちはリュウを連れていくから」

「うん」

「はやくきてね〜」

「分かってる。葛葉も光も、いっぱい食べてきなさいよ」

「うん！」「はあい」

元気よく返事をする、二人は走っていった。

さて、とりあえず遙のことは置いといて。

リュウを迎えに行こう。

「桐華さんって、ホントに自由だよね」

「なんだ、唐突に」

「今でも、ときどき疑うんだ。桐華さんは演技をしてるんじゃないかってね。ホントはもっと厳格で真面目な人なんじゃないかって。」

だって、大旅団の団長にしては間が抜けてるでしょ？もっと、タルニアさんみたいな人が団長になるべきじゃないの？」

「そうだな。団長としての仕事をこなすなら、桐華は不適だ。でも、桐華とタルニアには共通点がある。何か分かるか？」

「え？タルニアさんと桐華さん…？共通点なんてあるの？」

「ああ」

「うーん…。思い付かない…」

「…信頼されてるんだよ。団員に限らず、あらゆる人に」

「あつ、そっか」

「普通の人がなかなか持ち得ないものを、あいつらは持っている。仕事が出来なくなつて、お茶ばかり飲んでいたつて。みんなが付いてきてくれる魅力が、あいつにはあるんだよ」

「そっか。人望か…」

「ああ」

家に入って居間を抜け、寢間に行く。

その間、風華は何度も頷いていて。

寢間ではリュウがクルリと丸まって眠っていた。

「おい、リュウ。起きろ。夕飯だぞ」

「んう…」

「リュウ」

「もう食べられないの…」

「今から食べるんだ。ほら、早く」

「むう…」

「ほら」

「んー…」

リュウは翼をパタパタさせたりしているが、起きる様子はない。
…あれを試してみるか。

「…何してるの？」

「ん？ヤーリエに教わった方法をだな…」

リュウの角をギュツと握ってみる。

するとリュウは、大きな欠伸をして身体を伸ばし、目を開けた。

「わっ、すごい」

「んう…」

「効果覲面のような」

「ふぁ…あふう…」

「夕飯、食べに行くぞ」

「夕飯なの？」

「うん。みんな待ってるよ」

「分かった」

もう一度欠伸をすると、立ち上がってニツコリと笑う。

頭を撫でて手を繋いでやると、パタパタと嬉しそうに翼をはためかせて。

「早く行くの！」

「はいはい」

「今日はたっぷり楽しまないとね」

「うん！」

そして、賑やかな広場へ。

大人の大半は酔い潰れ、子供たちも思い思いの場所で眠る深夜。
広場の真ん中の火は、まだ少しパチパチと燃えていた。

「じゃあ、明日はその龍たちも一緒なのね」

「ああ。頼めるか？」

「もちろんよ」

「特に伊織は、身体が弱くて警戒心が強いみたいだ。風華と私からも言っておくが、輸送の際は充分に気を付けてくれ」

「心配しなくても、丁重におもてなしするわ」

「いや、そっちじゃなくてな…」

「大丈夫よ、その様子ならね。元はとっても大人しい子なんですよ？」

「私は今日知り合ったばかりだけど、そうなんだろうな。心優しい、良い子だよ」

伊織と蓮の静かな寝息が聞こえる。

真夜中になるのを見計らってやってきた二人は、到着と同時に眠ってしまった。

「それにしても、すごく気に入られてるのね」

「ん？そうか？」

「その子たちに、さっき聞いた蒼龍の子たち。ホント、紅葉って小さい子にも人気あるよね」

「そうかな…」

「姉御肌って言うのかな？」

「姉御肌ねえ…」

「頼り甲斐があるというか、なんというか。でも、紅葉といくと、私でも安心出来るんだ」

「ふうん」

「男の人みたいなの、なんかそういう安心感があるんだよね。あ、紅葉が男っぽいって言ってるんじゃないよ」

「分かってるよ…」

「ふふふ。でもね、手に取ると消えてしまいそうなの、そんなかんじもするんだ」

「……………」

「雪…じゃないか。そうだね…。月…かな」

「月…」

「うん。紅葉は月だよ、きっと」

そう言つと最後の一杯を呑んで、遙はゆっくりと眠りに落ちていった。

…私は月、か。

見えない月に手を伸ばし…そのまま暗闇に抱かれて眠った。

「また帰ってくるね」

「たまには手紙くらい寄越しなよ」

「分かったつて。何回も言わなくなつていいでしょ?」

「よく言うよ。すぐにコロツと忘れるんだから」

「そんなに忘れっぽいかなあ…」

「ふふふ。…じゃあ、行つてらっしゃい」

「行つてきます」

そして、風華は馬車に飛び乗つて。

御者であるカルアに合図を送ると、もう一度ヤウトの方を見て。

「また帰ってくるからね。行つてきます」

手を振つて見送ってくれる村長や村人に応え、風華も大きく手を振る。

…いや、それだけじゃないんだろうな。

この、ヤウトという場所へ。

しばしの別れと、再会の約束を。

「ふあ…」

「風華もしばらく寝るといい。ほら、毛布」

「うん…。はは、急に眠くなっちゃった…」

「気が抜けたんだろう。別れというのは、それだけ体力を使うものだ」

「うん…。でも、ほんの少しの間、留守にするだけ。もうひとつの家に帰るだけだから…」

「ああ」

毛布を掛けてそつと頭を撫でてやると、ゆつくりと瞼を閉じて眠りへと落ちていった。

と、いきなり目の前に湯呑みが差し出される。

「飲みなよ。目が覚めるよ」

「すまないな。だけど、お前に一番必要なんじゃないのか？」

「え？なんで？」

「目の下に隈が出来てるぞ」

「えっ、嘘。どこ？」

「それを聞いて、どうする気なんだ…。それに、目の下って言った
だろ」

「ええ、困ったなあ」

「お前も一度、寝たらいい」

「でも、二度寝はダメだって遙が…」

「遙も寝てるじゃないか。ほら、寝不足は身体に毒だぞ」

「う、うん…」

「お休み、桐華」

「お休み…」

桐華が毛布に潜り込んだのを見届けて、少しずつ桐華に貰ったお茶を啜る。

冷茶ではなくて、温かいお茶だった。

水筒に入れてきたのかな。

「それで、なんでこんなに朝早くに出るんだ？」

「朝早くに出れば昼になるまでにユールオに着きますし、朝という
のは人間の活動が最も低い状態です。だから、賊などにも遭いにく
い」

「なるほどな」

「まあ、可能性は完全には無くなりませんが、一番確実なのです」
「ふむ。しかし、少し風が変わった。注意して進めよ」
「はい」

この前に賊を捕らえたばかりだけど、ああいう連中はいくらでも湧いてくるからな…。

しかも、風は最悪の向かい風だ。

旅団天照を襲うような賊はいないとは思うが…。

「そうだ。伊織と蓮の様子はどうだった？」

「素直でしたよ。身体を触られて少し怒った風もありましたが、すぐに落ち着いて。あとは大人しいものでした」

「そうか。今、どこにいる？」

「二個前ですよ。見に行きますか？」

「いや、いいよ」

「そうですか…」

「あの二人は大丈夫だ。強い子たちだから」

「…はい」

風華たちが起きたら、一緒に様子を見に行こうか。

二人にも、新しい環境に慣れる時間は必要だろうからな。

…私の膝を枕にするリュウの髪をそつと撫でてみる。

すると一瞬、煩そうに顔をしかめたが、すぐに元の寝顔に戻った。

「リュウ。紅い瞳の龍」

「護国伝説ですか？」

「ああ。家族想いの龍の伝説だ」

「え？あの伝説って、龍は悪者じゃありませんでしたっけ？」

「それは、北と戦をしていたときに改竄されたものだ。今はそつちの方が一般なのかもしれないが、元はリュウが中心の話だ。描かれ

る悪も龍ではなく、犯罪を繰り返す大悪党なんだ」

「へえ」。知らない間にとんでもない話を刷り込まれていたんですね」

「ああ。戦の弊害だな。戦は大人たちがするものだが、その悪影響は無垢な子供にも降りかかる。そして、それがどういったものなのか、大人たちは全く知らないんだ」

「……………」

「でも、それをオレたちは知っている。オレたち一人一人に出来ることは小さいかもしれないけど、それがたくさん集まればどうだ。ひとつよりふたつ、ふたつより四つ、四つより八つ。八つよりたくさんだ」

「はい」

「点が集まれば線になり、面になり。そして実体を持つようになるんだ。…カルアも、点のひとつになってくれるか？」

「もちろんですよ」

こちらを向いてニコリと笑う。

これでまた一人、真実を追求する者が増えたな。

…歴史の裏に隠された真実は多い。

そして、それが明らかにされることは少ない。

でも、それを追いかける者がいれば、少しずつでも晴天の下に出せる。

それが、次の世代のために私たちが出来ることなんだろう。

「それで、護国伝説の本当の話を聞かせてほしいのですが」

「ああ、そうだな」

少し思い出す。

お母さんが話してくれた、あの物語を。

今度は、私が話す番なんだな。

「あ、そうだ」

「え？どうしたんですか？」

「カルアに話すより、子供たちに話した方が早いような気がする」

「ええっ！？これだけ引つ張っておいで、それはないですよ！」

「シーツ。みんな起きるだろ？」

「いや、だって…」

「冗談の通じないやつは嫌われるぞ？」

「え、冗談って…それはないですよ…」

「ふふふ。…じゃあ、話すか。家族想いの優しい龍の物語を」

お母さんから私へ。

私からカルアへ。

カルアから、たくさんの子供たちへ。

真実は伝えられてゆく。

「うえ……」

「大丈夫？お茶飲む？」

「団長、余計なことを言わないでください」

「はい。酔い止めの薬が出来たよ」

「……………」

「ほら、飲まないで気持ち悪いままだぞ」

「うえ……イヤなおい……」

「葛葉、余計なこと言わないの」

「リュウ、飲んだ方が、いいと、思うよ」

「うん……」

横になっていたリュウは、身体を起こして薬の入った器を受け取る。でも、あまりの毒々しさに少したじろいでいるようだった。

「何これ……」

「酔い止めの薬だつて。すごく効くんだよ」

「うう……」

「そうだ。お茶に混ぜて飲めばいいんじゃない？」

「ダメですよ。この薬は緑茶の成分と反応して、効果が無くなっちゃうんですから」

「麦茶も玄米茶も焙じ茶も黒豆茶もどくだみ茶も、なんだってあるよ」

「ダメです。そのまま飲まないで」

「ていうか、団長……。いつの間に用意したんですか……」

「発つ前だよ。ユールオに着く前にお茶が無くなったらどうするのよ。しっかり準備しとかなないとダメじゃない」

「隈が出来るほど熱心にやってたんだな」

「もちろん！」

「団長。今のは皮肉ですよ」

「ああ、皮肉だ」

「あり？」

水筒をたくさん手にぶら下げながら首を傾げる桐華。
こいつのお茶好きには困ったものだな…。

「うつ…ん…」

「あ。リュウがのんだ」

「お。偉かったな、リュウ」

「うん…。でも、口の中が苦いの…」

「口、ゆすぐ？水もあるよ」

「もう…。水があるなら、最初からそれを出してあげてくださいよ…」

「だって、水で薄めても仕方ないじゃない。お茶なら香りで味や匂いを誤魔化せるでしょ？」

「いや。お茶と混ぜると、さらに飲みにくくなってたんじゃないか？薬自体、匂いがきついからな。お茶と混ぜて、えげつないことになってたと思うぞ」

「そうかなあ…」

「団長。とりあえず、水を渡してあげてください」

「ああ。あはは、そうだよね」

桐華から水筒を受け取ると、リュウは早速口をゆすぎ始める。
そして、外へ吐き出そうとしたその瞬間

「……………」

木の根か石を踏み越えたのか、馬車が大きく揺れた。

「カルア！何してるの！？」

「まあまあ、遙。押さえて押さえて」

「まったく…。子供たちも乗ってるのに…」

「す、すみません…。少し考え事をしてまして…」

「考え事？」

「はい…。護国伝説のことで少し…」

「護国伝説というと、リュウが活躍するお話だね」

「あれ？英雄物語じゃなかった？」

「チツチツチツ。甘いよ、遙。それは本当の護国伝説じゃないんだな」

「へえ。そうなんだ」

「ねえ、リュウ。どうしたの？」

「……………」

葛葉に声を掛けられて、ゆっくりとこちらを向くリュウ。
心なしか、涙目になっているような…。

「飲んじやったの…」

「え？」

「口をゆすいだ水を飲んじやったの…」

そして、一番手近にいた私に抱きつく。

服をギュッと握って、私の目を覗き込んでくる。

もはや心なしか…ではなく、本当に泣いていた。

「うう…。飲んじやったの…。わたし、死んじやう…」

「落ち着け。口をゆすいだ水を飲んだくらいじゃ死なないから」

「でも…桜お姉ちゃんが…」

「桜？」

「桜お姉ちゃんが、口をゆすいだ水を飲んだら死ぬって言われてたの……」

「誰に」

「空お姉ちゃん……」

「はあ……。あいつらはホントに……」

「桜、うがいした水を飲んでたんだ……」

「あのな、リュウ。口をゆすいだ水を飲んでも死にはしない。でも、飲まない方が良いのは事実だ。口にはたくさんのバイ菌がいて、それが喉を通ることになるんだからな」

「え……じゃあ……」

「リュウは大丈夫だ。苦いを取り除くために口をゆすいだんだろ？」

「うん……」

「じゃあ、大丈夫。口の中に残っていた薬を飲んだのと同じだからな。でも、それは今回だけだ。次からはちゃんと吐き出すんだぞ」

「うん」

「光と葛葉も。分かったな？」

「はあい」「うん！」

元気のいい返事だ。

三人を引き寄せて、まとめて抱き締めてやる。

「ほお……。さすが、子守りの達人だね」

「子守りの達人……？」

「ぼくが陰で勝手にそう呼んでるんだけどね。紅葉って、なんか子供受け良いでしょ？」

「そういえば、そうかもしれないね。望と響も、いつの間にか懐いてたもんね」

「元々懐きやすい性格だったんだろ。風華たちにだって、すぐに懐いてたじゃないか」

「そうだったけ？」

「ああ」

「でもさでもさ、この前やった紅葉争奪戦のとき、みんな一所懸命やってたよね」

「そういえば、初対面だったよね」

「ていうか、勝手にあんなことをやってくれるなよ」

「いいじゃん。みんな気に入ってくれたんだからさ」

「気に入ってくれなかったら、オレはどうすればいいんだよ…」

「そんなときは、ぼくが貰ってあげるよ」

「まあ、それは良いんだけど…。遙から話があるみたいだぞ」

「え…？」

「また家出したくなってきましたねえ」

「や、やめてよ、冗談は…」

「冗談に聞こえます？今度は一週間くらい出ないと分からないみたいです」

「ね、ね。やめてよ…お願いだからあ…」

そして、桐華はとうとう泣き出してしまった。

それを見て遙はため息をつき、桐華の頭を撫でる。

…桐華の遙依存症にも困ったものだけど、まあいいのかな。

「オレはここで降りるよ」

「えっ、なんで？」

「市場を通って帰ろうかと思ってな。お前たちも一緒に来るか？」

「んー、私はいいかな」

「わたしは、お母さんと、一緒に、行きたいな」

「わたしも行きたいの」

「葛葉はね、お母さんといっしょにかえる」

「そうか。じゃあ、龍の二人と一緒にだな」

「そうだね」

「私たちは、新しい王に挨拶しないといけないから」

「ええー」。ぼくも紅葉にいろいろ買ってもらいたかったのに…」

「…自分の金で買えよ」

「ぼくのお小遣いの少なさを見くびられちゃあ困るな」

「胸張って自慢するところじゃないだろ」

「まあ、とにかく。団長も一緒に来てもらいますからね」

「うえー」

桐華はガツクリと肩を落とす。

まったく…。

こいつはいつまで経っても子供だな…。

「そうだ。今日は、ちゃんと正門から入ってくれよ。城壁を登ったり、地下水路を通ったりとかは絶対に禁止だからな」

「ええー」。いつも楽しみにしてるのに…」

「お前、押さえにかかったやつらを片っ端から伸していくだろ。オレがいない今日は、何があっても禁止だ。守らない場合、未来永劫ユール才内でお茶を飲めないようにしてやるからな」

「大丈夫であります、隊長！今日は大人しくしていますです！」
「分かればいい。じゃあ、光、リュウ。行こうか」
「はい」「うん」

龍の二人と一緒に馬車から飛び降りる。
そして、先に城へ帰り隊に手を振る。

「じゃあ、またあとでね」
「ああ」

そのまま、馬車が市場に入ったのを見届けて。
二人に合図を送る。

「よし、行こうか」
「うん！」「おーっ」

目的地はもちろん。

子供たちがはしゃぐ声のする方へ向かった。

ところどころ、木の板でぞんざいに補修された床。
雲雀が鳴かない場所はないくらいだった。

「えへへ。ようこそ！なんだぞ」
「あ、ああ……」

「まさか衛士長さまが来られるとは思っていなくて、何の用意もしてませんで。汚いところですが、ゆっくりしてください」

「どうも、ご丁寧……」

「ルウエ、ヤーリエ。失礼のないようにな」

「ルウエは、ぼくが見張ってるから大丈夫だよ」

「むう…。どういうことなの？」

「では、私はこれで。ちょっと野良仕事があるんで」

「わざわざすまなかったな」

「いえいえ」

そして、一礼をすると部屋を出ていった。

礼儀正しいな。

しかし、これは…。

「なんだかボロっちいの」

「お、おい、リュウ…」

「えへへ。ボロっちいでしょ。でもね、ここは自分たちの大切な家なんだよ」

「うん」

「しかし、孤児院がこんなにボロいとはな…」

「狼の姉さま、どうしたの？」

「いや…」

こんなところに、ルウエやヤーリエや他の子供たちが住んでいるのか…。

大切な家だとは言っても、これでは少し地震や台風が来ただけで壊れてしまうぞ…。

「紅葉お姉ちゃん？どうしたの、キョロキョロして？」

「いや、なんでもないよ…」

「ここが壊れそうなのが気になるの？」

「…まあ、そうだ」

「大丈夫だよ。この前ね、利家お兄ちゃんがここに来て、辰彦おじちゃんと話してたの。ギカイってところで、ヨサンに孤児院へのエンジョキンを組み込めるように提案するって言ってた」

「…そうか」

利家はすでにここに来て、問題を見ていたんだな…。
満足な家にも住めない、この状況を。

予算に援助金を組み込むということは、国を挙げて孤児院の補助をするということだ。

そして、その議題は可決されるだろう。

そうすれば、少なくともユールオでは子供は安心して暮らせるんだろう。

…果たしてそうなのか？

金の管理をするのは大人だ。

子供たちではない。

辰彦は信頼出来る者かもしれないが、そうでない者もいる。

予算案が出来れば、私腹を肥やすために孤児院を建てる者も出てくるだろう。

利家のことだ、対策を充分に練ってから提案するのだろうけど…。

「紅葉お姉ちゃん、聞いてた？」

「えっ、何を？」

「もう…。狼の姉さま、しっかりしてほしいんだぞ」

「す、すまない…。それで、何の話だ？」

「あのね、みんなで、一緒に、お昼ごはん食べようって。ここに住んでる子も、みんな集めて、お友達を、たくさん作るの」

「ああ、なるほど。良いんじゃないか？」

「うん！それでね、お城に行ってもいい？広場で食べたいなって話してたんだ」

「ああ。いくらでも来ればいいよ。それで、昼ごはんはどうするんだ？」

「えっとね、おにぎりを作って持っていくの！」

「ほう、おにぎりか」

厨房や旅団天照に言えば、なんでも用意してくれるだろうけどな。まあ、みんなと一緒に何かをやるといのは大切なことだ。

「それで、みんなを集めなくていいのか？それに、ご飯もたくさん炊いてもらわないといけないだろ？早くしないと、すぐに昼だぞ」
「あつ！大変！」

「い、急ぐんだぞ！」

「じゃあ、ルウエとリュウは、みんなを、呼んできて。わたしとヤーリエは、ご飯の用意を、頼んでくるから」

「分かったの」

「悠奈、七宝。みんなを呼び戻すの手伝って！」

「ワウ！」「アン！」

光的確な指示の下、四人はそれぞれ散っていった。

いや、悠奈と七宝を合わせて六人だな。

…いつの間に名前を決めたんだろ。

ていうか、リュウはいつの間にあれだけ馴染んでいたんだろうか…。
子供っていうのは、やっぱりすごいな。

「それで、あの大群はどうしたの？」

「連れて帰ってきたんだ」

「なんでまた……。みんな弁当持ちだし……」

「いいじゃないか。広場を使う用事なんてないんだから」

「そうだろうけど……」

香具夜はため息をついて元の席に戻る。

態度こそ不機嫌ではあるが、悪い気はしていないはずだ。

「あまり嬉しそうに尻尾を振るな」

「なっ！」

「香具夜は、本当に感情を隠せないよな」

「隊長もですよ。はい、お昼ごはんが出来ましたよ」

「灯は外見では全然分らないよな。振らないときはピクリとも振らないし」

「隊長たちより、感情の制御が出来てるんですよ」

「いや。お前は雰囲気に分かるから」

「えっ、どういうこと？」

「敬語が抜けてるぞ。まあ、それは置いといて。灯は感情が滲み出てるんだよ。いろんなところから。だから、尻尾を見なくても分かる」

「ええ……おっかしいなあ……」

「一番分かりやすいよね、灯は。逆に、縁とかはいつもニコニコしてるからよく分かんない」

「そうか？」

「香具夜班長、呼びましたかあ？」

「お、縁。ちょうどいいところに。昼は食べたのか？」

「いいえ。今からなんです」

「じゃあ、一緒に食べよう」

「はあい。分かりました」

縁はニツコリ微笑むと、ゆつくりと厨房に入ってきて、のんびり席に着いた。

その間に、灯は縁のごはんの準備を済ませて。

「はい、縁。ゆつくり食べてってくださいね」

「はあい。ありがとうね、灯ちゃん」

「いえいえ」

「はあ。久しぶりですね、隊長と一緒にごはんを食べるのは「そうだったか？」

「夕飯は一緒ですけどね。でも、こうやって隊長とお喋りしながら食べるのは久しぶりですよ」

「まあ、ほとんどみんなそうだと思うよ。元々、紅葉って一人で食べるが多かったし」

「そうなんですか？じゃあ今度からは、隊長と同じくらいに私もお昼にしようかなあ」

「オレは別にいいけどな」

「隊長は、いつも息子や娘たちを引き連れてきますからね。騒々しいですよ」

「望むところですよ。私、子供が大好きですからあ」

「そういえば、代表のみんなが連れてきた子たちの管理責任者に立候補したんだっただね」

「はい。やりがいのある仕事ですよ。みんな、良い子で」

「管理責任者って、具体的に何をしてるんだ？」

「ええ。隊長なのに知らないの？」

「…いいじゃないか、別に。オレが知らなくても機能してるんだから」

「あはは。管理責任者というのはあ、要するに親の代わりですよ。議会で忙しい代表のみなさんの代わりに、子供たちの面倒を見るんです。議会に乱入したり、イタズラなんかしたりしたら、きちんと怒るのも私たちの仕事なんです」

「ほう。なるほどな」

「みんなやんちゃ盛りなので、叱り甲斐がありますよ。美希さんなんて、今ではスツと手を挙げるだけで子供たちがピタッと静かになるんですよ」

「ふうん…。美希が…」

さしずめ鬼教官といったところか。

そういえば、遠足のときもだいたいそんなかんじだったな…。

まあ、そんなカミナリオヤジみたいな役割のやつが一人くらいいれば便利なのかもな。

「でも、私はダメですねえ。なかなか叱ってあげられないんですよ…。」

「何も、叱るだけが親じゃないだろ？優しく微笑んで、頭を撫でてやるのも親の役目だ。叱るのは、これだと思うもの以外は美希に任せればいい。子供たちも、叱られてばかりでは窮屈だろうしな。親はお前だけじゃないんだ。周りにたくさんいる。それに、他のやつらもお前の力を必要としてる。一人で全部やるうなんて思うな」

「…はい」

「養育係じゃないけど、私たちも力を貸せるんだから。遠慮なく頼つてよ」

「そうそう。責任者だからって、気張ることなんてないんだよ」

「…ありがとう。香具夜さん、灯ちゃん。私、なんだか自信が出てきましたあゝ。そうですね。私の周りには、たくさん家族がいるんですよ！」

「ああ。助け合って、支え合って。みんな、縁の家族だ」

「よし。じゃあ、速くごはんを食べて、子供たちと一所懸命遊んでますねえ」

「はいはい」

縁が言う”速く”というのは、私たちの”普通”と同じくらいなんだけど。

それでも、必死にごはんを食べ進める縁の表情を見ると、笑いをこらえるのがやっとだ。

「やっぱり、隊長や班長と一緒にごはんを食べられてよかったです。自分一人で、延々と悩み続けるところでしたあ。出口のない迷宮から、隊長たちが壁を壊して脱出させてくれたんです」

「壁を壊して、か。ふふ、紅葉にはピッタリだね」

「なんだ。香具夜のことじゃないのか？」

「両方でしょ……」

「灯だったりしてね」

「私は可憐な白狼だもんね。野蛮な銀狼とは違うの」

「ふん。どの口がそんなことを言うんだか」

「ね、縁。野蛮な銀狼の二人のことを言ってるんだよね？」

「そうですねえ……。秘密です」

「えっ、秘密って！ねえ、縁！」

「そういえば、さっきからずっと敬語が取れてるな」

「そんな下らないことなんていいの！」

あれだけ頑なに続けてたのに、あっさり中断してしまったな……。

あと、野蛮かどうかは灯が言い出したことであって、縁に他意はないと思うんだけど……。

「ねえ、縁！」

「ふふふ。秘密ですよ」

まあ、面白いからいいか。

香具夜は、本に見立てて開いていた手をそつと閉じる。

そして、子供たちが拍手をする。

晴天の下で語られる昔話を、みんな一所懸命に聞いていた。

「さあ。次は紅葉の番だよ」

「え？オレか？」

「他に誰がいるのよ」

「お話聞かせて」 「ふあ…。眠たい…」

「そうだな…。じゃあ、ちょうどいいし、護国伝説にしようか」

「何がちょうどいいの？それに、私はあんまり好きじゃないなあ」

「そうか？まあ、聞くだけ聞いてみるよ」

「分かったよ…。さあて、隊長が護国伝説を話してくれるよ。静かに」

香具夜が合図をすると、子供たちは次第に口を閉じていき。

最後の一人がこちらに耳を向けたのを確認して、話し始める。

優しい、赤い龍の物語を。

蒼い空。

抜けるような、ある秋の晴天の日だった。

子供たちは、半分ほど刈り入れの終わった田んぼで走り回っている。まだ残っている稲を踏んでは叱られ、干し棚をひっくり返しては追いかたれ。

平和な一日が、今日も過ぎていく。

「あつ！あれ！」

「ホントだ！」

子供たちが気付いたものは。

親たちも足を止めて、手を振る。

「お帰りなさい！」

大きな欠伸をひとつ。

私は、この平和な村に帰ってきた。

まだまだ運び込まれてくる料理料理料理…。

こんなにも食べられないんだけど…。

「たくさん食べてね」

木の実の炒めものを持ってきた女の子がニッコリと笑う。

…そんな笑顔を見せられたら、食べないわけにはいかない。

なんとかそれを押し込んで笑い返すと、女の子は満足したようにため息をついた。

そして軽く手を振ると、また外へと駆けていった。

もう…打ち止めかな…。

さすがにこれ以上は無理…。

そのまま床に突っ伏すと、旅の疲れもあったのだろうか、私の意識はすぐに遠のいていった。

目が覚めると、さっきの…最後に料理を持ってきてくれた女の子が目の前に座っていた。

「おはよ、英雄さん」

軽く会釈をすると、女の子はまた笑ってくれた。

「わたしね、凜っていうの」

凜…か。

凜とした様子は、まさに名前の通りだった。

ただ、体つきはまだまだ幼く、声も高いので、少しちぐはぐな気もした。

「わたしね、英雄さんと一緒に住むの」

どういうことなのかと首を傾げると、凜も一緒に首を傾げる。

真似っこの遊びだと思っているのだろう。

楽しげに笑われては、問い質すことも出来ない。

とりあえず、もう一度首を傾げておく。

村の者たちによると、先の戦乱で凜は親を失ったようだ。

そして、いつの間にか村に来て、空き家だった私の家にいつの間にか住み着いていたらしい。

そこに私が帰ってきたから、凜は私と暮らすことになった…というわけ。

「お洗濯、行ってくるね」

そう言っつて、凜は大きな洗濯籠を抱えて家を出ていった。
…小さな女の子に何を任せきってしまったのだろうか。

慌てて凜のあとを追った。

やけに外が明るいと思ったら、雪が積もっていた。

凜の布団はすでに空で、入り口から田んぼの方へ伸びる小さな足跡があった。

その足跡を追っていくと、子供たちが雪合戦をしているのが見えた。

「あ！敵だ！攻撃しろ！」

「えいつ！」「やあつ！」

どうやら私は敵らしい。

子供たちは、情け容赦なく雪玉を投げつけてくる。

…やられっぱなしなのも癪なので、応戦を試みた。

「戦線を下げろぞ！退散、退散！」

「わあゝ」「退散ゝ」

声を張っている、陣頭指揮と殿を兼ねている男の子に雪玉をぶつけてやる。

「あつ！隊長がやられた！」

「隊長ーっ！」

「ぐふっ…。あとは任せた…。ガクッ…」

そんな寸劇を挟んで、雪の上に倒れ込む隊長。

そして、泣き真似をしながら撤退していく子供たち。

みんなが森の中に撤退したのを見計らって、隊長を助け起こす。

「へへっ。さすが英雄だな。参ったよ」

背中を払ってやり、森の方へ押しやる。

「すごい作戦を考えてあるんだからな！覚悟しとけよ！」

隊長は森の中に飛び込むと、あっという間に走り去ってしまった。
…そういえば、逃げる兵士たちの中に凜が混ざってたな。

よし。

敵陣に乗り込もうじゃないか。

平和というものは、誰もが望むものでありながら、全ての人が獲得することは出来ない。

平和は、戦乱の土台となるのだから。

小さな波紋は次第に大きくなり。

遂に、この平和な村にも迫ってきた。

「英雄さん…。わたしたち、どうなるの？」

森の奥の洞穴で、みんな身を小さくしている。

戦う武器も守る防具もない私たちは、ただ波が過ぎ去るのを待つしかなかった。

英雄などと呼ばれた私だが、結局は洞穴の入り口を防衛することしか出来ない。

なんと無力なのか…。

「英雄さんは、すごく頑張ってくれてるよ？」

「そうだよ。英雄さんがいなくちゃ、村でみんな死んでたよ…」

私を励ましてくれた子供たちだが、その声も次第に涙声になっていく。
親たちも必死に慰めるが、やはり不安や恐怖の方が勝ってしまう。
沈鬱な雰囲気の中、向こうから微かに気配が漂ってきた。
軍隊が進軍してきているらしい。
刀に手を掛け、様子を窺う。

「英雄さん…」

不安そうに私を見上げる凜を抱き寄せ、頭を撫でてやる。
そして、こちらに近寄ってきた一団を撃退すべく、洞穴を出た。

視界が赤く染まる。

一団と応戦、罾も使って大半を倒したが、限界が来たらしい。
しかし、洞穴から相当離れたから向こうは大丈夫だろう。
洞穴へ向かう気配もない。

腹に突き立てられた刀を引き抜き、もう二人、斬り伏せる。
次の一撃に手応えは無く、勢い余ってそのまま地に倒れてしまった。
維持悪く笑う指揮官らしき男の声も、もう遙か彼方。

…あいつは、やはり指揮官に向いている。

それにしても、名前…聞きそびれてしまったな…。
隊長…。

今度は、本当の隊長になった姿を見せてくれよ…。
そのときに、名前も…。

「英雄さん。約束、ちゃんと守ってね。これから。みんなを護る
って約束…」

ごめんな、凜…。

約束、守れなくて…。

「うっん。英雄さんは、守ってくれたよ。だから、これからも守って」

凜…？

「約束だよ？」

最後に見たものは、優しい炎。

そして、龍だった。

燃え上がるような赤の。

目が覚めると、いつも通り、凜が目の前に座って…いなかった。私は洞穴に戻ってきていた。満身創痍で。

「英雄さんの目が覚めた！」

「英雄さん！」

次々に抱きつく子供たち。

傷が痛むが、そんなことは言ってられない。

一人一人の頭を撫でてやるので手一杯だった。ふと、集まってきた子供たち全体を見える。

…凜がいない。

子供たちに凜の所在を聞いてみる。

「凜…？誰？」

「そんな子、村にはいないよ」

大人たちに聞いても同じ答えだった。

凜なんて子は、最初から村にはいなかった。

それが答え。

…じゃあ、凜はどこに行ってしまったんだ？

凜という存在は…。

蒼い空。

抜けるような、ある秋の晴天の日だった。

子供たちは、半分ほど刈り入れの終わった田んぼで走り回っている。まだ残っている稲を踏んでは叱られ、干し棚をひっくり返しては追いつけられ。

平和な一日が、今日も過ぎていく。

「英雄さん、凜のお話、もっと聞かせて」

「英雄さん、もっともっと！」

私は英雄という名ではないのだが…。

まあ、悪い気はしないからいいけど。

少し空を見上げてから、小さくて優しい龍の女の子の話始める。

「ある日、凜はこう言ったんだ」

「約束。強い強い英雄さんに、村のみんなを護ってほしいんだ」

はっとして振り返る。

でも、一迅の風が吹き抜けただけだった。

一度咳払いをして、前を向く。

すると、目の前には小さな女の子が座っていた。

女の子はニツコリと笑うと、ギュッと抱きついてきた。

「お帰り」

「ただいま、英雄さん」

蒼い空。

抜けるような、ある秋の晴天の日だった。

「おしまい」

「あれ？私が知ってるのとは違う…」

「凜は、帰ってきたの？」「英雄さんは、約束を守れたの？」

「さあな。それはお前たちが考えることだ」

「ええ」

「うーん…」

首を傾げる香具夜の額を弾いておく。

…赤い龍の話。

優しいリユウの話。

子供たちは香具夜に任せて、城の裏へと回る。
そこには、簡単に板で仕切られた空間が。

洞穴暮らしの二人が安心出来るようにと作った、暗くて狭い場所。

「どうなんだ、伊織は」

「あ、姉ちゃん。二人とも寝てるよ」

「そうか」

「うん」

「…きちんとした小屋を作らないとな」

「うん。医務班のみんなが作ってくれるって」

「大工を雇った方が良いんじゃないか？」

「まあ、そうなんだけどね。せつかくだから、一回作ってみようって」

「医務班には修司もいるからな。もしかしたら上手くいくかもしれない」

「あはは。酷いなあ」

「まあ、落ち着いてるようでよかった」

「うん」

出入口となっている板を少しずらして、中の様子を見してみる。

光が入ってきて眩しかったのか、蓮は薄く目を開けた。

「ウルル…」

「ああ」

「……………」

「そうか。まあ、時間はたくさんあるんだ。ゆっくり疲れを癒せばいい」

「……………」

「セトのことか？またあとで挨拶に来させるよ」

「ワウ……」

「お休み」

板を閉じる一瞬前、端っこの方で明日香が丸まって眠っているのが見えた。

本当に昼寝が好きだな。

そしてそつと板を閉じ、風華の横に座る。

「カイトとかセトには聞いたのか？」

「うん。カイトに聞いてみた。カイトの方が、いろんなことを知ってそうだし」

「それで？」

「えつと、たぶん栄養失調だって」

「栄養失調？そんなことだったのか」

「うん。でも、龍は偏食気味の子が多いらしいから」

「ふうん。それで、伊織は何を食べてたんだ」

「蓮が持つてくるのが肉ばかりで、それでお腹もいっぱいになるから、ほとんど野菜を食べてなかったんだって」

「ほう」

「だから、明日からは野菜漬けだねって言ったら嫌な顔して。元々食わず嫌いなところもあるみたいだね」

「今まで分からなかったのか？」

「…うん。なんでも分かってたつもりでも、やっぱり意志疎通が出来るのと出来ないのでは全然違うってことが分かった」

「まあ、そうだな」

「栄養失調なんて…私でも気付けたはずなのに…」

「過去は後悔するためにあるんじゃないだろ？次に失敗しないためにあるんだ。今は伊織の病気も言いたいことも分かる。それでいい」

んじゃないか？」

「…うん。そうだね。ありがと、姉ちゃん」

「よし。じゃあ、こんなところに座り込んでないで。伊織のごはんの相談に行こう」

「うん！」

もう大丈夫だな。

立ち上がって土を払い落とし、意気揚々と厨房へと向かっていく。私も、置いていかれないうちに追いかけることにする。

灯が筆を走らせる音だけが聞こえる。

サラサラと良い音をさせてる割に、書いてる字は汚いが。

「よし。こんなかんじかな」

「見せて見せて」

「うん」

「…ねえ、これはなんて書いてあるの？」

「ほうれん草」

「ふうん…。じゃあ、これは？」

「春菊だよ」

「じゃあ、これ」

「もう！さつきから、上から順番に聞いているだけじゃない！」

「だって、分からないんだもん」

「お前の字を解読するには、普通の人間は相当な時間が掛かるからな。書いた本人が近くににいるなら聞いた方が早いだろ」

「失礼なっ！」

「じゃあ、誰がこれをほうれん草と読むんだ。どう見ても解読不能な記号の集まりだ」

「美希は私の覚書を見て勉強してるんだよ！美希なら読めるよ！」

「誰でも読める字を書け」

ため息をつきつつ筆と紙を取り、灯の覚書の解読書を書いていく。

「わあ。姉ちゃん、これが読めるんだ」

「だから、普通に読める字なんだってば！」

「そう思ってるのはお前だけだ」

「へえ。これ、白菜って読むんだ」

「風華！」

「姉ちゃんって字が上手いよね。なんで？」

「母さんに教えてもらったんだ。灯は逃げてばかりだったけど」

「逃げてなんかいないもん……」

「朱色の墨なんてもう見たくない！とか言って、厨房に引き籠ってたじゃないか」

「だって……」

「あのときのツケが、今になって巡ってきたんだな」

「私は兄ちゃんに習ったんだ。兄ちゃん、村で一番字が上手かったんだよ」

「ふうん」

「まあ、そんなかんじはするよね。見たことないけど」

「政務室に行つて、公文書を読んでみればいい」

「ええ。そんなの面倒くさい」

「じゃあ、お前は一生犬千代の字を拝めないな」

「いいもん。字なんて見なくても、どうってことはないんだから」

「まあ、そうかもしれないがな」

「でも、もうちょっとくらい練習したらどうなの？上手くなりたくないの？」

「そりゃ、なりたいけどさ……」

「今、字が汚いつてことを認めたな」

「え？あつ！風華！」

「え、ええ…？私？」

「そうだよ！もう…」

「ふふふ。…よし。これで完成だ」

「じゃあ、次はこれを使った料理だね」

「うん。あ、そうだ。あの料理の本、使えないかな」

「風華が買ってきたやつ？」

「うん。あれ、どうかな？」

「そうだね…。ビジタブルスープとかいうのがあったけど、龍なら汁物は飲みにくいよね」

「どうだろうな」

「そういえば、ハンバアグとかいうのがあったな…。挽き肉団子みたいなかんじなのかな。野菜を刻んで入れるんだって」

「あ、それ、いいんじゃない？」

「うん。でも、一度に入られる量は少ないみたいだからダメだね」

「うーん…そつか…。ていうか、あの本の内容、全部覚えてるの？」

「当たり前じゃない。本を見ながら料理なんて出来ないでしょ？」

「そ、そうかな…」

「うん。それで、野菜料理だけ…」

料理に関しては一流なんだけど。

なんで、他のところで発揮しないんだろうな。

赤くなってきた空の下、それぞれの家に帰っていく子供たちを見送って。

「ルウエと話せたのか？」

「え、ええ？」

「なんだ。せつかくの良い機会だったのに」

「だって……」

「はあ……。仕方ないやつだな……」

「うう……」

祐輔は尻尾の先を左右に振って、指をモジモジさせている。本当に何も話してないみたいだな。

「まあ、話す機会なんてこれから何回もあるんだから」

「うん……」

「でも、次に次にとやっていけるほどはないぞ」

「うん……。分かってるよ……」

「そうか。それならいいんだけど」

「……………」

一途ではあるが、優柔不断なところがある。

もう少し、勇気を持ってくれたらいいんだがな。

せめて、気になる女の子と話せるくらいの勇気は。

「さあ、夕飯だ。しっかりごはんを食べて、明日は話し掛けられるようにしないとな」

「ごはんを食べたら話し掛けられるの？」

「ああ。たぶんな」

「そつか…。じゃあ、たくさん食べないと…」

「そうだな…って、そういえば、前は普通に話せてたんじゃないのか？少なくとも、最初にルウエが城に来たくらいは」

「う、うん…。でも、変なことを言って嫌われたりしないか心配になって…」

「なるほどな」

「それで、なんだか怖くなって…」

分からないでもない。

でも、立ち止まってしまつと前に進めない。

それを分かってくれるといいんだが…。

「姉さま、それより夕飯」

「ああ、そうだったな」

祐輔の手を取り、城へと戻っていく。

夕飯の美味しそうな匂いを嗅いで満足そうにため息をつく祐輔だが、内心は焦りや不安でいっぱいなんだろうな。

手汗がかなり酷い。

…今日中、もしくは、明日くらいまでには決心してほしいものだが、ルウエの心は待ってくれないからな。

さて、どうだろうな。

桜の口の中に唐揚げを押し込んで、少し黙らせる。
こいつは、すぐに口出ししようとするんだから…。

「それが悪いとは言わないが、あまりにも五月蠅いのは考えものだぞ」

「んむ…。だつて…」

「桜、口にもものを入れたまま喋らないの」

「んう…」

「それで、献立は完成したのか？」

「いやね、カイトに聞いたら、生のまま食べさせればいいだろうとか言つてさあ」

「灯が、それじゃあ料理人としての腕が発揮出来ないって言つたら、生で食べさせるのも立派な料理だつて。刺身とか寿司とか」

「まあそつだろうな。しかし、生野菜は料理とは言わないんじゃないのか？」

「そつでもないんだよ。風華の本に書いてあつただけど、サラダつてのがあるみたいなんだ。生野菜を綺麗に飾り付けるんだつて」
「ほう」

「でも、トメイドとかマヨニエゼとか、よく分からないものも使うみたいなんだ。代わりに白菜とかほうれん草を並べても仕方ないし、何より美味しくないし…」

「トメイドにマヨニエゼか。どんな食べ物なんだろな」

「トメイドは、赤くて丸い野菜なんだつて。マヨニエゼは油と酢とカラシと…あとは卵黄で作るんだつたかな…」

「トメイドはともかく、マヨニエゼくらいは作れるんじゃないか？」

「そうかもしれないけど…」

「一回作つてみればいいじゃないか。それで美味しかったら、また食べさせてくれ」

「うん。分かつた」

灯はニツコリ笑うと、鮭の切り身を食べ始めた。

それにしても、マヨニエゼか…。

楽しみだな。

「いろはねえ」

「なんだ」

「もう喋ってもいい？」

「もう喋ってるじゃないか」

「え？あつ、これは数えないの！」

「…誰も喋るなどは言っていないだろ？節度をわきまえろと言ってるんだ」

「はあ…。ややこしいこと言わないでよ…」

「それにしても、最近はおかずを盗らなくなったな」

「香具夜にね」。小さい子にバカなことを教えるなって殴られちゃった」

「そうか。それは残念だ」

「えつ。そこは、オレが話を付けてやるから…とか言うところですよ？」

「望はしっかりお姉ちゃんになってきたのに、お前は全く変わらないな」

「何さ…。ボクだって変わってるもん…」

「ほう。どこが」

「えつと…」

「最近、お姉ちゃんぶって髪を伸ばし始めたよね」

「面倒くさいだけじゃないのか」

「お姉ちゃんぶってもないし、面倒くさがってもない！」

「じゃあ、なんで伸ばしてるんだ」

「それは…えつと…」

桜は私の方をチラチラと見ながら、そのまま俯いてしまった。

風華と灯も桜の視線を追って私にたどり着き、納得したように小さく頷く。

…私に何か関係があるのか？

板を一旦全部取り払い、外の新鮮な空気を吸わせるついでにセトに会わせる。

セトはなんともなかったが、蓮と伊織は興味津々なよう。

「二人とも…。セトは珍しいものじゃないんだから…」

「龍っただけで十分に珍しいと思うが」

「そうかな？」

「オレたちは龍に出会いすぎてるんだ。セト、蓮、伊織だけじゃない、森でも会ってるし」

「うーん…」

「響や光、リュウもいるしな」

「あ、そういえば、なんでリュウはこっちに来たのかな？」

「なんだ、聞いてないのか」

「え？聞いているの？」

「聞いてない」

「ええ…。じゃあ、なんでそんなことを言うのよ…」

「風華には言ってると思ってたからな」

「オオン」

「ん？」

と、伊織が擦り寄ってきた。

何か言いたいようだが、はっきりしない。

「どうしたんだ」

「……………」

「姉ちゃんは鈍感だから、はっきり言わないと分かってくれないよ」

「どういう意味だ」

「そのままの意味だよ」

「……………」

「ん？何？聞こえなかった」

「ワウ……」

「ああ、そんなことか。良いぞ、別に」

子供っぽいところもあるんだな。

いや、まだ子供なんだろう。

あの姉弟も、まだまだ子供だった。

…無事に生き延びてくれよ。

また…会いにいかないといけないんだから…。

「蓮も来るか？」

「……………」

「そうか。じゃあ、一緒に行こう」

「ふふ、また部屋が狭くなるね」

「ああ」

「オオ……」

「セトはダメ。ていうか、どう考えても無理じゃない」

「……………」

「もう…分かった分かった…。分かったから、今日はもう寝なさい」

「ワウ！」

「そうだね。明日香と一緒に寝てくれるんだから」

「オオン」

「うん。お休み」

風華はセトと明日香の頭を撫でて。

そして、私と二人の新入りの方を向く。

「行こっか」

「ああ」

セトと明日香に見送られ。

月の光の下、部屋へと戻っていく。

重い。

非常に。

「おい、お前ら。どける」

「……………」

「重いつて!」

「ウウ……………」

布団ごと蓮と伊織を投げ飛ばす。

二人は床にゴロゴロと転がって、寝惚けたように唸り声をあげた。

「ていうか、まだ寝惚けてるのか……………」

隣では葛葉と夏月が寝ていた。

他のみんなはもう起きてるのかな。

まあ、ちょうどいいから全員起こすことにする。

「葛葉、夏月。起きろ。朝だぞ」

「うーん……………」

「蓮と伊織も。朝ごはん、いらないのか?」

「朝ごはん!」

「葛葉、起きたか。しかし、お前はホントに食べるのが好きだな」
「うん!」

ボサボサの髪を手櫛で整え、寝間着を脱がせる。

そして、風華が用意したらしい着物を渡す。

…そういえば、この寝間着は一週間くらい着てるな。

洗濯物に出しておこう。
ていうか…

「お前、下着くらい穿いておけよ…。寝間着を脱いだら素っ裸じゃないか…」

「……？」

「…もういいよ。ほら、ここに下着もあるから」

いつもこうなんだろうか。

危なっかしく片足立ちをして下着を穿く葛葉。

…と、葛葉を観察してる場合じゃない。

「夏月、蓮、伊織。起きろ」

「んむ…」

「お、夏月。起きられるか？」

「うん…」

「よしよし。良い子だ」

「えへへ…」

「お前も着替えて。そら、寝間着も脱ぐんだ」

夏月は昨日着替えたばかりだから、洗わなくていいだろう。
うん。

下着もちゃんと穿いてるな。

あーあ、こんなに帯をきつく結んで…。
取れないな…。

「んー…」

「おい、夏月。起きろ。立ったまま寝るな」
「ん…」

はあ…。

はつきり目が覚めてるのは葛葉だけか…。

目を覚ましてやろうと夏月の頬を引っ張ってみると、よく伸びて面白かった。

「むう…」

「起きろ。服も着て。早く朝ごはんを食べにいこう」

「うん…」

よし、帯も解けた。

用意してあった服を渡すと、大欠伸をしながら着替え始める。

…さて、困った寝坊助龍たちだけが残ったな。

「おい、いい加減起きろ。もう葛葉も夏月も起きてるぞ」

「ウウ…」

「嘘をつくな。昼行性だろ」

「オオン…」

「五分経って起こしたら、また延長するんだろ。ダメだ。今すぐ起きろ」

「ウウ…」

伊織はゴロゴロと転がって、まだ寝たいと主張する。

まあ、そんなことを許すわけもなく。

重たい伊織の身体を抱えて、無理矢理立たせる。

腰を引いたりして抵抗するが、もう無駄だと分かったのか、観念して立ち上がる。

大きな欠伸をすると、こつちを睨んで身体をバタバタと震わせた。

「よし。あとは蓮だけだな」

しかし、こいつは大変そうだな。

今の騒ぎでも目を覚ます気配は一向になく、死んだように眠っている。

ピクリとも動かない。

「蓮。起きろ。朝だぞ」

「おきないの？」

「お、葛葉。着替えたか。朝ごはんを食べてこい」

「うん。ねーねーといっしょに行くの」

「そうか。でも、ちよつと遅くなるかもしれんぞ」

「うん。でも、ねーねーといっしょに行く」

「ありがとう。じゃあ、少し待っててくれ」

「うん」

葛葉は布団の上にチョコンと座ると、首を傾げながら私の奮闘を見物する体勢に入った。

…帯が固結びになってるな。

あとで直してやらないと。

さて…

「よいしょつと…」

蓮を屋根縁まで引つ張っていく。

山から離れ始めた程度とはいえ、朝日は充分に眩しかった。

日射しが入りきらず、まだ少し薄暗い部屋だから起きないんだ。
太陽の光を浴びれば目が覚めるだろう。

「ウウ…」

「起きたか」

「ワウ…」

「伊織と同じことを言っな。早く起きるんだ」

「オオン…」

「伊織はもう起きてるぞ」

「……？」

「そこにいるじゃないか。ほら、さっさと起きて」

「………」

「ダメだ」

腰のあたりを叩くと、仕方なくといったかんじで、蓮はのっそりと立ち上がる。

ふう…。

作戦成功だな。

これで朝ごはんが食べられるな。

「ねーねー、夏月がねてるよ」

「ええっ!？」

「ワウ」

「いや、お前がなかなか起きないからだろ。待ちくたびれて寝たんだ」

「………」

「そんなことより。夏月、起きろ。朝ごはんを食べにいこう」

「んー…」

「ほら、着物もちゃんと着て」

「んう…」

上から羽織っただけの着物をちゃんと着せて。つて、ちよつと待て。

こいつはなんで下着を脱いでいるんだ。まったく…。

葛葉といい、夏月といい。

穿かないのが流行っているのか？

…とにかく、布団の上にあったのを穿かせて、きちんと着物を整えて。

帯をしつかり結んで出来上がり。

「あ、そうだ。葛葉。ちょっと来い」

「なに？」

「帯が固結びになってる」

「かたむすび？」

「ほら。結び目がガツチリ固いだろ？これが固結び。…よし、これでいい」

「これは、なにむすび？」

「蝶々結びだな。ここを引っ張ると簡単に解けるんだ」

「ん」

「あつ！今解くなよ！」

「あう…。ごめんなさい…」

「いいよ。また結べばいい話だ。オレの方こそ、大声を出してごめんな」

「うん。ねえ、ちようちよむすび、おしえて」

「ああ。じゃあ、まず…」

朝ごはんは…まあいいか。

遅い朝ごはんも、たまにはいいだろう。

夏月と蓮もまた起こさないといけないし。

伊織は布団の上に座って、蝶々結びが出来上がるのを興味深そうに眺めていた。

「久しぶりだな、洗濯」

「そうだね」

「これ、葛葉の」

「あ、着替えてなかったんだ」

「ずっとこれだっただろ？」

「うん」

葛葉の寝間着をたらいに入れ、しっかりと洗う。

白地にところどころ赤が入った服で、葛葉によく似合う。

帯は落ち着いた黒で、白と赤の中にしっとりとした印象を与える。

「この服は本当に葛葉に似合うよな」

「うん。桜が作ってくれたんだよ。今はピッタリだけど、最初はすごくブカブカだったんだ」

「へえ。まだあんなチビだけど、大きくなってるんだな。あ、それで、朝、葛葉が下着を穿いてなかったんだが」

「えっ、また？」

「なんだ、穿いてないことがよくあるのか？」

「暑いのか知らないけど、寝てる間に脱いじゃうみたいなんだ。下着だけじゃなくて服もなんだけど…。近くに落ちてなかった？」

「落ちてたのか。風華が用意したんだと思ってた」

「夜はちゃんと穿いてるからね。まあ、まだおねしょもするから用意するときもあるけど…」

「おねしょか。今日はしてなかったな」

「昨日、夏月がしてたからね」

「なんだ、香具夜。一緒に寝てたのか？」

「まあね」

香具夜が洗濯物を抱えて乱入してきた。

ていうか、なんで来るんだ。

…洗濯物が増えるじゃないか。

「子供たちが寂しいって言うてくるから、紅葉と風ちゃんがい
間、一緒に寝てあげてたんだ。雑魚寝なんだね」

「ああ。しかし、寂しい…か。あんなにワラワラというのにな」

「うん。まあ、大人がいなくて怖いつていうのもあったのかもしれ
ないけどね」

「あ、そつか。そういやそうだね。誰かに頼んでおくんだった」

「んー。いいんじゃないかな。みんな分かてるし。子供たちも、
自分から来たんだから」

「それならいいけど…」

「それで、昨日の朝早くに夏月が泣きながら私を起こすもんだから
びっくりしたんだけど、おねしょだったんだよね」

「もう…。夏月…」

「望がもう起きててキビキビと動いてくれたから、私がやること
はほとんどなかったんだけどね。なんでか知らないけど素っ裸で寝
てたみたいで、被害は布団だけだったみたい」

「夏月も脱いでたのか」

「誰か脱いでたの？」

「ああ。葛葉がな」

「ふうん。可愛いね」

「可愛いのか…？」

「紅葉は昔、服なんてイヤだなんて言うて、昼間でも素っ裸だった
けどね」

「なっ！ち、小さい頃の話だろ！」

「へえー。そうなんだ。小さい頃…」

「そうそう。あの頃は可愛かったなあ。今みたいに、目付きも悪く

なかつたし……」

「なんだよ、それは！」

「はあ……。なんでこんな鷹みたいな鋭い目になったのかなあ。環境のせい？」

「あー、前王があれだったもんね」

「いやー、やっぱり小さい頃の環境ってのは大事だねえ」

「お前ら好き放題言つて！オレの目の、どこが鋭いつて言うんだ！」

「いたっ！痛い！紅葉の視線が刺さる！」

「何を言ってるんだ！」

「あはは、面白いね」

「面白くない！」

目付きが悪いって言われて面白いわけがあるか！

まったく……。

悪くないよな……？

「ほーら、またここだ。ここは井戸端じゃないんだが」

「あ、兄ちゃん。夏月が昨日、おねしょしたってホント？」

「ああ。朝から布団を洗わされたな。僕と美希が」

そう言つて、香具夜の方を見る。

香具夜は利家から目を逸らして。

「はあ……。まあ、夏月のことだし、別にいいけどな。でも、自分の仕事くらいは自分でやってほしいものだな」

「なんのことかな？」

「しらはつくれて……。そら、洗濯物が全然減ってないぞ」

「これは紅葉の分だよ」

「嘘をつくな」

「なんでもいいから、早く済ませろよ。あと、紅葉。葛葉がお待ちかねだぞ」

「ん？なんでだ？」

「市場に行くんだって、外門のところではしゃいでたぞ」

「市場？」

「そんな約束、したの？」

「いや、全く覚えがない」

「ええ…」

「まあいいじゃないか。市場に行くなら、頼みたい用事もあったし」
「何だ」

「うん。ちょっと届けてもらいたいものがあるんだ」

「伝令班に頼めばいいんじゃないのか？」

「まあ、そうなんだけど。みんな忙しそうだし」

「…ということは、オレは暇そうだってことか」

「実際、暇じゃない」

「失礼だな、お前も」

「紅葉ほどじゃないよ」

「ははは。じゃあ、頼めるか？」

「ああ。任せておけ」

「愛する夫の頼みは断れないよね」

「そ、そんなんじゃない！」

「あれ？利家のこと、嫌いなのか？」

「いや、そういうことじゃ…」

「ふふふ。面白いね、紅葉って」

「どういう意味だ！」

「そのままの意味だよ」

分かったこと。

香具夜は意地悪で、とっても失礼だったこと。

「よし。お喋りはそこまでだ。早くしないと、葛葉が待ちくたびれてしまうぞ」

「…そうだな」

「ホントに約束してないの？朝ごはんのときとかさ」

「オレの記憶にはないな…。してないとは思っただけど…」

「まあ、早く終わらせて葛葉に聞きに行けってことだな」

「そうだな」

「あ、そういえば。村長さんが、たまには帰ってきなさいって言うてたよ」

「ああ、分かった…って、風華に言っても仕方ないしな…。あとで手紙を書いておくよ」

「それがいいね」

「そうそう。絵手紙、ちゃんと届いてた？」

「届いてたよ。いろいろ描いてあったね」

「うん。それでさ…」

また別の話題で盛り上がり始める。

…ごめんな、葛葉。

もうちょっと待っててくれよ。

「なあ、葛葉。機嫌直してくれないか」

「……………」

「ユカラ。どうにかならないのか」

「あたしにはどうにも出来ないよ。姉ちゃんが悪いんだから」

「それはそうだけど…」

「……………」

でも、どうしろって言うんだ…。

今だって、ずっとユカラの向こう側を歩いているのに…。
はあ…。

「そういえば、お前と市場に行く約束なんてしてたか？全く覚えてないんだが」

「……………」

「夢だったみたいだよ。夢の中に姉ちゃんが出てきて、今日市場に連れて行ってあげるって言ったらいいんだ」

「へえ…。夢の中のオレが…」

とんだ約束をしてくれたものだ。

お陰で、完全に葛葉の機嫌を損ねてしまった。
さて、どうしたものか…。

「姉ちゃん、その荷物は何なの？」

「これか？これは、利家から頼まれたものだ。市場管理組合と旅人支援組合に伝書を、あとはお菓子だ」

「お菓子？」

「ああ。子供たちと一緒に食べてくれって」

「ふうん。差し入れてことかな」

「さあな。でも、議会で孤児院について話し合ってるみたいだし、関係があるのかもな」

「ふうん…」

「それでお前は何が欲しいんだ」

「えっ。な、なんで？」

「ずっとソワソワして。話を切り出す機会を窺ってたんじゃないのか」

「うん…」

「それで？」

「紐が欲しいんだ」

「紐？紐紐でもやるのか」

「えっ、なんで分かったの？」

「まあ…最近、手芸に凝ってるみたいだからな。そうなんじゃないかと思ったただけだ。桜がヤウトに帰ってる間もやってたんだろ？」

「うん。それでね、一昨日に八重さんが、こういうのもあるよって教えてくれたんだ」

「八重がなあ。まあ、あいつは衛士の中でも一番手先が器用だからな」

「すごいんだよ。刺し子でも、すっごく細い糸で複雑な模様をすごい速さで縫っていくんだ」

「”すごい”を何回使うんだ」

「だって、ホントにすごいんだもん。桜もすごいけど…八重さんもすごいなって」

「そうか」

「んーっ！」

「あ、葛葉。どうしたの？」

「葛葉もおしゃべりしたい！」

「ああ、そうだね。ごめん」

「じゃあ、葛葉。待たせたこと、許してくれるか？許してくれない

と、オレは葛葉に喋ってもらえないから」

「…ゆるしてあげる」

「ごめんな。ありがとう」

「うん」

「待たされたけど、ちゃんと連れてきてくれたもんね」

「うん！」

やっと笑ってくれた葛葉の頭を撫でてやると、ギュッと抱きついてきた。

そのまま抱き上げると嬉しそうに額を擦りつけてきた。

「仲直りだね」

「そうだな」「うん！」

早めに葛葉の機嫌が直ってくれてよかった。
これで、心置きなく市場を回れるな。

初めて来たけど、旅人支援組合っていうのはこんなに活気があるものなのか。
依頼所では食事も出来るみたいで、かなり大きなおにぎりを食べている者もいた。

「よう。衛士長さんじゃねえか」

「ん？誰だ？」

「はは、衛士長さんは俺のことは知らないよ」

「そうか」

「噂は聞いているよ。美人で強いって」

「現物を見てがっかりか？」

「いや。予想以上だな」

「どうも。ところで、お前はここの関係者か？」

「まあな。依頼仲介係の責任者だ、こつ見えても」

「それならちようどよかった。これ、伝書だ」

「ん？黒紐か。宛先は旅人支援組合。係の指定はないか。それなら……」

紐を解いて読み始める。

さらさらと斜め読みをして、ものの数秒で読み終えてしまった。

「ふむ……。なるほどなあ」

「何が書いてあつたんだ」

「未来の希望について」

係長に渡された伝書を読む。

そこには、確かに未来の希望についてのことが書いてあつた。

「組合長に報告してくるよ。まあ、答えは決まってるだろうが」

「ああ」

「市場管理組合にも回ってるんじゃないのか？」

「ああ。これから行くところだ」

「そうか。まあ、早いに越したことはないから」

「分かつてる」

「……じゃあ。目の保養になったよ」

「そりや何よりだ」

「ふふふ。またな」

「ああ」

係長は軽く手を振ると、奥へ入っていった。

……よし。

次だな。

「ねーねー」

「ん？」

依頼所前のちよつとした公園で遊んでいた未来の希望が戻ってきた。
…誰かを連れてきて。

「こんにちは」

「ああ。こんにちは。名前は？」

「弥生です」

「弥生か」

葛葉と同じくらいといったところだが、かなりしっかりしてるようだ。

腕を組んでお辞儀をしてるあたり、北の方の出身なのかもしれない。

「一人か？」

「いえ。兄と来ているのですが、途中でいなくなっ…」

「はぐれたのか。困ったな…」

「はい…」

答えながら弥生は少し俯いて、涙をこらえているようだった。

まあ、兄ちゃんとはぐれれば不安にもなるだろう。

早く見つけてやらないと…。

「一緒に行こう。兄ちゃん、捜してやるから」

「……！ホントに…？」

「ああ」

「ありがと…ありがとうございます」

「いや、いいよ。普通のままです」

「でも…」

「葛葉も、普通の方が良いと思うよな」

「うん」

「な？」

「…うん。分かった」

「そうだ。良い子だ」

「えへへ」

頭を撫でてやると、笑顔が戻ってきた。

うん、やっぱり笑顔だな。

…それにしても、弥生の兄ちゃんはどこに行ったんだろうな。
こんなに小さな妹を放っておいて…。

「弥生、あっちに行ってみよ」

「うん」

「…オレともはぐれる、なんてことになるんじゃないぞ」

「……？」

「はあ…」

まあ、オレかユカラが目を離さないようにすれば…って、ユカラはどこに行っただ。

依頼所の中には…いないな。

まったく…。

そこから始めないといけないのか…。

「じゃあ、よろしく頼んだぞ」

「はい。承知いたしました」

「ところで、翔って男の子を見なかったか。ちょうど、こいつくらいの年代らしいんだが」

「十四、五の男の子ですか。見てないですが…またどうして」

「こっちのチビが、そいつの妹なんだ。はぐれたみたいでな」

「それは大変ですね。組合店に報せましょうか」

「ああ。頼む」

「十四、五で妹を捜している翔という男の子、ですね。他に特徴は？」

「弥生。どうなんだ？」

「えっと、自動三輪に乗ってます」

「へえ、自動三輪。ユニディナ旅団の人なんですか？」

「違うと思うよ。北なら、自動三輪は珍しくないからね」

扉が開いて桐華が入ってきた。

それを見て、組合長はすぐさま立ち上がって。

「と、桐華さま！こ、これはお出迎えもせず、失礼いたしました！」

「まあまあ。そんな細かいこと、気にしない気にしない」

「し、しかし…。あ、お茶の用意をします！」

止める間もなく、組合長は部屋を飛び出していった。
まったく…。

こいつは歩く迷惑だな…。

「で、何しに来たんだ。冷やかしか？」

「んー。遙が、取引の邪魔だからどっかに行つてろつて」

「なんでわざわざ組合本部に来るんだ」

「近かつたんだもん」

「はあ…。あのなあ、ここは子供の遊び場じゃないんだぞ」

「桐華さま。お菓子の用意が出来ました。大変申し訳ないのですが、お茶はもうしばらくお待ちください」

「はいはい」

「そんなに気を使わなくてもいいぞ。お茶も出がらしで」

「い、いえ…。そんなことは出来ません…」

「いいから。あと、お前は自分の立場をもっと理解して行動しろ」

「んー、考えとく」

「はあ…。まったく…」

欠伸をし始めた葛葉の頭を撫でて、居眠りをしている弥生の耳を引っ張つてみる。

すると、弥生は煩そうに耳を動かして。

「姉ちゃん、可哀想だよ」

「そうか？」

「疲れてるんでしょ。長旅のあとに、またお兄ちゃんとはぐれちゃつて」

「なんで長旅だつて分かるんだ」

「北から来たんでしょ？」

「たぶん、というだけだ。どちらにせよ、旅をしてるのには間違いないだろうが」

「うん。だから、ちよつとくらい寝かせてあげようよ」

「…そうだな」

耳の裏をカリカリと搔いてやると、今度は満足そうにため息をついて。

…こんなに可愛い妹を放って、兄貴はどこに行っただろうな。
見つけたら、厳しくお灸を据えないとな。

「お茶が入りましたよ。ここに置いておきますね」

「ああ、どうも」

給仕さんは急須を机の上に置いて、また出ていった。
それを見届けてから、桐華はお菓子に手を出し始める。

「そういえば、お前、昼ごはんは食べたのか」

「まだだよ」

「じゃあ、その一切れで終わりだ」

「ええっ！」

「ご用意しましょうか」

「いや、いい。ありがとう」

「では、せめてこのお菓子を包ませていただきます」

「ありがとう」

「いえ…。無礼をはたらいた、せめてものお詫びです…」

「気にするな。こいつに遠慮することはない」

「そ、そんなわけにはいきません…」

「やっぱり、お前は団長に就くべきじゃなかったな」

「うん。ぼくもそう思う」

でも、どうしようもないしな…。

困ったものだ。

そつと椅子に座らせて、転げ落ちないように上手く調節する。
結局、弥生は食堂に着いても起きなかった。

「いらつしゃい。また増えたね」

「まあな。一時預かりだけど」

「ふうん」

「あぶらげ！」

「そうだねえ。葛葉ちゃんはいつも油揚げだね」

「うん！」

「ユカラちゃんは？」

「じゃあ、あたしは日替わり定食にしようかな」

「今日はかしわ尽くしだよ。安く仕入れられたからね」

「かしわ尽くしかあ。楽しみだな」

「はは、それは良かった。で、紅葉ちゃんは？」

「そうだな…。じゃあ、葛葉と同じやつで」

「油揚げ？」

「ああ」

「そう。その子はどうする？」

「疲れてるみたいだから…。あまり負担の掛からないやつで」

「分かった。団長さんは？」

「ぼくはユカラと同じやつにしようかな」

「日替わりだね。はい、分かりました。きつねうどんと日替わり定

食がふたつずつ。あと、その子のために何か優しいものだね」

「弥生だ」

「弥生ちゃんね。了解」

涼はユラユラと尻尾を振って、奥へと戻っていった。

…お腹はまだ目立ってないみたいだけど、何ヶ月なんだろうか。
無理をしてなければいいが…。

「大衆食堂なんて、初めてきたなあ」

「そうなのか」

「うん。いつも旅団の宿だから。お城でのおもてなしもあるけどね」

「まあ、そうだろうな」

「うん。でも、ぼくはここみたいなかんじがいいなあ。たくさんの人と会えるでしょ。宿でもお城でも、たいてい旅団の人ばかりだからね」

「そうか」

「うん」

それではつまらないという風に、両手で器用に箸を回す。

葛葉はそれを見て自分も挑戦してみるが、なかなか上手くいかない。

「こうやるんだよ」

「んー？」

「こう持つて、中指で弾くんだ」

「んー…」

「こら。葛葉ちゃんに行儀の悪いことを教えないの」

「あれ？さっき戻っていったのに」

「旦那がね。無理しちゃダメだつて言つて」

「ふうん。六ヶ月くらい？」

「よく分かったね」

「六ヶ月なのか」

「うん」

「あんまり目立たないんだな」

「これからだよ。哲也のときもそうだったからね」

「へえー。男の子？女の子？」

「それは生まれてからのお楽しみ」

「名前は？名前は決めてるの？」

「ふふふ。じゃあ、ユカラちゃんが決めてくれる？」

「いいの？ホントにまだ決まってるの？」

「ホントホント。名付け親になれる、滅多にない機会だよ」

「わあー。じゃあじゃあ、男の子なら秀司。秀でるに司。女の子な

ら陽葉。^{ひとは}太陽の陽に葉っぱ！ね、どう？」

「ふふ、良いねえ。じゃあ、それを貰おうかな」

「うん！」

「それにしても、すぐに出てきたな。考えてたのか？」

「うん。姉ちゃんの子供に付けようと思って」

「え、ええ？オ、オレの？」

「じゃあ、この子が貰っちゃったから、また考えないといけないね」
「そうだね」

「お、おい…。子供って…」

「楽しみだなあ」

そんなにキラキラした目で見られても…。

と、利家との子供か…。

いや、でも…。

うーん…。

「起きないね」

「ああ。そうだな」

「城に連れて帰った方が良いんじゃない？」

「いや、しかしだな」

「葛葉はみんなと遊んでるし。一旦帰っても大丈夫じゃないかな」

「それはそうだけど」

「ずっと背負ってるわけにもいかないでしょ。お菓子も届けたんだし」

「そうだな」

「一旦帰ろ？」

「でも、ユカラの買い物もまだだし」

「あとでいいでしょ？それに、冷えて風邪でも引いたらダメじゃない」

「まあ…そうだな」

弥生も不安だったんだ。

今、やっと安心して眠ったところ。

だから、ゆっくり休ませてやる方がいい。

ユカラの言う通りだな。

「よし。じゃあ、一旦帰ろうか」

「うん」

「葛葉。ちよつとこっちに來い」

「なに？」

「オレたちは弥生を一度城に連れて帰るから、ここで遊んでおいてくれ」

「うん」

「あまりうるちよろするなよ。みんなと一緒にいるんだぞ」

「わかった」

「本当に？」

「うん」

「姉ちゃん、心配しすぎだよ」

「でも…」

「大丈夫だよ。葛葉は偉いもんね」

「うん！」

ユカラに撫でてもらい、上機嫌の葛葉。心配ではあるけど…まあ、大丈夫だな。目が合ったヤーリエも呼び寄せる。

「どうしたの？」

「葛葉のこと、見ててやってくれ」

「うん。分かってるよ」

「ありがとう。じゃあ、行こうか」

「うん」

ヤーリエの頭を撫でて、弥生を背負い直す。よろしく頼んだぞ、ヤーリエ。

大衆食堂の前を通ると、涼が表で桐華と話し込んでいた。

まあ、さっきも見た光景だし、見つからないうちに通り過ぎよう…」

「あ、待ってよ！ちょっとこっちこっち！」

「無理だ。じゃあな」

「紅葉ー！」

あまりにも大きな声で呼ぶので、仕方なく立ち止まる。
そして、とびきりのゲンコツで殴る。

「いったゝ！」

「大声を出すな！お前はバカか！」

「あはは。面白いね」

「笑い事じゃないぞ。それで？何の用だ」

「また戻ってくるんでしょ？そのときでいいよ」

「じゃあ、そんなときは呼び止めないように、こいつをしつけてお
いてくれ」

「了解了解」

ヒラヒラと手を振る涼と、頭を押さえてうずくまる桐華。
腹が立つので、桐華をもう一発殴っておく。
すると、地面に突っ伏して動かなくなった。

「桐華ちゃん。大丈夫？」

「うう…。ぼくが死んだら、次期団長は遙に…」

「大丈夫そうね。心配せずに行つてらっしゃい」

「元より心配なんてしてないから大丈夫だ」

「ふふふ。そう」

「わあん…。みんな酷い…」

「桐華さん、行つてきます」

「ユカラは良い子だなあ。帰ってきたら、好きなものを買ってあげ
るからね」

「うん。ありがと」

遙からどれくらいの小遣いを貰つてるのは知らないが。
まあ、足りなくて私を頼ってくる姿を見るのも楽しいかもしれない。
な。

…趣味が悪いだろうか。

医療室では祐輔と夏月の兄妹が、風華と一緒に何かをやっていた。しかし、この匂いは…

「鼈甲飴？」

「あ、ユカラ。姉ちゃんも。お帰りなさい」

「ねーね！」

「こちら。飛びつくのはちょっと待て」

「……？」

夏月を止めて、近くに敷いてあった布団に弥生を寝かせる。

掛布団を掛けてやると、布団の端を持って、巻き込むようにして丸くなった。

「だれ？」

「弥生だ。疲れてるみたいだから、起こしてやるなよ」

「うん」

「どうしたの、その子？」

「はぐれたらしいんだ。兄貴と。だから、市場管理組合に協力してもらって搜索してる」

「兄ちゃんと…はぐれた…」

「祐輔、心配するな。必ず見つかるから」

「うん…」

同じく小さい妹がいる兄として、やはり思うところがあるのだろう。俯いてしまった祐輔の頭を撫でて、夏月を引き寄せる。

「祐輔、夏月。弥生の目が覚めたら、一緒に鼈甲飴を食べてやって

くれないか？そしたら、弥生も元気になってくれると思うんだ」
「うん…」「わかった」

「こいつの兄ちゃんのこととは私たちに任せて。ほら、風華に作ってもらうんだろ？」

「そういえば、なんで医療室で作ってるの？」

「厨房は、美希と灯が料理研究で使ってるから。砂糖だけ貰ってきたんだ」

「囲炉裏も鍋もあるからね。たしかに、医療室でやるのが一番良いかもしれない」

「そういうこと。いっぱい作るつもりだから、あとでみんなで食べようよ」

「ああ。じゃあ、早く見つけられないとな」

「姉さま、絶対に見つけてくれよな！」

「分かってるよ。期待して待っていてくれ」

もう一度、祐輔の頭を撫でる。

そして、医療室を出た。

再び大衆食堂の前を通る。

桐華はもう復帰していて、涼が椅子に座っている以外にもうひとつ変わっているところが。

「あ、紅葉ちゃん。ちょうどいいところに」

「誰なんだ、そいつは」

「分かった！弥生のお兄ちゃんだ！」

「正解だよ。紅葉と入れ違いに来たんだ」

「あ、あの…。弥生は…」

「はあ…。城だよ…」

「ホ、ホントに無事なんですネ！」

「ああ。しかし、お前たちも、オレたちを呼び戻すくらいしたらどうなんだ…」

「私は行けって言ったんだけどね。桐華がイヤだって」

「頭がクラクラするから…」

「嘘をつけ」

「ホントだって！」

「そんな大声を出すやつが、ねえ。信じられるか。それより、翔。早く弥生に会ってやれ。今は疲れて寝てるけど…」

「はい…」

翔は自動三輪の握り手を強く握る。

今回のことに責任を感じてるんだろうな…。

涼は、慰めるように翔の頭を撫でている。

「お前も疲れただろ。城に行って休むといい」

「あ、そうだ！風華ってお姉ちゃんがね、鼈甲飴を作ってくれてるよ。それも食べにさ」

「何から何までありがとうございます…」

「ね。そんなんじゃないって、笑ってよ。お兄ちゃんがそんな顔してたら、弥生もイヤだよ」

「はい…。すみません…」

「……………」

全て後ろ向きに考えてるな…。

悪い循環であり、なかなか抜け出せない迷宮でもある。

こういうときは…

「……………」

「姉ちゃん！何するの！？」

「シッ。ユカラ、黙ってて」

「え…？」

「翔。今回のことに責任を感じるのは当然だろう。責任を感じるべきだ。でも、責任を感じることと、いつまでもウジウジしてることは全く違う。弥生が城にいることが分かったんだ。いつ弥生の目が覚めてもいいように、とびきりの笑顔を準備して行ってこい。責任感については、今日寝る前に考えても遅くない。とにかく、考えるときは今じゃない。ウジウジするなんて、もつてのほかだ。今やるべきことを考える」

「…はい！」

翔は返事するやいなや自動三輪に飛び乗ると、一気に加速して遙か彼方に行ってしまった。

…城は反対方向なんだがな。
まあいい。

「責任…責任感…か」

「桐華に一番欠けているものだな」

「うーん…」

翔は分かってくれるといいな。

「こっちがいいかな」

「いいんじゃないか？」

「うーん…。でも、こっちの若葉色もいいかなあ」

赤い紐を白い紐の棚に、青い紐は青い紐の棚に戻す。

そして、若葉色と桜色を手にとって、並べて見てみる。

…やっぱり、赤だけは認識出来ないんだな。

ユカラに気付かれないように、正しい場所に戻しておく。

「ユカラ…。そっちの紐の方がいいんじゃないかな…」

「え？でも、組紐はこういうのが適してるって…」

「そ、そうかな…」

「何を言ってるんだ。せっかく組紐をするんだから、良い紐の方がいいだろ」

「い、いやあ…そっちでいいと思うんだけどなあ…」

「まったく…」

あまりにも見苦しいので、店の隅に引つ張っていく。

桐華は、怯えた目で値段表を見つめていて。

「お前。ユカラが楽しそうに選んでるんだ。邪魔をしてやるな」

「だ、だって…。あの紐だと、ぼくのお小遣いじゃせいぜい五、六尺が限度だよ…。組紐をするんだから、そんなんじゃ足りないですよ…」

「はあ…。そんなことだろうと思ったよ…。いくら持ってるんだ」

「二千元…」

「なんでも買つてやるとか言って、どうせお菓子か何かを欲しがっ

てると思つてたんだろ」

「だって、組紐に興味があるなんて思わないじゃない…」

「それはお前の見通しが甘いだけだろ。ユカラくらいの年代になれば、いろんなものに興味が湧いてくる。お菓子じゃ、なかなか興味を満たしてやることは出来ないぞ。…ほら。オレからも小遣いをやるから。ユカラに好きな紐を選ばせてやれ」

「う、うん…。ごめん…。ありがと」

「はあ…」

少し多めにお金を渡しておく。

ユカラは心配そうにこつちを見ていたが、大丈夫と手を振ると、また紐を選び始めた。

「ユカラ、ごめんね…」

「ん？どうしたの、桐華さん」

「五月蠅く言つて…」

「あはは。大丈夫大丈夫。気にしてないよ」

「そ、そう…。なら、いいけど…」

俯く桐華の頭を撫でながら、私の方に目配せをする。

…最初から桐華の財布には期待してなかったということか。まったく…。

どっちがお姉ちゃんなのか分からないな。

結局、ユカラが買ったのは青、白、黄、若葉、橙、桜色を、それぞれ七尺ずつだった。

赤と白の見分けがつかないという自覚はあまりないらしく、最後までそのふたつを並べて見ることはなかった。

「ありがと、桐華さん」

「え？あ、ああ、うん……。どうも……」

「どうしたの？」

「い、いや、なんでもないよ」

「……？」

自分のお金だけでは不足だったことを、まだ気にしてるらしい。
背中を叩いてやると、おどおどした顔でこちらを見る。

「何を暗い顔してるんだ。小遣いがなくなっただのがそんなに嫌だったか」

「いや……。そういうわけじゃなくて……」

「じゃあ、そんな顔をするな。ユカラのためにも」

「でも、紅葉……。やっぱり、ぼく、無理だよ……。喋っていい……？」

「……好きにしろ」

「うん……ごめんね」

桐華はペコリとお辞儀をすると、ユカラと向き合う。

そして、一度深呼吸をすると、重い口を開いて話し始めた。

「ユカラ……ごめんね……。その紐を買ったお金、ホントは紅葉のお金なんだ……。ぼく、二千円しか持つてなくて……。お菓子くらいなら買えるかな、なんて思ってたんだけど、まさか紐だとは思わなかったから……」

「そう」

「だから、感謝するなら紅葉に感謝して。ぼくは何もしてないから……」

目に涙を浮かべ、深く頭を下げる。

ユカラは少しびっくりしたようだったけど、肩を叩いて顔を上げさ

せて。

「ううん。そんなことはないよ」

「え？でも…」

「しきりに安い紐を勧めてたけど、それは二千円でも充分な量を買えるように、でしょ？お金は足りなかったかもしれないけど、その気持ちは嬉しい。だから、姉ちゃんのお金だったとしても、あたしは桐華さんに感謝してるよ」

「そうだな。桐華にその気持ちがなければ、オレだって追加の小遣いなんてやらないよ。お前の良いところは、その純粋な気持ちなんだ。多少抜けているところがあつたとしても、他の人が持つてないものを持つているんだ。それが一番だろ」

「う、うん…。ありがと、ユカラ、紅葉。紅葉はどさくさに紛れて何か余計なことも言つてた気もするけど…」

「気のせいだろ」

「そうかな…。でも、うん。元気になったよ。二人とも、ありがと」
「どういたしまして」

桐華の頭をそつと撫でると、涙を袖で拭いてニツコリと笑った。

…いつまで経つても小さな子供みたいなやつだけど、純粋な心を忘れないなら、それも良いのかもしれないな。

「じゃあさ、お金もちよつとだけ残つてるから、お茶を飲みにいこ
うよ！」

「すぐに夕飯だろ？今お茶したら夕飯が食べられないじゃないか」

「そんなことはないよ…」

「夕飯を食べられなくて、遙に怒られても知らないぞ」

「あう…。それは…」

「じゃあ、やめておくんだな」

「うう…。ぼくのお茶が…」

「…もしかして、お茶を飲みに行くって、本当に飲みに行くだけなの？」

「こいつの場合はそうだが、結局はお菓子が付いてくるからな」

「そっかあ。桐華さんって、なんでそんなにお茶が好きなの？」

「それにはのっぴきならない事情があつてだねえ…」

「何を言ってるんだ。昔、オレと飲んだのがきっかけだろ」

「まあ、そうかもしれない」

「どういうこと？」

「ずっと昔ね、紅葉のお母さんが淹れてくれたお茶がすごく美味しくて。紅葉は、苦いとか言って空になったばかりの湯呑みと自分の湯呑みを交換してお母さんに怒られてたけど。あれは面白かったなあ」

「余計なことまで思い出すな」

「へえ…。姉ちゃんも、昔は可愛かったんだ」

「うん、昔はね」

「昔はつてのはどういう意味だ」

「そのままの意味だよ」

「そうそう。そのままの意味」

「お前らなあ…」

朝からこんなばかりのような気がするな…。

なんだよ…。

今の私は可愛くないのかよ…。

「ふふふ。可愛いよ、今も」

「え、ええ？」

「よし、葛葉のところまで競争だ！よーいどん！」

「あ、ずるいよ！桐華さん、待って！」

「待たない！」

な、なんだったんだ、今のは。

…桐華に心を見透かされていたような、不思議な気分だった。

「葛葉、美味しいか？」

「ん」

「よかった。これは、葛葉のために作ったんだ」

「ん」

「でも、オレでもなかなかいけるぞ」

「あつ！紅葉！なんで食べてるんだよ！」

「なんでって、手が届くところに置いてあるからだ」

「食べるな！」

勢いよく皿を引くものだから、山と積まれたいろいろと中身が違う稲荷がいくつか転げ落ちた。

葛葉はそれを驚掴みにして、手をベタベタにしながら嬉しそうに食べる。

「あーあー、そんなベタベタにして…」

「そら、布巾だ。手を拭け」

「うん」

「ほーら、弁当もこさえて」

「んー？」

葛葉の口の周りに付いていたご飯粒やらなんやらを取り集めて、口に入れる。

「あつ！紅葉、ずるい！」

「え？何が」

「それは私のご馳走だろ！」

「いや、知らないし…。ていうか、お前、葛葉にベツタリだな。風

華よりベツタリして」

「当たり前じゃないか。葛葉は私の可愛い妹だからな」

「美希、ごはん」

「ああ、ごめん。じゃあ、葛葉。次は箸を使ってみようか」

「うん」

美希に箸を渡され、どうしたものかとしばらく考えていたが、私の持ち方を真似てそれらしく持ってみせる。
ふむ。

なかなか真似る才能があるみたいだな。

「よしよし。上手いな。でも、ちょっと違っぞ」

「こう？」

「こうだ」

まさに手取り足取りといったかんじで。

と、桜が箸を止めてまでその様子を眺めているのに気がついた。

「どうしたんだ。変わり稲荷が食べたいのか？」

「えっ、あ、いや……」

「…どうしたんだ。桜らしくないな」

「そ、そうかな……」

「そうだな」

「うう……」

そのまま俯いてしまい、箸も置いてしまった。
そして、席を立つ。

「ごちそうさま……」

「おい、桜」

「ん？桜？もう食べないのか？」

「ごめんね、美希」

「いや。調子が悪いなら風華に言えよ」

「うん…。ありがと…」

弱々しく微笑むと、まっすぐに広間を出て行ってしまった。

美希は心配そうに見送っていたが、葛葉に催促されて視線を戻して。
…どうしたんだろうな、本当に。

「姉ちゃん。桜、どうしたの？」

「風華か。オレにもはつきりとしたことは分からない。何か思うことがあったみたいだが…」

「思うこと…？」

「桜に聞いてみれば早いでしょ？」

「あ、ユカラ。ユカラは何か心当たりがあったりするの？」

「んー、どうかな。桜って、表に出してるようで出していないでしょ？本当に思ってることは、なかなか掴みづらいんだよね」

「そうだよね…」

「よし。夕飯が終わってから、オレが聞きにいつてこよう」

「うん。それがいいと思うよ。姉ちゃんが一番相談しやすいだろうし」

「よろしくね」

「ああ」

心配なのはみんな同じ。

美希も聞き耳を立てていた。

…桜は何を悩んでいるんだろうか。

私にちゃんと相談してくれるだろうか…。

ヒヤリとした空気が頬を撫でる。

地下牢は、やはり独特の雰囲気があるな。

「桜。いるか？」

「……………」

返事はない。

でも、気配は感じられる。

「入るぞ」

右奥の部屋。

そこで桜は布団を頭から被って丸まっていた。

「桜」

「……………」

「何か悩み事があるのか？」

「……………」

「さっきのが関係してるのか？美希と葛葉の様子が」

「……………」

「お前は、みんなに良い遊び仲間としか思われてないと思ってるんだろ」

「…だって、そうじゃない。ボクをお姉ちゃんとして頼ってくる子なんていない。ボクは身体も小さいし、年下の望より心も幼い。みんなに頼りっぱなしで、全く自立してない。頼られる要素なんて、一個もないんだから当たり前だけど」

ひとしきり言い終わると、さらに布団を巻き込んで、さらに小さく丸まってしまう。

殻に籠るとは、まさにこのことだな…なんて感心してる場合じゃない

くて。

「分かっていて、なぜ変わろうとしないんだ。身体の大きさはともかく、心は変えられるんじゃないのか。望と同じように」

「ボクは望じゃないから。そんなの、無理だよ……」

「一度でもやって見たのか。やりもせずに無理だと言っのなら……」

「変えたいよ！ボクだって！でも、周りはそう見てくれない！ボクはまだ子供なんだって！」

なるほどな。

桜は負の螺旋に囚われているらしい。

桜自身は成長したいと思っているが、周りはそう見ていないと思っ込む。

そして、”子供の桜”を演じる。

それが”桜は子供”であると周りに思わせてしまい、振り出しに戻る、だ。

今の桜は、回廊をひたすら下り続けている。

入口と出口が同じとも知らずに。

「姉ちゃんはいいいね。頭が良くて、格好いい。なんでも出来て、みんなに頼られる存在なんだから。ボクとは正反対」

「……………」

「昔からずっとそうだったんでしょ？ボクとそこまで変わらない歳なのに、衛士の人々をまとめる隊長だもんね」

「いや、そんなことは……」

「じゃあ、桜に取っっておきの話をしてあげる」

音もなく部屋に入ってきたのは桐華だった。
なぜか望もついてきてたけど。

「むかしむかし、あるところに…」

「聞くんなんて一言も言っていないよ」

「まあまあ。聞くのはタダなんだから。あ、他でお金を取る気もないよ」

「……………」

「じゃあ、もう一回。…むかしむかし、あるところに。小さな女の子がいました。可愛いけど口は悪く、茄子がいつまでも食べられない女の子でした」

…特定の個人を激しく攻撃しているな。
余計なことは言わず、さっさと進めてくれ。

「その女の子はイタズラ好きで、イタズラをしては毎日のように怒られていました。…ある日、その子が大変なイタズラを仕掛けました。そのイタズラはあまりに大掛かりで、引っ掛かった友達の女の子に大怪我を負わせてしまいました」

「……………」

「その子は、お母さんに怒られた以上に、相当な衝撃を受けていました。そして、友達の女の子が目を覚ますまで、片時も傍を離れませんでした」

「……………」

「友達の女の子が目覚めたとき、その子はもうイタズラをしなくなっていました。友達が傷付かないように。自分自身が傷付かないように」

「……………」

「その子が変わったのは、友達の女の子が怪我をしたからだだった。結局、みんな弱いんだよ。何か大きなことをきっかけにしないと変わらない。でも、きっかけというのは、意識を大きく変えるための起爆剤。それが大事件である必要はないんだよ」

「……………」

「ぼくは詳しくは知らないんだけど、望の場合は伝令班として認められたことがきっかけだったみたいだね。そのとき、大人になっていくっていう自覚を持って、一步成長したんだ。そうだよ、望」

「うん…。そんな難しいことは考えてなかったけど、これが大人なんだって思ったら、なんだか周りが違って見えたの…」

「そういうこと。桜も、今、少し違う風に見え始めてるんじゃないのかな」

「……………」

「一度、変わってみればいいと思うよ。そしたら、意外とみんなすぐに受け入れてくれるから。そういうものなんだって」

「……………」

桜は何も言わなかった。

でも、考えてはいるはずだ。

望よりお姉ちゃんなんだからな。

望では漠然としか分からなかったことでも、桜なら上手く掴み取れるはずだ。

「じゃあ、行こっか」

「ああ」「うん…」

「お休み、桜」

「……………」

そして、そつと扉を閉めて、桜の部屋をあとにする。

ゴソゴソと何かが動く音がしたが、誰も何も言わなかった。

階段を上がった先で、ユカラが昼の紐が入った袋を抱えて待っている。

「ねえ…」

「今日は戻らない方がいいかもな」

「そう…」

「大丈夫だよ。桜は、今は考えるときだから」

「うん…」

「あと、桐華。ありがとう。助かったよ」

「ううん。ぼくは何もしてないよ。桜が自分で気付いたんだ」

「…そうだな。桐華は何もしてないな」

「ああっ！そこは、それでもありがとう…とか言うところでしょ！」

「自分で何もしてないって言ったんだろ」

「そ、それは、常套句というか…」

「じゃあ、ユカラ、望。部屋に戻ろうか。風華にも報告しないといけないし。それに、すっかり遅くなってしまった」

「うん」「はい」

「あ、ちよつと！無視しないでよ！」

字面通り何もしていなかったとしても、何かしていたとしても。感謝するよ。

桜にきっかけを与えてくれてありがとう。

「ワウ！」

「分かった分かった。またあとでだ」

「ウウ……」

「そんなこと言っていると、遊んでやらないぞ」

「……………」

「広間に行ってる。今日は洗濯も中止だから」

「ウルル……」

「分かってるから」

伊織はため息をつく、膝に乗せていた腕を下ろす。
そして、脛のあたりを軽く噛んで厨房を出ていく。
約束を破らないようにということだろうな。

「うわっ」

「翔か。おはよう」

「おはようございます。…この城には龍がいるんですね」

「ああ。まだもう二頭いるぞ」

「へえ……」

「弥生は？まだ寝てるのか？」

「はい……。すみません……」

「いや、好きなだけ寝かせてやるといい。部屋も布団も有り余ってるからな」

「いえ……。お金の持ち合わせもないし、そんなにお世話になるわけにはいきません……」

「お金なんて取るつもりはないよ。ここはみんなの家だ」

「そうはいきません。弥生が起き次第、失礼させていただきます」

「今日は雨だぞ。わざわざこんな日に発つこともないだろ」

「ふぁ…。おはようございます…」

「亘、ちようどよかった。早く朝ごはんを頼む」

「はぁい…」

「すみません…。昨日に発つべきだったのに…」

「よかったじゃないか。昨日に発つていれば、雨に降られていた。自動三輪でも、雨の速さには勝てないだろ？」

「そつですが…」

「今日一日だけでもゆっくりしていけ。明日にはやむだろうし、せっかく休養したのに雨の中に出て余計に体力を浪費することもないだろつ。それとも、急ぎの用でもあるのか？」

「いえ…」

「じゃあ決まりだな。今日は城から出ることを禁ずる。衛士や門番にも言つておくから、出ようとしたらすぐに分かるぞ」

「でも…」

「でもはなしだ。あと、敬語もなしだ」

「え…」

「簡単だろ？いつも話してるように話せばいいんだ」

「で、出来ません…」

「出来ないはずないだろ？」

「隊長。無理強いするのは良くないですよ」

「でもなぁ…」

どうにかならないかな…。

俯く翔の頭を撫でると、心なしか顔が赤くなつてるような気がした。

広間に行くと、蓮と伊織が取っ組み合いをしていた。

…喧嘩か遊びか。

とりあえず、伊織があんなに活発に動き回れるのは意外だった。

「遙。あれはなんだ」

「ん？喧嘩してるみたいよ」

「そうなのか？」

「うん。ごはんの取り合いみたいだよ」

「はあ？」

「さつき風華と灯が持ってきたんだけど、量が少なかったみたいだね」

「ふうん…」

そういえば、僅かに残ったごはんが部屋の隅の方に置いてあるな。

器の色からして、蓮が伊織のものを横取りしようとしたんだろうな…。
まったく…。

「ほら、やめろやめろ！」

「ウウ…」 「ワウ！」

「やめろと言ってるんだ。聞こえなかったか？」

「グルル…」 「ウウ…」

「いい加減にしないと、オレにも考えがあるぞ」

「ワウ！」 「ウウ…」

止まりそうにないな。

じゃあ、武力制圧だ。

二人の首を掴み、まずは引き離す。

伊織を突き飛ばした間に、蓮の首を腕で絞めていく。
最初はバタバタと暴れていたが、すぐに気絶して。

「ウウ…」

体勢を整えて飛び掛かってきた伊織を正面から受け止め、そのまま

同じように絞めあげる。
これもまたすぐに気絶して。

「さすがだね」

「これくらい出来ないと、戦闘班は務まらない」

「うちの熟練でも、なかなか出来ないよ。ねえ、旅団に来ない？」

「また考えとくよ」

「ええ」

そう言いながらも、遙はあまり残念そうにはせず。

予想通りといったところだった。

まあ、そうだろうけど。

「で、昨日の子たちは？今日はここに軟禁するんでしょう？」

「人聞きの悪いことを言うな。雨の中、発たせることは出来ないということだ」

「はいはい。分かってますよ」

「まったく…」

お菓子を食べて、お茶を啜る遙。

また朝からそんなものを…。

「そういえば、桐華は？」

「廁じゃない？間に合ってるといいけど」

「角を曲がってすぐのところにあるじゃないか…」

「そうだけだね」

「それで、朝からお茶会か？」

「桐華は一日中お茶会だよ。今日はたまたま私もいるっただけで」

「そうかもしれないけど…」

「不満？」

「朝から、こんなに甘いものを食べるのはどうかと思っぞ」

「いいのいいの。朝ごはんはしっかり食べたし」

「ん？当番はいたのか？」

「いなかったよ。でも、そんなの自分で作ればいいじゃない」

「…そうか」

「残念そうにしないの。昼と夜は、ちゃんと調理班を食べるんだから」

「ああ。是非そうしてくれ。どの班員の料理も絶品だ。食べ損ねないようにな」

「分かってる」

そして、もう一度お茶を啜る。

…私も貰おうかな。

「湯呑みは自分で持ってきてね。お茶はいくらでもあるけど」

「分かってるよ…」

もう一度、厨房まで戻らないといけないな…。

うーん…。

まあ、ついでに医療室にも行っておくか。

弥生の様子も気になるし。

「行つてらっしゃい」

「ああ」

「ついでに、お菓子の追加もお願いね」

「はいはい。人使いが荒いやつだな」

「誉め言葉をどうもありがとう」

「誉めてない」

「そりゃ驚いたね」

まったく、こいつは…。

ちよつと納得がいかなかったので、遙の頭を軽く小突いてやる。
すると、少し笑って。

…まあ、それでよしとしてやるか。

「ん」

「翔は？」

「厨房じゃない？」

「いなかったぞ」

「じゃあ、分かんないよ」

「そうか」

葛葉の頭を撫でて。

湯呑みに手を掛けると、素直に渡してくれた。

「葛葉、弥生。広間に一緒に行くか？お菓子もあるぞ」

「おかし」「行く！」

「朝っぱらからお菓子？」

「お茶会だ。桐華主催の。風華も来るか？」

「私はいいよ。でも、あんまり食べさせないでよ。昼ごはんが食べられなくなるから」

「分かってる。そら、行こうか」

「うん！」「はい」

弥生はすっかり懐いてくれたんだけどな。

翔もこれくらいだと嬉しいんだが…。

二人が医療室を出て行って、私も行こうかと思ったとき

「姉ちゃん」

「ん？」

「弥生なんだけど…」

「どうしたんだ」

「暗所恐怖症と孤独恐怖症みたいなの…」

「どういうことだ」

「暗闇と一人ぼっちが怖いらしいの…。夜勤組の見回りさんに聞いたんだけど、夜中に一人で泣いてみたい。ちょうど、翔が厠に行つてみたいで…。だから、出来るだけ傍に誰かがいるようにしてあげて」

「分かった」

頷いて、医療室を出る。

暗所恐怖症に孤独恐怖症か…。

昔、夜に何か怖い目に遭つたんだろうか。

恐怖の記憶というのは、いつまでも残り続けるものだからな…。とにかく、しっかり見ておいてやらないと。

広間に戻ると、蓮と伊織はまだ伸びていた。

そつえば、風華にこいつらのごはんについて言うのを忘れてたな。
…まあいいか。

「お帰り」

「ただいま」

「あの二人を伸したのって紅葉？」

「そうだけど」

「さすがだね」

「お前も見えてたんじゃないのか」

「龍の喧嘩なんて、滅多に見られないじゃない」

「はあ…。止めるよ…」

「そついうのは紅葉の役目だし」

「オレは仲裁役でもなんでもないぞ」

「腕っぷしだけは強いじゃない」

「桐華。だけは余計だと思つよ。桐華は能天気で分からないかもしれないけど、紅葉は傷付きやすいんだから」

「ん？」

「…いいよ、もう」

「ほらあ、拗ねちゃったじゃない」

「拗ねてない！」

「そう？」

こいつらは…。

ホントに、話してると疲れるな…。

「それよりさ、お茶、飲みなよ。良いのが入ってるよ」

「そうだな」

「今朝の淹れたてだよ」

「今朝なら淹れたてじゃないだろ」

「このお茶は、冷めてからが美味しいんだ」

「ふうん…」

湯呑みを桐華の前に置いて。

夢中でお菓子を食べている葛葉と弥生の頭を撫でる。

すると、今気付いたという風に顔を上げて、ニツコリと笑った。

「はい、どうぞ」

「うん」

「美味しいでしょ」

「まだ飲んでないし…」

「早く飲んで」

「ああ」

言われるまでもなく…。

お茶を口に含むと、独特の苦味が広がる。
その苦味も、ごく短いもので。
ゆつくりと甘味へ変わっていく。

「ふむ。変わったお茶だな」

「そうだよ。淹れたてだと苦味だけなんだけど、冷ますと甘味が出てくるんだ」

「ほう」

「桐華はお茶ならなんでも飲むけど。こだわりの強いから難しいよ」

「どんなこだわりがあるんだ」

「とにかく美味しいお茶だね。でも、あまり美味しいと思ってなくても普通に飲んでるから、さらに難易度が上がるんだよね」

「そんなことないよ。美味しいお茶は美味しいって思って飲んでるし、不味いのは不味いと思って飲んでるし」

「不味いお茶があるのか？」

「ん……。苦すぎるのはイヤかな……。やっぱり、甘味がないと」

「ふうん」

「そうそう。でも、それでも何も言わずに普通に飲んでるから分らないんだよね」

「オレは尻尾に出るらしいけどな。灯によると」

「尻尾ねえ……。熊だし」

「そうだったな」

「ん？」

「お前はどこを見たら、感情が分かるんだ」

「いや、感情は分かるよ。全部顔に出るからね。でも、今飲んでるお茶が美味しいのか不味いのかは分からないんだよね」

「そういえば、それはどうやって分かるんだ。美味しいか不味いかって」

「不味いお茶を飲んだ次の日は、すっごく機嫌悪いんだ。それで分

かるかな」

「ふうん。それより、葛葉、弥生。その一個で最後にしておけよ」

「ええ……」「うん」

「ええじゃないだろ、葛葉。それで何個目だよ」

「んー……」

「お前は五個目だろ。それ以上食べたなら昼ごはんが食べられなくなるぞ」

「うう……」

「じゃあ、それを食べてもいいけど、昼ごはんはなしな」
「……………」

葛葉はしばらく考えて、右手に持っていた方の饅頭を置く。
よしよし、良い子だ。

頭を撫でてやると、少し寂しそうに笑う。

「そんな顔をするな。昼ごはんをいっぱい食べればいいだろ」

「うん……」

「昼ごはんを食べたら、またお菓子を食べていいから」

「ホント？」

「ああ。ホントだ」

「えへへ」

今度こそ、本当に。

弥生も葛葉につられて笑っている。

「うんうん。やっぱり紅葉は子守担当だねえ」

「勝手に決めるな」

「満更でもないくせに」

「そつだよ。いつでも子供と一緒にいるじゃない」

「そつか？」

「そうだよ」

「ふうん…」

そんなに一緒にいるか？

自分では分からないけど…。

言われてみれば確かに、誰かしら近くにいるかもしれない。

城にチビたちが集まってくるようになってからは特に。

ていうか、なんでこんなに集まってくるようになったんだろうか。

どこかに貼り紙でもあるのか…？

「ごはんの取り合いなんてみつともないことをするな」

「ウウ……」

「量が足りないなら灯か風華に言えばいいだろ」

「……」

「お前の方が身体も大きいし、食べるのも速いんだろ。だいたい、ここに来る前にも、そんな喧嘩をしてたのか」

「……」

「してないなら、なんで今日やったんだ」

「ウウ……」

「喧嘩するくらい、心に余裕が出来たってことじゃないの？」

「どうか。……まあ、とにかく。幸い、食べ物たくさんあるんだ。だから、食べ物で喧嘩なんてするんじゃない」

「……」 「ウウ……」

「なんだって？ちゃんと返事をしないか」

「ワウ……」 「……」

「そうだ。それでいい」

二人の頭を撫でて。

それ以上、二人は何も言わなかったけど。

「んー……」

「どうした、葛葉」

「んー……」

「おい、弥生はどうだ」

「ん？」

「どうしたの？」

「葛葉が腹を壊したみたいだ。もしかしたら、お菓子が悪かったの」

「かもしれないし」

「ええっ、大変！」

「慌てるな。遙、医務班を呼んできてくれ」

「分かった」

「た、大変だ…。どれがダメだったのかな…」

「弥生が大丈夫なんだ。お菓子が原因とも限らないだろ」

「だ、けど…」

「弥生の様子を見てくれ。葛葉を厠に連れていくから」

「わ、分かった…。弥生…こっちに来て…」

「うん」

桐華は心配しすぎだな…。

まあ、あれくらい心配してくれば、弥生が一人になることもないだろう。

唸っている葛葉の手を引いて広間を出る。

「大丈夫か？」

「ん…」

「どこが痛むんだ？」

「おなか…」

「まあ、そうだろうけど…」

「ん…」

「ほら、すぐそこだから」

「うん…」

角を曲がって、厠の前に出る。

一番手前の個室まで連れていって。

葛葉はお腹を押さえながら、中へ入っていく。
相変わらず戸を閉めないなので、代わりに閉める。

「うーん…」

「どうした？」

「おびがほどけないの…」

「見せてみる」

「うん…」

今さっき閉めた戸をもう一度開けて、葛葉の帯を見る。

帯は固結びになっていて、確かにすぐには解けそうにはなかった。

…ていうか、帯を解く必要があるのか？

でも、半ベソをかいている葛葉を見て解かないわけにはいかないし…。

とりあえず、爪を引っ掛けてなんとか解く。

「そら。解けたぞ」

「うん…」

ちゃんと下着を下ろしたのを確認してから、戸を閉める。

…紙はあったかな。

あったよな。

とにかく、外に出て待つ。

と、向こうの方から灯が歩いてきて。

「あ、お姉ちゃん。どうしたの？」

「ん？葛葉が腹を下してな」

「えっ、なんで？」

「分からないけど、お菓子を食べてからだったから、それじゃないかと思うんだけど…」

「お菓子？もしかして、桐華さんとお茶とか飲んだ？」

「ああ」

「あちゃあ…。見通しが甘かったなあ…。あれ、古いのも混じって

「たんだ。大人が食べる分には問題ないんだけど…」

「食中りか…。まあ、医務班も呼んであるし大丈夫だ。…そういえば、蓮と伊織が喧嘩してたぞ。ごはんの多い少ないで」

「ええ…。同じ量にしたんだけど…」

「蓮がさつさと食べてしまうから、伊織の方が多いんだと勘違いしたらしい」

「そっかあ…。お姉ちゃんから言っておいてよ。同じ量なんだって」
「もう言った」

「そう…。でも、カイトにも聞いたけど、あれくらいがちょうどいいって…」

「ちようどいいならそれでいいじゃないか。余分に与える必要はないだろ」

「…そうだね。それにしても、伊織が喧嘩かあ。一昨日来たときは、なんだかヨレヨレだったのにね。二日でそんなに変わるのかな」

「さあな」

「でも、昨日も同じだけあげてたのに、なんで今日いきなりそんなことで喧嘩したのかな」

「昨日の分が溜まって、今日に出てきたんじゃないか？また伊織の方が多いつてな」

「ふうん…。難しいね」

「難しいな」

一方的に蓮が悪いのは確実なんだけど。

でも、なかなか本気で怒ることは出来なかった。

蓮だって一日しっかり耐えたんだし、成長期だからたくさん食べたというのも分かるから。

「そうだよね…。たくさん食べさせてあげたいよね…」

「ああ」

「…もう一度、カイトと話してみるよ。増やしていいなら増やすし」

「ああ。そうしてくれ」
「うん」

頷いて、立ち去ろうとする。

でも、何かを思い出したように足を止めて。

「そういえば、その帯は何なの？」

「葛葉のだ。帯を解かないと出来ないみたいだ」

「ふうん」

「昔のお前と一緒にだな。固結びにして、解けないって泣いて」

「そ、そんなことあったかな…」

「あったよ。あのときは間に合わなくて大変だったな」

「もう！昔の話はなし！」

「いいじゃないか。楽しいし」

「楽しくない！」

灯は顔を真っ赤にさせて抗議する。

：灯、あのときは間に合わなくて、お母さんに慰めてもらってたな。それがちよつと羨ましかった、なんて言えないけど。

私も、もう少しお母さんに甘えてもよかったかもしれない…。

「何を考えてるの？」

「母さんのことを、な」

「お母さんかあ。今、生きてたらなんて言うかな」

「さあな。母さんに聞いてみないと分からない」

「もう、お姉ちゃんったら…」

お母さんなら褒めてくれるかな。

二人とも、こんなに大きくなったんだから。

「うん…」

「薬も飲んだから、もう大丈夫だよ」

「ごめんね、葛葉。古くなってるなんて知らなくて…」

「桐華さんが謝ることはないですよ。朝からたくさんお菓子を食べてる葛葉が悪いんです」

「で、でも…」

「大丈夫ですよ。ね、葛葉」

「うん…」

「もう…。医療室で寝てる？」

「うん…」

「ならいいけど。しんどくなったら言いなさいよ」

「うん…」

「しかし、その様子じゃ昼ごはんは無理だな」

「おひるごはん！たべる！」

「…葛葉？お腹痛いんじゃないの？」

「もういたくない！おひるごはん！」

「はあ…」

「ごはんの力は偉大だな」

「もう…。いつからこんな食いしん坊になったのかな…」

「食べないよりはマシだろ。ほら、葛葉、弥生。行こうか」

「うん！」「行く」

ため息をつく風華を他所に、葛葉はすっかりはしゃいで。弥生と一緒に厨房へ走っていつてしまった。

「あっ！待ちなさい！」

「風華、薬箱忘れてるよ！」

「桐華。走ったら転ぶよ」
「あたっ！」

派手に転けた桐華は、薬箱も派手に落として。
でも、余程頑丈に出来てるらしく、コロコロと二間ほど転がっても蓋すら開かなかった。

「まったく…。気を付けろよ」

「いたた…」

「中身は大丈夫？」

「んー…大丈夫みたいだ」

「よかった。…桐華。大切なものを持ちながら走ったらダメっていつも言ってるでしょ？」

「でも…風華も走ってるから、走らないと追い付かないじゃない…」
「厨房に行くことは分かっているんだから、慌てる必要はないでしょ」
「うう…」

「ほら、ちゃんと立って。蓮と伊織も見てるぞ」

「……………」
「ワウ」

「もう…。子供じゃないんだよ…」

「ほう。それは知らなかった」

「お茶だって飲むんだからね…」

「リュウとかも飲むじゃないか」

「リュウはもう大人だし…」

「いや…。年齢的にもまだ子供だろ…。望よりも下だぞ」

「むう…。じゃあ、大人って何よ」

「さあな。それは自分で考えろ。お前自身が大人であるかどうかもな」

「難しい課題が出たね」

「うーん…」

「さあ、昼ごはんを食べに行こうか」

「ワウ!」「オオン!」

「お前らはここで留守番だ」

「ウウ...」「オオン...」

「あとで美味しいものを持ってきてやるから。ちょっと待ってる」

二人の頭を撫でてやると、少し不満そうに尻尾を振っていた。

伊織はまた手を軽く噛んで念を押す。

…癖なんだろうか。

蓮はやらないけど…。

「遙、遙」

「ん?」

「血が…血が出てるよ...」

「んー?なあんだ。ちょっと擦っただけじゃない。舐めとけば治るよ」

「そ、そんな...」

「いちいち大袈裟なの。ほら、行くよ」

「うう...」

遙が急かすと、桐華は半ベソをかきながら部屋を出ようとする。

そのとき、伊織が桐華のところまで飛んでいき、本当に少しだけ擦りむいた膝を舐める。

「い、伊織…。本気にしなくてもいいよ…。あとで風華にでも消毒してもらってから...」

「.....」

伊織は舌を出したまま桐華を見上げて、首を傾げる。

それが可愛かったのか、桐華も笑顔に戻る。

…大した傷ではなかったとはいえ、伊織が舐めたことで傷口が完全

に治ってるってのには気付いてるんだろうか。
少なくとも遙は気付いてるみたいだけど…。

龍の不思議な能力か…。

噂には聞くけど、セトにはまだ見せてもらってないからな。
実際に見るのは初めて…なのかな。

「伊織のお陰で、足が軽くなった気がするよ。ありがとう」
「ウルル…」

「あはは、くすぐったいって〜」

「さあ、いい加減に厨房に行こう。風華たちも待っていてるだろうし」

「あ、そうだね。紅葉、行こ」
「ああ」

桐華はもう一度伊織の頭を撫でる。
そして、私の手を取って。
蓮と伊織を残して、広間を出た。

匂いの先。

馬車置き場に翔はいた。

自動三輪に腰掛け、何をするわけでもなく、ただひたすらにセトの額を撫でていた。

「翔。昼ごはんだぞ」

「あ、紅葉さん。わざわざありがとうございます」

「まったく…。普通に話してくれって言ってるだろ？」

「いえ…。そんな失礼な真似は出来ません…」

「言うことを聞かない方が失礼だと思うけどな」

「ウルル…」

「お前は、もう少し慎ましくするべきだな」

「オオ…」

「ふふふ。それで、お前はここで何をしてたんだ？」

「少し考え事を…」

「考え事？ 弥生のことか？」

「いえ。弥生は、ああ見えてしっかり者ですから。まだまだ甘えん坊だし、一人になるのが怖いって言いますけどね」

「自慢の妹なんだな」

「はい」

「それで？ 考え事ってのは？」

「…言わないとダメですか？」

「言ってくれると嬉しい」

「…そうですか」

翔はまたセトの頭を撫でて少し逡巡する。

そして、腹が決まったらしく、こちらを向く。

「俺たちの…いや、俺のこれからについてです」

「これから、か」

「はい。今は自動三輪でその日暮らしの旅をしてるわけですが…。でも、どこかに腰を据えた方がいいのかなって考えて…」

「なんでだ。少なくとも土地には縛られない生活っていうのは、定住生活よりも気楽なんじゃないのか？」

「そうですね。でも、さっきも言った通り、その日暮らしなんです。仕事は全部短期。その土地に留まることがないから、友達も作るこ
とが出来ない。俺はいいですが、弥生が可哀想で…」

「それで、弥生をここに置いていくのか」

「えっ…。なんで…」

「最初、言い直しただろ。だから、そうなのかと思ってな」

「…はい、そうです。面倒を見てやってくれませんか？ 幸い、ここ

には友達になつてくれそんな優しい子たちもたくさんいますし」

「それは無理だな。弥生の面倒は見られない」

「…そうですね。何を甘いこと言ってる…。俺が面倒を見ないといけないのに…」

「そうだ。お前が面倒を見ないといけない。それが出来るなら、ここで預かってもいいぞ」

「えっ…？それって…」

「ああ。二人とも留まるか、二人とも旅を続けるか。ふたつにひとつだ。弥生にはお前が必要だ。お前にも弥生が必要だ。それを念頭に置いて、もう一度考えてみる」

「……………」

翔はセトを撫でる手を止める。

弱々しく笑うと、重々しい灰色の空を見て。

セトも雰囲気を察したのか、そっと目を閉じた。

「考える時間はまだあるんだ。今はとりあえず昼ごはんを食べにいく」

「…はい」

自動三輪から降りると、大きく伸びをして。

相当長い時間、ここで考えてたんだな。

セトは一度翔の頬を舐めて、馬車置き場から出ていった。

雨は静かに屋根縁を濡らしている。

葛葉も弥生も、お腹がいっぱいになるとお菓子を食べる間もなく眠ってしまった。

二人に布団を掛けながら、望も大きな欠伸をして。

「望。こっちに來い」

「……？」

「ここに座って」

「うん」

胡座をかいた上に望を座らせて。

何が始まるのかと、こちらを見上げる望の頬を引っ張る。

「ん……」

「望は、なんでここに來たんだ？」

「お母さんに呼ばれたから」

「ああ……そうだよな、うん」

「どうしたの？」

「お前は弥生のこと、どう思う？あと、翔」

「弥生は可愛い妹だと思ってるよ。翔お兄ちゃんは……まだ分かんない。あんまり会ってないし。でも、弥生のことを見てたら分かるんだ。翔お兄ちゃんは、優しいお兄ちゃんだって」

「なるほどな」

「ねえ、お母さん」

「ん？」

「望ね、葛葉や弥生たちから見たらお姉ちゃんでしょ？」

「そうだな」

「でも、お姉ちゃんたちから見たら妹でしょ？」

「そうだな」

「それでね、いつも分からなくなるの。望は、お姉ちゃんなの？妹なの？」

「…望は葛葉とか弥生たちのことが好きか？」

「うん。大好き」

「じゃあ、風華とか桜たちのことは？」

「大好きだよ」

「それなら、望はお姉ちゃんであり妹でもある。どっちかひとつだけ、なんて選ぶ必要はないだろ？好きなだけチビたちの面倒を見てやれ。好きなだけお姉ちゃんやお兄ちゃんに甘えてやれ。望は両方出来るんだから」

「…うん」

望は私の手を握ると、自分の膝の上に置いて。

そのまま抱き締めてやると、嬉しそうに尻尾の先を動かす。

「ねえ、もうひとつ聞いてもいい？」

「ひとつと言わず、ふたつでも三つでも聞いてこい」

「うん。さっきの続きなんだけど。望は、お母さんにとっては何になるの？」

「…私にとつては、お姉ちゃんであり妹であり。そして何より、欠けがえのない大切な娘だ」

「娘？」

「ああ。娘」

「でも、望はお母さんの子供じゃないよ？」

「じゃあ、なんで望は私のことをお母さんと呼ぶんだ？」

「だって…。お母さんは…お母さんだもん…」

「それなら、望は私の娘だ。私が望のお母さんなら、望は私の可愛

い娘。生みの親かどうかなんて関係ない。望がそう認めてくれるなら、私は望のお母さんだ」

「……………」

「この話は望にしたかな。実を言うと、私にはお母さんが三人いるんだ。一人目は、生みの親。顔すらも覚えてないんだけどな。二人目は、小さい頃の育ての親。このお母さんは狼なんだぞ。三人目は、ここに来てからの育ての親だ。美人で強いお母さんだった」

「……………」

「みんな、私の大好きなお母さんだ。そして、私は大好きなお母さんの娘だ」

「…うん」

「望は、私の大切な娘か？」

「えへへ。お母さんは望の大好きなお母さん。望は大好きなお母さんの娘だよ！」

「そうか。ありがとうな」

もう一度、望を抱き締める。

望もギュッと私の腕を握って。

…私は望のお母さん。

今まで娘の立場だったのが、この子たちにお母さんと呼ばれてから、母親の立場になった。

お母さんにしてきてもらったことを、今度は私がこの子たちにやってあげる番なんだ。

「ん……………」

「ふふ、寝顔も可愛いな」

望を抱き上げて、葛葉の隣に寝かせる。

布団を掛けて上からそっと撫でると、なんだか満足そうなため息をついて。

…おやすみ、望。

弥生の尻尾は、猫らしく細く長く。
でも、見た目に反して触り心地は良かった。

「んー…」

「おっと」

…ふう。

起こすところだった。

お詫びに耳の裏を掻いてやると、喉をゴロゴロ鳴らして。

「ワウ」

「シート。みんな寝てるだろ」

「……………」

突然、伊織が部屋に入ってきた。

どこか不安そうにしてるように見えるけど…。

「どうしたんだ？蓮は？」

「……………」

「そうか。それで？」

「ウルル……………」

「ふうん…。セトに聞いてみたのか？」

「……………」

「セトに聞いても、たぶん分からないだろうな」

唐突に、屋根縁にカイトが現れた。

…なんで屋根縁？

「望の近くに出て、熱気で目が覚めてもいかなのでな」

「お前もいちおう配慮は出来るんだな」

「まあな」

軽く流されたところで、伊織を連れて窓際まで行く。

カイトは雨を払うように身震いをして。

「それで、さっきの話だが。風華のところには行ったのか？」

「風華？あいつは龍の薬師ではないぞ」

「そうかもしれないが、伊織の一番の理解者であることは間違いないだろう」

「そうだけど…」

「私の見立てを言っておくと、胸の苦しみはたぶん不安や寂しさから来ている」

「……………」

「そうなのか？」

「生活の環境の激変に、心が耐えきれないのだろう。こういうときは、一度元の場所に戻って心を落ち着かせるか、それに匹敵する良き理解者の傍にるのがいい。下手に溜め込むのはよくない」

「……………」

「ん？」

伊織は私の膝に頭を乗せると、そっと目を閉じた。

尻尾をゆっくりと揺らして、何かを求めているようにも見える。

「ふむ」

「オレでいいのか？」

「オオン……」

「でも、風華の方が良いんじゃない……」

「……………」

「ふふふ。さっき言っていたではないか。自分が母親だと認めれば、誰でも母親なんだと」

「…なんだ、聞いてたのか」

「すまないな。しかし、面白い話を聞かせてもらったよ。ありがとう」

「お前の方が、たくさん知ってるんじゃないのか？こういう話は」「いや。長らく生きてはいるが、新しい発見のなかった日はない。今日も例外ではない」

「…そうか」

「そうだ」

カイトはもう一度大きく羽ばたくと、曇天の中、どこかへ飛んでいってしまった。

散歩にでも行ったんだろう。

「ワウ…」

「分かってる」

カイトが遠い空に消えていくのを見届けて、伊織の頭を撫で始める。
…私に出来ることはこれくらいしかないけど。

私を頼ってくれるなら、喜んで心の拠り所になるよ。

「それで、カイトはどこに行っちゃったの？」

「知らないよ、そんなの」

「まあ、そうだよね」

「桐華たちはどうしてるんだ？ 広間にいるのか？」

「うん。いると思うよ。なんで？」

「いや、少しお茶を貰おうかと思ってな」

「じゃあ、私が貰ってくるよ。伊織もそんなだし。みんなを見てて」

「ああ、すまないな」

風華はニツコリと笑って部屋を出ていく。

湯呑みは… 向こうに置いたままだったか。

「ふあ…」

風華が戻ってくるまで耐えられるかな…。

伊織の角を触ってどうにか耐える努力を試みる。

…しかし重いな、こいつは。

寝てて力が抜けているとはいえ、上半身だけでこの重さか。

龍というのはこんなものなのか？

そういえばこの前、千早が風華の服にくっついてたけど、あれはどうなっているんだろうか。

風華は細かい毛が生えているんだろうって言うってたけど…。

ギュッと服を握っている伊織の手を解いて、手のひらを見ている。
んー…。

これは肉球だな…。

千早にも小さいのがあったけど。

毛が生えてる様子はないな…。

目では見えなくらい細かいが、別の方法でくつついてるかな。
それにしても、この触り心地は極上だな。
締め具合も弾力も絶妙だ。

「ウウ…」

「起こしたか」

「オオ…」

「そうか。ごめんな」

頭のとっぺんを搔いてやると、満足げにため息をついて。
そして、また眠りに落ちていった。

「ただいま」。はい、すっかり目が覚めるお茶だよ」

「ありがとう。気が利くな」

「姉ちゃん、眠そうにしてたから」

「そんなに眠そうにしてたか？」

「うん。姉ちゃん、眠たいときは尻尾をゆっくり動かして、耳を寝かすんだ」

「ふうん…。気付かなかつたな…」

「無くて七癖。癖って、自分では分からないものだよ」

「…そうだな。風華は考え事をするときに髪をいじるよな。何か怒つてるときは頻繁に腕組みをするし、嬉しいときは普段よりよくまばたきをする」

「ええ…。ホント？」

「ああ。無くて七癖。もう三つも見つかったな」

「うーん…」

唸りながら、風華は髪をいじり始める。
指摘しても面白いだろうが、こっやって黙って見ているのも…

「あつ、やつちゃった…。もう…」
「ふふふ」

こういうことがあつて面白い。

…とりあえず一口、お茶を飲んで目を覚ますことにする。
風華の癖を、さらに見つけないといけないしな。

望は大きく伸びをして目を擦る。

そして、もう一度大欠伸をすると、パサリと尻尾を振った。

「おはよう」「おはよ」

「おはよ、お母さん、お姉ちゃん」

「桐華さんに貰ってきたお茶、飲む？」

「うん」

「有名なお茶なんだって。美味しいよ」

「有名？」

「んー、なんだっけ」

「知覧茶だろ」

「ああ、そうそう。姉ちゃんの好きなお茶」

「お母さんが？」

「ああ」

「ふうん」

風華に入れてもらったお茶の匂いを嗅いでみる。

良い香りがするんだらう。

どこか満足げに息を吐く。

そして、口に含んで味を確かめる。

「どう？美味しい？」

「んー…熱い」

「ああ、そうだね。桐華さんの水筒は冷めにくいから。時間が経っても熱いままなんだよ」

「魔法瓶だな。二重構造になってて、間に熱を逃がしにくい素材を入れてるんだ」

「ふうん。そうなんだ」「……？」

「はは、望にはまだ難しいかな」

「むう…」

「まあ、淹れたてには敵わないだろうが、いつでも熱いお茶を飲めるのは魅力的だな」

「んー…。でも、ちよつと熱いよ…」

「狼なのに猫舌なのか」

「あはは、面白いね」

「…面白くない」

「ふふ、そういうな」

必死になってお茶を冷ましている望の頭を撫でると、不機嫌そうに尻尾を振って顔は上げようとしなかった。

どうやら、うちのお姫さまの機嫌を完全に損ねてしまったらしい。肩をすくめると、風華も困ったように笑って。

「そういえば、夏月が美希の傍から離れないんだ」

「美味しそうな匂いでもするんじゃないのか？」

「ううん。美希、料理の修行してるでしょ？味見でいろいろ貰えるからだよ」

「あながち間違いではなかったな」

「んー…。でも、いつからうちの子たちはこんなに食い意地が張るようになったのかな…」

「さあな。誰かさんを見てるからじゃないか？」

「あつ、桜だね」

「…まあ、桜もそうだけど」

「え？他にもいるの？」

「お前だよ」

「ええっ！なんで私なのよ！食い意地なんて張ってないもん！」

「朝ごはんだけでも、ご飯を三杯もおかわりしてるやつがよく言うよ。一日二十杯は食ってるんじゃないか？」

「そんなこと…ないもん…」

「まあ、いつも言ってることだけど、食べることは良いことだ。遠慮することはない」

「むう…。食い意地は張ってないんだから…」

「ははは。分かった分かった。食い意地を張ってるのは桜だけだ」
「うう…」

風華の背中を軽く叩いてみるが、こつちも唸るばかりで顔を上げなくなつた。

…二人目のお姫さまもご機嫌斜めのような。

こうなるともうお手上げだな。

ひたすらお茶を冷ましている望に、腹いせに寝ぼけ眼の伊織の顔をグニグニといじる風華。

しばらく相手にしてくれそうにないので、布団の上に寝転がって。小さく開いている葛葉の口に指を入れてみたりして。

「ん」

「葛葉、こぼしてるぞ」

「灯、匙はどこにやった」

「そんなの知らないよ。夏月が持つてるやつじゃないの?」

「いや、夏月の匙を探してたんだけど…。夏月、それはどこから持ってきたんだ」

「んー?」

「それは私のだ」

「美希の?じゃあ、結局夏月の匙はどこに行ったんだ」

「下に落ちてるんじゃないのか?」

「さつき見たけどなかったぞ」

「まあ、片付いたら見つかるでしょ。消えるわけないんだから」

「そうだけど…」

匙の本数なんて把握してるんだろうか。

葛葉なんかは、すぐに噛み潰してしまうし…。

「あつ!俺を取ったな!」

「食べるのが遅いんだよ!」

「なんだと!?」

「お前ら、喧嘩は外でやれ!あと、子供もいるのに物を投げるな!危ないだろ!」

「す、すみません…」 「隊長…」

「まったく…。戦場というより無法地帯だな…」

「そういえば、桜がいないんじゃないか?」

「桜は、今日は部屋から出てきてないよ。こはんも向こうに持って行って」

「ん？そうなのか？」

「うん」

「何をしてるんだろうな」

「さあ？」

桜、今日は出てきてないのか。

美希は首を傾げているが、たぶん昨日のことでまだ悩んでいるんだろうな。

気になるけど、今は放っておくのが一番だろうな。

私たちの力が必要なら、向こうから来るだろうし。

「そつえば、翔はどうした」

「知らないけど。でも、お昼はずっと馬車置き場にいたみたいだよ」

「またそこにいたのか」

「んー。自動三輪の上が、やっぱり一番落ち着くんじゃない？」

「私も、料理の道具とか覚書を入れる袋は、ずっと使ってきた背負い袋だからな。旅の道連れっていうのは、他の何より愛着が湧くのもかもしれないな」

「ふうん…」

「まあ、セトも明日香もいるし、大丈夫でしょ」

「何が大丈夫なのか分からないんだが」

「んー、それはあれだよ。心の支えとか」

「なんだよ…それは…」

「いいじゃない。夕飯だってさっき食べてたし」

「ん？いつだ？」

「みんなが来る前。先に食べてったよ」

「ふうん…。なんでだろ…」

「大勢で食べるのに慣れてないんだろ。いつも弥生と二人きりだっただろうからな」

「そついうものなのか？」

「ああ。そういうものだ」

そういうものなのか。

弥生は楽しそうに食べてるけどな。

まあ、歳を重ねれば考えることも多くなるんだろう。

あの年頃の子は特に、な。

「ああもう…。葛葉、またこぼして…。ほら、もうちょっと椅子を引いて」

「んー」

「それで、皿の上で食べる」

「うん」

「そしたら、こぼれない。な？」

「んー？」

「…まあ、私が食べさせてやるのが一番だけどな」

「それはお前の願望だろ」

「そ、そんなことない」

「昨日は、葛葉を膝に乗せて嬉しそうにニヤけてたくせに」

「ニヤけてなんかない！」

「どうだか」

「ニヤけてなんかないからな！」

嬉しそうにしてたつてところは否定しないんだな。

まあ、美希が葛葉のことを大好きなのは、揺るがない事実なわけだけど。

「ほら、あーんして」

「あーん」

「美味しいか？」

「うん！」

「そうか。よかった」

「ほーら、ニヤけてるぞ」

「なっ！ニヤけてない！」

「ふふふ」

まあ、もはや溺愛とも言えるくらいに可愛がる様子を見ると、
なんだかこっちも幸せな気分になるのも事実なのかな。

部屋に戻ると桜がいた。

先に戻っていたチビたちと一緒に寝ていたけど。

「…何してるんだろうね」

「さあ。まあ、何か用事があつたんだろうけど」

「どうする？起こす？」

「いや、いいだろ。用事があるのは桜だけじゃないみたいだし」

「えっ？」

「翔。入ってこいよ」

「…うん」

廊下の暗がりから出てきて、音も立てずに部屋に入ってきた。
たぶん、チビたちを起こさないようにとの配慮だろう。

「腹は決まったか？」

「いや…。まだ…」

「そうか。まあ、ゆっくりと決めればいい。時間はあるんだ」

「……………」

「ここに留まるなら喜んで歓迎しよう。ここを発つなら笑って見送
るっ」

「…ここに留まる覚悟はない。ここを発つ勇気もない。私にあるの

は明日への片道切符だけ」

「え？何？どうしたの？」

「切符を手に明日へ旅立つのなら。決めねばなるまい、汝の行く先を」

「私は…私は…」

「ねえ、どうしたの？」

「戯曲だ。ある村に立ち寄った旅人の話なんだけど」

「ふうん…」

「変わったことに、ここから先の台本は一切ない。でも、劇は旅人が決断するところまで続くんだ。どういうことが分かるか？」

「…結末は演じるたびに変わるってこと？」

「ああ。旅人は様々な決断をする。村に留まったり、旅立ったり。そのまま、いつまでもクヨクヨと考えたりもする」

「へえ」。稽古が大変そうだね」

「劇団で結末を決めているときもあるし、全て劇団員たちの気分次第なんていう即興性の強いところもある。まあ、稽古が大変なのは変わらないだろうが」

「ふうん…。よく知ってるんだね」

「まあな。父さんが演劇好きだったから、小さい頃によく連れていってもらったんだ」

「へえ。翔も知ってたんだよね。観にいったの？」

「いや、俺は短期の仕事で。急病の劇団員の代行として、実際に出たんだ」

「へえ」。すごいね」

「別にすごくなんてないよ…」

でも、嬉しそうに。

尻尾がせわしなく揺れている。

「じゃあ、旅人よ。お前の決断は？」

「それは…」

「姉ちゃんもさっき言ってたけど、時間はあるんだから。ゆっくり考えて決めなよ。まあ、どこかの旅人さんみたいに、いつまでもクヨクヨ考えるのはダメだけど」

「うん…」

そうだ。

時間はあるんだ。

閉幕もないし、今すぐ決めることはない。

人生は、戯曲のように筋書きに沿って演じていくものではないんだから。

自分の信じる道を見つければいい。

「おはよう、祐輔」

「あつ、姉さま。おはよ」

「早起きだな」

「そ、そうかな…」

「ああ。でも、こんなに早く起きても、調理班は寝坊助ばかりだからな。なかなか朝ごはんにはありつけないぞ」

「うん」

「…まあ、ゆつくり待つか」

「えへへ」

祐輔の隣に座る。

…雨戸はもう開けてあるな。

祐輔が開けてくれたんだろうか。

広場の真ん中でセトが大欠伸をしているのが見えた。

「姉さま」

「ん？」

「俺と夏月、ずっとここにいてもいいんだよね？」

「…どうしたんだよ、急に」

「翔兄ちゃんが、なんか悩んでたみたいで…。俺はここが大好きだし、離れたくない。でも、姉さまとか他のみんなに迷惑を掛けるのかって考えたら…」

「迷惑を掛けてると思うてるのか？」

「うーん…」

「まあ、それもあながち間違いではない。迷惑は掛けてるだろうな」
「うん…」

「でも、オレたちの誰一人として、それを迷惑だと思ってるやつは

いない」

「えっ……？」

「迷惑というのは、要するに心の持ちようだ。たとえば、その醤油取って…なんていうのも迷惑になりうるんだ。取る側の人をそれを煩わしいと思えば、迷惑が成立する。でも、どれだけ手間を掛けさせようとも、迷惑にならないこともある。その人が、迷惑だ、煩わしい、と思わなければ、迷惑は成立しない」

「……………」

「オレたちは、祐輔や夏月がここにいるのが迷惑だなんて思っていない。褒めたり、怒ったり。遊んだり、一緒に寝たり。何も煩わしいとは思わない。こうやって、抱き締めるのもな」

祐輔を引き寄せて、そっと抱き締める。

少しびつくりしたようで、最初は戸惑っていたが、すぐに身体を預けてきた。

「祐輔は、オレがこうやって抱き締めるのを煩わしいと思うか？」

「…うん」

「そうか。よかった」

「だって、姉さまは、俺のお姉ちゃんだもん…」

「ああ。私は祐輔のお姉ちゃんだ。祐輔は、私の大切な弟。大切な家族だ」

「うん」

大きく深呼吸をすると、祐輔はそっと離れる。その目には、もうさっきみたいな迷いはなく。

「ありがとう」

「何が」

「うん」

「変なやつだな」

「えへへ」

もう一度、祐輔の頭を撫でる。

…祐輔は大切な家族だ。

もちろん、翔も。

今日の当番は遅いな。

もう夜が明けて結構経つけど…。

「うわっ、大変だよ！寝坊した！」

「遅いぞ」

「えっ！？た、隊長！すみません！」

「まったく…。本当に寝坊助ばかりなんだな…」

「いやあ、まったく。何をしてるんでしょかね？」

「お前は何をしてたんだ、千華」

「え？わ、私ですかあ？私はほら、あれですよ。春眠暁を覚えず」

「つまり、寝坊だな」

「…はい。すみません」

「もういいから。早く朝ごはんを作ってくれ」

「はあい」

祐輔は待ちきれずに、机に突っ伏して眠ってしまっている。

早起きしたってのもあるかもしれないが。

ふむ…。

調理班の寝坊を治す方法はないかな…。

各部屋に鶏を置いてみたりしても無駄だろうな。

全員東向きの部屋に…って、千華は東向きの部屋じゃないか…。

何をどうしたら早起きするんだ、こいつらは。

「やつ、ほっ」

「黙って料理出来ないのか」

「え？何か言っていました？」

「まったく…」

「ふんふん。納豆、なっと」

「納豆？今日は納豆か」

「んー？そんなこと、言いました？」

「無自覚で納豆なんて呟くのか、お前は」

「どうでしょうね」

「呟いてたよ」

「ふうん」

気のない返事をして、また料理に取り掛かる。

納豆だとかワカメだとか、わけの分からないことを言いながら。

「祐輔。朝ごはんだぞ」

「ん…」

「おい、起きろ」

「んー…」

「祐輔」

「うん…」

「起きたか？」

「……………」

「はあ…。ダメだな…」

「隊長、どうしました？」

「祐輔が起きないんだよ」

「あちゃー。待たせすぎちゃったみたいですねえ」

「まったくだ」

「じきに出来上がりますからね」

「そういえば、千華は一人部屋だったな」

「ええ。それがどうかしましたか？」

「早起きのやつと相部屋にすれば、当番にも遅れないかと思ってな」
「なるほど。良い案ですねえ」

「戦闘班のやつを入れてみようか」

「隊長が来てくれますか？」

「それでもいいぞ。叩き起こしてやる」

「隊長は比喻じゃないですからね。本当に木刀で叩き起こされますし」

「なんだ、そんな凶暴なやつだと思ってるのか」

「調理班では有名な話ですよ。灯が言いふらしてますから」

「あいつ…」

「まあ、灯が隊長の悪口を言いふらすときは、みんな話半分で聞いてますよ」

「それならいいけど…」

「みんな、隊長のことを信じてますから。灯も、ですが」

「…うん。ありがとう」

「当然のことです。部下が上司を信じなかったら、誰が信じるんですか」

「ふふふ。じゃあ、オレは部下から信じられる器であり続けなければならぬな」

「そうですね。他の誰も信じられなくなっても、隊長だけは信じられる…。そんな隊長であり続けてください」

「難しい課題だな」

「いつも通りにしていってくれば、それで充分ですよ」

「…そうか」

「ええ。さあて、ごはんが出来ましたよ。昨日から準備だけでもやっていて正解でした」

「ん？それが夜遅くまで掛かって、次の日に寝坊するの？」

「昨日は夕飯が終わったあと、半刻くらい掛かりましたね」

「全然遅くないじゃないか」
「あれ？」

少し小突いておく。

すると、千華はペロツと舌を出して。

結局、全く関係ないところで寝坊してるんじゃないか。
はあ…。

祐輔はいつの間にか起きて、早速朝ごはんを食べてるし。
何なんだ、今朝は。

「今日は良い天気だな」

「そうだね。すぐに乾いちゃうね」

「まあ、それはいいことだ」

「うん」

洗濯物を取って、長く横に渡された紐に掛けていく。

今日は速く終わったので、まだ干していたり、洗ってるところもあった。

「もう…姉ちゃん。ちゃんとシワは伸ばしてって言ってるじゃない」

「ん？ああ、そうだったな」

「他のところが気になるの？」

「んー、いや。今日は速く終わったからな。こういう景色が珍しくて」

「なるほど、確かに珍しいね」

「ああ」

「いつも兄ちゃんが五月蠅いし。でも、一番速いのも事実なんだけど」

「そうだな。今日も、もう干し終わってるし。犬千代は誰と組んだかな」

「んー、裕太だったような気がする」

「そうか、裕太か。速いわけだ」

「私たちのところみたいに、途中で増えたりしないからね」

「そうだな。あの二人だと、誰も寄り付けないだろ」

「怖いもんね」

「誰が怖いんですか？」

「裕太と兄ちゃんだよ」

「そんなに怖いですか…」

「うん。作業してる間、般若だもんね」

「風華さん、僕だと分かって話してます?」

「姉ちゃんと声も全く違うし、間違っわけがないじゃない」

「確信犯とはまた酷いな、お前は」

「もういいですよ…。どうせ般若ですから…」

「ほら、裕太が拗ねたじゃないか」

「あはは、今日は調子良いね」

「僕は悪いです…。悪くなりました…」

「ごめんごめん」

「はあ…」

裕太はすっかり意気消沈して。

朝から精神に負荷を掛けすぎだな。

「まあ、それだけ一所懸命やってるってことだよ。それよりさ、兄ちゃんとやってて息が詰まってきたりしない?」

「そうですね…。僕みたいな下っ端の肌着を、王さまにも洗わせてしまっているっていうのは、正直畏れ多いです…」

「ああ、そんなの気にしなくていいよ。兄ちゃん、洗濯好きだし。どんどん遠慮なく洗わせてあげて」

「し、しかし…」

「いいのいいの。そうじゃなくてさ、堅苦しいでしょ、兄ちゃん」

「いえ。気さくに話し掛けていただいて。恐縮ではありますが、王と作業を共にしているという意識は薄れて、有難いことです」

「風華。裕太は犬千代に負けず劣らず堅苦しいんだ。愚痴を聞き出そうたって無駄だぞ」

「うん…。そうだね…」

「愚痴なんて、とんでもないです!」

「はあ…。空姉ちゃんとなら、一日中兄ちゃんの悪口で話せるのに」

…」

「趣味が悪いぞ」

「趣味じゃないからいいの」

「そういうことじゃないだろ…」

ていうか、もしかして空といるときは利家の悪口ばかり話してるんだろうか。

…有り得そうで怖いな。

部屋に戻ると、翔が屋根縁に寝転んで空を見ていた。

…なぜか、その隣で葛葉も丸くなって日向ぼっこしてるけど。

「翔」

「あ、紅葉さ…紅葉姉さん…」

「えっと…」

「あつ…今は、その…弥生がそう言えつて…」

「え？…ああ、紅葉姉さんってやつか。あー、いや、オレはそんなことを聞きたかったわけじゃなくてだな」

「えっ…。じゃあ、俺の言い損…」

「そうだな」

要らぬことを言ったと、翔の顔がどんどん赤くなっていく。

それを隠すためかそっぽを向いてみるが、尻尾の動揺は隠せていなかった。

「あー、何を聞きたかったか忘れてしまったな…」

「……………」

「まあいい。祐輔はどうだ。起きたか？」

「いえ…。そこで寝てますよ…」

「ん？ホントだ」

祐輔は朝ごはんを食べるなり、気絶するように眠ってしまった。
風華はあとで来ると言っていたが、もしかしたら何か急な病気かもしれないし…。

「祐輔、昨日は寝てなかったみたいですよ」

「そうなのか？」

「はい。原因は俺だと思っんですが…」
「どうして」

「俺が考え事をしてたら、祐輔が話し掛けてきたんです。何がしたいわけでもなく、ただ話したいだけだったみたいなんです…」
「ほう」

「それで俺、悩んでたことを話してしまっただけです…。そのときはなんとなくだったんですが、あとで考え直してみると、ただ不安を煽るだけだったなと…」

「そうか」

だから、あんなことを言っただけだな。

小さい妹を抱えた兄として、翔と自分自身を重ねてしまっただけだろう。

祐輔は優しい子だから。

「まったく不用意でした…。すみません…」

「謝る必要なんてないだろ。お前は悪くないよ。誰も悪くない」
「でも…」

「悪いとすれば、お前や祐輔を孤児としたこの世の中だ」
「……………」

そうだな。

家族を失うことがなければ、こんな思いをすることもなかった。
身勝手な理由で争い、何の関係もない子供たちも巻き込んで。

「俺は…こうやって旅をしてて良かったと思ってます。他の人が出
来ないことを、たくさんやってきた。俺は、孤児ということを負の
肩書きとは思っていません」

「そうか」

「だから…俺、旅に生きようと思うんです」

「…そうか」

「弥生には…辛い思いをさせてしまうけど…」

「辛くなったら帰ってくればいい。ここは、お前たちの家なんだか
らな」

「…うん」

翔は隣で眠る葛葉の頭を撫でて。

そして、また空を見る。

…空はどこまでも続いている。

ここに繋がっているから。

「うん、いいよ」

「えっ、そんなあっさり……」

「嫌なの？」

「いえ……」

「なら、いいじゃない。一緒に行こうよ」

「は、はい」

「桐華はいつも二つ返事だからね」

「それよりさ、何かお菓子ないの？」

「ない」

「うう……」

「よかつたじゃないか。給料も入るし、弥生が一人になることもない」

「うん」

頷きながら、キラキラと太陽の光を反射する、葛葉の頭を撫でる。考え抜いた結果、翔は旅団の一員として旅をするのが一番良いと判断したらしい。

確かに、二人旅よりずっと安全だし、ある程度同じ場所を回るから根を張るにはちょうどいいかもしれない。

ルクレイを中心として回ってる旅団天照なら、ここにもすぐに帰ってくる事が出来るし。

私は良い判断だと思う。

「それで、翔は何か武術とか出来る？」

「えっ、あ……いや、何も……」

「そう。じゃあ、護衛は無理ね……」

「す、すみません……」

「武術なら、オレが教えないこともないけど」

「いいよ。紅葉が教えると、いろいろ問題だから」

「…何が」

「紅葉の戦い方って独特でしょ？木刀を持ったら普通だけどさ」

「それ以外でも普通だ」

「素手のとき、四足になるじゃない」

「そっちの方が速いからな」

「そんなの、紅葉だけだよ。人間は四足で駆け回るようには出来ないからね。他の人が真似しても、腕を痛めるのが関の山だよ」

「そうかな…」

「ということで、武術はいいよ。他にも仕事はたくさんあるしね」

「は、はい」

「ぼくに仕事が回ってこないんだけど」

「やりたいの？」

「だって、団長なのにお茶ばかり飲んでるなんて、締まらないじゃない」

「仕事を回してもいいけど、すぐに音を上げるでしょ？」

「そ、そんなことない…はず…」

「そんなのじゃダメ。しっかり仕事出来ます！って宣言出来るようになってから来なさい」

「うう…」

「お前は、遙が家出したとき以外、お茶を飲んで落ち着いてるのが仕事だ」

「そうそう」

「んー…。なんか気になる場所があったような…」

「気のせいだろ」

「んー…」

「そうだ。桐華の補佐をしてみない？正直言つと、私だけじゃキツいんだ」

「えっ…。そんな大役…俺には無理です…」

「あはは、そんな大層なものじゃないよ。読み書き算盤は？」

「はい……。いちおう……」

「じゃあ、大丈夫だよ。よし、これで決まりだね」

「いえ……。ホントに無理ですから……」

「……どうして、やる前から無理って決めつけるの？ 翔は、そんなに心の弱い人だったの？」

「……………」

「骨のある子だと思ったけど、私の見込み違いだったみたい。確かに、そんな人には無理だろうね。そして、そんな人はうちには要らない。入団は認めたけど、取り消させてもらおうよ」

「は、遙……。そんな……」

「桐華は黙ってて！」

「……黙らないよ。ぼくは、遙を信じてる。遙が決めたことには口出ししない。でも、今回は無理だよ。翔はそんな弱い子じゃないってことは、遙も分かっているでしょ？ なんで、そんなことを言うの？」

「実際にそう思っているからよ」

「遙！」

「……………」

「ぼくは、ぼく自身のことなら何を言われてもいいけど、大切な団員の悪口を言うやつは許さないよ。たとえ、遙でも……うっん、ぼくはみんなを信じてるから。遙が、そんな酷いことを言うなんて思っていないから。だから、だから……」

「分かりました。俺、やってみます」

一瞬の沈黙が流れる。

翔は決意に満ちた目を。

遙はニツコリと笑顔に戻って。

そして、葛葉が寝返りを打ったその横で、一人、桐華はキョトンとしていた。

「ありがと。ごめんね」

「いえ…。俺が悪かったんですから」

「それでも…。ね。だけど、桐華の人となりがよく分かったでしょ？」

「はい」

「まあ、桐華はそういうやつだよ。今も、今までも。これからも、な」

「えっ、え？どういうこと？」

「桐華のバク力。引っ掛かってやゝんの」

「ひ、引っ掛かる…？」

「私が本気であんなことを言うと思った？」

「えっ？いや、でも…」

「翔が桐華の補佐を渋っていたのは本当だけど、遙が翔のことをどうこう言っていたのは嘘…。というか、演技だぞ」

「ええっ！嘘！」

「演技力には自信があるからね。そうでないと情報屋なんて出来ないし」

「そんな…」

「あ、情報屋っていうのは裏稼業みたいなもので、細々とした噂話から国家機密まで、いろんな情報を集めて適宜利用したり売りさばいたりする仕事だよ」

「だいたい想像はつきます。俺も昔、酒場で働いてましたから」

「へえ…。そりゃいいね…。って、翔は何歳だっけ？」

「お得意の情報網で調べてみては？」

「あっ、一本取られたかなあ」

「そうかもしれませんね」

「ね、ねえ、遙…。演技だったって…」

「もう…。だから、桐華は何か格好良いことを言っ、格好良く決めたってことでもいいじゃない。それ以上に何かがあるのよ」

「か、格好良くなっていなかったよ！あっ、なんか、思い出したら恥ずかしくなってきた…」

桐華の顔はみるみる赤くなっていく。

最終的には、茹で蛸になって倒れるんじゃないかってくらい。

…でも、団長らしくて格好良かったってのは事実。

相当恥ずかしいだろうな、というのも事実。

「ううゝ…」

「お前、五月蠅いぞ」

「だつてえ…」

「何かあつたんですか？」

「ああ。さつきね、桐華が格好良いことを…」

「あーあー！ダメ！言っちゃダメ！」

「そうだな。千華…というか、調理班に伝わった情報は侵略する」と火の如しだからな」

「じゃあ、余計にダメ！」

「なんだ、つまんないの」

「つまんなくていいよ！」

「ふふふ。非常に気になりますが、お昼ごはんですよ」

「はあゝ。やっとだゝ」

「祐輔と翔くんの方は、ここに置いておきますね」

「ああ。ありがとう」

「昨日は寝てないんですってね」

「祐輔か？そうらしいな」

「隊長も同じ部屋で寝てたのに、気が付かなかったんですか？」

「情けない話だがな。祐輔がいないことにも気付いてなかった」

「へえゝ。疲れてたんですかね？」

「さあな」

「豹は隠密が得意って聞くしね。祐輔には素質があるのかもしれないよ」

「ふうん…」

「うえ…。かいわれ大根だ…」

「嫌いですか？」

「辛いもん…」

「加熱してありますからね。少しはマシだと思いますよ」

「良薬口に辛しだ。薬だと思って食べる」

「良薬口に苦しじゃ…」

「つべこべ言うな」

桐華の口にかいわれ大根を押し込んで、即座に口を塞ぐ。すると、顔はみるみる青褪めていき、涙目になってくる。

「んー！」

「ダメだ。オレの前で好き嫌いは許さないぞ」

「んー！んー！」

「早く飲み込め。いつまでも辛いままだぞ」

言われてすぐに必死に飲み込もうとするが、ろくに嚙んでないものを飲み込めるわけもなく。

本格的に泣き始めたから、手を離してやる。

「うつ…うつ…。酷いよ…紅葉…」

「好き嫌いするからだ」

「ホント、容赦ないね。余計に嫌いにならないか心配だよ」

「これでもいちおう、好き嫌いはいくつかなくしてるんだぞ」

「この方法で？」

「いや、遥かに緩やかだけど」

「そりゃそうだよね…。この方法で治るなら、私だってやってるよ」

「…」

「ぼくにも優しくしてほしかった…」

「それで治るなら、そうするけど」

「治るよ…」

「そうか？じゃあ、やってみるか？」

「うつ…。もういいよ…」

「そうだろ？」

「……………」

涙を拭って、かいわれ大根だけよけてまた食べ始める。
不機嫌そうに唸りながら。

部屋に戻ると、そのまま桐華は布団のひとつに潜って寝込んでしま
った。

相当こたえたようだな。

「桐華さん、どうしたんですか？」

「ん？ いやあ、紅葉がちよつとね」

「紅葉姉さん、何かしたのか？」

「さあな」

「なんだよ、それ。桐華さんに何かあったら、紅葉姉さんでも許さ
ないからな」

「おっ、早速だね。それっぽいよ」

「そ、そうですか？」

「うん。まあ、仕事は追々やってもらうとして、まずはそんなかん
じだね」

「遙は出来てないみたいだけど」

「私が出来てないから、翔にやってもらうんだよ」

「胸を張って言うことかよ……」

「ん？ そういや、紅葉は張る胸もないからね」

「なっ！ なんでそんな話になるんだ！」

「はあ……。可哀想に……」

「さ、触るな！」

手を払いのけて。

遙は肩を竦めると、ニヤリと笑って。

まったく…。

油断も隙もないやつだ…。

「翔も触ってみなよ。ほら」

「えっ…」

顔を上げると、翔の手が迫ってきていた。
そして…

「ひゃあ!？」

「わわっ!ご、ごめん、姉さん」

「遙!」

「いいじゃない。紅葉って、抱き締めるのが好きでしょ?」

「そ、それとこれとは話が違うだろ!」

まだドキドキしてる…。

翔も、なんだか顔が赤いし…。

くそっ…。

遙のこういうところが苦手だ…。

「ところで、さっきから気になってるんだけど、あれは何?」

「そんなこと言っても騙されないぞ…!」

「いや、これは本当だよ」

「ウウ…」

「もう…。間が悪いんだから…」

「悪くしたのは誰だよ…」

遙が立ち上がる。

咄嗟に胸を庇ったが、遙は横を通りすぎて。

…まだダメだ。
まだ分らない…。

「もう…。そんなに睨まなくてもいいじゃない…」

「ウウ…」

「ほら。また獣みたいに唸って」

「もともと狼だからな…」

「はあ…」

遙は屋根縁へと向かう。

そして、私たちが部屋に来たときにはなかったはずのものを抱え上げて戻ってくる。

「さあ、どうする？また増えちゃったね」

それは、女の子だった。

…確かに、また増えたな。

風華が髪をいじり始める。
何かを考えてる証拠だ。

まあ、この子についてなんだろうけど…。

「寝不足だね」

「はあ？」

「寝不足だって言ったの」

「こいつがか？」

「え？この子？この子は知らないよ。祐輔の話」

「ええ…。祐輔のは、もう分かっているんだよ…」

「こ、この子は今から！」

「はぁ…」

お昼を食べてきて眠くなったらしい葛葉は、また屋根縁で日向ぼっこをして。

今度は夏月と弥生も一緒に。

まあ確かに、絶好の日向ぼっこ日和だけど。

「なんだろね…。翼は龍だけど…。それにしても、角もないし…」
「角のない龍はいないのか？」

「もともと、龍は角に力を溜めてるって言われてるから」

「うん。だから、龍とは考えにくいね…。この子が起きない原因も分からないし…」

「そうか…」

「兄ちゃんなら、何か分かるかもしれないけど…」

「ん？呼んだか？」

「仕事が忙しいだろうしなあ…」

「えっ、あ、おい！」

風華は、部屋に入ってきた利家を押し返す。

…何かの用事で来たんだろうに。

何だったんだろ…。

大欠伸をする祐輔の口の中に指を入れると、ガジリと噛まれてしまった。

「んあ…。ごめんなさい、姉さま…」

「平気だよ、これくらい」

「そうだよ。ていうか、姉ちゃんが悪いんだし」

「うん…」

望が、私の代わりに祐輔の頭を撫でる。

祐輔は少し迷っていたけど、ニツコリと笑って。

と、横で眠る女の子に気付いたらしい。

「この子、誰？」

「さあな。まだ分からない。犬千代によると、魔霊の一種らしいけど…。詳しいことは、遙が調べてくれてる」

「マリヨウ…？」

「うん。珍しい…というか、もともと西洋発祥の種族みたいだね」

「セイヨウ…」

「ここから西へ西へ、ずっと遙か先まで行ったところだ」

「西…。ムカラウ？」

「ムカラウは隣だろ。もっともつと向こうだ。キシユを越えてもまだ西の方」

「……？」

「まあ、そのうち分かるよ」

「うう…」

「焦ることはない。ゆっくり分かっていけばいい」

「むう…」

望が頬を引つ張ると、不満そうな声を出す。

あまりにグニグニとやるから、最後には望の指を噛んで。

「あーあ、怒らせちゃったね」

「うん」

「ちょっと楽しそうだな」

「うん。楽しいよ」

「うう……」

「そういえば、望は外で遊んでなくていいの？」

「えっとね、ヤーリエが見てくれるから大丈夫だよ」

「ヤーリエが来てるのか」

「うん」

窓から広場を覗いてみると、確かにいるようだった。

ていうか、下町の子たちが遊びにきてるんだな。

ルウエの姿も見える。

「それにね、新しい子が来てるって聞いて、早く友達になりたかったから」

「まだ起きてないけどな」

「うん。でも、起きてすぐにみんなに会わせたいんだ」

「優しいお姉ちゃんだな」

「えへへ」

望の頭を撫でると、可愛い笑顔を見せてくれる。

うん、やっぱりこれだな。

「姉さま、あつちで寝てるのは？」

「ん？あれは桐華だ」

「なんで寝てるの？」

「腹でも痛いんじゃないのか？」

「ふうん……」

「適当なことばかり言わないの。姉ちゃんのせいでしょ」

「姉さまが何かやったの？」

「そうだな。好き嫌いをなくしてやろうと思ったんだけど」

「拷問の間違いじゃないの？」

「違うな」

「……？」

祐輔は首を傾げる。

それを見て、望も首を傾げて。

尻尾の動きも同調してるけど、こっちは偶然だろうか。

「あ」

「ん？」

「翔兄ちゃんは？」

「遙と一緒に調べものだ。あいつは、旅団天照に入ることになったからな」

「そうなの？」

「ああ。…寂しいか？」

「うん。でも、ちょっとだけ。だって、また会えるんでしょ？」

「天照はルクレイ中心だからな。祐輔の言う通り、またすぐに会える」

「うん」

小さく頷くと、グツと握りこぶしを作る。

必ず翔は帰ってくるから。

そう、確めるように。

望と祐輔が屋根縁で日向ぼっこを始めた頃、遙が翔と一緒に戻ってきた。

資料と思われる木簡も持って。

「やつぱり、異国漫遊記つてのに書いてあったよ」

「漫遊…」

「いいじゃない、資料の名前なんて」

「いいけど…」

「えつとね…。どこだっけ…」

「…ここですよ」

「ああ、そうだったそうだった。翔が見つけてくれたんだけどね。びつくりしたよ。一巻を読むのに三分掛からないんだから」

「へえ、瞬読が出来るんだね」

「た、大したことじゃ…」

「いや、すごいことだと思うよ。誰にでも出来るものじゃないしな。誇っていいんだぞ」

「あ…えつと…」

「あはは。まあ、その話はまたあとにしようか。翔も心の準備が出来てないみたいだし」

「そうだな」

「ごめんなさい…」

「謝る必要はないでしょ。それで、資料にはなんて書いてあったの？」

「うん。魔霊族っていうのは、いろんな種族の総称なんだって。それで、ここ。熱き血潮のような赤き瞳に、鷹の眼光のよりも鋭い牙。銀の髪は空を流れる天の川を彷彿させる。そして、龍をも凌ぐ可憐な翼を広げ、美しき月夜に舞う…って。訳してみたかんじ、そんなことが書いてあったよ」

「…なんだ、それは」

「まあ、ちょっと臭いかもしれないけど、この子の雰囲気こそっく
りじゃない?」

「そうだけど…」

「あまりにもあまりにもだよ…」

「いいじゃない。それで、この資料には名前も書いてあつて…。あ、
これだ」

「ん?」

「夜魔族だつて」

「夜魔族?」

「うん。闇に溶け霧と化し、夜な夜な生き血を吸い歩く…と言われ
ているつて書いてあるよ」

「二重伝聞だな…」

「仕方ないじゃない」

「い、生き血つて…」

「噂でしょ」

「火のないところに煙は立たないんだよ…」

「風華は、どうしてもこいつを吸血鬼に仕立て上げたいみたいだな」

「そ、そうじゃないけど…」

「……………」

「ん?どうしたんだ、翔」

「資料を読みすぎて疲れたんじゃない?」

「えっ、あ…はい…」

「大丈夫?」

「少し横になつたらどうだ。顔色が悪いぞ」

「うん…」

翔は、フラフラと桐華のところまで歩いていくと、そのまま糸が切
れたように倒れ込む。

…さて。

少し声の調子を抑えて。

「それだけじゃないんだろ？」

「…何が？」

「資料だよ。何か隠してるだろ」

風華が何かを言う前に、口を塞ぐ。

気付いていないなら、何か無神経なことを言ってしまう可能性もある。

「…ふう。紅葉には隠し事は出来ないんだね」

「当たり前だ。いくら演技が上手くても、心の動揺は隠せないだろ」

「完璧だと思ったんだけどなあ…」

「何を隠してるんだ？」

「うん。これの一卷前にも、夜魔族…というか、魔霊族のことが書いてあったんだ。ただし、そっちは魔霊族以外の人からの情報」

「……………」

「魔霊族はね、一方的な迫害を受けてたみたいなんだ。西洋でも数が少ないし、当事者からしてみればわけの分からない噂も出回ってるし。これは何十年か前の資料なんだけど、このときにもすでに東へ東へと逃げてきてたみたいだよ」

「じゃあ…」

「うん。この子がここにいてるってことは、魔霊族の一部…あるいは、全体がここまで逃げてきてるってことだね。海まで越えて…」

「そうか…」

風華の口を塞いでいた手を離す。

すると、かろうじて残っていた力も抜け、そのまま泣き始めてしまった。

「お前が泣いても仕方ないだろ」

「だって…だって…」

「こいつがどういう経緯でここにいるかは知らないが、少なくともそんな顔で迎えられても喜ばないのは確実だ。それとも、お前は嬉しいのか」

「嬉しくないけど…」

「じゃあ、泣くんじゃない。同情ほど無駄なことはないからな」
「…うん」

風華は涙を拭いて。

そして、そつと女の子の頬に触れる。

…翔にも少し反応があったみたいだ。

よし、あとは底抜けの明るさを誇る、自慢のチビたちが起きてくるのを待つだけだな。

「ふぁ……」

「お前の目が覚めてもなぁ……」

「ん？」

「この子だよ」

「んー？んー、夜魔族？」

「なんだ、知ってるのか」

「んー……。さつき夢に出てきた」

「話してたのが聞こえてたのか……」

「そうだね……。桐華って、割と聞いてるよ」

「変わった特技だね……」

「それほどでもないよ。それより、遙」

「うん。用意してあるよ」

「どうぞ、冷茶です」

「ありがと……。って、冷たっ！」

「さつきまで氷が入ってたからね。どう？目、覚めたでしょ」

「うう……。びっくりするじゃない……。先に言っておいてよ……」

「言ったら効果が薄れるじゃない。それに、翔も冷茶って言うてたでしょ」

「冷たすぎるよ！」

そう文句を言いながらも、少しずつ飲んでいく。
やっぱり、背に腹は代えられないということか。

「翔。遙がこんなことしたら、止めてもいいんだよ？」

「止めてほしいの間違いだろ」

「いや、まあ……。うん……」

「そうですね。また考えておきます」

「頼んだよ…」

遠回しに断られていることに気付いてないんだろうな。

遙に目で合図を送ると、困ったように笑う。

…まあ、その素直なところが、桐華の良いところなんだけど。

「あつ」

「何？起きた？」

「いや、お茶菓子がないと思って」

「……………」

「あたっ!？」

「勝手に自分で取ってきなさい!」

「うう…。殴らなくなっただけじゃない…」

「ふん」

桐華は思いつき殴られた頭をさすりながら、部屋を出ていった。
翔も立とうとしたけど、遙に止められて。

「行かなくていいよ。甘やかしちゃダメ」

「ついていけただけなのに…。それは甘やかすって言うのか？」

「言うよ。どうせ、何か愚痴を聞かされるだけだろうし」

「まあ、それはそうかもしれないな」

「あはは…。桐華さんも大変だね…」

「大変なのは大変だろうけど、一番気楽なのも事実だと思うよ」

「仕事はほとんど遙任せだからな」

「うん」

「でも、団長として、やらないといけないこともあるんでしょ？」

「そうだね。いつも明るく。でも、たまに怒ったりして。団長らしい振る舞いってのは、私たちが考えてるより、案外難しいのかもしれない」

「うん。桐華さんって、やっぱりすごいんだね」

「んー。それとこれとは話が別かな」

「ええ…」

口ではそう言うけど、遙もきつと同じ考えだろう。

遙も、桐華を団長として尊敬してるんだから。

桐華が大欠伸をしたところに、食べさしの煎餅の欠片を投げ入れる。すると、怪訝な顔をして、舌を出してそれを乗せて確認する。

「びつくりした…。お煎餅か…」

そして、ガリガリと噛み下す。

…こいつは、なんで煎餅が口の中に飛び込んできたのか気にならないだろうか。

「お名前は？」

「サン」

「サン？」

「うん…。ふあ…」

「ふあ…」

またサンにつられて大欠伸をする桐華の口に、また煎餅の欠片を投げ入れる。

すると、さっきとまた同じことをして、煎餅を食べた。
ある意味、才能だな。

「どこから来たの？」

「んー。山」

「川」

「え？」

「いや…なんでもない」

「……？」

「山って、随分粗い説明だね…。具体的に、どっちから来たとかは分かる？」

「んー…後ろ」

「そっかぁ…。後ろかぁ…」

お手上げだな、こりゃ。

どこから来たのかを聞き出すのは無理そうだ。
またサンは欠伸をして。

「お父さんは？お母さんは？」

「お父さん…は分かんない。お母さんは、ここにいますよ」

そして、私に抱きつく。

小さな翼をパタパタとはためかせて。

「またオレか」

「いいじゃない」

「いいけどな…」

赤い目で見上げてくる。

ニコリと笑うと、鋭い牙が目立った。
と、気になるところが見つかった。

サンの口に指を入れて、確かめる。

「うにゅ…」

「何してるの？」

「ほら、見てみるよ」

「んー？何かあるの？」

「あつ、二牙症だね」

「ニガシヨウ…？何それ」

「望にでも教えてもらえ」

「望…。教えて」

「桐華は、もう少し大人としての威厳を高めるべきだね」

「いいじゃない、別に。知らないことを教わるのは悪いことじゃないでしょ？それに、自分の立場がどうか、相手が誰であるのかわかんない。大人が子供に教わるうとも、子供が大人に教わるうとも、その実は変わらない。知らなかったことを知るっていうのが大切なんだから」

「んー…。なんか、それっぽく聞こえてしまった…」

「ぼくだって、いつものほほんとしてるわけじゃないんだよ」

「たまに真面目になるのが、一番対処しにくいよ」

「長い付き合いじゃない。いい加減に慣れてよ」

「はいはい」

「それで、望。ニガシヨウって何なの？」

「えつとね、牙がふたつあることだよ」

「二牙症か…。牙がふたつあるって？」

「原因は分からないけど、珍しいってほどでもないのかな。望もそうだし、姉ちゃんも二牙症だったよね」

「ああ」

「とにかく、症例は少ないよ」

「ふうん…」

サンの頬を引っ張ると、不機嫌そうな顔をする。
でも、ある程度は口の中を見ておく。

虫歯はないし、まだ乳歯も混じってはいるが、綺麗な歯をしている。
歯並びも良いみたいだし、言うことなしだな。

…点検が終わって、しばらくサンの好きなようにさせていると、甘噛みを始めた。

夜魔も甘噛みをするんだな。

頭を撫でてやると、嬉しそうに足をパタパタさせて。

大人数で食べるのに慣れているのか、それとも全く物怖じしない性格なのか。

あるいは、自分と同じくらいの子供がたくさんいるからか。

とにかくサンは、ずっと前から一緒にいたような、そんな自然な様子で夕飯を食べていた。

「サン。病み上がりなんだから、もつと軽いものを食べるよ」

「……？」

「病み上がりと決まったわけじゃないだろ。ただ寝てただけだし、身体の調子が悪いところもないみたいだし」

「そうだけど……」

「ほら、葛葉のことも気に掛けてやれ。かなり雑に食べてるぞ」

「えっ、あつ。葛葉、もうちょっと前に座れ」

「んー」

「また溢してるぞ。はあ……。明日にでも、箸の特訓をしないとイケないな」

「そうだな。いつまでも匙を使ってちゃ、格好つかないし」

「紅葉、手伝ってくれるか？」

「覚えてたらな」

「はあ……」

ため息をつきながら、葛葉の溢したものを丁寧に拾って、自分の皿に入れる。

そうしてる間にも、葛葉はまた溢して。

…それにしても、美希、食べこぼしを集めるの、割と楽しそうだな。葛葉の箸は上達するんだろうか。

「そうだ。旅団天照はいつまでここにいるんだ？」

「さあな。仕事が入り次第だろ。前もそうだったから。いちおうルクレイの中樞だし、情報を集めるのにも都合がいいし。…ここにいられたら困るのか？」

「いや、そうじゃないんだ。むしろ、いてくれた方が、私の料理修行が捗る」

「ああ…。そういうことか…」

「そういうことだ」

驚くほどに勉強熱心だな。

日々是精進也…ということだろうか。
見習わないとな。

「サン。ほら、これを食べてみる」

「うん」

「美味しいか？」

「うん。美味しいよ」

「そうか。これは葛葉も美味しいって言ってくれたんだ」

「ふうん」

「明日も美味しいものを作ってやるからな」

「うん！」

元氣よく返事をするサンの頭を撫でて。

その笑う様子を見て顔が綻びそうになるのを、精一杯取り繕っている。

…美希の料理修行は、若干チビたち寄りになりそうだな。

まあ、それはそれでいいけど。

カタカタと食器を片付ける音が、ほとんど誰もいなくなった広間に

響く。

いつも通り月を見ていると、二人、こちらに近付いてくる気配。

「どうしたんだ？」

「お母さんが、部屋にいなかったから」

「そうか。迷わなかったか？」

「うん。望お姉ちゃんと一緒に来たから」

「そうだな。優しいお姉ちゃんがいるんだっただな」

「うん」

サンはフワリと膝に乗ると、足をパタパタさせる。
望は横に座って。

「お母さん、また月を見てたの？」

「ああ。綺麗だろ？」

「うん」

「サンね、お月さまが好きだよ」

「そうか」

「お日さまも好きだけど、お月さまが好き」

「なんでだ？」

「お月さまが出たらね、お外に出られるから。お外はね、とっても
広くて大きいんだよ」

「そうだな。外の世界は、私たちが思ってるより広くて、私たちが
思ってるよりたくさんのものに溢れている」

「うん。だから、サンはお月さまが好き」

「：サン」

「なあに？」

「なんで昼には外に出ないんだ？」

「お昼は危ないって言われたの。悪い人がいるから」

「誰に言われたんだ？」

「んー…？分かんない…」
「そうか…」

昼間に屋根縁で寝てたところを見つけたんだし、日光に弱いからなるだけ当たらせないように…とかではなさそうだな。
やはり、西洋での迫害の記憶が、純粹無垢な子供に今も受け継がれているのか…。

「…サン。もう昼も夜も危なくなんかないぞ。悪い人が来たら、お母さんがやつつけてやるからな。だから、たくさん遊ぶといい」
「ホントに？」

「ああ。ホントだ」

「じゃあ、今日は夜のお散歩はやめて、早く寝なくちゃ」

「夜の散歩？」

「うん。お城の周りをね、グルッて回るの。それで、新しいことを何個見つけられるか数えるんだ。今の最高記録は、十個だよ」

「そうか、十個か」

夜しか外に出ないのでは、それくらいしか楽しみがないんだろう。
毎日、外に出られるのはそんな短い間だけ。

それでも、ちゃんと楽しみを見つけて。

遅しいな、この子は。

…それより、城の周りを回るとか言っただけだったか？

どこの城だろうか。

もしかして、ここか…？

「昨日はね、知らないお姉ちゃんと会ったんだよ。お別れするときに飴を貰ったんだけど、齒磨きをしたあとだったから食べられなかったんだ」

「ふうん」

「それでね、いつもの銀色の龍が門の前で待っていてくれたんだ。サンのお友達だよ」

「銀色の龍って、あいつのことか？」

「うん。あの龍だよ」

サンが身を乗り出して見るから、落ちないように支えて。
…翼もあるし、もしかしたらいらないかもしれないけど。

「あの龍は、セトっていうんだよ」

「セト」

「うん。お姉ちゃんの友達でもあるんだよ」

「望お姉ちゃんのこと？」

「そうだよ。セトは優しいから、みんな友達になっちゃうんだ」

「うん。サンもお友達だよ」

「そうだね」

「えへへ」

望に撫でられて嬉しそうに笑う。

それにつられて、望も笑っているようだった。

「あっ」

「ん？どうした？」

「早く寝ないと、明日はお昼にお外に出られる日だから」

「そうだな。でも、焦ることはない。これからは、いつでも外に出ていいんだから」

「これから、いっぱい遊ぼう。楽しいこと、たくさん教えてあげるから」

「うん！」

サンは膝から飛び降りると、私の手を引っ張って。

望に合図をして、窓から降りる。

「隊長、ごゆるりと」

「ああ。お前も早く寝るんだぞ」

「はい。了解です」

「早く〜」

「はいはい」

サンに急かされ、広間を出る。

よっぽど楽しみなんだな。

ワクワクして寝られない…なんてことにならなければいいけど。

…新しく加わった小さな足音は、なぜか懐かしいようなかんじがした。

「ねえ、速く！」

「そんなに張り切ることもないだろ……。ふあ……。まだ夜明け前だぞ……」

「でも、速くしないと朝が来ちゃうよ！」

「分かった分かった……」

サンに叩き起こされて、頭の中はまだ眠っているみたいだ……。さつきから欠伸が止まらない……。

冷たい外気に触れれば目も覚めるかと思ったけど、全然ダメだな……。

「あ、隊長。厠ですか？」

「いや……。広場だ……」

「広場？夜明けまで、あと半刻はありますよ？」

「分かってる……」

「ねえ、お母さん！」

「……サンちゃんですか」

「ああ……。日の出てる間に外へ出ていって言ったから、張り切ってるんだ……」

「日の出てる間……？なんでです？」

「そういう事情の子もいるということだ……」

「はあ。よく分かりませんが、寝不足には気を付けてください」

「もう寝不足だ……」

「それもそうですね……。では、私は夜勤がまだありますので」

「ああ。ご苦労様……」

「ありがとございます」

そして、孝則は見回りに戻る。

…あいつにサンの相手を頼めばよかったのかもしれない。
まあいいけど…。

「ん？サン？」

気付けば、サンの姿はどこにもなかった。

先に行ったのか？

いや…

「そこか」

「わわっ！」

「変わった特技だな。姿を消すなんて聞いたことないぞ」

「うう…。なんで見つかったの？いつも絶対に見つからないのに…」

「姿は見えなくとも、気配は分かる。完璧を目指すなら、気配も消さないとな」

「うう…。ケハイ…」

「まあ、気配の消し方は追々教えていこうか」

「むう…」

宙吊りにされてバタバタと暴れるサンを放り投げる。

そのまま上手く着地すると、また走り出して。

元気なやつだ。

…それにしても、あれは姿を消すと言うより、闇に溶けこんでるようなかんじだった。

何なんだろうな、あれは。

「速く！」

「はいはい…」

まあ何にせよ、術式とかその辺のオレが知らない力を使ってるんだ

ろくな。

…また楽しみが増えたみたいだ。

広場では、やはりというか、セトが寝ていた。
近付くと、うつすら目を開けて。

「ウルル…」

「サンがな。外で遊びたいって言うから」

「……………」

「そうだな。まあ、門は全部閉まってるし、夜勤組もいるから」

「オン…」

「うん」

一度欠伸をして、セトのたてがみに身体を埋める。

セトは大きいため息をつく、私が寝やすいように体勢を変えてくれた。

「ありがとう」

「ウルル…」

サンの楽しそうな笑い声が聞こえる。

明日香か、蓮と伊織の双子でも見つけたんだろう。

遊んでやれなくて残念だけど、途中で寝てしまうわけにもいかないからな。

とりあえず、お休み…。

セトがモゾモゾと動いた。

同時に、怒鳴り声も聞こえる。

「どうした」

「オオ……」

「ん？」

夜はまだ明けてないらしい。

でも、向こうの山の稜線は光を帯びてきている。

「誰？悪いことをする子は！」

「うええ……。ごめんなさい……」

「なんだ、香具夜。どうした」

「お母さん……」

「あつ、紅葉！遊ばせるなら、ちゃんと見張つてよ！」

「起き抜けに怒鳴るなよ……。サンが何かしたなら、まずはそれを明確にしろ」

「はあ……。さっき見回りをしてたら、厨房で音がするから見に行ったのよ」

「……だいたい話は見えたけど。それで？」

「そしたら、今日の調理当番が仕込んでた朝ごはんを食べてたの」

「……………」

「それで、怒ろうとしたら逃げて」

「で、ここで捕まったのか」

「うん。紅葉に助けを求めようとしたんじゃない？」

「そうなのか？」

「うう……」

「はあ……。あのな、サン。お腹が空いてるのは分かる。美味しそうに匂いもするし、つまみ食いをしたい気持ちも分かる。でも、怒られたとか怒られそうだからって、逃げたらダメだ。香具夜だって、逃げなければこんなには怒らない。そうだよな？」

「うん」

「分かるか？逃げるっていうのは、自分の悪いところから目を逸らすってことだ。逃げていれば自分の悪いところは見えないし、その方が楽だろう。でもな、それではいつまで経っても成長しない。直さないといけないところが見えないんだから」

「でも、怒られるのはイヤ…」

「怒られるときは怒られる。嫌だからといって逃げるんじゃない、次に怒られないようにするんだ。じゃあ、それはどうすれば出来る？」

「うーん…」

「難しいことじゃない。逃げたら、また同じことをやってしまうんだ。となると？」

「ちゃんと怒られる…？」

「そうだ。よく分かったな」

「えへへ」

「自分の悪かった部分をきちんと見直して、次に間違わないようにする。そうすれば、怒られることも少なくなっていく。一石二鳥ということだな」

「うん」

サンは小さな手をグツと握ると、香具夜の方を向いて。

そのちよつとした迫力に、さっきまで怒っていた香具夜も一瞬たじろいだ。

「香具夜お姉ちゃん！」

「え、ええ？」

「逃げちゃって、ごめんなさい…。今からちゃんと怒られるから、怒って！」

「ええ…。困ったなあ…」

「ふふ、怒ってやれよ。サンもこう言ってるんだし」

「そんなこと言われても、もう気も削げたし…」

「香具夜お姉ちゃん！怒ってくれないと、サン、また怒られちゃうの！」

「あー、あはは…。どうしょ…」

怒ってほしいサンに、もう怒る気はない香具夜。

サンは目をキラキラと輝かせて。

香具夜は何か呻きながら頭を掻いたり。

…面白いから、もう少し見ておこうか。

「ふぁ…。眠い…」

「ここ二日くらい見なかったけど、どこにいたんだよ」

「どこって…自分の部屋だよ…」

「答えは出たのか？」

「んー。まあね」

「ほう」

「ボクはボクであることにしたよ。それ以外の何にもなれないから」

「…そうか」

「うん」

桜はそのまま座り込んで、洗濯物に手を掛ける。

…桜は桜だ。

それは変わらないが、どうやら少し成長したところもあるみたいだな。

「うわっ、石鹸落とした！」

「……………」

「あ、土付いた…」

「今日はえらく不器用だな、お前…」

「うう…。こんなはずじゃ…」

「まったく…」

「うう…」

「ほら、こっちに貸してみろ」

「……………」

土の付いた洗濯物をもう一度洗い直す。

桜は結構張り切っていたのに、すっかりしょげてしまって。

「さて、仕切り直しだな」
「うん…」

まあ、今ので余計な力も抜けただろう。
それにしても、なんで風華は来てないんだろうか。
寝坊か…？

洗濯物が終わって部屋に戻ると、風華はまだ布団にくるまって寝ていた。

チビたちは…もう遊びに行つたみたいだな。

「風華、起きなよ。いつまで寝てるの？」

「……………」

「風華？」

「…何」

「うわっ、怖っ！」

「もう…。五月蠅いなあ…」

「どうしたんだ。いつになく不機嫌だな」

「気分が悪いの…」

「二日酔い？」

「違う！姉ちゃんと約束したんだから…」

「そっか…。ごめん…」

「……………」

返事の代わりにため息をつく。

約束、ちゃんと守ってくれてるんだな。

「それで？何が原因なんだ」

「うーん…。貧血だと思うんだけど…」

「貧血？月のものか」

「違う…。けど、貧血…」

「ちゃんと鉄分を摂ってるのか？」

「摂ってるよ…。医者の不養生なんて言われたくないし…」

「ふうん…。じゃあ、なんで貧血なんだろうな」

「うう…」

「ん？」

風華が寝返りを打ったとき、何か見えた気がした。
首筋に…。

「えっ？」

「待て。ここ」

「あ、ホントだ。なんだろ」

「傷の痕だろうな」

「き、傷？そんなところ、怪我したことなんてないよ」

「そりゃそうだろ。それに、これは怪我の傷じゃない。牙…だな」

「牙？」

「ああ」

しかも、この歯形は…。

とりあえず、医務班に報告しておいた方がいいだろうな。

「桜、医療室に行ってくれ」

「うん。いろはねえは？」

「オレは犯人を捕まえてくるよ」

「え？犯人？」

「ああ」

ちょうどあそこにいる。

さて…あのイタズラ娘は、今度は何をしたのかな…。

なぜか嬉しそうに笑っているサン。

その横で、美希が締まりのない顔をして。

「なんで医務班を連れてこなかったんだ」

「だって…」

「まあいいじゃないか。私だって、旅をしていた身だ。ある程度の診断は出来る」

「はあ…。もういいよ…。じゃあ、サン。こっちに来い」
「うん！」

サンはパタパタと走ってくると、私の膝の上に座る。

…これから何が起きるか、分かってないようだな。

「サン。このお姉ちゃんは分かるな？」

「うん。風華お姉ちゃん」

「そうだ。それで、なんで寝込んでるか分かるか？」

「……？」

「ここを見る」

さっきの傷痕を見せる。

サンは興味深そうにそれを眺めて。

「これ、お前だろ」

「うん」

「えっ、ホントに？」

「桜。少し黙っててくれ」

「はい…」

「サン。なんで、こんなところに噛みついたんだ」

「だって…お腹が空いて…」

「腹が減って血でも吸うのか、お前は」

「うん。なんで？」

平然と言つてのけるな、こいつは…。

でも、これで原因は分かった。

「あのなあ。どれだけ飲んだのかは知らないけど、風華が寝込むほど飲むつてのはどういうことなんだ？お前は、加減も出来ないのか」

「でも…」

「でもないだろ。サン。お前がやったことで、お前だけが怒られるのはいい。朝にも言った通りだ。けど、これは違う。お前のやったことで苦しんでる人がいるんだ。それは許しがたいことだし、オレも今は本気で怒ってる。分かってるか？」

「……………」

「黙つてたら分からないだろ」

「…はい」

「何が”はい”なんだ。言ってみろ」

「い、紅葉…」

「桜に黙つてると言つたはずだ。それはお前も変わらない」

「……………」

「サン。言ってみろ」

「サンのせいで、風華お姉ちゃんがしんどくなっちゃったこと…」

「そうだ。それで？やることがあるんじゃないのか」

「……………」

サンは風華のところまで行くと、モゴモゴと口の中で言葉を噛み砕く。

そして、意を決したように翼を広げて。

「ごめんなさい…風華お姉ちゃん…」

「…うん。いいよ、もう」

「うん…」

「まったく…」

サンの頭を撫でてやると、我慢してたものが一気に込み上げてきたようで。

こちらに振り向いて抱きついたかと思うと、大粒の涙を流して泣き始めた。

「うええ…ごめんなさい…。風華お姉ちゃん…お母さん…」

「はあ…。仕方ないやつだな、本当に。反省してるか？」

「うん…うん…」

「だとさ、風華」

「私はもう許してあげたから…」

「そうだな。じゃあ、私も今日のところは許してやろう」

「うつ…うつ…」

泣きじゃくるサンの背中をゆっくりと叩いてやる。

これで、またひとつ成長したということか。

桜も美希も、終わった今も話し出せない様子で。

…私が威嚇したのが、まだ残ってるのかもしれないけど。

「ねえ、どうということなの？」

「何が」

「何がじゃないでしょ。サンが血を吸ってたって…」

「蚊は血を吸う。サンも血を吸うんだろ」

「サンは蚊じゃないし…」

「サンは夜魔族なんだろう？夜魔族はそういう種族だ」

「えっ。美希、知ってるの？」

「自慢じゃないが、私はいろんなところを旅してきた。秘村と呼ばれる集落にも行ったことがある。その秘村のひとつに、夜魔族の集落もあつたということだ」

「なんだ。美希が知ってたなら、わざわざ天照の古文書を調べる必要もなかったな」

「異国漫遊記か？」

「それも知ってるのか…」

「え？ねえ、どうということ？」

「異国漫遊記という古文書に、夜魔族のことが書いてあつたんだ。その夜魔族とサンの容姿が一致したから、サンは夜魔族だろうと思つたんだが」

「ふうん…」

「話を戻して…。異国漫遊記の続編として、諸国巡礼記というのがあるんだ。同じ著者によるものだけど、異国漫遊記と違って、こっちは報告書のようなものなんだ。そして、編纂されたのは異国漫遊記の三十年もあと。その間に、各国を巡って詳しく調査をしたらしいんだ」

「各国というのは、日ノ本内の国か？」

「うん。それで、隅々まで調べた結果を書き記したのが、諸国巡礼記というわけだ」

「ほう」

「古文書だし半ば伝説と化してる部分もあるが、今でも存在してる場所もある。そういう場所を辿っていくと、地図には載っていない村に着くことがある。そういう場所が、秘村と言われる場所だ」

「興味深いな」

「ああ。それで、その秘村のひとつに夜魔族の村があったというわけだ」

「なるほどな」

「うーん…。地図に載ってない村が秘村なの？」

「言ってしまうえば、そうだな」

「ふうん…」

桜は顎に手を当てて。

昔にはあつたが、今はない村。

昔にもあつて、今もある村。

昔にはなかったが、今はある村。

不思議だな。

時の流れというのは。

「それで、夜魔族の村ってのは、どこにあったの？」

「それは言えないな。秘村だから」

「えー…」

「でも、ルクレイの中にある…とだけ言っておこうかな」

「えっ、ルクレイ？」

「夜魔族は、もともと西洋にいた種族だが、迫害にあつて故郷を追われた。それで、新天地を求めてやってきたのが日ノ本というわけだ。夜魔族の秘村とは言ったが、そこでは他の種族も暮らしているみんな、お互いを支えあつて生きていた」

「理想郷…というわけか」

「いや、理想郷ではない。あそこは現実に存在する村だ。理想なん

かじゃなく、現実の…」

「じゃあ、ボクたちにも出来るよね」

「ああ。必ずな」

現実と理想はかけ離れたもの。

しかし、理想が現実として存在するなら、それは手の届く範囲にあるということだ。

私たちにも出来る。

必ず。

「ところで、結局、夜魔族のこと、聞けてないよね」

「まったく…。少しは余韻に浸らせるよ…」

「ええ…」

「まあ、もともとはそこだったからな。話していこうか」

美希は一度深呼吸をして、外を見る。

窓から、今回はそれほどお咎めもなく釈放されたサンが、太陽の光の下でみんなと駆け回る様子が見てとれた。

「夜魔族は、基本的に私たちとは変わらない。でも、月が昇っている間は違う。身体が疼いて、新鮮な血が飲みたくなるそうさ。それこそ、吸血鬼のように」

「えっ…」

「大人になればなるほど必要量も減り、成人する頃にはほんの少し、舐める程度で満足出来るようだ。けど、子供の間、特にサンみたいに遊び盛りの子供は、今回みたいに相手が貧血を起こすくらいに吸わないと満足出来ないらしい」

「ほう」

「あと、なぜか傷口はすぐに塞がるらしい。…とまあ、私が聞いた話はこんなものだ」

「なるほど…。天然の月光病というわけか…」

「ああ」

「月光病って、いろはねえの目が見えなくなったりするあれ？」

「そうだな」

「不思議な病気もあるものだな。月の光で発症するなんて」

「いや、月の光自体は関係ない。月が、オレたちを見守っている時間かどうかは鍵なんだ」

「そうなのか？」

「ああ」

「ふうん…。それにしても、似てるな」

「何に」

「夜魔族の考え方に」

「ん？」

「夜魔族は、決して月を悪いようには言わない。むしろ、感謝しているくらいだった。月のせいで病気を発症するにも関わらず、だ」

「そりゃそうだろう。月のお陰で、違う世界が見えるんだ。オレは目が見えなくなること、みんなの優しさに触れることが出来る。夜魔だって、症状は違えど同じようなことを考えているはずだ」

「…そうか。そうかもしれないな」

「ああ」

「ん…？ボクは、なんだか分からなくなってきた…」

「ふふふ。じゃあ、今聞いたことを何回も反芻して、ゆっくりと理解するといい。今すぐ分かる必要なんてないんだから」

「うーん…。分かったよ…」

「よしよし、良い子だ」

「むう…。ボクはもう子供じゃないよ！」

「おっと、これは失礼。お嬢さま」

「もう！バカにしてるでしょ！」

「分かるか？」

桜に殴られた。

思いつきり。

それでも笑いをこらえられず。

最後には、三人とも笑っていて。

「はぁ、血ですか」

「何か良い案はないか？」

「そう言われましてもねえ……」

「そうか……。そうだよな……」

「すみません、力になれなくて……」

「いや、大量に血を手に入れる方法なんて、普通は思い付かないだろうし」

「うーん……」

普通は思い付かないよな……。

しかし、このまま放置して貧血の患者を増やすわけにもいかないし……。

「何の話をしてるの？」

「ん？ 遙か」

「今日の当番は修？ 私にもお昼ごはんください」

「はい、ただいま。朝ごはんも食べにきてくれたら嬉しかったんですが」

「んー。桐華が野外炊飯を始めちゃったからねえ」

「野外炊飯？ また突発的だな」

「いつものことだよ。……それで？ 何の相談だったの？」

「血の入手方法についてだ」

「血？ ……ああ、サンね」

「調べたのか？」

「うん。秘村の資料から、翔が見つけてきたんだ。夜魔族が暮らす村の情報をね」

「秘村の情報まであるのか」

「当たり前じゃない。まあ、秘村って言うくらいだし、最重要機密ではあるんだけど」

「ふうん…」

「ヒソンってのは何なんです？僕は、そんな資料は見たことないんですが」

「言ってしまえば、秘密の村だよ。今の地図には載ってない村。たまに、昔の地図とか古文書とかに書いてるときもあるんだけど。だいたいは希少な種族がひっそりと生活してたりするんだ」

「へえ」。希少な種族ってというのは、たとえば？」

「サンみたいな夜魔族もそうだし、この辺にはいっぱいいるみたいだけど、龍なんかもそうだよ。種族的に人口は多いけど、その中でも稀な銀狼とか白狼とかもね」

「…この城は珍種の溜まり場だな」

「はは、そうだね。まあ、私は紅葉が一番珍種だと思うけど」

「どういう意味だ」

「銀狼で、しかも幼少期は本当に狼だったなんて。世の中広しと言えども紅葉しかないでしょ。珍種中の珍種だよ」

「お前なあ…」

「ふふふ。隊長のは、種族じゃなくて境遇だと思いますよ。だから、珍種というには、いささか問題があるんじゃないですか？」

「そうだそうだ」

「じゃあ、珍境遇中の珍境遇？」

「何にでも珍を付けるな！」

遙は困ったように笑って、肩をすくめる。

…困ってるのはオレの方だよ。

まったく…。

「遙さん、出来ましたよ」

「おっ、ありがとう」

「いえいえ」

「さつさと食べて、どこかに行ってしまえ」

「口の悪いお方だ、まったく」

「あ、どこかに行ってしまうといえば、仕事はまだ入ってこないのか？」

「あー、うん。ラズイン旅団も運輸業を始めたみたいだからね」

「商売敵というわけか」

「んー、厳密に言うとは違うけど。向こうは運輸、こちらは護衛だから」

「ふうん…。よく分からないな」

「こっちの方が大規模なの。重要人物から旅団まで、ありとあらゆるものを対象としてる。一方で、向こうは多くても一家族。ただし、数は揃えてるみたいだけどね」

「ほう。それで、なんで住み分けが出来ないんだ」

「私たちは主に要人や旅団の護衛でだけで、そういう小口の護衛もやってないわけじゃないから。ついこの前にラズイン旅団が連れて行ったから、お客さんがいないんだよ」

「ふうん。話し合ったりしないのか？」

「タルニアさんは、どこかの誰かさんと違って忙しい人だからね。まあ、今度合流したときに、クノさんかカルアさんに話してみるつもりだよ」

「そうか」

「うん。でもまあ、向こうも空車を埋めるために入れてるってかんじなのかな。空荷が一番の損だからね。特に、ああいう行商が主な旅団にとっては」

「なんで空車が出るんだよ。旅団を拡張したなんて話は聞かないぞ」
「んー。詳しい事情は分からないけど。でも、最近は裏稼業の方が忙しいみたい」

「ふうん…。なんでまた…」

「さあ…ね」

盗賊が大規模に動くときは、世の中が乱れているときだ。

天照も、すでにその情報を手に入れているんだろう。

遙の顔は曇っていた。

…また戦が始まったというのか。

哀しみの連鎖を生む結果にしかないのに…。

「まあ、義賊さまも頑張ってくれてるんだし、私たちは私たちで出来ることをすればいいんだよ。…それしかないしね。私たちは、あまりにも弱すぎる」

「そして、親は子を喪い、子は親を喪う」

「そう深刻にならないの。…なるようにしかないんだから」

「なるようにしかない。哀しい言葉だな」

「…うん」

「でも、私は幸せですよ。戦のせいで、親も兄弟もみんな喪ったけど…。けど、旅団天照やこのお城にたどり着けた。新しい親や兄弟が温かく迎えてくれた。戦が良いとは言いませんが、肉親を喪うということが不幸せに直結するわけでもないと思うんです。隊長も遙さんも、そうなんじゃないですか？」

「そうだねえ…。良いこと言うじゃない。さすがだね！」

「い、いえ…。恐縮です…」

「あはは。恐縮なんて、ねえ？」

遙は笑いながら、バンバンと派手に修の背中を叩く。

掛け値なしの笑顔で。

「ん。こんな名言を平気で言えるから、美味しい料理を作れるんだね」

「なんか、バカにされてる気分ですね…」

「してないって。ほら、自分でも食べてみなよ。美味しいからさ」

「い、いいですって…」

「悔しいなあ。なんでこっちに移ったのよ。まったく、惜しい人を亡くした」

「まだ死んでません!」「ここは墓場じゃないぞ」

「はあ…。私に、もう少し人を見る目があればなあ…」

「あとの祭りだな」

「後日祭はいつ?」

「そんなのはない」

「修、戻る気はないの?」「ないですね。まだ」

「そつかあ…。まあ、いつでも戻ってきなよ」

「はい。分かってますよ」

「まあ、そんなことはないだろうけどな」

「分からないよ。ね、修?」

「そうですね。万が一ということもありますし」

「万が一では、こっちに分があるな」

「可能性がある限りは分からないよ」

譲らないな、遙も。

まあ、優秀な人材だからな。

自分の手元に優秀な者を置きたいというのは誰しも願うこと。

遙も私も、ご多分に洩れずということだ。

…修は遙に頬を引っ張られて、心なしか顔が赤くなってるようだった。

「なあ。どうしたらいいと思う？」

「……？」

「まあ、分からないだろうな」

頬を引っ張ると、伊織は嫌そうに首を振る。
でも、手を離すと慌ててすり寄ってきて。

「なんだよ」

「ウルル……」

「仕方のないやつだな」

「ワウ」

喉のところを掻いてやると、気持ち良さそうに目を細める。

しばらく撫でていると、次第にウトウトし始めて。

最後には眠ってしまった。

「お休み」

まだ意識はあったのか、パタリと尻尾を動かす。

そして、私の服をギュッと握って、今度こそ眠りに落ちていった。
……動けないじゃないか。

まあいいけどな。

「姉ちゃん……。お茶……」

「今ちよつと動けない」

「むう……」

「風華は何か良い案、ないか？」

「うーん……。献血……？」

「献血なあ…」

献血で集められた血は、何かもつと大切なことに使わないといけな
い気がする…。

いや、こつちも大切なことではあるけど…。

「うう…。サンが本当の吸血鬼だとは思わなかった…」

「いいじゃないか。別に」

「いいけど…」

「歳を重ねることに、吸血量も減るということだ。それまでの辛抱
だろ」

「ん…。でも、ほとんど毎日のことじゃない…。月が昇ったら吸
血鬼になるなんて…」

「何かしら対策はあるはずだ。それを見つけてくるしかないだろ」

「そうだけど…」

「風華は、サンのことが嫌いか？」

「嫌いじゃないけど…。可愛いし、優しいし…。でも、吸血鬼だっ
ていうのが…」

「なんだ。何か嫌な思い出でもあるのか」

「うーん…。昔、空姉ちゃんに悪ふざけで聞かされた話が未だに怖
くて…」

「どんな話だ」

「無実の罪で死刑になった男が、実は吸血鬼の手下で、主人である
吸血鬼が仇を討つために、裁判に関わった人を次々に殺していく話

…」

「はあ、なるほどな…」

冤罪を作り出した原因を探る、謎解き遊話のひとつだな…。

昔というのがいつなのかは分からないが、たぶん相当前、風華がま
だ小さい頃だろう。

まったく…。

なんて話を教え込むんだ…。

「あれはだな、冤罪を作った原因が分かるまで、どんどん話が進む遊話だ。それに、全くもって、小さな子供にする話じゃない」

「空姉ちゃん…」

「最後に殺される裁判官が自分自身であり、周りの人が次々と殺される中、自分の過ちを振り返るという設定の下、話が進められる。分かった時点で、時間は裁判のときまで戻される。そして、無罪判決とその根拠を述べる。正解であれば男の死刑は回避され、次の話へ進むことが出来る。間違えば、同じ時間が繰り返される。まあ、趣味の悪い話ではあるかもしれないが、冤罪回避、真犯人の特定、真犯人への有罪判決…と、全三部構成になってるんだ」

「へえ…。よく知ってるね」

「謎解き遊話の中でも特に有名な話だからな」

「ふうん…。でも、あの話以来、吸血鬼が怖くなって…」

「なるほどな」

さて、何か汚名を返上するような話はなかったかな…。
うーん…。

「姉ちゃんは、第三話の最後まで知ってるの？」

「ん？さっきの話か？」

「うん」

「まあな。昔、母さんと一緒に解いたんだ」

「ふうん…。それで、真犯人って誰なの？」

「それを言ったらつまらないだろ…」

「あ、そっか…」

「まあ、また今度話してやるよ」

「えっ、今話してよ」

「謎解き遊話というのはな、物語の中にしつかりと真実に繋がる手掛かりを入れておかないと成立しない。解けない謎を解けなんて、全く無理な話だからな。オレも随分昔に解いたきりだから、話のほとんども飛んでしまっている。そんな状態で話すことなんて出来ないよ」

「そつか…。残念…」

「まあ、天照なら、そういうのも集めてるかもしれないな」

「あ、そつか。じゃあ、あとで誰かに聞いてみよつと」

「そうだな」

「何の話をしてるんだ？」

「あ、翔」

翔が、器用に弥生とサンの二人を背負って、部屋に入ってきた。二人とも、遊び疲れて眠ってしまったようだ。

「よいしょつと…」

「謎解き遊話の話だよ。吸血鬼が出てくる話」

「ああ、あれ。面白いよな」

「私も姉ちゃんも昔に聞いたつきりだから、あんまり覚えてないんだけどね」

「へえ…。初めて聞いたとき、怖くなかった？」

「怖かった！」

「オレは、規則に則って予め謎解き遊話だって聞いてたから、あまり怖くなかったな」

「ええ…」

「俺も聞かされてたけど、かなり怖かった。話はどんどん進んでいくのに、真相が分からなくて…。焦れば焦るほど、答えもわからなくなるし…」

「でも、それが面白いんじゃないか」

「うん」

「私はその面白さを知らないで、ただ怖い思いをしてただけだったからなあ……」

「謎解き遊話だって知らされなかったのか？」

「そうだよ……。もう怖くて怖くて……」

「あ……。それは……」

「空も困ったやつだよな」

「空さんが、そんなことしたのか？」

「そうだよ……」

「ふうん……」

「予想外だったか？」

「いや、本当に見た目通りの人なんだなって思ってた」

「はは、確かに」

「もう……。私にとつては全く笑い事じゃないんだからね！」

「ああ、そうだったな」

「もう！他人事だと思って！」

「自分のことじゃないしな」

風華の頬を引っ張ると、キツとこちらを睨みながら首を振る。

離してみても、さすがにさっきのようにはいかなかった。

風華は余計に頬を膨らませるばかりで。

……しかし、隣で大笑いしてる翔はいいのだろうか。

ひたすら、私を睨んでいた。

「え？吸血鬼？ぼくは知らないなあ」

「風華。聞く相手が間違ってる」

「酷いなあ、紅葉は。ぼくだって、謎解き遊話くらいいくつか知ってるよ」

「たとえば？」

「んー…。八坂祐希の事件簿とか…」

「それは推理小説だろ。しかし、意外と最近のを読むんだな」

「むう…。どんなのだと思ったのよ」

「探偵グレンとか」

「あ、初めて読んだのはそれだよ。グレンが格好良くて、すっごくハマったなあ」

「やつぱり、ああいう渋いのも好みなんだな」

「桐華さんはお茶好きだからね」

「そうだねえ。八坂祐希が爽やか麦茶で、グレンが番茶かなあ」

「お茶で喻えるなよ…」

「え？だって、風華が…」

「風華は、お前のお茶好きを言ったただけだぞ」

「あれ？」

最中を啜えたまま、首を傾げる。

あまりに無防備なので最中を奪ってやると、不満そうに唸りながら、別の最中を手取る。

「美味しいな。この最中」

「ぼくが食べてたのに…」

「いいじゃないか。まだあるんだし」

「むう…」

「私にも、ひとつ頂戴」

「ほら。桐華とオレの食べさした」

「もつとちゃんとしたのを頂戴よ!」

「はあ…。仕方ないな」

「もつ…。何考えてるのよ…」

ため息をつく風華を見ている桐華の手から最中を取って。
それを風華に渡す。

「あつ!ぼくの!」

「…姉ちゃん、今日はなんだか桐華さんにイジワルだね」

「気のせいだろ」

「返して!ぼくの最中!」

「んう…。何…?」

「ほら。桐華が騒ぐから、サンが起きたじゃないか」

「ええっ!ぼくのせい!?!」

「んー…」

「あ…ごめんね、サン。最中、食べる?」

「うん…」

桐華から最中を貰うと、まだ半分寝ているのか、手に持ったままジツと見つめて。

首を傾げてみたり、翼をはためかせてみたりしている。

「あ。お茶がなくなっちゃった…。ちょっと淹れてくるね」

「ああ」

「最中、残しておいてよ!」

「分かった分かった」

「絶対だからね!」

「はいはい」

何回も念を押して、桐華は厨房へと走っていった。
あんなに急いで、転ばないといいけど…。

「ふぁ…」

「大欠伸だな」

「えへへ…」

「そら。ちよつとこっちに来てみる」

「うん」

最中を持ったまま、パタパタと少し小走り。
そして、勢いよく飛び込んできて、しっかりと抱きつく。

「よしよし」

「ん」

「ほら、ちゃんと座って」

「うん」

「最中、美味しいか？」

「うん。美味しいよ」

「そうか。それはよかった」

「えへへ」

頭を撫でてやると、嬉しそうに足をバタバタさせて。

…風華は、まだ少し距離を置いているようだった。

「サンね、夢を見たの」

「ん？どんな夢だ？」

「お母さんがね、サンをギュって抱き締めてくれるんだ！」

「へえ。こんな風にか？」

後ろから抱き締めてやると、その手をギュツと握りしめてくる。
でも、なぜだかは分からないけど、さっきまでとは全く違う雰囲気
になっていた。

「ギュッって抱き締めてくれてね、サンに何か言ってくれるの。で
も、聞こえなくて、何回も聞き直したんだけど、全然聞こえなくて
…。それでね、お母さん、どんどん消えていっちゃうの…。お母さ
ん…消えちゃって…サンがね…一人ぼっち…」

「サン…」

「お母さん…お母さあん…。消えちゃヤ…。ヤだよ…」

「オレは消えないから。ほら、ギュツて抱き締めてるだろ？手を握
ってるだろ？」

「うつ…うつ…。怖い…怖い…」

「落ち着け、サン。大丈夫だから」

とは言ったものの、サンは泣きじゃくるばかりで。

…もしかしたら、実の母親と壮絶な別れを経験したのかもしれない。
自分の心が押し潰されないように封印していた記憶が、少し漏れて
しまったのだろうか。

サンの小さな手は、強く、強く、私の手を握りしめていた。
と、風華が静かに深呼吸をしたかと思うと

「夕焼け空に何を望む。沈みゆく太陽、昇る月。夜明けの何を恐れ
ている。沈みゆく月、昇る太陽。我らは昼には生きられぬ。我らは
夜に怯えている」

「あ…。これ…」

「暗い夜道をただ一人。獣たちに迎えられ、歩みゆく。我らに明日
はあるのだろうか。我らに朝は来るのだろうか」

「……………」

「歩き疲れて座り込む。我らに光が与えられないのなら、歩く意味

も最早ない。静かに眠るときが来たようだ。このまま夢を見ようじゃないか。光輝く明日の夢」

風華は、また深く息をする。

何かを確かめるように。

一瞬、風華の瞳がサンのように真っ赤になった気がしたが……いや、違うか。

とりあえず、なぜか落ち着いて、また眠ってしまったサンを布団に寝かせる。

「姉ちゃん」

「ん？」

「私、分かった」

「何が？」

「サンは私の大切な家族なんだって」

「ああ」

「今更だなんて思うかもしれないけど、今更分かった。私は、サンのお姉ちゃんなんだって」

「そうか」

「うん。ありがとね、……」

「ん？」

「ううん、独り言」

「…そうか」

「ふふふ」

「なんだ、気持ち悪いやつだな」

「あつ。酷いよ、姉ちゃん」

「思ったことを言っただけだ」

「もう……。地がこんなのだから、判断が難しいよ……」

「……？何の判断だ」

「えへへ。秘密だよ！」

「……？」

本当に変なやつだ。

ずっとクスクス笑っていて。

廊下をバタバタと走る音も聞こえてきた。

風華が芦原留作道中記の冒頭を知っていた理由を聞くのは、また今度ということらしい。

…さて、サンの涙が染み込んだ最中を、いかにして桐華に食べさせるかが問題だな。

「ん？おかしいな…」

「自覚がないのか？」

「いや、いつも通りのつもりだけど…」

「そんなことないぞ」

「そうかな…」

唐揚げを取って、口に入れる。

んー…。

そんなに变か？

「いろはねえ！なんでボクのを盗るのさ！」

「ん？」

「そら。それがおかしいって言ってるんだ」

「いや、オレは自分のを取ったつもりなんだけど…」

「返してよ！一番おつきかったのに！」

「ああ…いや、すまない…。オレのを全部食べたらいいから…」

「もう…」

言われてみれば、何か変な気もする。

風華は、こっちを見てニヤニヤしてるし…。

いったい、何なんだ…。

「サン。他所見をするな」

「んー？」

「ほら、また溢して…」

「んー…」

「まったく…。お前は溢すのが得意だな」

「えへへ」

サンの服に付いたご飯粒を丁寧に集めて、何か幸せそうに口に含む。
…こいつの小さい子好きは果てしないな。

「む。紅葉、これはやらないぞ」

「いらないうて…」

「そうか。それならいい」

「はあ…」

これは…桜ではないな。

美希のでもない。

他の誰のでもないことを確認して、目の前にあった焼き鮭を食べる。

ふう…。

疲れるな…。

自分の部屋に戻り、屋根縁で夜風に当たっていると、隣に風華が座る。

もう布団を出ていいのだろうか。

私の手に自分の手を重ねてきて。

「どうしたんだ」

「うん。ちょっとね」

「……？」

「芦原留作道中記。びっくりした？」

「少しな」

「あれ、私じゃないんだ」

「ふうん」

「それはびっくりしないんだ」

「ちょっと違う雰囲気を感じられた気がしたからな。それが正しいか
ったということだ」

「なあんだ」

「それで、何だったんだ？何かに取り憑かれたのか？」

「まあね」

そして、イタズラっぽく笑う。

何か、含みがあるようなかんじがするのは気のせいだろうか。

「姉ちゃん」

「ん？」

「今は見えてるの？」

「ああ。まだ月も昇ってないじゃないか」

「うん」

「なんだ。目が赤いって言うのか？」

「うん。真っ赤だよ」

「え？」

「サンと同じ色。夜魔族の色」

「夜魔族？オレが？」

「正確に言っと、姉ちゃんじゃないけどね」

「何か知ってるのか？」

「んー。どうかな」

「知ってるんだな」

「まあ、うん」

遠くの方で、キラキラと光るものが見えた。
たぶんカイトだろうな。

望を置いて、どこに行ってたんだろうか。

「今日は星が綺麗だね」

「ああ。空気が澄んでる」

「天の川は、神様が流した涙なんだって。神様は泣き虫で、よく泣くんだ」

「”星の御子”カルアか」

「うん」

「この前に来たカルアは、えらく正反對なやつだけだな」

「そんなこと言っちゃ悪いよ」

「事実なんだから仕方ない」

「そうかもしれないけどさあ」

カイトは真っ直ぐこちらに向かってくる。

夜空の中ではひとときわ目立つのに、夜の闇を損なうことはなく。不思議な感じがした。

「あ。カイトだ」

「カイトだな」

「何してるんだろ」

「空を飛んでるんだろ」

「…そんなの、見たら分かるよ」

「そうか」

「もう…」

「二人して、相変わらず仲が良いようで何よりだ」

カイトは屋根縁の端に降りると、身体を震わせる。

火の粉ばパラパラと散って、床に落ちる前に消えてしまう。

「どこに行ってたんだ？」

「我が主の使いでな」

「我が主…というと望か」

「ああ」

「ラズイン旅団か？」

「なかなか勘が鋭いな」

「えっ、ラズイン旅団？望、手紙でも書いたの？」

「我が主の秘匿情報に関わることだな。まあ、そういうことだ」

「へえ。タルニアさんに書いてるの？」

「だから、我が主の秘匿に関わることだと言っているだろう」

「あはは、そうだった…」

「ところで、紅葉。その者はどうした」

「その者？どの者だ」

「気付いていないのか？」

「何に」

「ふむ…。まあいい。いちおう言っておくが、その赤い目は、お前に取り憑いた者の影響だ。…それに、それが出てきているということは、今日は月の姿を見ることが出来るだろうな」

「ん？なんでだ？」

「赤い月のことは知らないか？今日はその日だ」

「えっ、赤い月ってホントにあるの？ずっと伝説だと思ってた…」

「昔は頻繁に昇っていたのだが。最近では滅法見なくなってしまった」

「へえ…。赤い月かあ…」

「風華に見えらるゝも限らんど。もしかすると、普通の月にしか見えないかもしれない」

「なんで？」

「赤い月は、ある条件下の者にしか見えない。そういう特殊なものだ」

「ええ…。ある条件下って何なの？」

「さあな。私には分からない。知っているのは長老くらいのもんだよ」

「長老…？」

「”遥かな大地”クノ。ラズイン旅団の若大将もそんな名前だった

が」

「クノってというのが、長老なの？」

「ああ。私も何度か会ったことはあるのだが、真意が全く掴めない方だった」

「ふうん…。カイトでも苦手なものがあるんだね」

「いや、苦手なものではない。ただ、長老の前へ出るとな、自然と身体が感知する。この方には敵わない…とな」

「へえ…。なんか、会ってみたい気もする」

「まあ、また機会があればな」

「えっ、連れていつてくれるの？」

「機会があれば、と言ってるんだ」

「楽しみだなあ」

「私の話を聞いているのか？まったく…」

「ははは。まあ、楽しみにするくらい良いだろうさ」

「まあ…そうかもしれんな」

そう言くと、カイトは後ろに振り向いて、何かを確認するかのよう
に頷く。

そして、少し羽ばたいて屋根縁の反対側の端に移って。

「さあ、紅葉。その目にしっかり焼き付けるといい」

「え…？」

カイトがもともといた場所の遥か向こう。
山の上から、優しい光が射し込んでいて。

「ちえっ。赤くないなあ」

「はは、そんなに気安く誰にでも見えるものでもないさ」

「残念…。それより、姉ちゃ…ど、どうしたの？」

「え…？何が…？」

「泣いてるの…？」

「風華」

「あ…ごめん…」

カイトに言われ、なぜか謝る風華。

泣いてる…？

私は…泣いてるのか…？

「姉ちゃん…」

「いや…大丈夫だ…」

もう、月の姿を想像することもない。

本当の月を、今、私は、この目で、見ている。

泣いてるのであれば、今のこの気持ちを涙が代弁してくれているんだろう。

この、心の震えを…。

太陽の光が、山の稜線を青く縁取り始める。
月も、すでに見えなくなっていて。

「ふあ……。おはよ、姉ちゃん……」

「おはよう」

風華が起きてきた。

屋根縁のこちらまできて隣に座る。

その長い漆黒の髪が太陽の光に反射して、ところどころ銀色に光つて。

「もしかして、ずっと起きてた？」

「ああ」

「身体に悪いよ。一回寝なよ」

「いや、逆に冴えてしまつて。今は無理そうだ」

「そつか。ふあ……。無理はしないでね……」

「ああ。ありがとう。それより、貧血はどうだ。収まったか？」

「んー、大丈夫みたい。昨日、サンはどうだったの？」

「ぐっすり眠つてたよ。やっぱり月光病と同じみたいだな。赤い月の下では発症しないらしい。まあ、確認しそびれたといえば、そうなんだけど」

「そつか。でもまあ、吸血鬼のサンってちょっと見てみたいかも」

「昨日はあんなに怖がつてたくせに」

「うん。あれがただ怖いだけの話じゃないって分かったから。それに、物語の吸血鬼とサンは違うつて分かってたから」
「そつだな」

風華の頭を撫でると、ニツコリと笑って。
うん。

そうだな。

「ふぁ…。あはは、欠伸が止まんないや」

「風華こそ、もう一眠りしたらどうなんだ」

「んー…。そうだね。じゃあ、姉ちゃんの膝枕で…」

「どうぞ、お好きに」

「うん。お休み」

「お休み」

私の膝枕に横になると、もう一度笑って静かに目を閉じる。

…風華も眠れなかったのかな。

目の下に隈なんかこさえて。

もしかして、気を遣ってくれたんだろうか。

「ふぁ…」

風華の寝顔を見てると、私まで眠くなってきた。

夜明けまでもう少し。

ゆっくりと目を閉じて。

肩に重みを感じて目を覚ます。

見てみると、望が私の肩に寄り掛かって眠っていた。

そして、膝枕には風華ではなく葛葉がいて。

…わざわざ起きてきたんだろうか。

とりあえず、夜明けは過ぎていて、山の上から太陽が顔を覗かせていた。

「望、葛葉。起きろ」

「んう…」「んー…」

「望」

「あ…。お母さん…。おはよ…」

「おはよう」

「ふぁ…」

「起きられるか？」

「うん」

望は大きく伸びをして、一度身体を震わせる。

そして、目をパッチリと開けると、こっちを見てニコニコ笑って。

「えへへ」

「どうしたんだ？」

「早起き出来た」

「そうだな。早起き出来たな」

「うん！」

「ちよつと待つてろ。朝ごはんを食べにいこつ」

「うん」

葛葉は起きそうにもないから、抱えて部屋に戻る。

望もあとについてきて。

「ん？」

「え？」

「いや、なんでもない」

「うん」

風華がこっちにいる。

戻ったんだろうか。

とりあえず、葛葉を布団に寝かせて。

はだけている着物はしっかりと整えておく。

…また下着を脱いでるな。

暑いんだろうか。

近くに見当たらないので、そのままにしておく。

「よし。行こうか」

「うん」

望に手を伸ばすと、しっかりと握り返してくる。

まだまだ小さな手は、しかし、とても温かく。

そして、優しさに満ち溢れていた。

窓から顔を覗かせるセトに手を伸ばして。

すると、セトはその大きな舌の先で、望の頬を舐める。

「うわっ、ベタベタだよ…」

「ウルル…」

「えへへ。セトはおっきいね」

「……！」

「わわっ!？」

「ワウ！」

セトが望を押し退けた次の瞬間、伊織が飛び込んできた。
望は体勢を崩して、転びそうになるが、なんとか間一髪、抱き止めることが出来た。

「伊織！」

「ウウ……」

「オレに謝ってどうするんだ？あのな、今はセトが気付いたからよかったかもしれないけど、もし気付かないでお前と望とぶつかってたらどうする気だったんだ！」

「オオン……」

「だって勝手もない！」

「……………」

「お前の方が望より大きいし重たい。ぶつかれば、望は弾き飛ばされる。それからどう……」

「お母さん、望はなんともないから。だから……だから、伊織を怒ってあげないで……」

「……………」

……望の、今にも泣き出しそうな目を見ていると、怒る気持ちも削げてしまった。

本当は、もっときつく叱っておかないといけないんだけど……仕方ないな。

「はあ……。とにかく、必ず周りの状況を見ながら行動しろ。またこういうようなことがあったら、次こそは容赦しないからな」

「オオン……」

「そら、やることあるんじゃないか？」

「……………」

伊織は望の方に向き直ると、頭を下げながらゆっくりと近づく。そして、望のお腹に額を擦りつける。

「うん。分かった」

「オオ……」

「もう怒られるようなことをしちゃダメだよ」

「ワウ」

「期待は出来ないけどな」

「……………」

「事实は事実だ。まあ、オレだって怒りたくて怒ってるんじゃない。出来るだけ減らしてくれるとありがたいけどな」

「オオ……………」

「ゆっくりやっていけばいい。今日明日で出来ることでもないからな」

「伊織、頑張ってね」

「ウウ……………」

窮地から助けてもらった望に念を押されては、頑張らないわけにはいかないな。

どこことなく嫌な顔をしている伊織の鼻を弾く。

すると、小さくくしゃみをして身体をバタバタと震わせる。

…本当に、少しずつでも減らしていくてくれればいいんだけどな。

期待して待ってるよ。

相変わらずゆっくり起きてきた調理当番。

相変わらず仕込みだけはしていて、朝ごはんが出るまでは待たなかった。

「いや、もっと早く起きてほしいんだけど。」

とりあえず朝ごはんは済ませて、洗濯物へ。

「なんでだろね」

「唐突だな」

「今、ふと思ったから」

「ふうん…。それで、何が」

「最近、ちよつと早く終わるじゃない」

「そうか？」

「うん」

「じゃあ、それは望が手伝わってくれたからだろうな」

「あ、そうかも。偉いね、望は」

「えへへ」

利家の計らいか、洗濯物の量自体が減ってるんだけど。

でも、今日は望のお陰でさらに早く終わったというのも事実だ。風華に頭を撫でてもらって、嬉しそうに尻尾を振っている。

「姉ちゃんも、もう朝ごはん食べたんだよね」

「ああ」

「じゃあ、ちよつと下町まで付き合ってくれない？」

「いいけど、なんで」

「姉ちゃんと出掛けるのが楽しいから」

「そりゃどうも。それで、本当の目的は？」

「うん。行きたいところがあるんだ」

「そうか」

「あ、でも、姉ちゃんと出掛けるのが楽しいっていうのはホントだよ」

「分かってるよ」

「うん。あ、望も一緒に来る？ここで遊んでる？」

「一緒に行く」

「じゃあ、準備しに行こっか」

「うん！」

望は元気よく返事をする、城の方へ走っていった。途中で桐華とぶつかって転んでたけど、大丈夫かな…。

市場の大通りを途中で横に逸れ、路地の露天街を歩く。望はあちこち走り回って、いろんな店を覗いていた。

「し、しかし、本当にどうにもならないのか…？」

「どうにもならないよ。姉ちゃんだって女の子なんだから、女の子らしい着物を着ないと」

「え、衛士の服だって、男と女で別々じゃないか…」

「あれは制服でしょ。確かに可愛いけど…。でも、あれじゃダメ」

「は、羽織くらい着させてくれよ…。恥ずかしい…」

「ダメ」

「うう…」

準備のときに風華がどこから取り出してきたこの服…。

どちらかというと踊り子のような服で、布が少ない。

丈は少し短いし、袖がなく肩紐だけだった。

下はゆったりと長い旅人用の袴だったけど、上はもはや下着じゃない

いか…。

肌の露出が多く、ただ歩いているだけでも恥ずかしい…。
望も似たようなのを着せられているが、むしろ嬉しいみたいで。
なんでだろ…。

「今日は、姉ちゃんに可愛い着物を買ってあげようと思ってるの。
とびきり可愛いの」

「そ、そんなのいいよ…。制服でいいじゃないか…」

「ダメ。姉ちゃんはもっと可愛くならないと」

「こんな恥ずかしい思いをするなら、可愛くなくていい…」

「恥ずかしいと思うから恥ずかしいの！堂々としてなさい」

「うう…」

なぜか怒られてしまった…。

でも、恥ずかしいものは恥ずかしい…。

「そういえば、姉ちゃんって狼の頃は服は着てなかったんでしょ？」

「そうだな…」

「じゃあ、その服くらい大丈夫じゃないの？お風呂のときだって、
隠したり恥ずかしがってるの見たことないし」

「狼は服を着ない。だから、恥ずかしいとも思わなかった。それと、
風呂にいたのは身内ばかりだし、そもそも裸でいることが当たり前
なんだから恥ずかしくない。でも、今は違うじゃないか…」

「服はいちおう着てるじゃない」

「これは服とは言わない。下着だ」

「そうかな？」

「……！」

風華に肩紐を引っ張られた。
すぐに離れたけど…。

危なかった…。

「私は可愛いと思うよ。姉ちゃんも望も」

「オレはそうは思わないんだよ…」

「ふうん…」

意外という風に首を傾げて、望の方を見る。

望は、少し先の水晶だとか瑠璃だとかの石を置いている露天で、店番と何か話し込んでいた。

そして、何かの石を受け取ると、店番に手を振りながら戻ってきて。

「貰った！」

「貰った？」

「電気石だな」

「うん！」

「でも、貰ったって…」

「いいんだいいんだ、お姉さん。価値の付かない屑石だから」

店番が身を乗り出して話し掛けてきた。

とりあえず露天のところまで行って、事情を聞くことにする。

「屑石って、結構大きいじゃないか」

「ひっくり返してみな。大きなヒビが入ってるんだ。ヒビから割つてもいいが、それでも傷物扱いだ。そんなものを二束三文で売るより、ヒビ割れてても大切にしてくれる誰かにタダでくれてやる方がよっぽどいいってもんだ」

「ふうん…。そういうものなんだ…」

「ああ。それに、もしかしたら、このお嬢ちゃんが常連さんになつてくれるかもしれないし」

「やっぱり、そこなんだ…」

「まあ、商売つてのはそんなものだよ。たくさんの一見より、一人の常連…ってことだ」

「へえ…」

「ところで、ここは裏路地とはいえ公共の道だ。公道で露天を出すことは禁じられているはずだが、どうなっているんだ？」

「ね、姉ちゃん…」

「ん？なんだよ、あんた。金でも巻き上げようってのか？」

「場合によってはな」

「なんだと？」

店番が掴み掛かってくる。

しかし、ただ空を掴んだだけで。

「おろ？」

「まあ、禁じられているとはいえ、よっぽどでない限り誰も取り締まりはしない」

「えっ、後ろ…」

「市場にはない、露天街でしかないものもたくさんあるし、こついつたものが街をさらに活気付けてるのも事実だからな」

「くそつ。何なんだよ、あんたは！」

「ユール才警察全市取締役代表だ。今はこんな格好をしてるけど」

「え、衛士長！？本物か！？」

「まあ、どう思つかはお前次第だがな。これから、しっかり街を盛り上げてくれよ」

店番の肩を叩いて風華に合図をする。

そして、店をあとにして。

「はあ…。衛士長なんて…」

「ははは！とんだ白羽の矢が立ったもんだな！」

「悪い商売やってるからじゃねえのか？」

「冗談もたいがいにしやがれ！」

そんな怒号が聞こえてきた。

風華は、笑いをこらえきれない様子で。

「姉ちゃんも、素直じゃないね」

「ん？何の話だ」

「激励するなら、遠回りなんかしないで直接言えばいいのに」

「警告も兼ねてたんだ」

「まあ、そういうことにしておきますか」

そう言って、望を追いかけて先に走って行ってしまった。

…直接言うのは気恥ずかしいだろ。

それに、オレはいちおう衛士長なんだから。

そういうことにしておいてくれ。

「ダ、ダメだ！そんな服…」

「ええ…。可愛いと思うんだけどなあ…」

「とにかくダメだ。あ、こっちなら…」

「それは男物だよ」

「男物でいい」

「そんなの許さないよ。絶対に可愛い着物を買ってあげるんだから」

「いいって…」

「ダメ」

今日の風華は、なんでこんなに強情なんだろうか…。

うーん…。

とりあえず、こんな服は着られない…。

「店員さん、すみません」

「はいはい」

「この人に合う服を見繕ってほしいんですが」

「分かりました。どんなのがいいですかね？」

「控えめ…」

「すごく可愛いのでお願いします」

「はあい。可愛いんですね」

「あ、いや…」

訂正する間もなく、店員は服を見繕いにいってしまった。
どうしよう…。

追いかけていって、訂正するというわけにもいかないし…。

「見て」

「ん？」

「可愛い？」

「そうだな。よく似合ってるぞ」

「えへへ」

望は、子供らしい柄の入った着物に、少し大人っぽい青の羽織を着て。

一見すると不釣り合いだけど、実はそうでもないことが分かる。

「ねえ、お姉ちゃん。どうかな？」

「似合ってると思うよ。この羽織も格好良いし。あ、これ、裏表なんだね」

「うん」

「ふうん。なかなか洒落てるな」

「いいの見たね」

「うん！」

裏地は黒で、背中のところに大きな龍が織り込んであった。えらく、いかついな…。

でも、望は嬉しそうに跳ね回って。

値札がヒラヒラしてるのが、何か可笑しかった。

「ざっと集めてみましたよ」

「早いな」

「まあ、自分の店の商品くらい把握出来てますから
「そうか」

「あ、望ちゃん。可愛い服だね。それでいいの？」

「うん！」

「知り合いなのか？」

「さっき、名前を教えてもらいました」

「なるほど」

「望ちゃん、着替えてこよっか。それとも、着て帰る？」

「うーん…。着て帰る」

「そっか。じゃあ、もとの服を持ってきてくれる？」

「うん」

望は、また値札をヒラヒラさせながら試着室に戻る。

それを見送ると、店員はこっちを向いてニッコリと笑って。

「さて、お姉さまの着物ですが」

「どんなのですか？」

「いくつか用意させてもらっただんですが…。まずはこれから」
「こ、これは…」

黄色地で、小さな赤い椿が何かの模様がところどころにあしらわれた着物。

帯は藍色に桜が散りばめられたものだった。

「ん…。ちよつと子供っぽくないですか？」

「意外と、こういうのも似合うものですよ」

「意外とってなんだよ…」

「あはは。お姉さまは、その服を着てても大人っぽいですから。」

「そうかな…」

「はい。ですから、たまにはこういう思いきった服の選び方も良いものですよ」

「ほ、他はないのか？」

「ありますよ。じゃあ、次はこっちを」

次は、無地の茶色い着物に、青地に細くて白い線が縦に入った着物を重ねて着るものだった。

見たところ、男物だけど…。

「男物ですよ？」

「いえ。女性向けに作られたものですよ。最近は、こういうのが流行ってるんです」

「へえ…。知らなかった。でも、あんまり可愛くないですよ？」

「まあ…そうですが、こういう地味で素朴な感じが良いんですよ」

「ふうん…。もうひとつあるんですね」

「はい。これです」

最後は、何かやたらヒラヒラした飾りがついている服だった。黒を基調としているが、やたら目がチカチカする西洋風の服。

「西洋の、お姫さまの服を模して作ったらいいですよ」

「うーん…。西洋の服は分かりません…。ていうか、向こうの人はホントにこんなのを着てるんですか？」

「さあ…。実際に見たことはないの…。あ、これにはこの傘も付いてきます」

「なんだ、この傘は…。こっちもフリフリだな…」

「雨用の傘じゃなくて、日が照つてるときに差すそうです」

「日傘か。いや、しかし…これを着て、こんなのを差して歩く勇氣はないぞ…」

「うん…。まあ、これは私も無理だね…」

「じゃあ、一番目と二番目ですね。どっちにします？」

「一番目」「二番目」

「ははは…」

「ねえ、これ」

「あ、望ちゃん。お姉ちゃんたちはまだ掛かるみたいだから、ちょっと待っててくれる？」

「うん」

「値札を取ってもらったらどうだ」

「……？」

「あ、そうですね。じゃあ、向こうに行こっか」
「うん」

望は店員に手を引かれ、店の奥の方に行く。
さて…風華だけど…。

「絶対こつち。可愛いじゃない」

「花柄なんて、オレには合わないよ」

「絶対似合うって！試着させてもらおうよ！」

「いや、いいって…」

「ダメだよ！それに、私が買っただから…」

「…え？」

「私が、姉ちゃんに、この服を、買ってあげるの！」

「お金、持ってるのか？」

「持ってるよ。この前、兄ちゃんからお給料を貰ったの」

「給料？小遣いじゃないのか？」

「ううん。衛士としての、初めてのお給料。それでね、どうやって使うのがいいか、ずっと考えてたんだ。昨日も一日考えたんだけど、やっぱり姉ちゃんに何か買ってあげるのがいいって考えに行きついたの。感謝の気持ちを表そうって。ホントは、こんなこと言っちゃダメなんだけど…」

「……………」

「いつも迷惑掛けてるし、これからそう。だから、今日も私のわがままに付き合っ。感謝の気持ちを表すのに、わがままを聞いてなんて言うのもおかしいけど…」

「はあ…。分かったよ。風華の好きにしてくれ」

「ホントに？」

「ああ」

「やった！」

「決まっただけですね」

「はい！」

風華は満面の笑顔で、一番目の服を店員に渡す。

奥から戻ってきた望も、なぜかさつきより嬉しそうにしている。
それにしても、初給料が。

私は何だったかな。

ちよつと恥ずかしくて思い出せない。

…ところで、こっちの着物もこっそり包んでもらおう。
さすがに、あれだけでは辛いから…。

男物風の着物を、店員にこつそり城へ届けてもらつように言っておき。

そして、店を出る。

「どうしたの？」

「ん？いや」

「そう。それにしても、それ、似合ってるね」

「そうかな…」

「うん。ね、望？」

「可愛い」

「オレは…うん…」

こんな黄色の服なんて着たことないし…。
やっぱり恥ずかしい…。

「それにしても、姉ちゃんが着たらなんでも大人っぽく見えるよね」

「ええ…」

「ほら、堂々として！」

「うーん…」

風華に背中を叩かれてしまった。

でも、堂々として言われてもなあ…。

「さあ、お昼ごはん食べに行こうよ！」

「えっ、この格好で？」

「当たり前でしょ。涼さんの食堂に行こうよ」

「涼のところ…」

「そつだよ。涼さんにも見せないと」

「いや…。あいつは妊娠してるんだから、こんな刺激の強いのは…」
「何をわけの分からないこと言ってるの。もうお腹ペコペコだよ。」

早く行こ」

「早く行こ」

「うう…」

涼に見せるのか…。

この服を…。

はあ…。

憂鬱だ…。

望はパタパタと尻尾を振りながら狸蕎麦をすすする。

その望の隣には涼が座り、こつちを見てニヤニヤしていて。

「似合うよ」。そういう服も着るんだねえ」

「いや、これは…」

「風華ちゃんに買ってもらったんでしょ？紅葉ちゃんって、絶対こ
ういうの避けるだろうし」

「よくご存知で…」

「いいなあ。私も、そんな服着てみたいなあ」

「涼さんなら大丈夫ですよ！若いもん！」

「あはは、ありがとね。まあ、まだ二十三だし。今度、思いきって
買っちゃおうかな」

「二十三？オレと三つしか変わらないのか」

「ん？紅葉ちゃんは二十六？」

「なんで増やすんだよ…。二十だ、二十」

「あ、そっちか」

「やっぱり若いじゃないですか！絶対似合いますって！」

「おい、オヤジ！七つ下で美人の嫁なんて、どっからかつさらってきたんだ！」

「天界から、ちょっとな」

「何バカなこと言ってるんだよ！俺に寄越せ！」

「やるか、バーカ！悔しかったら別嬪さん連れてきてみやがれ！」

「まったく…。男つてのはいくつになっても子供だねえ…」

「ふっ、そうさ。男は永遠の少年さ」

「バカ言ってるないで、さっさと紅葉ちゃんと風華ちゃんのごはん作りな！」

「…ハイ」「えっ、俺は…」

「上司より先に食べる部下があるかっての。待ってなさい」

「いや、俺の方が先に来たんだけど…」

「つべこべ言ってる、昼ごはん抜きだからね！」

「ええ…。なんという横車…」

「悪いな、弥平。先にいただくよ」

「あっ、いえ。お気になさらずに。私は大丈夫ですので」

「そうか」

弥平は軽く敬礼をしてニツコリと笑うと、そのまま前を向いてジッと動かなくなつた。

体力の消費を抑えているんだろう。

「あはは。さすが、衛士長さまだね」

「そうかな」

「うん。私とそんなに変わらないのに、何歳も歳上の人も顎で使ってるんでしょ？」

「いや…そんなことは…」

「冗談よ、冗談。でも、紅葉ちゃんの評判が高いのは本当だよ。ここに来る衛士さん、みんな目を輝かせて語ってくれるよ」

「へえ…」

「って、前にも話したかな。まあ、こういう話は何回してもいいよね」

でも、なんかこういう話はくすぐったくて。
嬉しいけど、あまり聞かされるのも気恥ずかしいというか…。

「はあ、利家くんも良い子をお嫁さんに貰ったなあ。しかも、同い年でしょ？利家くんは利家くん、格好いいし、どこかのムサ苦しいおっさんとは大違い」

「ええっ！？た、隊長、結婚してたんですか！？」

「え…まあ、うん…」

「かーっ！知らなかった！密かに狙ってたのに！」

「なんで、私よりずっと近い位置にいるあんたが、そんな重要なことを知らないのよ…。私はそっちの方がびっくりだわ」

「正式に発表してませんし、弥平さんは噂とかには疎いですから」

「ああ、なるほど」

「風華ちゃん、さりげなく酷い…」

「どうも」

「風華ちゃんは医務班だっけ」

「はい」

「大変でしょ？こんなのがいてさ」

「涼さん…」

「いえ、すつごく楽しいですよ。みんな、優しくて楽しい人たちです」

「風華ちゃん…。天使だ…」

「えへへ。ありがとうございます」

「惚れていい？」

「おう、弥平。浮気は良くねえな。男なら一度紅葉ちゃんって決めたら、たとえ結婚してようが何してようが、一生それを貫き通すのが筋つてもんじゃねえのか！」

「オ、オヤジ…！でも、そんなことしたら一生結婚出来ないから遠慮します」

「それもそうだ。やめとけ」

「…何、あの茶番？」

「さあ…」

「それはそうと。紅葉ちゃんのと風華ちゃんの、上がり！」

「はい」

「あ、私が持つてきますから、涼さんは座つててください」

「ダメダメ。風華ちゃんはお客さんなんだから」

「でも、涼さんは身体を大事にしないと…」

「大丈夫大丈夫…って、あれ？なくなってる…」

「お前たちが遅いから、もうオレが取ってきた」

「あちゃゝ。参ったね、こりゃ」「あつ、姉ちゃんずるい！」

「何がずるいんだ。冷めないうちに食べるよ」

「あ、うん…」

「ははは。やっぱり優しいね、紅葉ちゃんは」

「何の話だ」

「ふふふ。なんでもないよ」

「ごちそうさま」

「あ、望ちゃん、食べ終わったの？」

「うん」

「もつと食べる？」

「んー、外で遊んでくる」

「そう。気をつけて行ってきなさい」

「夕方には帰ってきなさいよ」

「うん。分かった」

そう頷くと、望は外に飛び出していった。

今日、ルウエたちはどうしてるのかな。

城に来てるんだろうか。

まあ、どこかしらで遊んでいるだろう。
…新しい服も買ってもらったんだ。
すっかり汚してこいよ。

「涼さんって大人びてますよね。姉ちゃんもだけど。二十越えたら、大人になるんですか？」

「私、そんなに大人びてる？」

「涼は大人びてるというより、肝っ玉母さんといったところだな」

「はは、肝っ玉母さんかあ」

「でも、私、そういうのに憧れます！」

「風華ちゃんって変わってるねえ。普通なら、優しいお母さんになりたいとか言うのに」

「涼さん、すごく優しいじゃないですか」

「そうかなあ。自分ではあんまりそうは思わないなあ」

「そんなことないですよ。私、涼さんみたいなお母さんになりたいです」

「ありがとね。でも、それにはまず相手を見つけないと」

「…相手ならいます」

「え？初耳だね。誰？紅葉ちゃん？」

「あ、それもいいかも」

「いや、おかしいだろ」

「そうかな。紅葉ちゃん、良いお婿さんになれるよ」

「オレは女だ！」

「関係ない関係ない。大丈夫、いけるって」

「関係大ありだ！」

「あはは。まあ、それは置いて。相手は誰なの？私も知ってる人？」

「はい、たぶん。でも、秘密です」

「ええ、なんで？」

「言っても信じてもらえないし」

「信じる信じる。それで？」

「うーん…。やっぱりダメです」

「なあんだ。つまんない」

「おい…」

「あはは、冗談冗談。でも、分かる気もするなあ」

「えっ。だ、誰だと思います？」

「あれでしょ？お城の広場のところにいる、おっきな龍」

「ええっ。な、なんで…」

「そうだな。オレはいつも一緒だから分かるけど、なんで涼が分かるのかが不思議だ」

「えっ、姉ちゃんも…」

「風華ちゃんは分かりやすいからねえ」

「そんな…。そんなに分かりやすいですか…？」

「うん。特級だね」

「特級…」

「それで？なんで分かったんだ」

「料理教室に来たときも、あの龍くん…セトだっけ。セトの話をし
てるときが一番楽しそうだし、あと、この前行ったときに直接聞
いた」

「えっ、セトに？」

「うん」

「へえ…。涼さんも龍と話せるんだ…」

「隠してたけどね、なんか私って、カウユの御子ってのらしいんだ」

「カウユの御子？」

「”白銀の獣”カウユは、全ての獣を統括する者だ」

「あ、北の神様の名前」

「ああ。ときたま、先天的に獣たちと言葉を交わせる人がいるら
しいんだ。まあ、風華も分かっているだろうけど、本当は難しいこと
ではないんだけどな。でも、普通は出来ないことだから、獣の総大将
であるカウユの加護を受けて生まれてきた子なんじゃないかってこ
とで、カウユの御子と呼ばれるようになったらしい」

「へえ」。紅葉ちゃん、よく知ってるね」

「まあな」

「じゃあ、姉ちゃんもカウユの御子？」

「さあな。オレは先天的であろうとなかろうと、確認した人はいなかったからな」

「あれ？紅葉ちゃんって孤児だっけ？」

「言ってなかったか？」

「聞いたとしても忘れてる」

「そうか」

「姉ちゃんは小さい頃、狼に育てられたらしいですよ」

「へえ」。そうなんだ」

「ああ。まあ、狼の母さんなら知ってるかもしれないな」

「ふうん。私も、物心ついた頃には話してたからなあ。みんなに聞くまで知らなかった」

「そういうものなんですか？」

「そういうものよ」

「ふうん……」

しばしの沈黙。

ここで一度、伸びをする。

こういうのを井戸端会議と言っのだろうか。

井戸じゃないけど。

お喋りの時間というのは、たとえば、他愛のない話しかしていないとしても楽しいものだ。

「お母さん、お母さん……」

「ん？望？」

と、望が何か店の外から呼んでいる。

二人に目配せをしてから店を出ると、望はすぐに駆け寄ってきて。

「どうしたんだ。怖い人でもいたか？」
「うっん…」

フルフルと首を振る。

よく見てみれば、いろんなところに土が付いていて、膝を盛大に擦りむいている。

「…転んだのか？」

「うん…」

「怪我してるじゃないか。早く手当てしないと」

手を引くと、また首を振る。

今度は、今にも泣き出しそうな目で。

「風華に怒られるのが嫌なのか？せっかく買ってもらった服を汚してしまつて」

次はコクリと頷いて。

もうすでに涙がポロポロとこぼれ始めている。

「大丈夫だから。ほら、早く手当てしないと」

「イヤ…」

「服なんて、洗えば綺麗になる。でも、怪我は早く手当てしないと大変なことになるぞ」

「んー…」

意地でも戻ろうとしない。

そうこうしてる間に傷から血が滲んできて、地面にポタポタと落ちている。

…仕方ないな。

「よつと…」

「あう…」

「ほら、戻るぞ」

「やあ…」

望を抱き上げて、無理矢理連れて戻る。

バタバタと暴れたりしているが、数歩の距離などあつと言つ間で。

「んー！」

「風華。望が転んだらしい」

「えつ、怪我は？」

「膝を擦りむいてる」

「あらら、大変。裏の井戸で流してきなさい」

「はい、ありがとうございます。望、早く」

「うええ…」

「ど、どうしたの？痛いのか？」

フルフルと首を振る。

もう何がなんだか分からなくなってるんだろう。
とにかく、泣くばかりで。

「転んだときに服を汚したから、風華に怒られると思ってるんだ」

「えつ、そんなの…」「優しい子だねえ」

「な、望。服を汚して怒られるなら、オレも一緒に怒られるから」

「……？」

「ほら」

まだ泣いている望を下ろして、服を見せる。

土はもちろん、血まで付いてしまった服を。
それを見て、望は泣くのをやめて。
いや、呆然として泣くのを忘れたと言っべきか。

「あちゃあ、大変だね」

「ああ。だから、風華。望が叱られるなら、オレも叱られないとおかしいだろ？」

「そうだね」

「……………」

「望」

「……………！」

風華が手を動かしたことで、望は反射的に目を瞑る。
しかし、予想していたもののどれでもなくて。
ただ、頭を優しく撫でてもらっただけ。

「ね？話はあとでするから。まずは手当てしよ？」

「…うん」

風華は望の涙を拭って。

そして、そのまま裏の井戸へ向かった。

それを見送ると、涼はこちらを見て笑う。

「それで？その血はどうするの？」

「ちゃんと綺麗に落とす方法がある」

「なあんだ、知ってたの。教えて自慢しようと思ったのに」

「そりゃ残念だったな」

「ホント残念」

全然残念じゃなさそうだけどな。

何はともあれ、ちゃんと手当てが出来てよかった。

…風華に怒られると思ったのは、涼が言った通り、望が優しい子だから。

せっかく買ってもらった服を汚してしまって、風華が哀しむと思ったから。

そんなことは、実際には考えてなかったかもしれないが、根底にはあつたはずだ。

そうでなければ、悪いことをした、怒られる…とは思わない。

優しい子だ、本当に。

望は、手当てが済むとすぐに眠ってしまった。
余計な心配をしたからか、安心したからか。

「そついえば、哲也くんはどうしたんですか？」

「さあね。外で遊んでると思うよ」

「ええ……」

「大丈夫大丈夫。みんな見ててくれてるし」

「そうですけど……」

「どこ行くのだから早く帰ってきなさいだとか、そういうのはあまり好きじゃないんだよ。面倒くさいし。のびのび自由にさせるのが一番」

「そんな適当な……」

「風華ちゃんだって、利家くんによい言いわれるのは嫌でしょ？
哲だって一緒だよ」

「うーん……」

納得がいかない様子で。

…風華自身、涼と同じく放任主義であることには気付いていないようだ。

「それで、哲に何か用事？」

「あ、いや、ただ単にどこにいるのかなって思っただけで」

「そう。最近は、孤児院の子たちと遊んでるみたいよ。お友達が出来たってはしゃいでたし」

「へえ……。ルウエとかかな」

「男の子の友達だと思うよ。あの子、結構恥ずかしがり屋だし」

「男の子かぁ」

「うん」

「あ。涼さんって、ルウエのこと知ってるんですか？」

「知ってるよ。なんで？」

「いや、食堂にいたら、なかなか会う機会もなさそうだし」

「そんなことないよ。ここに来ることもあるから」

「えっ、遊びに？」

「うん。表で遊んでるときもあるし、お昼ごはんを食べさせてあげたりもしてるからね」

「へえ、太っ腹なんですね」

「これから、もっと大きくなるよ」

「あはは、そうですね」

「…まあ、お昼ごはんを食べさせてあげてるのは、旦那さんだけだね」

「そうなんですか？」

「うん」

「組合では積極的に孤児の保護をしているからな」

「組合って、旅人を補助する？何か関係あるの？」

「ああ。慈善活動というか、株上げもあるんだろうが、組合はもとも旅人たち自身で設立されたものだからな。今はそうでもないけど、当時の旅人のほとんどは孤児だったんだ。だから、当然成るべくして成った…というわけなんだが」

「ここ、組合加盟店でしょ？最初に加盟しようって言い出したのが旦那だったの。突然だったんだけど、そのとき広げてた瓦版に、さつき紅葉ちゃんが言ってたことが蘊蓄話として載ってたんだ」

「へえ」

「あの人、子供好きだから」

「え？オヤジさんが孤児だったとか、そういう感動話は…」

「あはは。ないよ、そんなの。まだ両親共にピンピンしてる」

「ええ…」

「オヤジの株が下がったな」

「大暴落だよ…。結局、子供に来てほしいから加盟したも同然じゃない…」

「そうだねえ。事実、そうなんだから仕方ない」

「でもまあ、子供が好きっていうのは悪いことじゃないしな。むしろ歓迎されるべきだ」

「うん…。そうだね」

目的は何であれ、組合に加盟してくれたのには違いはない。その、人助けをしたいという志が立派なんだろう。風華も分かっているはずだ。

「ふふふ。可愛い寝顔」

「そうだな」

「どこで転んだんだろ」

「さあ」

「誰かと遊んでたとしたら、心配してるんじゃないのかな」

「たぶんな」

「まあいいか」

「ああ」

「…紅葉ちゃんって一言ずつでしか答えないよね」

「そうか？」

「うん。なんか、 unnecessary ことは答えないってかんじなのかな」

「まあ、余計なことを言う必要もないし」

「そうかもしれないけどさ。うん、そうだよね…。とか、うんだけじゃなくて、そうだよくらい付けてもいいと思うんだ」

「付けてないか？」

「付けてないね」

「あれですよ。姉ちゃんは、しんみりすると口数が増えるんです」

「へえ。普通は逆じゃない？」「しんみりしたら口数が増えるのか？」

「増えるんじゃない？あと、何か説明するときは一気に説明するよね」

「あ、それは分かる。紅葉ちゃん、蘊蓄とか好きそうだもんね」

「そうかな…」

「さっきだって、カウユの御子のこととか、組合のこととか、楽しそうに話してたじゃない」

「そんなに楽しそうだったか？」

「かなり」

「ふうん…」

自分では、ごく普通に話してるつもりなんだけど…。

他人から見たら、楽しそうに見えるのかな…。

「風華ちゃんは、紅葉ちゃんが格好良かったとか、望ちゃんが賢かったとか、身内の自慢話をしてるときが一番楽しそうだね」

「そ、そうですか？」

「うん。すごく楽しそう。それに、風華ちゃんって自分の自慢話はしないし。好感持てるなあ、そういう人は」

「自慢するところなんてないですから…」

「そんなことないよ。私から見たらいっぱいあるし、風華ちゃんが気付いてないだけだよ」

「風華は自分の悪いところしか見てないからな。悪いところを見るのは大切なことだけど、それだけというのは考えものだ。自分を見つめるときは、見えた悪い部分と同じ数だけ良い部分を探すといい。最初は難しいだろうが、心を健康に保つ秘訣だ。それに、これを繰り返していると、他に誇れるようなところも見えてくる。悪いところを見つつ、良いところを素直に喜ぶことが出来たら、自分を見つめることに關しては一人前と言っていーいだろうな」

「…うん」

「言ってるオレが実行出来るとは思わないけど」

「はあ、蘊蓄だねえ。締めも完璧」

「蘊蓄…とは少し違うような…」

「もう、涼さん！せっかく良い雰囲気だったのに！」

「あはは、ごめんごめん。でも、紅葉ちゃん、本当に楽しそうだったし」

「それはそうだけど…」

「涼は、話してるときはいつでも楽しそうだな」

「あ、うん。涼さんってそうだよな」

「私、お喋りするの大好きだもん」

「そうだな。口から先に生まれたんだろ」

「たぶんね」

そう言つて、涼はカラカラと笑う。

まあ、お喋りが好きなのは、私も風華もそうなんだけど。

飽きもせず、何時間もこうやって話しているのが何よりの証拠。好きじゃなければ、楽しくなければ、出来ないことだろ？

二人を見ると、ニッコリと笑って頷いてくれた。

…そして、楽しい昼下がりの時間は、ゆっくりと過ぎていく。

「悪いな、夕飯まで世話になって」

「いいってことよ。それより、城に戻らなくていいのか？」

「さつき、伝言を頼んでおいたから大丈夫だ」

「でも、勿体なかったなあ。せつかく可愛い服だったのに」

「早く洗濯してもらった方がいいだろ」

「そうだけどさあ」

「姉ちゃんは、やっぱり衛士の制服が一番似合うね」

「いつも着てるからな」

すっかり馴染んだ服は、やっぱり着やすい。

まあ、たまにはああいう服を着てみてもいいかもしれないけど…。

「……………」

「哲、どうしたの？可愛い子がいるから緊張してるの？」

「……………」

「あはは、ダメだこりゃ」

哲也は、俯いたまま固まって動かなかった。

望だろうか。

とにかく俯いているので、分からない。

「ごめんね。おやつなら、誰がいようとがつつくんだけど」

「他の人と夕飯を食べたことがないんだろ。仕方ないよ」

「そうねえ。毎日来てもらおうかしら」

「お城に来たら、みんな夕飯食べてますよ」

「行っているの？」

「門が開いてるなら、誰でも歓迎だ。もう前の王は倒れたからな」

「前の王といえば、ヤウトの連中、根性据わってたなあ。失敗すりゃ、村の焼き討ちどころじゃ済まなかったんだぞ。目の前にいる俺らでも、なかなか踏ん切りがつかなかったってのによ」

「兄ちゃんは、良い機会をずっと狙ってたんですよ」

「あつ。そっぴや、風華ちゃんって、蜂起決行隊の一人だったよね」

「はい。ほとんど何もしてないですけど…」

「そんなことないでしょ？大活躍だったって聞してるよ？」

「そ、そんなこと…」

「まあ、それはいいじゃねえか。話を聞かせてくれよ」

「あ、はい。えっと、偵察に行ってた桜が捕まって、これはいいよ…ってときに捕まったはずの桜が帰って、衛士長が処刑されるかもしれないって情報を得たんです。あの政権の下でも衛士は真っ直ぐだったから、もしかしたら王に反抗心を抱いてるかもしれないってことで、決行に移したんです」

「そうだねえ。あれだけ近くにいて、よく腐らずにやってこれたよね」

「治安を維持するオレたちが腐ってしまえば、この国自体が崩れ去ってしまう。遅かれ早かれ、あんな王は倒れる。だから、耐えていた」

「自分たちで王を討とうとは思わなかったの？」

「オレたちが王を討ってしまえば、次は武力政治になりかねない。結局、オレたちは衛士、警察といった武力的、法的な集団だ。そういう者が政治をする国は、必ず自らの首を絞める結果になる。他力本願だと思われても、それは避けるべきだと思ったんだ」

「へえ。なかなか先見の明があるんだねえ。それで、風華ちゃんの方はどうなったの？」

「兄ちゃんの読んだ通り、衛士長の処刑決行により衛士たちの反抗心は極限まで高まっていました。だから、全く交戦もせずに制圧することが出来たんです」

「利家くんは大将でありながら、聡明な参謀でもあるんだね」

「それほどでもないですよ」

「なんで風華が言うんだ」

「兄ちゃんのこととは私のこと、だもんね」

「い、いや、そういうわけじゃ…ないです…」

「ふふふ」

自慢の兄、ということなんだろう。

羨ましくもあるし、嬉しくもある。

…ぼちぼち夕飯に手を出し始めた哲也の皿に自分の竜田揚げを乗せてやると、一瞬驚いたような顔をしたけど、すぐに笑ってよし。

もうそろそろ本腰を入れて食べるか。

眠ってしまった望を背負って、市場を歩く。

開いてる店は居酒屋くらいなもので。

暗い夜道は、それでも酔っ払いの陽気な笑い声で溢れていた。

「おい、こんなところで寝るな。風邪引くぞ」

「はい…。しゅみましえん…。おつまみくだしい…」

「何言ってるんだ。帰るぞ」

「ん…」

「桐華さん、こんなところで何してるんだろ…」

「居酒屋を回ってたんだろ」

「お酒なら、お城にもあるでしょ？」

「桐華は、酒を呑んでるんじゃない。雰囲気を呑んでるんだ」

「……？」

「桐華は酒が好きなんじゃなくて、酔っ払うことが好きなんだ。それで、他人が酔っ払っているのを見るのも好きだ」

「へえ…。よく分からないけど…」

「どんなに安くても、どんなに不味くても、酔っ払うことが出来ればいいんだ」

「ふうん…。変なの…」

「ああ、変だ。でも、酔っ払っているときの桐華はすごく楽しそうにしてるだろ？」

「うん。それはそうだね」

「まあ、そういうことだ」

「そういうことか」

「まあ、それはいい。望、頼めるか？」

「うん」

望を風華に渡し、冷えないように上から羽織を被せる。それから桐華の腕を担ぎ上げて。

何かムニヤムニヤと言ってるけど、寝言だろうな。

まったく…。

自分で帰られなくなるまで呑むなよな…。

「あにや？いろは…。どつたの？」

「面倒くさいから寝てろ」

「ひろいなあ…。わたしだってえ、かみひもくらいもってましゅ」

「髪紐なんか持っても、お前は結ぶ長さがないだろ」

「んー。でもお、はるかたんがあ、こんどお…。んー…」

「何だよ」

「あー、あはは。ほしがきれいら」

「まったく…」

「何なんだろ」

「さあな。言ったらダメだって言われてたんだろ」

「へえ…。いちおう、話しちゃいけないことは話さないんだね」

「そうだな。ペラペラ喋るときもあるけど」

「ふうん…」

「つきがあゝ、でたでゝた、つきがあゝでゝた…」

「なんか歌ってる…」

「歌うのは好きだからな」

「しかも、酔っ払ってる割に上手いし」

「歌とお茶だけは得意だからな」

「歌は想像が付かない」

「まあな」

朧月夜を歌ってみたり、茶摘みを歌ってみたり、とにかく支離滅裂だけど。

あと、こぶしが利きすぎてる。

「あ、朧月夜で思い出した。姉ちゃん、目は大丈夫なの？」

「まだもう少しなら大丈夫だ」

「そつか。じゃあ、ちよつと急ごう」

「まあ、そう焦ることもない。慣れた道だ。見えなくても大丈夫。風華もいるし」

「…そう？それならいいんだけど」

「ああ。だから、ゆっくり帰ろう」

「うん」

昨日、生まれて初めて見た月は予想以上に綺麗だった。

次の赤い月まで見られないのは残念だけど。

そういえば、今日こそサンのことを確認しないといけないな。

…まだ暗い夜道を、ゆっくりと帰っていく。

腕を掴むと、体勢を崩してまた倒れる。

どこか打ったのか、しばらくバタバタとしていたが、すぐに静かになつて。

「どこに行くんだ」

「喉が渴いたの」

「水ならお前の枕元に置いてあるだろ」

「水じゃダメ…」

「そうか」

サンを抱えて立ち上がり、屋根縁に向かう。

今は見えないけど、きっと月が高く昇っているんだろう。

屋根縁の柵にサンを座らせ、その隣に自分も座る。

「血でないとダメなのか？」

「うん…」

「そうか。でもな、毎日貧血の患者を出されるのも困るんだ。どうか血を手に入れる方法も考えたが、どうも難しいらしい。だから血が飲みたいのならオレの血を飲め。オレは貧血になっても構わないから」

「…うん」

「オレの血に飽きたら、若い男衆のを貰うといい。あいつらなら大丈夫だから」

「うん」

「よしよし。良い子だ」

「えへへ」

頭を撫でると笑ってくれた。

その笑顔を見られないのは残念だけど。

「ほら、好きなだけ飲めばいい」

「……………」

面と向かってこんなことを言われるのは初めてなんだろう。
しばらく躊躇していた。

でも、最後には意を決して。

首筋に僅かな痛みが走る。

一滴も漏らすまいとしているのか、傷に口を付けて啜り始めた。

「……………」

「……………」

どんな顔をして吸っているのかな。

見てみたい気もするが、それは叶わぬ願い。

…それから十分ほど経っただろうか。

確かに相当量の血を飲んだところで、サンは口を離れた。

「美味かったか？」

「うん」

「そうか。それはよかった」

「…ごめんなさい」

「なんで謝るんだよ」

「サンが変な子だから、お母さん、サンのこと、嫌いになっちゃうから…」

「なんでそう思っただ？」

「サンが変な子だから…」

何か強烈な辛い思い出があるんだろうか。

サンの自分を責める声は、次第に震えてきて。

「サンが、いけないの…。こんな、変な子だから…。ごめんなさい、お母さん…」

「サン」

「ごめんなさい…」

手の甲に落ちる雫は、哀しいまでに冷たかった。

何がどうしたのかは分からないけど、サンをこんなにした…サンが元いた環境が憎い。

こんなに小さな子が、自分の個性を否定し、本来あるはずのない謝罪の言葉を口にする。

それがどれだけ哀しいことかは、今感じている通り。

気がつけば、私はサンの頬…涙を舐めていた。

「……！」

「涙は心の血だ。私は今、サンの血を舐めている。サンは、私のことを変だと思うか？」

「………」

「私を変だと思うなら、サンだけが変じゃない。だから、サンが哀しい思いをする必要はない。変だと思わないなら、同じく血を舐めるサンも変じゃない。私とサンは一緒なんだから」

「うん…」

「サンは独りぼっちじゃない。私がいる、みんながいる。だから、泣かないでくれ」

「うん…」

そして、そっと背中を叩いてやると、サンはすぐに眠ってしまった。前に何があったのかは知らない。

どういう経緯でここに来たのかも分からない。
ひとつ分かることは、サンが心に大きな傷を負っていること。
サン。

時間は掛かるかもしれないが…必ず、癒してやるからな…。

次に目が覚めたときにはすでに夜明け前で、月は出ていなかった。
サンはまだ眠っていて、掛けた覚えはないが、私の羽織を被っている。

後ろを向いてみると、セトもこちらを見ていた。
目が合うと、尻尾をパタリと振って。

「おはよう」

この距離で聞こえるとも思っていないが、いちおう言うておく。
真意のほどは分からないが、セトはもう一度尻尾を振った。

それを見届けてから、サンを抱えて立ち上がる。

サンはいつもより少し温かく、重たかった。

ぐっすりと眠っている証拠だろう。

部屋に入って、サンがもともと寝ていた場所に寝かせる。

蓮と伊織が増えてること以外、昨日の夜と変わっているところはなかった。

「さて…」

こんなに早く起きても、朝ごはんが出来てるわけもないんだけど。
することもないから、ひとまず厨房に向かう。

いつもの廊下を歩き、いつもの階段を降り。

いつも通りの静けさの中で、いつも通りでないものがひとつ。

廊下の真ん中で、大いびきを掻いて眠っている物体。

まあ、放っておいても害はないから、適当に踏み越えていく。

「うべっ」

「邪魔なゴミだ」

「うう…。もつと優しく起こしてよ…」

「廊下の真ん中で寝てるやつを優しく起こすほど、心は広くない」
「酷いなあ…。それより、すっごく気持ち悪い…」

「吐くなら厠に行けよ。オレは連れていけないからな」

「うえ…。吐きそう…」

「……。はあ…。仕方のないやつだな…。連れて行ってやるから、
厠まで吐くな」

「保証は出来ない…」

「まったく…」

桐華の肩を担ぎ、厠へ急ぐ。

なんで、朝から二日酔いの看護をしないとイケないんだ…。

「うつぶ…」

「……………」

「目が怖いよ…」

「気のせいじゃないだろ」

「ええ…」

「なんにせよ、もうすぐそこだ。そこまで耐えろよ」

「耐えないと、どんな目に遭うか…」

「分かってるならよろしい」

「うう…」

角を曲がってすぐのところの厠に入り、個室に桐華を放り込む。
どこかを打ったのか何か呻いているけど、まあいいだろ。
早々に引き上げる。

…朝からついてないな。
これが続かないといいけど。
とりあえず、厨房に向かった。

今日は雨が降るだろうな…。
 やっぱり、言っておく方がいいか。

「風華」

「ん？何？」

「雨が降る」

「え？晴れてるよ？」

「晴れてても降るんだ」

「そっか…。じゃあ、今日は内干しだね」

「ああ」

「でも、もう干してあるのはどうするの？」

「あとで香具夜にでも言っておくよ」

「うん。分かった」

風華は頷くと、そのまま洗濯物籠を抱えて城の中に入っていった。
 途中で声を掛けられてたから、じきに広まるだろうけど。

「香具夜。聞いてたか？」

「うん。みんなに言っておくね」

「よろしく頼む」

「はいはい」

香具夜は軽く手を振って走っていった。
 風華から聞いて、いそいそと取り込み始めたやつらもいるし、いなかったかもしれないが。

「紅葉、桐華知らない？」

「廁か医療室だろ」

「はあ…。また二日酔い？昨日、帰ってこなかったと思ったたらこれだよ…」

「あいつはいつも呑みすぎるからな」

「強いわけでもないのにねえ。紅葉みたいな鋼鉄の肝臓なら、いくら呑んでもいいけど」

「鋼鉄の肝臓って何だよ…」

「事実そうじゃない。紅葉が酔っ払ってるところ、見たことないよ」「いつでも水を呑んでるからな」

「この前、蒸留酒の原液を呑んでも平気な顔してたくせに」

「そんなの呑んだことないぞ」

「私がこっそり呑ませたんだよ。ちよつとくらい酔うかと思ったのに、全くだもん」

「…そんなことはやめてくれると有難いんだが」

「味覚も麻痺してるのかなあ」

「勝手に想像を膨らませるな」

「だって、普通気付くでしょ？私だったら、原液なんか口に含んだだけでも吐き出すよ」

「ふうん…」

「ふうんじゃないでしょ。はあ…。桐華にちよつとでも分けてあげればいいのに」

「分けられるものならな」

「あはは、そうだね」

遙はカラカラと笑って。

桐華が二日酔いするまで呑むのを一番楽しみにしているのは遙だ。楽しそうな桐華を見て、遙自身も楽しんでいる。

少しくらいは強くなつてほしいと思ってるのは事実だろうが、今のままでいいと思ってるのも事実だろうな。

複雑なようで、単純なことだ。

部屋に戻ると、梁のところに縄が渡され、洗濯物が干してあった。上の方に張ってある縄にはリュウが座っていて。

「あ、いろはお姉ちゃんなの」

「みんなはどこに行った？」

「んー」

足をブラブラさせて考え込む。

…あそこには飛んで上がったんだろうか。

まあ、どっちにしても、あの縄に掛かっている洗濯物は風華が干したものでないだろう。

「あつ、広間に行くって言うってたの。大変になってくるから、お手伝いにつて」

「広間か。それで、お前は何をしてるんだ？」

「んー。何もしてないの」

「まあ…そうだろうな」

「えへへ」

なぜか照れたように笑うと、フワフワと降りてきた。

そして、私の首に抱きついて。

「ねえ」

「ん？どうした」

「響と光がね、いろはお姉ちゃんのこと、お母さんって呼んでたの」

「そうだな」

「だから、わたしもお母さんって呼んでいい？」

「ああ。もちろんだ」

「えへへ」

龍紋が浮かび上がり、キラキラと光っている。
そんなに嬉しいことなのかな。

一旦床に下ろして頭を撫でてやると、甘えるように額を腹に擦りつけてくる。

…今なら大丈夫かな。

思いきって、喉のところに触ってみる。

「ん」

「大丈夫か？」

「何が？」

「逆鱗なんだろう？」

「うん」

それがどうしたの、と聞かんばかりに首を傾げる。

光のときと大違いだな…。

「触られるのは嫌じゃないのか？」

「んー。えっとね、知らない人ならイヤなの。でも、このお城にいる人はみんな、家族だって教えてもらったから。だから、イヤじゃないの」

「そうか」

「うん」

誰に教えてもらったんだろ。

リュウの柔らかい頬を横に伸ばすと、楽しそうに声を上げて笑う。
明るい子だな、この子は。

それに、周りも明るくしてくれる。

「よし。広間に行こうか」
「うん！」

リュウは一度宙返りをして、私の手を掴んで。

ニツコリと笑うと、急かすように翼をはためかせる。

…さっきの宙返りは何だったんだろうか。

まあ、とにかく急ぐとしよう。

広間には、私の部屋と同じく洗濯物がたくさん掛けてあった。

…仕事が早いな。

「あつ、紅葉。こっちこっち」

「なんだ」

「ご苦労さま。はい、お茶」

「ありがとう。…でも、オレは何もしてないぞ」

「はい、リュウもどうぞ」

「うん。…お菓子は？」

「お茶菓子は無いよ。ごめんね」

「うん…」

「遙。これは何のお茶なんだ？」

「知覧茶だよ。紅葉の好きな」

「いや、そうじゃなくてだな…」

「いいじゃない、なんでも。理由がないと、お茶も飲めないの？」

「そういうわけじゃないけど…」

「じゃあ、つべこべ言わずに飲みなさい」

「はあ…」

仕方ないので、その辺で休んでた風華の隣に座って。
うん、やっぱりお茶は知覧だな。

「あ、姉ちゃん」

「もう終わったのか？」

「うん。あとは、広間に入りきらなかった洗濯物だけだよ」

「そうか。しかし、こうやって見てみると、たくさんあるんだな」

「うん。みんな、だいたい一日着たら着替えるからね」

「汗も掻くし、外回りなんかすると結構汚れるからな」

「うん」

「お母さん」

「ん？」

サンが上から降りてきた。

そして、胡座にすっぽりと収まると、嬉しそうに笑って。

「よく見れば、鳥や龍の連中はほとんど上で休んでいる。」

リユウもそうだったし、あっちの方が落ち着くんだろうか。

それなら、いくつか残しておいてもいいんだけど…。

あとで聞いてみるか。

「ねえ、お母さん」

「ああ、すまない。どうした？」

「サンもね、頑張って干したんだよ」

「ほう。どの辺だ」

「えつと、葛葉がいるあたり」

「え？」「えっ！？」

私よりも風華の方が驚いていた。

部屋の真ん中くらい、サンが指してる一番高い縄のところに、確かに葛葉は座っていた。

「葛葉！危ないでしょ！どうやって登ったのよ！」

「……？」

「降りてきなさい！あ、いや、降りてきちゃダメ！じゃなくて……」
「とりあえず落ち着け」

葛葉は、何を怒られているのか分からないといったかんじでおどおどしている。

…仕方ないな。

ひとまず足の上に座っているサンを横に置いておき、手近の縄に飛び上がる。

そのまま登って行って、葛葉のいる縄へ。

葛葉の横に座り、理由を聞くことにする。

「どうやってここに登ったんだ？」

「えっと…えっと…」

「オレは怒らないから」

「うう…。じぶんでのぼってきたの…」

「そうか。よく登ってきたな。でも、落ちたら危ないだろ？登ってもいいけど、必ず誰かに言ってからだ。分かったか？」

「うん…」

「よしよし。良い子だ。じゃあ、今回は降りようか。誰にも言っていなかったんだから」

「うん」

返事を聞いて、葛葉を抱え上げる。

そして、今度は一本ずつ近い縄を選んで降りて行って。

「葛葉！」

「ひうつ…」

「風華。今日は許してやれ」

「でも…」

「約束したんだ。登るときはちゃんと許可を貰ってからって。な、葛葉」

「うん…」

「ほら」

「もう…。姉ちゃんに言われたら怒れないよ…」

「そうか。それはよかった」

葛葉を離して背中を押す。

少し迷ってたみたいだけど、望と祐輔のところに走って行ってしまった。

それを見送って、風華はため息をついてまた座る。

「さあ、サン。待たせたな。話、聞かせてくれるか？」

「うん！」

それから、サンが一所懸命頑張った話を聞いて、褒めてやると、明るい笑顔を見せてくれた。

：夜のことはすっかり忘れたかのようにだった。

いや、実際に忘れているのかもしれない。

それならその方がいい。

この笑顔が守られるのなら。

「ふぁ…」

「それで、結局サンはどうだったの？」

「ん？血を吸う話か？」

「うん」

「確かにそうだったよ。確認した」

「ふうん…」

頑張って疲れたせいかな、眠ってしまったサンの頬に触れる。
小さな身体は、私の羽織にすっぽりと隠れていて。

「謝ってた」

「え？」

「変だからって。血を飲むのは変だから、私がサンのことを嫌いになると思ったらしい」

「えっ、そんな…」

「だけど、サンはそう思った。そう思わせる何かがあったということだ」

「……………」

「サンがどこから来たのかも分からない私たちが、どうこう出来る問題じゃないのかもしれない。過去の傷は、過去が全く消えてしまわない限り、消えないものだから」

「でも…。でも、癒すことは出来るよね…。時間は掛かるかもしれないけど…」

「ああ。私も、同じことを考えてた」

「そう…だよな」

風華はぎこちない笑みを浮かべて。

だから、額を軽く弾く。

「お前が不安そうな顔をしててどうするんだよ。これから頑張ろうってときに」

「うん…。でも、私は姉ちゃんほど人格が出来てないから…。もし、サンの傷がいつまでも癒えなかったらどうしようって…」

「…私だって不安だよ。人格者でもない。どれだけのものかも分からない傷を治そうっていうんだから、不安になるのは当然だ。でも、不安に思いつてことは、それだけ今直面している問題が大切なものだってことだ。そう考えると、不安に思ってる余裕なんてなくなってしまう。不安に思ってくるなら、その分、問題解決に尽力する。そうすれば、必ず成功するから」

「うん…。やっぱり、姉ちゃんはすごいね」

「何もすくくないよ。考え方の問題だけだ」

「私には、そんな考え方は出来ないもん。すくなかったとしても、私にとってはすごい」

「これは母さんから教わった考え方だ。オレがすごいのなら、風華もすごいはずだ。もうこの考え方が出来るんだから」

「ふふふ。やっぱり、私は姉ちゃんには敵わないなあ」

「ん？なんでだ？」

「姉ちゃんは、私の姉ちゃんだから」

そう言つて、抱きついてきた。

頬のところには、やっぱり龍紋が輝いていて。

…龍以外でも龍紋は出るのかな。

とにかく、風華が何に納得して、私には敵わないと言ったのかは分からなかった。

私が風華の姉であるのはそうだけど、風華が私に敵わないとは思わない。

まず何より、私が風華に勝っているとも思えない。

でも、私が風華の姉ならば…私は風華の姉だから、姉として常に風華の目指すべき目標であるべきなんだろうな。
そして、それが私の目標。

地面を静かに打つ音が聞こえてきた。

葛葉は窓枠のところに座って、足をブラブラさせている。

「何が見える？」

「んー」

「あつ、ホントに雨が降ってきたね」

「言わなかったか？雨が降ってくるかどうかが分かるって」

「聞いてたけどね」

「みんな、はしってる」

「そうだな。走ってるな」

「急に降ってきたから、みんな傘とか持っていないんだね」

「ん」

「楽しいか？」

「うん」

葛葉はジッと市場を見ていて。

何が楽しいのかは分からないが、パタパタと九本もある尻尾を降っていた。

「お母さん」

「ん？どうした、サン」

「喉、渴いた」

「水か？」

「うん」

「じゃあ、厨房で貰ってこい」

「お母さんもついてきて〜」

「ああ、いいぞ」

「行つてらっしゃい」

そして、風華に見送ってもらい、サンと一緒に厨房に向かう。

サンは走ったり飛び上がったりで、とにかく真っ直ぐ歩かない。

「あんまり走ると転ぶぞ」

「えへへ」

「何か嬉しいのか？」

「うん！」

「何が嬉しいんだ？」

「えつとね、今日の夢にね、お母さんが出てきたの」

「どんな夢だったんだ？」

「お母さんがね、サンは変じゃないって言ってくれたの！」

「…そうか。そんなことを言ってたか」

「今日はお母さんの血を貰ったから、そんな夢を見たのかな」

「さあな。でも、夢じゃなくても、私は同じことを言うよ。サンは変じゃない。私の可愛い娘なんだからな」

「うん！」

頷くと、勢いよく抱きついてきて。

その金色の髪を撫でると、嬉しそうに翼をはためかせる。

…夜のことは、血を飲んだこと以外は夢だと思ってるんだな。

それでも、ちゃんと覚えてくれている。

大きな一歩だ。

「さあ、喉が渴いたんだろ？」

「うん」

「よし。じゃあ、速く行こう」

サンを肩に担いで走り出す。

それが面白いのか、サンは大はしゃぎして。

厨房まで一直線だ。

厨房には美希がいて、何かの本を熱心に読んでいた。

どうやら料理の本らしいが、何が書いてあるのかは分からない。

「美希」

「なんだ。今、忙しいんだ」

「サンに水をやってくれ」

「えっ、サン？」

「そら」

美希の横の椅子にサンを下ろす。

すると、美希は急に立ち上がって、水の用意をし始めて。それにびっくりしたのか、サンは少しおどおどしている。

「サンは、水とお茶ならどっちがいい？」

「お水…」

「そうか」

横に置いてあった水を湯呑みに注ぎ、サンの前に置く。

…井戸水とは違うんだな。

「一度蒸留した水だ。井戸水より綺麗だよ」

「ふうん…」

「それより、サン。お前が好きな食べ物は何だ？」

「んー、若あゆ」

「それはお菓子だろ…」

「いいじゃないか。若あゆが好きなら、今日のおやつにでも作ってやるからな」

「うん！」

「材料はあるのか？」

「買いに行けばいい。雨くらいでは、私は諦めないぞ」

「ホントに、チビたちが好きだな」

「可愛いからな。それに、喜んでる顔を見るのが好きなんだ」

「オレみたいな大人には当てはまらないのか？」

「もちろん当てはまるけど、チビたちの笑顔には勝てない。そう思わないか？」

「…まあ、思わないことはないな」

チビたちの笑顔は、いつも必ず、本当に純粋な感情の具現だから。

少し含みのある、私たちの”笑っている顔”では勝てないのは当然。でも、私たちにだって、心からの笑顔はあるはずだ。

美希も、それに気付いてないはずはない。

「若あゆ以外にはないか？」

「んーと、お蕎麦！」

「そうか。じゃあ、今日の昼ごはんは蕎麦だな」

「えへへ」

…しかし、今はどうやらサンを甘やかすのに手一杯のようだ。

しばらくしたら、止めに入らないといけないな。

たぶん、際限なくやるだろうから。

果たして、昼ごはんは蕎麦だった。
葛葉の分には、ちゃんと油揚げが乗っついていて。

「なんだか、涼さんの食堂で食べてるみたいだね」

「そうか？」

「うん。お城じゃあんまりお蕎麦なんて食べないし」

「そうかな」

「葛葉、油揚げはまだあるからな。たくさん食べるよ。サンも、遠慮なくおかわりしろよ」

「うん！」「たくさん食べる！」

「美希。あんまり甘やかしちゃダメだよ」

「甘やかしてなんかないよ。二人が食べたいものを食べさせてやってるだけだ」

「…それを甘やかしてるって言うんだがな」

まったく、こいつは何をどう考えているのやら。

油揚げだけでなく、茶蕎麦や天かすなんかも用意してある。

この城にいる子供たちの好きなものを全て把握してるんだろうか。

…と、ふと、さっき美希が読んでた本が目に入ったので、手に取ってみる。

「子供の好き嫌いをなくす方法」

「えっ、何それ」

「この本だ」

「灯に借りたんだ。役に立つ本だからって」

「ふうん。灯が書いたのかな。結構分厚いけど」

「…オレの母さんだよ、書いたのは」

「紅葉の母親？」

「ああ。それで、この好き嫌いの多い子供ってというのがオレと灯だ」
「姉ちゃん、好き嫌いが多かったの？」

「さあな。あまり覚えてないが、とにかく城に来た頃は何も食べなかつたらしい」

「へえ……」

「食べるようになって、肉ばかり食べて、野菜にはほとんど手を付けなかった」

「ほとんどって？」

「狼は雑食だ。主に肉っただけで、その辺の草や木の皮を食べることもある」

「ふうん……」

「好き嫌いというか、それまでの習慣だったんだ。肉をよく食べるつてのは。それを、これから人間として生きていくためにと、ここに書いてあるようなことを試してたんだろうな」

「へえ……。ちよつと見せてよ」

「ああ」

本を渡す。

風華は蕎麦を横によけて読み始める。

…葛葉が、自分の前に蕎麦が来たものだから、くれたんだと思って食べてしまっているのは…今は黙っておこう。

「へえ、綺麗な字だね」

「母さんは書道も嗜んでたからな。普段はもつと達筆なんだけど、これは誰か不特定多数の人が読むと思ったんだろうな」

「ふうん。でも、なんだか日記みたい。日付と天気まで書いてあるし」

「じゃあ、日記なんだろ」

「日記だな。ほら、ここ。読んでみるよ」

「え？えつと…」

四月十六日、快晴。

リユークラスの狼から人間の子供を預かってきた。

不思議な子で、いきなり人間たちの中に放り込まれたにも関わらず、一切動じることもなく、今はぐっすり眠っている。

噂には聞いていたけど、ここリユークラスにだけ生えてると言われているリランは、春のただ中の今、綺麗に紅葉していた。

そして、この子もそこにいた。

だから、季節外れは百も承知だが、この子の名前を紅葉と決めた。ただ、”こうよう”では可哀想なので、始まりの言葉である”いろは”の読みを当てた。

旦那からは、イロハモミジか…なんて言われたけども。

灯より少しお姉ちゃんらしい。

二人が仲良くなれますように。

「好き嫌いのことは書いてないね」

「いやいや。紅葉について、かなり大切なことが書いてあっただろ」

「……………」

「分かってるよ…。でも、リユークラスのリランって、確かに噂には聞くけどね」

「私も見たことはないな。リユークラスに入ったことはあるけど」

「あそこって入れるの？」

「通行証があればな。通行証は、簡単な試験に合格して誓約書を提出すれば手に入る」

「へえ」

「でも、そういった証明書が必要ってことは、管理もかなり厳しいってことだ。もしおかしいな真似をすれば、逮捕されるのは必至だ。」

私も、無断で入ろうとした木こりが捕まえられるのを見たことがある」

「…怖いね」

「怖くはないさ。ちゃんと規律を守っていれば捕まることもないんだからな」

「そっか。そうだよな」

「ああ。それより、紅葉。どうしたんだ、さつきから黙りこくってん？ああ…。いや、なんでもないよ…」

「そっか？」

母さんが、こういう本を書いていることは知ってたが、中身は知らなかった。

もしかしたら、これには私の知らない母さんや父さん、灯のこと…それに、私のことも書いてあるかもしれない。

どうして、灯は黙っていたんだろうか。

灯が読まなかったはずはないのに…。

「紅葉。あれこれ考える前に、読んでみたらどうだ」

「えっ？」

「うん。灯が姉ちゃんに見せなかった理由も分かるかもしれないよ」

「”見せなかった”なら、読まない方がいいのかもしれないけどな」

「まあいいじゃない。姉ちゃんも、もう分別がつく年頃なんだから」

「風華…」

「そうだな。私は、もう一通り読んだから。ゆっくり読めばいい」

「それで、読み終わったら、姉ちゃんから直接灯に返して、びっくりさせればいいんだよ！」

「風華、それは趣味が悪いだろ」

「いいじゃない。灯が姉ちゃんに読ませなかった本当のところを聞き出せるかもしれないよ」

「私は、ただ単に忘れていた、に一票」

「あつ。それ、私が賭けるつもりだったのに！」

「残念だったな」

「いいよ！私も、忘れてたに一票！」

「なんだ、つまらないな」

… 本当に忘れていたんだろうか。

もしかしたら、本当に私が読んではいけないものなのかもしれない…。

「姉ちゃんらしくないよ」

「え？」

「いつもなら、もうここで読み始めるくらいでしょ？ほら、くよくよく考えないで」

「……………」

「ね？」

「… そうだな。考えていても仕方ない」

「うん。その意気だよ」

「… そうか。ありがとう」

「どういたしまして」

「あと… お前の蕎麦、葛葉が全部食べたから」

「えっ！」

葛葉は、最後に残しておいた油揚げを、今まさに食べ終わるところだった。

もちろん、風華の蕎麦など影も形もない。

「… まあ、もう一個作ってやるから」

「よろしく願います…」

「ふふふ」

「もう！笑い事じゃないんだから！」

風華が突然大きな声を出したので、葛葉は飛び上がった。
でも、どうにも笑いがこらえきれなくて。

風華には悪いが、笑うしかない。

…それと、そのお陰で母さんの日記についても吹っ切れたようだ。
くよくよ考えるのは私らしくない。

確かに、そうだな。

「読まないの？」

「ん？ああ、またあとでな…」

「もう…。さっきは読むって言ってたくせに」

「それはそうだけど…」

やはり、いざ読む段階になると、腰が引けてしまう。

本当に好き嫌いをなくす本なら、いくらでも読むんだけど…。

「せっかくの良い機会なのにね」

「そうは言っけど…」

風華は、お腹いっぱいになって眠っている葛葉の尻尾をいじって。私もサンの頬を引っ張ったりしてみるけど、あまり気は紛れなかった。

「ん…」

「そういえば、サンも金髪で赤目だよな」

「そうだな」

「葛葉と仲良くしてくれると嬉しいな」

「それは大丈夫だろ。うちの子たちは、みんな仲良しだ」

「ふふふ」

「なんだよ」

「いや、さっき読んだところにも同じことが書いてあったなって仲良くしてほしいって？」

「うん。考えることは同じなんだなって思った」

「親っていうのはそういうものなんだろ。良い子になってほしい、みんな仲良くなってほしい。子供に理想を掲げているんだ」

「うん。でも、たいてい、その理想とはかけ離れてるよね、みんな」
「理想通りの人間なんていないよ。着せ替え人形じゃないんだ。いくら理想の服を用意されても、身体に合わないんじゃないし、着る必要もない。理想の服を用意するのも大切だけど、着る服がないのでは困る」

「理想は、あくまでも理想ってこと？」

「そうだな。まずは、身の丈に合った服を探して、それから理想を追いかける。努力していれば、いつかは理想の服が身の丈に合った服になるかもしれない」

「ふうん。それで、姉ちゃんが葛葉やサンに着せたい理想の服って何なの？」

「無病息災、家庭円満。たくさん遊んで、たくさん食べて、たくさん寝て。のびのびとした子になりますように」

「んー、そうだね。身近な理想が一番かもね」

「高望みは理想とは言わない。結局、身の丈に合った服が、理想の服なんだ」

「あつ、そうまとめるの？」

「別にどうまとめてもいいだろ」

「そうだけだね。ということは、みんな、私たちの理想の服を着てくれてるんだ」

「ああ。良い子たちだ」

理想らしい理想なんて必要ない。

今あるこの自然体が理想なんだから。

…サンの頬にそつと触れて。

お母さんも、同じことを考えてたのかな。

私や灯に。

もしかしたら、この日記に書いてあるのかもしれない。

そう考えると、自然と手が伸びて。

八月四日、晴れ。

紅葉が熱中症で倒れた。

長介によれば、非常に軽度であるとのことだけど、私との鍛練の途中で倒れたせいもあり、申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

今は穏やかに眠っている。

灯は料理に興味を持ち始めたらしく、厨房にいる時間が長くなった。そのせいか、好き嫌いも少なくなってきたから嬉しい限りだ。

この本も、もう書く必要はないのかもしれない。

「ん？ああ、もうこんなに読んだのかあ」

「ああ、そうだな。…それがどうしたんだ？」

「いや、速いなって思って」

「そうか？」

「うん。もうすぐ終わりじゃない」

「そうだな」

「姉ちゃんのお母さん、面白いこと書くよね」

「そうだな」

「毎日欠かさず付けて…。マメなんだね」

「ああ。マメだ」

次をめくる。

そこにも、毎日のことが記されていて。

このあたりから、もうほとんど日記だった。

「もう書くことがなくなっちゃったんだね」

「好き嫌いをなくす方法についてはな」

「うん。それでも、書くことは毎日あるんだね。一言ずつでも、ちゃんと書いてある」

「何もない日なんてないからな」

また次をめくる。

…どうやら、次かその次あたりで終わりらしい。

「字が変わったね」

「ああ」

「どうしたのかな…」

「どうしたんだろうな」

字は格段に汚くなって、読みにくいことこの上ない。

十月二十四日、曇り。

代筆によるもの。

今日は、二人がお見舞いに来てくれた。

二人が摘んできてくれたフムルの花は、私の心の支えになってくれる。

紅葉によると、灯がゴボウを食べてくれたらしい。

これで、二人とも、私が思いつくものは全て食べられるようになった。

とても嬉しい。

字が汚い上に、ところどころ滲んでいたりして、読むのにも一苦労だ。

「……………」

「次、行くぞ」

「…うん」

次をめくる。

どうやら、ここで最後らしい。

十一月五日、快晴。

代筆によるもの。

なんとか灯の誕生日に間に合った。

前々から欲しがっていた私の櫛をあげると、すごく喜んでくれた。そして紅葉は、必ずこの国を守ってみせるから、と言ってくれた。でも、せっかく格好良いことを言ってくれたのに、灯が横で泣いたら意味ないよね。

涙は心の血。

私が付けてしまったこの傷は、きっと二人が支え合って治していくから。

だから、大丈夫。

そこで、日記は終わっていた。

でも、続きはあるらしく、次をめくった。

お前が死んでから一年経ち、娘たちもすっかり逞しく成長してくれた。

改めて、この本は私が持っているより、娘たちに託す方がいいだろうと思うんだが。

灯は調理班に入り、紅葉も立派に衛士長として働いてくれている。私は衛士を辞め、下町で雑貨屋を営んでいるんだけど。

似合わないと思うかもしれないが、これはこれで楽しくやってる。この本を通じて、あの子たちの近くで見守ってやってくれ。

私は、照れくさくてダメだから。

よろしく頼んだ。

…我が愛しの妻、一葉へ。

さらに、綺麗にまとまった字が続く。

私は今、調理班としてみんなのごはんを作ってるんだよ。

この本を読んでたらね、懐かしい気持ちでいっぱいになった。

最後の日を読むのは辛いかと思ったんだけど、意外と大丈夫だったよ。

気持ちの整理がついたからかな。

お墓参りに行ってなくてごめんね。

お姉ちゃんが、

墓にあるのは骨だけだ。

死んだ人は、私たちの心の中で生きてるから。

とか言って、行かないんだ。

でも、また今度、縄を掛けてでも連れていくから。
待っててね。

大好きなお母さんへ、灯から。

そして、白紙が一枚入って、”第一巻、了”と記されていた。

「第一巻…？」

「この本に手紙を書き込んだ日から、灯が第二巻以降を書き継いでいるんだろうな」

「そっか。でも、この白紙のところって…」

「私のために空けてくれているんだろう」

「じゃあ、書かないと」

「そう…だな」

止める間もなく、風華は墨と筆を取りに走って。

…お母さんへの手紙か。

初めて書くかもな。

「それで、本当にオレのために空けているのか？」

「そうだよ」

よっぽど急いでたのか、風華は気付かなかったらしい。
灯がそつと部屋に入ってくる。

「たまには、お母さんに手紙くらい書いてあげなさいよ」

「ここにも書いてあるじゃないか。私たちの心の中で、母さんは生きているんだ。手紙なんて書かなくてもいいだろ」

「ダメ。絶対に書いてもらうよ。それに、お姉ちゃんの手紙が入らないと、この本は完成しないんだから」

「はあ…。仕方ないな…。それで、オレはこれを美希に借りたわけだが、どうしてオレには見せなかったんだ？」

「え？えつと…。あはは…。忘れてた…」

「そんなことだろうと思ったよ」

「ごめん…」

「…いいよ、もう。形はどうであれ、ちゃんと読ませてもらった。それで充分だ」

「…うん。ごめんね」

また謝る灯の頬を引っ張る。

お母さん譲りの綺麗な顔が台無しになって。

「ふふふ」

「もう、何が可笑しいのよ!」

「お前の顔」

「お姉ちゃん!」

最初は読むのが怖かったけど。

でも、今は嬉しい。

あの日、あの時に、お母さんが考えていたこと、思っていたことに触れられたから。

この本が役立つような、手強い子供たちも増えた。

でも、灯たちが続巻を書いてるみたいだから大丈夫だよ。

…じゃあ、最後になったけど。

今までありがとう。

これからもよろしく。

大好きなお母さんへ、紅葉より。

追伸。

お墓参りは、また必ず行きます。

そのときには、お母さんが好きなユヌトの花を持っていくから。
では、また。

” 第一巻、了 ”

「仕事来ないね」

「いや。知らないけど、そんなこと」

「紅葉、ルイカミナに行ってみない？」

「行かない」

「はあ……」

遙はため息をついて。

…用事もないのに外出するわけないだろ。

「暇だなあ……」

「城の警備でも手伝ってくれよ」

「する必要がないじゃない。街の人も、割と自由に出入りしてるし」

「門は開放してるからな」

「何かないの？宝物庫とかさあ」

「ないよ、そんなものは」

「つまんないの」

「つまらなくて結構。議会の見学にでも行けばいいじゃないか」

「行っただけど、ただのお茶会だった」

「なんだ、それは……」

「お茶とお茶菓子があって、みんな和気藹々としてたらお茶会でしょ」

「議会だ。あれは」

「ふうん……」

つまらない、という風に寝返りを打って。

…仕事がないからといって、こつもゴロゴロしてていいものなのか？
とりあえず、鬱陶しいことこの上ない。

「紅葉、ちょっと伝書を頼みたいんだけど…」

「利家！ルイカミナに行かない？」

「え…。いきなりなんで…」

「仕事がなくて暇なんだと。どうだ、王さま。ルイカミナを視察してきたら」

「いや…。そんな予定はないし…」

「作って！今すぐ！」

「困ったなあ…」

遙に詰め寄られ、困った顔をする。

…助けてくれという風に、こっちを見てるけど。

「…まあ、それはいいとして、伝書つてのはなんだ」

「あ、ああ、これだよ。カシユラに届けてほしいんだけど…」

「カシユラ？何の伝書なんだ」

「リュクラスに伐採人が出没してるって報告があつてね」

「警備はどうしたんだ」

「ん…。それが、これは警備員からの密告なんだよ…」

「賄賂か」

「信じたくないけど…。でも、組合からも、リュクラスで大規模な切り株群を見た旅人がいるって報告があったから、いちおう調べておいた方がいいと思って」

あの日記を読んだすぐあとにこれだ。

何かの偶然か？

それとも、お母さんが引き合わせてくれた運命なのか。

「遙！仕事だ！」

「ほいほい。カシユラ、および、リュクラスへ。衛士長さま一行

ね」

「はあ？」一行？」

「あの子たちは行く気満々みたいだよ」

部屋の入り口の方を見ると、ずっと話を聞いていたんだろうか、桜とユカラが鬨志を燃やして立っていた。

「禁地の木を切るなんて、許せないよ！」

「ボクは、外出したいだけ！」

「そうか……。じゃあ、遙。オレとユカラの二人だ」

「えっ！なんでさ！ボクも連れていってよ！」

「お前なあ……。これは、旅行じゃないんだぞ？」

「分かってるよ……」

「危険かもしれないんだぞ？」

「うう……」

「外出したいだけとか、そんなやつを連れていけると思ってるのか？」

「……………」

「ダメだな」

頭を振る。

でも、利家が割って入ってきて。

「これは正式な伝書だ。戦闘班であるお前とか、医務班のユカラには託せないな。ちゃんと扱いの分かってる伝令班の者でないと」

「としにい……」

「……仕方ないな。王がそこまで言うなら」

「えっ、じゃあ、いろはねえ……」

「しっかり仕事してもらうからな、桜」

「うん！」

突如決めたリユクラス行き。
たぶん利家は、桜とユカラがいるときに狙ってきたんだろう。
あの日記のことも狙ってたのかは知らないが。
この国を守ってみせる。
改めて思い出した、お母さんとの約束。

噂はあっという間に伝播し、新たに戦闘班から二人、伝令班から一人、調理班から一人、その他三人が集まった。
こうなってしまうては、大視察団と言うべきだな…。

「望。桜のこと、頼んだよ」

「うん」

「かぐやねえ、それはないよ…」

「桜より、望の方がしっかりしてるじゃない」

「そんなこと…」

「上手く逃げたな、灯」

「え？なんのことかな？」

「明日、お前が当番だろ」

「えっ、そうだったの？知らなかった」

「まあ、向こうに行ってしまうえばお前しかいないんだから、当番なんて関係ないけどな」

「えっ、嘘！」

「…気付けよ」

「腹痛ならこれ、熱が出たらこれ、あとは…」

「風華…。ユカラもいるんだからさ…」

「それでも心配だよ。三人の体調には特に気をつけて。祐輔はお兄ちゃんなんだから、夏月とサンのこと、しっかり見ていてあげてね」
「うん」

どこかに旅行へ行くような雰囲気になってしまったな…。
まあ、それはそれでいいけど…。

「紅葉のところは、護衛はいらないよね」

「戦闘班のやつらのところも省いてもらっても構わない」

「そうだね。…ていうか、十人しかいないんだから、車は二つで充分でしょ」

「そうだな」

「それなら、護衛なんていらないじゃない」

「そうなるな」

「はあ…。じゃあ、御者と護衛一人、ひとつの馬車に七人構成で行くよ」

「ああ、それで頼む」

「で、どう乗る？」

「そうだな…」

どう乗ろうか…。

道中、危険になることはないと思うけど…。

「子供たちは、隊長のところがいいと思います」

「祐輔、夏月、サンがオレのところか」

「はい」

「望は？」

「望にはカイトがついてる。どっちに乘せても問題はないだろ」

「そっか。それで、戦闘班の二人は一緒に乗るんでしょ？」

「はい」「そうですね」

「桜は五月蠅いからそっちに譲るとして…」

「いろはねえ！今、なんか失礼なこと、言っただしょ！」

「言ってない」

「え？あれ？」

「あたしは、桜と同じ馬車がいいな」

「じゃあ、桜とユカラはそっちだな」

「はい」

「あとは、望と灯だけど…」

「私たち二人にユカラさんと、戦力がこっちに集中していますので、望ちゃんは隊長のところの方がよろしいかと」

「そうか？じゃあ、そうしようか。灯は、戦闘に関しては役立たずだから、その辺よろしく」

「はい。心得てます」

「なんか傷付いた。今、なんか傷付いた」

「そうか。よかったな」

「……………」

さて、これで準備は整った。

頭に血が昇って、衝動的に決めてしまったけど。

でも、これは確かに大切なことだから。

「紅葉の馬車の御者は翔、護衛はカルア。こっちの御者は静香、護衛は私。必ず、安全に送り届けます。短い間だと思うけど、よろしくね」

「よろしく」「よろしくお願いします」「よろしく」

「よし。じゃあ、出発進行！」

みんな、それぞれの馬車に飛び乗って。

忘れ物はないか、もう一度確認。

そして、城に残るみんなに見送られ、馬車はゆっくりと前進し始めた。

「ちょっと、私は！？」

「すぐに帰ってくるから待ってなさい。向こうで二日酔いになられても困るし」

「私も行きたいよ！待ってよ！」

…どこまでも追いかけてきそうだな。

桐華だけ徒歩…でもいいけど、仕方ないから手を伸ばして引き上げてやる。

「はあ…。よかった…。間に合った…」

「間に合ったじゃないだろ。向こうで二日酔いになってみる。その辺に捨てて帰るからな」

「分かったよ…」

酔い止めの薬が入ってるらしい印籠を首から下げた桐華を加え、これで計十五人。

ちょうどキリのいい数字だ。

さて、どんな旅になるんだろうな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5459m/>

ほのぼの戦国絵巻

2011年11月19日06時45分発行